

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV

鳥取県鳥取市

高住宮ノ谷遺跡

第1分冊（本文編）

2017

鳥取県教育委員会

高住宮ノ谷遺跡

第1分冊（本文編）

二〇一七 鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV

鳥取県鳥取市

高住宮ノ谷遺跡

第1分冊（本文編）

2017

鳥取県教育委員会

序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長 380 キロメートルの自動車専用道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3 キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成 20 年度から当教育委員会が実施しています。平成 21 年度からは財団法人鳥取県教育文化財団（平成 25 年度から公益財団法人に移行）に現地での発掘調査や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

高住宮ノ谷遺跡では、平成 26 年度から平成 27 年度の 2 箇年にわたり調査を行いました。その結果、古墳時代から中世にかけての竪穴建物や掘立柱建物、県内初となるこけら経の発見など、この地域の歴史を解明するうえで重要な成果を得ることができました。

なお、これまで鳥取西道路の改築に係る発掘調査の成果については、地元公民館などでの講演会、展示会を開催することで、地元の皆様をはじめとして多くの方々に紹介してまいりました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えています。

本書をまとめるにあたり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、並びに地元関係者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なる御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 2 月

鳥取県教育委員会
教育長 山本 仁志

例 言

- 1 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成26・27年度に実施した高住宮ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 高住宮ノ谷遺跡の所在地は、鳥取市高住字宮ノ谷である。調査面積は平成26年度4,180㎡（1区、2区、3-1区、3-2区）、平成27年度2,170㎡（3区、4区）である。現地調査は、平成26年4月17日から平成26年12月19日まで、平成27年4月1日から平成27年7月9日まで行い、調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は平成28年10月まで行った。
- 3 本調査の名称は、平成26年度調査は「高住宮ノ谷遺跡14」、平成27年度調査は「高住宮ノ谷遺跡15」である。出土遺物などの注記には「タカミヤ14」、「タカミヤ15」の略号を用いた。
- 4 発掘調査の監理については、公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）に委託した。
- 5 発掘調査に際し、平成26年度はアコード・アイテック埋蔵文化財発掘調査支援業務委託共同企業体、平成27年度は埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（高住宮ノ谷遺跡（3区、4区）・高住牛輪谷遺跡（2区））安西工業（株）・（株）ジーアイシー共同企業体の支援を受けた。各年度における遺跡での掘削作業、記録作成と測量作業は、財団の指示のもと、それぞれの企業体が行った。
- 6 調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は財団に委託し、財団の文化財主事と整理作業員が行った。
- 7 遺物の写真撮影は、木簡・墨書土器（カラーおよび赤外線写真）を除き、財団文化財主事が行った。
- 8 遺物実測及び浄書は、財団文化財主事と整理作業員が行った。
- 9 本書の執筆は、第V章を除いて財団の調査担当者である東方、柴田、茶谷で分担し、茶谷、東方が編集した。執筆者名は目次に示した。
- 10 本調査に係る図面・写真等の記録及び出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、今後活用できるように、随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターに移管した。
- 11 出土した木簡・墨書土器の釈読と樹種観察、保存処理は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の受託調査研究により行った。
木簡・墨書土器の釈読にあたっては、渡邊晃宏、山本崇、桑田訓也、山本祥隆の諸氏に御指導、御助言いただいた。写真撮影については中村一郎氏によるものである。
- 12 放射性炭素年代測定、花粉分析、種実同定、寄生虫卵分析を株式会社古環境研究所に、木製品・自然木の樹種同定、放射性炭素年代測定を文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。なお、第V章第1節から第3節の執筆は自然科学分析の各委託先によるものである
- 13 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々、機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。
公益財団法人大阪府文化財センター、公益財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取市教育委員会、木簡学会、高住地区自治会、村田 泰輔

凡 例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中の X・Y 座標は国土座標第 V 系によるものであり、m 単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行地形図（1/25,000、1/200,000）、鳥取市作成の都市計画図（1/2,500）を縮小、加筆して使用したものである。（測量法第 43 条に基づく複製承認。〔承認番号 平成 28 年 12 月 12 日付鳥取市指令受都都第 171 号〕）
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2007 年版に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられる Wentworth の区分を使用した。同一地層内に粒度が幅をもって認められるときには、より主体を占める粒径を先にして、「シルト～粗砂」、「極粗砂～細砂」のように記載した。
- 5 遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。
- 6 遺物は、出土地点・種類を問わず通し番号を付し、挿図と図版の番号は全て共通している。遺物実測図の縮尺は、土器を 1/4～1/8、土製品を 1/2、石器を 1/2～1/4、金属製品を 1/2～1/3、木器 1/4～1/10 で示した。
土器の断面については、須恵器は黒塗り、瓦質土器は網掛け、それ以外は白塗りとした。また、土器や木器などの漆、炭化の範囲はそれぞれ薄い網掛けで表現した。
木器の断面には年輪を模式的に記載している。また、平面図の欠損部にはパターンを配している。
- 7 本書における遺構・遺物の時期決定は、以下の文献を参考とした。
大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第 11 集
岡田裕之・八峠興 2014 「鳥取県における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『調査研究紀要』鳥取県埋蔵文化財センター
小林達雄編 2008 『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰―』木耳社
太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡 XV』
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991 『岩吉遺跡Ⅲ』
牧本哲雄 1996 「天神川流域における古墳時代土器の編年」財団法人鳥取県教育文化財団編『長瀬高浜遺跡Ⅶ・園遺跡』
松井 潔 1997 「東の土器、南の土器」『古代吉備』第 19 集、古代吉備研究会
- 8 木器の分類群・器種名は基本的に以下の文献に従っている。
伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』

第1分冊（本文編）目次

凡 例

第I章 調査の経緯と経過（茶谷）	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制	5
第II章 遺跡の位置と環境（柴田）	7
第1節 遺跡の位置と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第III章 調査の方法（茶谷）	13
第1節 現地調査	13
第2節 整理作業	16
第IV章 調査の成果（東方・茶谷・柴田）	19
第1節 1区（平成26年度）の調査	19
第2節 2区（平成26年度）の調査	25
第3節 3区（平成26年度）の調査	77
第4節 3区（平成27年度）の調査	134
第5節 4区（平成27年度）の調査	154
第6節 出土遺物	196
第V章 自然科学分析の成果	277
第1節 高住宮ノ谷遺跡の自然科学分析	277
第2節 高住宮ノ谷遺跡における樹種同定結果	292
第3節 高住宮ノ谷遺跡における放射性炭素年代測定および樹種同定結果	303
第4節 高住宮ノ谷遺跡にみられる堆積構造	307
第VI章 総 括（東方）	310
第1節 調査成果のまとめ	310
第2節 遺物について	316
第3節 高住地区西半（高住宮ノ谷遺跡、高住平田遺跡）における土地利用の変遷	321

挿図目次

第1図	鳥取西道路予定地と調査地の位置	1	第36図	2区	第2面検出遺構平面図、断面図(4)	58
第2図	高住宮ノ谷遺跡位置図	2	第37図	2区	第2面検出遺構平面図、断面図(5)	59
第3図	鳥取県と遺跡の所在地	7	第38図	2区	第2面検出遺構平面図、断面図(6)	60
第4図	高住宮ノ谷遺跡周辺の地形	8	第39図	2区	第2面検出遺構平面図、断面図(7)	62
第5図	高住宮ノ谷遺跡周辺の遺跡	9	第40図	2区	第2面検出遺構平面図、断面図(8)	63
第6図	調査区の区割り(1)	14	第41図	2区	第2面直上、遺物出土状況図	64
第7図	調査区の区割り(2)	15	第42図	掘立柱建物1、560溝の関係		65
第8図	1区 セクション配置図	19	第43図	3区	トレンチ配置図	77
第9図	1区 全体図	20	第44図	3区	トレンチ1土層断面図(1)	79・80
第10図	1区 トレンチ1土層断面図	21	第45図	3区	トレンチ1土層断面図(2)	81・82
第11図	1区 東壁土層断面図	21	第46図	3区	トレンチ2、3土層断面図	83・84
第12図	1区 ベルト1土層断面図	22	第47図	3区	東壁土層断面図	85・86
第13図	1区 土坑平面図、断面図	23	第48図	3区	トレンチ5土層断面図	87
第14図	2区 トレンチ配置図	25	第49図	3区	第1面平面図	90
第15図	2区 トレンチ2土層断面図	27・28	第50図	3区	第1面検出遺構平面図、断面図(1)	91
第16図	2区 トレンチ4土層断面図	29・30	第51図	3区	第1面検出遺構平面図、断面図(2)	92
第17図	2区 トレンチ6土層断面図	31・32	第52図	3区	第1面掘立柱建物3平面図、断面図	94
第18図	2区 トレンチ1土層断面図	33・34	第53図	3区	第1面検出遺構平面図、断面図(3)	95
第19図	2区 トレンチ1土層注記(1)	35	第54図	3区	第1面検出遺構平面図、断面図(4)	96
第20図	2区 トレンチ1土層注記(2)	36	第55図	3区	第1面検出遺構平面図、断面図(5)	98
第21図	2区 神社横壁土層断面図	37	第56図	3区	第2面平面図	99
第22図	2区 トレンチ3土層断面図	38	第57図	3区	第3面平面図	100
第23図	2区 調査区東壁土層断面図	39	第58図	3区	第3面検出遺構平面図	101
第24図	2区 第1面平面図	40	第59図	3区	第3面検出遺構平面図、断面図	102
第25図	2区 21溝、39溝、44溝平面図・断面図	42	第60図	3区	第4面平面図	103
第26図	2区 661土坑・341溝平面図、断面図	43	第61図	3区	第4面検出遺構平面図	104
第27図	2区 661土坑平面図・断面図 (石積上層・下層)	44	第62図	3区	第5面平面図	107
第28図	2区 第1面検出遺構平面図、断面図(1)	45	第63図	3区	第5面検出遺構平面図	109
第29図	2区 第1面検出遺構平面図、断面図(2)	46	第64図	3区	第4・5面検出遺構平面図、断面図	110
第30図	2区 第2面平面図	48	第65図	3区	竪穴建物群平面図、断面図	111・112
第31図	2区 掘立柱建物1平面図、断面図	49・50	第66図	3区	竪穴建物1完掘状況平面図、断面図	113・114
第32図	2区 掘立柱建物2平面図、断面図	51	第67図	3区	竪穴建物1断面図、床面遺構平面図・ 断面図	115
第33図	2区 第2面検出遺構平面図、断面図(1)	53	第68図	3区	竪穴建物1床面検出状況平面図、遺物 出土状況図	117
第34図	2区 第2面検出遺構平面図、断面図(2)	55				
第35図	2区 第2面検出遺構平面図、断面図(3)	57				

第 69 図	3 区	竪穴建物 1 床面炉・遺物出土状況図、 断面図	118	第 100 図	4 区	第 3 面掘立柱建物 4 柱掘方断面図	169
第 70 図	3 区	竪穴建物 2 完掘状況平面図	119	第 101 図	4 区	第 3 面掘立柱建物 4 土坑平面図・断面図	170
第 71 図	3 区	竪穴建物 2 断面図	120	第 102 図	4 区	第 3 面掘立柱建物 5 平面図、断面図	171
第 72 図	3 区	竪穴建物 2 床面遺物出土状況図	121	第 103 図	4 区	第 3 面掘立柱建物 5 柱掘方断面図	172
第 73 図	3 区	第 5 面検出遺構平面図、断面図	123	第 104 図	4 区	第 3 面検出遺構平面図、断面図 (1)	173
第 74 図	3 区	第 6 面平面図	125	第 105 図	4 区	第 3 面検出遺構平面図、断面図 (2)	174
第 75 図	3 区	第 7 面平面図	126	第 106 図	4 区	第 3 面検出遺構平面図、断面図 (3)	175
第 76 図	3 区	第 8 面平面図	127	第 107 図	4 区	第 3 面検出遺構平面図、断面図 (4)	176
第 77 図	3 区 (27 年度)	トレンチ配置図	134	第 108 図	4 区	第 3 面検出遺構平面図、断面図 (5)	177
第 78 図	3 区 (27 年度)	トレンチ 1 土層断面図	135・136	第 109 図	4 区	第 4 面平面図	178
第 79 図	3 区 (27 年度)	トレンチ 2 土層断面図	137・138	第 110 図	4 区	第 4 b 面平面図	179
第 80 図	3 区 (27 年度)	トレンチ 3 土層断面図	139・140	第 111 図	4 区	第 4 c 面平面図	179
第 81 図	3 区 (27 年度)	トレンチ 4 土層断面図	141・142	第 112 図	4 区	竪穴建物 3 平面図、断面図	180
第 82 図	3 区 (27 年度)	トレンチ 5 土層断面図	143・144	第 113 図	4 区	竪穴建物 3 土層断面図	181
第 83 図	3 区 (27 年度)	調査区東壁土層断面図	145・146	第 114 図	4 区	竪穴建物 3 平面図、断面図	182
第 84 図	3 区 (27 年度)	第 0 面平面図	148	第 115 図	4 区	竪穴建物 4 平面図、断面図	183・184
第 85 図	3 区 (27 年度)	第 1 面平面図	149	第 116 図	4 区	竪穴建物 4 土層注記	185
第 86 図	3 区 (27 年度)	第 2 面平面図	150	第 117 図	4 区	第 4 面検出遺構平面図・断面図	187
第 87 図	3 区 (27 年度)	下層調査平面図	151	第 118 図	4 区	第 5 面平面図	189
第 88 図	3 区 (27 年度)	下層調査遺物出土状況図	152	第 119 図	4 区	第 5 面東西トレンチ土層断面図	190
第 89 図	4 区	トレンチ配置図	154	第 120 図	1 区	出土土器	196
第 90 図	4 区	調査区東壁土層断面図	155・156	第 121 図	2 区	第 1 面遺構出土土器	197
第 91 図	4 区	調査区南壁土層断面図	157	第 122 図	2 区	第 1 面包含層出土土器	197
第 92 図	4 区	第 1 面平面図	159	第 123 図	2 区	第 2 面遺構 (個別) 出土土器	199
第 93 図	4 区	第 2 面平面図	161	第 124 図	2 区	第 2 面遺構 (524・560・500 溝) 出土 土器	201
第 94 図	4 区	4058 道路変遷想定図	162	第 125 図	2 区	第 2 面遺構出土遺物 (甑、移動式 かまど、土製品)	202
第 95 図	4 区	第 2 面 4058 道路平面図、断面図	163・164	第 126 図	2 区	第 2 面 (西部) 包含層出土土器	204
第 96 図	4 区	第 2 面検出遺構平面図、断面図 (1)	165	第 127 図	2 区	第 2 面 (西部) 包含層出土移動式 かまど	206
第 97 図	4 区	第 2 面検出遺構平面図、断面図 (2)	166	第 128 図	2 区	第 2 面 (東部) 包含層 (914 土器群) 出土土器	208
第 98 図	4 区	第 3 面平面図	167	第 129 図	2 区	第 2 面 (東部) 包含層出土土器	209
第 99 図	4 区	第 3 面掘立柱建物 4 平面図、断面図	168	第 130 図	2 区	第 2 面包含層出土移動式かまど、甑	211
				第 131 図	2 区	第 2 面包含層出土土製品	212

第 132 図	3 区	遺構出土土器	213	第 164 図	2 区	出土木製品 (2)	249
第 133 図	3 区	第 5 面竪穴建物 1 出土土器、土製品	214	第 165 図	2 区	第 2 面遺構 (掘立柱建物 1 ほか) 出土柱根・礎板	250
第 134 図	3 区	第 5 面竪穴建物 2 出土土器、土製品	215	第 166 図	3 区	出土木製品 (1)	252
第 135 図	3 区	谷部包含層 (第 3 面～第 5 面) 出土 土器	216	第 167 図	3 区	出土木製品 (2)	253
第 136 図	3 区	谷部包含層 (第 6 面) 出土土器	217	第 168 図	3 区	出土木製品 (3)	254
第 137 図	3 区	谷部包含層 (第 7・8 面)	218	第 169 図	2・3 区	文字関連資料	255
第 138 図	3 区	丘陵部包含層出土土器	219	第 170 図	3 区 (27 年度)	出土木製品	256
第 139 図	3 区	谷部表土出土土器	220	第 171 図	4 区	出土木製品 (1)	257
第 140 図	3 区	谷部包含層出土移動式かまど・甌	221	第 172 図	4 区	出土木製品 (2)	258
第 141 図	3 区	谷部包含層出土土製品 (1)	222	第 173 図	2～4 区	出土金属製品	259
第 142 図	3 区	谷部包含層出土土製品 (2)	223	第 174 図	3・4 区	出土銭貨	259
第 143 図	3 区	谷部包含層出土土製品 (3)	224	第 175 図		暦年較正結果	279
第 144 図	2 区・3 区	文字関連資料・漆関連資料	225	第 176 図		寄生虫卵および花粉ダイアグラム	283
第 145 図	3 区 (27 年度)	出土土器・移動式かまど	227	第 177 図		種実ダイアグラム	289
第 146 図	3 区 (27 年度)	崩落土上面流路出土縄文 土器	228	第 178 図		暦年較正結果	305
第 147 図	3 区 (27 年度)	第 1 面および包含層出土 縄文土器	229	第 179 図		暦年較正年代値の分布	306
第 148 図	3 区 (27 年度)	土壌化層上面・下面出土 縄文土器	230	第 180 図	3 区 (27 年度)	トレンチ 5 地質切り出し試 料位置	307
第 149 図	4 区	遺構 (個別) 出土土器・土製品	231	第 181 図	4 区第 5 面東西トレンチ地質切り出し試料		308
第 150 図	4 区	包含層出土土器	233	第 182 図		高住宮ノ谷遺跡の変遷	312
第 151 図	4 区	包含層出土土製品 (1)	234	第 183 図		土製支脚・湖山池南岸型移動式かまどの出 土状況	318
第 152 図	4 区	包含層出土土製品 (2)	235	第 184 図		高住地区西半の遺跡の消長	321
第 153 図	1 区	包含層出土石器	236				
第 154 図	2 区	出土石器 (1)	237				
第 155 図	2 区	出土石器 (2)	238				
第 156 図	2 区	出土石器 (3)	239				
第 157 図	3 区	出土石器 (1)	241				
第 158 図	3 区	出土石器 (2)	242				
第 159 図	3 区	出土石器 (3)	243				
第 160 図	3 区 (27 年度)	出土石器	244				
第 161 図	4 区	出土石器 (1)	245				
第 162 図	4 区	出土石器 (2)	246				
第 163 図	2 区	出土木製品 (1)	247				

挿表目次

第1表	土層番号新旧対照表(1)	17	第14表	遺物観察表(金属製品)	276
第2表	土層番号新旧対照表(2)	18	第15表	遺物観察表(銭貨)	276
表3表	1区 ピット等一覧	24	第16表	測定試料及び処理	277
第4表	2区 遺構一覧	66	第17表	測定結果	278
第5表	3区 第4面検出遺構一覧	105	第18表	寄生虫卵・花粉分析結果	282
第6表	3区 第5面検出遺構一覧	108	第19表	種実同定結果	289
第7表	3区 検出遺構一覧	129	第20表	分析試料一覧表(2区)	292
第8表	3区(27年度) 検出遺構一覧	192	第21表	分析試料一覧表(3区)	293
第9表	4区 検出遺構一覧	193	第22表	分析試料一覧表(3区(27年度)・4区)	294
第10表	遺物観察表(土器)	261	第23表	分析試料一覧表(3区(27年度)・4区)	303
第11表	遺物観察表(土製品)	270	第24表	分析試料の処理	304
第12表	遺物観察表(石器)	272	第25表	年代測定結果	304
第13表	遺物観察業(木製品)	274			

文中写真目次

写真1	検出された花粉	285	写真5	出土木材の光学顕微鏡写真(3)	301
写真2	検出された種実	291	写真6	出土木材の光学顕微鏡写真(4)	302
写真3	出土木材の光学顕微鏡写真(1)	299	写真7	出土木材の光学顕微鏡写真(5)	306
写真4	出土木材の光学顕微鏡写真(2)	300			

第I章 調査の経緯と経過

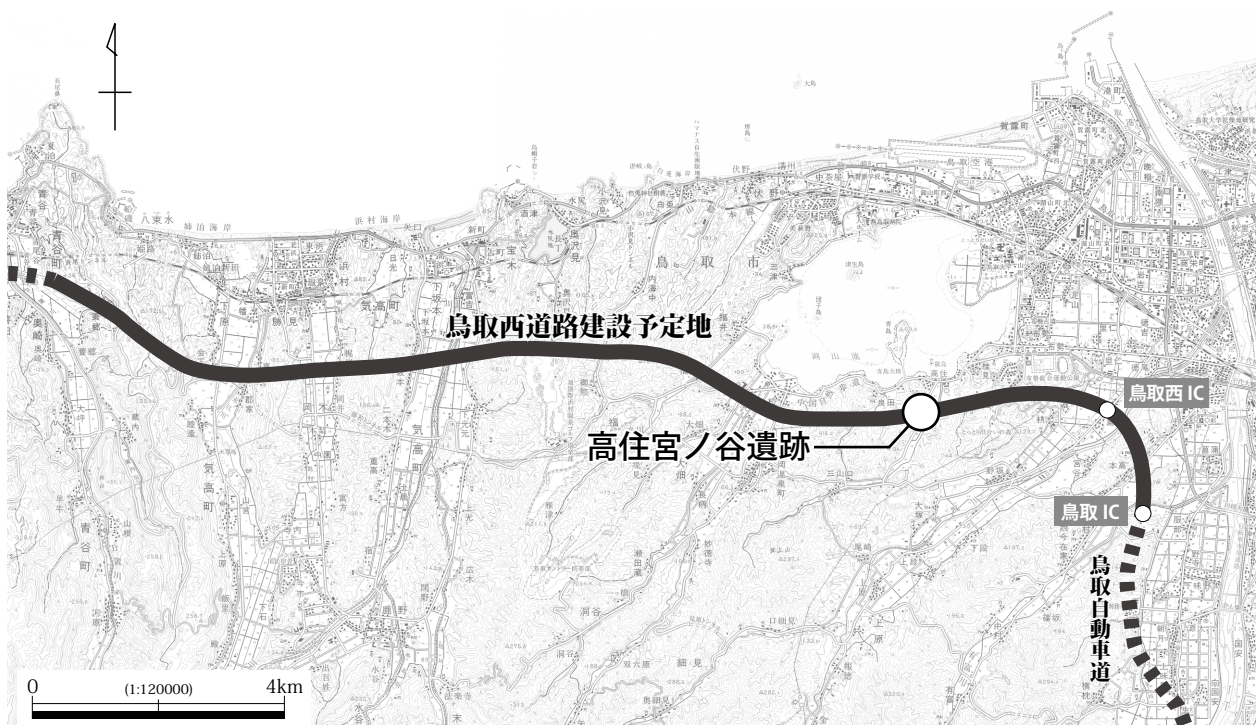
第1節 調査に至る経緯

鳥取県教育委員会では、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、鳥取市高住字宮ノ谷に所在する高住宮ノ谷遺跡の発掘調査を平成26年度から27年度にかけて実施した。

山陰地方では、観光、物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消及び緩和、災害時の緊急輸送路確保等を目的とし、中国横断自動車道姫路鳥取線や山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの鳥取西道路の建設事業も山陰自動車道の一部となる事業である（第1図）。

鳥取西道路の計画地内には多くの遺跡が存在している。そのため道路建設に先立って、国土交通省、鳥取県、鳥取市により埋蔵文化財の取扱いについて協議がもたれ、まず、計画地内に存在する遺跡の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成17年度から計画地内の踏査による分布調査や鳥取市教育委員会による範囲確認調査が逐次行われている。

高住地区では、計画地内にある遺跡の範囲、内容を確認するため、平成25年度に鳥取市教育委員会が試掘調査を行った。この結果を受けて、平成26・27年度に鳥取県教育委員会が国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて発掘調査を実施した。現場での発掘作業、出土遺物の整理作業、および報告書の作成は公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下財団）に再委託した。また、財団が発掘調査を行うなかで、現地での発掘作業、調査記録作業等については、平成26年度はアコード・アイテック埋蔵文化財発掘調査支援業務委託共同企業体、平成27年度は埋蔵文化財発掘調査支援業務（高住宮ノ谷遺跡（3区、4区）・高住牛輪谷遺跡（2区））安西工業（株）・（株）ジーアイシー共同企業体に発掘調査の支援を委託した。



第1図 鳥取西道路予定地と調査地の位置

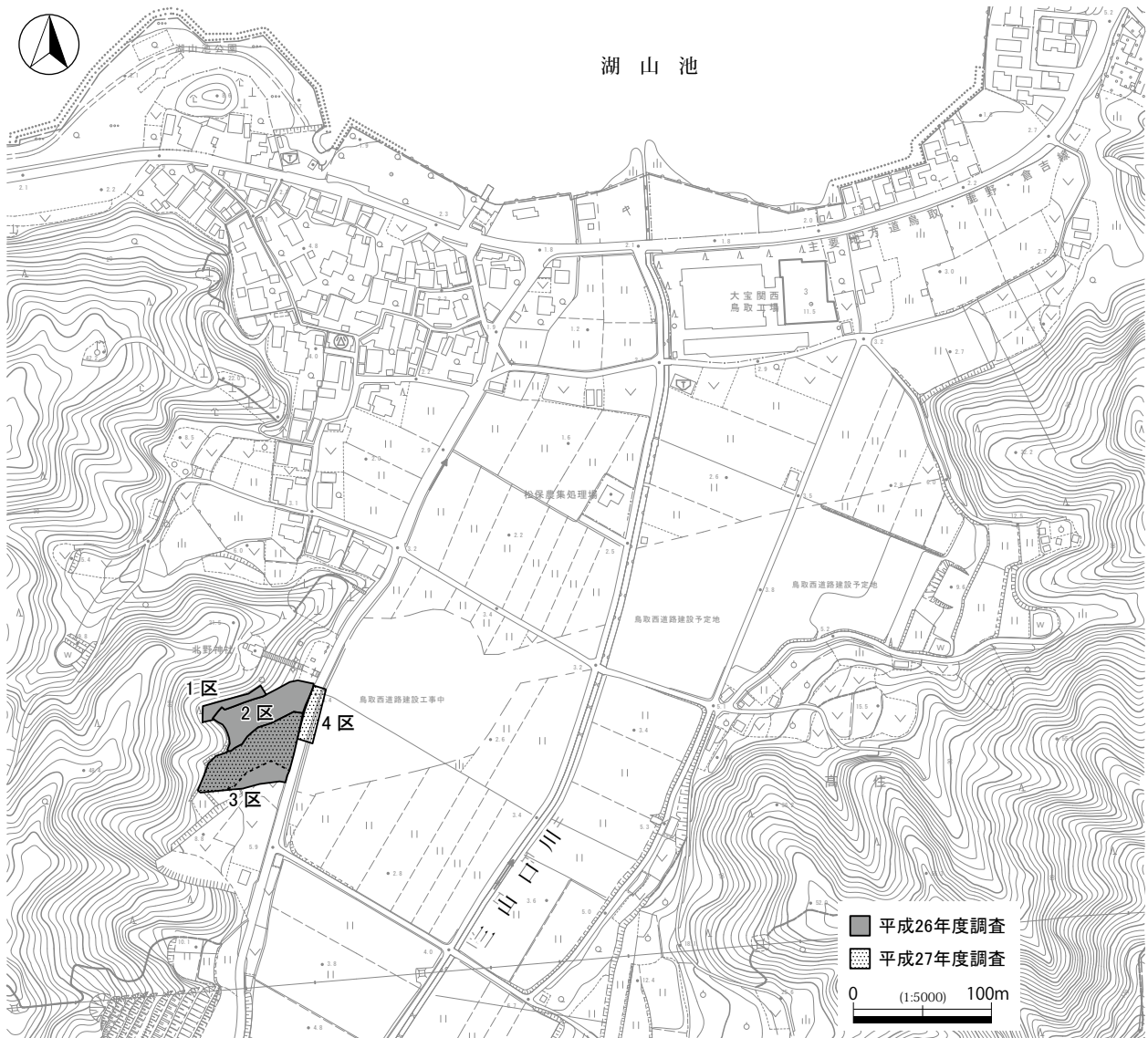
第2節 調査の経過

第1項 平成26年度調査

調査の経過

調査は平成26年4月1日から開始する予定であったが、鋼矢板打設等の環境整備工事の影響により1日からの着手ができない見通しとなった。そのため、関係機関で協議した結果、3月28日付けで2区の調査開始は4月17日、3-1区・3-2区は6月1日に延期となった。また、当初計画では1区、2区、3-1区、3-2区、4区の5調査区のうち、平成26年度は2区と3-1区・3-2区を調査する予定となっていたが、工期とともに変更となり、当初4区とした調査区のうち、市道以外の部分を3-2区に合わせて調査することとなった。以上に伴い、現地調査期間は12月21日まで延長することとなった。以下、調査区ごとに詳述する。

調査は2区から開始した。4月25日から表土掘削を開始し、表土掘削を終えた部分から機械掘削後の段階確認を行って、5月15日から作業員を入れて一部発掘調査を開始した。2区の表土掘削は5月20日に完了し、翌21日には表土掘削後の段階確認を行って、本格的な発掘調査を開始した。調査に際しては、土層確認用のトレンチを6本設定し、堆積状況を確認しながら行った。



第2図 高住宮ノ谷遺跡位置図

表土掘削後の面を第1面として遺構検出を行い、7月23日に第1面完掘状況の写真撮影をラジコンヘリコプターによって行った。続く第2面は、調査区東端の北野神社鳥居のすぐ南側の範囲と、調査区西端の谷筋周辺の範囲で、柱穴やピット等が集中する箇所があり、第2面完掘状況の写真撮影はそれぞれの範囲で写真撮影用足場あるいは高所作業車から適宜行った。

2区の調査区東端は遺構密度が高かったことから、第2面より下層で遺構が広がる可能性があり、一部を深掘りして下層確認調査を行った。また、後述する1区の調査をはさんだ後、谷奥部の下層確認調査を行った。最終的に2区の調査は12月12日に終了した。

3区は、2区の調査区西端の機械掘削前段階確認が終了した6月2日から表土掘削作業を開始し、7月1日から作業員を入れて発掘調査を開始した。3区では4本の土層確認用のトレンチを設定して、堆積状況を確認しながら調査を行った。3区は、計画段階では現耕地段差をもとに3-1区、3-2区に区分していたが、3-2区に当初4区の一部を追加することとなり、また表土掘削後の耕地段差が設定調査区とやや異なったため、調査は「3区」として一括して行った。

表土掘削後に旧地形が明らかとなり、3区は中央部を東西に走る谷と、調査区南側で谷に並行する丘陵部分に分けられた。谷部と丘陵部はそれぞれ堆積状況が異なっており、調査は別々に行うこととした。

丘陵部は竪穴建物群とそれを切るピット群に大別され、先行してピット群の調査記録を行い、8月28日に完掘写真撮影を行った。その後、竪穴建物群の調査に移行し、11月14日に完掘写真撮影を行った。

谷部は現代の圃場整備により耕地段差が大きく採られた箇所の削平が著しく、調査対象となる層が存在する段差と、存在しない段差があり、各層の範囲に応じて調査記録を行った。併せて写真撮影も範囲に応じて写真撮影用足場あるいは高所作業車を使い分けて行った。

谷部は、9月19日に第1面完掘写真撮影、10月1日に第2面(I-1層下面)検出写真撮影を行った。10月9日に第3面(I-2層下面)、10月24日に第4面(II-1・2・3層下面)、11月14日に第5面(III-1~5層下面)、11月28日に第5面(III-6層下面)、12月5日に第6面(IV層下面及びIV-2層下面)、12月15日に第6面(IV-3層下面)、12月8・9日に第7面(V層下面)の写真撮影をそれぞれ行った。

VI層掘削後、調査区北東部において中世までの遺物包含層直下に柱穴やピットなどが濃密に集中することが判明した(2区東端第2面相当)。調査工程の遅延および冬季の悪天候が懸念されたため、12月12日に第8面(VI層下面)の部分写真撮影、12月16日に第8面(VI層下面)の完掘写真撮影を1区の完掘写真撮影と合わせてラジコンヘリコプターを用いて行い、終了後にピット群が集中する北東部の記録調査および完掘写真撮影を行った。

また、3区の調査が進み、全体の調査量が判明した7月31日に、関係機関の協議によって1区の調査が追加された。1区の調査については、2区の第2面調査がほぼ終了した9月16日から転落防止のための足場を設置し、設置が完了した9月24日から人力による表土掘削に着手した。他の調査区と同様に、調査区の堆積状況を観察するためのトレンチを調査区の東側に設定した。1区の第1面完掘写真撮影は12月16日に3区の完掘写真撮影とともに行った。

こうして12月19日に、1区は第1面まで、2区は第2面まで、3区は第8面までの調査を終了し、現地作業を終了した。

なお、平成26年度調査成果について、財団のホームページ^{*}や月刊広報誌「鳥取西道路の遺跡を掘る！」で紹介したほか、平成26年11月15日に現地説明会を行い、80名の見学者が来場された。

整理作業

現地調査終了後は引き続き遺物整理作業を行い、遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、写真撮影作業を財団が直営で実施した。

一方、現地で作成した図面の整理、編集図作成業務、写真整理、台帳作成作業については、発掘調査支援業者によって行われ、平成27年2月20日に成果品として納品された。

第2項 平成27年度調査

調査の経過

調査は平成26年度の3区の下層1,669㎡と、平成26年度の2区・3区の東側に隣接する市道部分(4区)が対象である。4月1日から基準点の打設等を開始し、機械掘削前の段階確認を経て、4月6日から4区の表土掘削を開始した。表土掘削を終えた4月13日から作業員を入れて人力掘削を開始した。また、それと並行して、3区の自然堆積層を重機で掘削し、4月21日からは3区においても人力掘削を開始した。以下、調査区ごとに経過を述べる。

4区は、矢板際の調査区周囲に土層断面用のトレンチを設定し、堆積状況や平成26年度の2区・3区の調査成果を元に、上部で3面の遺構面、無遺物の自然堆積層を挟んだ下層に2面の遺構面を想定した。

表土掘削後の面を第1面として遺構検出を行い、4月23日に第1面完掘状況の写真撮影を行った。続く第2面は、調査区東半を南北に縦断する中世の道路跡を検出したほか、水田も検出し、5月18日に完掘状況の写真撮影を行った。

第3面では、調査区全体にピットや柱穴を検出し、とくに北側部分において、下層に竪穴建物が重複している状況を確認した。また、同時並行で調査を進めている3区では、無遺物層下面で検出した土壌化層において遺物が希薄であり、かつ人為的遺構も確認できなかったため、4区では下層の竪穴建物検出面を新たに第4面とすることにした。第4面で検出した竪穴建物の下層を第4b面とし、さらに竪穴建物の下面で検出した遺構を第4c面として調査を行った。この複数の竪穴建物の関係を正確に調査するため、高住宮ノ谷遺跡の調査期間を7月10日まで延長することとなった。6月17日に第4面完掘状況の写真撮影、6月23日に第4b面の完掘状況の写真撮影を行った。

6月25日に第4c面の記録作業を実施した後、3区と同様に自然堆積層の機械掘削を行った。7月3日に限界掘削深度までの機械掘削が終了した。第5面とした遺構面は一部に丘陵裾部分の地山が露出したが、大半が3区から続く谷地形内の自然堆積層の中であり、遺物の出土もなかったことから、写真撮影および地形測量等の記録作業を行い、同日4区の調査を終了した。

3区では、合計5本の土層確認用のトレンチを設定し、調査区東壁と合わせて、堆積状況を確認しながら掘削を行った。平成26年度の下層確認トレンチにおいて、第8面(VI層下面：平成26年度の最終確認遺構面)から約1m下に土壌化層および遺物(石匙)を確認しており、この層のやや上までを機械掘削し、人力にて土壌化層上面を検出する計画で臨んだ。

4月8日から機械掘削を開始し、4月17日から機械掘削終了部分に作業員を入れて、トレンチ掘削等の作業を開始した。4月23日には機械掘削が終了した。調査区の南北に存在する丘陵裾部分から、

設定した土壌化層よりも上面でピット群をそれぞれ検出したため、黒色砂質土下面として記録作業を行った。また、谷部では東側から第1面（土壌化層上面）を確認しながら、西側の谷上流側に向けて検出作業を行ったところ、調査区西側の機械掘削後の面が、目指す土壌化層よりも上層にあたることが判明した。また、調査区西側は鋼矢板の貫入が浅い部分があったため、安全を確保するため構造計算上の安全勾配に則って掘削作業を行った。

6月10日に土壌化層上面（第1面）の検出写真撮影を行い、6月17日に第1面の完掘写真撮影を行った。その後、土壌化層の掘削を行い、6月30日に第2面の完掘写真撮影を行った。第2面の一部（トレンチ2と3の間の谷肩部分）で、縄文土器の集中と土壌化層を確認したため、この部分についてさらに下層の調査を実施した。

また、3区東端の矢板沿いには、平成26年度の土層堆積確認用のベルトがあり、この部分については4区と同様の層序・遺構面にて記録を行った。

こうして、3区は7月9日に第2面までの調査を終了し、すべての現地作業を終了した。

なお、平成27年度の調査成果については、財団のホームページ*や月刊広報誌「鳥取西道路の遺跡を掘る！」で紹介したほか、平成27年10月10日の高住牛輪谷遺跡現地説明会において、写真パネル・遺物展示を行った。現地説明会には70名の見学者が来場された。また、鳥取県立博物館の「歴史の窓」コーナーにて、平成28年3月23日から平成28年4月24日まで平成26年度に出土したこけら経の展示を行った。

整理作業

現地調査終了後は引き続き遺物整理作業を行い、遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、写真撮影作業を財団が直営で実施した。

一方、現地で作成した図面の整理、編集図作成業務、写真整理、台帳作成作業については、発掘調査支援業者によって行われ、平成28年2月25日に成果品として納品された。

*公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室ホームページ (<http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu%20new.htm>)

第3節 調査体制

発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

平成26年度	事務局長	石本 富正
○鳥取県教育委員会	事務職員	岡田 美津子
教育長	山本 仁志	調査室
鳥取県教育委員会事務局文化財課	室長	北浦 弘人*1
課長	木本 美喜	次長
課長補佐	土山 和俊	(兼総務企画課長、～平成26年4月30日)
管理担当係長	小谷 みゆき	民木 一美
歴史遺産室長	松井 潔	(兼総務企画課長、平成26年5月1日～)
文化財主事兼係長	野口 良也	総務企画課
文化財主事	岡野 雅則	総務係長
○公益財団法人鳥取県教育文化財団	主事	川村 悟*1
理事長	井上 善弘(～平成26年6月30日)	福島 亘*1
	野村 勇二(平成26年7月1日～)	事務職員
		調査企画設計係長
		田中 絵里子
		玉木 秀幸*1

第I章 調査の経緯と経過

文化財主事 浅井 達也 *1
 第一工区
 主幹 牧本 哲雄 *1
 副主幹 茶谷 満 *1
 文化財主事 東方 仁史 *1
 柴田 芳之 *1

平成 27 年度

○鳥取県教育委員会

教育長 山本 仁志
 鳥取県教育委員会事務局文化財課
 課長 木本 美喜
 課長補佐 土山 和俊
 管理担当係長 小谷 みゆき
 歴史遺産室長 松井 潔
 係長 野口 良也

○公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 野村 勇二
 事務局長 石本 富正 (～平成 27 年 6 月 30 日)
 畑中 弘子 (平成 27 年 7 月 1 日～)
 事務職員 岡田 美津子

調査室

室長 北浦 弘人 *1
 次長 民木 一美

総務係

総務係長 川村 悟 *1
 主事 西村 あかね *1
 事務職員 田中 絵里子

調査企画設計係

係長 玉木 秀幸 *1
 文化財主事 浅井 達也 *1

高住地区班

主幹 西川 徹 *1
 副主幹 茶谷 満 *1
 文化財主事 東方 仁史 *1
 柴田 芳之 *1

平成 28 年度

○鳥取県教育委員会

教育長 山本 仁志
 鳥取県教育委員会事務局文化財課
 課長 片山 暢博

課長補佐 土山 和俊
 管理担当係長 山根 玄衣
 歴史遺産室長 山根 雅美
 係長 野口 良也

○公益財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 野村 勇二
 事務局長 畑中 弘子
 事務職員 岡田 美津子

調査室

室長 牧本 哲雄 *1 (美和調査事務所長兼務)
 次長 民木 一美

総務係

主事 岡 梓 *1
 西村 あかね *1
 事務職員 田中 絵里子

調査企画設計係

係長 茶谷 満 *1 (高住地区担当兼務)

美和調査事務所第1班高住地区

文化財主事 東方 仁史 *1
 柴田 芳之 *1

*1 鳥取県教育委員会から派遣

○発掘調査支援業者

平成 26 年度 埋蔵文化財発掘調査支援業務委託 (高住宮ノ谷遺跡) アコード・アイテック埋蔵文化財発掘調査支援業務委託共同企業体

現場代理人: 原田 幹夫

副現場代理人: 戸田 志功

調査員: 西村 匡広、島軒 満

調査補助員: 田村 和久 (～平成 26 年 5 月 9 日)、
 原 進 (平成 26 年 5 月 12 日～)、稲垣 耕作、
 林 貴光、今村 悟

平成 27 年度 埋蔵文化財発掘調査支援業務委託 (高住宮ノ谷遺跡 (3 区、4 区)・高住牛輪谷遺跡 (2 区)) 安西工業 (株)・(株)ジーアイシー共同企業体

現場代理人: 嶋倉 浩一

副現場代理人: 米原 誠

支援調査員: 入江 剛弘、坂口 尚人

調査補助員: 中北 敦子、藪野 勝久、新山王 諒太

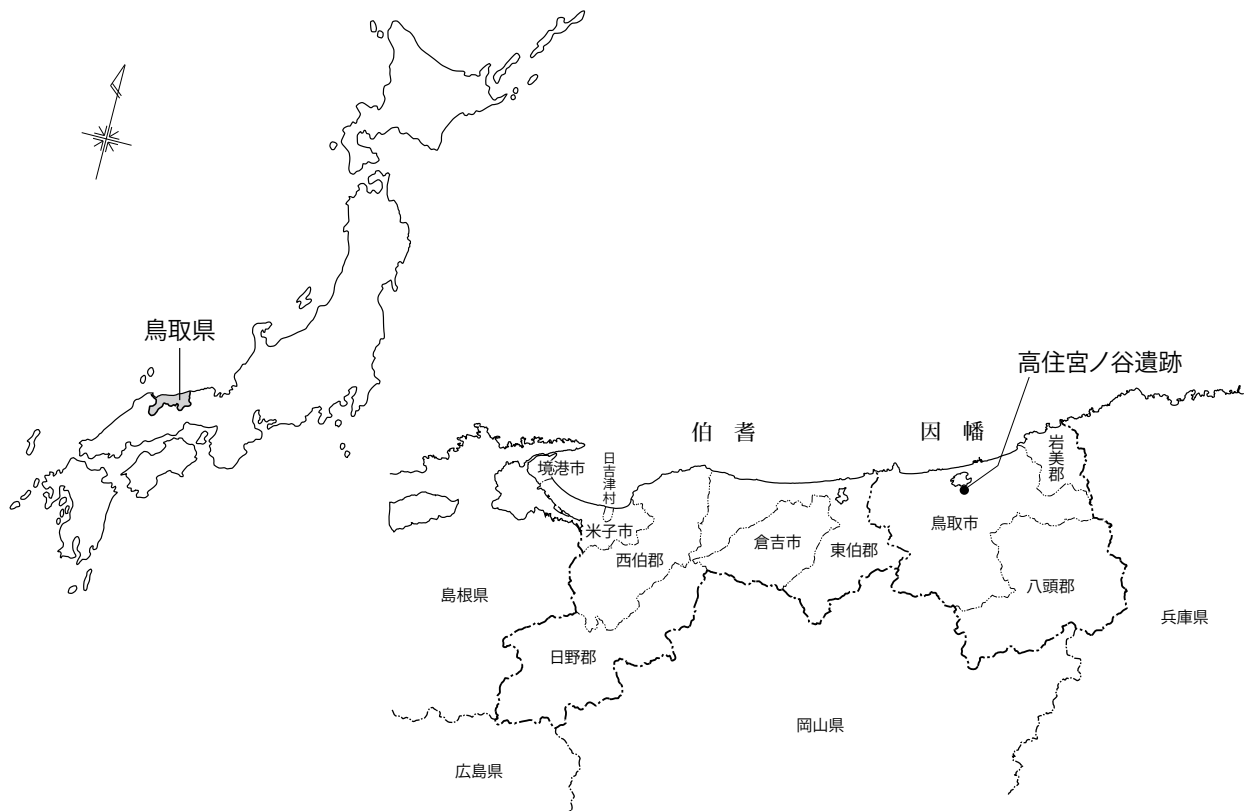
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

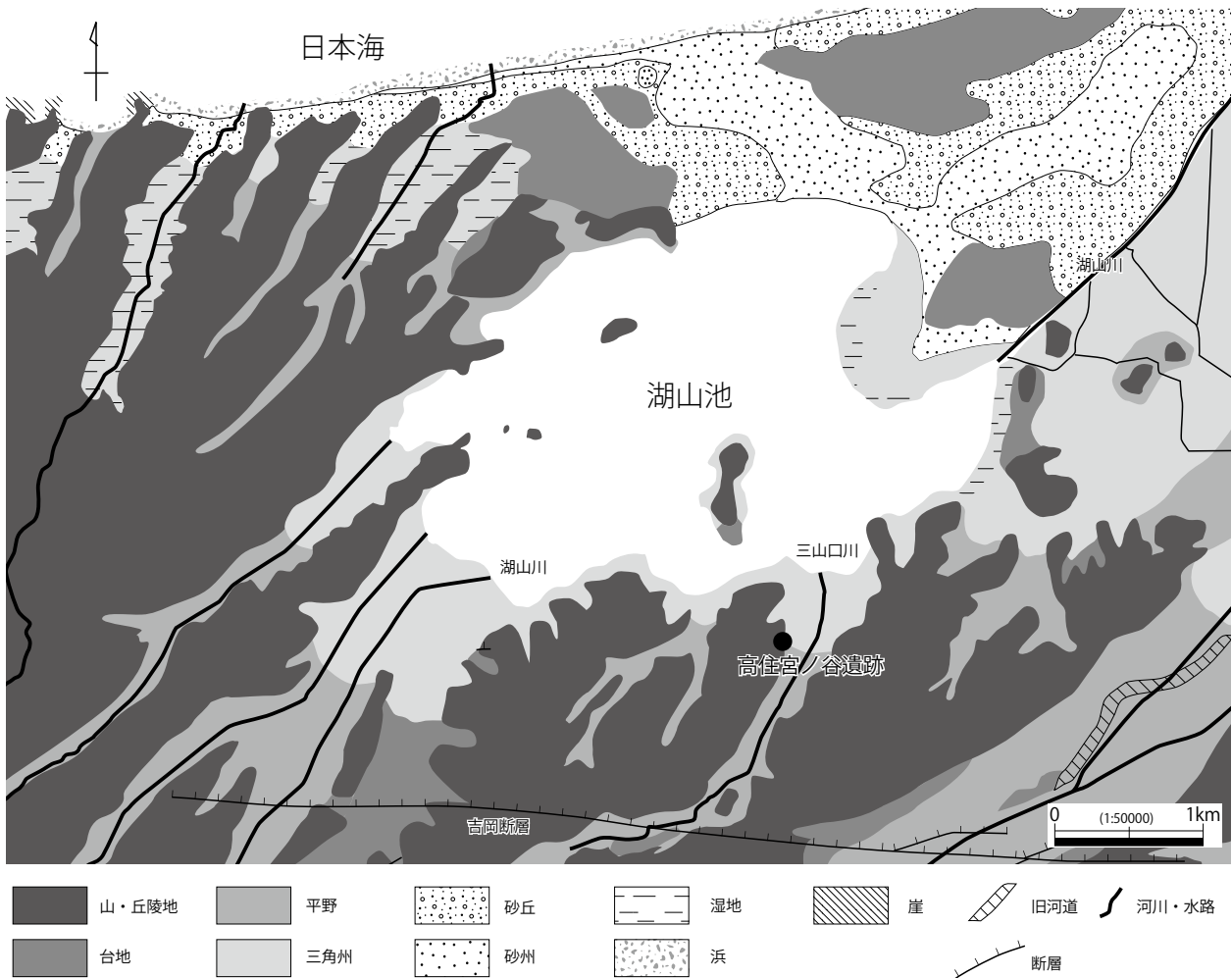
高住宮ノ谷遺跡は、鳥取県鳥取市高住に所在する。鳥取県は中国地方の北東部に位置し、県域は東西およそ120km、南北およそ50kmの範囲を有する。鳥取市は鳥取県東部にあり、東は岩美郡および兵庫県、南は八頭郡および岡山県、西は東伯郡と接し、北は日本海に面している。総面積765.31km²、人口約19万人を擁する県庁所在地である。

遺跡の所在する高住地区は、鳥取市の中央北寄りの湖山池南岸に位置する。湖山池は面積6.9km²の海跡湖で、かつては内湾として日本海とつながっていたが、飛砂による堆積を繰り返し、湖の北方が外海と分離されて現在のような湖となった。湖山池南岸の地形は、中国山地から延びる山地や丘陵と、それらが開析されてできた谷底平野、湖山池に流入する中小の河川によって形成された三角州に大別される。遺跡は、南北に延びる丘陵が浸食を受け、樹枝状に小谷が形成された立地にあり、主に丘陵裾部の平坦面と谷部からなっている。

丘陵裾部の平坦面は、階段状になっており、かつて河岸段丘として存在した名残をその形状にとどめている。その後、丘陵側より土砂が流れ込んで堆積したのち、地表面を造り出したものと考えられる。また、遺跡の南方約1.5kmには、昭和18年に発生した「鳥取地震」の震源とされる「吉岡断層」がほぼ東西に走っており、今回の調査でも、噴砂や液状化現象など当地震の痕跡が土層断面等で確認できた。



第3図 鳥取県と遺跡の所在地



第4図 高住宮ノ谷遺跡周辺の地形

第2節 歴史的環境

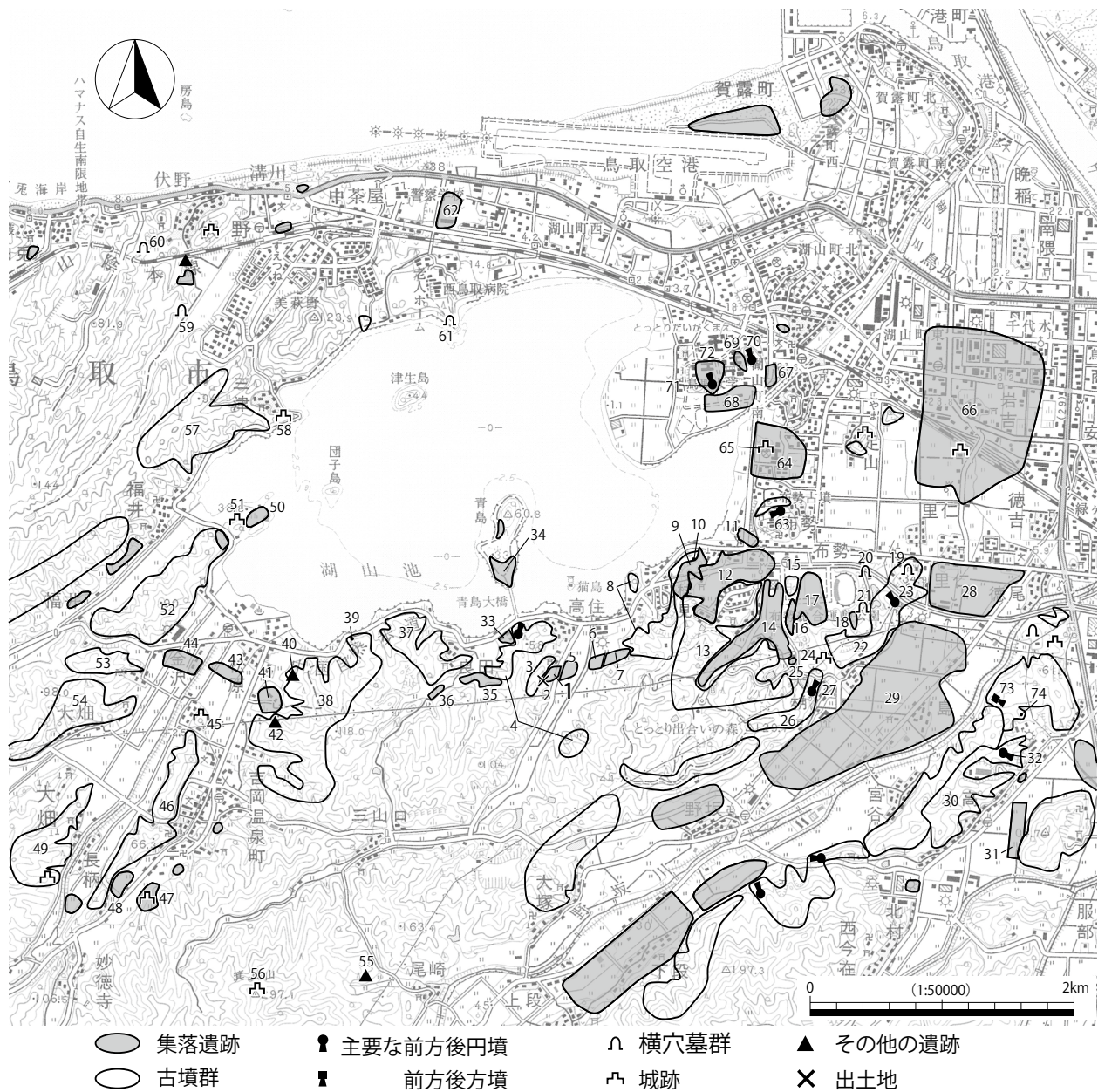
湖山池周辺は、鳥取県東部でも多くの遺跡が集中する地域のひとつである。本節では湖山池周辺の歴史を概観する。

【縄文時代】

湖山池周辺における人間活動の痕跡は、縄文時代早期に遡る。高住井手添遺跡（6）では早期前葉のネガティブ押型文土器が出土している。今回、高住宮ノ谷遺跡で早期中葉の黄鳥式土器と考えられる押型文土器が出土しており、当該期における人々の継続的な活動を裏付ける。

前期では、高住井手添遺跡や高住平田遺跡（5）で羽島下層Ⅱ段階から北白川下層Ⅰa式段階にかけての土器がまとめて出土している。湖山池南東部の東桂見遺跡（14）や桂見遺跡（12）では前期末頃の大歳山式土器の出土が認められる。中期は、高住平田遺跡で鷹島式～里木Ⅱ式の土器群や当該期の石錘、杭などが出土しているほか、高住井手添遺跡で縄文時代中期の船元式を中心とする土器群が包含層から多量に出土している。この時期の住居跡などは確認されていないが、周辺の丘陵部などに集落が存在したのであろう。

中期末から後期にかけては、湖山池南東部の布勢、桂見に代表される低湿地遺跡において遺構・遺物が確認されている。布勢第1遺跡（17）では、杭と板材を用いた後期の水路護岸らしき遺構が確認された。周辺は湿潤な環境下で多数の木製品が良好な状態で地中に保存されており、中でも布勢第1遺跡出土の朱漆塗りの木製容器や、桂見遺跡出土の丸木舟は特筆される。高住牛輪谷遺跡（7）にお



- 1 高住宮ノ谷遺跡 2 高住銅鐸出土地 3 高住宮ノ谷古墳群 4 高住古墳群 5 高住平田遺跡
- 6 高住井手添遺跡 7 高住牛輪谷遺跡 8 倉見古墳群 9 西桂見遺跡 10 西桂見墳丘墓 11 帆城遺跡
- 12 桂見遺跡 13 桂見古墳群・墳墓群 14 東桂見遺跡 15 布勢古墳群 16 布勢鶴指奥墳墓群 17 布勢第1遺跡
- 18 布勢第2遺跡 19 里仁第1横穴群 20 里仁第2横穴群 21 里仁第3横穴群 22 里仁古墳群 23 里仁29号墳
- 24 鍋山城跡 25 桂見鍋山遺跡 26 梶間古墳群 27 梶間1号墳 28 里仁遺跡 29 大梶遺跡 30 本高古墳群
- 31 本高弓ノ木遺跡 32 本高14号墳 33 塞ノ谷遺跡 34 青島第1遺跡 35 良田平田遺跡 36 良田中道遺跡
- 37 良田古墳群 38 松原古墳群 39 松原1号墳丘墓 40 松原小奥遺跡 41 松原谷田遺跡 42 松原所在古墓
- 43 松原田中遺跡 44 金沢坂津口遺跡 45 丸山城跡 46 吉岡古墳群 47 吉岡遺跡(丸山地区)
- 48 吉岡地区(大海地区) 49 長柄古墳群 50 岩本第2遺跡 51 防己尾城跡 52 岩本古墳群 53 大谷古墳群
- 54 大畑古墳群 55 尾崎須恵器窯跡 56 箕上山城跡 57 三津古墳群 58 三津ヶ崎本陣山城跡
- 59 伏野所在横穴墓群 60 伏野神社の南横穴墓群 61 三津所在横穴墓 62 中ノ茶屋遺跡 63 布勢1号墳
- 64 天神山遺跡 65 天神山城跡 66 岩吉遺跡 67 湖山第1遺跡 68 湖山第2遺跡 69 大熊段遺跡
- 70 大熊段1号墳 71 三浦遺跡 72 琵琶隈古墳(三浦1号墳) 73 古海36号墳 74 山ヶ鼻古墳

第5図 高住宮ノ谷遺跡周辺の遺跡

いて後期初頭の中津式から中葉の権現山式の土器が出土したほか、湖山池に浮かぶ青島に存在する青島第1遺跡(34)でも後期の土器が出土している。

後期後半から晩期にかけては、千代川やそこへ合流する河川によって形成された自然堤防上に人々が進出する。野坂川沿いの大桝遺跡(29)や、千代川と湖山池の間にある岩吉遺跡(66)、湖山池北東部にある湖山第2遺跡(68)では、晩期の土器が出土している。湖山池南西部の岩本第2遺跡(50)や松原田中遺跡(43)では晩期の突帯文土器が出土し、当遺跡と丘陵を挟んだ西側にある良田中道遺跡(36)でも後期から晩期の土器がみついている。ただし、明確な遺構はいずれも未確認である。このほか、高住井手添遺跡では、自然流路から突帯文土器とともに編組製品が13点出土している。本高弓ノ木遺跡(31)では、自然流路から縄文時代晩期～弥生時代前期初頭の貯木場が確認され、突帯文土器と遠賀川式土器が供伴しており、鳥取平野における水田稲作の開始時期を考える上で重要である。

【弥生時代】

弥生時代前期は、前述の本高弓ノ木遺跡のほか、大桝遺跡でも遠賀川式土器が出土している。桂見遺跡では、砂州上に立地する前期後葉の土坑が検出されたほか、湖山池南西岸の松原田中遺跡で前期末頃の溝が確認されており、さらに中期を中心とする玉作関連遺物が多量に出土している。

明らかな建物が確認できるのは中期以降である。湖山池北東岸の湖山第2遺跡では、中期前葉と思われる掘立柱建物が確認された。中期後葉になると、布勢第2遺跡(18)や湖山第2遺跡で竪穴建物、岩吉遺跡で掘立柱建物が確認されており、後期まで継続する。湖山池南岸では、当遺跡西側の丘陵から流水文銅鐸が(2)、湖山池に面する塞ノ谷遺跡(33)から分銅形土製品がそれぞれ出土している。

後期になると、集落が各所に営まれる。中期から続く遺跡に加え、桂見遺跡、帆城遺跡(11)、大桝遺跡では丘陵裾に、西桂見遺跡(9)では丘陵上に集落が確認された。布勢第2遺跡では、玉作工房と考えられる竪穴建物が検出されており注目される。湖山池南西部でも、松原谷田遺跡(41)、岩本第2遺跡で後期の建物遺構が検出されている。

また、湖山池南岸地域は後期の墳墓が集中する。後期前葉には、1000点以上のガラス玉が出土した松原1号墳丘墓(39)が湖山池に面して築かれる。湖山池南東部の丘陵には、長軸17.8mを測る長方形の布勢鶴指奥1号墳丘墓(16)が後期中葉に築造され、後期後葉には最大規模の四隅突出型の可能性がある西桂見墳丘墓(10、全長約65m)が築造される。北陸や北近畿の影響が認められる大型の供献土器が注目される。また、桂見墳墓群(13)内における弥生土壙墓群中では、最大の規模をもつ第1土壙墓に水銀朱や玉類が副葬されており、湖山池南東部に有力な集団が存在していたことを窺わせる。

【古墳時代】

古墳時代に入ると、湖山池周辺の丘陵上には多くの古墳が築造される。鳥取平野最大級の前方後円墳である桝間1号墳(27、全長92m)、里仁29号墳(23、全長81m)、古海36号墳(73、前方後方墳、全長67m)をはじめ、全長30m前後の前方後円墳が築造されるが、ほとんど調査が行われておらず詳細は不明である。

前期の古墳は、桂見古墳群(13)や倉見古墳群(8)、松原古墳群(38)などが知られる。桂見2号墳は全長28mの方墳で、大型の墓壙に木棺を直葬し、銅鏡2面や鉄刀などを副葬していた。高住宮ノ谷遺跡の西側丘陵上で確認された高住宮ノ谷1号墳(3)もまた方墳で、ガラス玉や鉄鎌などが

舟形木棺から出土しており、前期前半に位置づけられる。前期前半期はすべて方形墳で、立地も含めて弥生時代からの伝統を継承している。一方、本高古墳群（30）の調査では、14号墳（32）が全長63mを測る前方後円墳であることが明らかとなった。周辺埋葬の棺上に供献された小型丸底壺などから前期中葉の築造と考えられ、現状では山陰地方で最も早く築造された前方後円墳である。

中期の古墳は里仁32～35号墳（22）が調査されている。いずれも方墳であり、32・33号墳では鱗付円筒埴輪を転用した埋葬施設を確認している。

後期には、湖山池東部の布勢1号墳（63、全長59m）、北東部の濃山台地に大熊段1号墳（70、全長46m）、三浦1号墳（72、琵琶隈古墳・全長36m）といった前方後円墳が築造される。横穴式石室を内包する古墳は倉見9号墳、高住12号墳、松原28号墳や吉岡1号墳（葦岡長者古墳）などがあるが、千代川東岸に比べると確認例は少ない。松原10号墳は後期前葉の円墳で、木棺直葬の埋葬施設から青銅製勾玉が出土している。松原古墳群では、前期～後期にかけて時期ごとに築造場所を違える築造状況が明らかとなった。また、山ヶ鼻古墳（74）は凝灰岩を削り抜いた終末期の横口式石槨が知られている。

集落は、弥生時代後期から継続するものが、湖山第2遺跡や西桂見遺跡、布勢第2遺跡、松原谷田遺跡などで確認されているが、中期～後期の遺跡は確認例が少ない。湖山第1遺跡で中期末から後期の建物が検出されている程度である。高住牛輪谷遺跡では、古墳時代後期～古代の土器とともに後期の竪穴建物も確認されている。出土した付属かまど付移動式かまどは非常に珍しく、東桂見遺跡でも確認されるなど当地域に特徴的に分布するものと推定される。湖山池に面した塞ノ谷遺跡では、田舟の廃材等を利用した護岸施設を伴う池状遺構が確認され、弥生時代後期から古墳時代の遺物に伴って木製模造品や手捏ね土器、子持壺残片などが出土している。塞ノ谷遺跡に近接する良田平田遺跡（35）でも、流路から一部を打ち欠いた中期頃の土師器甕や小型丸底壺等が出土し、近隣に集落が広がっていたことが想定される。

【古代】

湖山池周辺は律令制下では因幡国高草郡に属した。奈良県明日香村石神遺跡で出土した荷札木簡に「高草評野□（岬カ）五十戸」と見え、7世紀後半には評が存在したことが確認できる。郡衙は鳥取市菖蒲付近に想定され、古代山陰道が湖山池南岸を通過していたと考えられている。また、平安時代には「高庭荘」が存在したことが知られる。

桂見遺跡では、密集した掘立柱建物群や大規模な整地遺構、赤色塗彩された土師器や円面硯・転用硯、木簡等が出土している。岩吉遺跡では、木簡とともに「草田」と記した墨書土器が多数見つかった。両遺跡とも形代や斎串などの木製祭祀具が出土しており注目される。湖山池南西部では、吉岡遺跡（47・丸山地区、48・大海地区）で奈良時代初頭の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦や鴟尾の破片が出土し、古代寺院が存在したと考えられる。

近年の調査で、高住平田遺跡で奈良～平安時代にかけての供膳具や墨書土器、烏帽子を被った人物の横顔を模した人形、「木」を篆書体で陽刻する銅印が出土している。良田平田遺跡では溝で区画された掘立柱建物群がみつき、「歴名木簡」を含む多数の木簡や墨書土器、銅製帯金具、皇朝銭、木製祭祀具等が出土しており、官衙関連施設が存在したと推定される。

【中世】

貞治3（1346）年に、山名時氏は室町幕府から正式に因幡守護に任じられ、以後山名氏が因幡守護

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

職に就いた。その守護所として築城されたのが天神山城(65)である。正確な築造時期は不明であるが、15世紀後半には守護所として機能していたと考えられる。その後、永禄6年(1563)年に山名豊数が退去して廃城となる。調査によって濠跡が確認され、中国製陶磁器や多量の京都系土師皿などが出土しており、繁栄が偲ばれる。湖山池に突き出た防己尾城跡(51)は、この地域を拠点とする吉岡氏の居城とされ、豊臣秀吉の鳥取城攻めの際の奮闘を伝える。桂見遺跡などで尾根上に確認された土塁状遺構は、この攻防の際に築かれた可能性が考えられる。

天神山城の北側の三浦遺跡(71)や大熊段遺跡(69)、南側の里仁古墳群、布勢墳墓群、布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡で土壙墓や火葬墓などからなる中世後半の墓地が見つかった。この中には周溝をもつものや盛土をもつものが確認されている。

※参考文献(本章で紹介した遺跡の主要文献のみを掲出。遺跡名五十音順)

- 『葦岡長者古墳(吉岡1号墳)発掘調査報告書』明日の湖南を考える会 1984
- 『岩吉遺跡』岩吉遺跡調査団 1976
- 『岩吉遺跡発掘調査概報』鳥取市文化財報告書委25 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1989
- 『岩吉遺跡発掘調査概報Ⅱ』鳥取市文化財報告書20 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1990
- 『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書30 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1991
- 『岩吉遺跡Ⅳ』財団法人鳥取市教育文化財団 1997
- 『大熊段遺跡』鳥取県教育文化財団報告書19 財団法人鳥取県教育文化財団 1986
- 『桂見墳墓群』鳥取市文化財報告書 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1984
- 『桂見墳墓群Ⅱ』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1993
- 『平成6年度 桂見遺跡発掘調査報告書』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1995
- 『平成7年度 桂見遺跡群発掘調査概要報告書』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996
- 『桂見遺跡-八ッ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区-』鳥取県教育文化財団調査報告書45 財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『平成8年度 桂見遺跡群発掘調査概要報告書』財団法人鳥取市教育福祉協議会 1997
- 『平成9年度 桂見遺跡発掘調査報告書』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1998
- 『桂見遺跡群(その1)』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1998
- 『桂見遺跡群(その2)』財団法人鳥取県教育文化財団 1998
- 『平成20年度 桂見遺跡発掘調査報告書』財団法人鳥取市文化財団 2009
- 『桂見古墳群・桂見遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市文化財報告書23 鳥取市教育委員会 1988
- 『桂見鍋山遺跡』鳥取県文化財調査報告書20 鳥取県教育委員会 2010
- 『湖山第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書24 鳥取県教育委員会 財団法人鳥取県教育文化財団 1989
- 『湖山第2遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書11 財団法人鳥取県教育文化財団 1982
- 『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団報告書18 財団法人鳥取県教育文化財団 1985
- 『高住井手添遺跡』鳥取県教育委員会 2015
- 『高住牛輪谷遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会 2014
- 『高住平田遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会 2012
- 『高住平田遺跡Ⅱ』鳥取県教育委員会 2013
- 『高住宮ノ谷古墳群・高住宮ノ谷遺跡』鳥取市文化財団2016
- 『天神山遺跡発掘調査概報』鳥取県教育委員会 1973
- 『天神山遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育委員会 1989
- 『徳尾遺跡群発掘調査報告書』鳥取県教育委員会 1985
- 『西桂見遺跡』鳥取市文化財報告書X 鳥取市教育委員会 1981
- 『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市文化財報告書16 鳥取市教育委員会 倉見古墳群発掘調査団 1984
- 『西桂見遺跡-鷺谷口地区・鷺谷奥地区・堤谷地区-倉見古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書46 財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『東桂見遺跡試掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告6 鳥取県教育委員会 1992
- 『東桂見遺跡 布勢鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団調査報告書29 財団法人鳥取県教育文化財団 1992
- 『東桂見遺跡』鳥取県教育委員会 2014
- 『東桂見遺跡(丘陵部)』鳥取市文化財団2015
- 『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団調査報告書7 財団法人鳥取県教育文化財団 1981
- 『布勢鶴指奥墳墓群試掘調査報告書』鳥取県教育委員会 1992
- 『布勢墳墓群』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1998
- 『松原1号墓』財団法人鳥取市文化財団 2012
- 『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書30 鳥取県埋蔵文化財センター 国土交通省鳥取河川国道事務所 2010
- 『松原古墳群Ⅱ 松原小奥遺跡』鳥取県教育委員会 2010
- 『松原10号墳』財団法人鳥取市文化財団2013
- 『松原田中遺跡Ⅰ』鳥取県教育委員会 2013
- 『三浦遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書9 鳥取大学 財団法人鳥取県教育文化財団 1982
- 『本高古墳群』鳥取県教育委員会 2010
- 『本高弓ノ木遺跡 5区』鳥取県教育委員会 2013
- 『本高弓ノ木遺跡 4区』鳥取県教育委員会 2014
- 『良田中道遺跡』鳥取県教育委員会 2014
- 『良田平田遺跡』鳥取県教育委員会 2014
- 『鳥取県史』第1巻 原始古代 鳥取県 1972
- 『新修鳥取市史』第1巻 古代・中世篇 鳥取市 1983

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 現地調査

調査区の区割り

鳥取県教育委員会が、鳥取県教育文化財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、調査成果の標準化をはかるため、遺跡・遺構の位置表示、遺物の取り上げ等に使用する調査区割り（グリッド）を以下のとおり定め、調査を行っている。

遺跡・遺構の位置は平面直角座標の第Ⅴ系（世界測地系）を使用して表示する。区割りについては、10m × 10m（100㎡）の区画を基本的な最少単位とし、その名称（記号）については、以下のように設定した。

第Ⅰ区画 鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000 m × 10,000 mで、91の区画を設け、北東隅から T 1 ～ T91 の記号を付した。

第Ⅱ区画 第Ⅰ区画の1区画内、1,000 m × 1,000 mに100分割した区画である。第Ⅱ区画については、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、1a～10jの記号を付した。

第Ⅲ区画 第Ⅱ区画の1区画を、100 m × 100 mに100分割した区画である。第Ⅲ区画については、南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、1A～10Jの記号を付した。

第Ⅳ区画 第Ⅲ区画の1区画を、10 m × 10 mに100分割した区画である。第Ⅳ区画については、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、1a～10jの記号を付した。

調査区名

第7図のとおり、旧地表面の区画や道路といった条件によって4つの調査区を設定した。北野神社南の丘陵南斜面部を「1区」、その南側に広がる丘陵裾部分を「2区」、さらにその南の旧水田面・南側丘陵裾部を「3区」、市道部分を「4区」とした。

遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、上記の地区割りを基本にして、第Ⅳ区画の単位で行っている。また、遺物取上カードおよび遺物取上台帳にもこの地区名を必ず記入しており、地図上でも出土地点を示すことが可能となっている。高住宮ノ谷遺跡の発掘調査では、調査年度毎に通しで取り上げ番号を記した。

遺構番号と遺構種類の呼称

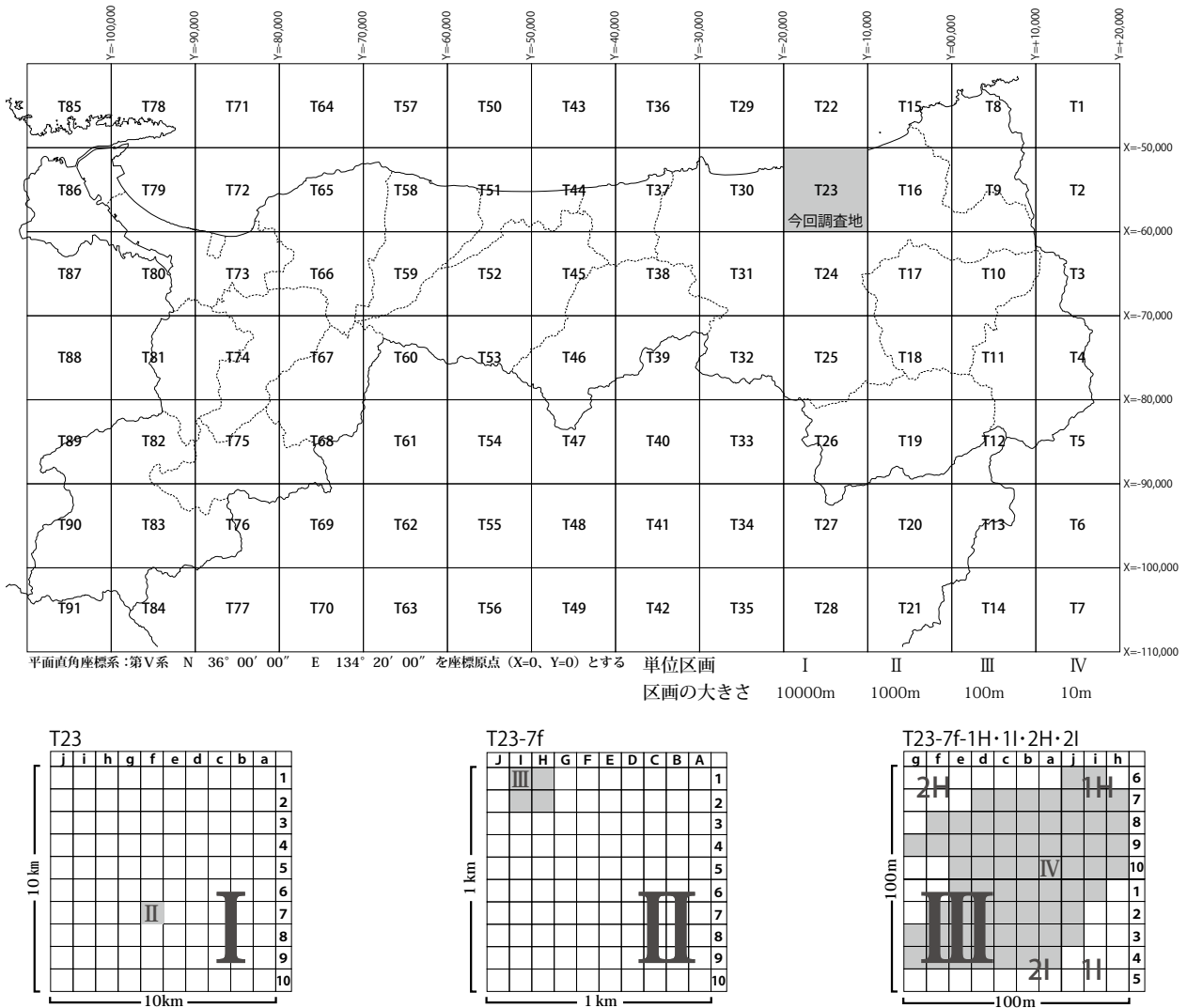
遺構番号については、検出した順に番号を付与することを基本方針とし、遺構種類の呼称については、遺構番号の後に種類を組み合わせる1土坑、2溝のように記載している。遺構種類については調査の進展により変更することがある。また、遺構番号を付与したものの、調査の結果、攪乱や自然地形であることが明らかとなった場合には欠番とした。

高住宮ノ谷遺跡では、2区においては1番から通しで遺構番号を付した。当初は各調査区を順に調査する予定であったが、1区の追加調査など各区を並行して調査することとなり、遺構番号が交雑することを避けるため、1区は2001番から、3区は3001番から、4区は4001番から通しで番号を付した。よって、3区は2箇年にわたる調査を行ったが、遺構番号は通しで管理している。

図面記録

図面は作成した各年度で通し番号を付して管理している。調査地の全体図については電子平板を用

第Ⅲ章 調査の方法



第6図 調査区の区割り(1)

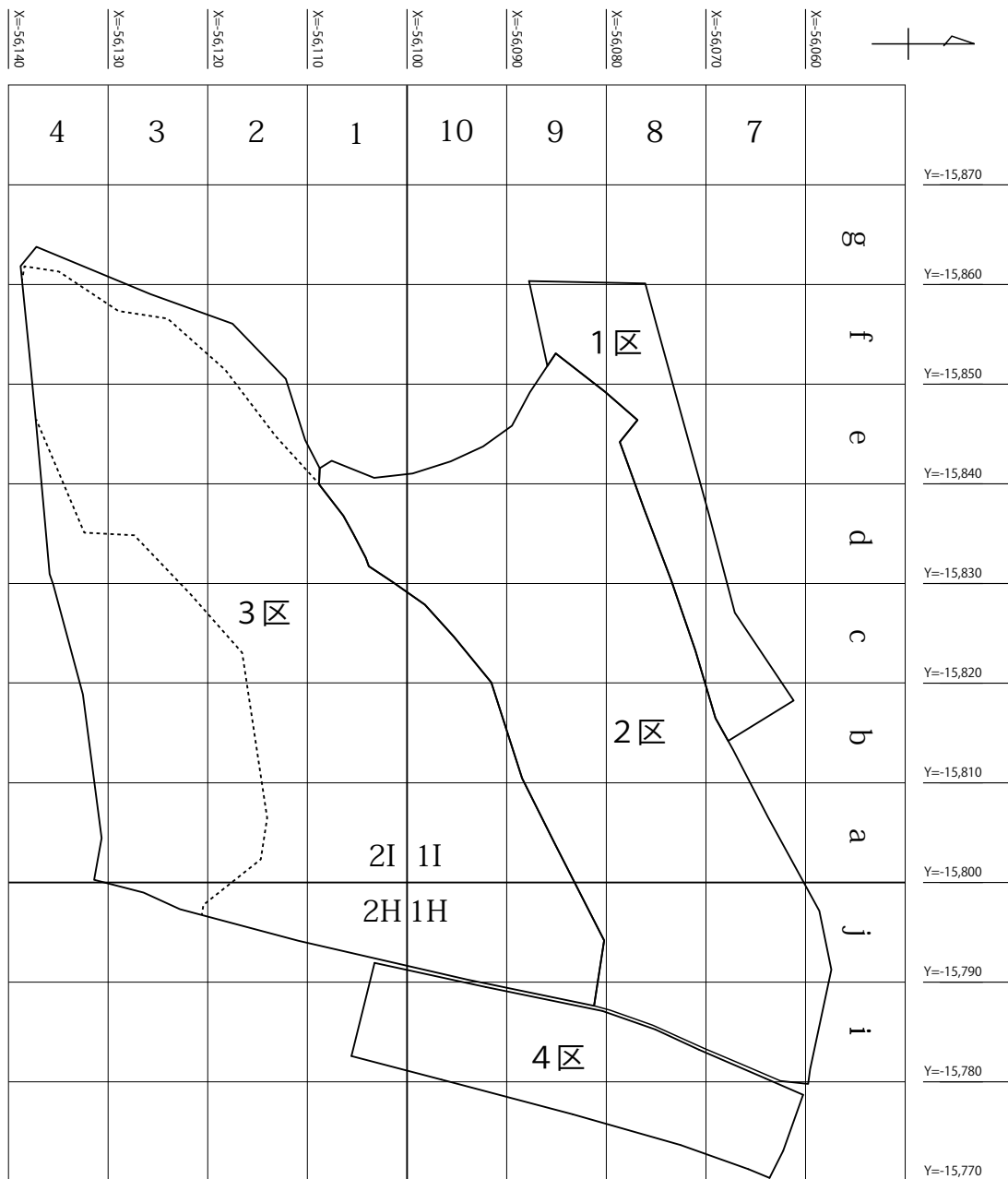
いたデジタル測量を行い、平成26年度はDXF形式、平成27年度はDWG形式にて描画した。

調査地内の堆積をみるための主要な土層断面図や個別の遺構平面図と断面図、遺物出土状況図等については、平成26年度調査に関してはトータルステーションを用いたデジタル測量とデジタルカメラを使用した写真測量を行った。平成27年度調査に関しては、平面図はトータルステーションを用いたデジタル測量を行い、断面図・出土状況図等は手測りで測量を行った。ただし、3区東壁断面のみ写真測量で図化した。なお、平成26年度調査の土層断面図の土層番号は、遺物取り上げや写真撮影など現場において使用したものを、編集段階において番号を整理したのものが、新旧の番号を一覧にしている(第1、2表)。現地調査にかかる各種台帳においては、旧番号を記載しているが、遺物観察表においては新番号で記載している。

図面の縮尺はそれぞれ状況に合わせて縮尺1/5、1/10、1/20、1/50、1/100、1/200で作成した。こうして作成した原図は番号を付し、登録台帳を作成して管理している。

写真撮影

調査地全体の写真撮影については、遺跡の立地や景観、周辺地形との関係性を表現するため、ラジコンヘリコプターおよび高所作業車を使用した。調査中および調査後の遺構面完掘状況について、平成26年度は合計6回、平成27年度は合計2回行った。



第I区画 T23

第II区画 7f

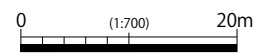
第III区画—第IV区画

1H—6i~6j、7h~7j、8h~8j、9h~9j、10h~10j

2H—1i~1j、2j、3j、4j

1I—7a~7e、8a~8g、9a~9g、10a~10e

2I—1a~1e、2a~2f、3a~3g、4a~4g



第7図 調査区の区割り (2)

また、6×7判カラーリバーサル・黑白フィルム、35mm判カラーリバーサル・黑白フィルム、デジタルカメラの3種類を、撮影対象に応じて適宜選択しながら撮影した。

なお、デジタルデータは撮影の諸データを写し込み、各フィルムカットの検索用資料の役割を持たせた。デジタルデータは各カット RAW データと jpeg データの2種類を作成し保存している。

第2節 整理作業

出土遺物については、現地での取り上げ後、財団にて以下の整理作業を行った。

土器・土製品 遺物整理は現場作業と並行して行い、洗浄・注記・接合・復元を行った後、実測作業を実施した。実測にあたっては、器種および形状が判明ないし復元できる個体を対象とした。

金属製品 金属製品は土落とし程度のクリーニングを施し、脱酸素剤を用いて密閉保存している。また、脆弱でそのままでは実測が困難な青銅製品（青銅製柄付刀子など）については、外部委託により保存処理を行った。

木製品 容器や部材などの木製品については、洗浄後に外部委託により切片採取と樹種同定を行った。また、破損した状態で出土し、そのままでは実測が難しい漆器やこけら経については、外部委託して、真空凍結乾燥法・高級アルコール法・トレハロース法による保存処理および接合を行った。実測にあたっては、器種や用途、特徴的な加工が施されているものを対象とした。

石器 石器については、洗浄・注記後、実測作業を行った。実測にあたっては、器種や用途が判明できるものを対象とした。

写真撮影 以上の出土遺物を対象に、デジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ フルサイズ）で撮影を行った。

保管 調査で得られた図面・写真の記録類、土器などの出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行った。各資料は活用に対応することを念頭に、随時検索できる状況で保管している。

第1表 土層番号新旧対照表(1)

トレンチ1		トレンチ1		トレンチ2		トレンチ4		トレンチ4		トレンチ6	
旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
①番号なし	19	②番号なし	1	①-1	1	①-1	1	②-1	20	①-1	1
①-1	20	②-1	4	①-2	3	①-2	2	②-2	21	①-2	2
①-2	23	②-2	5	①-3	4	①-3	3	②-3	23	①-3	3
①-3	24	②-3	87	①-4	5	①-4	4	②-4	24	①-4	4
①-4	25	②-4	88	①-5	6	①-5	5	②-5	25	①-5	5
①-6	53	②-5	6	①-6	7	①-6	6	②-6	49	①-6	8
①-7	53	②-6	7	①-7	18	①-7	7	②-7	50	①-7	9
①下-4	53	②-7	8	①-8	19	①-8	8	②-8	51	①-8	12
①-8	21	②-8	9	①-9	20	①-9	9	②-9	52	②-1	12
①-9	26	②-9	89	①-10	21	①-10	10	②-10	65	①-9	14
①-10	22	②-10	90	①-11	22	①-11	11	②-11	67	①-10	22
①-11	59	②-11	29	①-12	23	①-12	12	②-12	15	①-11	24
①下-7	59	②-12	33	①-13	24	①-13	26	②-13	16	①-12	23
①-12	65	②-13	10	①-14	25	①-14	27	②-14	17	①-13	21
①下-9	65	②-14	11	①-15	26	①-15	28	②-15	18	①-14	20
①-13	57	②-15	12	②-1	2	①-16	29	②-16	19	①-15	32
①-14	27	②-16	30	②-2	40	①-17	30	②下-1	53	①-16	33
①-14'	28	②-17	14	②-3	41	①-18	31	②下-2	54	②-5	33
①-15	72	②-18	13	②-4	46	①-19	33	②下-3	55	①-17	43
①下-10	72	②-19	15	②-5	47	①-20	34	②下-4	56	②-6	43
①-16	62	②-20	39	②-6	39	①-21	47	②下-5	57	①-18	44
①-17	68	②-21	94	②-7	38	①-22	46	②下-6	58	①-19	6
①-18	69	②-22	31	②-7'	38'	①-23	35	②下-7	59	①-20	10
①-19	84	②-23	95	②-8	36	①-24	36	②下-8	60	①-21	15
①-20	63	②-23'	101	②-9	35	①-25	37	②下-9	61	①-22	16
①-22	64	②-24	100	②-10	34	①-26	38	②下-10	62	①-23	18
①-22	66	②-25	32	②-11	33	①-27	39	②下-11	63	①-24	17
①-23	73	②-26	16	②-12	30	①-28	40	②下-12	64	①-25	19
①-24	81	②-27	36	②-13	27	①-29	41	②下-13	66	①-26	45
①-25	83	②-27	47	②-14	15	①-30	43			①-27	7
①-26	67	(南端)		②-15	9	①-31	42			①-28	34
①-27	70	②-28	37	②-16	8	①-32	45			①-29	35
①-28	71	②-29	38	②-17	10	①-33	44			①-30	36
①-29	75	②-30	40	②-18	11	①-34	13			①-31	37
①-30	77	②-30'	41	②-19	12	①-35	32			①-32	39
①-31	78	②-32	42	②-20	13	①-36	14			①-34	40
①-32	82	②-33	93	②-21	14	①-37	48			①-35	41
①-33	74	②-34	98	②-22	16	①-38	22			①-36	42
①-34	86	②-35	99	②-23	17					①-39	38
①-35	79	②-36	17	②-24	28					②-2	13
①-36	55	②-37	18	②-25	29					②-3	25
①-37	56	②-38	34	②-26	31					②-4	26
①-38	76	②-39	35	②-27	32					②-5'	33'
①-39	80	②-40	43	②-28	37					②-7	27
①-40	2	②-41	44	②-29	42					②-8	28
①-41	3	②-42	96	②-30	43					②-9	29
①-42	58	②-43	45	②-31	44					②-10	31
①-43	85	②-44	91	②-32	45					②-11	30
①-44	103	②-45	46	②-33	48					827ピット1	11
①-45	104	②-46	97							827ピット2	11
①下-1'	52	②-47	48								
①下-2	50	②-48	49								
①下-3	51	②-49	92								
①下-5	54	②-50	102								
①下-6	60										
①下-8	61										

第Ⅲ章 調査の方法

第2表 土層番号新旧対照表(2)

神社横壁		東壁(2区)		東壁(3区)		竪穴建物1・2 断面		竪穴建物1・2 断面	
旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
1	1	1	2	1	18	なし	1	43	26
2	2	1'	1	2	21	Bなし	11	44	29
3	3	2	4	3	19	A-1	54	45	30
4	4	3	5	4	20	A-3	48	49	25
5	5	4	6	5	22	A-4	50	B-46	18
6	8	5	3	6	23	A-5	53	B-50	58
7	6	6	7	7	24	A-6	54	B-51	37
8	7	7	8	8	29	A-7	52	B-52	35
9	9	8	9	9	31	A-8	51	B-53	34
10	10	9	10	9'	31'	A-9	44	B-54	38
11	11	10	16	10	25	A-9'	44	B-55	36
12	12	11	18	11	26	A-10	43	B-56	39
12'	13	12	11	12	27	A-10'	8	B-57	33
13	15	13	12	13	32	A-11	55	B-58	40
14	16	14	15	14	33	A-13	3	B-61	12
15	14	15	13	15	28	A-13	5	B-62	17
16	22	16	14	16	30	A-14	9	B-63	57
17	17	17	17	17	10	A-15	56	B-67	57
18	18	18	20	18	11	A-16	6	B-64	15
(313柱穴)		19	23	19	12	A-17	10	B-65	13
19	21	20	22	20	13	A-18	7	67	27
20	23	21	25	21	3	A-20	4	68	31
21	19	18'	21	22	4	A-20	49	周溝	41
22	24	18''	19	23	5	30	45	周溝	42
23	20	19'	24	24	1	31	47	貼床	32
24	25			25	2	32	2	320ピット	16
				26	6	33	46	328ピット	14
				27	14	36	19		
				28	7	B-47	19		
				29	9	37	20		
				30	15	38	21		
				31	16	39	24		
				32	17	40	23		
				33	8	41	22		
				地山	34	42	28		

第IV章 調査の成果

第1節 1区（平成26年度）の調査

1 立地

高住宮ノ谷遺跡1区は、北野神社が立地する丘陵の南斜面、標高約10.2～16.3mの範囲に設定した、330㎡の調査区である。2区に接する南側の一部を除きかなりの急斜面であり、転落防止のため調査区下端に足場を組んで調査を行った。また、急斜面であることから重機を導入することができず、全て人力で調査を行った。

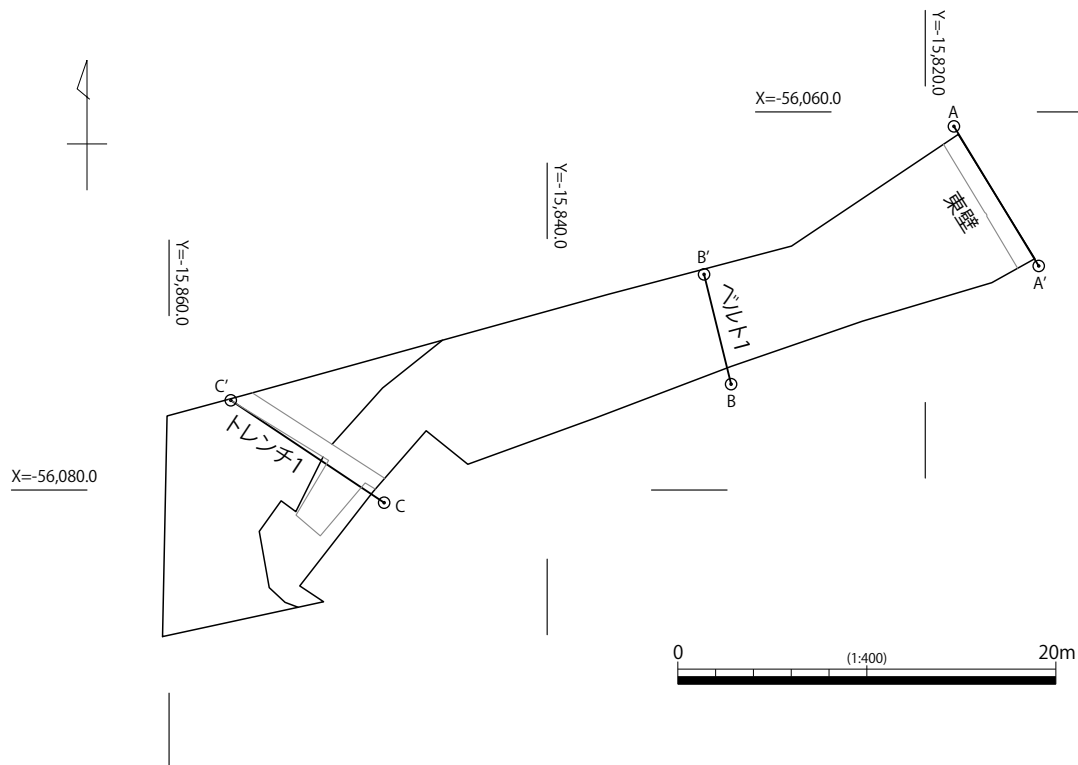
なお、調査区はかつて北野神社社叢でもあったため、樹齢を重ねた大木の切株が10本弱残っており、安全のため遺構に関わらない部分においては除去を行わず、残したままで調査を行った。また、調査区西端の谷部分は急斜面が続いていたことから、表土を除去した段階で平面調査を止め、トレンチを設定して断面観察のみにとどめた。

2 基本層序（第10～12図）

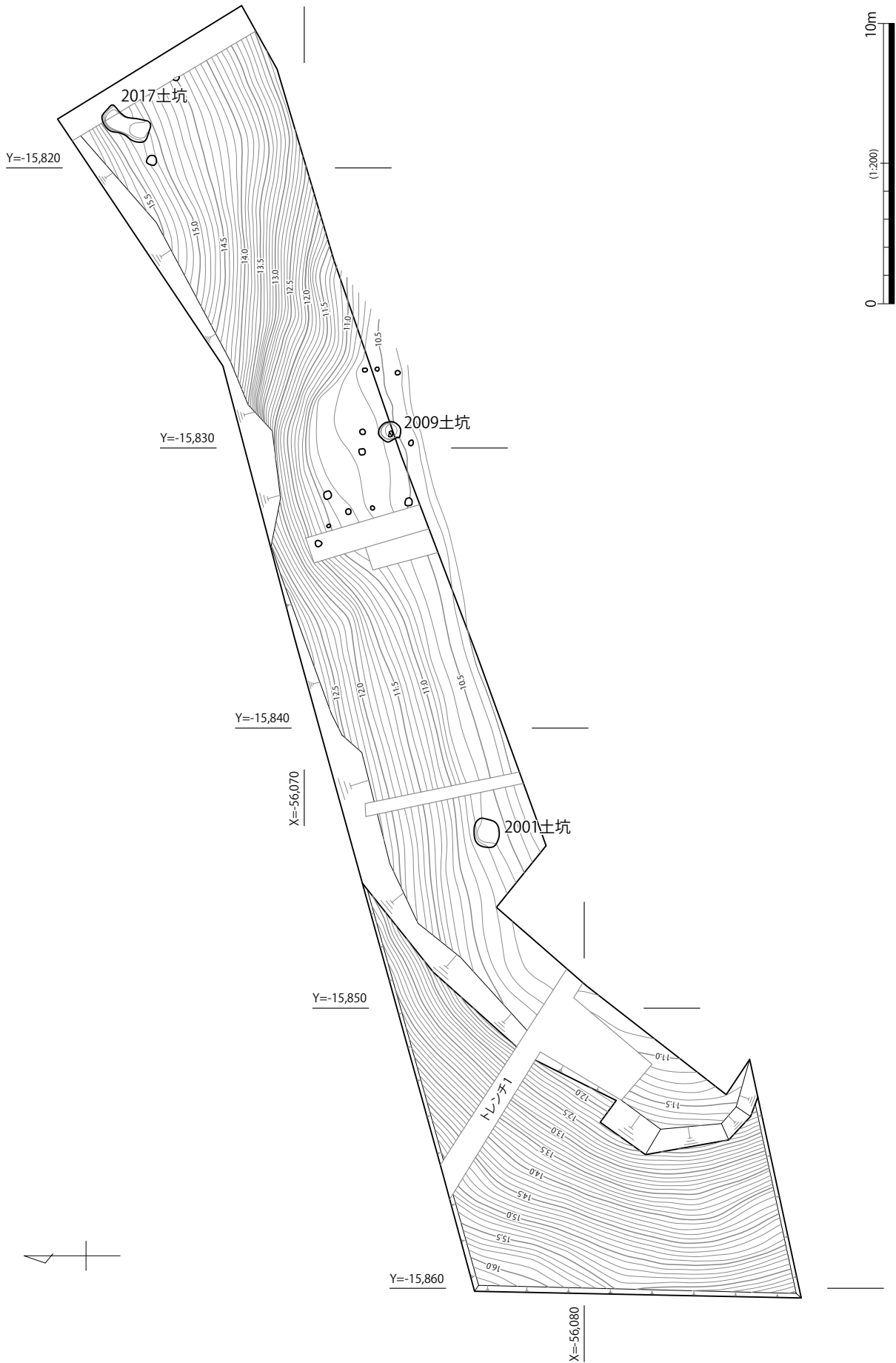
調査区は、大きく西部、中央部と東部に分けることができる。鳥取市教育委員会による試掘トレンチがそれぞれの箇所に設定されており、これらも利用しつつトレンチや土層観察用ベルトを設定した。

東側は $Y = -15,825$ 以東で、厚さ0.2m程度の表土を除去すると岩盤が風化した6層（第11図）が露出し、部分的に4層がこの上に堆積している。岩盤上面でピットと土坑を検出した。

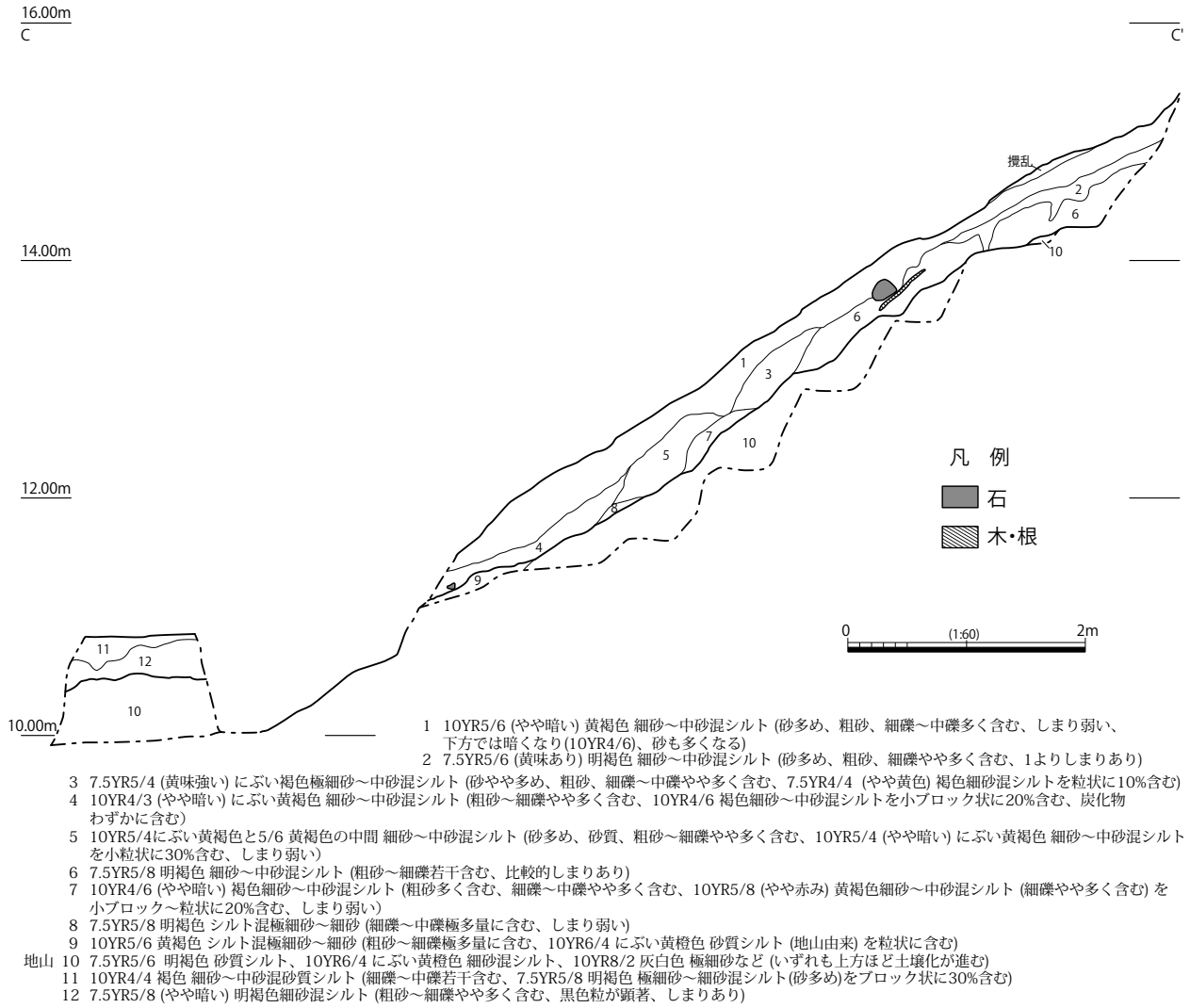
中央部は $Y = -15,825 \sim -15,845$ の範囲である。2区寄りの南側には、標高10.3～10.7mの部



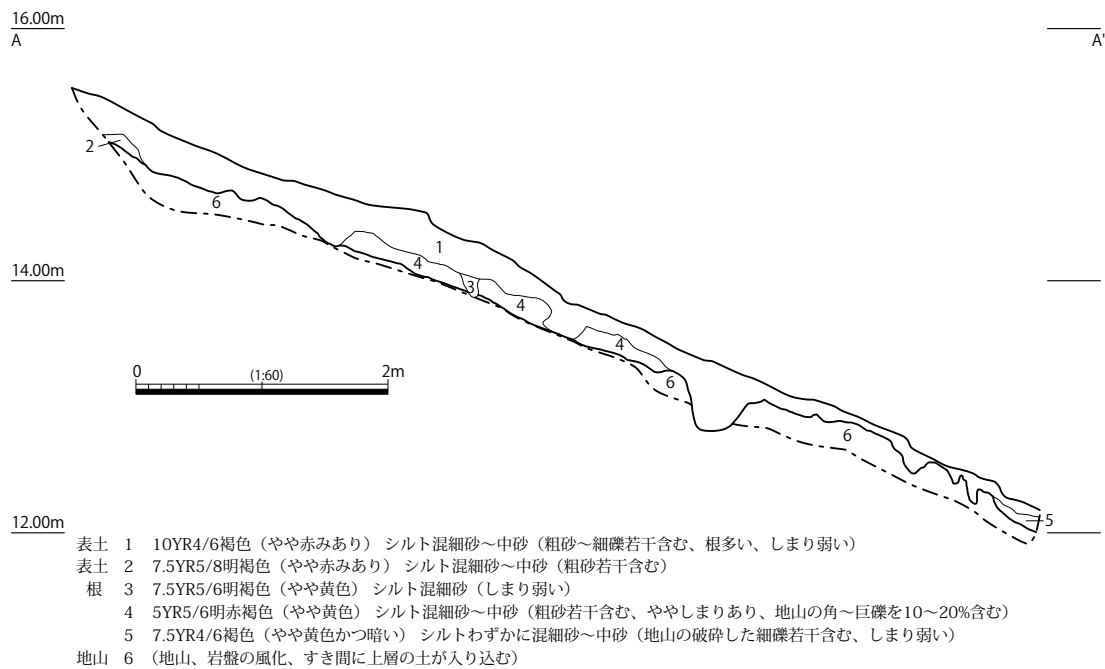
第8図 1区 セクション配置図



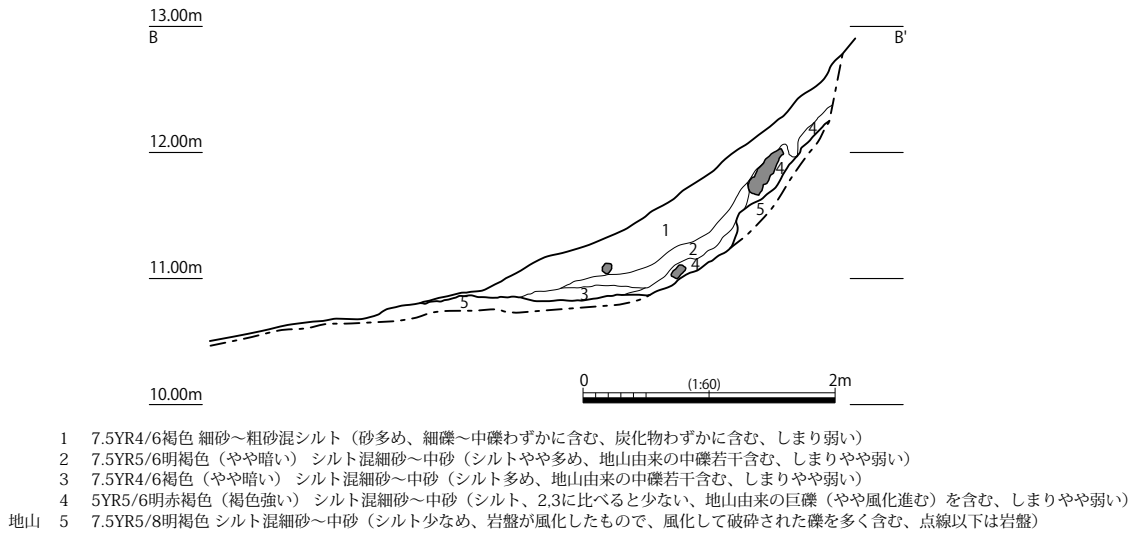
第9図 1区 全体図



第10図 1区 トレンチ1土層断面図



第11図 1区 東壁土層断面図



第12図 1区 ベルト1土層断面図

分に幅1.5m程のテラス状平坦面が存在する。この平坦面はY = -15,835付近から北側へ広がり、幅7m、奥行4mほどの半円形状を呈するテラスとなっている。土層観察用ベルト（ベルト1）をこのほぼ中心に設定した（第12図）。1～4層に分けられ、4層中には岩盤が崩落した巨礫が含まれる。岩盤の上面でピット12基および土坑1基を確認したほか、西部に近い部分で土坑1基を確認した。

西部は2区から続く谷が伸びており、前述のとおり斜面上方は表土除去後にトレンチを設定して断面で堆積状況を確認した（第10図）。斜面下方には中央部から平坦面が続いており、この部分に鳥取市教育委員会が試掘トレンチを設定していた。表土を除去すると、黄褐色～明褐色の細砂～中砂混シルトなどの層となる。1層のように全面に見られる層もあるが、多くは斜面に並行する凸レンズ状に堆積しており、上方からの堆積土と考えられる。9層および10層は岩盤が風化したシルト、細砂などの層となっている。遺構は確認出来なかったほか、2区1トレンチで確認したような土壌化層も存在しなかった。

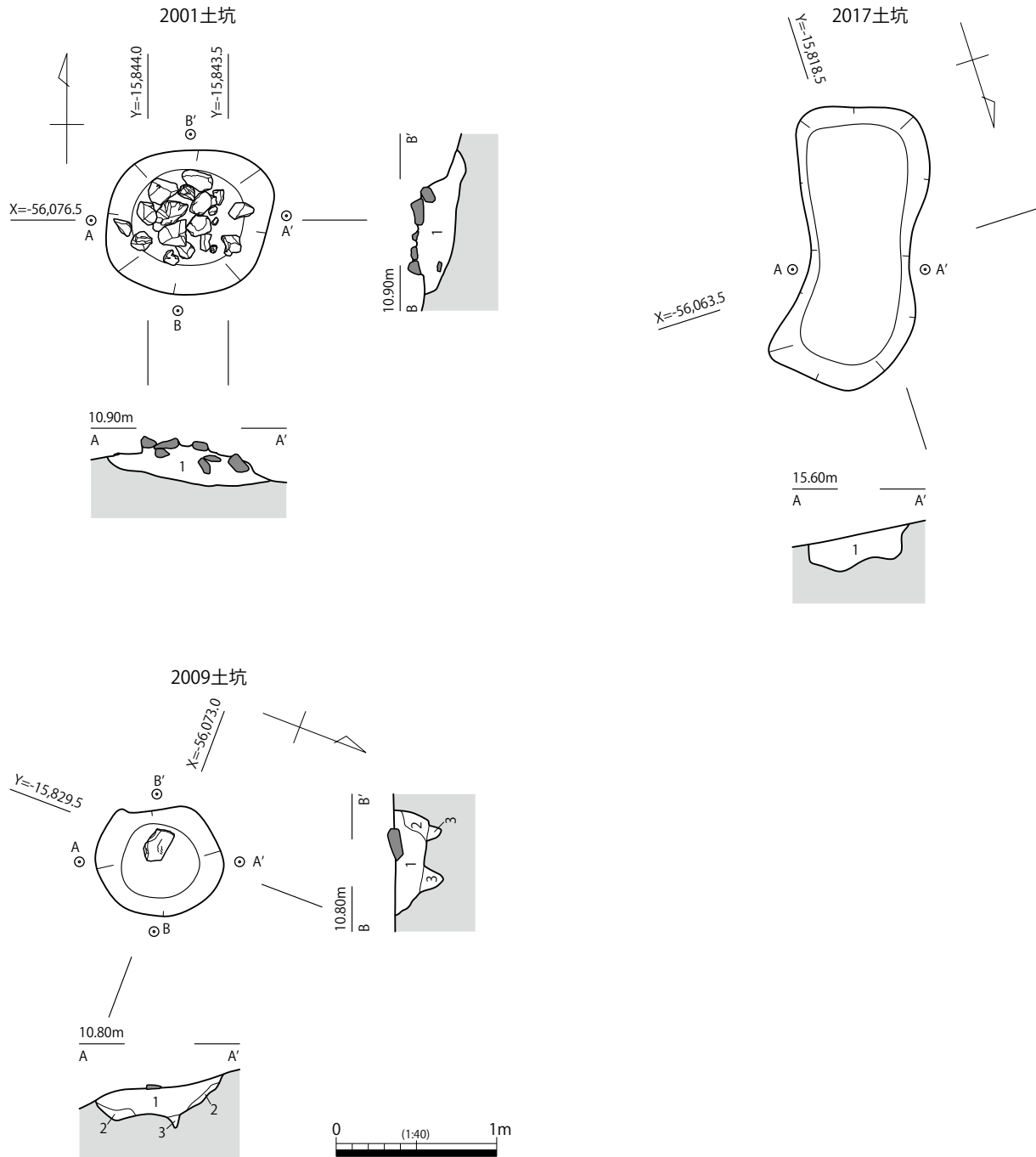
3 検出した遺構（第13図、PL. 3、4）

1区において確認できた遺構は少なく、土坑3基、ピット14基を検出したにとどまる。

2001土坑は、調査区中央南寄りの平坦面で検出したほぼ円形の浅い土坑である。長軸1.1m、短軸0.92m、深さ0.23m、埋土上層に拳大～20cmの角礫～亜角礫20点ほどが含まれていた。礫は基盤岩中に貫入した岩脈が周囲の岩盤の風化により残ったものと考えられ、被熱や加工痕などは見られなかった。なお、すぐ西側には列状に礫の分布も認められた。遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。

2009土坑は、半円形状テラスのほぼ中央南端で検出したややいびつな円形の土坑である。岩盤を掘り込んで構築したもので、長軸0.79m、短軸0.66m、深さ0.2mを測る。埋土は3層に分層できたが、最下の3層は岩盤の節理面の可能性がある。上面に自然礫1点が存在したが、遺物は出土しなかった。時期や性格は不明である。

2017土坑は調査区北東端近くの最高所付近で検出したいびつな隅丸長方形の土坑で、東端が鳥取市の試掘トレンチで確認されていた。長辺1.75m、短辺0.61～0.8m、深さ0.2mで、長軸を斜面の



- 2001土坑 1 10YR4/6褐色（やや明るい）細砂～中砂混シルト（細礫～中礫若干含む、しまり弱い）
- 2009土坑 1 7.5YR5/6明褐色 シルト混細砂～中砂（しまりやや弱い）
- 2 7.5YR5/8明褐色（やや赤み）シルトわずかに混極細砂～細砂（地山破碎細礫～中礫多く含む、しまりやや弱い）
- 3 7.5YR5/8明褐色（2よりやや暗い）シルト混細砂～中砂（シルト少なめ、しまり弱い）
- 2017土坑 1 7.5YR5/6明褐色 シルト混細砂～中砂（シルト多め、粗砂～細礫含む、地山破碎礫若干含む）

第13図 1区 土坑平面図・断面図

第IV章 調査の成果

傾斜に斜行させる。内部からは若干の炭化物が検出されたのみであり、その他に出土遺物は存在しなかった。時期や性格は不明である。

ピットは半円形テラスにおいて12基、2017土坑近辺で2基を確認した。平面形は基本的に円形もしくは楕円形で、最大径0.14～0.3 m、深さ0.03～0.27 mの小規模なものである。埋土は基本的に単層で、柱痕跡などは認められず、規則性も確認できなかった。遺物も土器の細片が出土したのみであるが、鳥取市による試掘調査の際に、2010ピットから土器片が出土している。

1区は全体的に出土遺物が少なく、東部の斜面上部で中世の土師皿(第120図4)が検出されたほか、西部で古代の土師器甕がややまとまって出土した程度である(第120図1～3)。中央部から西部にかけては土師器、須恵器の破片が数点出土したにとどまる。なお、半円形状テラス東側斜面で弥生時代の磨製石庖丁(第153図S1)が1点出土している。

4 小結

1区は北野神社南側の丘陵斜面であり、急傾斜の部分が大半である。遺構の大半は中央の半円形状テラス部分で検出したものであるが、このテラスに人為的な加工の痕跡は明らかではなかった。基本的に、この斜面は人々が活発に活動する場ではなかったといえよう。

第3表 1区 ピット等一覧

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考
2001	土坑	楕円	110	92	皿状	23	
2002	ピット	楕円	14	12	V	8	
2003	ピット	円	28	-	皿状	5	
2004	ピット	円	18	-	皿状	3	
2005	ピット	円	14	-	逆台	9	
2006	ピット	隅丸三角	27	25	U	7	
2007	ピット	円	25	-	U	16	
2008	ピット	円	18	-	皿状	4	
2009	土坑	円	79	66	U	20	
2010	ピット	円	22	-	U	14	平成26年度鳥取市試掘トレンチ
2011	ピット	円	14	-	U	5	
2012	ピット	円	18	16	U	5	
2013	ピット	楕円	21	14	皿状	3	
2014	ピット	楕円	18	14	逆台	6	
2015	ピット	円	36	34	皿状	12	
2016	ピット	円?	22	-	逆台	27	平成26年度鳥取市試掘トレンチ
2017	土坑	隅丸長方	175	61～80	コ	10	平成26年度鳥取市試掘トレンチ

第2節 2区（平成26年度）の調査

1 立地

高住宮ノ谷遺跡2区は、1区南側に接し、北野神社南側を流れる小さな谷に面した丘陵の裾部に立地する。1区から急な斜面が続いており、その下には比較的平坦な面が広がる。南側は3区に接するが、後世の水田開発により比高0.8～1mほどの段差が形成されている。標高は3.3～11.5mを測る。調査面積は1,470㎡である。

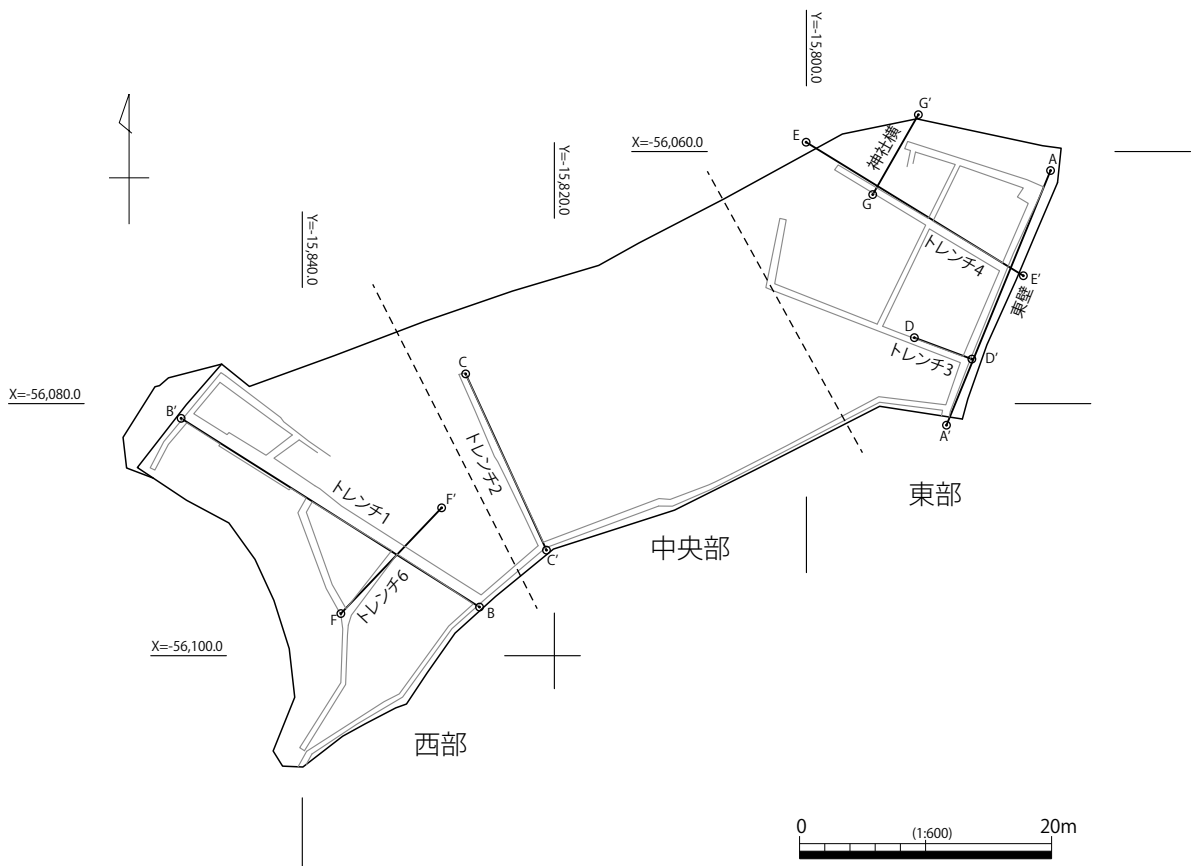
2 基本層序（第15～23図）

2区は、東西に長い調査区であり、地形と層序の面から、大きく西部（谷部）、中央部、東部（神社横）に分けて記述する。

<西部>

西部は標高7m付近を境として、斜面部と平坦面部分に分かれる。1区から流下する谷の流芯に沿って斜面部と平坦面部分を通したトレンチ1と、平坦面部分にこれと直交する方向にトレンチ6を設定し、谷の堆積状況を確認した。

西側の丘陵斜面部は、表土除去を行うとすぐ岩盤が露出した。北西側の谷部斜面には厚く土砂が堆積し、谷に上方や左右から土砂が繰り返し流入した状況が見て取れた。表土下には暗褐色～灰褐色砂混シルト（第18図20～28層）が厚く堆積しており、岩盤が崩壊した自然礫が多く含まれていた。これらの土中には古墳時代後期～古代の土器片が含まれていた。



第14図 2区 トレンチ配置図

これらの下には53層が堆積するが、上方ほど厚く谷の下方では厚さを減じるとともに地下水の影響によりグライ化していく。基本的に灰オリーブ色～灰黄色系シルト層と明褐色系砂層が互層状になる層であるが、亀裂が幾つも入って谷下方が下にずり落ちた状況を示していたほか、部分的に混じり合った状態にあった。土壌化していない層であり、谷上方からの地滑りなどで形成された層と考えられる。53層の下層には土壌化した59層および65層が0.1～0.2m程の層厚で堆積しており、59層からは須恵器高杯（第126図82）、65層からは土師器小型丸底壺（第126図75）を検出した。なお、両者は重なり合って出土したほか、両層からの出土遺物は他にほとんどなかったことから、偶然ではなく意図的に置かれた可能性もある。65層の下には72層が岩盤上に堆積している。谷下方ではこの下に土壌化層（82・83層）が存在するが、遺物は確認できていない。

平坦面部では、表土（近現代耕作土）を除去した面を第1面、にぶい黄褐色細砂～粗砂混シルト～褐灰色シルト混中砂～粗砂（99層）上面を第2面として調査を行った。谷部で水分が多いためか後世の攪乱が多く存在し、第1面の残存状況はよくなかった。また、99層上にはこの99層が土壌化した黒色～黒褐色シルト層（91～97層）が存在し、土坑などもこの面から掘り込まれていたが、土色の見分けが付きにくかったこと、トレンチ東側では上層からの耕作のため失われている部分も多かったことから、これらを除去した段階での遺構検出となった。なお、99層は斜面部の53層を構成するシルト層に土質が類似しており、53層が元になった層と考えられる。地滑りで上方から堆積したと考えられるが、黒褐色シルトがブロック状に混入する部分も確認でき、若干人の手が加わっている可能性が考えられる。

99層の下には大量の未分解有機質を含む黒色～黒褐色砂混じりシルト層（100・101層）が0.05～0.15m程の厚さで堆積し、下層は粗砂層（104層）となる。この粗砂層は東へ行くに従いシルト質が多くなっていく。最終的に104層上面まで調査を行った。

<中央部>

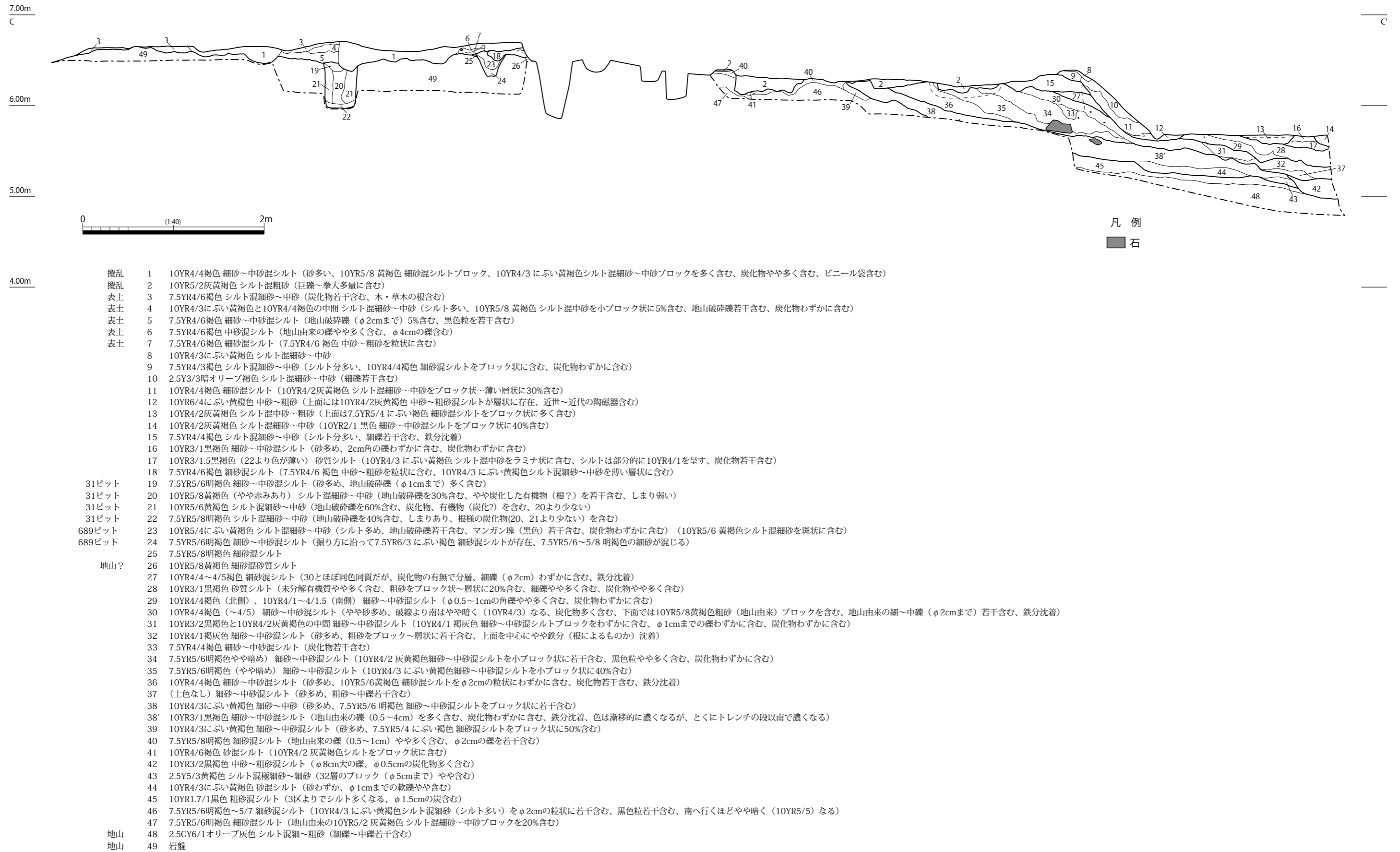
中央部は斜面部と平坦部に大きく分けられ、平坦部は後世の水田開発に伴う段差を境に上段と下段に分けることができる。西寄りに鳥取市教育委員会による試掘トレンチ（3トレンチ）が入れられており、この東辺に合わせて段差に直交するトレンチ2を設定、土層の堆積状況を確認した（第15図）。

斜面部は表土を除去するとすぐ岩盤が露出する状況で、裾部は大きくえぐられ現代のゴミが廃棄されていた。続く平坦部上段もまた近現代の攪乱が多く、表土を除去した段階で岩盤が露出し、多数のピットや柱穴が検出できた。部分的に岩盤上に包含層が薄く残存し、この下面からも数多くの遺構を確認している。

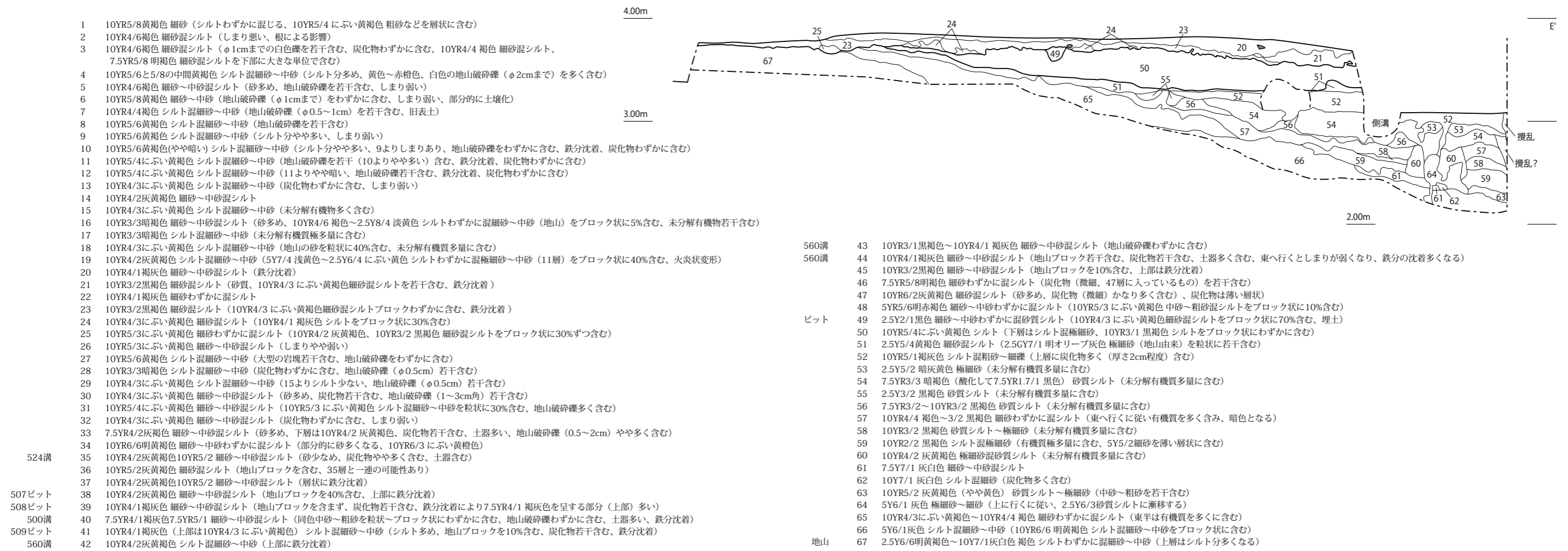
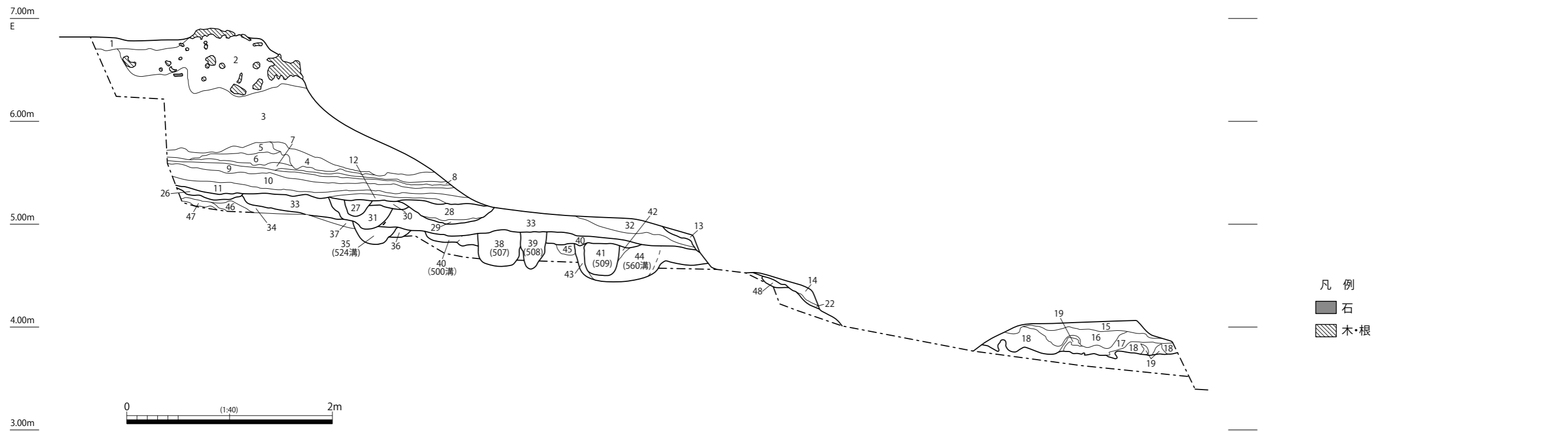
平坦部下段は3区につながっており、南端部分では堆積状況も3区と対応する。トレンチ2では、X = - 56,088以南において、土壌化した38層および38'層よりも上層では、砂混シルト層が北から南に傾斜して重なる様子が観察できた（34～36層）。人為的に行われた整地層の可能性が考えられる。この整地層上面の30層中には炭化物が大量に混入していた。調査時は28・29層面上面を第1面、30～32層上面を第2面として遺構検出を行った後、38層上面まで掘削を行った。最終的に谷部のトレンチ1の104層に対応する48層上面まで掘削を行っている。

<東部>

東部（神社横）は北野神社参道南側に位置する部分である。調査前は東に接する県道よりも標高が高かったが、東端の幅12m程の範囲は現代の盛土によって2m以上嵩上げされていたことが判明し



第15図 2区 トレンチ2土層断面図



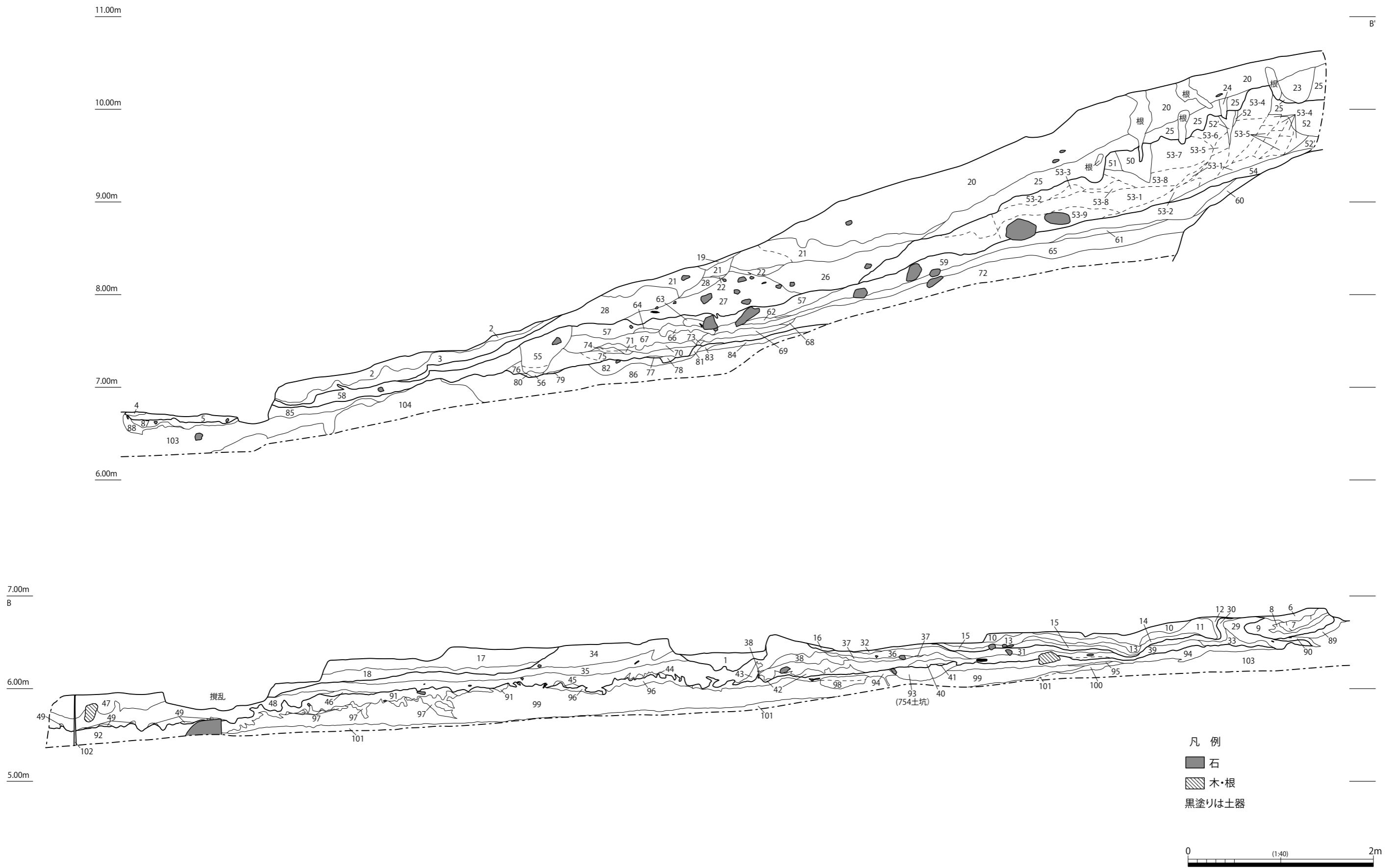
- 1 10YR5/8黄褐色 細砂(シルトわずかに混じる、10YR5/4 にぶい黄褐色 粗砂などを層状に含む)
- 2 10YR4/6褐色 細砂混シルト(しまり悪い、根による影響)
- 3 10YR4/6褐色 細砂混シルト(φ1cmまでの白色礫を若干含む、炭化物わずかに含む、10YR4/4 褐色 細砂混シルト、7.5YR5/8 明褐色 細砂混シルトを下部に大きな単位で含む)
- 4 10YR5/6と5/8の中間黄褐色 シルト混細砂～中砂(シルト分多め、黄色～赤橙色、白色の地山破砕礫(φ2cmまで)を多く含む)
- 5 10YR4/6褐色 細砂～中砂混シルト(砂多め、地山破砕礫を若干含む、しまり弱い)
- 6 10YR5/8黄褐色 細砂～中砂(地山破砕礫(φ1cmまで)をわずかに含む、しまり弱い、部分的に土壌化)
- 7 10YR4/4褐色 シルト混細砂～中砂(地山破砕礫(φ0.5～1cm)を若干含む、旧表土)
- 8 10YR5/6黄褐色 シルト混細砂～中砂(地山破砕礫を若干含む)
- 9 10YR5/6黄褐色 シルト混細砂～中砂(シルト分やや多い、しまり弱い)
- 10 10YR5/6黄褐色(やや暗い)シルト混細砂～中砂(シルト分やや多い、9よりしまりあり、地山破砕礫をわずかに含む、鉄分沈着、炭化物わずかに含む)
- 11 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂(地山破砕礫を若干(10よりやや多い)含む、鉄分沈着、炭化物わずかに含む)
- 12 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂(11よりやや暗い、地山破砕礫若干含む、鉄分沈着、炭化物わずかに含む)
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂(炭化物わずかに含む、しまり弱い)
- 14 10YR4/2灰黄褐色 細砂～中砂混シルト
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂(未分解有機物多く含む)
- 16 10YR3/3暗褐色 細砂～中砂混シルト(砂多め、10YR4/6 褐色～2.5Y8/4 淡黄色 シルトわずかに混細砂～中砂(地山)をブロック状に5%含む、未分解有機物若干含む)
- 17 10YR3/3暗褐色 シルト混細砂～中砂(未分解有機質極多量に含む)
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂(地山の砂を粒状に40%含む、未分解有機質多量に含む)
- 19 10YR4/2灰黄褐色 シルト混細砂～中砂(5Y7/4 浅黄色～2.5Y6/4 にぶい黄色 シルトわずかに混極細砂～中砂(11層)をブロック状に40%含む、火災変形)
- 20 10YR4/1褐色 細砂～中砂混シルト(鉄分沈着)
- 21 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト(砂質、10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混シルトを若干含む、鉄分沈着)
- 22 10YR4/1褐色 細砂わずかに混シルト
- 23 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト(10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混シルトブロックわずかに含む、鉄分沈着)
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂混シルト(10YR4/1 褐色 シルトをブロック状に30%含む)
- 25 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂わずかに混シルト(10YR4/2 灰黄褐色、10YR3/2 黒褐色 細砂混シルトをブロック状に30%ずつ含む)
- 26 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト(しまりやや弱い)
- 27 10YR5/6黄褐色 シルト混細砂～中砂(大型の岩塊若干含む、地山破砕礫をわずかに含む)
- 28 10YR3/3暗褐色 シルト混細砂～中砂(炭化物わずかに含む、地山破砕礫(φ0.5cm)若干含む)
- 29 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂(15よりシルト少ない、地山破砕礫(φ0.5cm)若干含む)
- 30 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト(砂多め、炭化物若干含む、地山破砕礫(1～3cm角)若干含む)
- 31 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト(同色中砂～粗砂を粒状～ブロック状にわずかに含む、10YR6/3 にぶい黄褐色)
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト(炭化物わずかに含む、しまり弱い)
- 33 7.5YR4/2灰褐色 細砂～中砂混シルト(砂多め、下層は10YR4/2 灰黄褐色、炭化物若干含む、土器多い、地山破砕礫(0.5～2cm)やや多く含む)
- 34 10YR6/6明黄褐色 細砂～中砂わずかに混シルト(部分的に砂多くなる、10YR6/3 にぶい黄褐色)
- 524溝 35 10YR4/2灰黄褐色10YR5/2 細砂～中砂混シルト(砂少なめ、炭化物やや多く含む、土器含む)
- 36 10YR5/2灰黄褐色 細砂混シルト(地山ブロックを含む、35層と一連の可能性あり)
- 507ピット 37 10YR4/2灰黄褐色10YR5/2 細砂～中砂混シルト(層状に鉄分沈着)
- 508ピット 38 10YR4/2灰黄褐色 細砂～中砂混シルト(地山ブロックを40%含む、上部に鉄分沈着)
- 39 10YR4/1褐色 細砂～中砂混シルト(地山ブロックを含まず、炭化物若干含む、鉄分沈着により7.5YR4/1 褐色を呈する部分(上部)多い)
- 500溝 40 7.5YR4/1褐色7.5YR5/1 細砂～中砂混シルト(同色中砂～粗砂を粒状～ブロック状にわずかに含む、地山破砕礫わずかに含む、土器多い、鉄分沈着)
- 509ピット 41 10YR4/1褐色(上部は10YR4/3 にぶい黄褐色) シルト混細砂～中砂(シルト多め、地山ブロックを10%含む、炭化物若干含む、鉄分沈着)
- 560溝 42 10YR4/2灰黄褐色 シルト混細砂～中砂(上部に鉄分沈着)

- 560溝 43 10YR3/1黒褐色～10YR4/1 褐色 細砂～中砂混シルト(地山破砕礫わずかに含む)
- 560溝 44 10YR4/1褐色 細砂～中砂混シルト(地山ブロック若干含む、炭化物若干含む、土器多く含む、東へ行くとしまりが弱くなり、鉄分の沈着多くなる)
- 45 10YR3/2黒褐色 細砂～中砂混シルト(地山ブロックを10%含む、上部は鉄分沈着)
- 46 7.5YR5/8明褐色 細砂わずかに混シルト(炭化物(微細、47層に入っているもの)を若干含む)
- 47 10YR6/2灰黄褐色 細砂混シルト(砂多め、炭化物(微細)かなり多く含む)、炭化物は薄い層状)
- 48 5YR5/6明赤褐色 細砂～中砂わずかに混シルト(10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂～粗砂混シルトをブロック状に10%含む)
- ピット 49 2.5Y2/1黒色 細砂～中砂わずかに混砂質シルト(10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混シルトをブロック状に70%含む、埋土)
- 50 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト(下層はシルト混極細砂、10YR3/1 黒褐色 シルトをブロック状にわずかに含む)
- 51 2.5Y5/4黄褐色 細砂混シルト(2.5GY7/1 明オリープ灰色 極細砂(地山由来)を粒状に若干含む)
- 52 10YR5/1褐色 シルト混粗砂～細礫(上層に炭化物多く(厚さ2cm程度)含む)
- 53 2.5Y5/2 暗黄褐色 極細砂(未分解有機質多量に含む)
- 54 7.5YR3/3 暗褐色(酸化して7.5YR1.7/1 黒色) 砂質シルト(未分解有機質多量に含む)
- 55 2.5Y3/2 黒褐色 砂質シルト(未分解有機質多量に含む)
- 56 7.5YR3/2～10YR3/2 黒褐色 砂質シルト(未分解有機質多量に含む)
- 57 10YR4/4 褐色～3/2 黒褐色 細砂わずかに混シルト(東へ行くに従い有機質を多く含む、暗色となる)
- 58 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト～極細砂(未分解有機質多量に含む)
- 59 10YR2/2 黒褐色 シルト混極細砂(有機質極多量に含む、5Y5/2細砂を薄い層状に含む)
- 60 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂混砂質シルト(未分解有機質多量に含む)
- 61 7.5Y7/1 灰白色 細砂～中砂混シルト
- 62 10Y7/1 灰白色 シルト混細砂(炭化物多く含む)
- 63 10YR5/2 灰黄褐色(やや黄色) 砂質シルト～極細砂(中砂～粗砂を若干含む)
- 64 5Y6/1 灰色 極細砂～細砂(上に行くに従い、2.5Y6/3砂質シルトに漸移する)
- 65 10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4 褐色 細砂わずかに混シルト(東半は有機質を多く含む)
- 66 5Y6/1灰色 シルト混細砂～中砂(10YR6/6 明黄褐色 シルト混細砂～中砂をブロック状に含む)
- 地山 67 2.5Y6/6明黄褐色～10Y7/1灰白色 褐色 シルトわずかに混細砂～中砂(上層はシルト分多くなる)

第16図 2区 トレンチ4土層断面図



第17図 2区 トレンチ6土層断面図



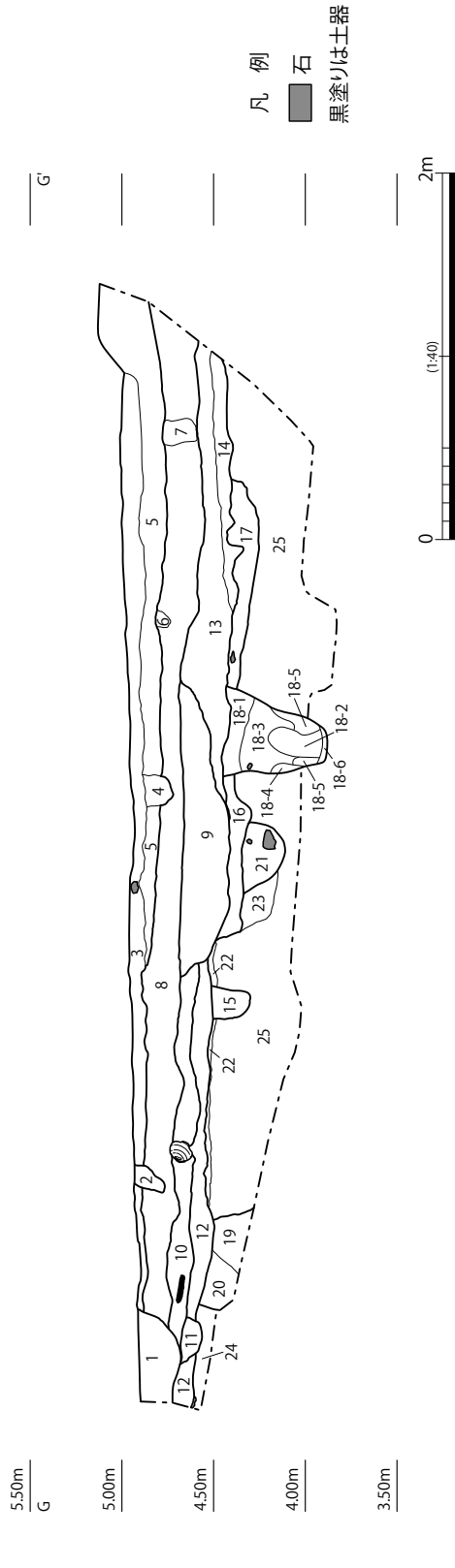
第18図 2区 トレンチ1土層断面図

- 攪乱 1 2.5Y5/2暗灰黄色礫 中砂～粗砂混シルト（こぶし大～φ5cmの岩塊多く含む）
 2 10YR4/4褐色 シルト混粗砂（根多く含む）
 3 10YR4/4と4/6の中間 褐色 シルト混中砂～粗砂（10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混中砂、5YR4/6 赤褐色 シルト混中砂をラミナ状に含む）
 4 10YR4/4褐色 シルト混粗砂（根、細礫混入）
 5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混中砂～粗砂（根が混じる）
 6 10YR3/1黒褐色 中砂～粗砂混シルト（砂多め、7.5YR4/6 褐色粗砂をブロック状に含む）
 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト混細砂～中砂（シルト多め、左右は10YR4/2灰黄褐色を呈す、炭化物やや多く含む、根やや多く混じる）
 8 10YR3/2黒褐色 シルト混細砂～中砂（炭化物若干含む）
 9 10YR3/1黒褐色 粗砂混シルト（砂多い、炭化物若干含む）
 10 10YR3/3暗褐色 シルト混中砂（シルト多め、炭化物やや多く含む、根、未分解有機物やや多く含む）
 11 10YR4/2灰黄褐色 中砂混シルト（10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混中砂、5Y3/2オリーブ黒色 シルト混中砂～粗砂をブロック状に含む、炭化物多く含む）
 12 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト混中砂～細礫（シルト多め、炭化物若干含む、鉄分沈着）
 13 10YR4/2灰黄褐色 中砂～粗砂混シルト（鉄分沈着、上層はシルト混中砂～粗砂、炭化物やや多く含む）
 14 10YR4/2灰黄褐色 シルト混中砂～粗砂（鉄分沈着、炭化物わずかに含む）
 15 10YR3/2黒褐色 中砂混シルト（2.5Y2/1黒色 シルトを1cmの層状に、10YR3/2黒褐色 シルト混粗砂を2cmのレンズ状に含む）
 16 2.5Y3/2黒褐色 シルト混中砂～粗砂
 17 2.5Y3/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（砂多め、10YR5/3にぶい黄褐色 細砂混シルト、7.5YR5/4にぶい褐色 シルト、10YR4/2灰黄褐色シルト混細砂をブロック状に30%、3～1cmの礫やや多く含む、炭化物若干含む）
 18 10YR3/3暗褐色有機質 シルト（未分解有機質を多く含む、10YR4/3にぶい黄褐色 中砂～粗砂をラミナ状に含む、南は攪拌されシルトと混じる）
 19 10YR4/4褐色 中砂～粗砂混シルト
 20 10YR3/3暗褐色～10YR3/4 暗褐色 細砂～中砂混シルト（10YR4/6 褐色 細砂～中砂混シルトを粒～小ブロック状に10%含む（下方ほど少ない）、φ2cmまでの礫5%、φ10cmまでの岩塊若干含む、炭化物やや多く含む、土器片含む）
 21 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～粗砂混シルト（10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂混シルトを粒～小ブロック状に50%含む、有機物わずかに含む、点線より下方は地下水の影響により10YR5/2 灰黄褐色 シルト混中砂～粗砂化する）
 22 2.5Y6/2灰黄色 シルト混粗砂（部分的に鉄分？により5YR4/8 赤褐色を呈する）
 23 10YR4/6褐色 細砂～中砂混シルト（10YR4/4 褐色 細砂～中砂混シルトが粒～小ブロック状に20%含む、φ1cmまでの礫若干含む、ややしまり弱い）
 24 10YR3/4暗褐色 中砂混シルト（10YR4/6 褐色 中砂混シルトをブロック状に含む、しまり弱い、根か？）
 25 7.5YR5/6明褐色 細砂混シルト（10YR3/4 暗褐色 中砂混シルトを粒～小ブロック状に5%含む、地山破碎礫若干含む）
 26 10YR5/2灰黄褐色 細砂～中砂混シルト（7.5YR4/3 褐色 中砂混シルト（マンガン粒含む）を粒～小ブロック状に50%含む、φ5cmまでの岩塊若干含む）
 27 10YR4/1褐灰色 中砂～粗砂混シルト（10YR3/3 暗褐色 中砂～粗砂混シルトを粒～小ブロック状に10%含む、φ10cmまでの岩塊やや含む、須恵器、土師器片出土）
 28 17より粒～ブロックが30～50%程度に多くなる
 29 10YR3/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（中礫若干含む、炭化物わずかに含む）
 30 10YR4/1褐灰色 中砂～粗砂混シルト（砂多め、細礫若干含む、炭化物わずかに含む）
 31 2.5Y3/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（炭化物若干含む、中礫やや多く含む）
 32 2.5Y2/1黒色 砂質シルト（有機物多量に含む）
 33 10YR3/1黒褐色 中砂～粗砂混シルト
 34 10YR2/2黒褐色 細砂～中砂混シルト（粗砂～細礫多く含む、炭化物多く含む）
 35 10YR2/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（未分解有機物若干含む、細礫若干含む）
 36 10YR3/1黒褐色 中砂～粗砂混シルト（砂多め、中礫若干含む）
 37 10YR3/3暗褐色 シルト混粗砂（10YR2/2 黒褐色 細砂～中砂混シルトをラミナ状に含む）
 38 10YR2/2黒褐色有機質 シルト（有機物多量に含む、下層は若干色が薄く、有機質が少ない）
 39 10YR3/1黒褐色 中砂混シルト（下層は10YR2/1黒色 中砂混シルト、中礫若干含む）
 40 2.5Y3/2黒褐色～2.5Y4/1黄灰色 シルト混中砂～粗砂（10YR5/2 灰黄褐色 シルト混中砂～粗砂を塊状に（φ1～2cm）20%含む、炭化物若干含む）
 41 10YR3/1黒褐色 中砂～粗砂混シルト
 42 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト（φ0.3～1cmの礫（地山破碎）多く含む、10YR3/1黒褐色 細砂混シルトを小ブロック状に5%含む）
 43 10YR5/2灰黄褐色 細砂～中砂混シルト（27層を厚さ1～5cmの層状に含む）
 44 10YR4/2灰黄褐色 細砂～中砂混シルト（地山由来の礫（φ1cm）を含む）
 45 10YR3/2黒褐色 細砂～中砂混シルト（有機物若干含む）
 46 10YR3/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（粗砂を多量に含む、有機質やや多く含む、炭化物わずかに含む）
 47 10YR3/1黒褐色 中砂～粗砂混シルト（砂多め、細～中礫若干含む）
 48 10YR3/1黒褐色～10YR2/1 黒色 有機質 シルト（未分解有機物多量に含む）
 49 7.5YR3/1黒褐色 シルト混粗砂（有機物多量に含む）
 50 10YR5/8黄褐色 シルト混細砂～中砂、（細礫～中礫細砂～中砂混シルトをブロック状～小粒状に10%含む）
 51 10YR6/6明黄褐色 シルト混細砂～中砂（シルト少なめ、細礫～中礫多く、1cmまでの角礫若干含む、10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルトをブロック状に（斑に）10%含む）
 52 7.5YR5/6明褐色 シルト混細砂～中砂（シルト多い、細礫～中礫（上層は少ない）多く含む、①-4層に対応）
 52' シルトと砂が逆転し、やや明るい
 53-1 5Y6/2灰オリーブ色 細砂わずかに混極細砂～砂質シルト、谷下方はグライ化する
 53-2 7.5YR5/8明褐色（あざやか） シルト混細砂～粗砂（細礫～中礫多量に含む）
 53-3 2.5Y7/2灰黄色 シルト混細砂～粗砂（シルト多め）
 53-4 7.5YR5/8明褐色（あざやか） シルト混細砂～粗砂（細礫～中礫多量に含む）と7.5YR5/6明褐色（ややくすんだ色）細砂わずかに混シルトの互層
 53-5 2.5Y7/2灰黄色 シルト混細砂～粗砂（シルト多め）と7.5YR5/6明褐色（ややくすんだ色）細砂わずかに混シルトの互層
 53-6 7.5YR5/6明褐色（ややくすんだ色）細砂わずかに混シルトに7.5YR5/8明褐色（あざやか） シルト混細砂～粗砂（細礫～中礫多量に含む）をレンズ状～ブロック状に50%含む
 53-7 2.5Y7/2灰黄色 シルト混細砂～粗砂（シルト多め）と7.5YR5/6明褐色（ややくすんだ色）細砂わずかに混シルトの互層に7.5YR5/8明褐色（あざやか） シルト混細砂～粗砂（細礫～中礫多量に含む）を厚い層状～ブロック状に20%含む
 53-8 5Y6/2灰オリーブ色 細砂わずかに混極細砂～砂質シルトに5Y7/2灰白色 シルト混細砂～粗砂（シルト多め）をブロック状に30%、7.5YR5/8明褐色（あざやか） シルト混細砂～粗砂（細礫～中礫多量に含む）を厚い層状に20%含む
 53-9 2.5Y7/2灰黄色 シルト混細砂～粗砂（シルト多め）、下面に7.5YR5/8明褐色（あざやか） シルト混細砂～粗砂（細礫～中礫多量に含む）を厚い層状に20%含む、谷下方ではグライ化する

第IV章 調査の成果

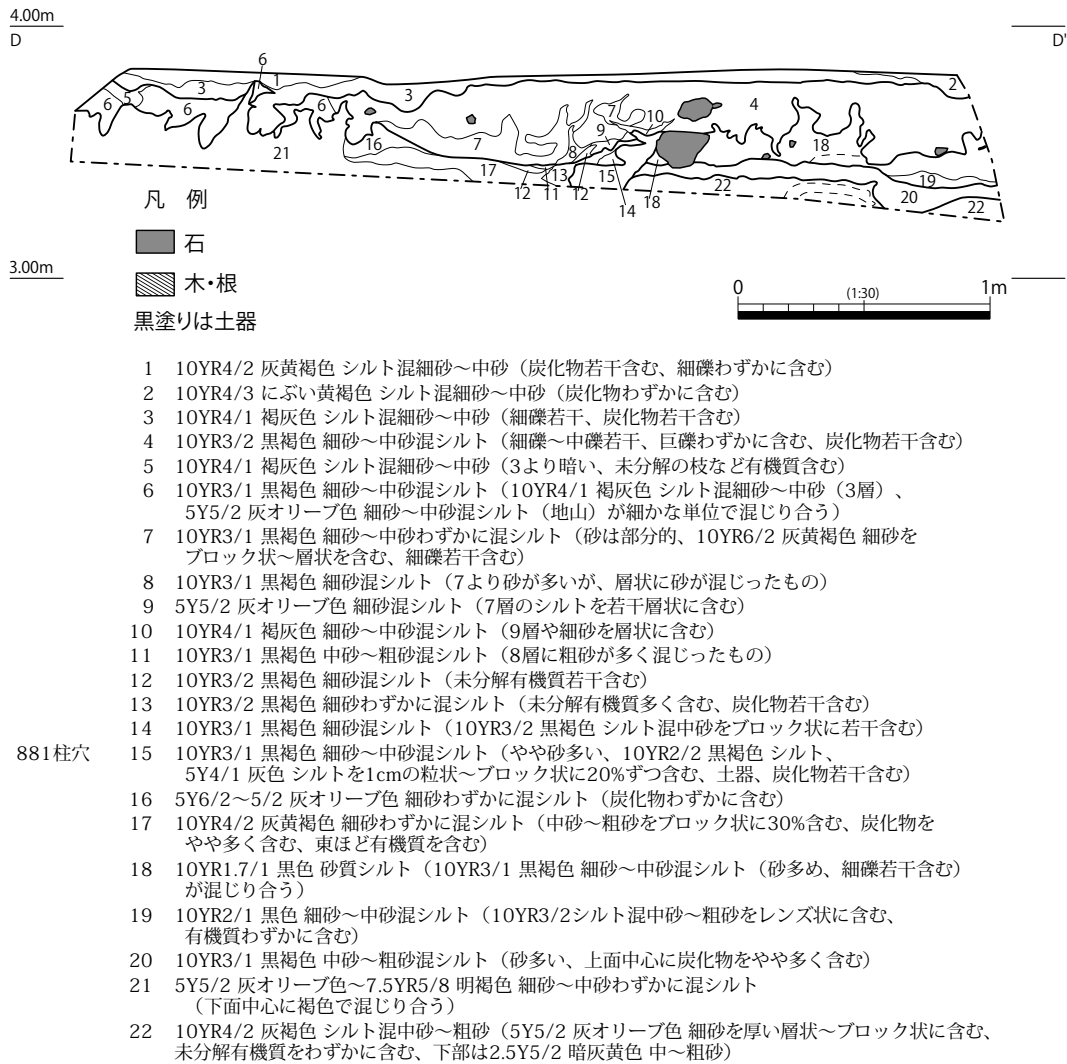
- 54 10YR5/6黄褐色 シルト混細砂～粗砂（シルト多め、細礫～中礫多量に含む、部分的(上面)に10YR6/8明黄褐色、シルトが多くなる)
- 55 10YR3/2黒褐色 シルト混中砂～粗砂（シルト多い、7.5YR5/6 明褐色 中砂混シルトを粒～小ブロック状に40%含む、下層は2.5Y3/1 黒褐色 中砂～粗砂混シルト含む）
- 56 10YR5/2灰黄褐色 中砂～粗砂混シルト（下層は2.5Y4/1 黄灰色 シルトが層状に存在、1cm角の炭化物含む）
- 57 10YR2/1黒色 中砂～粗砂混シルト（巨大な岩塊2点、5cmまでの岩塊若干含む、下方に2.5Y3/2 黒褐色の部分あり）
- 58 10YR4/2灰黄褐色 中砂混シルト（5YR4/6 赤褐色 中砂混シルトをラミナ状に含む、炭化物わずかに含む）
- 59 2.5Y3/2黒褐色 シルト混粗砂（シルト分多め、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト混粗砂を粒～小ブロック状に60%含む、岩塊含む）
- 60 10YR4/4褐色 細砂～粗砂多量に混シルト。（細礫～中礫多量に含む、地山由来の黄褐色系の大粒を含む）
- 61 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト（粗砂～中礫多く含む、φ5cmまでの角～垂角礫多量に含む）
- 62 10YR3/2黒褐色～10YR3/3 暗褐色 中砂～粗砂（地山破碎礫わずかに含む）
- 63 2.5Y3/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（10YR3/1 黒褐色 粗砂～細礫混シルト30%含む、φ2cmまでの黄色礫（地山由来）若干含む、土器あり）
- 64 2.5Y3/2黒褐色 中砂～粗砂混シルト（φ2cm～0.5cmの黄色礫（10YR6/8 明黄褐色で代表）を50%含む）
- 65 10YR3/2黒褐色 細砂～粗砂混シルト（砂多め、岩塊含む、下方では砂が多く混じる）
- 66 10YR1.7/1黒色 細砂～粗砂混シルト（φ3cm～1cmの黄色礫（地山由来）若干含む）
- 67 5Y3/1オリーブ黒色 中砂～粗砂混シルト（砂多い、2.5YR3/2 黒褐色 シルト混中砂～粗砂を粒～小ブロック状に40%含む）
- 68 10YR4/2灰黄褐色 シルト混粗砂
- 69 10YR4/2灰黄褐色～10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト混中砂～粗砂（10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト混細礫、10YR3/2 黒褐色 シルト混粗砂を粒状にわずかに含む）
- 70 10YR6/3にぶい黄褐色 シルト（10YR5/2 灰黄褐色 中砂～粗砂(砂少なめ)シルトを粒～小ブロック状に40%含む、南方(谷下方)は2.5Y2/1 黒色 砂混シルトを粒～小ブロック状に10%含む）
- 71 2.5Y3/1黒褐色 シルト（2.5Y3/2 黒褐色 シルト混粗砂を粒～小ブロック状に50%含む）
- 72 10YR5/6黄褐色 細砂～中砂混シルト（10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂混シルトを粒～小ブロック状に20%含む、下では砂が多く混じる）
- 73 2.5Y3/1黒褐色 シルト混中砂～粗砂（2.5Y3/2 黒褐色 シルト混中砂～粗砂を粒～小ブロック状に20%含む）
- 74 2.5Y2/1黒色 シルト混粗砂（上層）、2.5Y3/1 黒褐色 シルト混中砂～粗砂（下層）
- 75 5Y2/1黒色 細砂～中砂混有機質シルト（未分解有機質多く含む、下層は5Y2/2 オリーブ黒色、点線より南は2.5Y4/1 黄灰色まで色が薄くなる、炭化物含む）
- 76 10YR4/1褐色 中砂～粗砂混シルト（10YR5/2 灰黄褐色 粗砂ブロック含む）
- 77 10YR4/1褐色 シルト混粗砂（2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混シルトを粒～小ブロック状に50%含む）
- 78 5Y2/1黒色 細砂混シルト（未分解有機物含む、2.5Y3/1 黒褐色 シルト混中砂を粒～小ブロック状に20%含む、炭化物含む）
- 79 10YR4/1褐色 シルト
- 80 10YR5/2灰黄褐色 シルト混中砂～粗砂
- 81 10YR4/2灰黄褐色 シルト混粗砂～細礫（黄色礫(φ0.5～1cm)若干含む、2.5YR3/2 黒褐色 シルト混中砂～粗砂を0.5cmの層状に含む）
- 82 10YR3/2黒褐色 細砂混シルト（砂多め、10YR4/2 灰黄褐色 シルト混中砂～粗砂を粒～小ブロック状に20%含む、炭化物若干含む）
- 83 5Y2/1黒色 シルト混中砂～粗砂
- 84 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト混粗砂（2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混シルト、2.5Y4/1 黄灰色 シルト混粗砂を厚さ0.5cmの層状に含む）
- 85 2.5Y5/2暗灰黄色 細砂～中砂混シルト
- 86 10YR7/2にぶい黄褐色 シルト混粗砂（10YR4/2 灰黄褐色 中砂～粗砂混シルトを大ブロック状に30%含む、有機物、炭化物若干含む）
- 87 10YR3/1黒褐色 中砂混シルト（砂多め、上部は部分的に10YR4/2灰黄褐色を呈する）
- 88 10YR4/1褐色 中砂～粗砂混シルト（10YR4/2灰黄褐色 中砂～粗砂混シルトを厚さ1cmの層状に含む）
- 89 2.5Y2/1黒色 シルト混粗砂～細礫（φ0.5cmの礫わずかに含む）
- 90 2.5Y2/1黒色（9より色が若干薄い）シルト混粗砂～細礫
- 91 10YR3/2黒褐色 中砂混有機質シルト（未分解有機質多く含む、炭化物、粗砂若干含む）
- 92 10YR3/1黒褐色 細砂～中砂混シルト（砂多め、未分解有機物やや多く含む）
- 93 10YR1.7/1黒色～10YR2/1 黒色 有機質シルト（有機質多量に含む）
- 94 10YR1.7/1黒色 細砂～中砂混シルト（φ2cmの礫（黄色）若干含む、南にいくほど有機質多くなる）
- 95 2.5Y2/1黒色 細砂～粗砂混シルト（同色シルト混中砂～粗砂を厚さ1cmの層状に含む）
- 96 2.5Y3/2黒褐色 細砂～中砂混シルト（地山由来の礫（φ1cm）を若干含む）
- 97 10YR3/1.5（1と2の中間）黒褐色 中砂～粗砂混シルト（35層（10YR5/3にぶい黄褐色 中砂混シルト）をブロック状に30%含む、地山由来の礫（φ2cm）を10%含む）
- 98 10YR3/1黒褐色 中砂～粗砂混シルト（地山由来の礫（φ1cm）を多く含む、炭化物若干含む、上面は10YR4/1褐色 シルト混中砂～粗砂を粒～小ブロック状に20%含む）
- 99 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂～粗砂混シルトを代表とする10YR5/1 褐色 シルト混中砂～粗砂（シルト多い）、φ2～1cmの礫（地山由来）を上面ほど多く(50%)含む、10YR3/1 黒褐色細砂混シルトを粒状～ブロック状に若干含む）
- 100 10YR2/1黒色と10YR3/1黒褐色の中間 中砂～粗砂混シルト
- 101 2.5Y2/1黒色 細砂～粗砂混シルト
- 102 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト混粗砂（噴砂か）
- 103 10YR5/2灰黄褐色～10YR5/4にぶい黄褐色 シルト混粗砂（2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂混シルトを2cmの層状に含む、炭化物わずかに含む）
- 104 7.5YR6/8橙色 粗砂～中礫（未分解有機物含む）

754土坑



- | | | |
|------------|------|--|
| 攪乱根 | 1 | 10YR4/3にぶい黄褐色シルト混細砂～中砂(10YR3/3暗褐色細砂～中砂混シルトをブロック状に20%含む、炭化物若干含む) |
| | 2 | 7.5YR3/4暗褐色細砂～中砂混シルト(しまり弱い) |
| | 3 | 10YR3/4暗褐色細砂～中砂混シルト(10YR4/3にぶい黄褐色中砂混シルト(砂多め)をブロック状に30%含む、炭化物やや多く含む、鉄分沈着) |
| | 4 | 10YR3/3暗褐色シルト混細砂～中砂(地山破砕礫を若干含む) |
| | 5 | 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～中砂混シルト(10YR3/3暗褐色細砂～中砂混シルトをブロック状に10%含む、炭化物(やや大きめ)をやや多く含む、鉄分沈着) |
| | 6 | 10YR3/1黒褐色細砂混シルト(10YR4/3にぶい黄褐色細砂～中砂混シルトをブロック状に40%含む) |
| | 7 | 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～中砂混シルト(礫を多く含む、土器、炭化物を若干含む) |
| | 8 | 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～中砂混シルト(鉄分沈着著しい、炭化物若干含む、土器片含む、礫を若干(8よりもかなり少なめ)含む) |
| | 9 | 10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂混シルト(砂多め、鉄分沈着、土器片含む、炭化物やや多く含む) |
| | 10 | 10YR4/1褐灰色シルト混細砂～中砂(シルト分多い、礫を若干含む) |
| 512ピット | 11 | 10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂混シルト(地山破砕礫若干含む、炭化物わずかに含む) |
| | 12 | 10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂混シルト(地山ブロック(砂質系、φ2~5cm)を60%含む、炭化物若干含む、鉄分沈着) |
| | 13 | 10YR4/2灰黄褐色細砂～中砂混シルト(北へいくほどブロックが少なくなる、鉄分沈着) |
| | 14 | 7.5YR4/1褐灰色細砂わずかに混シルト(10YR4/4褐色細砂混シルトをブロック状に30%含む、鉄分沈着) |
| 916ピット | 15 | 10YR3/2黒褐色細砂わずかに混シルト(土器片含む) |
| | 16 | 10YR4/3にぶい黄褐色細砂わずかに混シルト(粗砂～細礫が混じる、7.5YR4/4褐色(地山)細砂混シルトブロックが下部に混じる) |
| 560溝 | 17 | 10YR3/2黒褐色細砂～中砂わずかに混シルト(地山破砕礫わずかに含む、微細炭化物、土器片わずかに含む) |
| 313柱穴 | 18-1 | 10YR4/2灰黄褐色(やや暗い)細砂～中砂混シルト(砂多い、粗砂～細礫多く含む、地山ブロック(大)を60%含む、炭化物わずかに含む) |
| 313柱穴(住痕跡) | 18-2 | 10YR4/2灰黄褐色(やや褐色)細砂わずかに混極細砂～砂質シルト(下面に黒色有機物、上部にも有機物を多く含む、地山を薄いレンズ状～層状に5%含む、10YR4/3にぶい黄褐色シルト混極細砂～細砂をブロック状に20%含む、しまり弱い) |
| | 18-3 | 10YR4/3にぶい黄褐色(赤みあり)細砂～中砂混シルト(砂少なめ、粗砂、細礫若干含む、地山ブロックを30%含む、炭化物やや多く含む) |
| | 18-4 | 10YR5/1褐灰色シルト混極細砂(地山ブロック80%含む、むき割れたもので地山かも) |
| | 18-5 | 10YR4/2灰黄褐色(やや暗い)細砂混シルト(粗砂わずかに含む)(地山ブロック(小)～粒状に50%含む) |
| | 18-6 | 10YR4/2灰黄褐色(やや明るめ)細砂混シルト(地山ブロックを60%含む) |
| | 19 | 10YR4/2灰黄褐色細砂わずかに混シルト(地山ブロック(シルト系)10%、(砂系)10%含む、炭化物多く含む) |
| | 20 | 10YR5/3にぶい黄褐色細砂混シルト(砂多め、地山ブロック(砂系)を60%含む) |
| 296柱穴 | 21 | 10YR3/2黒褐色細砂混シルト(粒状の地山(2cm程度)を10%含む、炭化物若干含む、中礫わずかに含む、しまりやや弱い) |
| 299ピット | 22 | 7.5YR3/2黒褐色シルト(微細炭化物わずかに含む) |
| 旧表土 | 23 | 10YR4/6褐色シルト(10YR4/3にぶい黄褐色シルト混細砂～中砂を礫状に5%含む、炭化物わずかに含む、小礫わずかに含む) |
| 地山? | 24 | 10YR5/3にぶい黄褐色細砂混シルト(砂多め、10YR4/6褐色シルト混細砂～中砂をブロック状に含む) |
| 地山 | 25 | 7.5YR4/6褐色(上位)シルト、7.5YR5/4にぶい黄褐色シルト(中位)、7.5YR5/3にぶい褐色砂質シルト(下位) |

第21図 2区 神社隣壁土層断面図

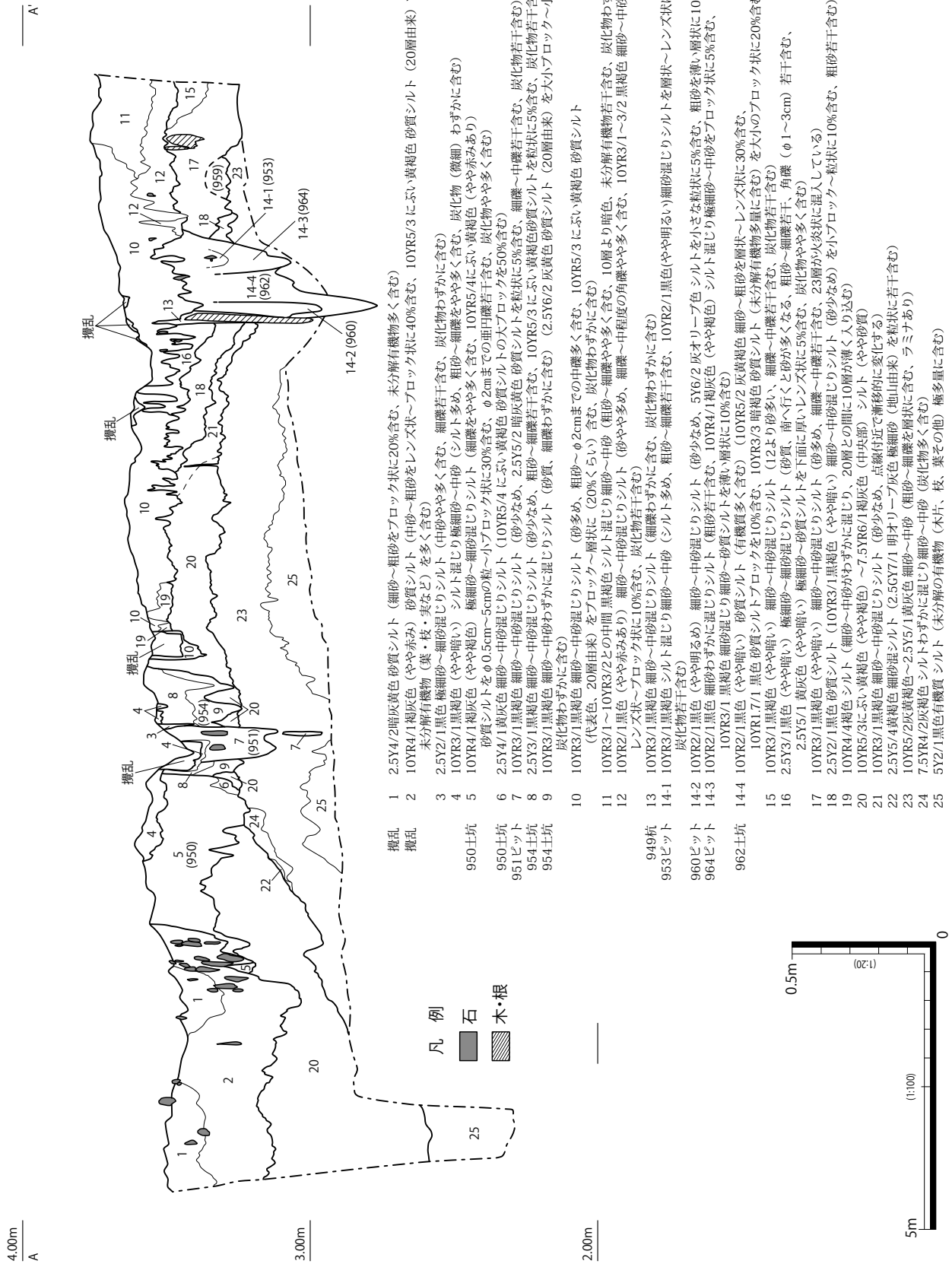


第 22 図 2 区 トレンチ 3 土層断面図

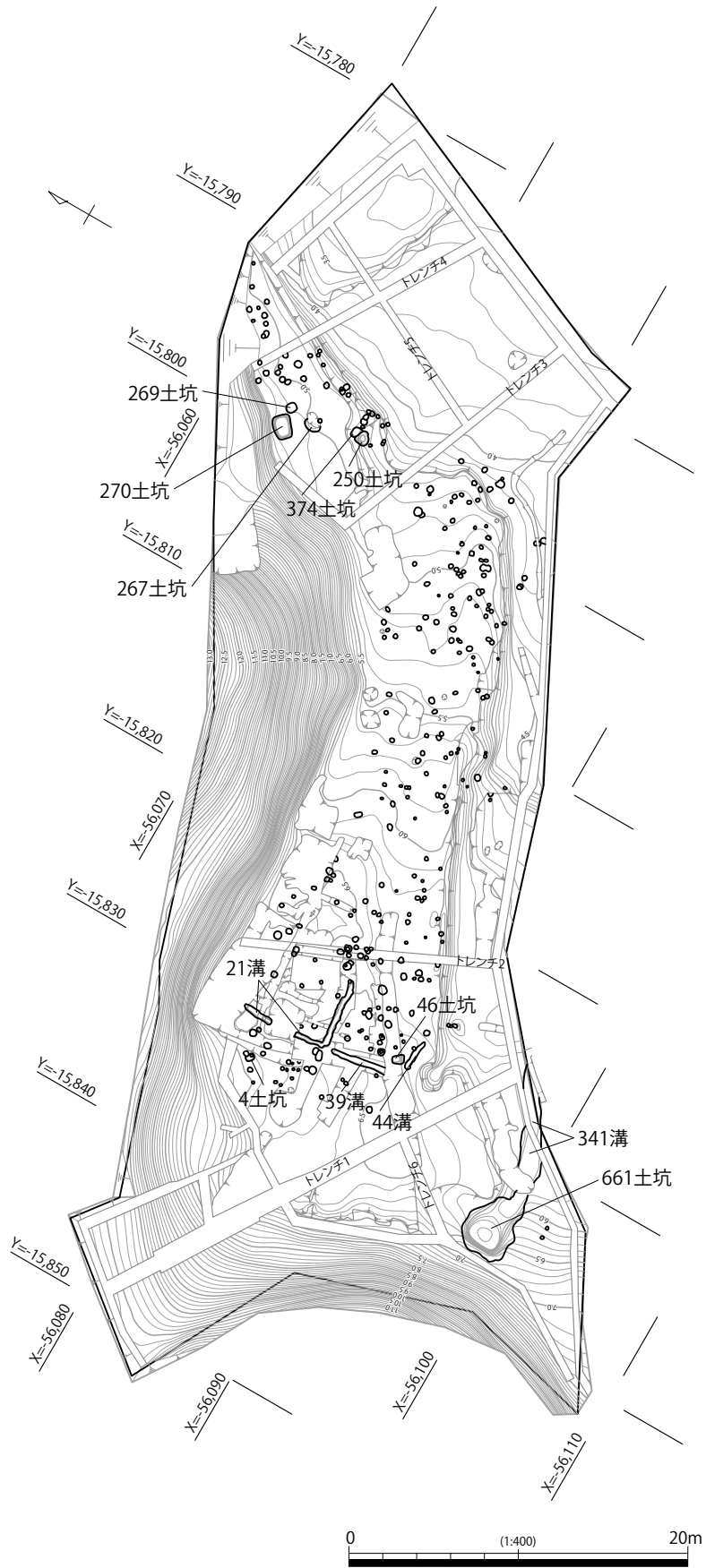
た。この盛土を重機で除去した後、トレンチ 3 および 4 を設定したほか、調査区周辺に掘削した側溝を利用し、土層堆積状況の確認を行った。また、中央部から続く平坦部上段は $Y = -15,796$ 以東は後述するとおり後世の削平により 0.5m ほどの段差をもって下がっている。この段差を境に、上段と下段とに分けて記述する（第 16 図）。

神社境内からつながる上段部分は、厚く堆積した 3 層の下面から近世初頭に位置づけられるほぼ完形の土師皿が出土している。近世前半に大きく地形の改変を受けているようで、あるいは神社の建設に伴う整地層かもしれない。同様に 4～6 層も改変に伴うもので、その下に改変前の旧表土と考えられる 7 層があり、その下層は 12 層まではほぼ水平な堆積が認められた。上段部分では、この 12 層までを除去した 33 層の上面でピット群を検出した（第 1 面）。この後、33 層を除去した下面で非常に多くの遺構を確認した。しかし、溝、柱穴、ピットが多数切り合った状態であり、地山がブロック状に含まれる埋土は掘方内外の区別を非常に困難なものとしており、多くの遺構は最終的に地山上面（第 2 面）での確認となった。

下段部分は前述のとおり厚く土が盛られていたが、その土を除去すると黒褐色砂混シルト（23～24 層）が堆積しており、下面には下層のシルト層（50 層）が火炎状に入り込んでいた。この上面で多数のピットおよび柱穴、土坑や土坑状変形を検出している。また、北端は盛り土以前の攪乱で大き



第23図 2区 調査区東壁土層断面図



第24図 2区 第1面平面図

く削平されていた。50層は大きく削平されていたようで、掘立柱建物1の柱穴の深さと残存状況からすると0.8m近く削平された可能性がある。23～24層には古代～中世の遺物が含まれており、比較的新しい段階で削平が行われたと考えられる。トレンチ4以北では直線的に削平されていた。

下段部分では、4トレンチで下層確認を行っており、50層の下に薄いシルト層を挟み粗砂～細礫層(52層)が存在しており、上面には炭化物が多数含まれていた。この52層は調査区東端の断面では、3区から続いているものの、北端までは続かずに消えてしまう。さらに下には未分解有機物を多量に含むシルト層や極細砂、細砂層が1m近く堆積していた(53～63層)。下層ほど分解が進む傾向にあるが、下層でも部分的にほとんど分解されていない状態の有機物が含まれる。なお、これらの有機物層からは遺物は出土していない。64層はこれらの堆積に下層から入り込んでいる状況が確認でき、噴砂の可能性が考えられる。

3 検出した遺構

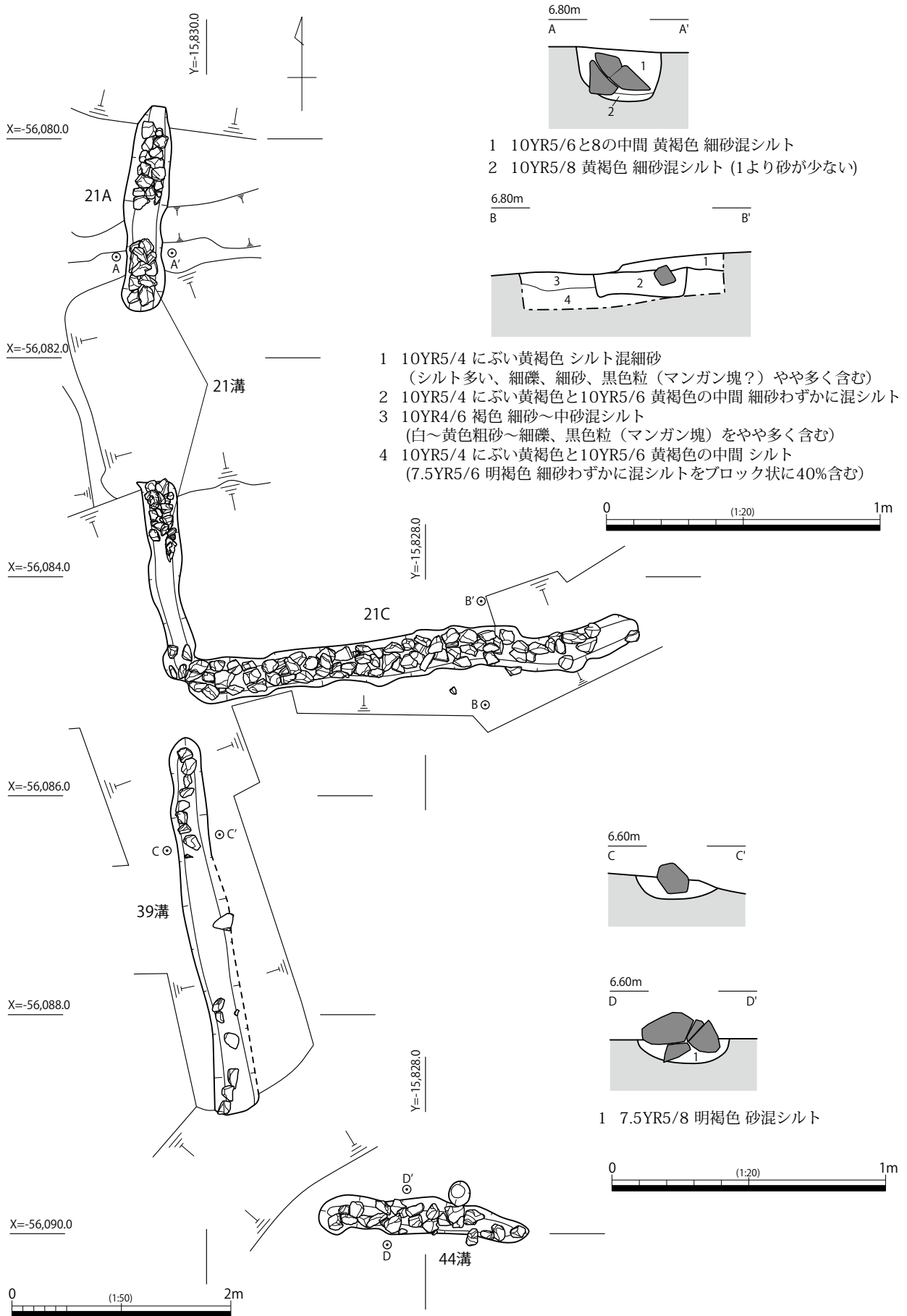
(1) 第1面(第24～29図、PL. 6～9)

第1面では、中央部から東部にかけての平坦面部上で溝4条、土坑8基、柱穴52基、ピット235基を検出した。柱穴は柱痕跡を残すものであるが、建築物などの復元はできていない。また、ピットは大半が単層の埋土で、時期を示す遺物が出土したものも少ない。柱穴およびピットについては、法量や出土遺物を第4表にまとめており、ここでは特徴的なものについてのみ記述する。

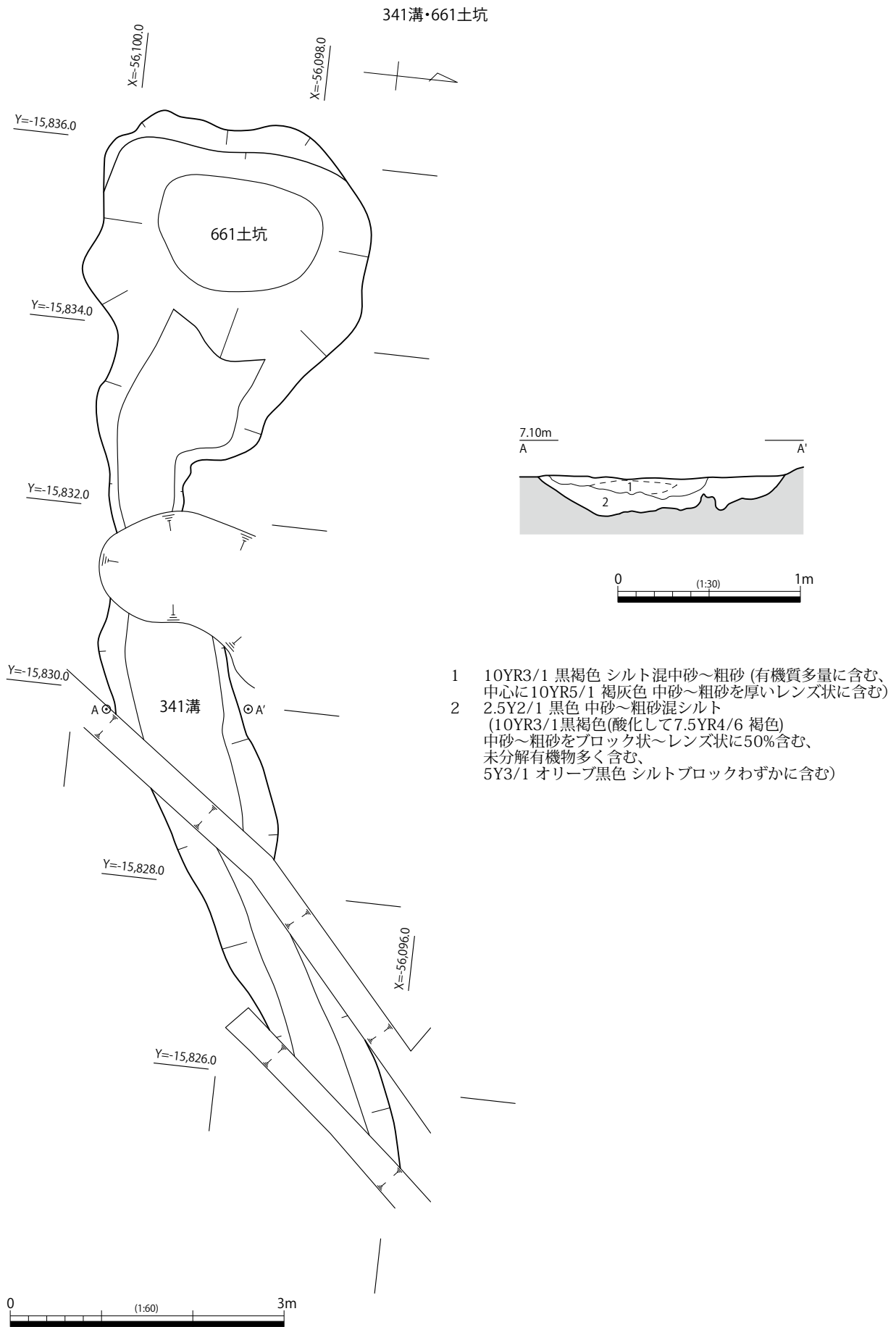
21溝、39溝、44溝は中央部西よりで検出した(第25図)。南北方向に連なる21A・B溝と39溝、それに直交する21C溝と44溝からなる。後世の攪乱によりかなり削平されて北辺と西辺の状況は不明だが、元々一体のもので、「日」字状に存在したと考えられる。北端は攪乱で削られているが、斜面の傾斜から長く続くとは考えにくく、残存部端からさほど伸びないと考えられる。44溝を南端とし、21C溝が中央となる南北9.2m、東西4.3m分を確認できた。溝は最大幅0.4m、深さ0.2m、断面形はU字型もしくは逆台形を呈する。内部には拳大から0.2m程の角礫が入っていた。残りのよい21A、C溝では、掘方に沿って2列に礫を並べ、その列間を塞ぐ様に角礫を並べている状況が確認できた。礫間には流水の痕跡が確認できず、埋土も掘った土で埋め戻している状況が確認できた。溝内に流水の痕跡がないことから、建物の布掘基礎であった可能性が考えられる。溝内から遺物は出土しておらず時期は明らかではない。

661土坑は調査区南西部に位置し、西側から張り出す丘陵の裾部に位置する不整形の土坑である(第26・27図)。第2面の遺構として当初は認識していたが、南東に西側へ伸びる341溝がとりつき、一体のものと考えられることから第1面の遺構とした。

土坑は、長軸3.0m、短軸2.6m、深さ0.7mを測り、断面は隅丸逆台形を呈する。埋土は8層に分けられ、いずれも未分解有機質を多く含む。上層と下層には砂層や砂を多く含むシルト層が堆積しており、周囲から流れ込んだ状況を示す。中層～下層にかけて黒褐色シルト層(5層)が厚く堆積しており、この中央付近からこけら経(第169図W51)が1点出土している。341溝の連結部分は幅2.0m、深さ0.5mで断面は皿状を呈し、この部分には礫が集中して確認できた。礫は土坑に一番近い部分に長辺0.6m、短辺0.4m、厚さ0.2m程の巨礫2点を並べ、土坑側に落ちないように下に拳大～人頭大の礫を入れている。この部分から341溝にかけて長さ2.0mにわたり礫が存在したが、面的に存在するのではなく粗密がある。とくに巨礫より0.5m東側では溝底に拳大の礫を置き、その上に最大0.5mほどの礫を

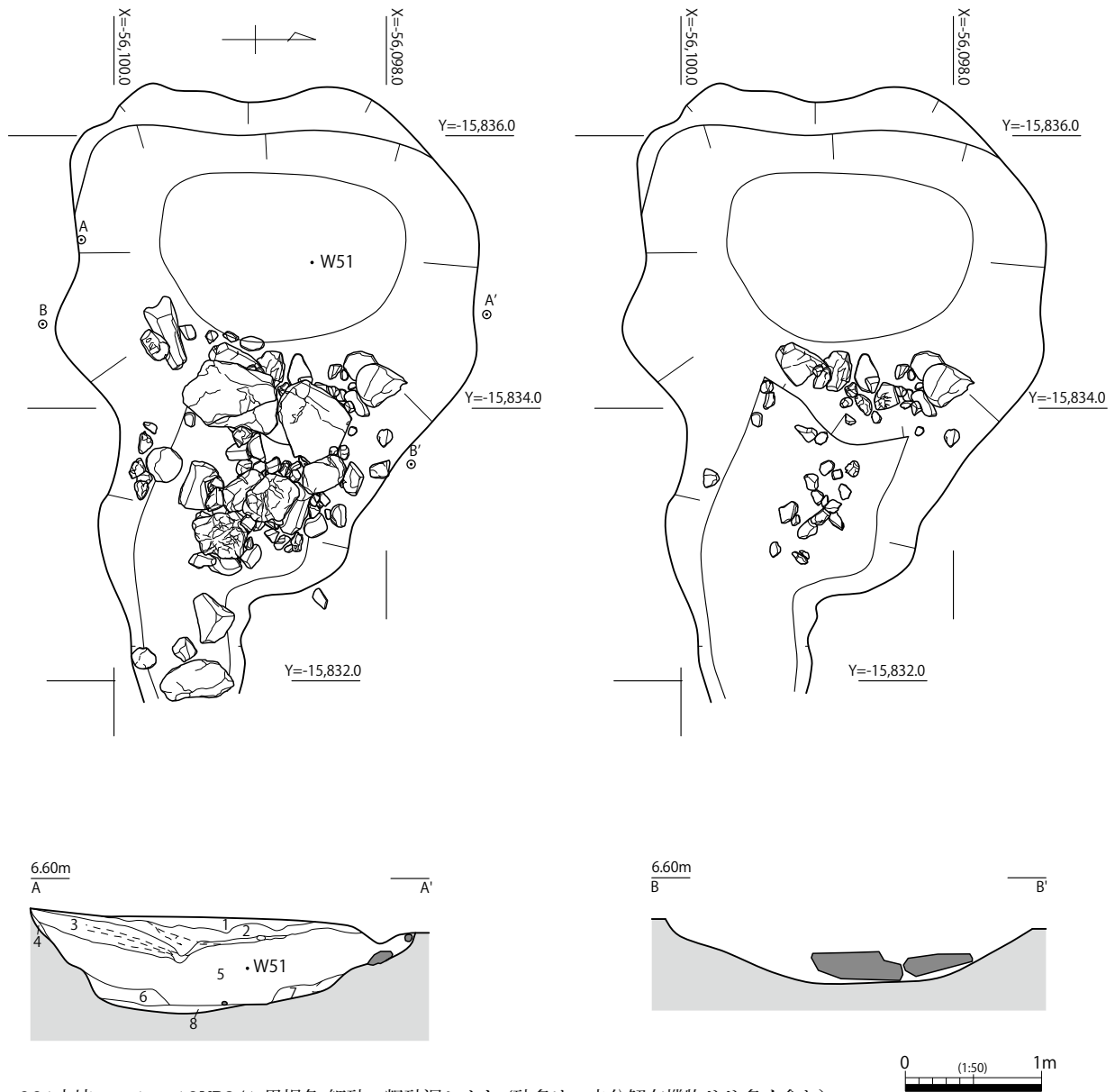


第25図 2区 21溝、39溝、44溝平面図・断面図



第26図 2区 661土坑・341溝平面図・断面図

第IV章 調査の成果



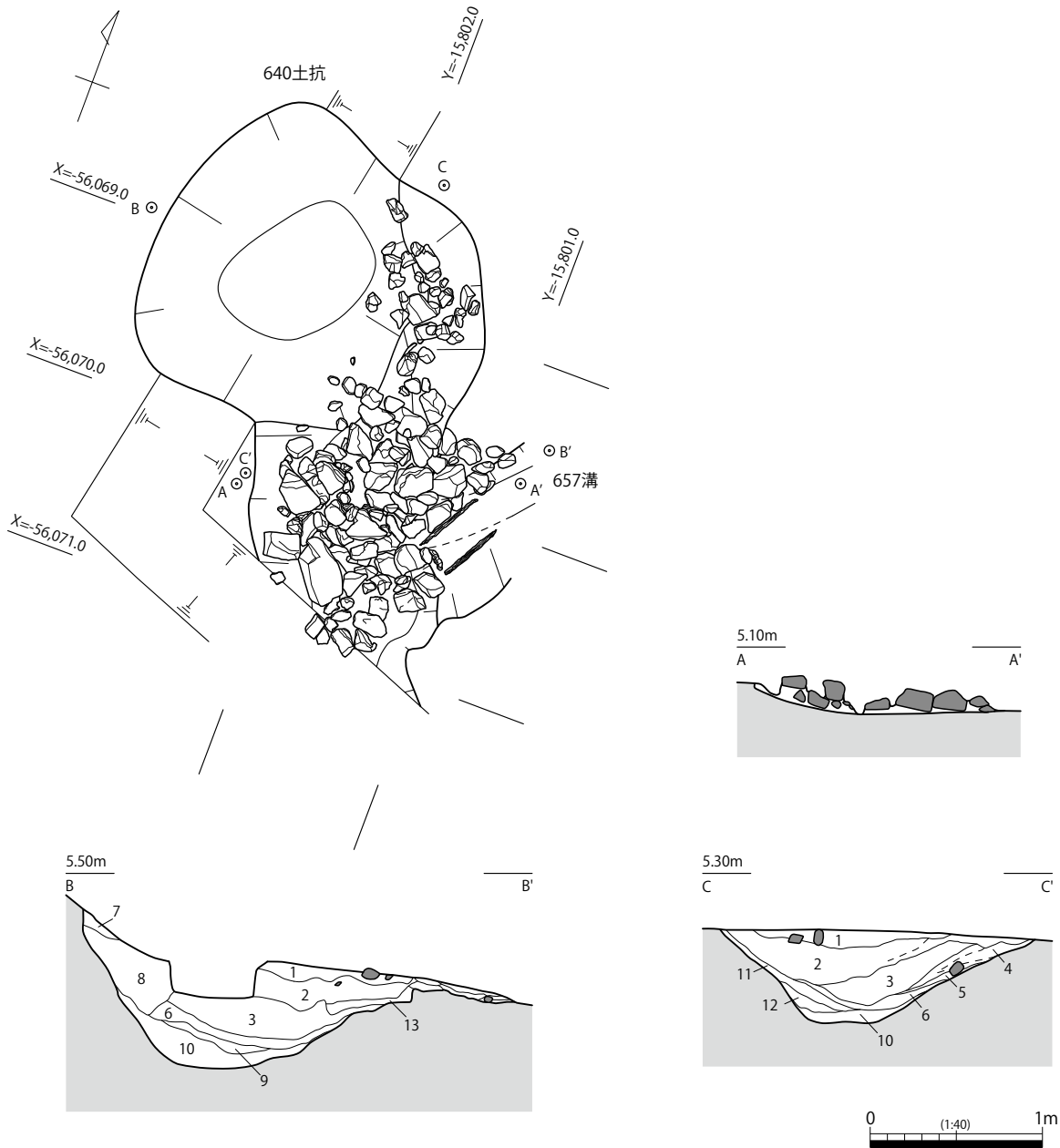
- 661土坑
- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混シルト (砂多め、未分解有機物やや多く含む)
 - 2 10YR2/3 黒褐色 有機質シルト
(上層ほど有機物多く泥炭様となる、2.5Y3/1 黒褐色 シルト混中砂～粗砂をレンズ状に含む)
 - 3 10YR5/2 灰黄褐色 中砂～粗砂 (うすい層状に、中央はブロックで10YR3/1 黒褐色 シルト (未分解有機物若干含む) を含む、2.5Y3/1 黒褐色 砂混シルトブロックを含む)
 - 4 10YR5/2 灰黄褐色 シルトわずかに混中砂～粗砂 (シルトをうすい層状に含む)
 - 5 2.5Y3/2 黒褐色 シルト
(やや砂質、未分解有機物多く含む、側面ではうすい層状に中砂～粗砂を含む、木簡 (こけら経) 包含)
 - 6 2.5Y4/1 黄灰色 シルト混中砂～粗砂 (上面に未分解有機物若干含む)
 - 7 2.5Y3/1 黒褐色 細砂混シルト
(未分解有機物若干含む、10YR4/2 灰黄褐色 シルト混粗砂を厚いレンズ状に含む)
 - 8 2.5Y3/2 黒褐色 中砂～粗砂わずかに混シルト (未分解有機物ごく多量に含む)

第 27 図 2 区 661 土坑平面図、断面図 (石積上層・下層)

数段積み重ねた様子が観察できた。こうした積み重ねた状況は先述の巨礫上には見られなかった。

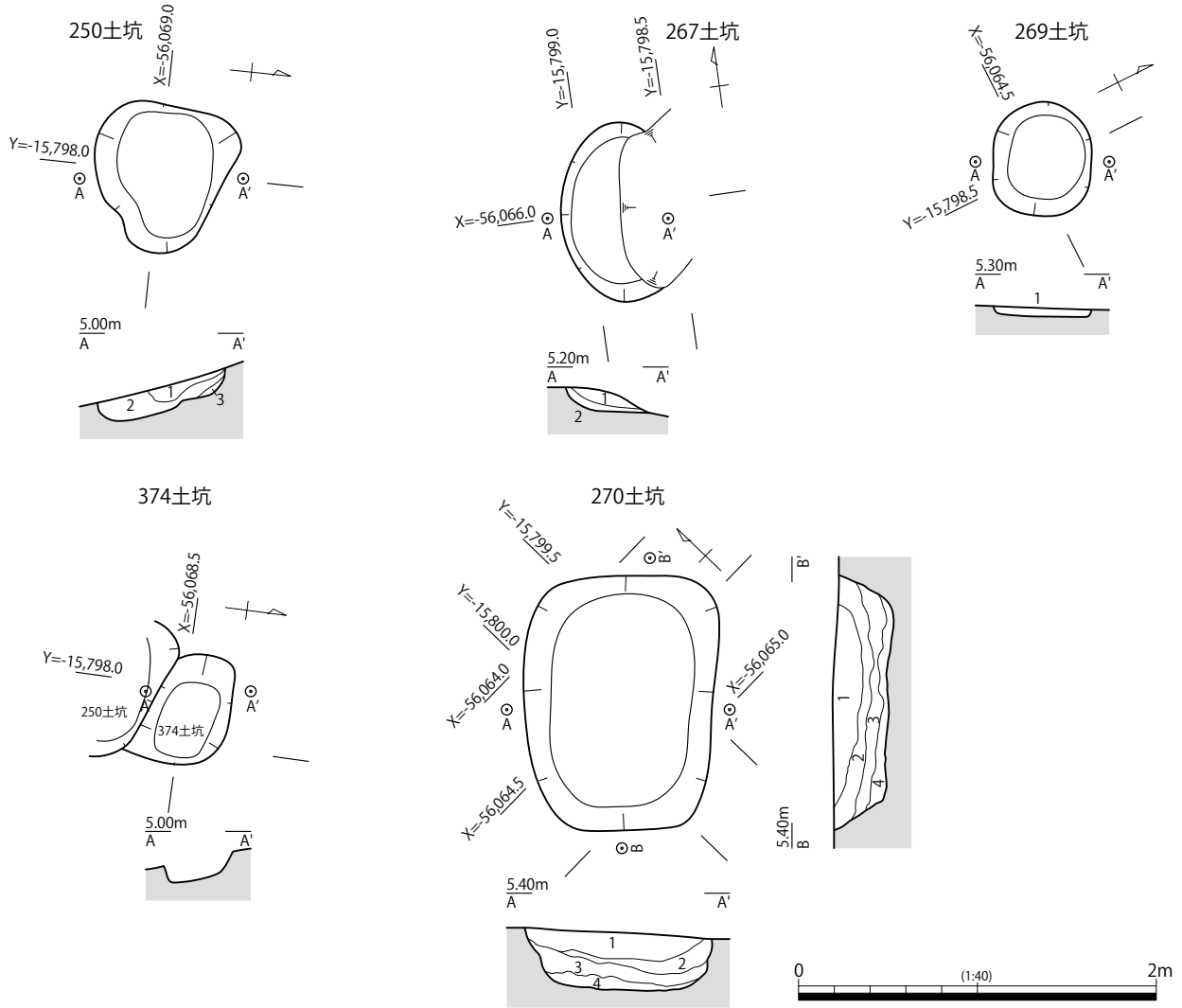
341 溝は、最大幅 1.3m、深さ 0.2m を測り、断面は逆台形に近い形状を呈す。全長 10m にわたり検出しており、概ね直線的に 3 区にまで伸びていたが、先端は暗渠によって切られており、もともとの規模は明らかではない。溝底の標高から、西から東へ水が流れていたようである。埋土は細砂～粗砂を中心とし、未分解有機物を多く含む。

661 土坑は谷に挟まれた丘陵裾部に位置することから湧水や谷の水を集めるのに有利な位置にあ



- 640土坑
- 1 10YR6/2 灰黄褐色 シルトわずかに混細～中砂（ ϕ 0.5～1cmの垂角～角礫若干含む）
 - 2 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト混細砂～中砂
（1よりシルト多め、7.5YR～10YR8/2 灰白色 細～中砂、10YR6/2 灰黄褐色 シルト、10YR5/2 灰黄褐色 シルト混細砂（シルト少ない）などを ϕ 0.5～1cmの粒状に30%含む（下半中心））
 - 3 5Y4/1 灰色 シルト混細砂～中砂（2よりシルト多い、2.5Y6/2 灰黄色 極細砂～細砂の小ブロック～粒（ ϕ 0.5～2cm）を5%含む、細礫若干含む、未分解有機物若干含む）
 - 4 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂～砂質シルト（未分解有機物多量に含む、10YR4/2 灰黄褐色（やや褐色）シルト混細～粗砂（未分解有機物やや多く含む）を厚い層状に含む、砂は上部では厚くなる）
 - 5 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混極細砂～細砂（未分解有機物（枝・木など）を多く含む）
 - 6 10YR2/3 黒褐色有機物シルト（未分解有機物極多量に含む、2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混細～中砂（未分解有機物多く含む）を厚いレンズ状に5%含む）
 - 7 10YR6/4 にぶい黄橙色と6/6 明黄褐色の間 シルトわずかに混細砂～中砂（細～中礫やや多く含む）
 - 8 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト混細砂
（シルト少なめ、7より多く含む、細～中礫多く含む、上部は地山由来の岩塊を多く含む、鉄分沈着）
 - 9 2.5Y4/1 黄灰色（やや暗い） 細～中砂混シルト（砂多め、未分解有機物若干含む）
 - 10 5Y5/1 灰色（やや黄色） シルト混細砂～粗砂（2.5Y8/2 灰白色 中～粗砂ブロックわずかに含む）
 - 11 10YR5/2 灰黄褐色 シルトわずかに混細砂～中砂
（地山ブロック（10YR7/4 にぶい黄褐色 細～中砂）を10%、地山由来の円礫（ ϕ 1～3cm）を若干含む）
 - 12 2.5Y5/1 灰黄色（やや褐色） シルト混極細砂～細砂
（未分解有機質をやや多く含む、地山由来の円～垂円礫を20%含む）
 - 13 2.5Y6/2 灰黄色 シルトわずかに混細砂～中砂（粗砂～細礫をやや多く含む、角礫（ $\sim\phi$ 3cm）わずかに含む）

第28図 2区 第1面検出遺構平面図、断面図（1）



- | | | |
|-------|---|---|
| 250土坑 | 1 | 10YR5/2 灰黄褐色 シルト混粗砂 (炭化物(~2cm) やや多く含む、地山由来の中礫わずかに含む) |
| | 2 | 2.5Y4/1 黄灰色 細砂~中砂混シルト (砂多い) (2.5Y4/1と5/1の間 黄灰色 中砂混シルト (砂多い)をブロック状に20%含む、炭化物・地山由来の礫わずかに含む) |
| | 3 | 7.5YR5/3 にぶい褐色 シルト混中砂~粗砂 |
| 267土坑 | 1 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂混シルト |
| | 2 | 10YR6/3 にぶい黄橙色 中砂~粗砂を多く混極細砂 (地山小ブロック含む、炭化物少量含む) |
| 269土坑 | 1 | 7.5YR4/6 褐色 中砂混シルト (地山小ブロック50%含む、地山礫 (φ0.5~1cm) 少量含む) |
| 270土坑 | 1 | 10YR6/2 灰黄褐色 細~粗砂混シルト (地山礫(φ1~3cm)少量含む、炭化物少量含む) |
| | 2 | 10YR6/3 にぶい黄橙色 細~極粗砂混シルト (炭化物微量含む) |
| | 3 | 10YR6/2 灰黄褐色 細~粗砂混シルト
(地山ブロックφ1~4cm多く含む、地山由来の礫φ1cm多く含む、炭化物少量含む) |
| | 4 | 10YR5/2 灰黄褐色 中~粗砂混シルト (地山由来の礫φ0.5~1cm少量含む、地山ブロックφ3cm多く含む、礫φ4cm含む、下面に炭化物やや多く含む) |

第29図 2区 第1面検出遺構平面図、断面図(2)

る。おそらく、一時的に水を溜めて、341溝から水を流して利用したものと考えられる。土坑のほぼ中央から出土したこけら経は県内初の出土例である。中世後半のものと考えられる。

640土坑は東部上段で検出したもので、西から伸びる丘陵の裾部に位置し、長軸2.01m、短軸1.81mの不整な隅丸台形を呈するが、南東側の肩は閉じずに溝状になっている(第28図)。断面は逆台形で最大の深さ0.93mを測る。埋土はシルト混砂を主体とし、側面には周囲から岩盤の風化した砂が流れ込んだ状況が見て取れる。下半には未分解有機物をごく多量に含むシルト層(6層)があり、ある

段階で堆積が止まり、植物が繁茂した状況がうかがえる。東側から溝状開口部付近にかけては拳大～人頭大の自然礫を平面的に検出した。礫は土坑東南部からも比較的検出したが、埋土の中層以上であり、転落したものと考えられる。溝状部分では、礫は最大2段程度積み重ねられており、同一個体で接合する礫が離れた場所から出土するなど、意図的に集められたものと考えられる。同様の立地にある661土坑および341溝との類似性から、もともと堰状に積み重ねられたものが崩落した可能性が高い。

溝部は最大幅1.1mで、取り付き部から全長1.64mにわたって検出した。640土坑から南東方向へ流れ出し、北西方向から後述する657溝が合流する。この溝状部分の先端は後世の削平により不明であるが、地形からはそのまま東へ流れ下段に流れ込んでいたと推定できる。640土坑からは礫に混じって白磁片が出土しているほか、埋土中の種実の年代測定結果（第5章第1節）から15世紀後半の遺構と考えられる。

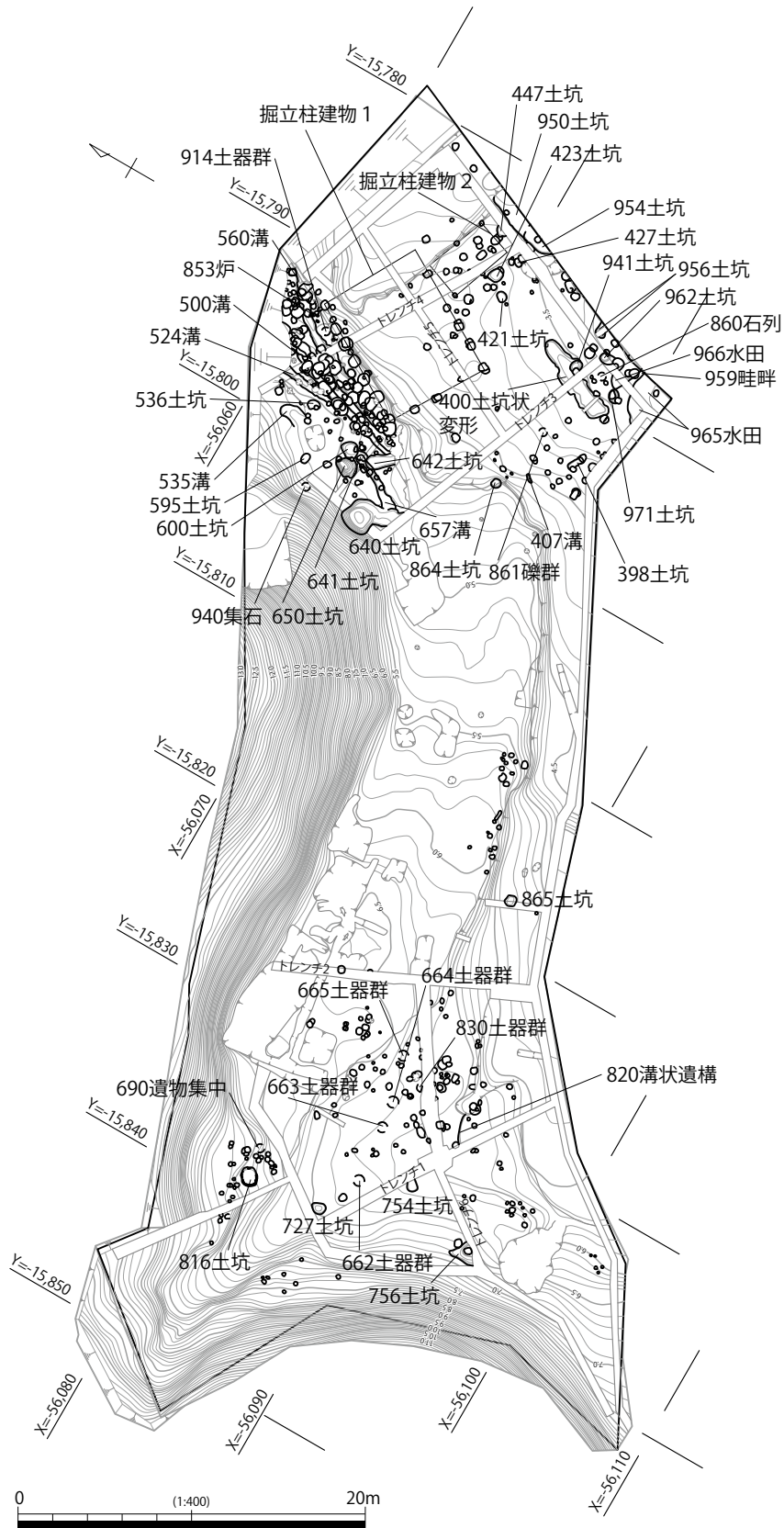
657溝は深さ0.05mほどの浅い素掘りの溝で、断面は皿状を呈する（第28図）。長さ約3.7mを測る。南端付近は640土坑と一連の礫が認められたが、その北側から底面に接して木製品を検出した。腐食が激しく、並行する2点の細長い破片とそれに直交する破片をわずかに残すのみで、取り上げたものの図化できなかった。並行する2点は木目が長軸方向に認められたほか、直交する破片は年輪が側面に見えており、これらが同一個体とすれば幅26cm、全長40cm以上の木製品と推定できる。また、内部から礫が検出されなかったことから、もともとは上面が塞がっていたと推定でき、木取りから木製槽が口縁部を下に置かれたものであった可能性が高い。

270土坑は東部神社横上段で検出された土坑で、上端は隅丸長方形を呈するが、下端は楕円形に近い（第29図）。長辺1.43m、短辺1.08m、深さ0.35mを測る。埋土は4層で、水平もしくはレンズ状堆積が認められ、基本的に自然堆積とみられる。最下面には炭化物がやや集中して検出された。内部からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

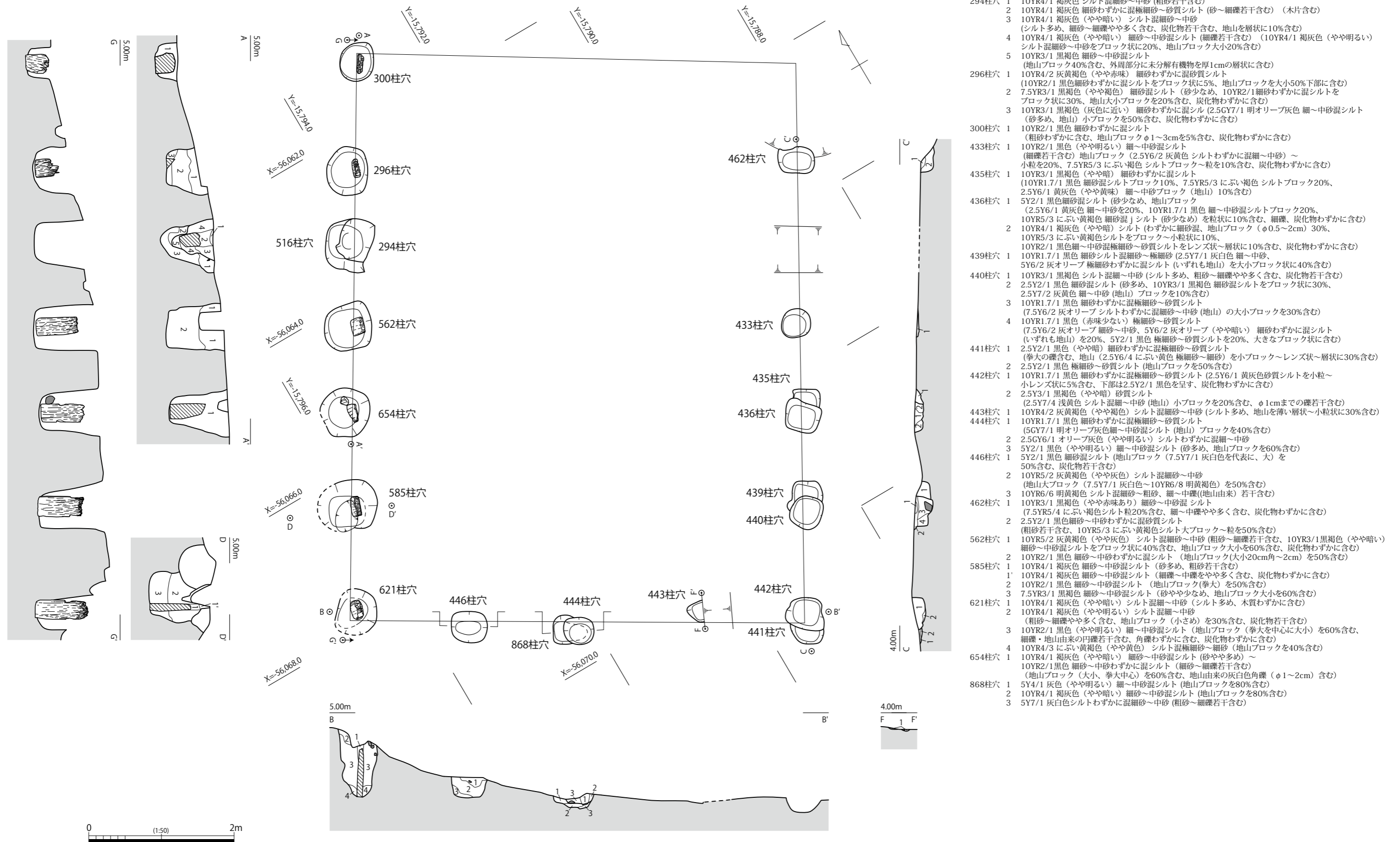
4土坑、46土坑は中央部谷よりで検出した。4土坑は平坦面の最高所に存在し、2ピットに切られている。長軸0.53m、短軸0.39mのほぼ楕円形の土坑で、深さは0.09mと浅い。20cmの角礫が埋土中に含まれる。46土坑は現代の攪乱により北半分上半を削られていたが、隅丸長方形を呈すると考えられる。長辺0.72m以上、短辺0.53m、逆台形の断面で深さは0.29mである。いずれも埋土からの遺物出土はなく、時期は明らかではない。

250土坑、267土坑、269土坑、374土坑は東部神社横上段で検出した（第29図）。遺物は出土しておらず、時期は不明である。250土坑は不整隅丸三角形の土坑で、最大長0.84m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に分層できた。267土坑は樹木の根による攪乱で東半分を削平されていたが、長軸1.1m、短軸0.56m以上の楕円形を呈する。深さは0.15mで、埋土は2層に分層できた。269土坑は長軸0.63m、短軸0.53mのやや角張った円形の土坑で、深さ0.06mと浅い。374土坑は250土坑の北に接する隅丸の不整長方形を呈し、最大幅0.66m、深さ0.17mで断面は台形である。

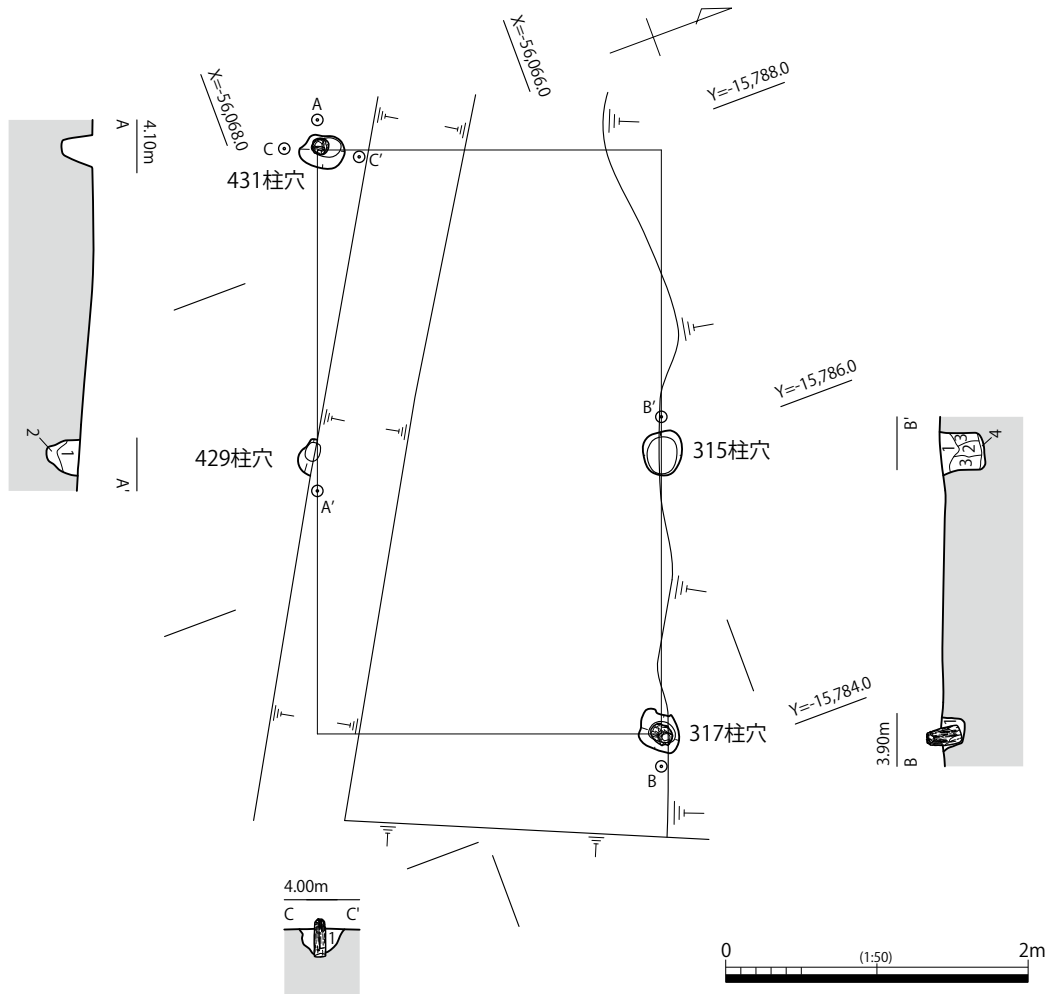
柱穴およびピットは中央部から東部にかけての平坦面上で多数検出している。平面あるいは断面で柱痕が認められたものは柱穴、認められなかったものはピットとして区分しているが、ピットの中にも柱穴が存在している可能性はある。



第30図 2区 第2面平面図



第31図 2区 掘立柱建物1平面図、断面図



- | | | |
|-------|---|---|
| 315柱穴 | 1 | 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト (砂少なめ、地山 (7.5YR5/4 にぶい褐色 (やや黄色) シルト混極細砂~粗砂 (細礫若干含む))大ブロックを60%含む) |
| | 2 | 10YR3/1 黒褐色 (やや暗い) 細~中砂混シルト (10YR5/3 にぶい黄褐色~5/2 灰黄褐色 シルトや7.5YR5/4 にぶい褐色 シルト混極細砂 (いずれも地山) ブロック30%、10YR2/1 黒色細~中砂混シルトをブロック状に若干含む) |
| | 3 | 10YR4/1 褐灰色 (やや暗い) 極細砂~シルト (粗砂若干含む、地山 (7.5YR5/4 にぶい褐色 シルト混極細砂) の大ブロックを40%含む) |
| | 4 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト混極細砂 (細~中砂わずかに含む、2.5Y3/1 黒褐色 細砂わずかに混シルトを粒状に10%含む) |
| 317柱穴 | 1 | 10YR2/1 黒色 (褐色うすい) 細~中砂混シルト (地山 (7.5YR5/4 にぶい褐色シルト) を小粒状~層状に10%含む) |
| 429柱穴 | 1 | 2.5Y2/1 黒色 シルト混細~中砂 (粗砂~細礫やや多く含む、10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト (地山) を大ブロック20%、小ブロック~粒10%含む、炭化物若干含む) |
| 431柱穴 | 2 | 10YR3/1 黒褐色 極細砂~シルト (粗砂~細礫若干含む、地山ブロックを大小40%含む、炭化物わずかに含む) |
| | 1 | 10YR3/1 黒褐色 (褐色うすい) 細砂~中砂混シルト (砂やや多め、粗砂~細礫若干含む、地山ブロック (10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂わずかに混シルト、5Y7/1 灰白色 シルト混極細砂~中砂など) を40%含む、炭化物わずかに含む) |

第32図 2区 掘立柱建物2平面図、断面図

(2) 第2面 (第30~41図、PL.10~14)

第2面の遺構としては、西部~中央部にかけてと、東部において多くの土坑、柱穴、ピットなどを検出した。とくに、東部上段では溝と多数の柱穴、ピットが切り合った状態で検出された。検出した遺構として、溝6条、溝状遺構1条、水田2筆、畦畔1条、集石1、石列1、礫群1、遺物集中1、土器群6、炉1、ピット347基、土坑24基、土坑状変形1、柱穴101基を検出した。柱穴には柱根が残っているものも多く、掘立柱建物2棟が復元できた。柱穴およびピットについては、第2面でも多数検出しており、煩雑さを避けるため法量を一覧にまとめた(第4表)。

掘立柱建物

掘立柱建物1は調査区東部で確認したもので、上段から下段にわたって柱穴が確認できた(第31図)。上段部縁辺で確認した西辺は比較的残存状態が良好であるが、東辺は削平が激しく最大でも掘方底0.2mが残る程度で、北辺は完全に削平されてしまっていた。建物の規模は桁行6間(約7.8m)、梁行4間(約6.0m)に復元でき、主軸はN-31°-Eをとる。柱間は桁行で1.1~1.4mとやや不揃いであるが、南北両端がやや広く、中央の4間分はおおむね同じ柱間寸法をとる。また、梁行では柱間1.5~1.6mとおおむね等間隔に立てられる。掘方は直径0.5~0.9mのほぼ円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは残存良好なもので最大0.9mを測る。掘方断面はほぼ長方形に近い形態で、底面はほぼ平坦となり標高もおおむね等しい。

西辺は全て柱根が残っており、北から3本目(294柱穴)を除き断面長方形の柱であった(第165図W17~W20)。柱は垂直に樹立された状態で、上部は腐朽していた。また、掘方東側に偏って検出され、しかも建物の主軸に対して反時計回りに振れていた。柱根は最大幅0.25m、厚さ0.1mで、最も残りのよい621柱穴のW19で最大0.7mを残す。柱根両側面の底部から0.3~0.5m程の場所には三角形の抉りが入れられていたが、562柱穴のW17と残りが悪かった300柱穴の柱では、残存部分で抉りは確認できなかった。樹種同定により、柱材は全てスギと判明している(第5章第2節参照)。木取りは全て板目であり、木目から推定すると比較的大径の材から割り出している。柱根の先端は平坦に切断されたものと、表裏から刃物を入れ尖らせるものがある。また、ほとんどの柱根で角を斜めに落としている。

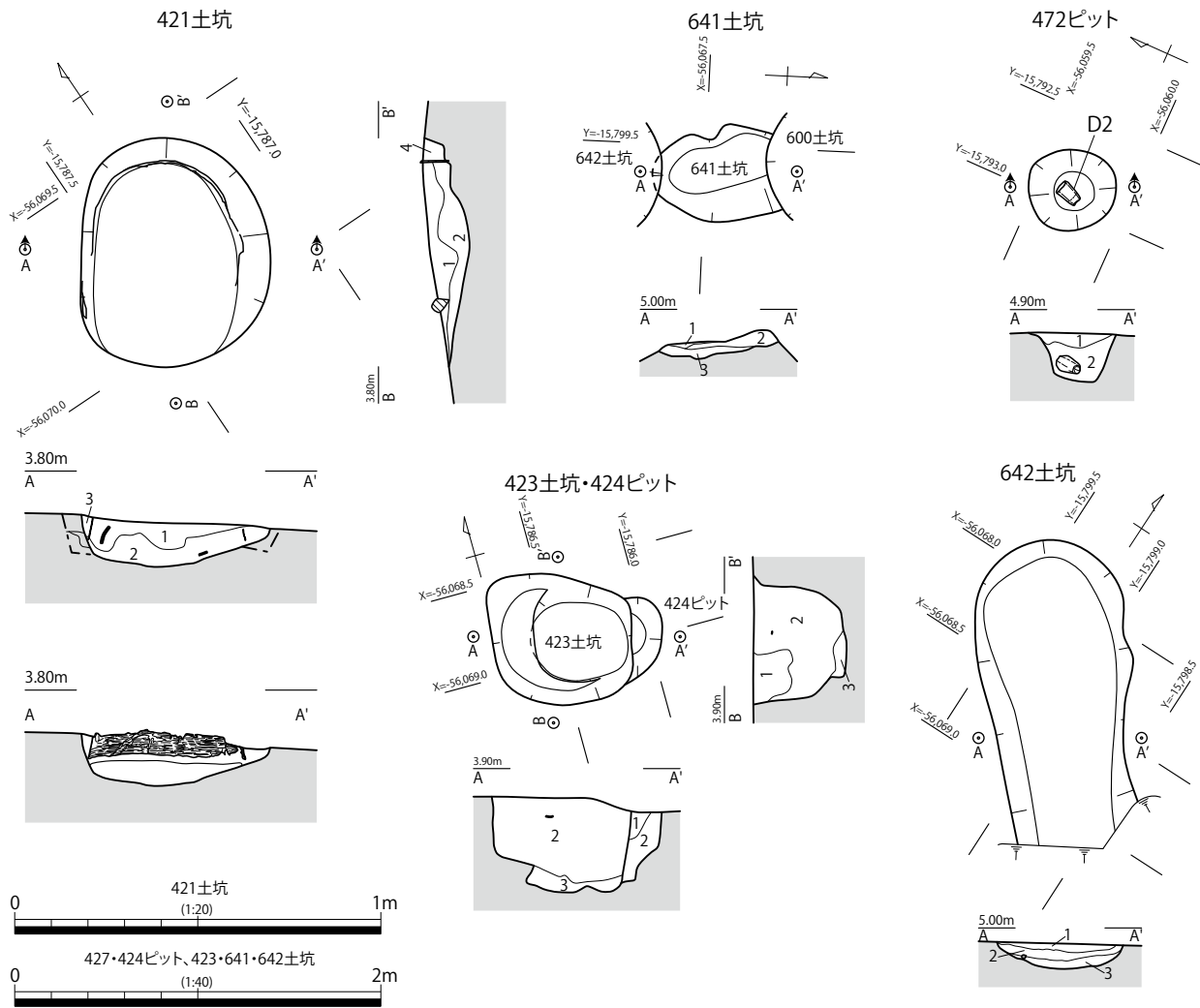
南辺、東辺では柱根は確認できなかったが、444柱穴では長方形孔のある板状部材W21が検出されている。なお、南辺中央の444柱穴、東辺の436、440、442柱穴は、先行する別の柱穴に重複して掘り込まれていた。また、西辺の516柱穴も294柱穴に切られており、294柱穴には断面円形の柱根が残存していた。これらの柱穴では、柱が立て替えられた可能性が考えられる。516柱穴の埋土の底面近くからは、5cm四方、厚さ1cmほどの木片が7、8点検出されている。柱の樹立前に整形した際の削り屑の可能性が考えられる。掘方内から土器片が出土しているが、小片がほとんどで時期を明らかにできるものは少ない。後述する560溝は本建物の西側に平行し、南北両端では東側に曲がって建物を取り巻くように掘削されており、雨落ち溝など建物に伴う可能性が考えられる。溝内から古墳時代後期の土器が出土しており、建物も同時期の可能性が考えられる。

掘立柱建物2は、掘立柱建物1の東側下段部で検出した桁行2間、梁行1間に復元できるものである(第32図)。柱穴2個が削平されていたが、柱根が残るものを中心に復元した。桁行3.9m、梁行2.3mで、主軸はN65°Wをとる。柱の掘方平面形は円形もしくはややいびつな円形で、直径0.2~0.3m、深さ0.15~0.3mを測る。317、431柱穴では柱根が残存しており、柱は直径0.1~0.15m、残存長0.3mである。時期は明らかでない。

その他の遺構

398土坑は溝状の土坑で、全長0.94m以上、幅0.4m、深さは最大で0.19mである。

421土坑は東部下段中央東よりで検出した(第33図)。検出時の大きさを長軸0.62m、短軸0.52mの楕円形を呈し、南西部分は削平を受けている。深さは最大で0.15mを測る。掘方内部からは底を欠く曲物が出土しており、曲物設置後、掘方との間は埋め戻される。掘方同様、削平により南西半分が失われているが、直径0.4mに復元できる。高さは0.06mが残存する。掘方の底はシルト層で止まっ



- | | | |
|--------|---|--|
| 421土坑 | 1 | 10YR3/1 黒褐色（やや暗い）極細砂～砂質シルト（未分解～やや分解進んだ有機物多く含む、10YR3/1 黒褐色 細～中砂混シルトブロックを上部に30%含む、下部は中～粗砂をやや多く含む、炭化物若干含む、細礫～φ2cmまでの亜角礫若干含む） |
| | 2 | 10YR3/1 黒褐色（1より明るい） 細砂わずかに混極細砂～砂質シルト（有機物若干含む、地山（2.5Y6/2 灰黄色シルト）ブロックを30%、φ2～3cmの角礫若干含む、炭化物やや多く含む） |
| | 3 | 10YR6/2 灰黄褐色（やや明るい） 細砂わずかに混シルト（中～粗砂わずかに含む） |
| | 4 | 10YR5/2 灰黄褐色シルト（やや砂質、10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂をブロック～レンズ状に30%、10YR6/3（やや暗）にぶい黄褐色砂質シルト（地山）をブロック状に20%含む） |
| 472ピット | 1 | 10YR3/3 暗褐色 細砂～中砂混シルト（砂多め、0.5cmまでの細礫をやや多く含む、炭化物小片（0.5cm以下）極多量に含む、鉄分沈着） |
| | 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂混シルト（10YR4/4 褐色をブロック状に20%含む、2.5Y6/2 灰黄色シルト混細砂～中砂（地山由来）ブロックを含む、炭化物やや多く含む） |
| 423土坑 | 1 | 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混シルト（砂多め、粗砂～細礫やや多く含む、地山ブロック～小粒（10Y5/3 にぶい黄褐色シルト、2.5Y5/2 暗灰黄色シルトなど）を5%、地山由来の礫（φ1～2cm）若干含む、炭化物やや多く含む） |
| | 2 | 2.5Y2/1 黒色（やや暗）シルト混極細～細砂（中砂～細礫若干含む、地山ブロック（10YR5/2 灰黄褐色シルト～10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、大型）を50%、10YR3/1 黒褐色細～中砂混シルトブロックを20%含む、炭化物若干含む） |
| | 3 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト混極細砂（10YR7/4 にぶい黄褐色シルトわずかに混極細砂をブロック状に20%含む、炭化物わずかに含む） |
| 424ピット | 1 | 2.5Y3/2 黒褐色 細砂混シルト（中～粗砂わずかに含む、地山ブロック（10YR5/3 にぶい黄褐色シルト）を10%含む、炭化物わずかに含む） |
| | 2 | 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト（中～粗砂若干含む、10YR3/1 黒褐色（やや明るい）細～中砂混シルト、10YR6/1 褐灰色 細～中砂混シルトをブロック状に30%、地山ブロックを30%含む、炭化物わずかに（1より多く）含む） |
| 641土坑 | 1 | 10YR5/1 褐灰色と5/2 灰黄褐色の間シルト混細砂（中～粗砂若干含む、細礫わずかに含む、10YR4/1 褐灰色 細砂混シルトを薄い層状に10%含む） |
| | 2 | 10YR5/2 灰黄褐色シルト混細砂～中砂（粗砂、地山由来の細礫若干含む、炭化物わずかに含む、2.5Y7/3 浅黄色 細砂を小粒状にわずかに含む） |
| | 3 | 10YR5/2 灰黄褐色（2より明るい）シルトわずかに混細砂～中砂（粗砂～細礫若干、地山由来の角～亜角礫（黄橙、浅黄橙）を10%、地山ブロック20%含む） |
| 642土坑 | 1 | 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～中砂混シルト（炭化物若干含む、鉄分沈着） |
| | 2 | 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂混シルト（細礫若干含む、鉄分沈着） |
| | 3 | 10YR5/2 灰黄褐色シルト混中砂～粗砂 |

第33図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図（1）

ており、湧水は確認できないが水を貯留することは可能である。したがって、井戸や貯水施設のようなものであった可能性が高い。曲物内部から土師器片、種子等が出土しており、古代のものと考えられる。

423 土坑は 421 土坑の北側で検出した。ややゆがんだ隅丸台形で、長辺 0.79m、短辺 0.71m、深さ 0.53m を測る（第 33 図）。底部は東側 3 分の 2 が一段深く掘削されていた。柱根などは確認できなかった。

427 土坑は隅丸台形を呈し、長軸 0.51m、短軸 0.36m 以上である。深さ 0.13m を測る。

447 土坑は不整形の土坑で、側溝で一部削平されている。最大長 0.71m、最大深 0.16m を測る。

536 土坑は不整な楕円形で、長軸 0.74m、短軸 0.53m、深さ 0.08m と浅い。

595 土坑は楕円形を呈し、長軸 0.63m、短軸 0.43m、深さ 0.08m である。

600 土坑は不整隅丸三角形で最大長 1.02m、深さ 0.29m である。650 土坑に後行し、660 柱穴と 644 ピットに切られる。

641 土坑は不整楕円形で、600 土坑、642 土坑、657 溝に切られる。長軸 0.7m 以上、短軸 0.53m、深さ 0.26m である（第 33 図）。

642 土坑は 641 土坑の南に位置するもので、溝状を呈する。検出長 1.7m、最大幅 0.84m、深さ 0.15m を測る（第 33 図）。埋土は 3 層に分けられ、溝として機能していた可能性が高い。

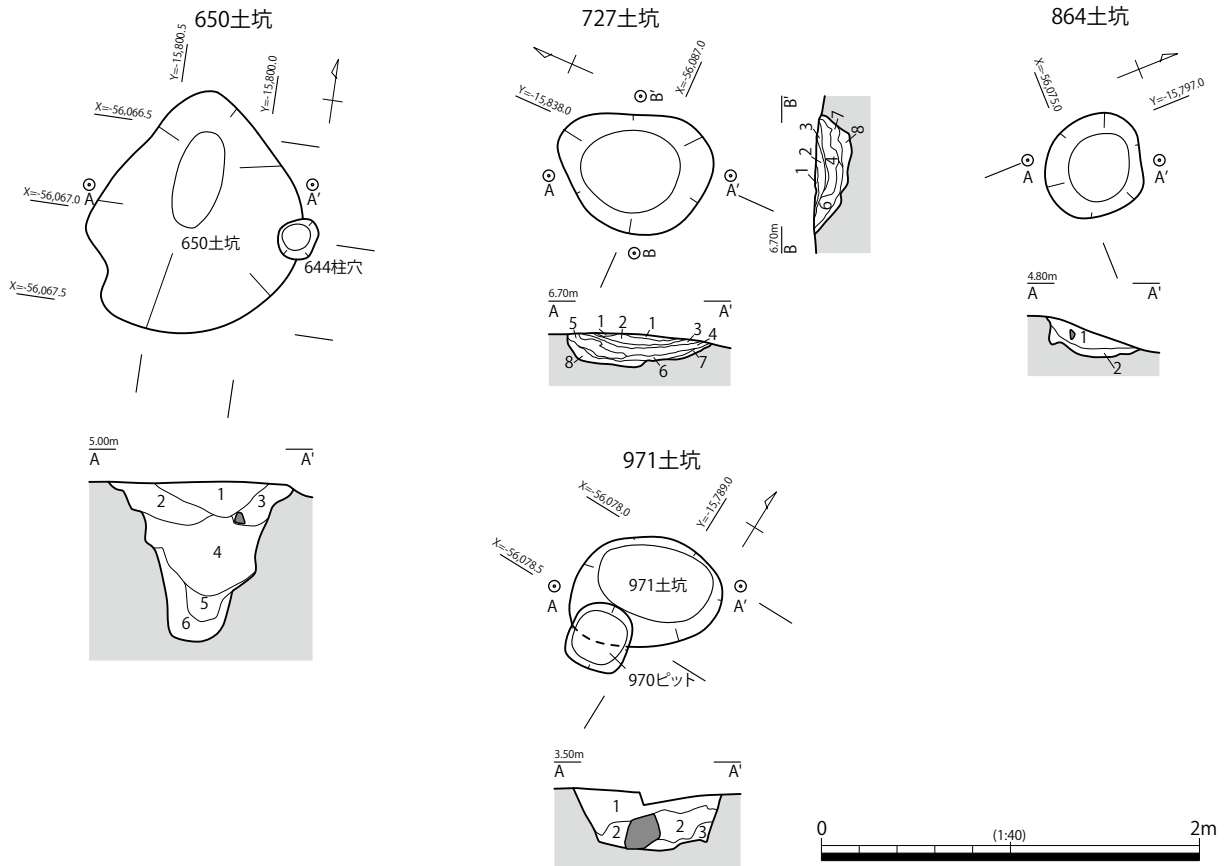
650 土坑は 640 土坑の北東に位置する。ややいびつな隅丸三角形を呈する（第 34 図）。最大長 1.3m、幅 1.05m で、深さは 0.84m を測る。下部は断面が U 字形であるが上部は壁面の凹凸が大きい。埋土中～上層（1～4 層）は褐灰色シルトに地山のブロックを多数含む。とくに、4 層は人頭大ほどもあるブロックが詰め込まれ、隙間をシルトが埋める状況である。一度に埋め戻した可能性が考えられる。シルトは有機物をやや多く含んでおり、水が溜まる環境にあったと考えられる。井戸枠などは検出されなかったが、井戸の可能性もある。なお、650 土坑の南東に接するように 657 溝が始まっており、上面の削平などを考慮すると一連のものであった可能性も考えられる。

727 土坑は西部の平坦面北西隅で検出した。長径 0.84m、短径 0.63m のややゆがんだ楕円形を呈する。断面は凹凸が多いが逆台形に近く、深さ 0.2m を測る。埋土上層は黒色シルト混じり砂層、中層以下は同砂混じりシルトを主体とし、砂を薄い層状に含む。中位の粘性の強いシルト層（4 層）から多数のヒョウタンの種子や棒状木製品が出土した。黒色シルト層の存在から、野壺などの可能性を考え土壌サンプルの分析を行ったが、寄生虫卵などは確認されなかった。なお、年代測定により、6 世紀後半～7 世紀前半の年代が得られている（第 5 章第 1 節）。

754 土坑はトレンチ 1 で東側を削平される。平面はやや長い隅丸三角形を呈すると考えられ、最大長 0.68m 以上、幅 0.59m、断面は皿状を呈し、深さ 0.14m である。

756 土坑はトレンチ 6 にかかって検出したもので、トレンチ以南は削平されており、三角形状に残存する。残存長 1.34m、最大幅 1.43m で、断面は浅い U 字形を呈し、深さは 0.2m である。

816 土坑は西部平坦面北西部の一段高いやや南に傾斜する平坦面で検出した、やや角張った楕円形の土坑である（第 35 図）。長軸 1.1m、短軸 0.9m で、長軸を北東－南西方向にとる。深さは最大で 0.25m を測る。底部はおおむね平坦であるが、中央部がやや高まっている。土坑壁面は北西から南東にかけて、主に中位付近で熱を受けており、特に斜面下方にあたる南西～南東にかけての部分で強い被熱を観察した。また、埋土は中央が低くなるような水平堆積で自然堆積と推定できるが、最下層では多量の炭や焼土塊が混入していた。なお、底面に被熱は確認できなかった。土坑内部からは土器小片が出



- 650土坑
- 1 10YR6/1 褐灰色 極細砂～粗砂混シルト（下方はシルト質、 ϕ ～5cmの地山ブロック、炭化物含む、鉄分沈着）
 - 2 10YR6/1 褐灰色 極細砂～粗砂混シルト（ ϕ ～3cmの地山ブロック多量に含む、鉄分沈着、炭化物わずかに含む）
 - 3 10YR6/1 褐灰色 極細砂～粗砂混シルト（中礫を含むほか、2と同じ）
 - 4 10YR6/1 褐灰色 極細砂～粗砂混シルト（崩落した地山ブロック（ ϕ ～人頭大）多量に含む）
 - 5 10YR6/1 褐灰色 極細砂～粗砂混シルト（シルト質強い、地山ブロックわずかに含む）
 - 6 10YR6/3 にぶい黄褐色 極細砂～粗砂混シルト（地山ブロックわずかに含む）
- 727土坑
- 1 10YR2/1 黒色と3/1 黒褐色の中間 シルト混細砂～粗砂
（細～中礫多く含む、10YR5/1 褐灰色 細砂～中砂混シルトブロックをわずかに含む）
 - 2 2.5Y2/1 黒色 シルト混細砂～中砂（シルト多め、 ϕ 1cmの角礫（白、浅黄褐色）をやや多く含む）
 - 3 10YR2/1 黒色 シルトわずかに混細砂～中砂（未分解有機物わずかに含む）
 - 4 10YR2/1 黒色 極粗砂混砂質シルト（細砂～中砂を層状にわずかに含む、キカラスウリ種子？含む）
 - 5 2.5Y2/1 黒色 細砂～粗砂混シルト
（細礫やや多く含む、10YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混シルトを厚いレンズ状に40%含む）
 - 6 2.5Y2/1 黒色 細砂～中砂わずかに混シルト（細礫若干、地山由来の角礫（ ϕ 2cm角）をわずかに含む）
 - 7 10YR4/1 褐灰色（やや暗い）シルト混細砂～粗砂
（ ϕ 2cmまでの角礫若干含む、6層のシルトを粒状にわずかに含む、炭化物やや多く含む）
 - 8 2.5Y2/1 黒色（やや明るい）細砂～中砂混シルト（細～粗砂を薄い層状に含む）
- 864土坑
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト
（砂多め、粗砂～細礫若干含む、鉄分沈着し（7.5YR4/6 褐色）斑状になる）
 - 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト混細砂～中砂（粗砂若干含む、1同様鉄分沈着により斑状）
- 971土坑
- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混シルト（粗砂～細礫若干含む、10YR6/1 褐灰色 シルト混極細砂～細砂や、5Y5/2 灰オリーブ色 極細砂～細砂を粒状に5%含む、炭化物やや多く含む）
 - 2 10YR3/1 黒褐色（1より暗い）細砂混砂質シルト～極細砂
（中砂～粗砂若干含む、2.5Y5/1 黄灰色 極細砂～細砂、2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混細砂～粗砂、10YR4/2 灰黄褐色 極細砂～細砂（地山）を大小ブロック状に40%含む、10YR2/1 黒色 極細砂（未分解有機物多く含む）を大ブロック状に5%含む、炭化物をわずかに含む）
 - 3 10YR3/1 黒褐色 シルト混極細砂（未分解有機物多く含む、10YR3/2 黒褐色 砂質シルト（未分解有機物多く含む）ブロック40%、10YR5/2 灰黄褐色 中砂～粗砂（わずかにシルト混）をブロック状に10%含む）

第34図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図（2）

土したのみであるが、炭化物の年代測定により、7世紀後半～8世紀前半の年代が得られている（第5章第1部）。なお、本土坑の1.2m東側で鉄滓がまとまって検出されており（690遺物集中）、鍛冶や製鉄との関連が想定される。また、土坑周辺には柱穴およびピットが多数見つかり、何らかの上屋構造が存在した可能性も考えられる。

864土坑は東部上段で、中央部上段から続く平坦面の肩部にあたる部位で検出した。やや楕円形の土坑で、最大径0.57m、深さ0.22mを測る（第34図）。

865土坑は中央部下段緩斜面で検出した、いびつな隅丸長方形を呈する土坑である（第35図）。最大長0.7m、幅0.6m、深さ0.12mで、断面は浅い皿状を呈す。北～東にかけての4箇所壁面の中位以上に強い被熱部分を確認した。被熱部分は幅0.1m程度で、内面ほど強く熱を受け、明橙色を呈し、外方は黒色を呈す。底部付近には炭化物小片を多量に含む層を確認できるが、底面には被熱は確認できない。なお、内部からは遺物は出土していないが、炭化物の年代測定により6世紀後半の年代が得られている（第5章第1節）。

941土坑は400土坑状変形の東辺に接して検出されたものであるが、土坑状変形に先行する（第38図）。平面は楕円形で、長軸0.74m、短軸0.59m、逆台形の断面をもち、深さは0.38mである。埋土中から巨礫1点を検出した。

971土坑は東部下段で検出したもので、長軸0.81m、短軸0.58m、逆台形の断面を持つ楕円形の土坑である（第34図）。深さは0.33mで、底面中央に大型の礫が存在していた。

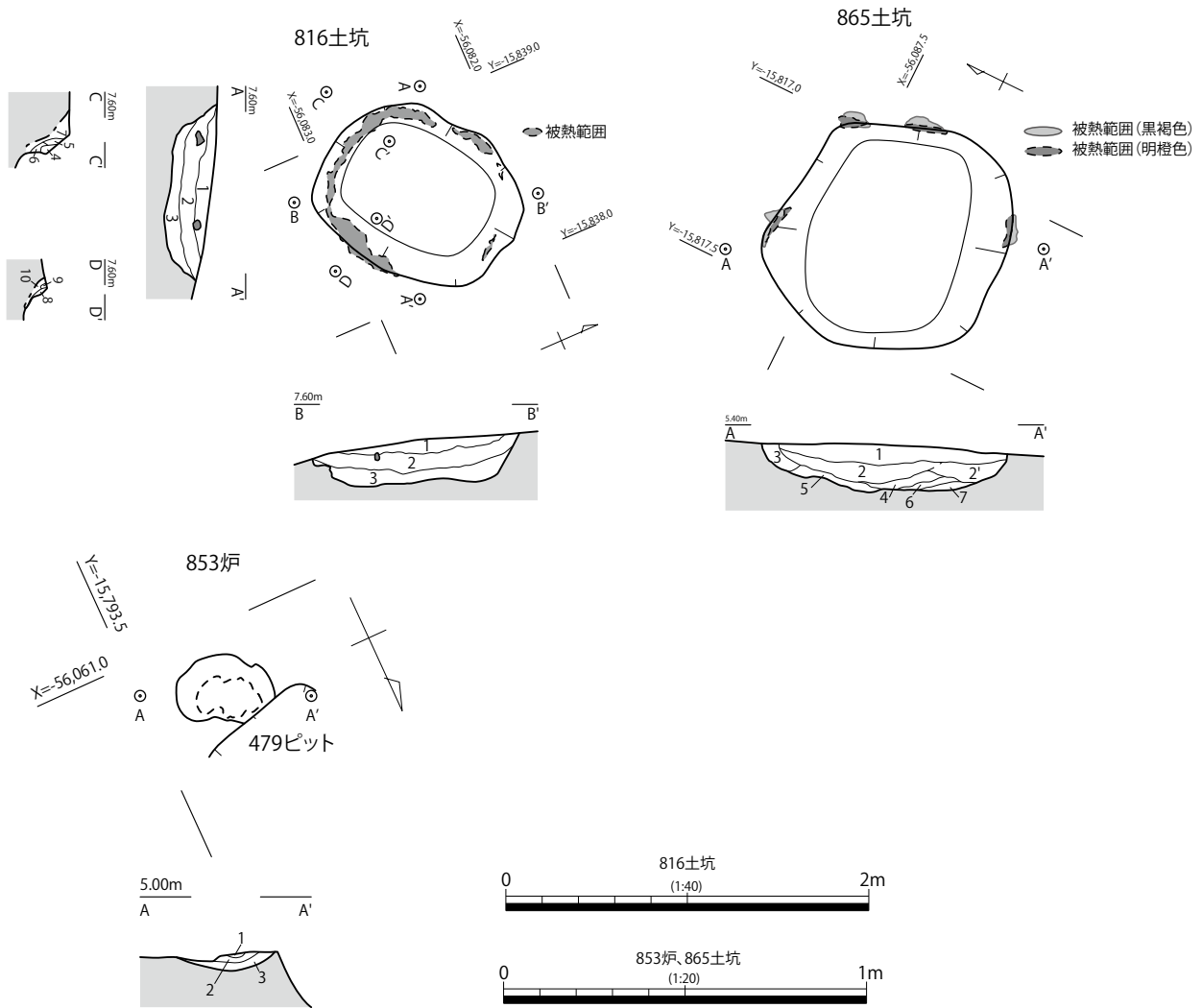
954土坑は延長部分が4区でも確認でき、竪穴建物4の掘方であったことが判明した。また、956土坑、962土坑も4区で検出した掘立柱建物1を構成するものであり、いずれも4区の調査成果（本章第5節）において記述する。

560溝は東部上段、掘立柱建物1西側に位置する素掘りの溝である（第36図）。両端は後世の削平に伴う段差によって失われる。溝は直線を基調としつつやや湾曲しており、北側は296柱穴の西で、南側は585柱穴の西でそれぞれ東側へやや屈曲する。検出長約11m、幅0.5～1.0mで、中央付近がやや広く、両端では若干幅が狭まる。断面形はU字形で、最大で深さ0.25mを測る。溝底に接して古墳時代終末期の須恵器高杯（第124図68）が出土した。前述のとおり、溝の東側肩が掘立柱建物1西辺とほぼ並行であることから、建物に伴う溝の可能性が高い。

524溝は上段西よりで検出した。南北からわずかに東に振って直線的に掘られた素掘りの溝で、3.4m分を検出したが北側は調査区外に伸びている（第37図）。南端は500溝により切られている。最大幅0.5m、深さ0.15mで、断面は浅いU字形である。溝底はおおむね平坦であるが、北側がやや高くなっている。ただし、水が絶えず流れたような痕跡は確認できない。溝の北半部では多数の土器片が折り重なるように検出された。比較的個体ごとにまとまっており、古墳時代後期～古代にかけての土師器甕が多い（第124図）。その他、須恵器、ほぼ完形の土製支脚（第125図D3）などが出土した。

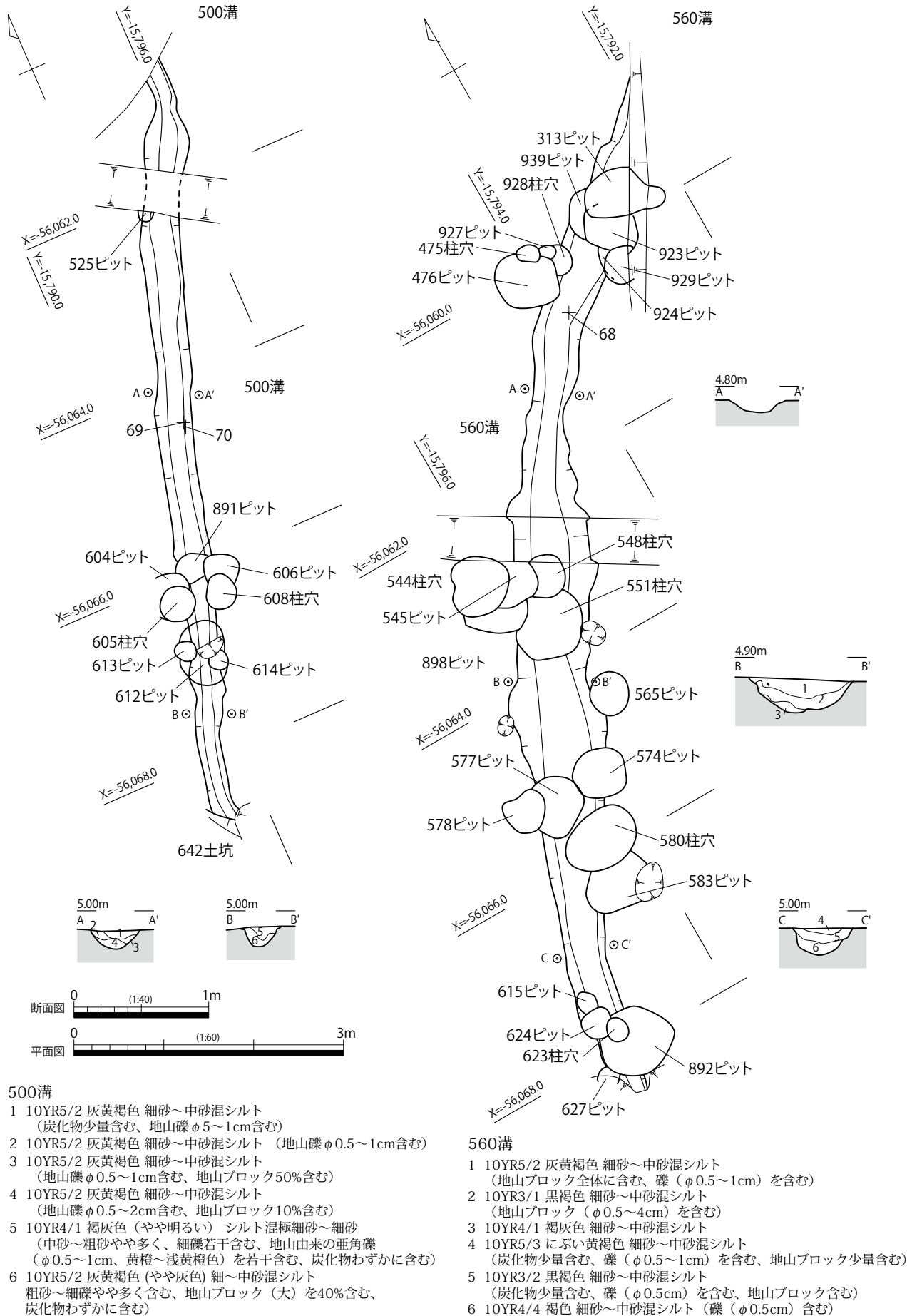
500溝は560溝と524溝の間を直線的に走る素掘りの溝である（第36図）。方向はN-17°-Eで、検出長8.5m、北端でやや西方に屈曲し調査区外に伸びている。幅は比較的差が無く0.25～0.5m、深さは最大で0.15mを測る。断面はU字形を呈する。溝底は凹凸がありつつ北側がやや高い傾向にあるが、流水が絶えず流れたような痕跡は確認できない。古代の須恵器（第124図69・70）が出土した。

400土坑状変形は、東部下段で検出した（第38図）。全長5.4m、最大幅1.7m、平面はやや不整な長方形で、北端は丸くなっており舟形を呈する。断面は浅いU字形で緩やかにカーブしており、深さ

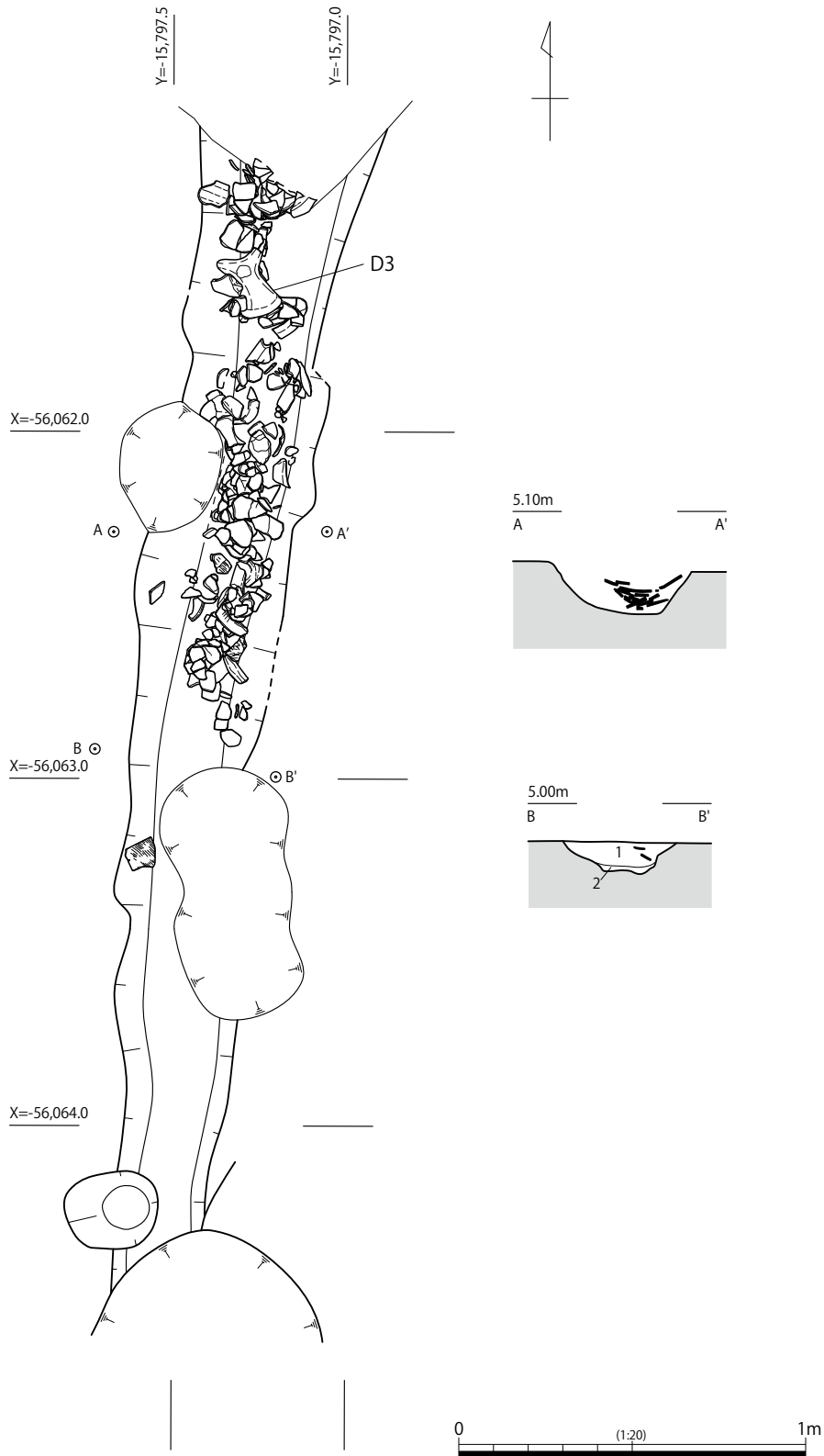


- 816土坑
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト（砂やや多め、細～中礫やや多く含む、炭化物若干含む、10YR4/4 褐色 細砂～中砂混シルトをブロック状に20%含む）
 - 2 10YR4/4褐色 細砂～中砂混シルト（粗砂～細礫を多く含む、10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂混シルト（1に近い）をブロック状に30%含む、炭化物やや多く含む、φ1cmまでの角礫若干含む）
 - 3 10YR4/2灰黄褐色（やや暗め） 細砂～中砂混シルト（砂少なめ、粗砂を若干含む、10YR4/4 褐色 シルト混細砂～中砂（シルト多め）ブロックを10%含む、炭化物極多量に含む（炭化物が主体）、焼土塊（φ2～3cm）わずかに含む）
 - 4 2.5YR4/6 赤褐色と7.5YR4/4 褐色、炭化物若干含む※以下、色調のみ
 - 5 2.5YR4/6（やや暗い） 赤褐色
 - 6 10YR4/4（やや暗い） 褐色
 - 7 7.5YR5/6 明褐色
 - 8 5YR4/6 赤褐色
 - 9 5YR4/3 にぶい赤褐色
 - 10 10YR4/4 褐色
- 865土坑
- 1 2.5Y3/2黒褐色 細砂混シルト（砂少なめ、粗砂～細礫若干含む）
 - 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 砂質シルト（中砂～粗砂若干含む、炭化物若干含む）
 - 2' 2.5Y3/3暗オリーブ褐色（やや暗め） 細砂混シルト（2にくらべ砂多い、炭化物やや多く含む）
 - 3 10YR3/2黒褐色 細砂わずかに混シルト（中砂わずかに含む、炭化物細片やや多く含む）
 - 4 2.5Y3/2黒褐色（やや明るい） 細砂～砂質シルト（中砂若干含む、炭化物多く含む）
 - 5 2.5Y3/2黒褐色（やや赤み） 細砂混シルト（砂少なめ、炭化物極多量に含む）
 - 6 2.5Y3/2黒褐色（やや明るい） 細砂混シルト（砂少なめ、2'より砂多い、炭化物わずかに含む）
 - 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 細砂～中砂混シルト（炭化物わずかに含む）
- 853炉
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色 ※色調のみ
 - 2 2.5Y3/1黒褐色
 - 3 7.5YR3/4暗褐色

第35図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図（3）



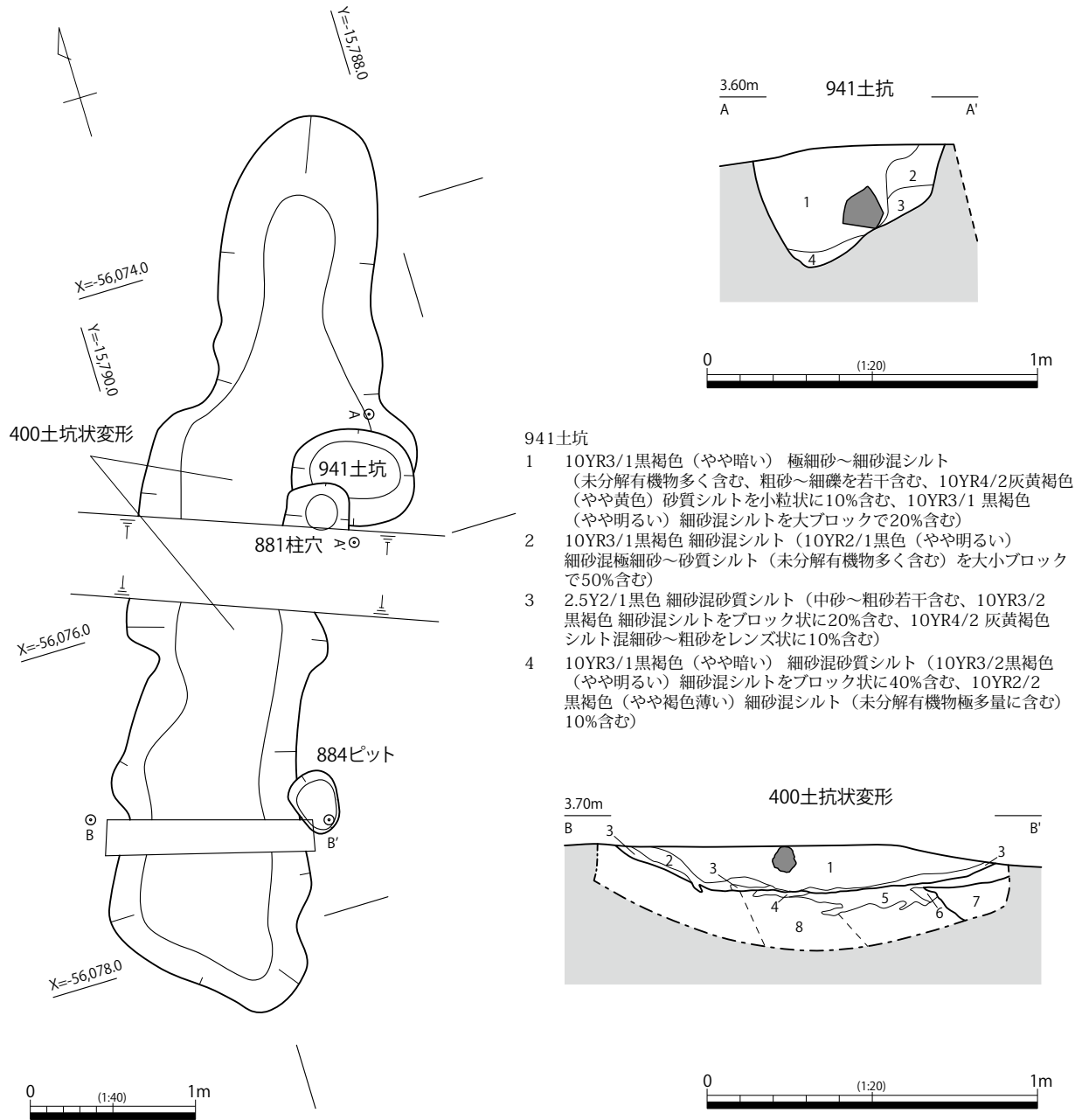
第36図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図(4)



- 524溝
- 1 7.5YR5/1 褐灰色 細～中砂混シルト
(砂多め、粗砂～細礫やや多く、2～3cmの垂円～円礫若干含む、炭化物大きめ若干含む)
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色 (やや灰色) シルト混細砂～中砂 (地山由来の粒 (0.5cm) やや多く含む)

第37図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図(5)

400土坑状変形・941土坑



400土坑状変形

- 10YR3/1 黒褐色 (やや暗め) 細砂～中砂混シルト (砂多め、粗砂やや多く、細～中礫若干含む、10YR3/2 黒褐色 (やや暗め) 極細砂～砂質シルトをブロック状に5%、10YR3/2 黒褐色 (やや暗め) 細砂～中砂混シルトを5%、10YR6/1 褐灰色 細砂混シルトブロックをわずかに含む、2.5Y2/1 黒色 細砂混シルトを厚い層状に若干含む、炭化物若干含む)
- 10YR3/2 黒褐色 (やや暗め) 細砂～中砂混シルト (粗砂～細礫若干含む)
- 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂混シルト (砂多め、2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂わずかに混シルトを層状～レンズ状に50%含む、1層を層状に20%含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 (やや暗い) 細砂混シルト (砂少なめ)
- 10YR6/3 にぶい黄橙色シルトわずかに混細砂～粗砂 (7層の上では10YR5/2 灰黄褐色に暗くなる、細～中礫若干、8層をブロック状に10%含む)
- 10YR4/2 灰黄褐色シルトわずかに混細砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混シルトを層状に50%含む、7層由来の粗砂若干含む)
- 10YR3/1 黒褐色 細砂混シルト (砂少なめ、粗砂若干、細～中礫わずかに含む、10YR2/1 黒色 極細砂～砂混シルト、2.5Y4/1 黄灰色 細砂わずかに混シルトをブロック状～粒状に20%づつ含む、炭化物やや多く含む)
- 5Y6/2 灰オリブ色 細砂わずかに混シルト (東に行くほど10YR3/2 黒褐色が多くなる)

第38図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図(6)

は検出面から0.15mである。本遺構は当初土坑ととらえていたが、断面の検討から、上からの掘り込みで形成されたものではなく、「土坑状変形」とであると認識するに至った。落ち込み部分は10YR 3/1黒褐色の砂混シルト（トレンチ3-7層、断面1層）で、基盤となるシルト層との間に薄い間層を挟む（トレンチ3-8・9層、断面2・3層）。これらの層は土坑の東側に偏っている。また、下層が東側にずれている状況（トレンチ3-12、13、15層、断面5層）が認められる。基盤となる層はシルト（トレンチ3-13、16、17層、断面8層）である。もともと溝状に落ち込んでいた可能性も考えられるが、外部からの力が加わることによりシルト上面で東方に滑ったことで、本遺構が最終的に形成されたと考えられる。いわゆる「土坑状変形」とは形成過程に若干差異を認めるが、基本的には同様の原因、すなわち地震の揺れによって形成されたと考えられる。

860石列は400土坑状変形の東縁南半に沿うように検出した。図化した部分は全長1.7mであるが、トレンチ3断面にかかるようにも礫が存在しており、さらに0.4mほど北に続いている（第39図）。最大0.3m、平均0.15～0.2mの自然礫が最大2段重なっているが、意図的に列状に並べるあるいは面をそろえるなどの構築は認められず、無造作に礫を集めたような状況である。この860石列は基盤となるシルト層（トレンチ3-20層）上に構成されたものであり、400土坑状変形東縁に接することから、互いに関連するものと考えられる。

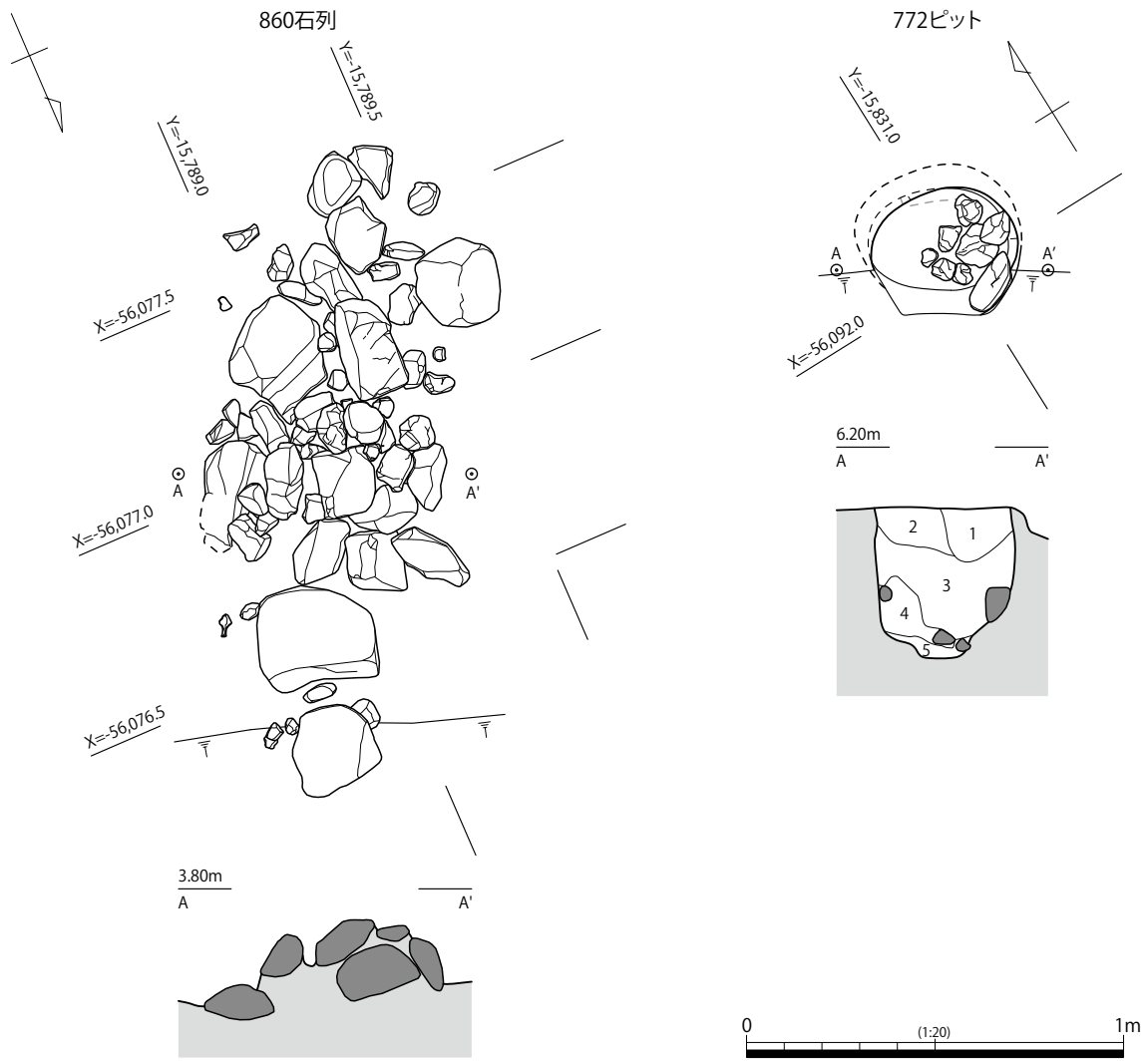
861礫群は、東部平坦面上段が東南へ突出する部分の東側下段部で検出した（第40図）。拳大～0.2mの礫が2.0m四方の範囲で平面的に広がるが、等高線に沿う長さ1.9m、幅0.5mの範囲に若干の高低差をもってとくに密集していた。これらの礫は地山であるシルト層（トレンチ3-21層）直上、もしくは間に上層の砂混じりシルト層を挟んでおり、耕作などに伴い集められた可能性が考えられる。

940集石は東部上段西側の斜面裾付近で検出した。全長0.8m、最大幅0.4mの範囲に拳大～0.2mほどの角礫25点ほどが集中していた。斜面に沿って比較的整然とした配置を採っており、斜面から平坦部へ移行する部分に人為的に礫を集めて置いたものと考えられる。遺構に伴う遺物は検出されず時期は不明だが、底面の標高からすると第1面に伴う可能性がある。

959畦畔は東部下段東端で検出したもので、965水田・966水田を区画する。長さ2.0m分を平面的に検出し、東側は調査区外に伸びる。幅は東端で0.6m、西端でやや広がり1.3mを測る。高さは0.1mで断面は隅丸台形を呈するが、上面は耕作によって削られている可能性がある。本畦畔を構成するのは東壁17層とほぼ同一の砂混じりシルトで色調はやや暗い程度であるが、下層の23層が畦畔部分のみに火炎状に入り込んでいることで水田部と区別できる。

965水田は下段東南端で確認したもので、3区3425水田と同一のものと考えられる。東側は調査区外に伸びており平面形は不明であるが、西端は北東-南西方向になる。966水田は965水田の北側に位置し、959畦畔に区切られた南辺と側溝以东の西辺のみを確認した。北辺は964ピットなどで削られて確認できなかった。西辺は965水田と同方向をとる。なお、水田面は東壁断面ではとらえられなかった。

662～665土器群は、西部平坦面で検出した土器群である（第41図）。662土器群はトレンチ1-99層上面で検出した。土師器二重口縁壺形土器1個体（第126図74）が潰れたような状況で検出された。周辺を精査したが掘り込みは認められなかった。663～665土器群は、谷部の中央部との境付近で検出した。トレンチ6-12～13、27層中にあたり、おおむね0.5m四方ほどの範囲で移動式かまどの大型破片がまとまって検出された。いずれも掘り込みは確認できなかった。また、664、665



- 772ピット
- 1 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混シルト (地山礫 (φ0.5～4cm) を含む、炭化物わずかに含む)
 - 2 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混シルト (地山礫 (φ0.5～2cm) を含む、植物質含む)
 - 3 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混シルト (地山ブロック60%含む、炭ブロック含む)
 - 4 7.5YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混シルト (10YR5/2 灰黄褐色 シルト混細砂～中砂50%含む、炭化物多く含む)
 - 5 10YR5/2 灰黄褐色 シルト混細砂～中砂 (10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混シルトを20%含む、炭化物若干含む)

第39図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図(7)

の南側では同じ面で須恵器甕の破片を中心とする830土器群も検出した。このほかにも同一層内から比較的大型の土器片が出土しており、造成などに伴うものと考えられる。

690遺物集中は、816土坑の東側で検出した。上面に鉄滓がまとまって存在し、下方に同一の礫を割った板石が4枚重なっていた(第41図)。包含層掘削中の確認であり、掘り込みは確認できなかったものの、何らかの遺構が伴った可能性がある。鉄滓は最大8cm四方ほどの大きさである。板石は厚さ2cm程度に割られていたが、被熱などの痕跡は認められなかった。

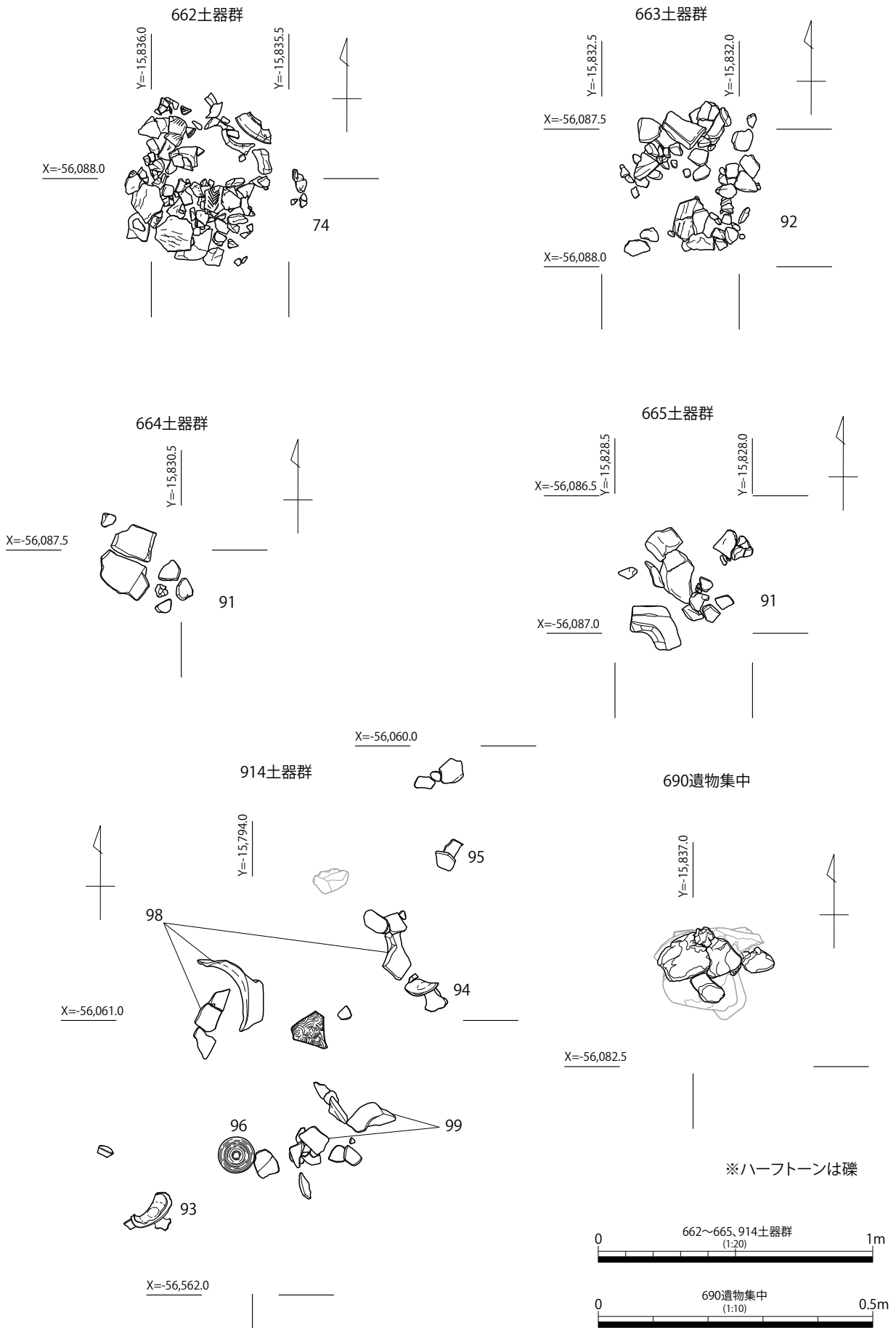
914土器群は、東部上段北よりで検出したもので、土師器、須恵器、移動式かまどの破片が、南北約1.8m、東西約1.3mの範囲にまとまっていた(第41図)。なお、この場所はすぐ東側で後世の削平により土層断面が露出しており、断面にかかって出土した須恵器長頸壺の胴部も、出土層位からこの土器群の一部と考えられる。これらの土器群は、神社横壁12層上面に面的に分布しており、長頸壺や高杯が良好な状態で検出されたほか、移動式かまどの口縁部から底部にかけて30cm以上残る破片などが存在している。何らかの遺構に伴うものと考えられ、柱穴は確認できなかったものの、建物の



第40図 2区 第2面検出遺構平面図、断面図（8）

床面などであった可能性が考えられる。

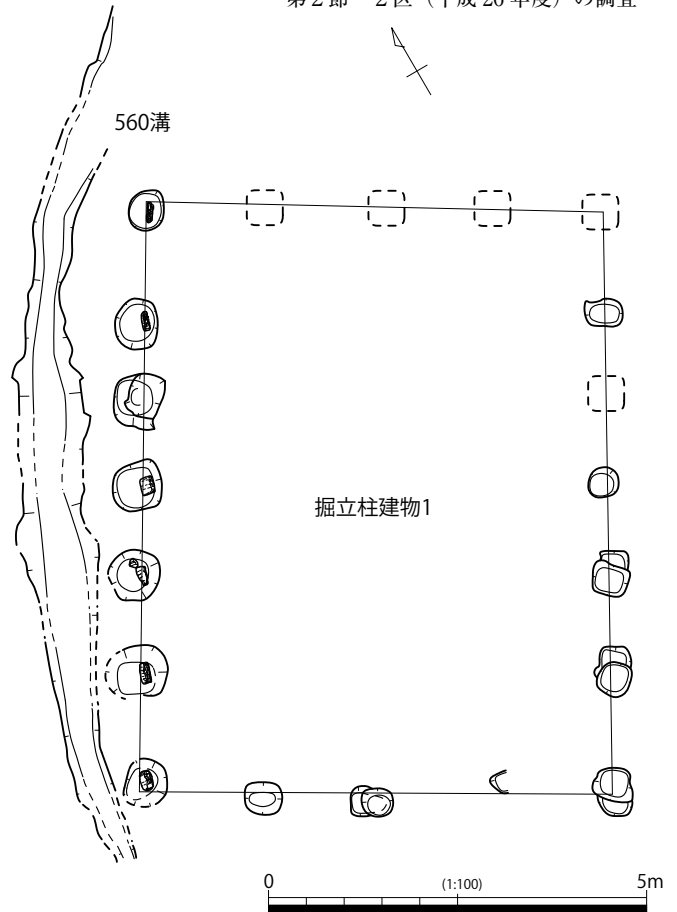
853 炉は東部平坦面上段で検出した（第35図）。検出面は神社横壁8層上面である。被熱範囲は長径0.27m、短径0.18mのややいびつな楕円形を呈する。上面は既に削平を受け、炉底部のみが残存している状況と考えられる。高温により堅く焼き締まっており、深さ0.05mまで被熱範囲は続く。最も内側は強く還元を受けて暗灰黄色を呈し、外側へ黒褐色、暗褐色へと漸移していく。炉の北側を切っている479ピット、同一面で検出した472ピットの埋土から多量の炭が検出されたほか、472ピット内からは完形の鞆羽口が出土している（第33図）。853 炉は、長時間にわたり高温を使用した痕跡が認められることから、「鍛冶炉」であった可能性が高い。下部構造を作らないことからすれば、小鍛冶を行っていたのであろう。操業時期は明らかではないが、古代末～中世にかけてのものと考えられる。



第41図 2区 第2面直上遺物出土状況図

4 小結

2区第1面では、中央部から東部にかけての平坦面上で溝4条、土坑8基、柱穴52基、ピット235基を検出した。中央部平坦面で検出した柱穴およびピットは特定箇所集中するものではなく、柱痕跡が残るものもみられることから、建物を構成していたものも多いと考えられるが、上面が削平されているとみられることもあり、建物は復元できなかった。また、時期も単一ではなく、複数の時期のものが存在すると考えられる。西側で見つかった21溝、39溝、44溝は復元するとプランは「日」字状を呈すると考えられる。時期は不明だが、建物の布掘基礎の可能性はある。こけら経が出土した661土坑や640土坑は、丘陵先端部分に位置する比較的大型の土坑で、丘陵と反対側に溝が取り付く。この部分に礫を積むなど、構造が共通する。現在も湧水があり、耕作に伴う貯水施設として機能した可能性が考えられる。



第42図 掘立柱建物1、560溝の関係

第2面の遺構としては、西部と東部において多くの土坑、柱穴、ピットなどを検出した。とくに、東部上段では溝と多数の柱穴・ピットが重複していた。検出した遺構は、ピット347基、柱穴101基、土坑24基、土坑状変形1、溝6条、水田2筆、畦畔1条、土器群6、炉跡1などが主なものである。遺構の時期は、古墳時代後期～古代を中心とし、一部中世前半まで下ると考えられるものもあるが、時期不明のものも多い。

ピット・柱穴のほとんどは削平や遺構の重複などの結果、残念ながら建物を復元することはできなかった。柱穴に柱根が残るものもあり、多くの建物が建てられていたと考えられる。東部で掘立柱建物2棟が復元できた。1棟は6間×4間のやや大型の建物で、残存していた柱根は断面長方形であった点が注目される。

土坑は、内部に曲物を埋置したもの（421土坑）、壁面が被熱し埋土に炭化物が多量に混じるもの（816・865土坑）などがあり、前者は井戸や貯水施設、後者は何らかの焼成遺構の可能性が考えられる。また、東端で検出した950・954土坑は、隣接する4区の調査で竪穴建物の掘方であったことが判明した。965土坑や962土坑なども4区検出の遺構と合わせ、掘立柱建物に伴うものであった。

東部の上段で検出した3条の溝のうち、土器片が多数検出された524溝は、緩斜面から平坦面へ移行する部分に掘削された素掘り溝で、524溝より西は若干のピットや柱穴が検出されたのみで、遺構が希薄であった。平坦面を区切る区画溝であった可能性が考えられる。

調査区東南部では水田とそれに伴う畦畔を確認した。古代～中世頃のものと考えられる。次節で報告する3区や隣接する4区でも同時期の水田を確認しており、丘陵裾部を居住域に、谷部などの低地を生産域として利用していた状況が復元できる。

第Ⅳ章 調査の成果

第4表 2区 遺構一覧

第1面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
1	柱穴	円形	31	25	コ	14	
7	柱穴	円形	41	-	コ	58	攪乱内
18	柱穴	円形	18	8	U	7	半分のみ
23	柱穴	円形	41	34<	U	30	23柱穴<24柱穴
26	柱穴	円形	30	-	U	24	攪乱溝に切られる
28	柱穴	円形	38	-	U	36	
50	柱穴	円形	41	39	U	50	根石、礫、石の下で深さ53
52	柱穴	円形	22	20	逆台	31	
54	柱穴	楕円形	34	25	逆台	22	根石
60	柱穴	楕円形	49	36	U	57	
63	柱穴	楕円形	43	37	逆台	25	
64	柱穴	楕円形	26	21	逆台	22	
76	柱穴	楕円形	31	26	逆台（漏斗状）	32	
77	柱穴	隅丸台形	38	36	コ	51	
79	柱穴	隅丸方形	40	33	五角	41	
90	柱穴	円形（不整）	48	42	逆台	66	
94	柱穴	楕円形	40<	30<	逆台	56	トレンチ2に切られる
111	柱穴	隅丸三角形（不整）	21	17	コ	17	
117	柱穴	楕円形（角張る）	25	25	逆台	28	
127	柱穴	円形（不整）	30	28	コ	24	
140	柱穴	不整円形	26	24	U	23	
141	柱穴	隅丸三角形	33	29	逆台	25	141柱穴>142柱穴
143	柱穴	円形	16	15	逆台	8	
186	柱穴	楕円形	33	29	コ	39	
198	柱穴	楕円形？	27<	25	U	28	199柱穴>198柱穴
199	柱穴	楕円形	33	22	U	31	
204	柱穴	楕円形（角張る）	26	22	逆台（斜）	19	
205	柱穴	隅丸方形	23	22	逆台	16	205柱穴>206柱穴
206	柱穴	隅丸方形	23	18<	U	19	
208	柱穴	円形	27	25	逆台	23	
209	柱穴	円形（角張る）	26	24	逆台	21	
210	柱穴	隅丸方形	26	26	コ	28	
212	柱穴	隅丸三角形	28	24	五角（段）	10	212柱穴>384柱穴
213	柱穴	楕円形（やや三角）	31	28	逆台	11	
226	柱穴	隅丸方形	25	19	U（傾）	33	
240	柱穴	円形	22	-	逆台	16	
258	柱穴	隅丸方形	36	31	五角	26	
274	柱穴	円形	37	32	U	16	
283	柱穴	円形	44	39	V（浅）	17	
284	柱穴	楕円形	36	28	U（尖）	47	
286	柱穴	円形	34	-	逆台	19	
287	柱穴	楕円形	31	28	U（細長）	47	
288	柱穴	楕円形	28	23	逆台	10	
305	柱穴	円形	27	25	U	28	
307	柱穴	円形	29	-	U	22	
326	柱穴	楕円形	23	18	五角	12	
332	柱穴	双円形	62	41-29/37	U	47-44	
338	柱穴	楕円形	24	19	逆台	20	
361	柱穴	円形	27	25	U	27	
370	柱穴	円形	48	44	逆台（不整）	29	
373	柱穴	円形？	30	-	逆台（長）	52	トレンチ4に切られる
492	柱穴				コ？	40	壁面に入り込む、平面図上では第2面に反映
2	ピット	円形（角張る）	32	28	逆台	10	
5	ピット	円形	15	-	U	4	
6	ピット	円形	26	23	U	35	攪乱内
8	ピット	円形	28	26	逆台	55	攪乱内
9	ピット	楕円形	45	35	逆台（斜）	33	攪乱内
10	ピット	隅丸長方形	20	15	V（斜）	15	
11	ピット	楕円形	18	13	U	16	
12	ピット	楕円形	13	11	U（角張る）	31	
13	ピット	楕円形	17	13	逆台	4	
14	ピット	楕円形	18	17	逆台	6	
15	ピット	円形	14	-	不整形	4	
16	ピット	円形	12	-	U	14	
17	ピット	楕円形	19	14	平行四辺形	6	
19	ピット	不整楕円形	37	31	コ	42	
24	ピット	楕円形	62	37	逆台	36	
29	ピット	楕円形	24	20	逆台	6	

第2節 2区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
30	ビット	楕円形	36<	34<	コ	42	トレンチ2、攪乱で切られる、360ビット>30ビット
32	ビット	隅丸方形	20	18	不整（逆台）	14	
33	ビット	円形	24	-	コ（斜）	26	
34	ビット	円形	20	18	U	14	
38	ビット	円形	35	30	コ（斜）	41	断面やや不整形
43	ビット	楕円形	21	18	V（丸）	14	
45	ビット	円形	22	-	逆台	9	
47	ビット	円形	19	18	逆台（凹凸）	9	
48	ビット	円形	20	16	V	9	
51	ビット	円形	12	-	V	9	
53	ビット	円形（不整）	28	24	U	26	
55	ビット	円形	21	-	V（偏）	9	
56	ビット	楕円形	18	12	V（丸）	11	
57	ビット	円形	16	-	V	26	
58	ビット	円形	23	-	U	11	60ビット>58ビット
59	ビット	楕円形	23<	22	U	17	60ビット>59ビット
61	ビット	円形	19	-	V	10	
62	ビット	楕円形	34	28	逆台（尖）	15	
65	ビット	円形？	30	-	U	19	攪乱に切られる
67	ビット	楕円形	35	24	皿状	8	
68	ビット	楕円形（角張る）	35	32	コ～U	22	
69	ビット	隅丸三角形（円）	20	19			69ビット>70ビット
70	ビット	楕円形	22	15	V（丸）	5	70ビット>71ビット？
71	ビット	楕円形	30	19	逆台（U）	10	
72	ビット	楕円形	21	19	U	9	
73	ビット	楕円形	20	17	U	10	
74	ビット	円形？	27	-	U	21	攪乱に切られる
75	ビット	円形	21	19	V	9	
78	ビット	楕円形	20	13	V	7	
82	ビット	円形	34<	33<			柱穴、トレンチ2に切られる
83	ビット	円形（不整）	19	17	逆台	23	
84	ビット	隅丸方形	22	22	逆台	7	
85	ビット	円形	33	32	U（段）	27	
86	ビット	楕円形	24	19	逆台？	3	
87	ビット	円形？	25	20<	U	5	
88	ビット	円形	25	-	U	5	88ビット>87ビット
89	ビット	円形	25	23	U	12	
91	ビット	楕円形	36	29	逆台	22	
93	ビット	楕円形	28	24	コ（段）	16	
96	ビット	？	12<	6<	コ	25	96ビット<97・99ビット、一部のみ
97	ビット	隅丸三角形？	32	24<	逆台	27	97ビット<99ビット
99	ビット	円形	48	42			根石
100	ビット	楕円形（不整）	39	33	U	61	
102	ビット	楕円形	32<	22	U	24	攪乱に切られる
103	ビット	円形	24<	-	逆台	15	攪乱に切られる
104	ビット	円形（角張る）	20	18	U	14	
105	ビット	楕円形	28	20	逆台（偏）	30	攪乱に切られる
106	ビット	円形	25	-	逆台	11	攪乱に切られる
107	ビット	隅丸三角形（不整）	23	20	U	4	
108	ビット	円形	18	-	逆台	14	
109	ビット	楕円形	25	21	U	21	
110	ビット	楕円形（三角）	25	19	逆台（斜）	9	
112	ビット	楕円形	18	16	不整（逆台）	5	
113	ビット	隅丸三角形（不整）	28	25	U	10	
114	ビット	円形	20	19	U	11	
115	ビット	円形	12	-	U	4	
116	ビット	円形	17	15	逆台	5	
119	ビット	楕円形	26	16	五角	13	
120	ビット	楕円形	28	22	コ	16	
121	ビット	隅丸方形	21	18	V（浅、不整）	6	
122	ビット	円形	20	-	U	13	
123	ビット	円形	19	-	逆台	3	
124	ビット	円形	15	-	U	10	
125	ビット	円形	15	-	コ	13	
126	ビット	円形	28	-	U	13	
128	ビット	楕円形	20	17	逆台	18	128ビット>129ビット
129	ビット	隅丸三角形（不整）	32	29	U	51	131ビット>130ビット
130	ビット	楕円形	46	38	U	66	
131	ビット	楕円形	27	23	コ	17	攪乱に切られる
132	ビット	楕円形？	30<	16<	不整（逆台）	6	

第IV章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
133	ピット	隅丸長方形	47	28	U	43	
134	ピット	楕円形	40	28	逆台	28	
135	ピット	隅丸三角形	23	21	逆台	13	
136	ピット	隅丸三角形	24	20	U (尖)	12	一段下がる
137	ピット	円形	18	-	逆台	10	
139	ピット	楕円形	18	15	逆台	8	植生痕?
142	ピット	楕円形	29	20	逆台	12	
145	ピット	円形	18	17	V (浅)	9	
147	ピット	楕円形	34	24	V (浅)	10	
148	ピット	隅丸方形	19	15	U	12	148ピット>149ピット
149	ピット	楕円形	20<	18	V (浅)	3	
150	ピット	楕円形	19	12	U	8	
151	ピット	楕円形 (角張る)	16	12	逆台	11	
152	ピット	楕円形 (角張る)	24	19	U	20	
153	ピット	楕円形	18	15	逆台	11	
154	ピット	楕円形 (角張る)	31	23	V (偏)	30	
155	ピット	楕円形	27	25			
156	ピット	楕円形	33	27	U	37	攪乱に切られる
157	ピット	隅丸方形	27	23	コ (凹凸)	20	
158	ピット	楕円形 (角張る)	24	20	逆台	18	
160	ピット	円形	16	14	U	9	
161	ピット	楕円形	14	11	V	8	
162	ピット	円形	17	15	逆台	10	
163	ピット	楕円形	19	16	U	13	
164	ピット	円形?	29	19<	逆台 (凹凸)	11	攪乱に切られる
165	ピット	楕円形	39	33	逆台	23	
166	ピット	楕円形	21	15	U	9	
167	ピット	楕円形	20	16	U	10	
168	ピット	円形	13	-	コ	10	
173	ピット	隅丸方形	16<	13<	コ	12	攪乱に切られる
174	ピット	円形	16<	14<	コ (不整)	13	攪乱に切られる
175	ピット	隅丸方形	21	20	コ	20	
176	ピット	円形	20	-	逆台	13	
177	ピット	楕円形 (三角)	33	25	逆台 (凹凸)	14	
178	ピット	円形	25	23	不整 (逆台)	15	
179	ピット	不整円形	24	22	不整 (逆台)	14	
180	ピット	円形	24	22	U	10	
181	ピット	楕円形	32	23	逆台 (U)	13	
182	ピット	円形	23	22	不整 (逆台)	18	
183	ピット	楕円形	23	17	不整 (逆台)	13	
184	ピット	楕円形	32	27	逆台	25	
185	ピット	不整円形	25	21	V	15	
187	ピット	楕円形 (三角)	37	33	逆台 (斜)	31	
188	ピット	楕円形	23	17	逆台 (斜)	33	
189	ピット	楕円形	18	15	V	12	189ピット>190ピット
190	ピット	楕円形	24<	17	逆台	15	
191	ピット	楕円形	35	29	U	19	
192	ピット	円形 (角張る)	17	-	逆台	18	
193	ピット	円形	18	-	逆台	6	
194	ピット	楕円形	14	10	U	7	
195	ピット	円形	25	-	コ	13	攪乱に切られる
197	ピット	隅丸方形	14	10	V	12	
201	ピット	楕円形 (不整)	30	23	U (角張る)	21	
202	ピット	楕円形	26	22	V (偏)	20	
203	ピット	楕円形	31	26	V	34	
207	ピット	隅丸三角形	23	22	逆台 (不整)	10	
211	ピット	楕円形 (角張る)	23	19	U	23	211ピット>359ピット
214	ピット	楕円形	30	20	U	40	攪乱に切られる
215	ピット	楕円形	19	14	V (丸・浅)	6	
217	ピット	楕円形	32	29	U (皿)	11	
219	ピット	隅丸三角形	18	15	U (皿)	3	
220	ピット	不整形	51	45	逆台	28	
221	ピット	楕円形 (不整)	35	26	U	20	
222	ピット	楕円形	31	20	U	29	
223	ピット	楕円形	34	28	U (偏)	12	
224	ピット	隅丸三角形	28	27	逆台 (段)	28	
225	ピット	楕円形	23	21	逆台 (凹凸)	13	
227	ピット	楕円形	29	24	U	47	
228	ピット	楕円形	29	25	不整	20	根?
229	ピット	楕円形	18	13	V (浅・偏)	6	

第2節 2区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
230	ビット	楕円形（角張る）	22	21	逆台（凹凸）	10	
232	ビット	楕円形	15	10	逆台	3	
233	ビット	不整円形	40	37	五角形	26	
234	ビット	円形	25	24	V（丸）	21	
235	ビット	楕円形	30	27	V（浅）	15	
238	ビット	円形	18	-	U	7	239ビット<238ビット
239	ビット	楕円形	25<	18	逆台	9	
241	ビット	円形	23	-	U	29	
244	ビット	楕円形	21	15	コ	15	
245	ビット	楕円形	22	17	逆台	15	
246	ビット	隅丸方形	23	23	逆台	15	246ビット>376ビット
248	ビット	楕円形	22	15	逆台	5	375ビット>248ビット
252	ビット	円形	39	-	逆台（斜）	23	
257	ビット	楕円形	29	25	逆台（W）	6	
259	ビット	楕円形	44	31	V（浅・丸）	20	根石
265	ビット	円形	24	-	U	30	
272	ビット	隅丸三角形	32	31	不整（U+逆台）	13	
278	ビット	楕円形	21	19	U	10	
280	ビット	円形	22	-	U	30	
281	ビット	円形	18	-	U	17	
282	ビット	楕円形	27	22	逆台（W）	10	
291	ビット	隅丸方形	31	31	U	32	
293	ビット	楕円形	30	23	逆台	21	トレンチ4内
303	ビット	楕円形	41<	30	U	37	
304	ビット	円形	25	-	U	38	304ビット>303ビット
306	ビット	円形（隅丸方形）	33	-	U（皿状）	6	
309	ビット	円形	18	-	U（皿状）	4	
310	ビット	楕円形	20	15	U	15	
311	ビット	楕円形	35	28	U（皿状）	8	
312	ビット	円形	26	-	U	8	
314	ビット	円形	17	-	V（丸）	18	
318	ビット	円形	56	49			攪乱の影響で掘形が変形
319	ビット	楕円形	32	26	逆台	14	鳥取市試掘トレンチで検出
320	ビット	隅丸三角形	19	16	U（尖）	18	
321	ビット	楕円形	31	23	V（浅）	9	
322	ビット	楕円形（角張る）	38	31	不整形（W）	23	
323	ビット	楕円形（角張る）	28	17	U（尖）	17	
324	ビット	円形	23	20	U（偏）	12	
327	ビット	円形（角張る）	22	21	逆台（偏）	13	
328	ビット	円形	21	20	U	20	
329	ビット	楕円形	37	29<	V	13	
330	ビット	円形（隅丸方形）	23	22	V	10	330ビット>329ビット
331	ビット	隅丸方形	25	22	不整形	14	植生痕？
335	ビット	楕円形	24	15	U（偏）	10	
336	ビット	隅丸長方形	27	15	逆台（W）	7	浅い皿状の落ち込み
337	ビット	楕円形	23	19	U	26	
339	ビット	楕円形	36<	33	逆台	14	側溝に切られる
340	ビット	楕円形	41	28<	U	6	攪乱に切られる
342	ビット	楕円形？	16<	17	V（浅）	4	攪乱に切られる
344	ビット	楕円形	20	15	V	14	
345	ビット	楕円形	15	11	V（浅）	6	
346	ビット	楕円形	19	15	V	10	
347	ビット	楕円形	24	21	U	24	
348	ビット	楕円形	20	18	U	11	
349	ビット	円形	29	28	U	31	
350	ビット	楕円形（角張る）	24	22	U（2段）	21	
351	ビット	楕円形（三角）	17	16	U	11	
352	ビット	円形（三角）	19	19	逆台	11	
355	ビット	円形	27	-	不整形	17	
356	ビット	円形	13	-	U（偏）	9	
357	ビット	楕円形	37	30	逆台（W）	14	根石？
358	ビット	楕円形	26	23	逆台	11	
359	ビット	？	13<	8<	U	23	359ビット<211ビット
360	ビット	円形	17	-	U	23	
362	ビット	円形	24	-	逆台	17	
363	ビット	楕円形	26	19	U	6	
364	ビット	円形	19	16	U	16	
371	ビット	隅丸方形	21	19	逆台	32	
372	ビット	隅丸方形	30	28	逆台	31	
375	ビット	楕円形（偏）	36	28	U	26	根石？

第IV章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
376	ピット	隅丸三角形	33	28	逆台 (皿状)	12	246ピット>376ピット
377	ピット	隅丸方形	23	22	V (丸)	21	
384	ピット	円形?	31	-			212ピット>384ピット
385	ピット	楕円形	32	19	コ	20	
386	ピット	隅丸三角形	28	26	U	29	
387	ピット	円形	46	44	コ (+V)	53	
388	ピット	楕円形	30	26	U	7	
389	ピット	楕円形	33	29<	逆台	10	
390	ピット	円形	50	48	皿状	16	390ピット>389ピット
4	土坑	楕円形	53	39	コ	9	礫
46	土坑	隅丸長方形	72<	53	逆台	29	攪乱に切られる、復元長95
250	土坑	隅丸三角形	84	84	U (斜)	30	
267	土坑	楕円形	110	56	U (斜)	15	
269	土坑	円~隅丸方形	63	53	コ	6	
270	土坑	隅丸長方形	143	108	逆台	35	
374	土坑	隅丸方形	66	50	逆台	17	
661	土坑						

第2面

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
294	柱穴	隅丸方形	59	45<	V	59	柱根残存、294柱穴>516柱穴
296	柱穴	円形 (角張る)	68	67	コ	58	掘立柱建物1、板状柱根が残存
297	柱穴	楕円形	36	29	U	11	
298	柱穴	楕円形	29	27	U	18	
300	柱穴	円形 (角張る)	56	47	コ	32	掘立柱建物1、板状柱根が残存
313	柱穴	楕円形	90<	54	逆台 (不整)	58	
315	柱穴	楕円形	30	26	コ	31	掘立柱建物2
317	柱穴	不整形	27	25	逆台	15	掘立柱建物2、柱根残存
401	柱穴	楕円形	35	28	浅いV	15	398土坑<401柱穴
403	柱穴	隅丸方形	33	30	逆台	35	
405	柱穴	隅丸方形	29	27	浅いV	11	
406	柱穴	円形	30	28	U	10	
409	柱穴	隅丸方形 (菱)	42	33	逆台	25	柱根残存
428	柱穴	楕円形	51<	29<	V (不整)	55	側溝に切られる
429	柱穴	楕円形	24	11<	V	22	掘立柱建物2、トレンチ4に切られる
430	柱穴	円形	54	53	U	64	
431	柱穴	楕円形 (不整)	30	21	U (不整)	28	掘立柱建物2
433	柱穴	円形 (角張る)	43	40	皿状	3	掘立柱建物1
435	柱穴	隅丸方形	37	26<	皿状	12	掘立柱建物1
436	柱穴	隅丸方形	49	42	逆台	12	掘立柱建物1、436柱穴>435柱穴
439	柱穴	不整隅丸方形	49	42	逆台	20	掘立柱建物1
440	柱穴	隅丸方形	45	43	逆台	27	掘立柱建物1、440柱穴>439柱穴
441	柱穴	楕円形	47<	24	?	5	掘立柱建物1
442	柱穴	不整隅丸方形	54	44	逆台	19	掘立柱建物1、442柱穴>441柱穴
443	柱穴	楕円形	30<	21<	皿状	6	掘立柱建物1、トレンチ5に切られる
444	柱穴	楕円形	42	37	逆台	16	掘立柱建物1、根固め石・柱根残存
446	柱穴	隅丸方形	50	43	逆台	28	掘立柱建物1
454	柱穴	不整円形	33<	35	コ	43	柱根残存、454柱穴<456柱穴
456	柱穴	隅丸方形	48	41	U	40	
462	柱穴	隅丸方形	50	36	逆台	19	掘立柱建物1、攪乱に切られる
473	柱穴	楕円形 (角張る)	50	49	U	41	477柱穴・933ピット<473柱穴
475	柱穴	楕円形	23	18	逆台 (不整)	21	476ピット<475柱穴
477	柱穴	隅丸方形	61<	48	U (凹凸)	38	
478	柱穴	楕円形	38	28	U	49	
501	柱穴	不整形	87<	77	逆台	30	504ピット<501柱穴<490ピット
516	柱穴	隅丸方形	75	54<	逆台	75	掘立柱建物1
522	柱穴	楕円形	73	55	U (尖)	44	500溝・523ピット<522柱穴<525・526・527ピット
539	柱穴	楕円形	38	31	逆台 (斜)	20	
544	柱穴	不整隅丸方形	68	65	逆台	53	915柱穴・542・898・545・520ピット・500溝<544柱穴
548	柱穴	楕円形	49	47	逆台	23	520ピット・551柱穴<548柱穴<545ピット
551	柱穴	楕円形	70<	73	逆台	35	根石
554	柱穴	楕円形	89<	59<	逆台 (五角)	50	554柱穴<500溝
562	柱穴	隅丸方形	65	63	コ	82	掘立柱建物1、板状柱根が残存
580	柱穴	楕円形	87	61	逆台 (斜)	57	柱根が残存、583ピット<580柱穴
585	柱穴	隅丸方形	67<	68	逆台	95	掘立柱建物1、板状柱根が残存、攪乱
592	柱穴	楕円形	33	23	U (不整)	37	
599	柱穴	楕円形	30	20<	逆台 (斜)	45	柱根が残存、599柱穴<650土坑
601	柱穴	楕円形	23	20	U (尖)	37	
605	柱穴	円形	40	-	逆台	14	604ピット・500溝<605柱穴
608	柱穴	楕円形	39	35	逆台	56	
621	柱穴	隅丸方形	50<	46	U	93	掘立柱建物1、板状柱根が残存、621柱穴<618・892ピット

第2節 2区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
623	柱穴	円形	27	24	コ（尖）	18	624・892ピット<623柱穴
636	柱穴	円形	21	20	U	15	
639	柱穴	楕円形	28	15<	U	18	639柱穴<638ピット
644	柱穴	楕円形	23	20	コ（斜）	27	650・660土坑<644柱穴
649	柱穴	楕円形	23	22	V	17	
654	柱穴	円形（角張る）	69	67	逆台	84	掘立柱建物1、板状柱根が残存、655ピット<654柱穴<574ピット
658	柱穴	楕円形	31	25	逆台（斜）	30	658柱穴<657
659	柱穴	楕円形	27	23	U	24	
660	柱穴	楕円形	32	19	U	28	600土坑<660柱穴
673	柱穴	隅丸方形	26	23	U（偏）	21	
676	柱穴	楕円形	33	27	逆台	21	
684	柱穴	隅丸台形（不整）	31	27	V	49	
691	柱穴	隅丸三角形（楕円）	32<	31	逆台	21	
702	柱穴	楕円形	32	30	U（逆台）	53	702柱穴>703ピット
706	柱穴	楕円形	22	19	コ（の下にU）	21	砥石（根石?）、705ピット<706柱穴
711	柱穴	隅丸方形	21	21	逆台	26	
714	柱穴	楕円形（隅丸方形）	31	29	逆台	10	
715	柱穴	楕円形	42	35	逆台	60	
718	柱穴	楕円形	41	34	U	30	
719	柱穴	隅丸三角形	32	31	U	47	
720	柱穴	円形（三角）	33	30	U	8	根石、下に829柱穴
735	柱穴	楕円形	18<	21	U	21	735柱穴<736ピット
775	柱穴	隅丸方形	45	43<	コ～U	34	礎板、トレンチ6に切られる
790	柱穴	楕円形（三角）	61	46	U	40	根石
798	柱穴	楕円形	43	31	U	33	
807	柱穴	円形（角張る）	31	29	逆台	10	
829	柱穴	円形	25	21	逆台	20	根石、720柱穴の下
834	柱穴	楕円形	36	33	U	27	
836	柱穴	楕円形	77	42	コ	33	柱根残存
848	柱穴	隅丸方形（円）	47	44	V	27	848柱穴<847
854	柱穴	隅丸方形	35	31	コ	35	柱根残存
855	柱穴	隅丸台形	43	41	U	25	
856	柱穴	楕円形	39	34	コ（五角）	17	
868	柱穴	楕円形	50<	41	逆台8段）	18	掘立柱建物1、根固め石・柱根残存、868柱穴<444柱穴
875	柱穴	隅丸方形	43	39<	逆台	11	柱根残存、面取り
876	柱穴	楕円形	22	20	逆台	21	柱根残存
881	柱穴	隅丸方形	40<	27<	逆台	37	柱根残存、トレンチ3に切られる、941土坑<881柱穴
883	柱穴	楕円形	114	71	逆台（偏）	65	柱根残存、911ピット<883柱穴<587・590ピット
910	柱穴	楕円形	48	29	逆台（浅）	16	
913	柱穴	楕円形	41<	37	コ（尖）	50	555ピットの下、913柱穴<554柱穴
915	柱穴	隅丸方形	26	24	U	16	544柱穴の下
920	柱穴	楕円形	22	20	U	23	
921	柱穴	円形（角張る）	23	-	逆台	22	490ピットの下
922	柱穴	楕円形	43<	37	U	34	根石?、467ピットの下
928	柱穴	楕円形	34	20<	U	39	560溝<928柱穴<476・927ピット
942	柱穴	隅丸三角形～台形	46	46	逆台	36	柱根残存
944	柱穴	楕円形	50	30<	コ（尖）	35	矢板に切られる
945	柱穴	隅丸長方形	70	43<	逆台	31	矢板に切られる
958	柱穴	楕円形	45	38	コ	51	
968	柱穴	楕円形	54	54	五角（U）	25	水田の下、967ピット<968柱穴
31	ピット	円形	43<	39<	コ	51	トレンチ2にかかる
236	ピット	楕円形（不整）	49	43	U	31	
295	ピット	楕円形	25	17	U	20	
299	ピット	楕円形	35	26	V（浅）	9	
392	ピット	不整円形	52	48<	逆台（偏）	36	側溝に切られる
393	ピット	楕円形	38<	27<	逆台	26	側溝に切られる
394	ピット	楕円形	50	40<	U	24	
397	ピット	隅丸三角形（長）	60	36	逆台（偏）	32	394ピット<397ピット
402	ピット	楕円形	28	24	逆台	8	
404	ピット	楕円形（三角）	29	21	逆台	19	
408	ピット	楕円形	23<	31<	U	24	408ピット<409柱穴
410	ピット	楕円形	16	11	V（丸）	10	
411	ピット	楕円形	11	9	逆台	4	
412	ピット	楕円形（菱）	39	29	不整（W）	14	根?
413	ピット	楕円形	17	11	逆台	3	
414	ピット	隅丸台形（円）	18	17	V（浅）	4	
415	ピット	隅丸方形（円）	43	39	逆台	22	側溝に切られる
416	ピット	楕円形	56<	56	逆台（不整）	33	416ピット<415ピット
420	ピット	楕円形	24	11<	コ（丸）	16	攪乱に切られる、872ピット<420ピット
422	ピット	円形	33	-	逆台（皿）	9	

第IV章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
424	ピット	楕円形	47<	18<	逆台?	39	433 柱穴に切られる
425	ピット	隅丸方形	37	30	逆台	12	425 ピット <426 ピット
426	ピット	楕円形	15	13	逆台(偏)	12	
434	ピット	楕円形	40	37	皿状(浅)	3	
437	ピット	不整形	34	28	逆台	6	切り合う
438	ピット	楕円形(不整)	28	17<	U(不整)	18	切り合う
445	ピット	楕円形	41	36	V(浅)	10	
448	ピット	円形	41	-	コ	13	448 ピット <447 土坑・449 ピット
449	ピット	隅丸三角形	50	50	U(偏)	14	
450	ピット	隅丸長方形	28	21	コ	8	
451	ピット	隅丸方形	30	30	U	22	450 ピット >451 ピット
452	ピット	隅丸長方形	59	39	コ	16	
457	ピット	円形	42	41	V(凹凸)	20	
458	ピット	?	12<	2<	逆台	8	トレンチ壁面
459	ピット	隅丸三角形	32	26	V(浅)	5	459 ピット <878 ピット
460	ピット	隅丸台形	37	32	逆台	7	
463	ピット	楕円形	25	19	逆台(傾)	12	
465	ピット	楕円形(半月)	25	16	逆台	15	
466	ピット	楕円形	25	12<	U	10	
467	ピット	隅丸方形	52	38	コ	14	466 ピット <467 ピット?
469	ピット	楕円形(三角)	24	21	コ(斜)	18	
470	ピット	楕円形?	12<	15	U	17	一部壁に
471	ピット	隅丸方形?	17<	21	U(逆台)	18	一部壁に
472	ピット	楕円形	47	44	逆台	27	輪羽口出土
476	ピット	隅丸方形	69	33	U	20	560 溝・927 ピット・928 柱穴 <476 ピット <475 柱穴
479	ピット	隅丸方形	41	35	U(W)	18	853 炉を切る
482	ピット	楕円形	48	42	逆台	27	
485	ピット	楕円形?	73<	19<			壁へ続く
489	ピット	楕円形?	43<	20<	U	11	489 ピット <490 ピット
490	ピット	隅丸長方形	53	43	逆台(コ)	24	下に 921 柱穴
491	ピット	楕円形	81	53<	逆台(段)	31	攪乱に切られる、491 ピット <482・489・490 ピット
504	ピット	円形(やや楕円)	26<	30	U	86	504 ピット <501 柱穴
507	ピット	隅丸長方形?	36<	9<	U	45	トレンチ4にかかる、504 ピット <507 ピット
508	ピット	楕円形	22<	32<	V(丸)	36	トレンチ4にかかる
509	ピット	隅丸方形	44	34<	U	30	トレンチ4にかかる、560 溝に先行
512	ピット	楕円形	32<	8<			攪乱で切られる
514	ピット	隅丸方形(不整)	31	27	逆台(W)	14	
520	ピット	隅丸方形	67<	50<	逆台(段)	45	上部はトレンチ4、520 ピット <545 ピット・544・548 柱穴
523	ピット	円形?	25	-	逆台(W)	6	523 ピット <522 柱穴
525	ピット	円形	12	17	U	14	トレンチ4にかかる
526	ピット	円形?	23<	8<	U	17	トレンチ4にかかる
527	ピット	楕円形?	32<	16<	U?	12	527 ピット <526 ピット・500 溝
528	ピット	隅丸三角形	21	21	U	12	
529	ピット	隅丸五角形	22	19	V	29	
530	ピット	円形(角張る)	46	45	逆台(不整)	13	
534	ピット	楕円形	14<	21<			攪乱で切られる
537	ピット	隅丸三角形(円)	26	24	コ	37	
538	ピット	隅丸台形	24	24	U	18	536 土坑 <538 ピット
542	ピット	楕円形	61<	40	逆台	13	542 ピット <544 柱穴
543	ピット	円形	14	-	U	11	
545	ピット	隅丸方形?	54<	40<	逆台(偏)	33	548 柱穴・898 ピット <545 ピット
550	ピット	楕円形(三角)	58	46			
552	ピット	円形	20	19			550 ピット下層
555	ピット	隅丸三角形	48<	55<	逆台	17	下に 913 柱穴
565	ピット	楕円形	49	43	五角	50	
568	ピット	隅丸方形(円)	34	21	コ	13	
570	ピット	隅丸方形	32	26	不整(コ?)	12	
574	ピット	円形(角張る)	60	55	U(W)	23	
577	ピット	隅丸三角形~円	69	58<	U(段)	23	560 溝・895 ピット <577 ピット <578 ピット
578	ピット	隅丸三角形(不整)	50	48	U	85	
581	ピット	楕円形	34	27	V(偏・段)	17	
583	ピット	隅丸三角形	77	64<	U	52	攪乱に切られる、585 柱穴・905 ピット <583 ピット <580 柱穴
587	ピット	楕円形	41	32	逆台	9	
588	ピット	楕円形	27	22	U(尖)	26	
589	ピット	楕円形	25	22	コ	12	
590	ピット	楕円形	25	22	逆台(不整)	12	
591	ピット	隅丸方形?	18<	10<			591 ピット <590 ピット
594	ピット	楕円形(不整)	21	18	V	39	
597	ピット	隅丸長三角形	46	38	逆台(浅)	9	
604	ピット	円形?	52<	42<			604 ピット <605 柱穴

第2節 2区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
606	ピット	隅丸三角形	40	38<	U	17	606ピット<608柱穴
609	ピット	楕円形（三角）	19	16	U	14	
611	ピット	円形	22	-	逆台（段）	12	611ピット<612ピット
612	ピット	楕円形	71	50	皿状	9	612ピット<613・614ピット
613	ピット	楕円形（角張る）	24	21	コ（偏）	21	
614	ピット	円形	21	20<	U	17	攪乱に切られる
615	ピット	楕円形	25	21	コ	29	615ピット<624ピット
616	ピット	楕円形	45	39	U	76	618ピット<616ピット<617ピット
617	ピット	隅丸台形（楕円）	36	31	V（浅・偏）	10	
618	ピット	楕円形？	27<	29<	逆台（丸）	19	621柱穴<618ピット
624	ピット	楕円形（台形）	36	30<	U	28	892ピット<624ピット<623柱穴
627	ピット	円形？	25<	10<	V（浅・丸）	7	攪乱に切られる
628	ピット	楕円形	20	17	U	5	
629	ピット	円形	19	18	U（尖）	17	629ピット<628ピット
630	ピット	隅丸長方形	33	21	逆台	8	630ピット<631ピット
631	ピット	楕円形	25	21	逆台（U）	19	
637	ピット	楕円形	18	15	U	10	
638	ピット	楕円形	31	26	U	36	639柱穴<638ピット
645	ピット	楕円形	26	21	U	18	
647	ピット	楕円形（不整）	33	27	U	51	648ピット<647ピット
648	ピット	円形	16	-	U	11	
651	ピット	楕円形	21	19	U	21	
652	ピット	楕円形	22	18	コ（段）	17	
655	ピット	楕円形	39<	24<	逆台	14	655ピット<654柱穴
656	ピット	楕円形	26	13<	U？	13	656ピット<655ピット
666	ピット	楕円形	20	17	不整（U）	21	
667	ピット	楕円形（隅丸方形）	30	24	コ（丸）	25	
668	ピット	円形	23	21	U（偏）	16	
669	ピット	隅丸方形（円）	43	37	コ	43	
670	ピット	隅丸方形？	10<	13	U	11	
671	ピット	円形	17	-	逆台（丸）	13	670ピット<671ピット
672	ピット	隅丸方形	19	17	V	17	
674	ピット	楕円形	24	15	V	22	
675	ピット	不整楕円形	45	37	U	14	
677	ピット	溝状（長楕円）	61	17	V	8	
678	ピット	楕円形	20	15	逆台	7	
679	ピット	楕円形（三角）	27	25	Vにコが重なる	41	
680	ピット	楕円形	14	11	逆台	3	
681	ピット	円形（角張る）	27	-	逆台（段）	11	
682	ピット	隅丸台形	24	23	V	6	
683	ピット	隅丸方形	19	15	逆台（長）	32	根？
685	ピット	楕円形	20	16	逆台	18	
686	ピット	楕円形（三角）	22	20	逆台	4	
687	ピット	円形	16	-	V	13	
688	ピット	楕円形？	25	11<	U（傾）	22	トレンチ6の延長にかかる
689	ピット	円形？	26<	7<	逆台（コ？）	28	トレンチ2にかかる
692	ピット	隅丸方形（円）	35	31	逆台（尖）	18	最下層は根？
693	ピット	隅丸方形	18	16	U	11	
694	ピット	隅丸三角形	28	24	逆台	12	根石、695ピット<694ピット？
695	ピット	隅丸三角形	28	25	逆台	9	根石
699	ピット	楕円形（五角）	24	22	逆台	17	
700	ピット	円形（角張る）	41	38	コ	50	
701	ピット	隅丸方形	39	33	コ	25	
703	ピット	楕円形？	31<	22<	不整	15<	703ピット<702柱穴
704	ピット	楕円形	15	13	逆台（傾）	12	
705	ピット	隅丸方形（台）	24<	25	コ？	12	706柱穴<705ピット
707	ピット	楕円形	25	22	逆台	17	
708	ピット	円形	12	10	逆台（皿状）	2	
709	ピット	楕円形	21	18	逆台	10	
710	ピット	楕円形	30	26	逆台（偏）	18	
712	ピット	円形	15	14	逆台	8	
713	ピット	楕円形	17	15	V（偏）	6	
716	ピット	楕円形	37	29	逆台（傾）	33	
717	ピット	円形（三角）	17	-	U	9	
721	ピット	楕円形	28	23	逆台	22	
722	ピット	隅丸方形	27	22	逆台（傾）	12	
723	ピット	隅丸三角形（長）	44	29	U（傾、凹凸）	19	
724	ピット	隅丸平行四辺形	30	21	U	13	
725	ピット	隅丸方形（円）	30	30	U	10	
726	ピット	楕円形	47	39	逆台？（浅）	4	

第IV章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
728	ピット	楕円形	36	33	逆台	20	729ピット<728ピット
729	ピット	楕円形	38	26	V	21	
730	ピット	隅丸方形	23	22<	V	13	730ピット<731ピット
731	ピット	隅丸三角形	24	21	V(丸)	10	
732	ピット	楕円形	19	17	V(浅)	18	
733	ピット	円形	25	23	V	9	733ピット<732ピット
734	ピット	楕円形(涙滴)	21	15	U	4	
736	ピット	隅丸方形	18	16	U(段)	9	735柱穴<736ピット
737	ピット	楕円形	23	17	V	13	
738	ピット	楕円形	24	20	U	21	
740	ピット	楕円形	19	15	U	9	
741	ピット	楕円形	38	27	U	25	サブトレンチで切られる
742	ピット	隅丸台形	25	23	逆台	11	
743	ピット	楕円形	17<	20	U	13	サブトレンチで切られる
744	ピット	隅丸三角形	20	17	U	7	
745	ピット	楕円形	20	18	逆台(傾)	7	
746	ピット	隅丸三角形	21	20	U	21	
747	ピット	円形	23	-	U	19	
748	ピット	楕円形	20	17	U(不整)	11	
749	ピット	楕円形	24	13	コ	4	
750	ピット	隅丸三角形(楕円)	17	12	逆台(W)	5	
751	ピット	隅丸三角形	27	21	逆台(偏)	8	
752	ピット	隅丸三角形(台)	24	23	V	19	
755	ピット	隅丸方形(台)	47	44	逆台(丸)	13	
757	ピット	隅丸台形	17	17	U	10	
758	ピット	円形	16	15	逆台	10	
759	ピット	楕円形	36	30	コ(2段)	13	
760	ピット	楕円形(角張る)	30	29	逆台	13	
761	ピット	円形(角張る)	23	-	V	13	
762	ピット	隅丸三角形	17	17	コ(+V)	18	
763	ピット	楕円形	15	13	逆台(+V)	12	
764	ピット	隅丸三角形	23	19	V(浅・偏)	5	
765	ピット	隅丸五角形	35	31	逆台(2段)	9	
766	ピット	隅丸三角形	21	19	逆台	6	
767	ピット	楕円形	29	24	V(丸・偏)	17	
768	ピット	楕円形	19	14	コ	7	
769	ピット	楕円形	19	14	逆台	6	
770	ピット	隅丸方形	25	25	逆台	17	
771	ピット	楕円形	13	12	逆台	9	根石、771ピット<825ピット
772	ピット	楕円形	39	33<	U	41	根石、トレンチ1に切られる
773	ピット	楕円形	34	20<	逆台	19	774ピット<773ピット<775柱穴
774	ピット	楕円形	33	32	逆台(Vに近い)	12	774ピット<819ピット
776	ピット	隅丸方形	27	27	V(丸)	12	
777	ピット	楕円形	63	45<	コ	24	根石、777ピット<778ピット
778	ピット	楕円形	41	38	U	11	
779	ピット	楕円形	30	19	逆台	14	
780	ピット	楕円形	20	-	逆台	7	
781	ピット	楕円形	33	29	V(偏)	10	
782	ピット	楕円形(三角)	31	30	逆台	20	
784	ピット	隅丸方形	40	38	逆台	12	
785	ピット				逆台	14	
786	ピット	楕円形(不整)	25	21<	U	13	
787	ピット	楕円形(長方)	48	33	V(丸)	20	786ピット<787ピット
789	ピット	楕円形	38	30	逆台	6	
791	ピット	隅丸台形	15	13	V	7	792ピット<791ピット
792	ピット	楕円形	27	23	コ(丸)	9	
793	ピット	隅丸三角形	20	19	U	10	
794	ピット	楕円形	18	12	U	6	
795	ピット	?	21<	8<	U	13	トレンチ6に切られる
796	ピット	円形?	33	26<	U(段)	36	トレンチ6に切られる
797	ピット	円形	13	-	逆台	4	
799	ピット	隅丸五角形	26	23	U	7	
800	ピット	楕円形(三角)	18	16	逆台(長)	18	
802	ピット	円形(角張る)	17	-	逆台	6	
803	ピット	隅丸方形	28	26	V(偏)	23	
804	ピット	楕円形(三角)	30	27	逆台	39	
805	ピット	隅丸三角形	21	19	逆台	9	
806	ピット	円形(角張る)	25	-	逆台	13	
808	ピット	楕円形	32<	25	コ?	17	
809	ピット	隅丸三角形	18	12	逆台	7	

第2節 2区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
810	ビット	隅丸方形（台）	20	16	V（丸）	9	
811	ビット	隅丸方形	29	26	U	17	
812	ビット	隅丸三角形	18	18	U	7	
813	ビット	楕円形	19	16	V	8	
814	ビット	隅丸三角形	19	18	逆台（斜）	8	
815	ビット	楕円形	27	21	逆台	5	815ビット<813ビット
817	ビット	隅丸方形	29	19	U	14	729ビット<817ビット？
818	ビット	円形	15	-	逆台	6	
819	ビット	？	15<	6<	U	24	819ビット<773ビット<775柱穴
821	ビット	隅丸三角形	18	17	V（浅）	4	
822	ビット	楕円形	13	10	逆台（皿・浅）	3	
823	ビット	円形	12	-	逆台（皿・浅）	4	
824	ビット	隅丸台形	17	17	逆台	4	
825	ビット	楕円形（長方）	27	16	逆台	11	
826	ビット	？	16<	16<	？	37	トレンチ6で大半が削平？
827	ビット	楕円形？	28<	28<			トレンチ6で大半が削平、壁面にあり
828	ビット	楕円形（五角）	15	13	逆台（不整）	11	
831	ビット	円形	14	-	V	13	
832	ビット	楕円形	22<	16	V	6	832ビット<725ビット
833	ビット	楕円形	30	22<	逆台（不整）	17	トレンチ6に切られる
835	ビット	楕円形	38<	28	U（袋状）	44	835ビット<836柱穴
837	ビット	隅丸方形	22	19	逆台（斜）	22	
838	ビット	円形（三角）	22	22	逆台（斜）	10	
839	ビット	隅丸方形	24	23	U	18	
840	ビット	楕円形	31	25	U	10	
841	ビット	楕円形	34<	26	逆台	16	攪乱に切られる
842	ビット	楕円形	23	19	逆台	19	
843	ビット	隅丸方形	18	17	逆台	13	
844	ビット	円形	19	18	五角	21	844ビット<840ビット？
845	ビット	円形？	41	36<	コ	29	
846	ビット	円形	54	-	コ	27	846ビット<848柱穴
847	ビット	楕円形（三角）	34	26	V（浅）	19	846ビット<847ビット
849	ビット	円形？	35<	20<	コ（丸）	20	849ビット<845ビット、攪乱に切られる
850	ビット	楕円形？	26<	15<	U（角張る）	25	トレンチ6に切られる
851	ビット	円形？	17<	-	？	27	トレンチ6に切られる
852	ビット	隅丸台形	42	37	U（W）	15	756土坑の下
857	ビット	楕円形	15	13	U（長）	22	
858	ビット	不整形	44	16<	U（凹凸）	11	側溝にかかる
859	ビット	不整形	27<	17	U	9	側溝にかかる
862	ビット	隅丸三角形	24	23	U	11	862ビット<854柱穴
863	ビット	円形	13	-	逆台	8	
866	ビット	円形（角張る）	50	46	逆台（段）	19	
867	ビット	円形（角張る）	30	27	逆台	9	
869	ビット	楕円形	17	11	逆台	3	
870	ビット	楕円形	18	14	U	28	
871	ビット	円形（不整）	18	16	逆台	9	
872	ビット	不整形（楕円）	32	20<	コ	4	872ビット<420ビット
873	ビット	楕円形	21	17	V	28	
874	ビット	円形（角張る）	41	-	逆台（浅）	7	
877	ビット	不整形円形	23	22	コ	4	
878	ビット	楕円形（角張る）	34	30	逆台（皿状）	5	459ビット<878ビット
879	ビット	隅丸三角形	33	33	U（皿状）	6	
880	ビット	不整形（楕円）	25	20	逆台	6	
882	ビット	楕円形	26	20	逆台	16	
884	ビット	隅丸三角形（楕円）	37	29	逆台	8	
885	ビット	楕円形	26	23	逆台（丸）	7	
886	ビット	楕円形	25	22	V（段）	18	
887	ビット	隅丸三角形	51	34	V（丸）	16	
888	ビット	楕円形（三角）	19	14	V	5	
890	ビット	円形（三角）	25	25	逆台	4	
891	ビット	楕円形	40<	32	コ	30	891ビット<500溝
892	ビット	不整五角形	87	86	V（不整）	70	621<892ビット、複数が重複か
893	ビット	楕円形	19<	20	逆台（U）	15	892ビット<893ビット<623柱穴・624ビット
894	ビット	楕円形	38<	39	U	27	894ビット<615・901ビット
895	ビット	円形？	14<	-	？	11	一部のみ
896	ビット	隅丸方形	22<		V	14	残り悪い
897	ビット	楕円形（三角）	18	14	逆台	6	
898	ビット	隅丸方形	71<	40<	U	28	551柱穴<898ビット<544柱穴・545ビット
900	ビット	楕円形	31	25	U	9	
901	ビット	楕円形	31<	25<	U	15	901ビット<615・893ビット
902	ビット	楕円形（三角）	28	27	U	22	

第IV章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考(「<」は切り合い関係を示す)
904	ピット	円形	17	9<	逆台	14	
905	ピット	円形	38	-	U	16	根石
906	ピット	円形	15	-	U	16	906ピット<907ピット
907	ピット	楕円形	37	24<	U	16	907ピット<908・909ピット、560溝に先行
908	ピット	隅丸方形	34	29	U	12	
909	ピット	楕円形(角張る)	39	33	U	24	
911	ピット	楕円形	55	49	U	22	883柱穴下層
912	ピット	隅丸方形?	27<	14<	逆台	13	482ピット<912ピット、攪乱あり
916	ピット	円形?	17<	21<	逆台	14	壁内へ続く
917	ピット	楕円形	16	14	U	16	
918	ピット	隅丸方形	44<		? (U?)	42	上端のみ、919ピット<918ピット、壁へ
919	ピット	楕円形?	31<		U	30	調査区外へ
923	ピット	隅丸方形	59<	36<	U	26	929ピット<923ピット
924	ピット	楕円形	43<	29<	V(浅)	12	壁(攪乱)で削られる
925	ピット	楕円形	36<	30	不整(コ)	32	925ピット<924ピット
926	ピット	楕円形	28	24	U(傾)	23	
927	ピット	楕円形	17<	17<	V	15	928<927ピット<475柱穴・476ピット
929	ピット	楕円形?	63<	35<	V?	24<	929ピット<924・923ピット
930	ピット	円形	19<	8<	V(丸・偏)	21	半分のみ
931	ピット	隅丸長方形	25	19	逆台	11	
932	ピット	楕円形	16	9	U	11	
933	ピット	楕円形	33	22<	U?	17	934ピット<933ピット<930ピット・473柱穴
934	ピット	隅丸三角形	37	29<	U	12	935ピット<934ピット
935	ピット	円形?	26	17<	コ	11	
936	ピット	楕円形	14	12	U	5	
937	ピット	楕円形	25<	19	U	32	937ピット<920柱穴
938	ピット	楕円形(角張る)	19	11	U	11	
939	ピット	楕円形?	57<	18<	U	48	560溝<939ピット<313柱穴・923ピット
943	ピット	円形	17	-	U	12	
947	ピット	楕円形	40	35	U	17	
948	ピット	隅丸三角形	43	37	U	12	
951	ピット	隅丸方形	64	18<	U(W)	40	東壁に出る
952	ピット	楕円形	30	25	U(段)	17	
953	ピット	楕円形	29<	14<	U	6	側溝に切られる、964ピット<953ピット
955	ピット	楕円形	35<	35	U	38	矢板際、外へ続く
960	ピット	楕円形	41	24<	U	32	側溝に切られる
963	ピット	楕円形	34<	13<	V(丸)	17	矢板に切られる
964	ピット	楕円形	57	54<	U	22<	側溝に切られる
967	ピット	楕円形	41	32<	V(偏)	17	967ピット<968柱穴
969	ピット	楕円形(角張る)	36	28	逆台	13	
970	ピット	隅丸方形	36	32	逆台	6	
972	ピット	楕円形	23	22	逆台	19	
973	ピット	楕円形	21	16	逆台	16	
974	ピット	楕円形	32	22	逆台(不整)	16	
975	ピット	楕円形	31	26	逆台	25	
976	ピット	楕円形	34	32	逆台	12	
398	土坑	長楕円形(溝状)	94<	40	逆台(偏)	19	398土坑<401・855柱穴
421	土坑	楕円形	62<	52<	逆台	15	曲物埋置
423	土坑	隅丸台形	79	71	U~コ	53	424ピット<423土坑
427	土坑	隅丸長方形	51	36<	コ?	13	
447	土坑	不整形	71<	36<	U	16	側溝に切られる
536	土坑	不整楕円形	74	53	逆台(浅、W)	8	536土坑<538ピット
595	土坑	楕円形	63	43	皿状(U)	8	
600	土坑	不整隅丸三角形	102	100	逆台(傾)	29	650土坑<600土坑<644柱穴・660土坑
640	土坑	隅丸台形	201	181	逆台	93	溝部長164、幅110
641	土坑	不整楕円形	70<	53	皿状	26	641土坑<600・642土坑・657溝
642	土坑	溝状	170<	84	U	15	溝
650	土坑	不整隅丸三角形	130	105	U(段)	84	599柱穴<650土坑
727	土坑	楕円形(三角)	84	63	逆台(凹凸)	20	
754	土坑	隅丸長三角形	68<	59			
756	土坑	三角形?	134	143			
816	土坑	隅丸方形	112	92	逆台	30	
864	土坑	楕円形(角張る)	57	53	U	22	
865	土坑	隅丸六角形	68	62	U	14	
941	土坑	楕円形	74	59	逆台	38	941土坑<881柱穴
950	土坑	隅丸方形?	295	95			
954	土坑	不整円形	202	80	皿状	22	矢板に切られる、955ピットに後出、950土坑を切る?
956	土坑	溝状?	84<	61	コ	48	矢板に切られ、トレンチで不明
962	土坑	楕円形	84<	59	U(段)	52	側溝に切られる、962土坑<960・964ピット
971	土坑	楕円形	81	58	逆台	33	根石?

第3節 3区（平成26年度）の調査

1 立地

高住宮ノ谷遺跡3区は、北野神社の立地する尾根の南側で、北東に開口する比較的小さな谷に位置している。南側には、現在は完全に削平されているが、南から北北東に伸びる尾根があり、本来は尾根に挟まれていた水田として最近まで利用されてきた。

調査区は、西側の丘陵裾部までを調査範囲としており、調査前の標高は丘陵斜面を除く部分で約5～約12mを測る。

2 基本層序

調査地内の地形は、2区の丘陵南裾に広がる東西方向の谷が調査区の中央に入っており、谷の南側には削平された低丘陵が存在する。表土掘削完了後に調査区全域の土層の堆積状況を把握するため、調査区中央の谷部を東西に貫通するトレンチ（トレンチ1）を掘削した。その結果、調査区西側の谷奥部は丘陵からの土砂の流入が頻繁かつ厚く堆積しており、調査区内の耕地段差ごとに堆積が大きく異なることが判明した。また、旧地形が谷と丘陵に分かれており、それぞれ堆積状況が異なるため、層序の説明は谷部と丘陵部に分けて行うこととする。なお、谷部は現況の耕地段差により、西から上段・中段・下段の3つに大きく区分される。調査区中央付近の高さ1.5mほどの段差以西を上段、その下の段を中段、1m近い耕地段差を挟んで東側を下段とする。中段、下段のそれぞれ西半分は近年の圃場整備で削平されたものである。



第43図 3区 トレンチ配置図

(1) 谷部 (第44・45図)

調査区中央の谷は基本的に西から東へと傾斜しており、この谷地形にもたらされる土砂などによって土壌は頻繁に更新され、遺構面が形成されている。調査区西側に位置する丘陵から供給される地山の二次堆積層と考えられる砂礫層(Ⅷ層)を基盤とし、その上に腐植土層、砂礫層を挟んで、土壌化した黒色～暗灰色シルト層が堆積する。このうち土壌化層は水田耕作土と考えられる。

調査では丘陵部と堆積構造が異なることから、これらの土層を同系統と考えられる単位ごとに上層から順にローマ数字を付して「Ⅰ層、Ⅱ層」というように呼称した。また、さらに細分化できるものについては、「Ⅱ-2層」などのように枝番号を付して区別した。以下、トレンチ1を基にして層ごとに説明を行う。

0層 (第44・45図8～10)

近世以降の耕作土である。下段のみに存在する。灰黄褐色の砂質シルト～中砂を主体とし、細礫・炭化物をやや含む。淘汰はあまりよくないが、比較的均質に攪拌されている状況がうかがえる。層厚は最大58cmで、東に向かって傾斜し、厚く堆積する。

当初はⅠ層として考えていたが、層中から漆器など近世以降の遺物が出土し、上段で検出したⅠ層と様相が異なるため、別層とした。3区北東部の0層下面では柱穴やピット群が密集した状況で確認された。

Ⅰ層 (第44・45図11～14)

Ⅰ層は上段のみに存在し、中央部以東では確認できなかった。上部は圃場整備時に削平されており、遺存状況は悪い。Ⅰ層中に3241耕地段差を確認したため、その上層と下層をそれぞれⅠ-1層、Ⅰ-2層に細分して調査した。

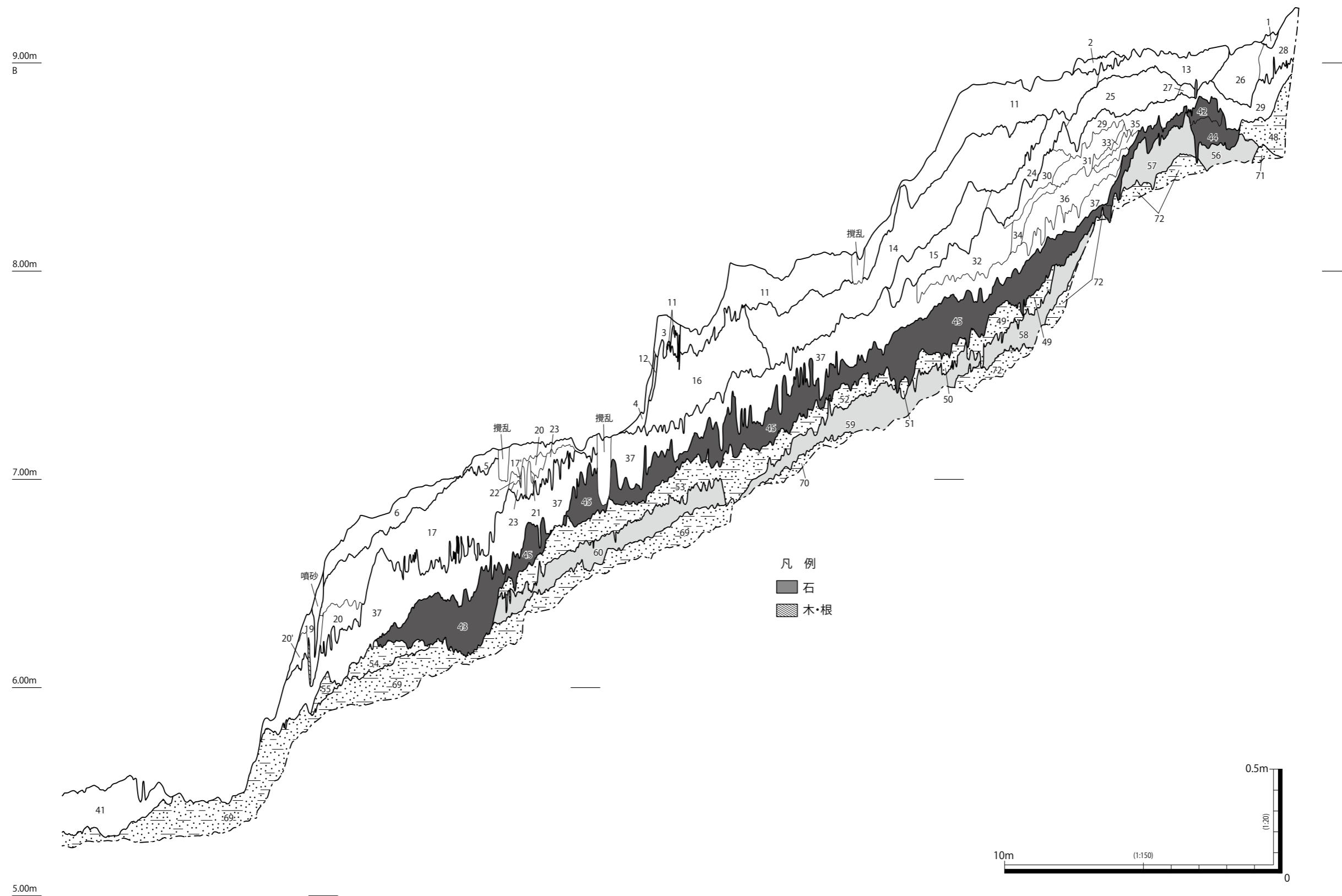
Ⅰ-1層は、灰黄褐色の砂質シルト～粗砂を主体とし、細礫・炭化物等をやや含む。層厚は0.1～0.25m程度である。水田耕作土と考えられる。下面で3241耕地段差を検出したが、当該層においてそれに伴う畦畔等を確認することはできなかった。層中から瓦質土器の小片が出土しており、時期は中世以降と考えられる。

3241耕地段差検出面以下の層をⅠ-2層とした。黒褐色のシルト～粗砂を主体として、細礫・自然木をやや含む。Ⅰ-1層よりやや暗い還元色を呈す。層厚は0.15～0.3m程度を測る。水田耕作土と考えられる。層中の遺物と上下の層の時期から、中世以降と考えられる。

Ⅱ層 (第44・45図15～28)

Ⅱ層は調査区上段～中段にかけて検出した。黒色および黒褐色のシルト～中砂を主体とし、細礫や自然木の細片、植物遺体等をよく含む。Ⅰ層よりも土壌化が進み、色調もより暗色を呈す。水田耕作土と考えられる。Ⅱ-1～4層に細分できる。Ⅱ-1～3層は上段で検出した層で、途中Ⅰ-2層に削平を受けて不連続となっているが、Ⅱ-3層からⅡ-1層の順に堆積していく。層厚はそれぞれ0.1～0.4m程度を測る。

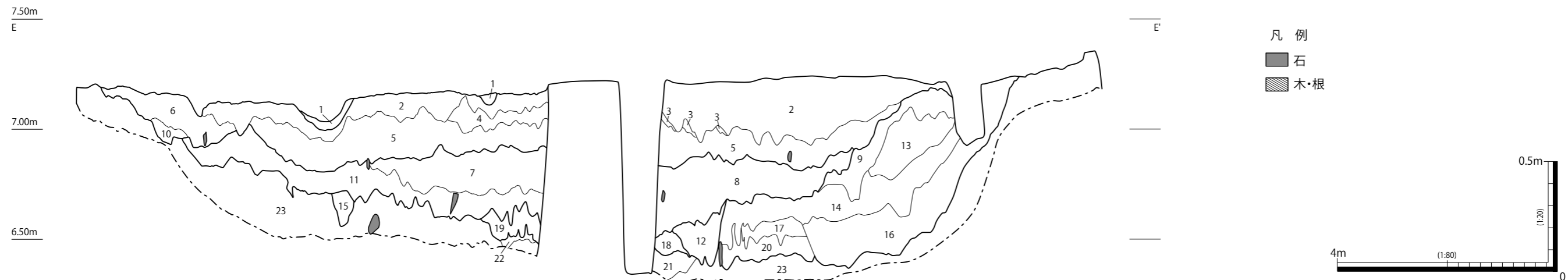
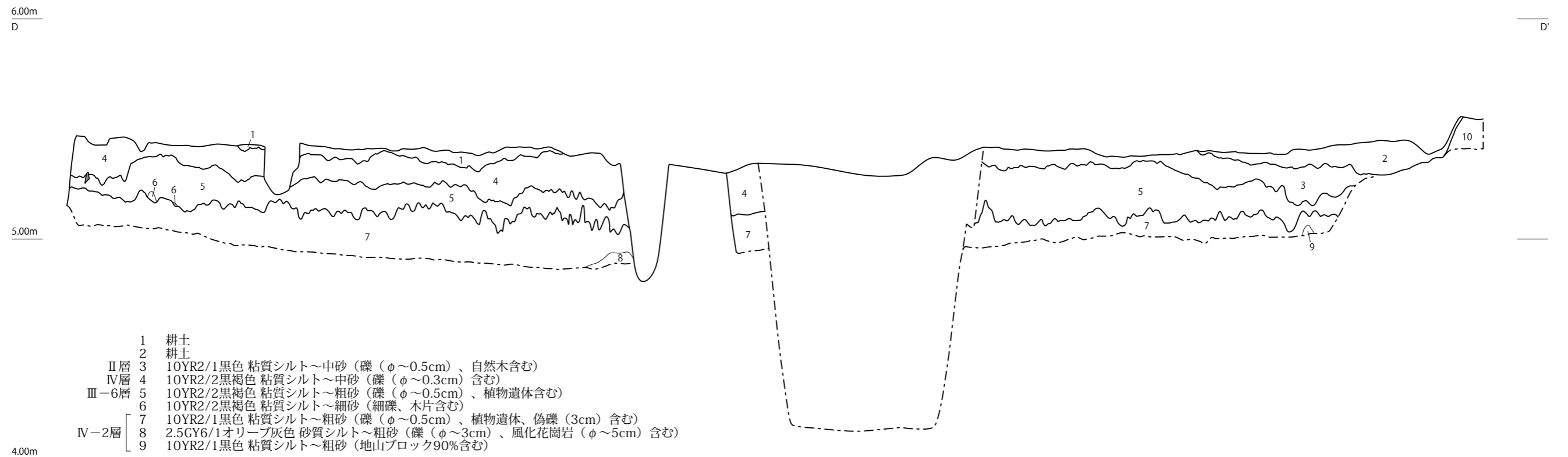
Ⅱ-4層は中段でのみ検出した。土質はⅡ-1～3層と類似しているが、上段との境にある耕地段差によって大きく分断されているため、詳細な対応関係が把握できず、別番号を付した。層厚は0.1



第44図 3区 トレンチ1土層断面図(1)

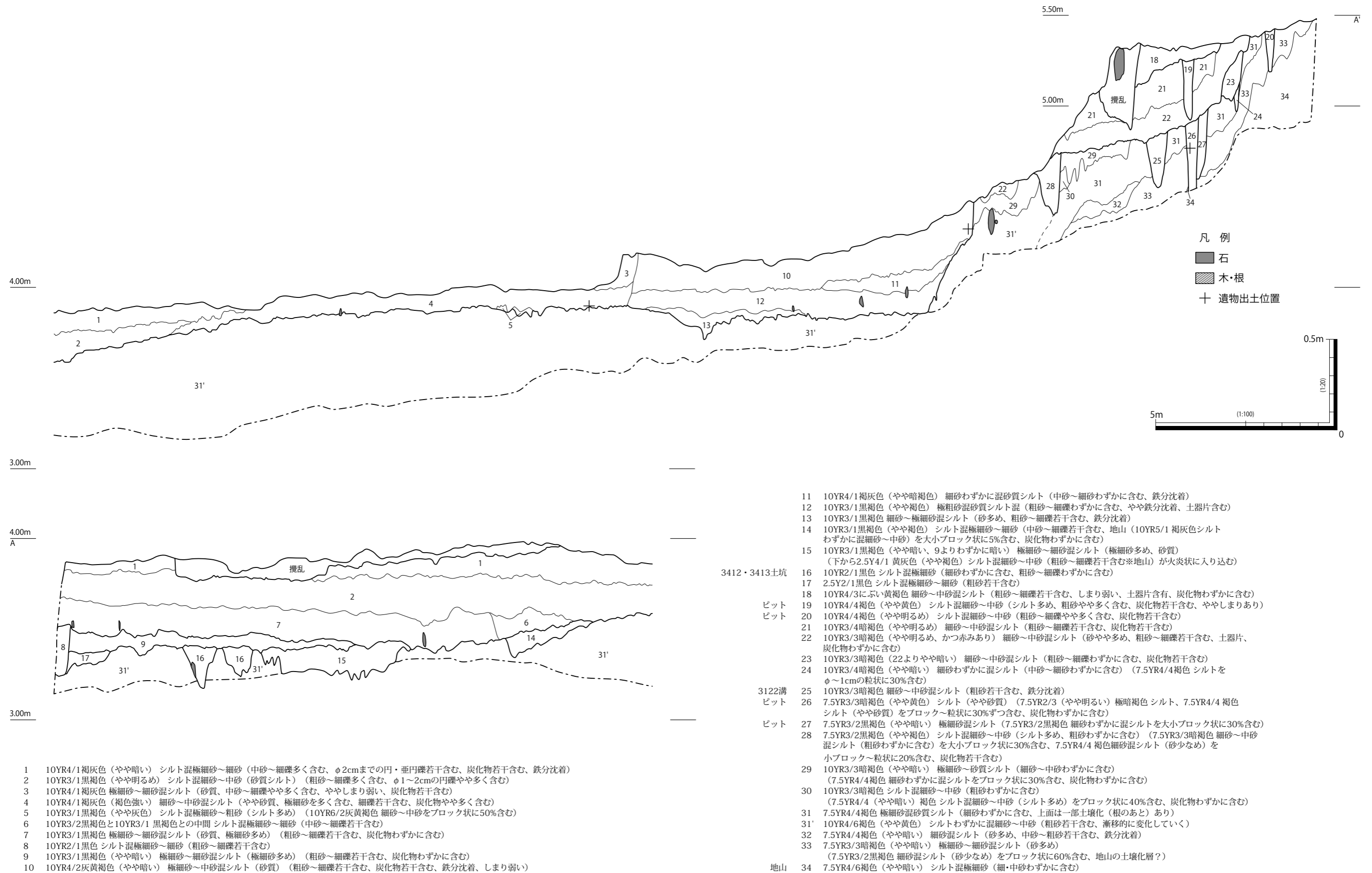


第45図 3区 トレンチ1土層断面図(2)

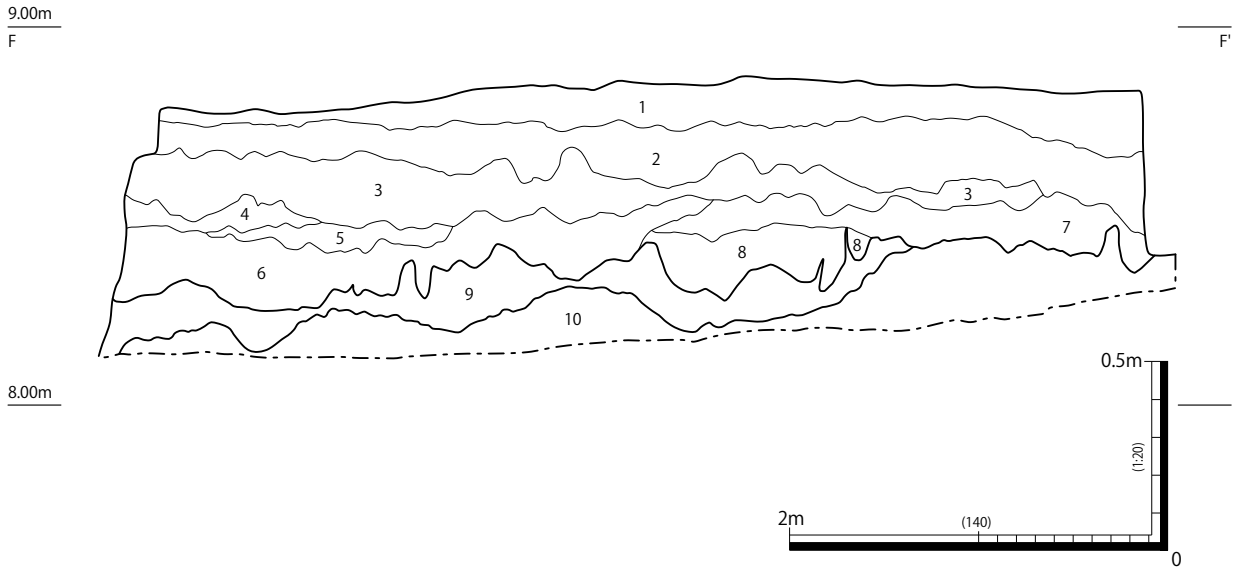


- | | | | | |
|---------|--|--------|---|---|
| 耕土 1 | 10YR3/1黒褐色粘質シルト～粗砂(礫(φ~0.5cm)含む) | 16 | 10YR2/1黒色極細砂～極粗砂(細礫、風化花崗岩(φ~1cm)含む) | |
| 2 | 10YR2/1黒色粘質シルト～中砂(礫(φ~1cm)、自然木含む) | 17 | 2.5Y4/2暗灰黄色極細砂～極粗砂(礫(φ~1cm)含む) | |
| 3 | 10YR4/3にぶい黄褐色極細砂～粗砂(礫(φ~0.5cm)、木片含む) | 18 | 10YR2/1黒色粘質シルト～中砂(礫(φ~1cm)、自然木含む) | |
| II層 4 | 10YR2/1黒色粘質シルト～中砂(礫(φ~0.5cm)、自然木含む) | IV層 19 | 10YR2/1黒色粘質シルト～中砂(礫(φ~1cm)、自然木含む) | |
| 5 | 10YR2/2黒褐色粘質シルト～粗砂(礫(φ~2cm)含む) | 20 | 10YR1.7/1黒色粘質シルト～中砂(木片、粘土ブロック、風化花崗岩(φ~2cm)含む) | |
| 6 | 2.5Y5/3黄褐色極細砂～粗砂(礫(φ~1cm)含む。炭化物ブロックが南側ほど顕著、風化花崗岩(φ~5cm)含む) | V層 | 21 | 2.5GY6/1オリーブ灰色極細砂～細砂(礫(φ~1cm)、植物遺体、風化花崗岩含む) |
| 7 | 10YR2/2黒褐色粘質シルト～粗砂(礫(φ~1cm)、木片、風化花崗岩(φ~3cm)含む) | | 22 | 2.5GY6/1オリーブ灰色極細砂～細砂(礫(φ~1cm)、植物遺体、風化花崗岩含む) |
| 8 | 10YR2/2黒褐色粘質シルト～粗砂(礫(φ~1cm)含む) | | 23 | 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂(礫(φ~1cm)含む) |
| 9 | 10YR4/2灰黄褐色極細砂～極粗砂(礫(φ~0.5cm)含む。風化花崗岩(φ~2cm)多く含む) | | | |
| II層 10 | 10YR5/4にぶい黄褐色極細砂～粗砂(礫(φ~0.5cm)、炭化物含む。下面ほど礫が粗い) | | | |
| III層 11 | 10YR2/2黒褐色粘質シルト～中砂(礫(φ~0.5cm)、風化花崗岩(φ~2cm)含む) | | | |
| 12 | 10YR2/2黒褐色粘質シルト～粗砂(細礫、風化花崗岩(φ~2cm)、植物遺体含む。粘土ブロック(下面)含む) | | | |
| 13 | 10YR3/1黒褐色極細砂～極粗砂(礫(φ~0.5cm)含む) | | | |
| 14 | 10YR2/1黒色極細砂～極粗砂(礫(φ~0.4cm)、自然木含む) | | | |
| 15 | 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト～極細砂(礫(φ~2cm)、炭化物含む) | | | |

第46図 3区 トレンチ2、3土層断面図



第47図 3区 東壁土層断面図



- 1 10YR2/1 黒色と3/1 黒褐色の中間 シルト～中砂（礫（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む）
- 2 10YR2/1 黒色 シルト～中砂（礫（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む）
- 3 10YR2/1 黒色と2/2 黒褐色の中間 シルト～細砂（礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む）
- 4 10YR2/2 黒褐色 シルト～細砂（礫（ $\phi \sim 0.5\text{cm}$ ）含む、自然木多く含む、未分解植物含む、下面にシルト～粗砂を層状に含む）
- 5 10YR4/4 褐色 極細砂～細砂（礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）含む、炭化物含む、ラミナあり）
- 6 10YR3/2 黒褐色 シルト～粗砂（礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む）
- 7 10YR2/1 黒色と2/2 黒褐色の中間 シルト～粗砂（礫（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む（一部炭化）、細砂～中砂を層状に含む）
- 8 10YR2/1 黒色 シルト～中砂（礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む）
- 9 10YR2/1 黒色 シルト～細砂（礫（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）含む、未分解植物含む（一部炭化））
- 10 5Y6/2 灰オリーブ色 極細砂～粗砂（礫（ $\phi \sim 10\text{cm}$ ）多く含む、炭化物含む（北側に多い）、一部にラミナあり）

第48図 3区 トレンチ5土層断面図

～0.3mを測る。

II層中からは古墳時代後期から古代の土器が多く出土したが、II層除去後の第4面で瓦質土器（羽釜）が出土しており、中世までの時期と考えられる。

III層（第44・45図29～41）

III層は上段から中段にかけて検出した。層中に氾濫堆積と考えられるラミナを持つ極細砂～極粗砂の薄い層が散見でき、これらや耕地段差による分断によってIII-1～6層に細分した。

基本的には黒～黒褐色の粘質シルトを主体として、細砂～極粗砂、細礫などを多く含む。下層のIV～VII層および層中で散見される地山二次堆積の砂を母材とし、自然木や植物遺体の細片を多く含みながら比較的攪拌されている。II層よりさらに土壌化が進み、より黒みが強い。水田耕作土と考えられる。

III-1層は上段で検出した。層厚は0.2m程度を測る。III-2層は細砂～粗砂を含む氾濫堆積の砂層（III-2b層）と、それを覆うシルト層（III-2a層）にさらに細分できる。このIII-2b層の検出範囲は狭く、調査区上段西部の一部でしか確認できず、多くはIII-2a層に攪拌されたものと考えられる。層厚は合わせて0.1～0.15mを測る。

III-3層も分布範囲は狭いが、南北方向に直線的なラインが平面的に検出でき、西から東への耕地段差に伴う層であると考えられる。層厚は0.3m程度を測る。III-4層はIII-2a層・2b層の直下に分布する層で、東への落ち際の堆積である。層厚は0.05～0.2mを測る。III-5層はIII-4層の直下に認められ、III-4層と起点を同じくしつつ東へ広く分布、中央部の高い段差付近にまで及ぶ。層

厚は0.4 m前後を測る。

Ⅲ-6層は中段のみで検出した。層厚は0.05～0.2 mを測る。Ⅲ層は上段・中段の間の耕地段差に分断されており、上段に堆積するⅢ-1～5層との対応関係は不明である。

Ⅲ層からは弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。遺物出土量が多いものの細片が多く、水田耕作に伴う攪拌などローリングを受けているものと推測され、時期としては古代から中世にかけてと考えられる。

IV層（第44図42～47）

IV層は黒色の腐植土層である。上段でのみ検出した。土壌化の度合いや夾雑物によってIV-1～3層に細分できる。最上層をIV-1層、最下層をIV-3層とし、下層ほど下層のV層を母材とする砂礫を多く含み、粒径も大きくなる。層厚は0.05～0.3cm程度を測る。淘汰は比較的良好で、土壌化はみられるものの自然堆積層と考えられる。

遺物は弥生土器から古墳時代後期の土師器・須恵器などが出土しているほか、調査区北西部の2I-2eグリッドから舌状石製品が出土した。周辺丘陵からの流れ込みと考えられるが、高住銅鐸との関連を考える上で興味深い。

V層（第44図48～55）

V層もIV層と同じく上段でのみ検出した。拳大の礫を多量に含む黒～オリーブ灰色の砂礫層である。土砂の供給源となる谷奥部は中・巨礫や地山由来の偽礫、自然木を多く含み、東（下流）に行くにつれて粒径は小さくなる。淘汰は悪く、土石流の堆積と考えられる。層厚は0.1～0.2m程度を測る。遺物の出土は少ないが、古墳時代後期～古代の須恵器を若干含む。時期的には古代と考えられる。

VI層（第44図56～60）

VI層も同じく上段でのみ検出した。黒褐色を呈する粘質シルトと灰オリーブ色の細～極粗砂で、土壌化の具合や包含する自然木や腐植土などにより土質や色調がやや異なる。土壌化が進んでいるが、耕作痕などの人為的な攪拌の痕跡は見られない。層厚は0.1～0.2m程度を測る。遺物の出土は少なく、時期は不明である。

VII層（第44・45図61～73）

VII層は調査区のほぼ全域に存在する砂礫層である。灰オリーブ色～黒色を呈する砂礫を主体とする層で、植物遺体・炭化物、地山由来の偽礫を多量に含む。VII層の下面まで掘削していないため、層厚は不明である。層の一部ではラミナがみられ、土壌化が進んでいないことから急速な埋没をした自然堆積層と考えられる。

平成26年度は、調査区東端（下段）で下層確認トレンチを掘削し、VII層以下の堆積状況も確認した。VII層以下はVII層と同様に丘陵から供給された自然堆積層が厚く堆積し、一部で暗色を呈した土壌化層を挟んでいた。遺物の出土が少ないが、弥生土器・縄文土器の破片・石器（第159図S40）が含まれていた。

以上、3区谷部の基本層序について詳述した。調査区の上段ではⅠ～Ⅶ層までが比較的良好に残存しており、対応関係が把握できるのに対し、中段以下では削平されたために一部の層しか確認できない状況が明らかとなった。特に上中段、中下段の耕地段差は激しく削平されており、圃場整備の影響と考えられる。

また、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層を中心として各層面が火炎状に波打っており、かつ耕地段差付近では噴砂が見られることから、地震の影響による層の揺れがあることを付しておく。表土直下まで認められることから、昭和18年の鳥取地震に帰因するものと考えられる。

（2）丘陵部（第47図）

丘陵部は調査区南半、中央部～東部にかけての部分である。南側にはもともと丘陵があり、北東方向に尾根が伸びていた裾部にあたる。丘陵は土取りにより昭和60年頃に完全に削平されており、本来の地形は大きく改変されている。なお、この丘陵裾部も尾根が削平される以前から既に畑や水田として利用されてきたほか、近年は墓地や倉庫が営まれていた。

丘陵裾部のうち、谷に面した北側は近年の圃場整備に伴うと考えられる攪乱により大きく削平を受け、水田に伴う暗渠が掘削されていた。Y = -15,810以西では表土を除去すると地山の花崗岩が風化した砂層が露出したほか、丘陵部と水田に利用された谷部との境界が半円形に明瞭に検出できた。この上面で掘立柱建物1棟とピット、流路等を検出した。丘陵裾部は調査区東端付近で南にカーブしており、丘陵尾根の先端にあたる。この部分でも高所ほど削平を受けていたが、包含層が比較的良好に残存しており、竪穴建物2棟や多数のピット・柱穴などを検出した。

東壁18層は近世以降の耕作土である。その下の21層上面でピット、柱穴を検出している（第1面）。21層は近世以降の耕作土と考えられ、下層の22層とともに0.15～0.2mほどの厚さで北側へなだらかに下っていく。調査区南端では33層上面でもピットが掘り込まれるが、上面が削平された後に掘り込まれたと考えられる。

22層下の31層は、褐色砂質シルトであるが、北側へ行くにつれて砂が多くなり、谷部では細砂～中砂に移行する。この31層上面およびその土壌化した29層上面でもピットや溝を検出したほか、竪穴建物2棟も検出した（第2面）。なお、31層は地山である34層上面が土壌化した33層を挟んで堆積しており、再堆積層であると考えられる。側溝掘削中に33層から縄文時代の打ち欠き石錘が出土したほか、竪穴建物の貼床土・埋土や包含層中から黒曜石の剥片を10点弱検出した。また、31層を掘り込んだ3122溝中から、直接伴うものではないが縄文時代前期の土器が出土しており、近辺において縄文時代に人々の活動があったことがうかがえる。

3 検出した遺構

3区において、谷部で水田や耕地段差、柵列などを、丘陵部で竪穴建物や掘立柱建物、溝、流路、多数の柱穴およびピットなどを検出した。柱穴およびピットについては、煩雑を避けるため形態や法量を第7表にまとめており、以下では特徴的なものについてのみ記述する。

（1）第1面（第49～55図、PL.15～21）

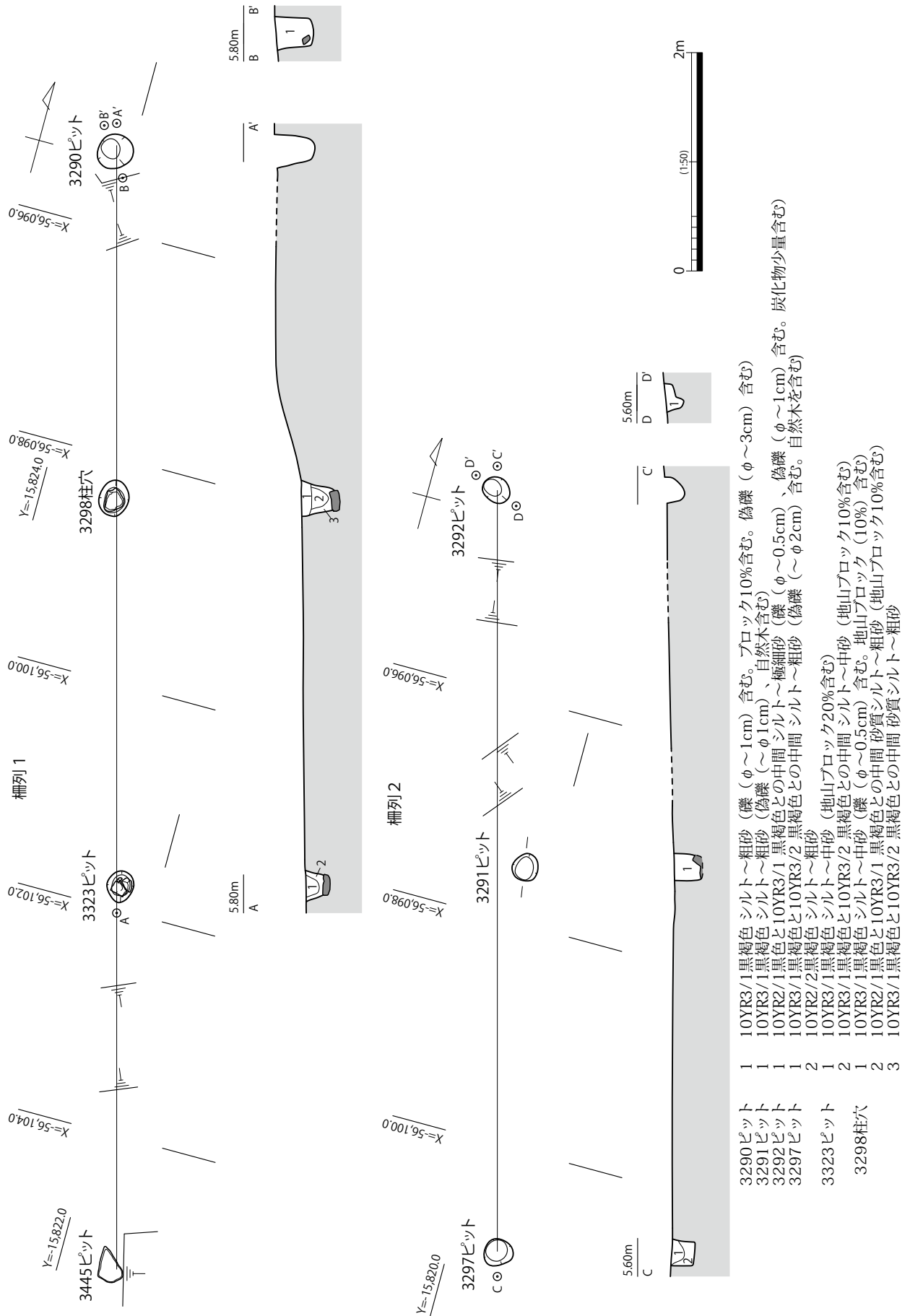
<谷部>

表土（耕作土）を重機で除去した面を第1面とした。

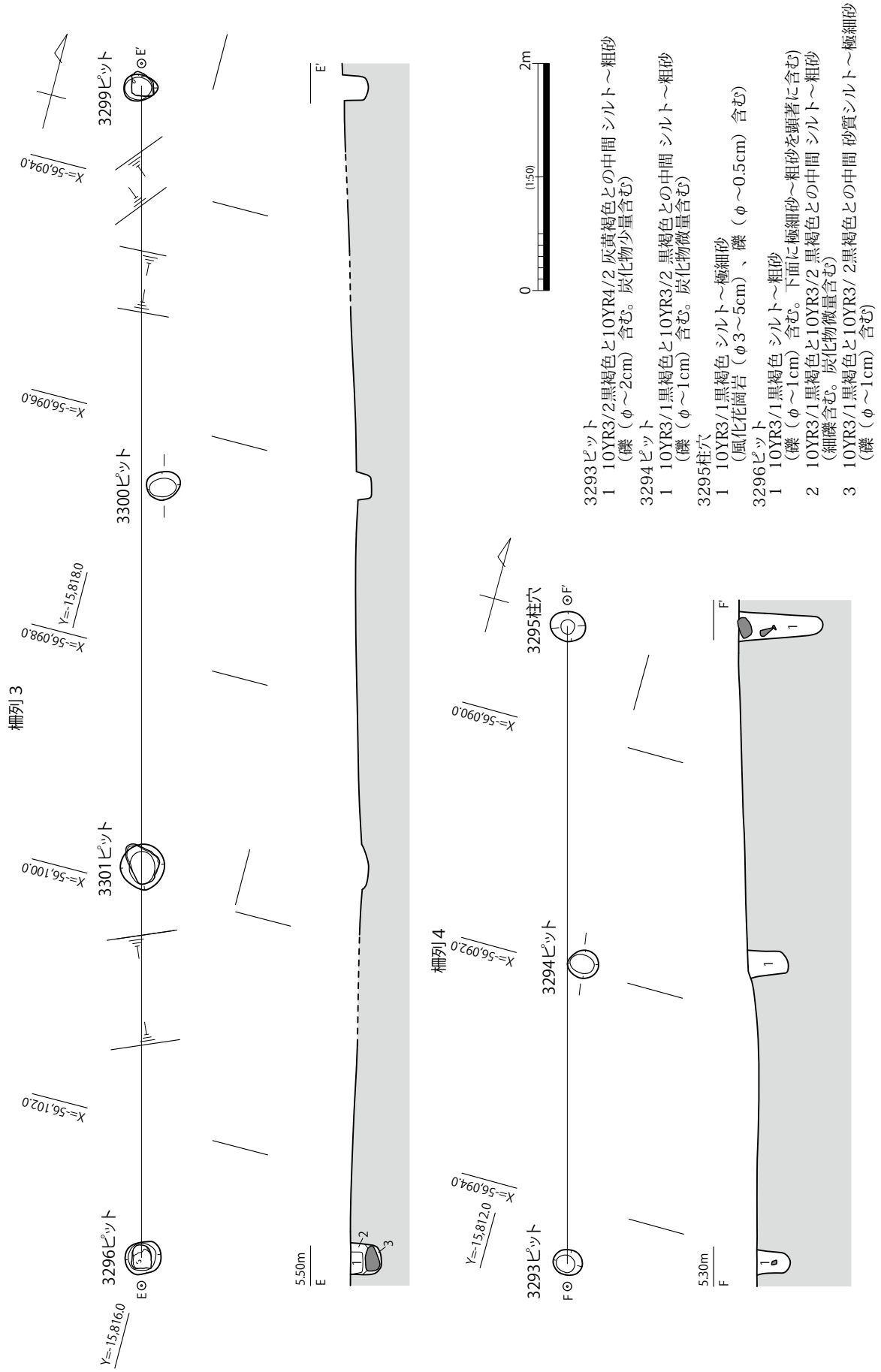
柵列1～4は、谷部中段で検出したものである（第50、51図）。Ⅱ層上面に当たるが、表土を除



第49図 3区 第1面平面図



第50図 3区 第1面検出遺構平面図、断面図 (1)



第51図 3区 第1面検出遺構平面図、断面図(2)

去した段階で検出したものであり、1面の遺構として記述する。中央部付近で並行する柵列1～3の3列と、やや東に離れた柵列4とがある。

柵列1の軸は真北から15°西に振っている。4基の柱穴・ピットからなるが、南端の3445ピットは上面が削平されており礎板石のみの検出である。柱穴・ピットの芯々間距離は、北から3.2、3.5、3.5mである。3298柱穴、3323ピット、3445ピットでは底に礎板石が置かれていた。柵列2は柵列1の東側3.0mにほぼ並行する。ただし、3292ピットと3297ピットを直線で結ぶと、3291ピットは0.25m東にずれる。現状では3基のピットからなるが、左右の状況から南にもう1基存在した可能性が高く、鳥取市教育委員会による試掘トレンチで削平されたものと考えられる。ピットの芯々間距離は、いずれも3.5mである。3291ピットの底には礎板石が確認できた。柵列3は柵列2の約3.0m東に位置し、ほぼ並行する。柵列2同様、北から2基目の3300ピットが0.2m東にずれている。4基のピットからなり、芯々間距離は北から3.5、3.4、3.4mである。3299ピット、3301ピット、3296ピットは底部に礎板石が置かれていた。

これら3列の柵列で確認できた礎板石の上面には、いずれも黒変した部位が認められた。形状は正方形のものと不定形のものがあるが、基本的に柱根の痕跡と考えられる。加工した柱を樹立することや、芯々間の距離がほぼ一致することなどから、同時期に構築された可能性が高い。柱間の距離がやや長いものの、これらで3間×2間の単一建物を構成する可能性も考えられる。

柵列4は柵列3の東5.7mにあり、ほぼ並行する。3基の柱穴・ピットからなるが、3294ピットは他の2基をつないだ軸より0.15m東にずれる。芯々間の距離は北から3.0、2.6mである。深さは3295柱穴で検出面から0.75mとかなり深い。また、礎板石はいずれも認められなかった。前述の3列とは性格を異にする可能性が高い。

埋土内からはほとんど遺物は出土していないが、わずかに出土した土器や埋土の色調などから、近世以降の遺構と考えられる。

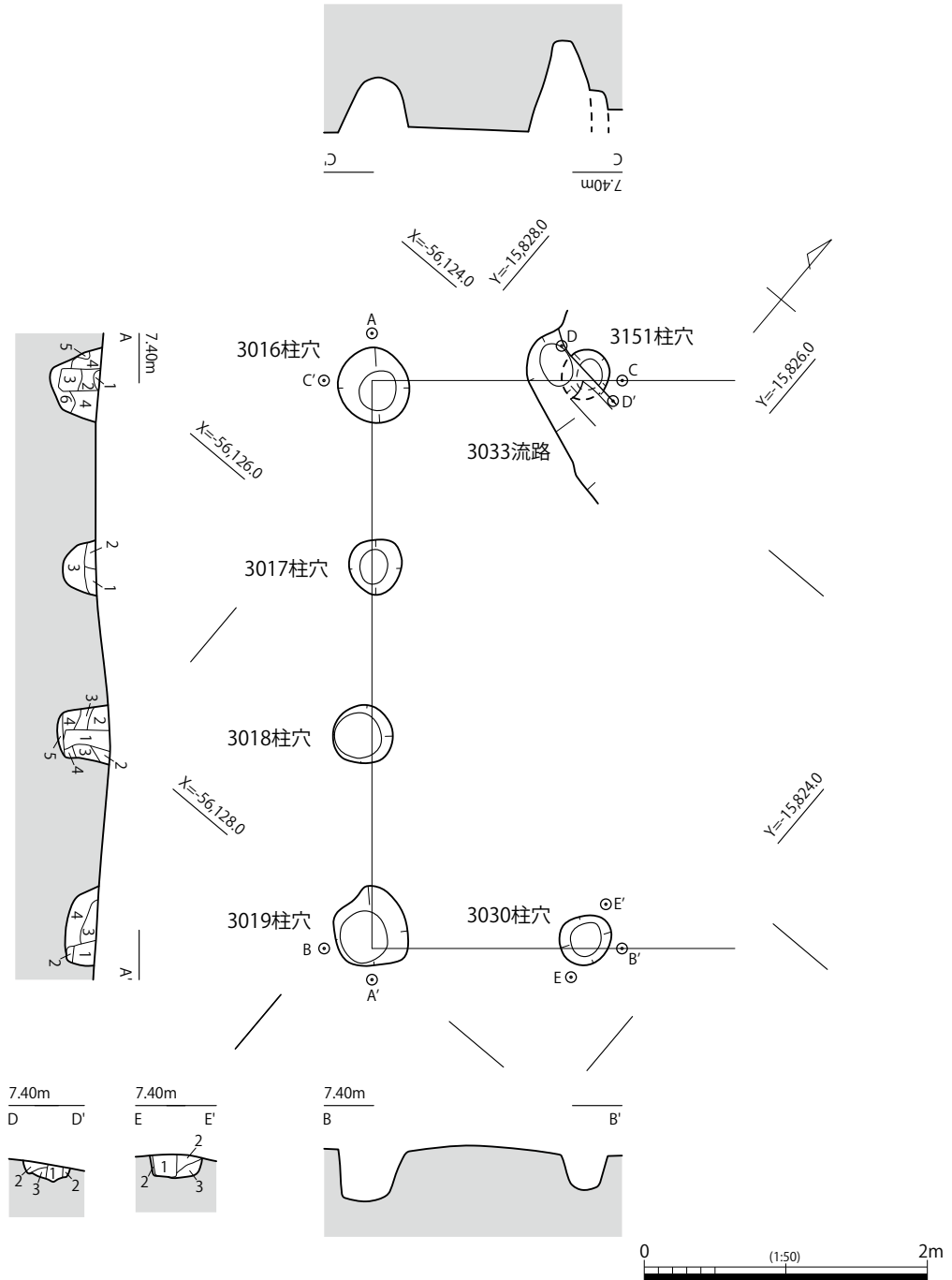
<丘陵部>

丘陵部の第1面では、南東部で土坑、溝、ピットと柱穴、南半中央部で掘立柱建物1棟、ピット群を確認した。

掘立柱建物3は南半中央部丘陵裾で確認したもので、桁行3間、梁行は調査では1間分を検出しており、地形の状況や桁行の規模から2間と推定される（第52図）。主軸はN-40°-Wと西に振っている。東辺の柱列は後世の開発および3033・3034流路で削られ失われている。建物の規模は桁行4m、梁行は2間とすれば3.1mである。柱間は桁行1.25～1.5mで一番南がやや広い。また、梁行は1.5mを測る。柱穴は円形を呈するものがほとんどであるが、一部いびつなものも存在する。直径0.35～0.58mで、西辺の南北端の柱穴が他の柱穴に比べ一回り大きい。深さは検出面から0.15～0.4mであるが、掘方底面の標高はおおむねそろっている。いずれも柱根は残っていなかったが、全ての柱穴において直径0.15m程度の柱痕が認められた。抜き取りなどは行われずに廃絶された可能性が高い。南辺の柱穴では、柱根は掘方の南に偏って確認できた。掘方内からはほとんど遺物は出土しておらず、わずかな土器片が出土したのみで、建物の時期は不明である。

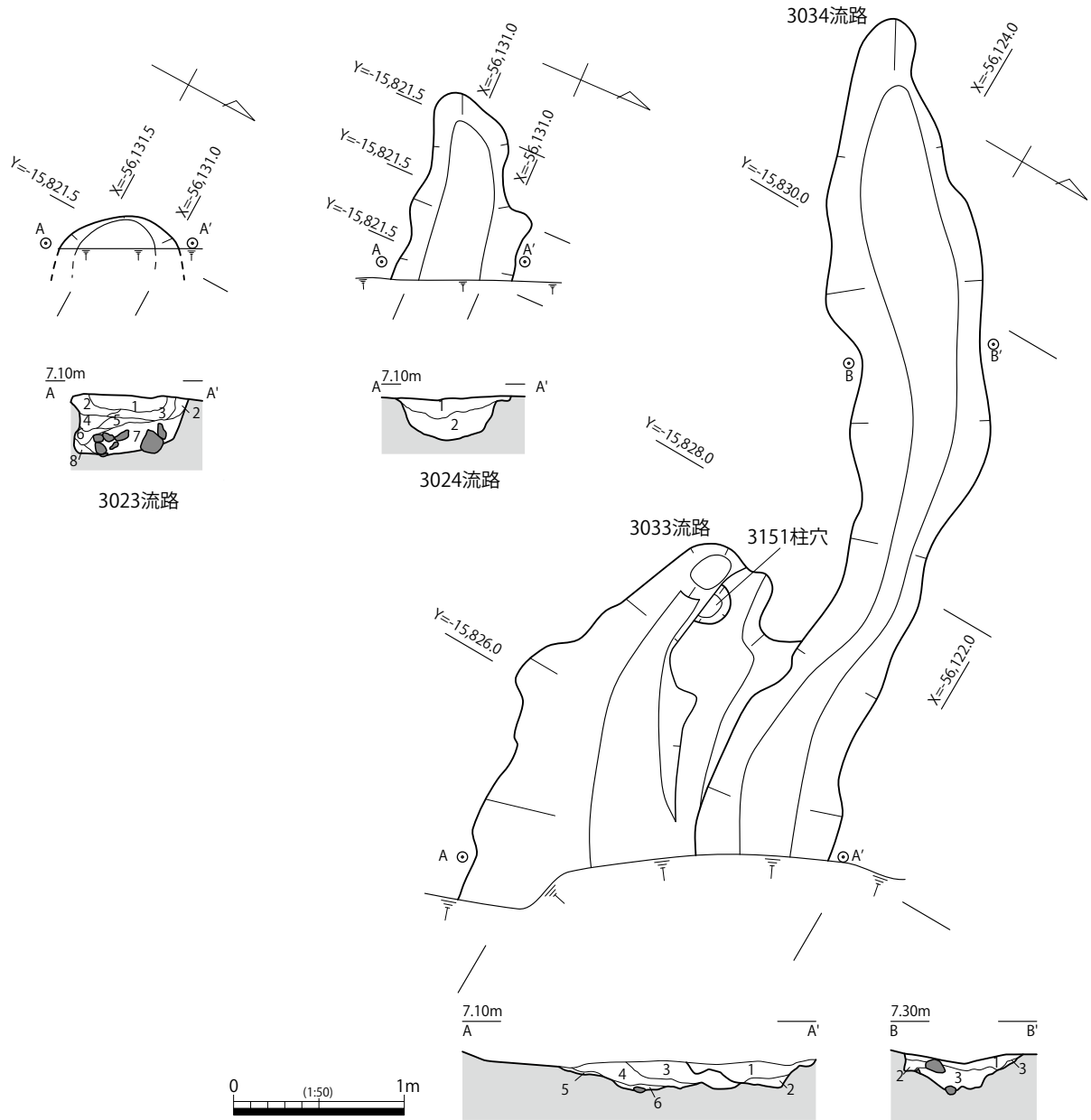
3023流路、3024流路、3033流路、3034流路は、丘陵部西半の標高7mの段上から斜面部で検出した（第53図）。いずれも後世の削平により東西両側は不明である。

3023流路は最も南側で検出した。丘陵上位側は0.25mが残存するのみで上面はカーブを描く。東



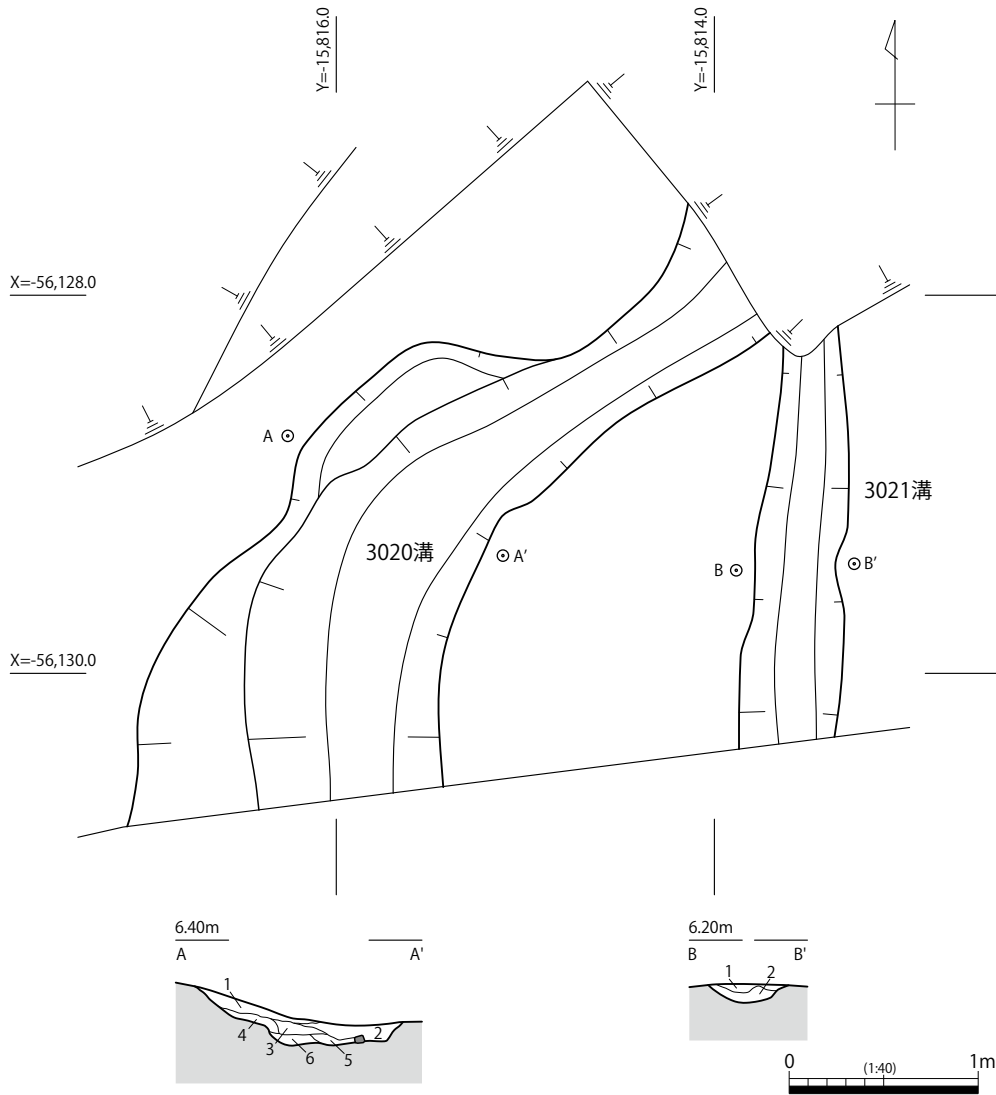
3016柱穴	1	10YR5/2灰黄褐色 砂質シルト (細砂含む。地山ブロック (φ~1cm) 含む)
	2	10YR4/3にふい黄褐色 シルト (炭化物少量含む)
	3	10YR5/3にふい黄褐色 シルト (細砂含む。炭化物少量含む)
	4	10YR4/3にふい黄褐色 シルト
	5	10YR6/1褐灰色 砂質シルト (細砂含む)
3017柱穴	6	10YR5/2灰黄褐色 砂質シルト (細砂~粗砂含む。南東側から中央部を中心に炭化物多く含む)
	1	10YR7/2にふい黄褐色 砂質シルト (極粗砂含む)
	2	10YR5/1褐灰色 砂質シルト
3018柱穴	3	10YR7/3にふい黄褐色 砂質シルト (細砂含む)
	1	10YR4/4褐色 砂質シルト (細砂含む。上面に地山ブロック (φ~1cm) を少量含む)
	2	10YR4/4褐色 砂質シルト (細砂含む)
	3	10YR4/4褐色 砂質シルト (中砂含む。地山ブロック (φ~4cm) 含む)
	4	10YR7/3にふい黄褐色 砂質シルト (細砂含む。礫 (φ~3cm) 含む)
3019柱穴	5	10YR7/1灰白色 細砂~極粗砂混シルト
	1	10YR4/6褐色 シルト
	2	10YR4/6褐色 中砂混シルト (マンガン多量に沈着)
	3	10YR4/3にふい黄褐色 シルト
	4	10YR7/3にふい黄褐色 細砂~中砂混シルト (3のブロック (φ~4cm) を北西側に含む。下面に礫 (φ0.5~1cm) 含む)
3030柱穴	1	10YR5/3にふい黄褐色 シルト
	2	10YR7/4にふい黄褐色 中砂~極粗砂混シルト
	3	10YR6/8明黄褐色 中砂~極粗砂混シルト (ブロック (~φ3cm) (10%) 含む)
3151柱穴	1	10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト (中砂含む。炭化物微量含む。地山ブロック含む)
	2	10YR7/2にふい黄褐色 砂質シルト (極細砂~粗砂含む。地山ブロック含む。炭化物含む)
	3	10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト (中砂、地山ブロック含む)

第52図 3区 第1面掘立柱建物3平面図、断面図



- 3023流路
- 1 10YR5/4にぶい黄褐色 砂質シルト～中砂 (炭化物全体的に含む。細礫を全体的に含む)
 - 2 10YR5/4にぶい黄褐色 砂質シルト～中砂 (炭化物少量含む。地山ブロック (φ~1cm) 南東側を中心に含む (30%)、礫 (φ~1cm) 含む)
 - 3 10YR6/4にぶい黄橙色 砂質シルト～粗砂 (炭化物、細礫含む)
 - 4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～中砂 (炭化物少量含む。地山ブロック (φ2~5cm) 多量に含む)
 - 5 10YR6/4にぶい黄橙色 砂質シルト～粗砂 (炭化物少量含む。細礫含む)
 - 6 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～粗砂 (炭化物少量含む。地山ブロック (φ1~3cm) 10%含む。細礫含む)
 - 7 10YR6/4にぶい黄橙色 砂混シルト～粗砂 (地山ブロック (φ~0.5cm) 含む)
 - 8 10YR6/4にぶい黄橙色 極細砂～粗砂 (地山ブロック)
- 3024流路
- 1 10YR4/4褐色 砂質シルト～中砂 (礫 (φ0.5~1cm)、地山ブロック (φ~0.5cm)、植物遺体含む。)
 - 2 10YR4/4褐色 シルト～細砂 (細礫、地山ブロック (φ0.5~2cm)、植物遺体含む。下面にマンガン多く沈着。)
- 3033・3034流路
- 1 10YR7/3にぶい黄橙色 極細砂～粗砂 (地山ブロック (φ~1cm) 含む)
 - 2 10YR7/3にぶい黄橙色 極細砂～粗砂 (地山ブロック (φ0.5~1cm) 含む)
 - 3 10YR7/3にぶい黄橙色 極細砂～粗砂 (地山ブロック (φ~3cm) 50%含む)
 - 4 10YR7/3にぶい黄橙色 極細砂～粗砂 (地山ブロック (φ~5cm) 60%含む)
 - 5 10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂～粗砂 (地山礫 (φ~1cm) 含む)
 - 6 10YR7/3にぶい黄橙色 極細砂 (地山ブロック (φ~5cm) 含む)
- 3034流路
- 1 10YR7/3にぶい黄橙色 極細砂～粗砂 (10YR3/2黒褐色シルト～中砂含む。礫 (φ1~4cm)、地山ブロック60%含む。炭化物微量含む)
 - 2 10YR7/3にぶい黄褐色 極細砂～中砂 (1のブロック50%含む)
 - 3 10YR7/3にぶい黄褐色 極細砂～粗砂 (ラミナが見られる、北西側は地山ブロック (φ~4cm) 及び下層の砂を含む)

第53図 3区 第1面検出遺構平面図、断面図(3)



- | | | |
|-------|---|---|
| 3020溝 | 1 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト（地山ブロック（φ～5cm）含む） |
| | 2 | 10YR5/2灰黄褐色シルト（中砂含む。礫（φ～1cm）含む。炭化物少量含む） |
| | 3 | 10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中砂～粗砂含む。炭化物少量含む） |
| | 4 | 10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中砂含む。炭化物少量含む） |
| | 5 | 10YR5/2灰黄褐色シルト（中砂含む） |
| | 6 | 10YR5/3にぶい黄褐色シルト（中砂含む） |
| 3021溝 | 1 | 10YR5/4にぶい黄褐色シルト（炭化物少量含む） |
| | 2 | 10YR6/4にぶい黄橙色砂混シルト（粗砂～極粗砂含む。炭化物やや多く含む） |

第54図 3区 第1面検出遺構平面図、断面図（4）

側は削られ2段となっているため全形は不明である。深さは0.45mで断面は台形を呈するが、南側はオーバーハングしている部分もある。埋土は8層で、下層には拳大～0.2mほどの自然礫を多く含む。左右の壁面近くは三角形に堆積している土層が認められる。なお、本遺構については、西側に伸びないことから、土坑の可能性もある。

3024流路は、3023流路の2.5m北側に位置する。最大幅0.9m、検出長1.35mで、断面はU字形を呈する。深さは0.3mで、埋土は2層に分けられる。流路はおおむね東方向で底部の標高も斜面に沿って東が深くなるが、埋土からは常時流水があったような痕跡は認められなかった。

3033流路、3034流路は谷部と丘陵部の境界付近で検出した。3034流路が3033流路を切っている。3033流路は検出長1.2m、幅は0.85m以上あるが、北側の上端は3034流路で削られており、不明である。東に開口し、深さは比較的浅く東側で0.15mであるが、西端でも深くなっている。埋土はシ

ルトを多く含む砂で、常時流水があったような形跡は認められない。また中層には地山ブロックを多数含み、埋め戻された様な状況を示す。

3034 流路は全長 3.2 m にわたって検出した。西端から北東方向へ伸びたものが、 $Y = -15.829$ 付近で東に屈曲する。最大幅 0.7 m、深さ 0.15 m で断面は低い逆台形を呈する。埋土は砂を中心とし、下層にはラミナが認められることから、水が流れていたと考えられる。

3020 溝と 3021 溝は丘陵部中央南端で検出した（第 54 図）。3020 溝は幅 1.7～0.4 m で、北から東へカーブする。断面は逆台形を呈し、中央付近で深さ 0.3 m 程度である。3021 溝はほぼ南北方向に掘られたもので、幅 0.54～0.3 m、長さ 2.2 m に渡って検出したが、北端は近現代の暗渠に伴う攪乱で削平される。断面は浅い U 字形で深さ 0.1 m を測る。

3179 溝は丘陵先端部付近で検出した（第 55 図）。検出長 2.2 m、最大幅 0.27 m、北側はトレンチで削平されるが、その付近までは直線的に検出した。断面は浅い U 字形で、深さ 0.1 m 程度である。

3042 土坑は丘陵部の中央部分付近で検出した不整楕円形の土坑である（第 55 図）。暗渠により北東半分を削平される。検出面で長軸 0.73 m、短軸 0.58 m の大きさで、断面は台形を呈し深さは 0.37 m である。埋土は 10 層に分けられたが、壁際に堆積した層と中央に堆積した層を一つの単位として、3 単位が認められる（3・4 層、5・6 層、8・9 層）。中央に堆積した 3、5、8 層は比較的均質な極細砂～シルト層であり、水成堆積とみられる。静かな状況で貯水しつつ時々周囲から水が流れ込んだ状況が考えられ、貯水施設等の可能性が考えられる。中央付近に巨礫が 1 点存在したほか、出土遺物はなく、時期は明らかではない。

3084 土坑は丘陵部中央東よりで検出した。直径 0.57～0.62 m のほぼ円形の土坑で、深さは 0.07 m と浅い（第 55 図）。埋土には土器片と炭がかなり多く含まれていた。遺構の性格は明らかではない。

第 1 面では、前述の柵列や掘立柱建物を含め、柱穴とピットを合わせて 193 基を確認した。南側丘陵部、とくに南東部で多数の柱穴、ピットを確認した。ピットおよび柱穴の形状や法量については第 7 表にまとめた。

3172 ピットは、平面ほぼ円形で最大径 0.44 m、深さ 0.08 m の比較的浅いピットである（第 55 図）。ピットの底面で礫とともに鉄滓が出土した。礫は円礫と角礫があり、最大長 6 cm ほどの大きさで計 19 点を検出した。これらの礫と混在して、最大長 6 cm の鉄滓 9 点を確認した。礫には被熱は認められないものの、鉄滓によるものか、鉄分の沈着が確認できる。礫と鉄滓は密集しつつも重なり合わないことから、何らかの意図をもって置かれたものと考えられる。

（2）第 2 面（第 56 図、PL.22）

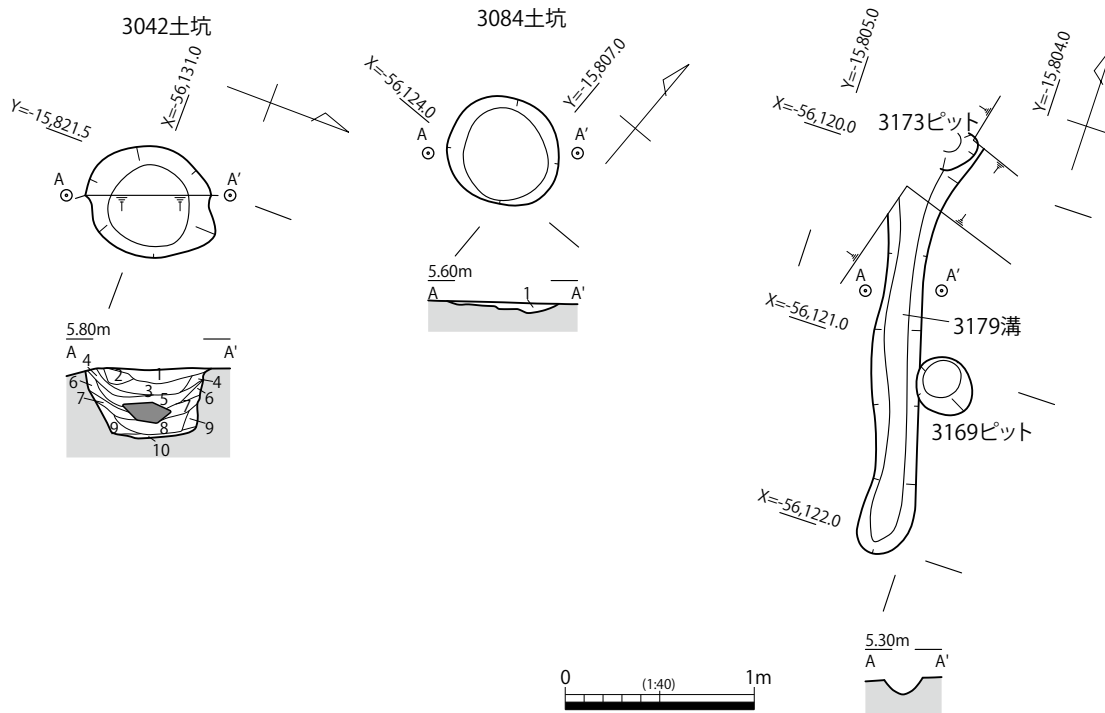
I - 1 層下面にあたる第 2 面では、耕地段差を 1 段検出した。

3241 耕地段差

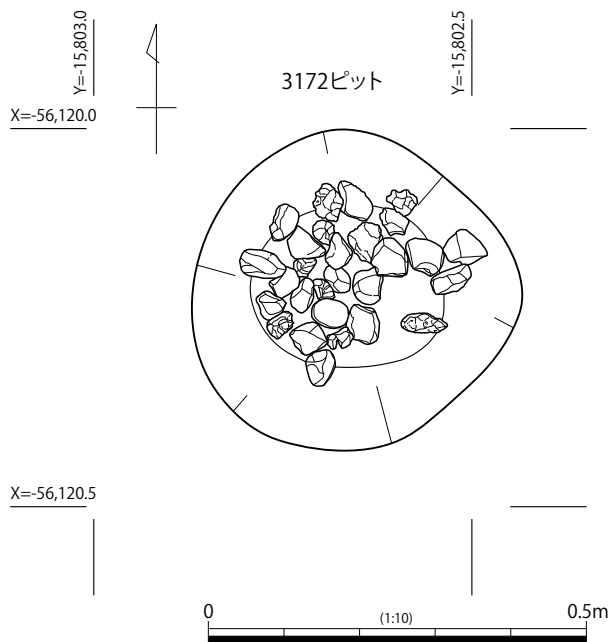
上段の 2I - 2f・3e・3d グリッドで検出した。現況の耕地段差のもとと考えられる。谷筋に直交する北西 - 南東方向に直線的に設けられる。残存する規模は、長さ 19.8m、幅 0.25～0.65m である。北西側は比較的良好に残っており、残存高 0.26m を測る。耕地段差上には不規則に直径 5 cm 程度の丸杭が打設される。段差を補強するためのものと考えられる。

（3）第 3 面（第 57～59 図、PL.22）

第IV章 調査の成果



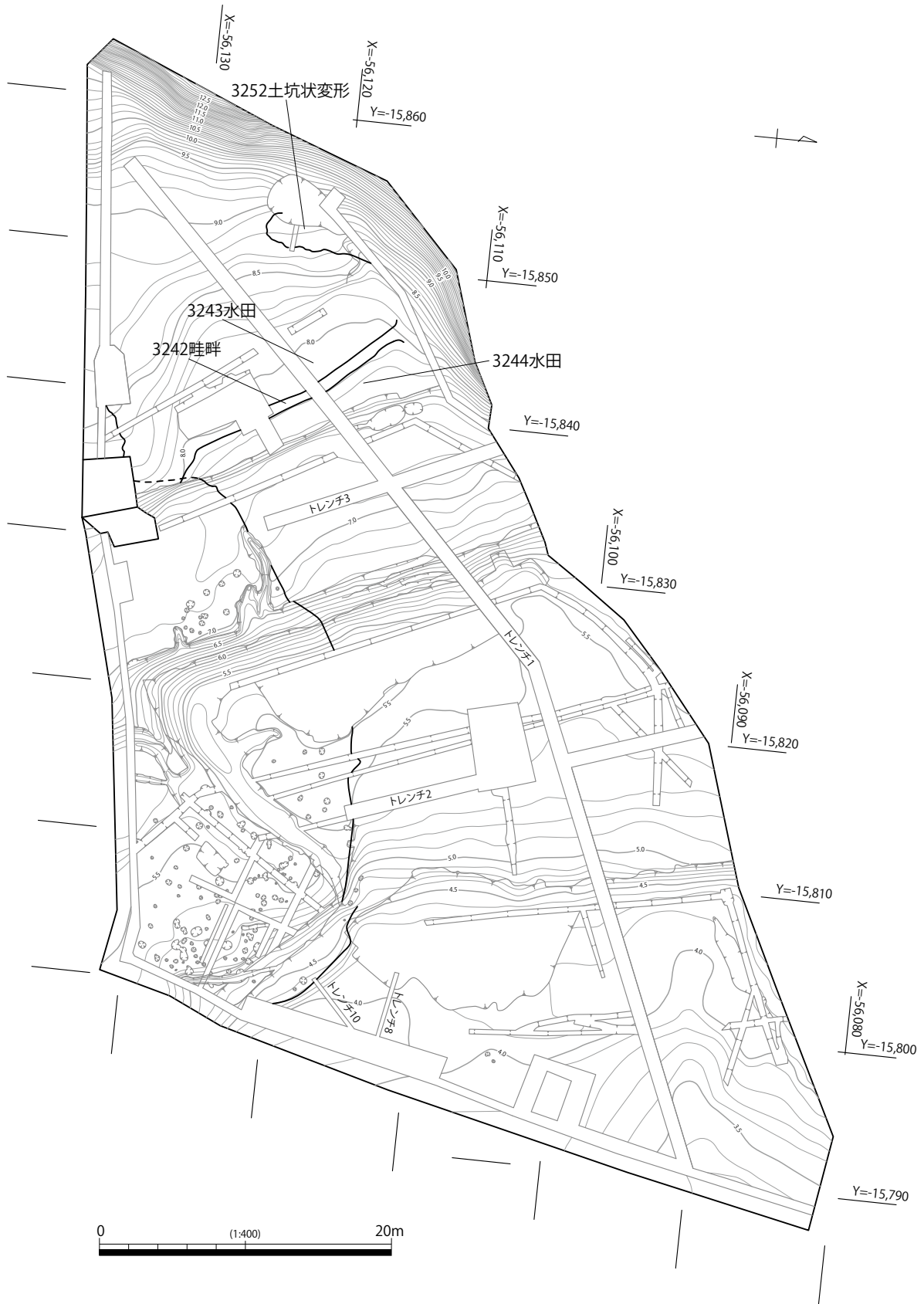
- 3042土坑
- 1 10YR4/2灰黄褐色 細砂～中砂混シルト（上層はシルト混細～中砂、分層可、細礫やや多く含む）
 - 2 10YR3/2黒褐色 細砂～中砂わずかに混シルト（粗砂をやや多く含む。炭化物若干含む）
 - 3 10YR4/1褐灰色 極細砂～シルト（均質）
 - 4 10YR4/1褐灰色 シルト
（10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂～粗砂を層状に含む。周りから流れ込んだように、中央へ向かって薄くなる）
 - 5 10YR4/1褐灰色 極細砂～シルト（3とほぼ同じ）
 - 6 10YR4/1褐灰色 シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂～細砂や2.5Y6/4細砂～中砂を層状に含む。4と同じ）
 - 7 10YR4/1褐灰色（3、5より暗め） 極細砂～シルト（側面近くでは地山破砕礫（ ϕ 0.5cm）わずかに含む）
 - 8 2.5Y3/2黒褐色細砂混 極細砂～シルト
 - 9 10YR4/1褐灰色 シルト（10YR5/4～5/3 にぶい黄褐色 中砂～粗砂や地山破砕礫を層状に含む（4・6と同じ）。8との境は明瞭ではなく、単一の層の可能性あり）
 - 10 10YR4/2灰黄褐色 シルト混中砂～粗砂
- 3084土坑
- 1 10YR3/3暗褐色 粗砂混シルト（炭含む。地山ブロック（ ϕ 0.5～3cm）含む）



第55図 3区 第1面検出遺構平面図、断面図（5）



第56図 3区 第2面平面図



第57図 3区 第3面平面図

第3面はI-2層下面にあたる。畦畔1条とそれに伴う水田2筆を検出した。

3242 畦畔（第58図）

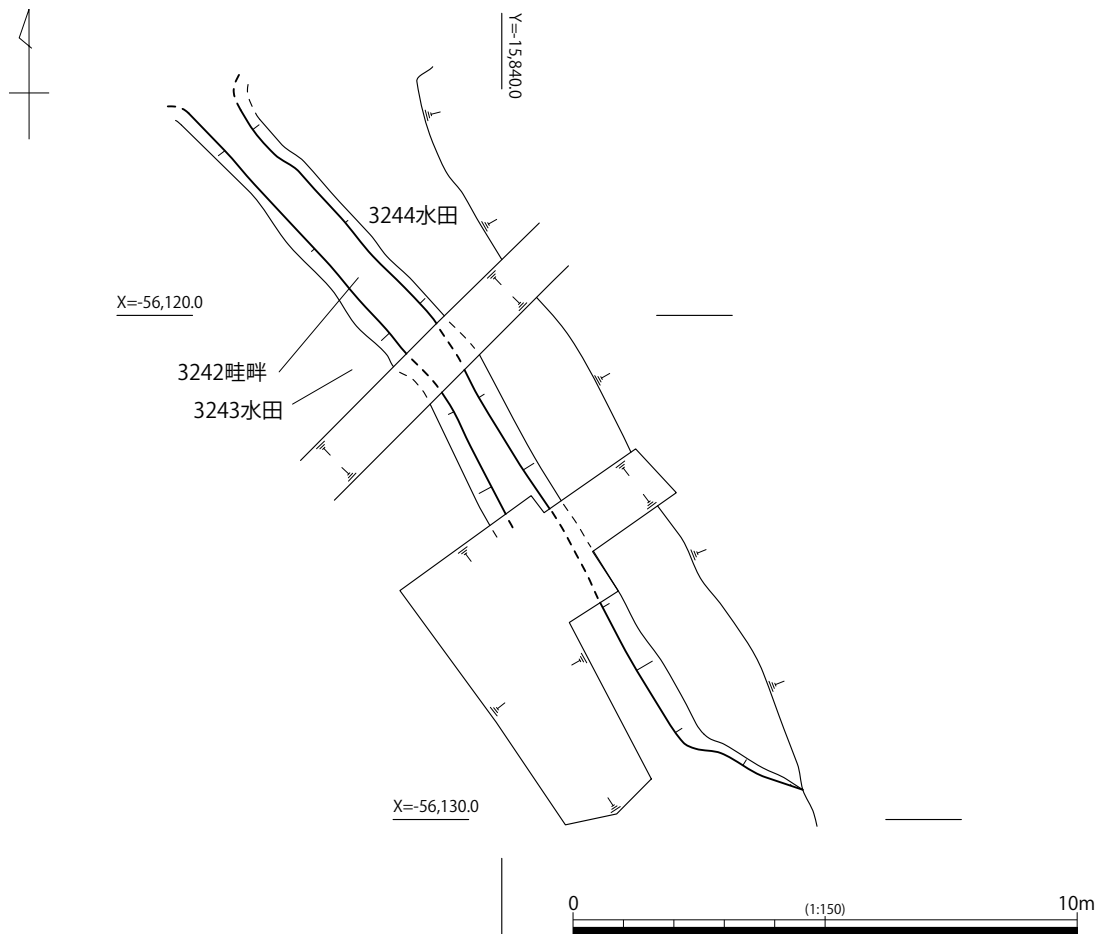
上段2-2e・3d・3eグリッドで検出した。谷筋に直交する北西-南東方向に、概ね直線的に設けられるが、中央部でわずかに屈曲する。全長15.8m、幅0.25～0.35m、最大高0.16mを測る。

3243 水田、3244 水田（第58図）

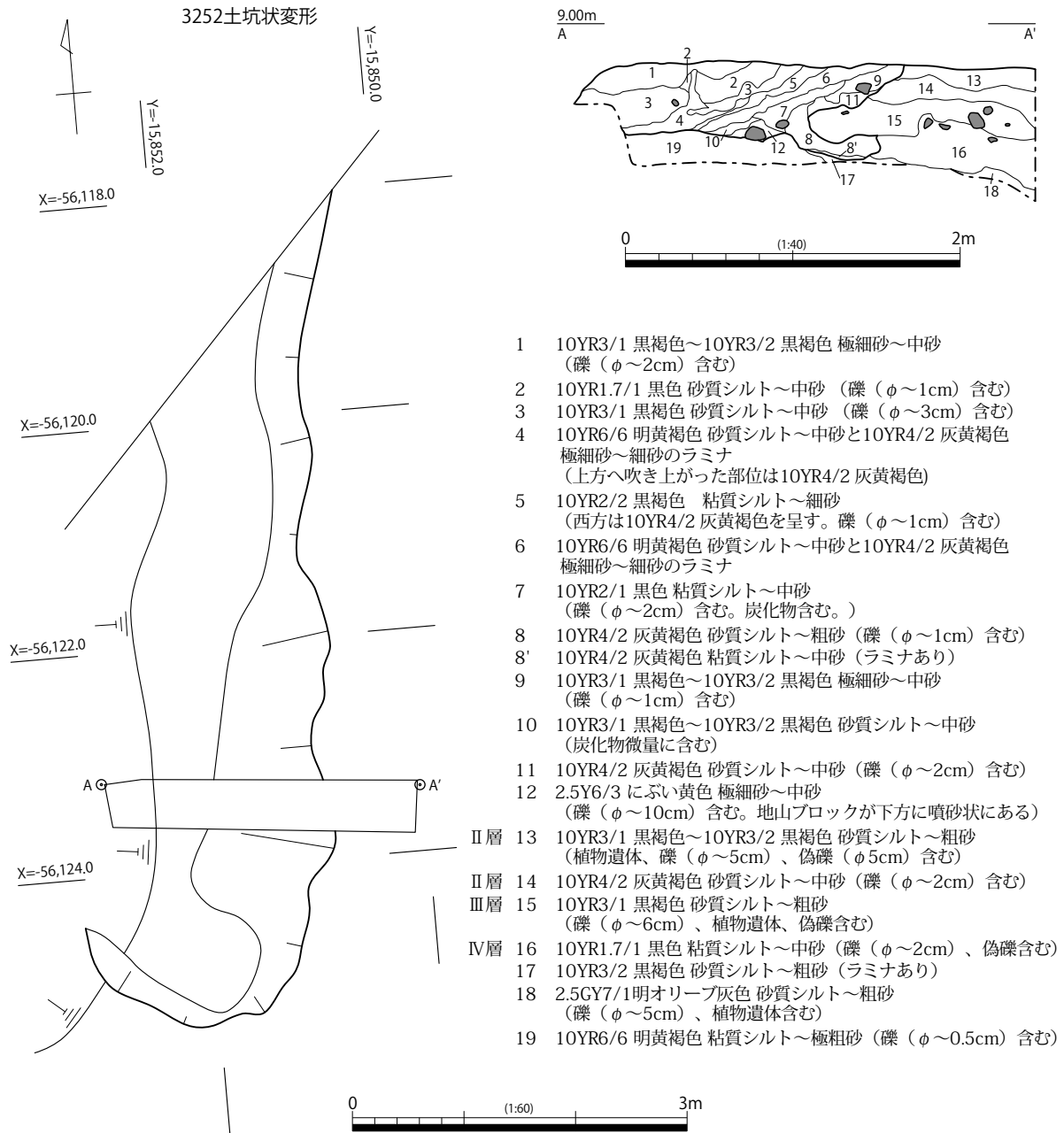
3242 畦畔の両側にやや平坦な部分を検出しており、畦畔によって区切られた水田と考えた。西側が3243 水田、東側が3244 水田である。それぞれ西側、東側の畦畔は検出できず、規模は不明である。

3252 土坑状変形（第59図、PL.24）

調査区西端の丘陵裾付近で検出した。I層を除去した段階で、黒褐色シルト混砂層、黄褐色シルト～砂層などが帯状に認められ、その内側にはI層に近似した層が存在した。落ち込み状のものと推定し、サブトレンチを入れて断面を確認したところ、前述の帯状の土層は下層から吹き上がったものであることが分かり、土坑状変形と判断した。検出面での長さ5.65mで北側は調査区外へ延びる。幅は斜面側に湧水があり攪乱されていたため不明であるが、1.5m以上を測る。深さは最大で0.55mである。地山である19層と色調が近似するが砂粒が大きく細礫を多く含む土を主体とする4、6層が地山から斜め上方に移動し、間に黒褐色土を挟む。これらは19層上に堆積していたものと考えられる。また、8層は19層と15・16層の間に横から入り込んでいる。以上の状況から、本遺構は斜面上方から大きな力が加わることにより、層滑りを起こしたものと考えられる。前述のとおり、現在でも湧水



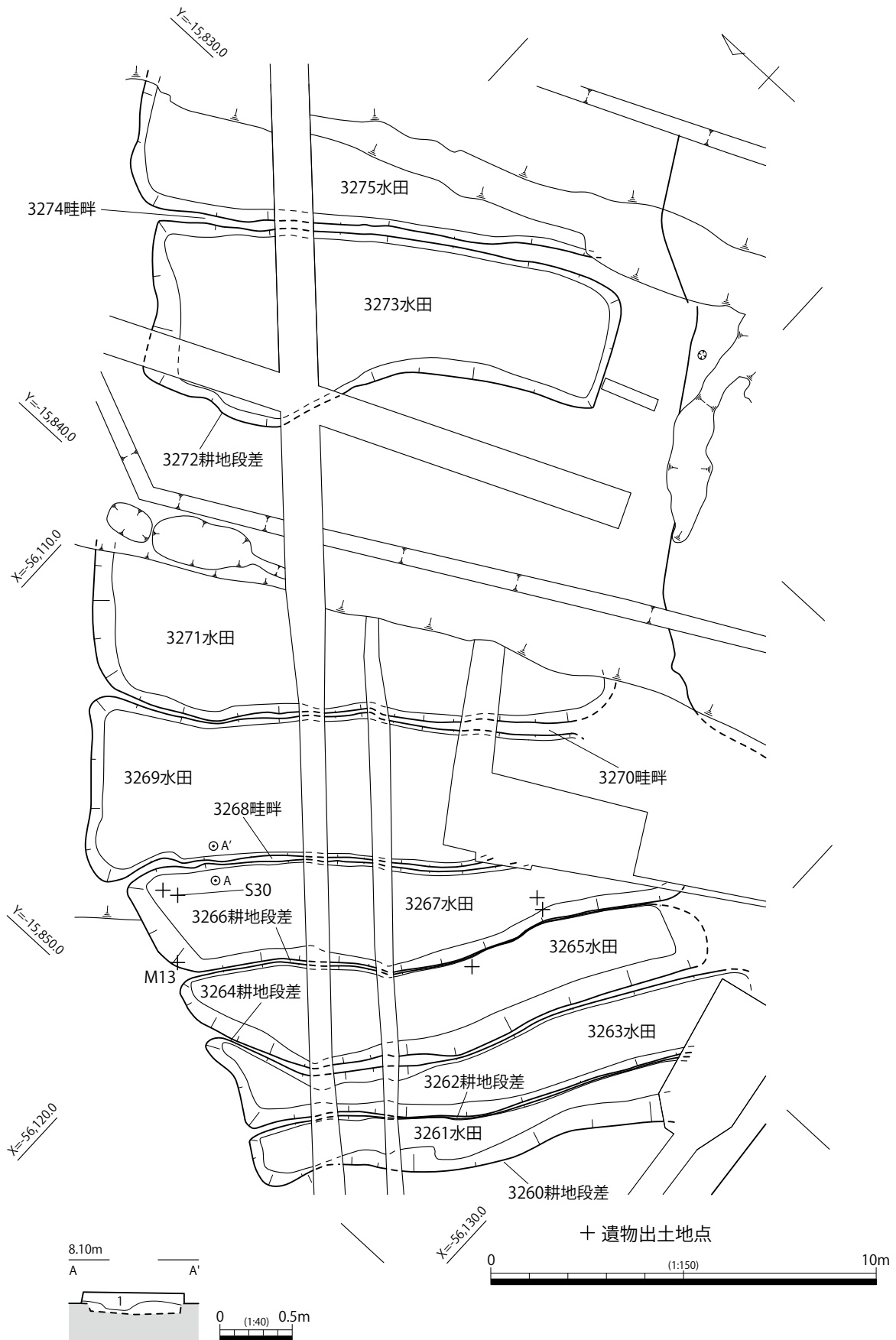
第58図 3区 第3面検出遺構平面図



第59図 3区 第3面検出遺構平面図、断面図



第60図 3区 第4面平面図



3268畦畔 1 10YR2/1黒色シルト～細砂(礫(φ~0.5cm)含む。下面に植物遺体多く含む)

第61図 3区 第4面検出遺構平面図

が見られることから、もともと地下水位が高かったと考えられる。そこに何らかの大きな力、地震動や斜面上方からの崩落などにより、地層が動いたものと想定できる。変形内の土層から、残存状況が比較的良好な土師皿が複数見つかっており、中世以降に形成されたものと考えられる。

（4）第4面（第60・61・64図、PL.23～25）

第4面はⅡ層を除去した面で、畦畔3条、耕地段差5段、水田8筆を比較的良好な状態で確認した。

水田は斜面の高低差を利用し棚田状に営まれ、畦畔もしくは耕地段差により区画される。なお、水田間を区画する斜面のうち、上位側にも斜面をもち高まりの明瞭なものを畦畔、明瞭な斜面を持たないものを耕地段差としている。水田および耕地段差・畦畔の法量等は第5表にまとめており、特徴的な点について以下に述べる。

水田

後世の圃場整備や試掘トレンチなどで削平されている部分もあるが、谷奥の標高8.2 m付近から6.5 m付近まで、8枚の水田を確認した。それぞれの水田は谷筋に直交して設けた畦畔や耕地段差により区画され、1枚の水田は谷幅一杯に造られる。地形による制約のため、不整形となっているものもあるが、概ね長方形を指向している。また、傾斜のため、谷奥ほど幅が狭く、下位のものほど幅が広くなる傾向にある。

水田とは直接関係ないが、3267水田上のⅡ層中から勾玉、銅銭などが出土している。

畦畔・耕地段差

水田間および水田の高位側斜面に造られており、水田間の耕地段差は畦畔が後世の耕作に伴い削平されたと考えられる。地形に若干制約を受けるものの、基本的に谷筋に直交する方向で、概ね直線的に設けられる。

畦畔は幅0.1～0.55 m、高さ高位側0.03 m～低位側0.23 mで、断面は低い蒲鉾形を呈する。水田耕作土を盛り上げて築造しており、芯材等は認められない。耕地段差は高さ0.07～0.2 m、斜面幅0.05～0.7 mで、前述のとおり水田間のは上面が削平されたと考えられる。畦畔、耕地段差とも水口と考えられる施設は確認していない。

3256土坑（第64図、PL.25）

調査区最西部の谷奥で検出した楕円形の土坑である。Ⅲ層堆積土を掘り下げている段階に平面観察

第5表 3区 第4面検出遺構一覧

単位：m

番号	遺構名	全長	幅	高さ	平面形	備考
3261	水田	11	0.5～1.1		細長い矩形	南側がトレンチに切られる
3263	水田	12.7	0.4～1.6		細長い矩形 / 耕地段差により北側が不整形	南側がトレンチに切られる
3265	水田	10.8	1.2～2.4		細長い矩形 / 耕地段差により北側が不整形	
3267	水田	12.1	1～2.45		細長い矩形	南側が試掘トレンチに切られる
3269	水田	9	3.5		矩形	南側が試掘トレンチに切られる
3271	水田	12.7	0.4～3.5		矩形	北西側削平
3273	水田	11.1	2.7～4.7		耕地段差により西側が不整形	北西側一部がトレンチ1・3に切られる
3275	水田	10.5	0.4～2.4		矩形（推定）	北西側削平
3268	畦畔	10.5	0.1～0.25	0.09		3267・3269水田を伴う
3270	畦畔	12.5	0.1～0.3	0.03～0.14		3269・3271水田を伴う
3274	畦畔	10.5	0.2～0.55	0.06～0.23		3273・3275水田を伴う
3260	耕地段差	10.7	0.1～0.7	0.2		
3262	耕地段差	11.5	0.15	0.13		
3264	耕地段差	13.9	0.05～0.25	0.13～0.18		
3266	耕地段差	14	0.08	0.1		
3272	耕地段差	11.9	0.2～0.45	0.07～0.1		

で土坑状の輪郭は見えていたが、当初は窪みなどの落ち込みあるいは攪乱との認識であったため、上部は削平してしまっている。軸を谷筋と直交する北西－南東方向にとり、検出面での全長 1.4 m、最大幅 0.95 m で、深さ 0.11m を測る。

埋土は 3 層に分かれ、最下層の黒色シルト～中砂層中に自然木の枝が長軸方向に敷き詰められた状態で見つかった。他に木の実や葉なども出土している。また、埋土上層には巨礫が 2 点存在しており、一部、枝に重なっていた。意図的に配された可能性がある。このように、内部に木の枝を敷き詰めた状態の土坑は、当遺跡東側に隣接する高住平田遺跡（鳥取県教育委員会 2012）でも見つかっている。

(5) 第 5 面（第 62～73 図、PL.16～21、25、28）

<谷部>

第 5 面はⅢ層を除去した面で、耕地段差 3 段、水田 19 筆、畦畔 14 条を検出した（第 63 図）。

水田とそれに伴う畦畔・耕地段差は、第 4 面同様、基本的に谷筋に直交するように造られるが、一部、谷筋に平行する水田も認められる。また、水田の平面形は基本的に長方形を呈するが、中段ではかなり細長い形状となっているほか、不整形な方形に近いものも認められるなど、一様ではない。なお、水田および耕地段差・畦畔の法量等は第 6 表にまとめており、特徴的な点について以下に述べる。

水田

部分的に圃場整備や試掘トレンチなどで削平されるが、19 枚の水田を確認した。4 面同様、谷部の傾斜に沿って段状に設けられるが、下方では谷の傾斜が緩やかになるため隣接する水田間の高低差はほとんどない。5 面で検出した水田は谷中央付近を境に様相が異なっており、谷奥方向を西群、谷下方を東群とする。

西群は比較的整った長方形を呈するもので、基本的に谷筋に直交方向に設けられるが、3276 水田のみ、谷筋に平行方向となっている。上段のものは幅 2 m 程度、下段のものは幅 1.2 m 程度でやや狭い。水口は確認できなかった。

東群は西側のものは不整形なものが多く、東側では谷筋に直交する方向で非常に細長い形状となっている。途中で直交する畦畔が確認できなかったため、もともとこうした形状の水田だったと考えられる。西群同様、水口は確認できなかった。

畦畔・耕地段差

畦畔・耕地段差は谷筋に直交する方向で設けられるが、3277 畦畔は谷筋に平行に設けられる。また、3324 水田、3302 水田間にもわずかながら谷筋に平行する畦畔が認められるが、この部分は 2 区西部の谷筋に対しては直交方向となり、この谷筋を意識したものと考えられる。この部分の畦畔は低く、幅も広い。

北東部遺構群（PL.28）

調査区北東部で土坑、柱穴、ピット多数を検出した。柱穴・ピットの法量については一覧（第 7 表）にまとめた。

3412、3413 土坑は東端で検出したもので、0.15 m ほど間を空け隣接する。検出範囲ではおおむね楕円形となるが、東側へ続いており、全体の形状は不明である。埋土は黒色の細砂～細礫をわずかに含むシルト混極細砂で、深さ 0.17～0.27 m である。これらの南側は一段低くなるが、その部分と埋土の色調などが近似しており、これらの遺構は水田などの可能性も考えられる。



第62図 3区 第5面平面図

第IV章 調査の成果

3434 土坑は隅丸の平行四辺形を呈する。最大長 2.99 m、幅 2.31 m、断面は逆台形で底面は若干凹凸があるもののおおむね平坦であるが南に向かってやや傾斜する（第 64 図）。深さは最大 0.38 m で、埋土は 2 層に分けられ、周囲が高く中央が低いレンズ状の堆積状況を示す。本土坑に伴うピット等は確認できなかった。床面にピットや柱穴が確認できないこと、壁溝が無いこと、小型であることから、竪穴建物の可能性は考えにくい。また、遺物もほとんど存在せず、時期は不明である。

<丘陵部>

2 棟の竪穴建物を検出したほか、竪穴建物建築前のピット等も確認した。また、丘陵西端で溝や土坑を検出している。ピットについては第 7 表にまとめている。

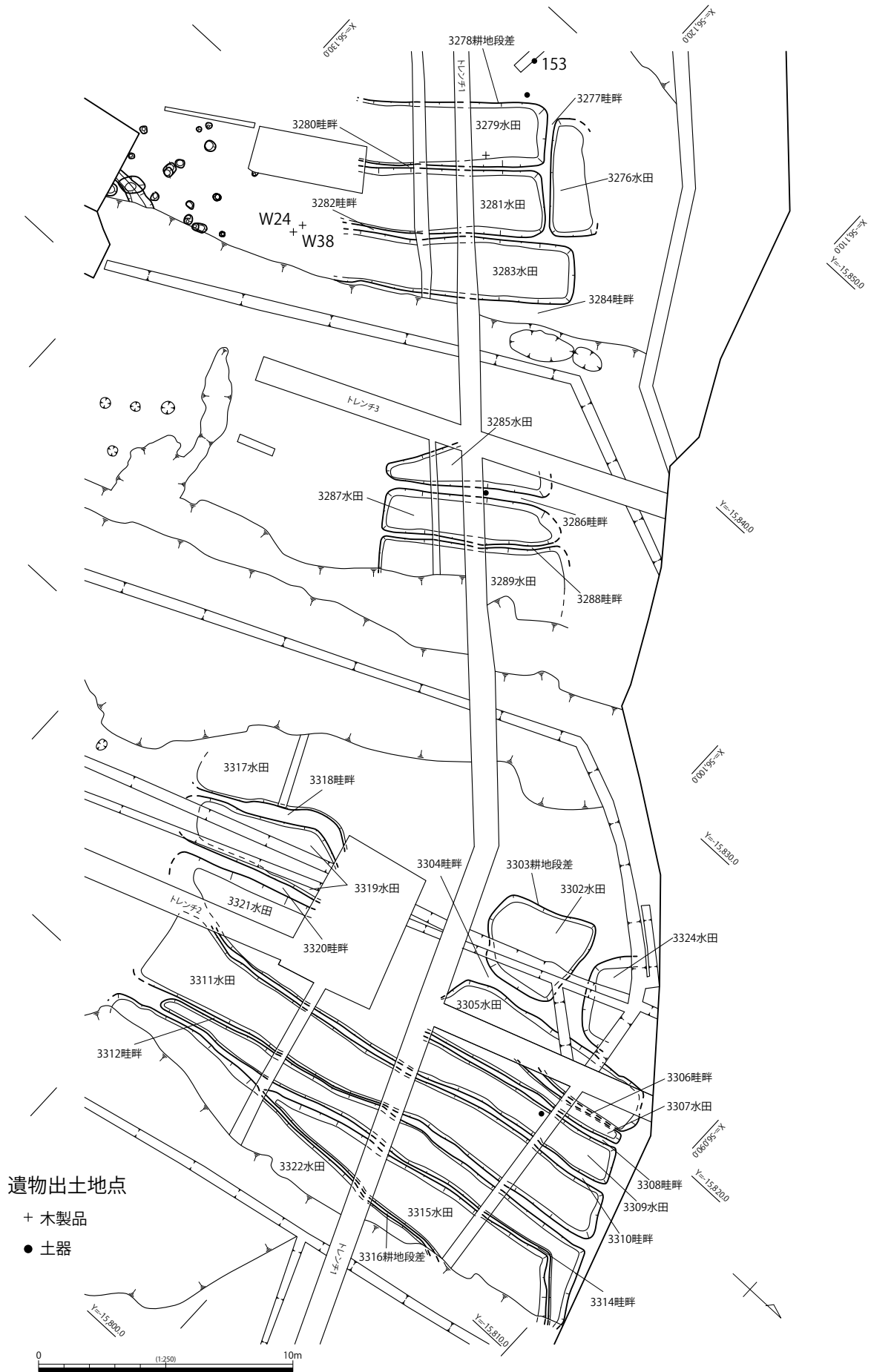
2 棟の竪穴建物は、南から延びる尾根が最も北東に張り出した部分に立地しており、丘陵の復元稜線付近から東にかけての緩斜面上に構築されている。2 棟が重なり合っており、南の竪穴建物 2 が古く、北辺を破壊して北の竪穴建物 1 が建造されている（第 65 図）。

これらの建物については、表土を掘削した段階で竪穴建物 2 の南東隅～南辺を確認しており、形態や大きさから竪穴建物の可能性が考えられた。重複するピット群の検出、記録、完掘ののちに調査に取りかかったのであるが、北側は平面でプランが確認できず、平面で確認した竪穴建物 2 南辺を基準にサブトレンチを 3 箇所掘削し、断面で土層を確認しつつ平面での検出を目指した。

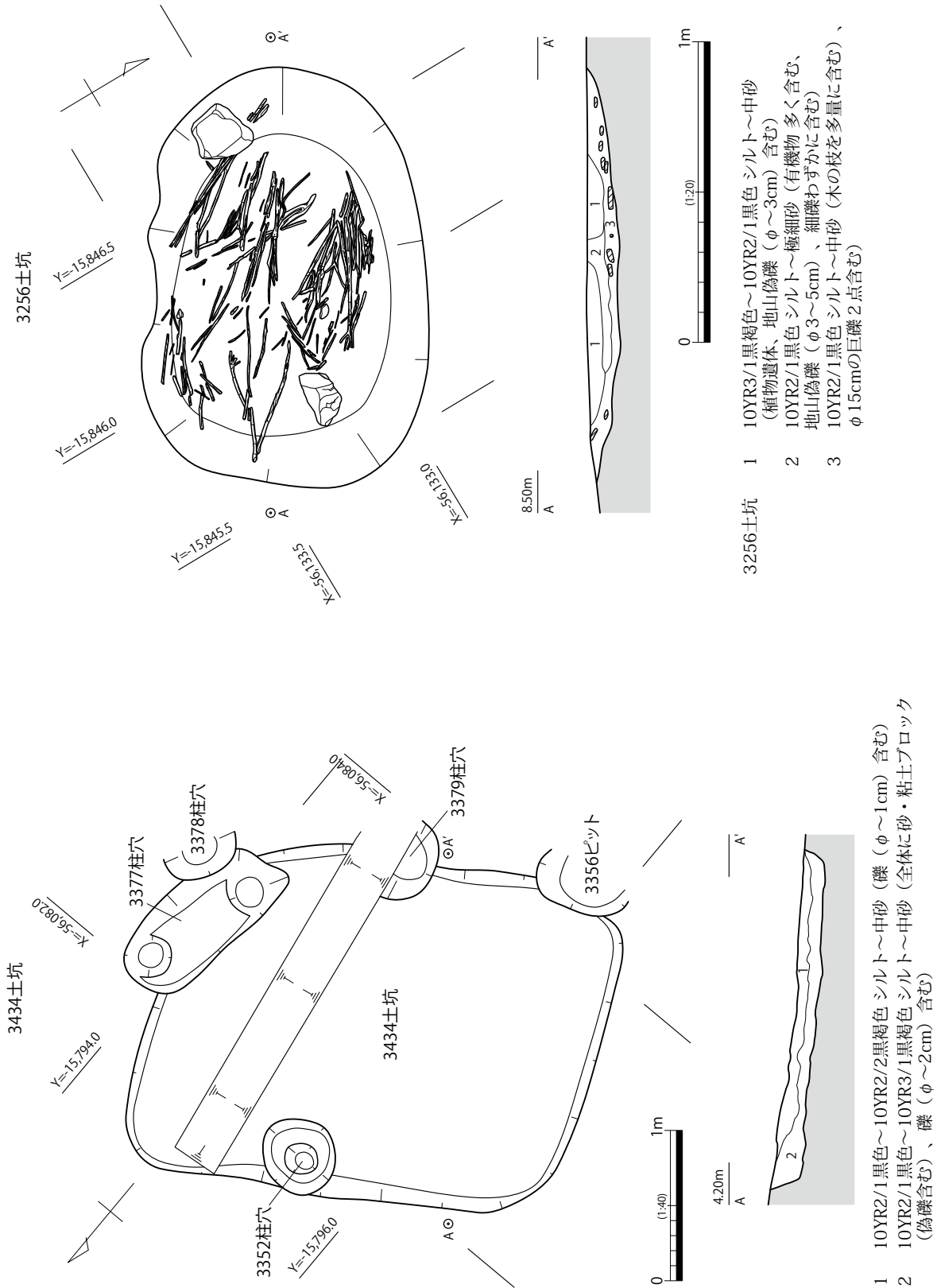
第 6 表 3 区 第 5 面検出遺構一覧

単位：m

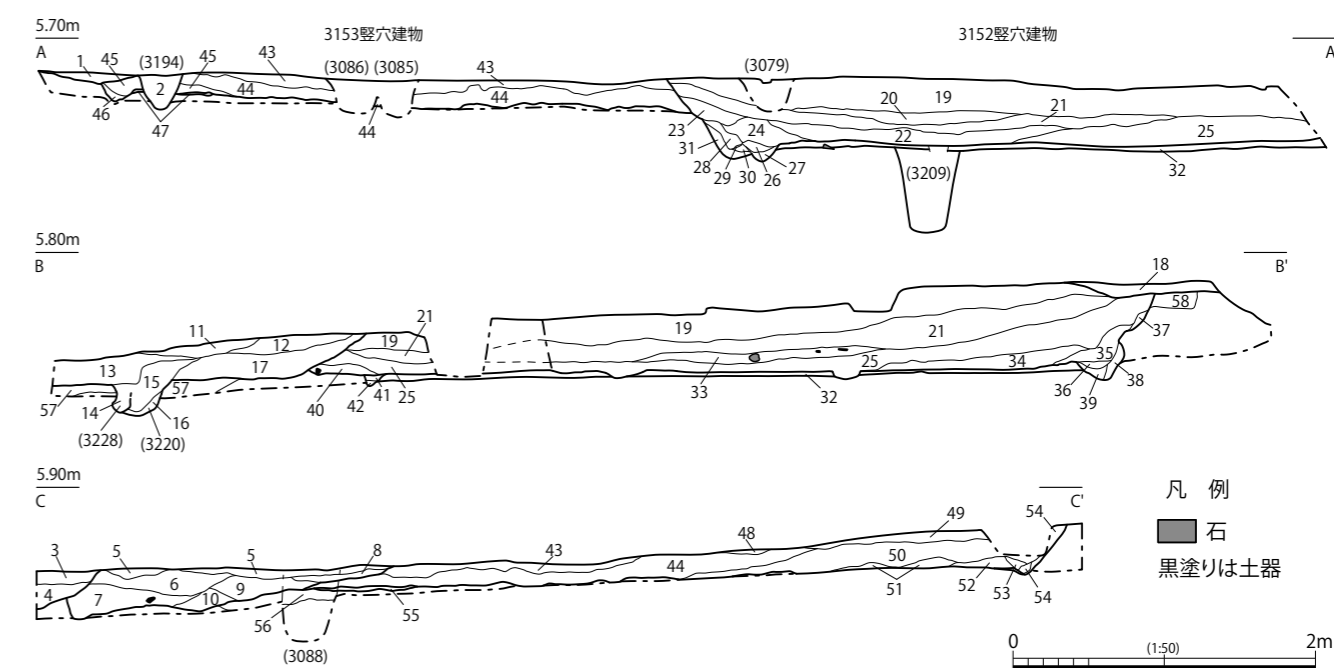
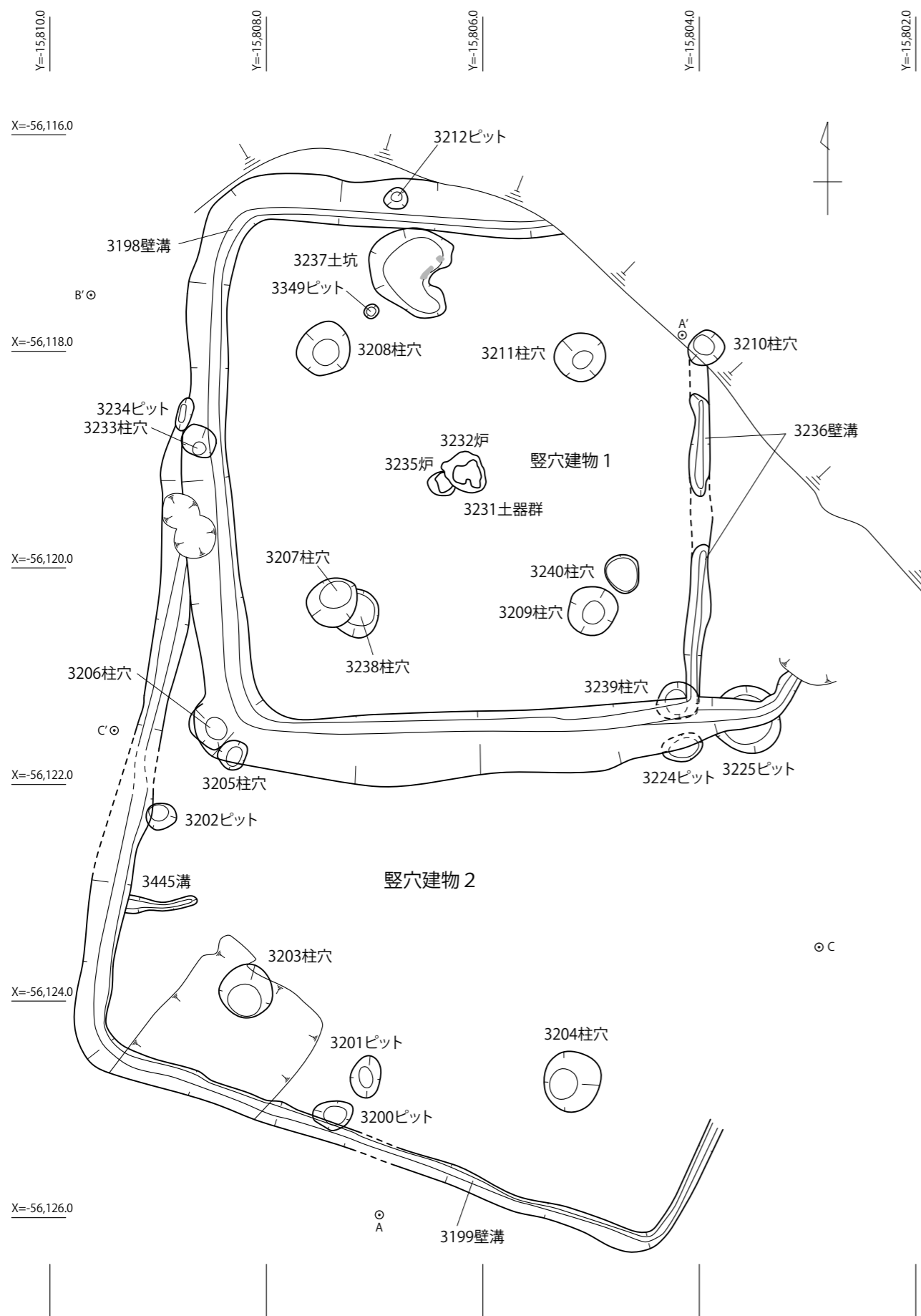
番号	遺構名	全長	幅	高さ	平面形	備考
3276	水田	4.2	0.5 ~ 1.3		矩形（北側が地形に沿う）	
3279	水田	6.8	2.15		矩形	南東側一部未検出
3281	水田	7.4	2.2		矩形	南東側一部未検出
3283	水田	8.6	2.1		やや細長い矩形	南東側一部未検出
3285	水田	5.9	0.3 ~ 1.3		南西側不整形	北西側がトレンチ 1・3 に切られる
3287	水田	6.6	1.2 ~ 1.3		矩形 / 北西側が地形に沿って狭い	
3289	水田	7.2	1.15 ※ ~ 2.8		矩形	東側は削平
3302	水田	3.6	2.0 ~ 3.2		台形（やや不整形）	トレンチに一部切られる
3305	水田	8.4	1.6		やや細長い矩形	トレンチに南東側切られる
3307	水田	8.3	0.2 ~ 0.55		細長い矩形	北西側未検出
3309	水田	20.1	1.3 ~ 2.9		北側はやや細長い矩形、南側は不整形	中央付近は未検出
3311	水田	20.1	1.2 ~ 2.8		やや細長い矩形で南側が外側に開く	
3313	水田	19	0.3 ~ 2.9		逆 L 字形	北東側は削平
3315	水田	13.3	0.15 ~ 2.2		耕地段差により不整形	東側は耕地段差により削平か？
3317	水田	6.3 ※	1.0 ※		不明	西側は削平
3319	水田	5.6	1.4 ~ 2.3		矩形、北西側は不整形	トレンチが 2 条入る
3321	水田					
3322	水田	10.69	0.4 ※ ~ 1.9		矩形か？（西辺が南東へ曲がる）	東側が削平
3278	耕地段差	7.5	0.15 ~ 0.2	0.1		
3303	耕地段差	3.5	0.15 ~ 0.3			
3316	耕地段差	17	0.1	0.05 ~ 0.18		
3277	畦畔	5.2	0.2 ~ 0.3			3276・3279・3281 水田を伴う
3280	畦畔	7	0.15 ~ 0.2	0.1		3279・3281 水田を伴う
3282	畦畔	8.7	0.15 ~ 0.25	0.11 ~ 0.22		3281・3283 水田を伴う
3284	畦畔	9.7	0.1 ~ 0.2	0.04		3283 水田を伴い、東側削平
3286	畦畔	6.5	0.4	0.06		3285・3287 水田を伴う
3288	畦畔	7	0.1 ~ 0.25	0.1		3287・3289 水田を伴う
3304	畦畔	8.5	0.3 ~ 0.6			3302・3305・3324 水田を伴う
3306	畦畔	5.1	0.15 ~ 0.3			3305・3307 水田を伴う
3308	畦畔	8.5	0.2 ~ 0.3			3307・3309 水田を伴う
3310	畦畔	18.6	0.2 ~ 0.28	0.11		3309・3311 水田を伴う
3312	畦畔	20.2	0.1 ~ 0.4	0.08 ~ 0.19		3311・3313 水田を伴う
3314	畦畔	18.5	0.1 ~ 0.3	0.07		3313・3315 水田を伴う



第63図 3区 第5面検出遺構平面図

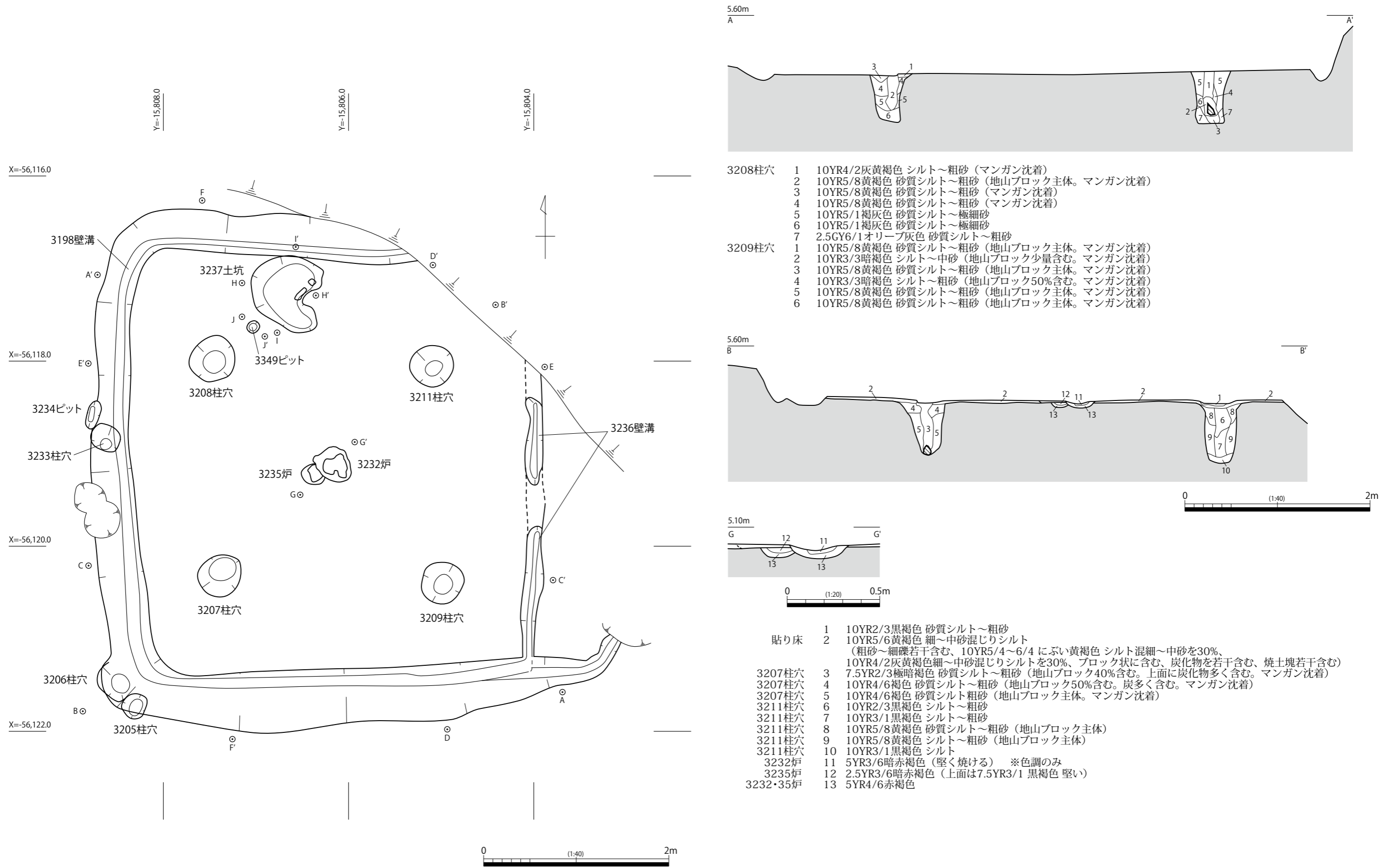


第64図 3区 第4・5面検出遺構平面図、断面図

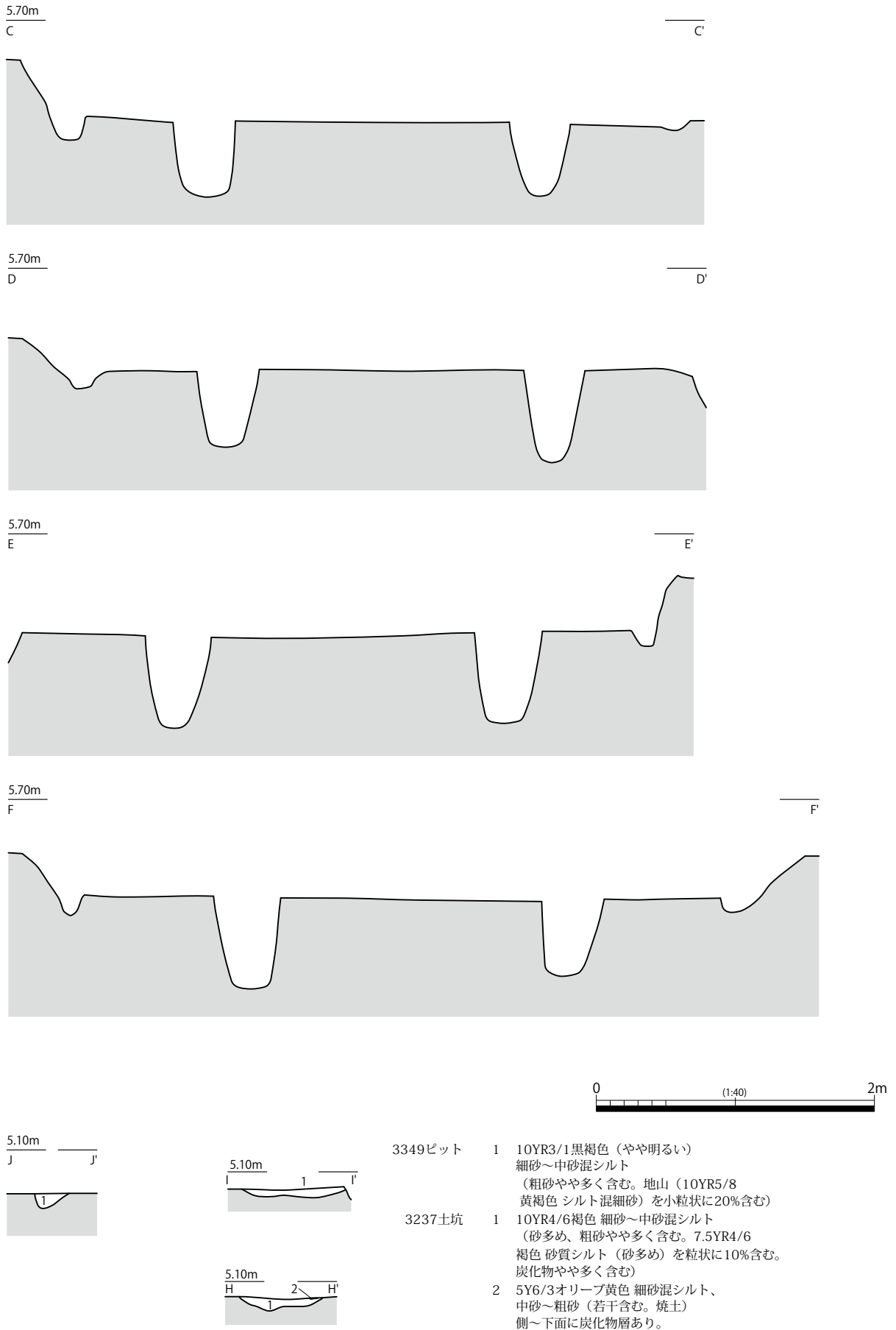


Feature	Soil Profile	Description	
3194ピット	1	10YR3/3暗褐色 極細砂~中砂 (礫 (φ~3cm)、炭化物含む。マンガン沈着)	
	2	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック含む。マンガン沈着)	
	3	10YR3/3暗褐色 極細砂~粗砂 (礫 (φ~5cm) 含む)	
	4	10YR3/3暗褐色 砂質シルト~中砂 (礫 (φ1cm) 含む。地山ブロック全体に含む。炭化物多く含む)	
	5	10YR3/3暗褐色 極細砂~中砂 (地山ブロック50%含む)	
	6	10YR3/3暗褐色 極細砂~粗砂 (細礫含む。地山ブロック (φ0.5~1cm) 少量含む)	
	7	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック、炭化物含む)	
	8	10YR3/3暗褐色 極細砂~中砂 (地山ブロック (φ1~2cm)、礫 (φ3cm)、炭化物含む。マンガン沈着)	
	9	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ~0.5cm) 全体に含む)	
	10	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック90%含む)	
	11	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~細砂 (地山ブロック80%全体に含む。炭化物少量含む)	
	12	7.5YR4/6褐色 極細砂~中砂 (炭化物含む)	
3228ピット	13	10YR3/3暗褐色 砂質シルト~細砂 (炭化物含む)	
	14	10YR3/3暗褐色 細砂混じりシルト (粗砂~細礫若干含む)	
3220ピット	15	10YR3/3暗褐色 (やや明るい) 細砂わずかに混じり極細砂~砂質シルト (10YR4/6褐色 細砂混じりシルトをφ0.5cmまでの粒状に5%含む)	
	16	10YR3/3暗褐色 細砂わずかに混じりシルト (粗砂わずかに含む。10YR4/6褐色 細砂混じりシルトをブロック状に60%、10YR4/2灰黄褐色 (やや明るい) 細砂混じりシルトを小ブロック状に10%含む)	
3224ピット	17	10YR3/3暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック、炭化物含む)	
	18	7.5YR4/6褐色 極細砂~中砂 (礫 (φ~0.5cm) 含む)	
	19	10YR3/4暗褐色 極細砂~粗砂 (礫 (φ~1cm)、炭化物含む。地山ブロック (φ1cm) 微量含む。マンガン沈着大)	
	20	10YR3/4暗褐色 極細砂~粗砂 (地山ブロック、礫 (φ0.5cm)、炭化物含む。)	
	21	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (細礫、地山ブロック (φ1cm)、炭化物含む。マンガン沈着大)	
	22	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (炭化物少量含む)	
	23	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (炭化物少量含む)	
	24	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ1cm) まばらに含む。炭化物含む。マンガン沈着)	
	25	7.5YR3/4暗褐色 極細砂~細砂 (礫 (φ~0.5cm)、地山ブロック (φ1cm)、炭化物含む。マンガン沈着大)	
	26	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (炭化物含む)	
	27	10YR3/4暗褐色 シルト (下面に地山ブロック (φ1cm) 10%含む)	
	28	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (炭化物含む)	
	29	7.5YR4/6褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック40%含む)	
	30	10YR3/4暗褐色 シルト~中砂 (地山ブロック30%含む)	
	31	10YR3/5暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック40%下面に密に含む)	
	32	10YR5/6黄褐色 (やや暗い) 細~中砂混じりシルト (砂多め、粗砂~細礫若干含む) (10YR5/4にぶい黄褐色 シルト混じり細~中砂 (シルト多め) や10YR6/4にぶい黄褐色 シルト混じり細~中砂を30%含む。 10YR4/2灰黄褐色 細~中砂混じりシルトをブロック状に30%含む。炭化物を部分的に多く含む。焼土塊若干含む)	
	3225ピット	33	10YR2/3黒褐色 砂質シルト~中砂 (礫 (φ0.5~5cm)、炭化物含む。地山ブロック微量含む)
		34	7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ0.5~1cm) 下面に多く含む。礫 (φ2cm) 含む。炭化物少量含む)
35		7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ1~3cm) 全体に含む)	
36		7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ0.5cm) 含む)	
37		7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック30%含む)	
38		7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック20%含む。炭化物含む)	
39		7.5YR5/8明褐色 シルト~中砂 (地山ブロック50%含む)	
40		10YR3/3暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック (φ0.5~1cm) 下面に密に含む。炭化物少量含む)	
41		10YR5/6黄褐色 シルト混細砂~中砂 (シルト多め、粗砂若干含む) (10YR3/3暗褐色 細砂~中砂混シルトをブロック状に20%含む)	
42		10YR3/3暗褐色 (やや暗い) 細砂~中砂混シルト (砂多め、粗砂若干含む) (10YR4/6褐色 シルト混細砂~中砂 (シルト多め) ブロックを40%含む)	
3226ピット	43	10YR3/3暗褐色 (やや暗い) 極細砂~中砂 (地山ブロック (φ1~2cm)、礫 (φ3cm)、炭化物含む。マンガン沈着)	
	44	10YR3/4暗褐色 極細砂~中砂 (地山ブロック (0.5~2cm) 含む。炭化物含む)	
	45	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック含む。マンガン沈着)	
	46	10YR3/4暗褐色 極細砂~中砂 (地山ブロック40%含む)	
	47	10YR3/4暗褐色 極細砂~粗砂 (地山ブロック (砂) 50%含む)	
	48	10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂~極粗砂 (地山ブロック (φ1cm) 少量含む。マンガン若干沈着)	
	49	10YR6/4にぶい黄褐色 極細砂~極粗砂 (礫 (φ1~2cm) 含む。マンガン沈着大)	
	50	10YR3/3暗褐色 極細砂~中砂 (地山ブロック (φ3cm)、炭化物含む。マンガン沈着大)	
	51	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~粗砂 (地山ブロック (φ1~2cm) 20%含む。マンガン沈着)	
	52	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ1cm) 30%含む。炭化物含む。マンガン沈着)	
	53	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック (φ1cm) 10%含む。炭化物含む。マンガン沈着)	
	54	10YR6/3にぶい黄褐色 極細砂~極粗砂 (下面に地山ブロック (φ1cm) 含む。マンガン沈着大)	
	55	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック40%含む。炭化物微量含む)	
	56	10YR3/4暗褐色 砂質シルト~細砂 (地山ブロック40%含む。炭化物含む)	
	57	10YR3/3暗褐色 砂質シルト~中砂 (地山ブロック40%含む。炭化物含む)	
	58	7.5YR3/4暗褐色 砂質シルト~中砂 (礫 (φ~0.5cm)、炭化物微量含む)	

第65図 3区 竪穴建物群平面図、断面図



第66図 3区 竪穴建物1完掘状況平面図、断面図



第67図 3区 竪穴建物1断面図、床面遺構平面図、断面図

竪穴建物 1 (第 66 ~ 69 図、PL.16 ~ 21)

竪穴建物 1 は、丘陵裾部の北東端で確認した。北東部が後世の削平により破壊されているほか、東側も削平されているが、その他は良好な遺存状態で検出できた。

平面は東西にやや長い方形を呈し、南北 5.6 m、東西 5.8 m を測る。四辺はほぼ正方位に沿うが、柱穴を基準とすれば、約 3° 西に振っている。深さは最も残りの良い西辺で、検出面から床面まで 0.55 m であった。埋土は壁の立ち上がり付近でやや高く中央部が低くなる、いわゆるレンズ状の堆積を示し、自然堆積と考えられる (第 65 図)。なお、西壁際の 35 層、南壁際の 23、24 層は竪穴建物の崩壊に伴い最初に堆積した土層であり、後述するが竪穴建物の壁面に立てた壁板の裏込め土と考えられる。埋土には土器の小片とともに炭化物が多く含まれ、とくに下層に多かったが、建物自体が焼失した痕跡は認められなかった。

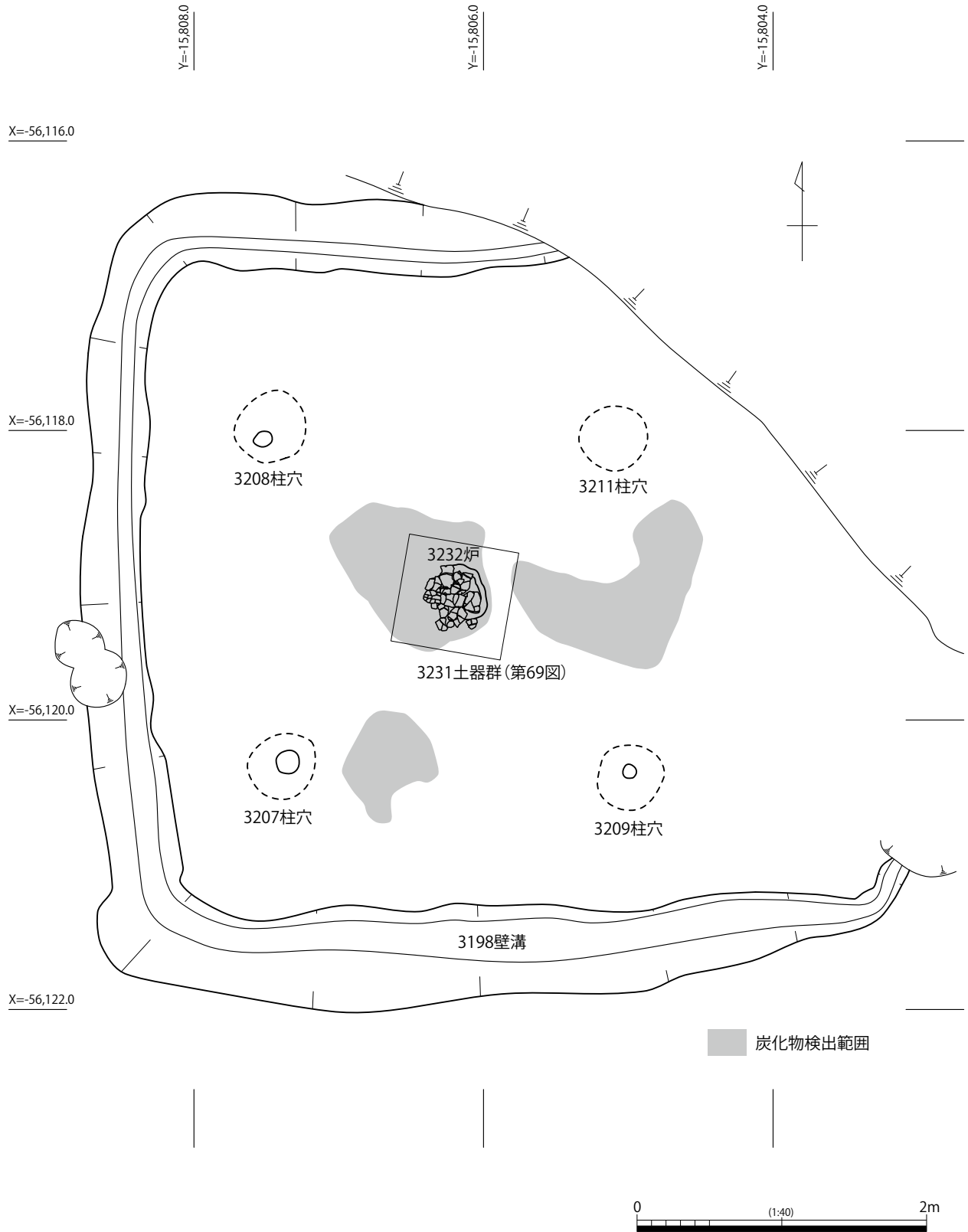
床面と土器群 床面はほぼ平坦に構築されている。中央で 3231 土器群と 3232 炉を検出したほか、周囲には炭化物集中範囲が広がり、中に焼土塊が散在していた。床面には柱穴は確認できなかったものの、その想定される四隅に柱痕とみられる小ピットと円形の落ち込みが確認できたことから、貼床を行っている可能性が考えられた。そのため、床面で検出した遺物・遺構の調査を行った後、断ち割りを入れて貼床と下層の確認をすることとした。

3231 土器群は床面ほぼ中央で検出したもので、同じく中央で検出した 3232 炉の直上にあたるが、炉の直上より西にやや偏在する。南北 0.45 m、東西 0.4 m のほぼ円形の範囲で検出し、土器片はほぼ全て外面を上に向けた状態であった。土器片は大きく 10 ~ 15 cm の長方形のまとまりに分けられ、まとまり同士は重複せず隙間無く並べられていた。それぞれのまとまりはヒビが入り小片となっていたが、土圧によってつぶれたものと考えられる。

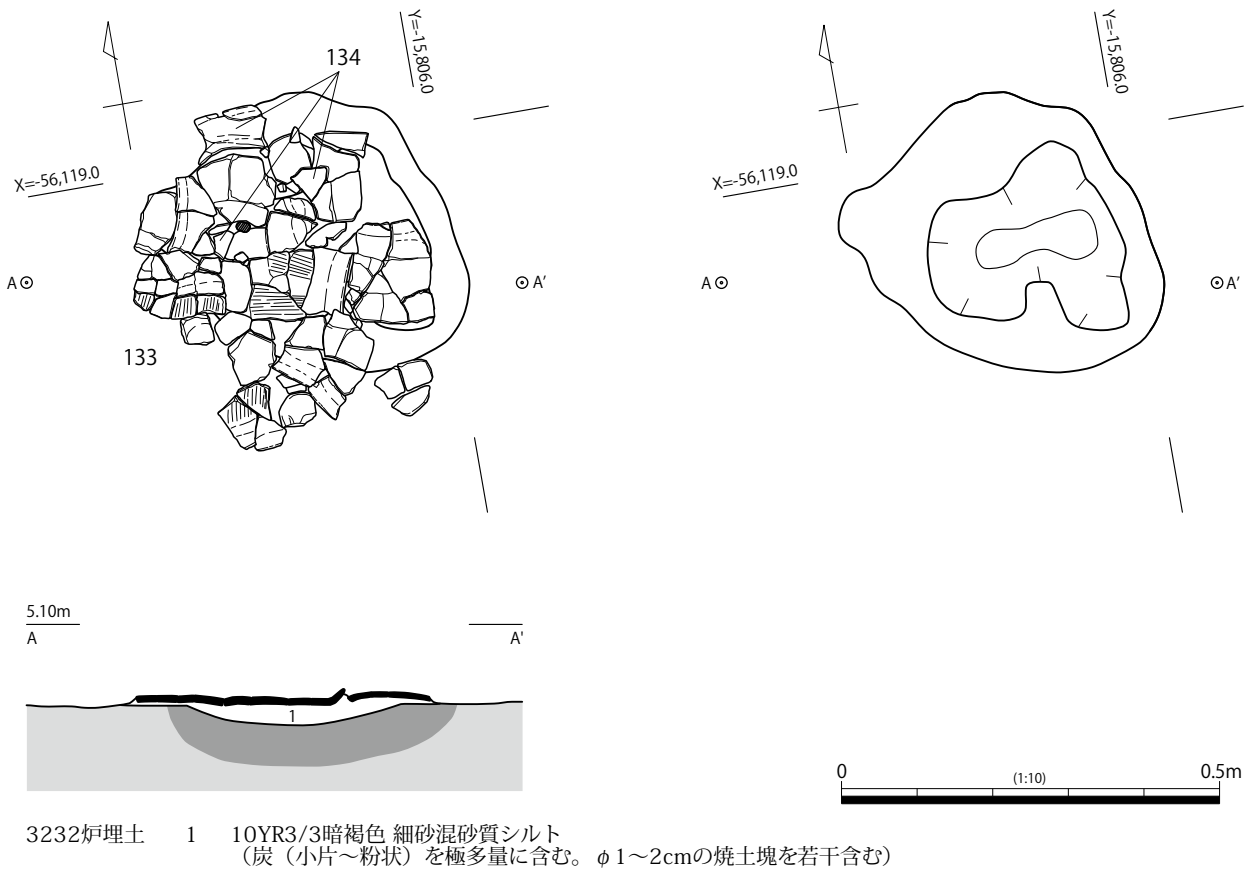
接合の結果、土器は土師器甕二個体分があったことが分かったが、一個体 (第 133 図 134) は口縁部の一部のみで、もう一個体 (第 133 図 133) は欠損する底部片以外ほぼ全てが接合した。133 は大きく 10 片に割られる。口縁部を含む破片 6 個は、北から 2 片ずつ、口縁が外側となることを意図したかのように並べられ、隙間や周囲に胴部や底部の破片を並べる。大きく見れば、西側と東側が半分ずつとなり、最初に半分に割り、それぞれを 3 片に割って並べたことが復元できる。以上のような状況から、意図的に土師器甕を割り、炉を覆うように基本的に口縁が外方となるように並べたと考えられる。なお、134 の破片は一番北側に口縁部を外側に向けていたが、同一個体の小破片が 133 の上に載っていた。

炉 3231 土器群を取り上げた直下で、赤褐色に被熱した範囲を確認し、精査した結果 3232 炉を検出した。被熱範囲は不整隅丸三角形で、長軸 0.44 m、短軸 0.35 m を測る。被熱範囲の中央は浅く (最大 0.03 m) 窪んでおり、その範囲の上面は堅く焼けていた。窪み内部には、炭化物小片をごく多量に含み、焼土塊も若干混じった砂質シルトが上面を覆う土器片との間に存在していた。シルト上面はほぼ平坦であり、土器群が置かれる前にこの浅い窪みが埋まっていた状況が想定できる。3232 炉の周辺から北西側にかけてと、東側と南側に若干離れて、床面に炭化物が集中して検出された範囲があり、この中には焼土塊も混じっていた。

貼床を除去中に、3232 炉の南西でもう一つ被熱範囲を確認した。3232 炉と構造や色調が同一であることから炉と判断した (3235 炉)。この炉の被熱範囲はややいびつな円形で、直径 0.23 m 程度と 3232 炉に比べると小さいものの、色調や被熱深は 3232 炉とほぼ同様である。精査し検討した結果、



第 68 図 3 区 竪穴建物 1 床面検出状況平面図、遺物出土状況図



第 69 図 3 区 竪穴建物 1 床面炉、遺物出土状況図、断面図

この 3235 炉は同じ床面での使用によるものと判断した。上面は若干削平されているようで、3232 炉周辺から西にかけて検出した炭化物と混在する焼土塊はこの炉の削平に伴う可能性がある。したがって、当初は 3235 炉を用い、ある程度使用した後に削平して埋め、新たに 3232 炉を使用したと考えられる。

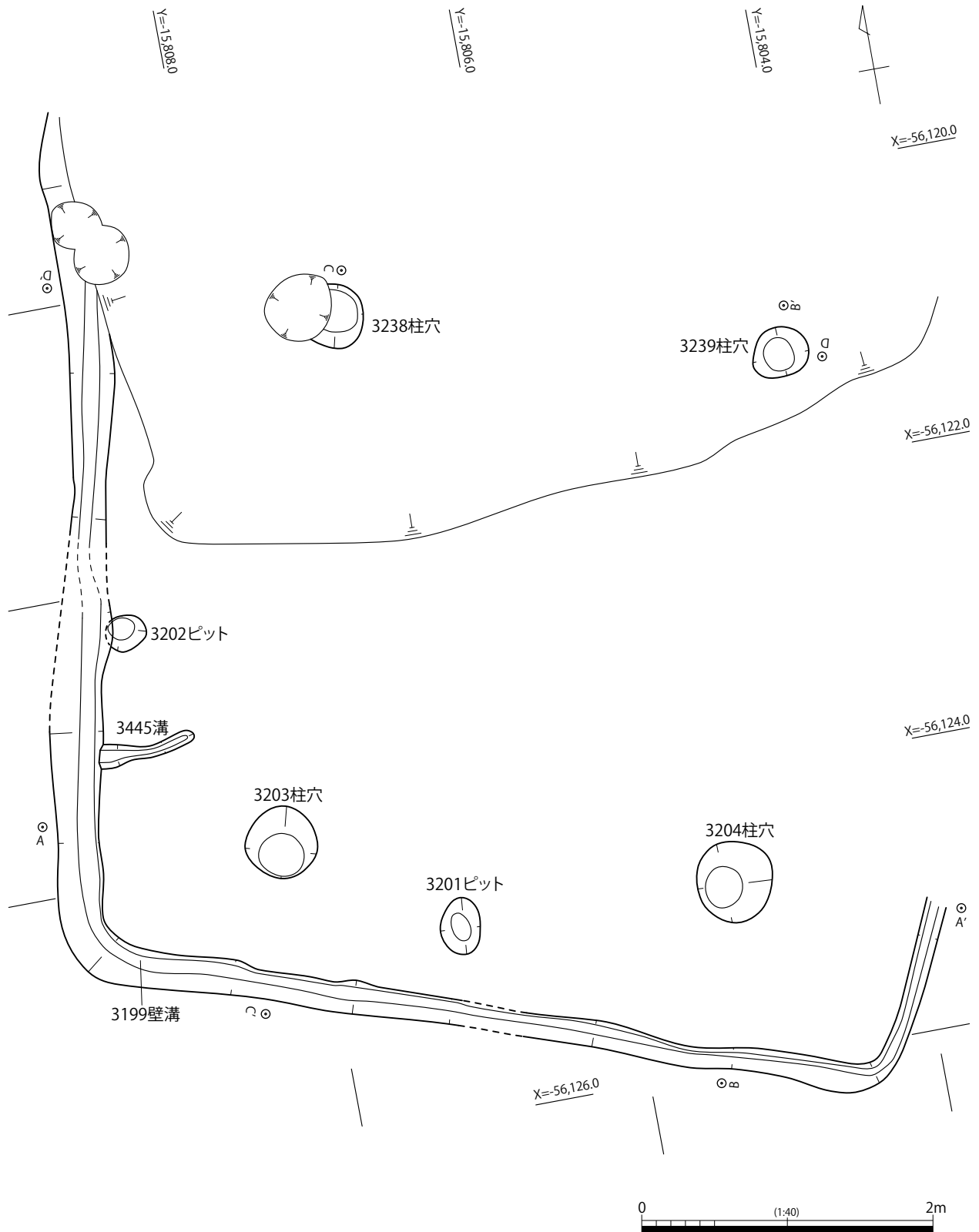
貼床 貼床を構成する土層は、地山由来の黄褐色砂混じりシルトに、同じく地山由来の黄褐色細～中砂や灰黄褐色砂混じりシルトのブロックを多く含み、炭化物や焼土塊を若干含む。上面は比較的堅く締まっていた。後述のとおり、柱穴がこの下面で検出されたことから、床面には貼床が施されていたことが判明した。貼床層は厚さ 0.05 m 程度で床面全体に平均的に分布していた。

柱穴 前述の通り、床面では柱穴は確認できず、柱が想定される四隅に柱痕と見られる直径 0.1m ほどの小ピットと落ち込みが確認できたのみであったが、貼床を除去した段階で柱穴 4 基を確認した。

柱穴の平面形はほぼ円形で、直径 0.45～0.5 m、深さ 0.6～0.67 m を測る。いずれの柱穴にもほぼ垂直の柱痕が確認でき、3207・3208 柱穴には柱根の一部がわずかに残存していた。柱の直径は 0.1 m 程度である。柱の抜き取りなどは行われず、柱を立てたまま廃絶されたことが分かる。柱間は芯々間で、2.25～2.4 m を測る。掘方底部には置き土が確認できるものと、直接掘方底に柱が接するものがある。埋土はおおむね 2 層で構成される。

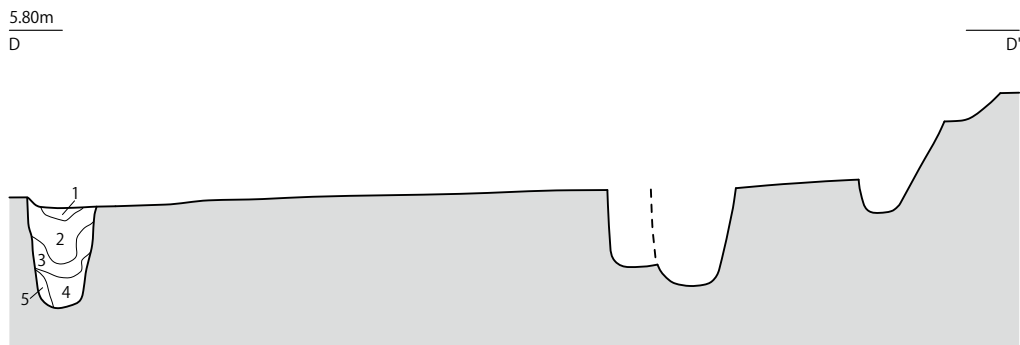
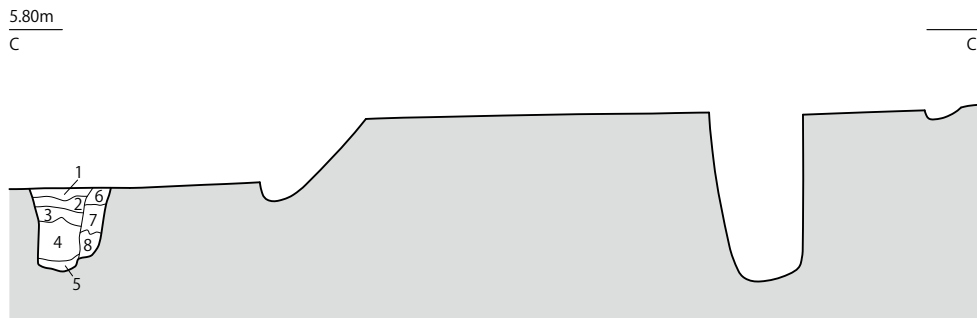
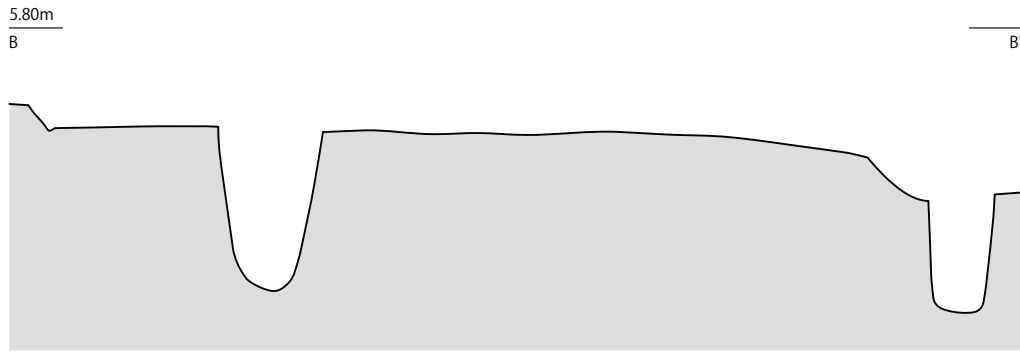
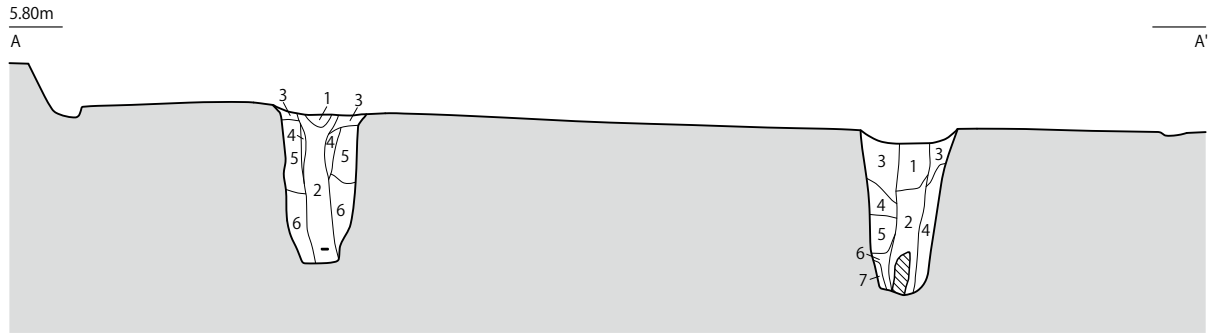
柱穴を上面まで埋め戻した後、床面全体に貼床が施される。貼床の下面はほぼ平坦であったが、貼床以前に床面として利用された形跡は認められなかった。

土坑・ピット 壁溝に重複して、南西隅で 2 基、西辺で 1 基の柱穴を確認した。3205・3206 柱穴は南西隅上部で検出したもので、壁面での確認となったため平面での前後関係を確認できなかった。

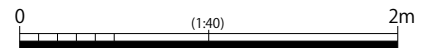


第70図 3区 竪穴建物2 完掘状況平面図

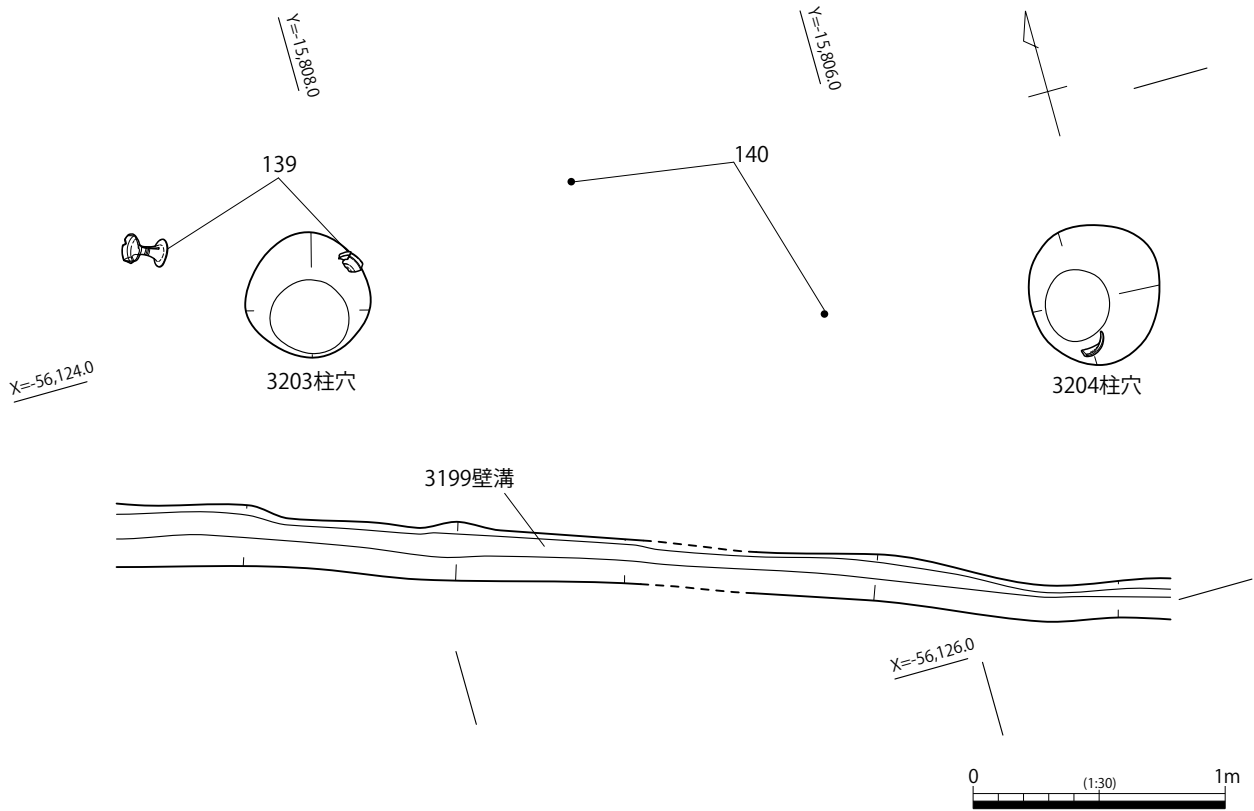
第IV章 調査の成果



- | | | |
|--------|---|--|
| 3203柱穴 | 1 | 10YR4/4褐色 極細砂～細砂 |
| | 2 | 10YR3/3暗褐色 シルト～粗砂 (礫 (φ~3cm)、炭化物含む) |
| | 3 | 10YR4/4褐色 極細砂～細砂 |
| | 4 | 10YR4/4褐色 シルト～中砂 (地山ブロック50%含む) |
| | 5 | 10YR3/3暗褐色 シルト～中砂 (地山ブロック50%含む) |
| | 6 | 10YR6/4にぶい黄褐色 極細砂～粗砂 (地山ブロック30%含む) |
| 3204柱穴 | 1 | 10YR3/4暗褐色 シルト～中砂 (礫 (φ~2cm) 含む。地山ブロック60%含む) |
| | 2 | 10YR3/3暗褐色 シルト～中砂 (地山ブロック10%、偽礫 (φ~1cm) 含む) |
| | 3 | 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 (地山ブロック60%含む) |
| | 4 | 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 (地山ブロック60%含む) |
| | 5 | 10YR4/2灰黄褐色 シルト～中砂 |
| | 6 | 10YR3/3暗褐色 シルト～極細砂 (地山ブロック60%含む) |
| | 7 | 10YR4/2灰黄褐色 シルト～中砂 |
| 3238柱穴 | 1 | 10YR5/8黄褐色 砂質シルト～粗砂 (地山ブロック50%含む。マンガン多量に沈着) |
| | 2 | 10YR3/3暗褐色 シルト～中砂 (地山ブロック50%含む。マンガン多量に沈着) |
| | 3 | 10YR3/3暗褐色 シルト～中砂 (地山ブロック50%含む。マンガン多量に沈着) |
| | 4 | 10YR4/6褐色 シルト～中砂 (地山ブロック50%含む。マンガン多量に沈着) |
| | 5 | 2.5Y5/4黄褐色 砂質シルト～粗砂 (地山ブロック70%含む) |
| | 6 | 10YR5/8黄褐色 砂質シルト～粗砂 (地山ブロック80%含む。マンガン多量に沈着) |
| | 7 | 10YR3/3暗褐色 砂質シルト～粗砂 (地山ブロック50%含む。マンガン多量に沈着) |
| | 8 | 10YR3/3暗褐色 砂質シルト～粗砂 (地山ブロック80%含む) |
| 3239柱穴 | 1 | 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 (地山ブロック30%含む) |
| | 2 | 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 (地山ブロック10%含む) |
| | 3 | 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 (地山ブロック10%含む) |
| | 4 | 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～粗砂 |
| | 5 | 10YR3/3暗褐色 シルト～粗砂 |



第 71 図 3 区 竪穴建物 2 断面図



第72図 3区 竪穴建物2床面遺物出土状況図

3233 柱穴は西辺の中央で確認したものである。楕円に近い隅丸方形で、長軸 0.32、短軸 0.27 m、深さは 0.6 m の大きさである。底面は竪穴建物の床面より低くなっており、壁溝との先後関係は平面で確認はできなかったが、竪穴建物に伴う可能性がある。

また、貼床除去後、床面北側で土坑 1 基、小型のピット 1 基を確認した。3237 土坑は東が内側に突出し、平面は C 字状を呈する。東西 0.75 m、南北 0.8 m、比較的浅く深さ最大 0.1 m ほどである。上面には炭化物が多く認められたほか、板状の焼土塊が認められた。土坑内部には被熱は認められなかったため、火の使用はなかったようであるが、土坑の用途は不明である。3349 ピットは直径 0.14 m、深さ 0.06 m の小型のピットである。貼床に先行するものであるが、性格は不明である。

壁溝 床面の周囲には壁溝が存在する。3198 壁溝は床面での幅 0.2 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m の素掘りの溝である。断面は概ね逆三角形を呈す。西側断面では、壁面側に板材を並べ、床面側を埋め戻して建物の壁面を構築している状況が観察できた。板材は腐朽して残っていないが、板材の痕が断面で確認できたほか（38 層）、平面でも西辺で直線的に確認できた。なお、23・24、35・37 層は、板材の背後に充填した裏込めの土に由来すると考えられる。

東辺では、0.8 m 西側に 3236 壁溝を検出した。検出面での幅 0.2 m 程度、深さ 0.1 m である。この壁溝より東には貼床が認められず、地山であるシルト層が平面的に検出できた。また、断面では、南側に先行する壁溝（31 層）が確認できる。おそらく、この壁溝および 3236 壁溝が当初の壁溝と考えられ、これらに囲まれた床面はほぼ正方形を呈する。その後、東側へ幅 0.8 m 拡張し、改めて 3198 壁溝を掘ったものであろう。南辺では内側に新たな壁溝を掘っているため、壁板背後の裏込め土（23・24 層）が多くなっている。また、西辺・北辺西半では重複が見られないため、掘り直しを行わず、3198 壁溝をそのまま利用していると考えられる。柱は立て直しが行われていないため、床面の拡張

のみが行われたと推定される。拡張前の床面は約 18m²、拡張後は約 22m²を測る。

出土遺物 竪穴建物 1 は、埋土中から土器片が出土してはいるものの、中央の 3231 土器群を除くと床面直上ではほとんど遺物が見つかっていない。ほとんど遺物が存在しない点は注目され、片付けが行われた可能性が考えられる。埋土下層からは古代の土師器、須恵器の破片や移動式かまど、土製支脚などの破片が出土している（第 133 図）。また、柱状の土玉が比較的まとまって出土しているのが注目される。このほか、直接伴うものではないが、貼床を構成する土層からは黒曜石の剥片が 3 点、縄文土器片などが出土している。

なお、埋土最下層検出の炭化物を年代測定したところ、7 世紀前半の較正年代を得ており、遺物の年代観と整合する（第 5 章第 1 節）。

竪穴建物 2（第 70～72 図、PL.16～21）

竪穴建物 2 は竪穴建物 1 の南側で丘陵の高位側に位置する。丘陵の復元稜線よりも東に位置し、丘陵裾部の東側斜面にあたる。竪穴建物 1 が北側に重複して構築されており、北半分を破壊されている。東側も削平されており、西側と南側で平面形を検出した。

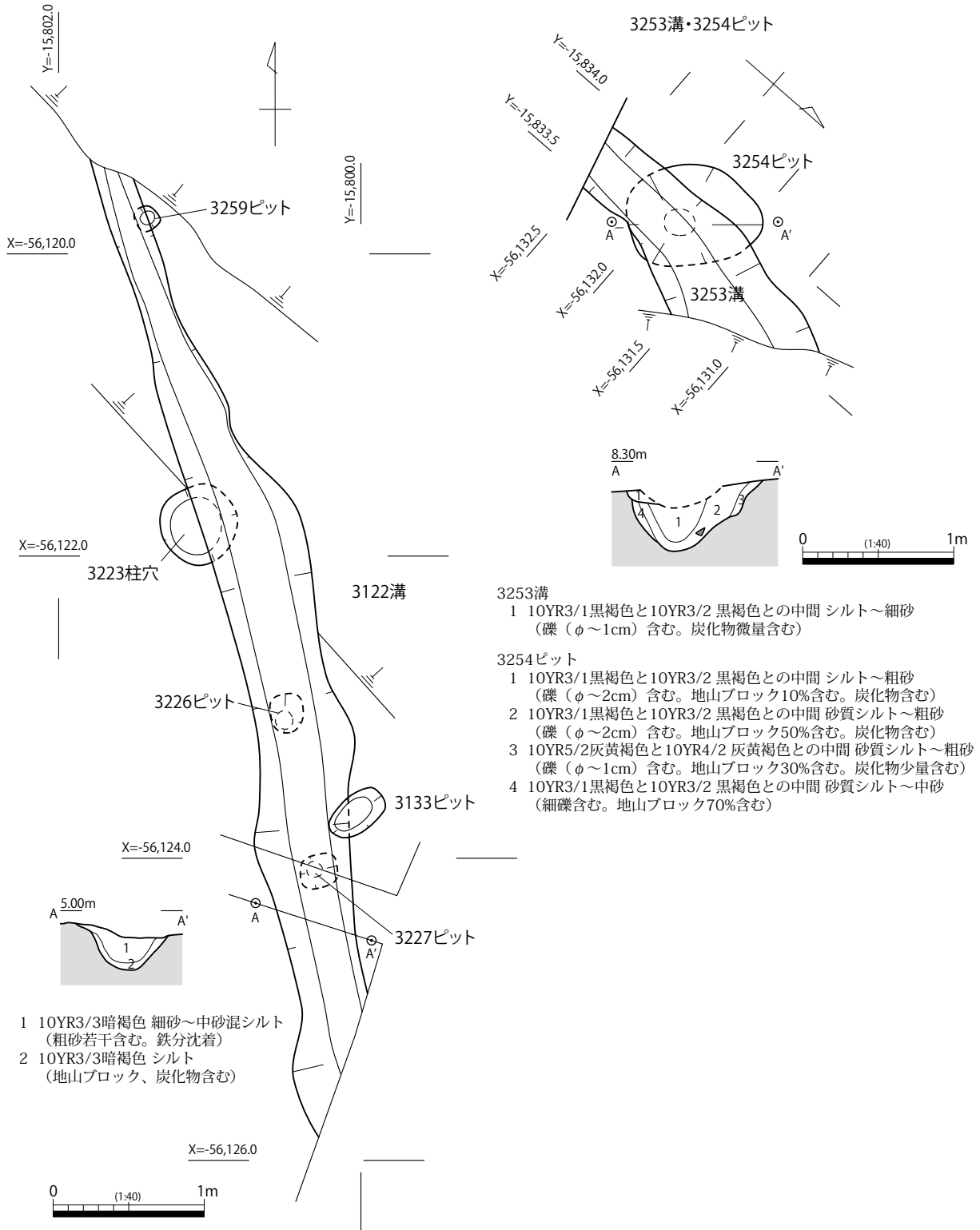
平面は規模が判明する南辺から、一辺 5.8 m を測る。後述するとおり、本竪穴建物に伴う柱穴は 4 基を確認しており、その配置からするとやや南北に長い長方形のプランが復元できる。南北は 6.0 m 以上となり、やや大型の建物になろう。柱穴を基準とすると、主軸は東に振れ、N - 16° - E をとる。

検出面から床面までの深さは最大 0.2 m である。埋土は大きく 2 層に分けられ、下層は中央部が低く周囲がやや高いレンズ状堆積を示しており、自然堆積と考えられる（第 65 図）。上層の 43 層は地山由来の黄褐色細砂～中砂の比較的大きなブロックを多く含む。この中には、土器小片や炭化物も含まれる。この 43 層は人為的に埋められた土と考えられ、竪穴建物 1 を構築する際に生じた土で、廃絶後埋まりきっていなかった竪穴建物 2 を埋め戻していると考えられる。

柱穴 本竪穴建物に伴う柱穴は 4 基を確認した。南側の 3203・3204 柱穴は床面から底までが残っていたが、北側の 3238・3239 柱穴は竪穴建物 1 によって上半 3 分の 2 が破壊されている。

柱穴はほぼ円形で、床面での直径 0.5～0.55 m、深さは比較的深く 0.8～0.88 m で直線的に掘削されている。3202・3203 柱穴では上面で柱痕が確認できたほか、3203 柱穴では柱根の一部が残存していた。断面から、掘方の底部に置き土は認められず、底面に直接柱を立てて埋め戻している。なお、柱痕跡はいずれも垂直ではなく、若干外方に傾いているが、原因は不明である。また、竪穴建物 1 に破壊された 3238・3239 柱穴では、柱の痕跡は平面・断面とも確認できなかった。とくに、3238 柱穴は竪穴建物 1 に伴う 3207 柱穴が一部重複しており、掘方の北西部分を破壊している。断面では、掘方とは別に北側に掘り込みが認められ、水平に埋め戻した状況が観察できた。この掘り込みは柱穴に重なるように掘っていること、丁寧に埋め戻していることから、柱の抜き取り穴と考えられる。いっぽう、3239 柱穴では、下方に凸となるように埋め戻されている。おそらく、両柱穴は竪穴建物 1 を建築する際にはまだ柱が残っていたため、柱を抜いて埋め戻したのち改めて柱穴を掘り、柱を立てたと考えられる。

柱の太さは、痕跡からであるが 0.15 m 程度と竪穴建物 1 に比べると若干太い。柱穴も深いことからわかるように、建物が大型であるが故に太く、掘り方も深くなったと推定される。柱痕跡または掘方の芯々間は東西が 3.1～3.2 m、南北が 3.6～3.7 m でやや幅が広い。残存状況がよくないこともあり、床面には被熱痕跡は認められなかった。



第73図 3区 第5面検出遺構平面図、断面図

壁溝 床面の周囲には3199壁溝が巡っている。幅0.15～0.2 m、深さ0.07～0.1 mと比較的細く浅い素掘りの溝である。掘り直しは認められなかった。また、壁面の構造に関する情報も得られていない。

壁溝で囲まれた床面は、若干の凹凸を有し、南西から北東にやや傾斜する。平面的には確認できなかったが、断面では地山ブロックを含む層（第65図47、55層）が床面直上に認められ、部分的に貼床が存在した可能性がある。床面の面積は復元数値で約30㎡を測る。また、西辺南端から北へ1.1 m程度の場所に、床面にほぼ東西方向の3445溝が確認できた。検出長0.7 m、幅は最大で0.16 mを測る。床面の仕切りなどの可能性が考えられる。

出土遺物 埋土は浅く削平や破壊も大きかったものの、南半で比較的残存状態が良好な遺物を検出した。3203柱穴上面で須恵器高杯杯部、0.5 mほど西側で須恵器高杯脚部が出土し、整理の結果同一個体であることが判明した（第134図139）。また、3204柱穴上面でも須恵器長頸壺の胴部が出土している。これらの土器は、古墳時代後期末葉に位置づけられる。床面での検出であり、竪穴建物の廃絶時期もおおむね同時期と考えられる。

溝

3122溝は竪穴建物群の東側で検出した溝で、南側は調査区外へ伸び、北側は後世に削平される。幅0.65 mで検出長6.6 mをはかり、わずかに西に湾曲しつつ概ね直線的に延びている（第73図）。断面はU字形を呈し、深さ0.4 mである。上面は削平されている部分もあるが、底面の標高は4.6 m程度とほぼ一定で、丘陵斜面に概ね平行に掘られたものとみられる。

3253溝は丘陵部裾が西南へ湾曲して調査区外へと延びる付近で検出した溝で、この部分は調査区周囲に打設した矢板の打設深度が不十分で、周辺に3.5 mの距離を取って調査したため、未調査部分が残っている。延長2.1 m程を検出した（第73図）。断面は浅いU字形で、埋土は単層である。重複して3254ピットが存在し、溝がピットを切っている。

(6) 第6面～第8面（第74～76図、PL.26・27）

第6面以下は谷部の自然堆積層を区分したものである。黒色腐植土層であるⅣ層の下面を第6面とした。遺構は確認できなかったが、北西部丘陵裾のⅣ層中から「舌状石製品」（第158図S29）、須恵器、土師器が出土した。

第7面は土石流と考えられるⅤ層を除去した面である。遺構は検出できなかったが、層中からは須恵器（第137図175）が出土した。

第8面はⅥ層下面で、遺構は確認できなかったが、層中から土師器把手付甕（第137図176）が出土した。

4 小結

3区は東に向かって開口する小さな谷を中心とする。南側に存在した丘陵の裾部や2区から続く丘陵部分も一部調査区内にのびており、谷部と丘陵部で検出した遺構は異なっている。

谷部は、計8面の遺構面の調査を行い、第1面～第5面にわたって水田を確認した。基本的に谷を横断する方向に畦畔を構築し、等高線に沿って水田を棚田状に営んでいた。水田からは多くの遺物が出土したが、繰り返される耕作により土器の大半は細片化し、大きく動いていた。したがって時期を直接示すものではないが、大まかに古代～中世にかけて、断続的に水田が営まれたと考えられる。第



第74図 3区 第6面平面図



第75図 3区 第7面平面図



第76図 3区 第8面平面図

6面～第8面は遺構を確認できなかったが、砂礫層（Ⅶ層）の上に有機物層（Ⅵ層）、その上を覆う土石流と考えられる（Ⅴ層）など、谷部における堆積状況が確認できた。

丘陵部は、遺構面として検出したのは2面分であるが、圃場整備に伴う大規模な削平や耕作の影響を受けて異なる時期の遺構も同一面で確認していると考えられる。南東部丘陵裾で竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟のほか、北東部も合わせ多数のピット・柱穴、土坑や溝、流路などを検出した。

2棟の竪穴建物は重複して構築されており、竪穴建物1が竪穴建物2を破壊している。竪穴建物2の柱を抜き取って埋め戻した後、改めて竪穴建物1の柱穴を掘っていることから、竪穴建物1の掘方掘削時には柱が残っていたことが推定できる。したがって、竪穴建物2の廃絶後、あまり時間をおかずに竪穴建物1を建てた可能性が考えられる。竪穴建物2は床面の土器から6世紀後葉に位置づけられる。竪穴建物1はこれよりも後に建てられたものであり、炉を造り替えつつ使用したことを考えると、廃絶は少なくとも7世紀前葉頃と考えられる。炉上の3231土器群を構成する土師器甕（第133図133）、埋土下層の炭化物の年代測定結果から見ても矛盾はない。

以上のように、3区の発掘調査で、谷部と丘陵部における土地利用の状況を確認することができた。

第7表 3区 検出遺構一覧

丘陵部第1面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
3005	柱穴	隅丸長方形	41	33	U	36	
3006	柱穴	楕円形（台）	23	20	コ	8	
3007	柱穴	不整形（楕円）	42	24	V（丸）	25	
3008	柱穴	楕円形（三）	32	27	U	25	
3010	柱穴	楕円形	49	39	コ	46	
3012	柱穴	楕円形（三）	48	43	U	51	
3013	柱穴	隅丸三角形	34<	36	U	59	3013 柱穴 <3091 柱穴
3014	柱穴	楕円形	53	42	コ	64	
3016	柱穴	楕円形（円）	53	49	逆台（斜）	37	掘立柱建物 3
3017	柱穴	隅丸三角形	39	39	U	14	掘立柱建物 3
3018	柱穴	円形	41	-	U	40	掘立柱建物 3
3019	柱穴	隅丸台形（不整）	58	51	逆台	24	掘立柱建物 3
3029	柱穴	円形（三角）	20	18	逆台	4	
3030	柱穴	楕円形	39	35	逆台	17	掘立柱建物 3
3040	柱穴	隅丸台形	29	27	U	24	
3055	柱穴	楕円形	34	19	U	33	3055 柱穴 <3009 ピット
3063	柱穴	隅丸三角形	32	31	コ（丸）	22	
3064	柱穴	楕円形	43	28	逆台（W）	6	
3065	柱穴	隅丸台形	28	28	U	8	
3066	柱穴	隅丸方形（円）	41	40	逆台	9	
3068	柱穴	楕円形	45	37	U（尖）	36	
3070	柱穴	楕円形（三角）	39	33	コ（逆台）	18	
3073	柱穴	隅丸方形（円）	32	30	逆台	25	
3080	柱穴	楕円形	44	39	逆台	13	
3086	柱穴	楕円形	29	24	コ	23	
3088	柱穴	楕円形	42	35	U	44	
3089	柱穴	楕円形	27	22	U（尖）	28	
3092	柱穴	隅丸方形	26	25	逆台（丸）	27	
3121	柱穴	楕円形	23	19	逆台	20	
3135	柱穴	円形（角張る）	31	29	コ	39	3062 ピット <3135 柱穴
3140	柱穴	楕円形	46	35	逆台	7	
3150	柱穴	円形？	39<	42<	U（角）	51	3061 ピットの下
3151	柱穴	円形？	35	16<	逆台	15	掘立柱建物 3
3160	柱穴	楕円形	35<	32			3160 柱穴 <3057 ピット
3167	柱穴	隅丸方形～円形	20	18	逆台	5	
3181	柱穴	隅丸長方形（五角）	43	30	U	18	
3182	柱穴	楕円形	40<	40	逆台	24	3182 柱穴 <3175 ピット
3184	柱穴	円形	33	31	逆台	38	
3190	柱穴	円形？	25<	26	U（段）	21	
3191	柱穴	隅丸方形	22	17	U	15	3191 柱穴 <3190 柱穴
3223	柱穴	円形	52	-	逆台（コ）	24	3122 溝に切られる
3295	柱穴	楕円形	31	27	U	74	柵列 4
3298	柱穴	楕円形	33	27	逆台？	36	柵列 1、根石
3329	柱穴	楕円形（長）	37	25	逆台（U）	18	
3331	柱穴	楕円形	33	27	U	41	
3001	ピット	円形（角張る）	29	28	逆台（丸）	15	
3002	ピット	円形（角張る）	44	43	逆台（斜）	26	
3003	ピット	隅丸台形	39	38	逆台	18	
3004	ピット	隅丸三角形	27	21	逆台（浅）	4	
3009	ピット	楕円形	29	22	U	16	3055 柱穴 <3009 ピット
3011	ピット	楕円形（台）	45	33	U	20	
3015	ピット	円形？	25<	17<	コ	46	側溝に切られる
3028	ピット	楕円形	23	21	U	27	
3031	ピット	隅丸台形	39	34	逆台（偏）	20	
3032	ピット	円形（五）	40	-	逆台	15	
3035	ピット	楕円形	22	20	逆台	19	
3036	ピット	楕円形	20	16	U（浅）	3	
3039	ピット	楕円形？	24	19	逆台	6	側溝、攪乱に切られる
3041	ピット	隅丸三角形	21	19	V（丸）	7	
3043	ピット	楕円形	55<	47<	U（角）	36	攪乱（暗渠）に切られる
3044	ピット	隅丸台形	20	19	V	8	
3045	ピット	隅丸台形	50	38	逆台	14	
3048	ピット	隅丸台形	23	21	U	27	
3049	ピット	楕円形？	17<	9<	V	12	攪乱に切られる
3050	ピット	楕円形	36<	31	U	40	3050 ピット <3051 ピット
3051	ピット	円形？	45<	40<	U	29	攪乱（暗渠）に切られる
3052	ピット	隅丸三角形（楕円）	28	25	逆台	24	
3053	ピット	楕円形	26<	13<	U（尖）	18	攪乱（暗渠）に切られる

第IV章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
3054	ピット	楕円形	28	19	逆台	27	3055 柱穴 <3054 ピット
3057	ピット	楕円形 (方)	40	38	U	44	
3058	ピット	楕円形 (方)	29	26	U (段)	31	
3059	ピット	楕円形	28	23	V (偏)	21	
3060	ピット	円形 (角張る)	20	19	U	12	攪乱 (暗渠) 内
3061	ピット	隅丸長方形	63	49	V (丸)	19	攪乱で削られる、3150 柱穴の上
3062	ピット	楕円形	23	20	U ?	13	
3069	ピット	楕円形	32	26	逆台 (偏)	17	
3071	ピット	楕円形	19	14	逆台 (W)	17	
3072	ピット	楕円形	14	12	V	6	
3074	ピット	楕円形	39	33	コ	32	
3075	ピット	楕円形	22	17	U (尖)	11	
3076	ピット	楕円形 (不整)	33	30	逆台	20	
3077	ピット	隅丸三角形 (円)	37	37	U	22	
3078	ピット	楕円形	23	18	U	15	
3079	ピット	楕円形	38	31	U	20	
3081	ピット	楕円形	35	27	V	16	
3082	ピット	楕円形	19	16	U	9	
3083	ピット	楕円形	21	17	U	20	
3085	ピット	隅丸三角形	30	29	V (浅)	7	
3087	ピット	隅丸五角形	33	27	逆台 (斜)	22	
3090	ピット	隅丸台形	18	17	U	7	
3091	ピット	楕円形	34	23	逆台	21	
3093	ピット	楕円形	21	19	U	9	
3094	ピット	隅丸三角形	20	17	U	8	
3095	ピット	隅丸三角形 (方)	28	26	逆台	7	
3096	ピット	隅丸三角形	25	20	U (不整)	14	
3097	ピット	楕円形 (涙滴)	31	25	U	6	
3098	ピット	楕円形	14	8	U	6	
3099	ピット	楕円形	15	11	U	8	
3100	ピット	隅丸長三角形	62	33	逆台 (皿状)	7	
3101	ピット	楕円形 (三角)	25	21	U	6	
3102	ピット	楕円形	26	19	V (偏)	13	
3103	ピット	円形 (三)	26	22	U	9	
3104	ピット	楕円形	20	18	U	10	
3106	ピット	楕円形	31	25	U	23	
3107	ピット	隅丸三角形	22	20	逆台 (細長い)	20	
3108	ピット	楕円形	39	22	U	21	
3109	ピット	楕円形	21	19	U	14	
3110	ピット	楕円形	22	18	U	9	
3111	ピット	隅丸台形	14	14	U	11	
3112	ピット	隅丸三角形	25	20	逆台	14	
3113	ピット	隅丸三角形	18	16	逆台 (W)	4	3115 ピット <3113 ピット
3114	ピット	楕円形	21	19	U	12	
3115	ピット	楕円形	70<	60	逆台	17	
3116	ピット	楕円形 (涙滴)	27	23	U (偏・皿状)	6	
3117	ピット	楕円形	16	13	逆台	18	
3118	ピット	楕円形 (涙滴)	26	18	皿状	4	
3119	ピット	隅丸三角形	22	18	U	13	
3120	ピット	隅丸方形 (円)	26	25	U	13	
3124	ピット	隅丸台形	21	21	V (丸)	12	
3125	ピット	隅丸方形	49	45	U (五角)	22	
3133	ピット	楕円形	40	23	U	15	
3134	ピット	円形 (角張る)	37	-	U	34	
3136	ピット	隅丸台形	22	21	V (丸・偏)	6	
3137	ピット	隅丸三角形	23	19	V (丸・偏)	10	
3138	ピット				逆台	17	
3139	ピット	楕円形	26	19	V	9	
3142	ピット	隅丸三角形	22	18	逆台 (傾)	9	3142 ピット <3070 柱穴
3143	ピット	隅丸方形 ?	15<	10<	逆台 (W)	11	3043 ピット <3031 ピット
3144	ピット	楕円形 (台)	31	28	逆台	10	
3145	ピット	楕円形	23<	15<	V (偏)	18	攪乱 (暗渠) に切られる
3148	ピット	円形	14	13	V (偏)	6	
3149	ピット	隅丸方形	30	19	U	22	3149 ピット <3007 柱穴
3154	ピット	不整形	46<	36<	逆台	31	攪乱に切られる
3155	ピット	隅丸台形	27	26	逆台	9	
3156	ピット	楕円形	22	18	コ	15	
3157	ピット	楕円形	18	11	V	8	
3158	ピット	円形	14	13	U	6	
3159	ピット	隅丸台形	16	12	U	7	

第3節 3区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
3161	ピット	楕円形	20<	13	逆台	10	3161ピット<3159ピット
3162	ピット	隅丸台形	19	18	U（偏）	10	
3163	ピット	円形（不整）	14<	22<	逆台	7	3163ピット<3165ピット
3164	ピット	隅丸三角形	26	23	五角形	18	3165ピット<3164ピット
3165	ピット	円形（方）	33	33	V	13	3163ピット<3165ピット
3166	ピット	楕円形	18	12	V（丸）	5	
3168	ピット	楕円形	21<	25	五角形	11	トレンチに切られる
3169	ピット	楕円形	33	29	五角形	18	
3170	ピット	楕円形	15	13	コ	11	
3171	ピット	隅丸三角形	13	13	コ	6	
3172	ピット	楕円形	44	42			
3173	ピット	?	23<	14<	U	25	トレンチに切られる
3174	ピット	円形（角張る）	25	-	U	6	
3175	ピット	楕円形	35	28	逆台（斜）	16	3182柱穴<3175ピット
3176	ピット	楕円形	25<	12<	U	14	攪乱に切られる
3177	ピット	楕円形	21<	25	U	26	
3178	ピット	隅丸長方形	77	56	コ（尖）	14	
3180	ピット	不整形	31<	22<	V	24	トレンチに切られる
3183	ピット	楕円形（長方）	46	37	コ（丸）	20	3100ピットの下
3186	ピット	楕円形	26<	26<	V（丸・偏）	16	攪乱に切られる
3187	ピット	隅丸三角形	29	24<	U?	8	攪乱に切られる
3188	ピット	隅丸三角形	58<	53	逆台（V近）	34	3188ピット<3187ピット
3189	ピット	円形（三）	21	19	U	10	
3192	ピット	楕円形?	55<	48<	逆台	32	トレンチに切られる
3193	ピット	円形?	28<	26<	逆台（丸）	11	3094・3095ピットの下
3194	ピット	楕円形	24<	25<			トレンチに切られる
3195	ピット	隅丸三角形	17	16	V	6	
3196	ピット	円形	21	19	逆台	8	
3213	ピット	不整形（楕円）	76	54	逆台（やや不整）	49	
3214	ピット	楕円形	24	12<	逆台（W・斜）	13	
3216	ピット	楕円形	38	26<	逆台（斜）	20	3172ピットの下、3216ピット<3229ピット
3218	ピット	隅丸台形	46	34	V（偏）	17	
3220	ピット	楕円形	42	31	U	15	3220ピット<3216ピット
3226	ピット	楕円形	26	22	V（丸）	15	3122溝底
3227	ピット	隅丸台形	25	22	逆台	15	3122溝底
3228	ピット	?	12<		U（袋状）	10	3220ピット<3228ピット?
3229	ピット	隅丸三角形	32	31	逆台	7	
3230	ピット	楕円形（角張る）	42	33	コ	35	3230ピット<3214ピット
3259	ピット	隅丸台形	17	16	U	10	3122溝に切られる
3290	ピット	楕円形	33	31	コ	35	柵列1
3291	ピット	楕円形	25	23	コ	26	柵列2、根石
3292	ピット	楕円形	26	21	不整（逆台）	18	柵列2
3293	ピット	楕円形	26	21	U	29	柵列4
3294	ピット	楕円形	27	24	U（角張る）	36	柵列4
3296	ピット	隅丸方形	31	28	U	27	柵列3、根石
3297	ピット	隅丸三角形	27	25	コ	22	柵列2
3299	ピット	楕円形（涙滴）	30	23	U	23	柵列3、根石
3300	ピット	楕円形	29	24	コ	13	柵列3
3301	ピット	円形（角張る）	41	39	U	6	柵列3、根石
3323	ピット	円形（角張る）	29	24	逆台	22	柵列1、根石
3330	ピット	楕円形（涙滴）	29	25	コ	19	
3332	ピット	楕円形（不整）	28	19	U?	12	
3333	ピット	隅丸方形	26	15<	U	4	攪乱に切られる
3443	ピット	不整形（隅丸方形）	33	22	V	13	
3444	ピット	楕円形	23	19	逆台（W）	7	
3447	ピット	-			-		柵列1、根石のみ
3042	土坑	楕円形	73<	58<	逆台	37	攪乱（暗渠）に切られる
3084	土坑	楕円形	62	57	浅	7	

丘陵部第5面、谷部第4・5面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
3132	柱穴	楕円形（不整）	25<	36<	V（浅）	11	2区側溝に切られる
3206	柱穴	隅丸方形?	42<	28<	逆台（不整）	28	竪穴建物1の壁隅にあり
3210	柱穴	楕円形	33<	30	コ	41	攪乱に切られる
3233	柱穴	隅丸方形（楕円）	32	27	U（尖）	60	竪穴建物1の壁
3238	柱穴				U	38	竪穴建物2、抜き取り底まで45
3239	柱穴				U	59	竪穴建物2
3240	柱穴	楕円形	36	31	コ	30	
3246	柱穴	隅丸方形	50<	42<	U	22	3246柱穴<3251ピット
3249	柱穴	隅丸台形	34	28	U（皿）	78	

第Ⅳ章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
3250	柱穴	隅丸方形	36	31	逆台	22	
3334	柱穴	楕円形	44	41	逆台(傾)	23	
3337	柱穴	楕円形	37	32	逆台(不整)	27	
3343	柱穴	楕円形	41	36	逆台	12	
3348	柱穴	楕円形	58	53	逆台(コ)	56	
3351	柱穴	楕円形	49	45	逆台(尖)	46	
3352	柱穴	楕円形(不整)	52	48	Uの下にV	49	石、礎板?
3354	柱穴	円形(角張る)	42	40	U	30	3354 柱穴 <3353 ピット
3368	柱穴	隅丸三角形	43	40	逆台	32	
3377	柱穴	隅丸長方形	116	53	逆台(W)	47	3377 柱穴 <3378 柱穴・3434 土坑
3378	柱穴	楕円形	52	44	逆台(尖)	38	
3379	柱穴	円形?	57<	24<	逆台(段)	31	サブトレンチに切られる、3427 柱穴と同一?
3380	柱穴	隅丸方形	60<	59	U(段)	42	3380 柱穴 <3427 柱穴
3390	柱穴	隅丸三角形(円)	100	77	コ	36	3391・3393 柱穴 <3390 柱穴
3392	柱穴	不整形(楕円)	91	70	V(丸)	45	3424 溝 <3392 柱穴
3393	柱穴	楕円形	82<	52	U(V)	43	3390 柱穴 <3393 柱穴 <3391 ピット
3396	柱穴	円形(角張る)	55	53	逆台(丸)	44	3396 柱穴 <3395 ピット
3397	柱穴	隅丸三角形	51	49	五角	27	2段
3400	柱穴	楕円形	63	50<	逆台(丸底)	36	3400 柱穴 <3401 柱穴
3401	柱穴	隅丸三角形	90	62<	逆台(段)	46	3401 柱穴 <3399
3403	柱穴	隅丸五角形	63	59	U(角張る)	39	
3405	柱穴	楕円形(不整)	73	45	逆台(偏)	25	3437 ピット <3405 柱穴
3406	柱穴	楕円形(長)	96<	48	逆台	17	3406 柱穴 <3423 柱穴
3411	柱穴	楕円形(三角)	76	57	U(角張る)	35	
3422	柱穴	隅丸台形(円)	25	22	逆台	15	
3423	柱穴	楕円形	73	48	U	43	
3427	柱穴	楕円形	45<	48	逆台	28	
3433	柱穴	不整形(長楕円)	135	46<	逆台(W)	46	3433 柱穴 <3374・3432 ピット
3435	柱穴	楕円形	57	48	U	34	
3126	ピット	楕円形(長)	49<	52	不整形(逆台)	31	攪乱(暗渠)に切られる
3127	ピット	隅丸長方形	29	21	V	14	
3128	ピット	楕円形	41	33	逆台	13	根石?あり
3130	ピット	楕円形	49	42	逆台	21	
3131	ピット	楕円形	19	17	U	5	
3197	ピット	楕円形	50	36	逆台	13	
3200	ピット	楕円形(三)	37	27	U	5	
3201	ピット	楕円形	39	27	V(丸)	20	
3202	ピット	楕円形(三)	28	24	U	11	
3203	柱穴				逆台	84	竪穴建物 2
3204	柱穴				U	89	竪穴建物 2
3205	柱穴	楕円?	28	25	U	20	竪穴建物 1 の壁面隅
3207	柱穴				U	59	竪穴建物 1
3208	柱穴				逆台(コ)	57	竪穴建物 1
3209	柱穴				逆台	53	竪穴建物 1
3211	柱穴				U	65	竪穴建物 1
3212	ピット	隅丸三角形	22	20	コ(斜)	23	上層
3224	ピット	楕円形	39	26<	U	11	竪穴建物 1 の壁溝に切られる?
3225	ピット	楕円形	65	61	U	20	竪穴建物 1 の壁溝に切られる
3234	ピット	楕円形	31	13	U	19	竪穴建物 1 の壁を切る
3245	ピット	楕円形?	22<	20<	U	22	鳥取市試掘トレンチ 2 に切られる
3247	ピット	隅丸方形	21	18	U	9	
3248	ピット	楕円形	30	26	コ(斜)	27	
3251	ピット	隅丸方形	33	33	コ(丸)	26	
3254	ピット	隅丸台形	89	67	V(丸)	47	3253 溝と重複
3255	ピット	隅丸五角形	23	21	V(丸)	17	
3257	ピット	隅丸台形	29	27	V(丸)	12	
3258	ピット	隅丸三角形	24	24	逆台(V)	16	
3335	ピット	円形	20	-	U(傾)	17	
3336	ピット	隅丸台形	35	25	U(傾)	15	
3338	ピット	隅丸台形	26	25	U(不整)	21	3339 ピット <3338 ピット
3339	ピット	楕円形	40<	34	逆台	22	
3340	ピット	隅丸方形(円)	35	31	U(偏)	21	
3341	ピット	楕円形	25	20<	U?	6	3342 ピット <3341 ピット
3342	ピット	隅丸三角形(円)	39	38	U	9	
3344	ピット	隅丸方形	29	19<	V(浅)	8	攪乱(暗渠)に切られる
3345	ピット	楕円形	20	19	V(段)	12	
3346	ピット	楕円形	39	33	逆台(丸)	18	
3347	ピット	隅丸三角形(円)	37	35	逆台	14	
3349	ピット	円形	14	13	V	6	竪穴建物 1
3353	ピット	楕円形	28	23	V	20	

第3節 3区（平成26年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
3355	ピット	楕円形	23	19	U	5	
3356	ピット	隅丸三角形	68	59	U	41	3356ピット<3347、2つが重なる？
3357	ピット	楕円形	34	30	逆台	13	
3358	ピット	隅丸三角形	65<	65	逆台（丸）	33	3431ピット<3358ピット<3347ピット
3359	ピット	隅丸方形	45	42<	U	40	3359ピット<3358ピット
3360	ピット	隅丸方形	32	18<	逆台？	24	3360ピット<3359ピット
3361	ピット	不整楕円形	63	44	V	53	
3365	ピット	楕円形	33	24	逆台	8	
3366	ピット	楕円形	50<	46	逆台	23	サブトレンチに切られる
3369	ピット	不整形	144<	65<	逆台	33	根石？、3369ピット<3368柱穴・3370～72ピット
3370	ピット	楕円形（角張る）	35	32	逆台（斜）	30	3370ピット<3368柱穴
3371	ピット	円形？	27	15<	逆台（丸）	24	3371ピット<3368柱穴・3372ピット
3372	ピット	隅丸方形	42	36<	逆台	31	3372ピット<3373ピット
3373	ピット	隅丸三角形	32	25	U（W）	9	
3374	ピット	隅丸三角形（方）	56	51	コ（不整）	29	
3375	ピット	楕円形	50	48	逆台（底丸）	25	
3381	ピット	楕円形	31	27	U（五角）	21	サブトレンチに切られる
3382	ピット	隅丸方形	42<	40	逆台（丸）	14	3382ピット<3428ピット
3383	ピット	楕円形	56	45	逆台（偏）	15	
3384	ピット	隅丸五角形	42	39	逆台	24	
3385	ピット	円形	44	-	逆台	19	
3386	ピット	楕円形（方）	43	37	逆台（傾）	18	
3391	ピット	円形？	53	-	浅い皿状	7	3391ピット<3390・3393柱穴
3394	ピット	楕円形（三）	53	44	逆台	35	
3395	ピット	隅丸三角形	51	42	U	15	
3398	ピット	隅丸台形	51	47	V（台）	43	
3399	ピット	隅丸台形	55	45	V	28	
3402	ピット	楕円形（台）	57	51<	逆台（斜）	23	3402ピット<3421ピット
3415	ピット	楕円形？	58<	21<	逆台？	26	2区側溝で切られる
3418	ピット	楕円形（方）	21	17	逆台（U）	9	
3419	ピット	隅丸台形	31	29	逆台（段）	23	
3420	ピット	隅丸三角形（台形）	42	35	逆台（尖）	22	
3421	ピット	不整形（隅三）	46	39	V（不整）	27	
3426	ピット	楕円形	18	15	逆台	7	
3428	ピット	円形？	49	25	逆台	21	サブトレンチに切られる、2段？
3429	ピット	楕円形	33	25	逆台	18	3429ピット<3365ピット
3430	ピット	楕円形	27	24	V	16	
3431	ピット	？	51<	30<	U（尖）	57	3358ピットに切られ平面形不明
3432	ピット	円形	22	21	U？	31	
3436	ピット	隅丸方形	36	35	U	9	
3437	ピット	楕円形？	25<	23<	U	17	3437ピット<3405柱穴、一部のみ残存
3438	ピット	隅丸方形（円）	35	33	U	22	
3439	ピット	楕円形	34	30	U	27	
3440	ピット	楕円形	32	29	U	33	
3441	ピット	楕円形	29	23	V（丸）	25	
3442	ピット	楕円形	19	15	逆台	5	
3446	ピット	円形？	53<	29<			調査区外へ続く
3237	土坑	不整形	83				竪穴建物1
3256	土坑	楕円形（一部凹）	137		皿状	11	木の枝を敷く
3412	土坑	楕円形？	79<				側溝に切られる、東壁へ続く
3413	土坑	楕円形	66<				側溝に切られる、東壁へ続く
3434	土坑	隅丸平行四辺形	299		逆台	38	

第4節 3区（平成27年度）の調査

1 立地

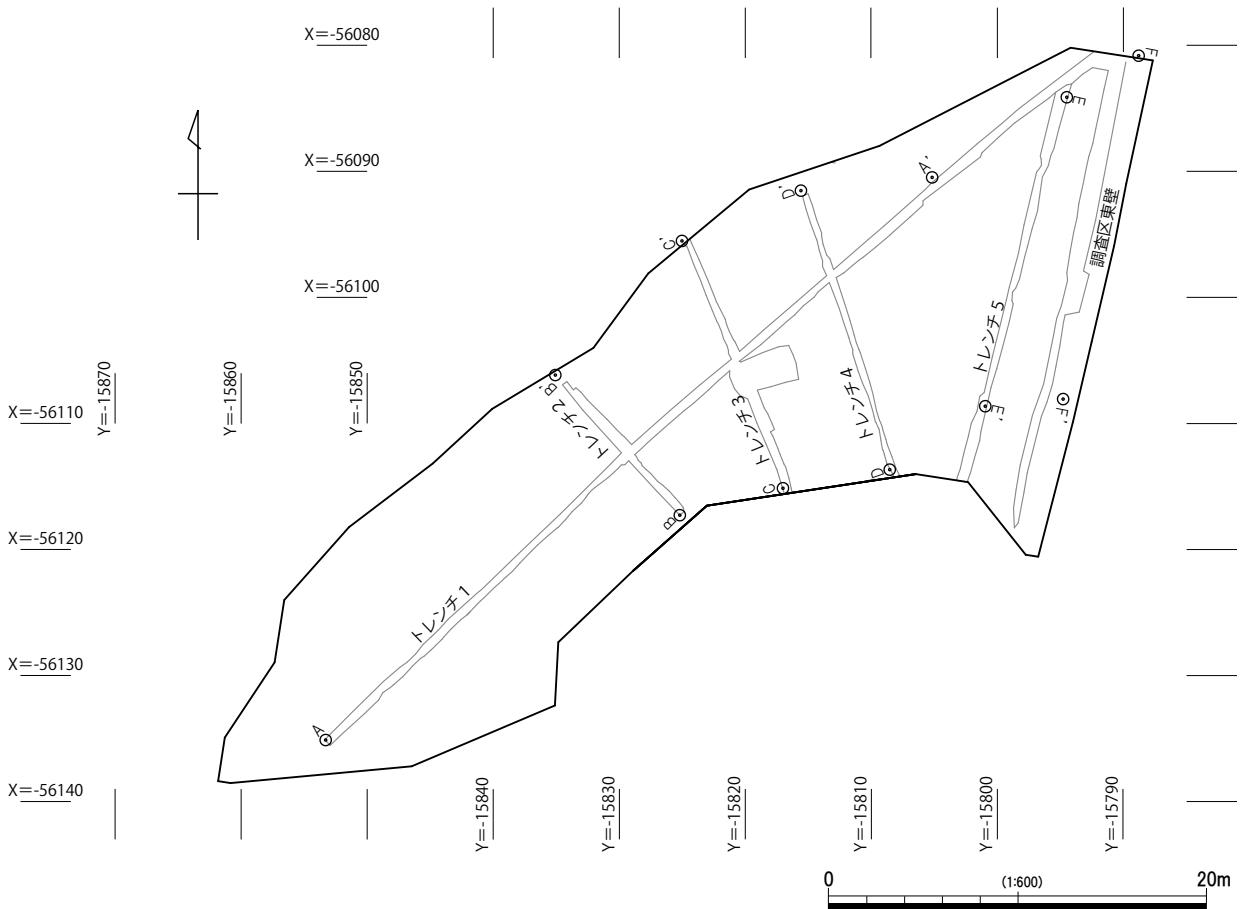
平成26年度調査の下層確認において、平成26年度の最終面（Ⅵ層下面）から約1m下で土壌化層を検出し、またその土壌化層を切る自然流路から石匙（第159図S40）が出土した。そのため、平成27年度ではその土壌化層検出面、除去面の2面について調査を行うこととした。Ⅵ層から下は谷の自然堆積層が厚く堆積しており、重機で除去した。

平成26年度調査の成果から、調査区内は谷部分と丘陵部分で大きく様相が異なる。丘陵部分はその大部分が後世（古墳時代後期以降）に開発・削平されており、下層は岩盤と地山の二次堆積の自然堆積が続く。それに対して丘陵裾から谷部分は上記の理由で下の土壌化層に遺構面および遺物包含層が予想されたため、調査対象とした。

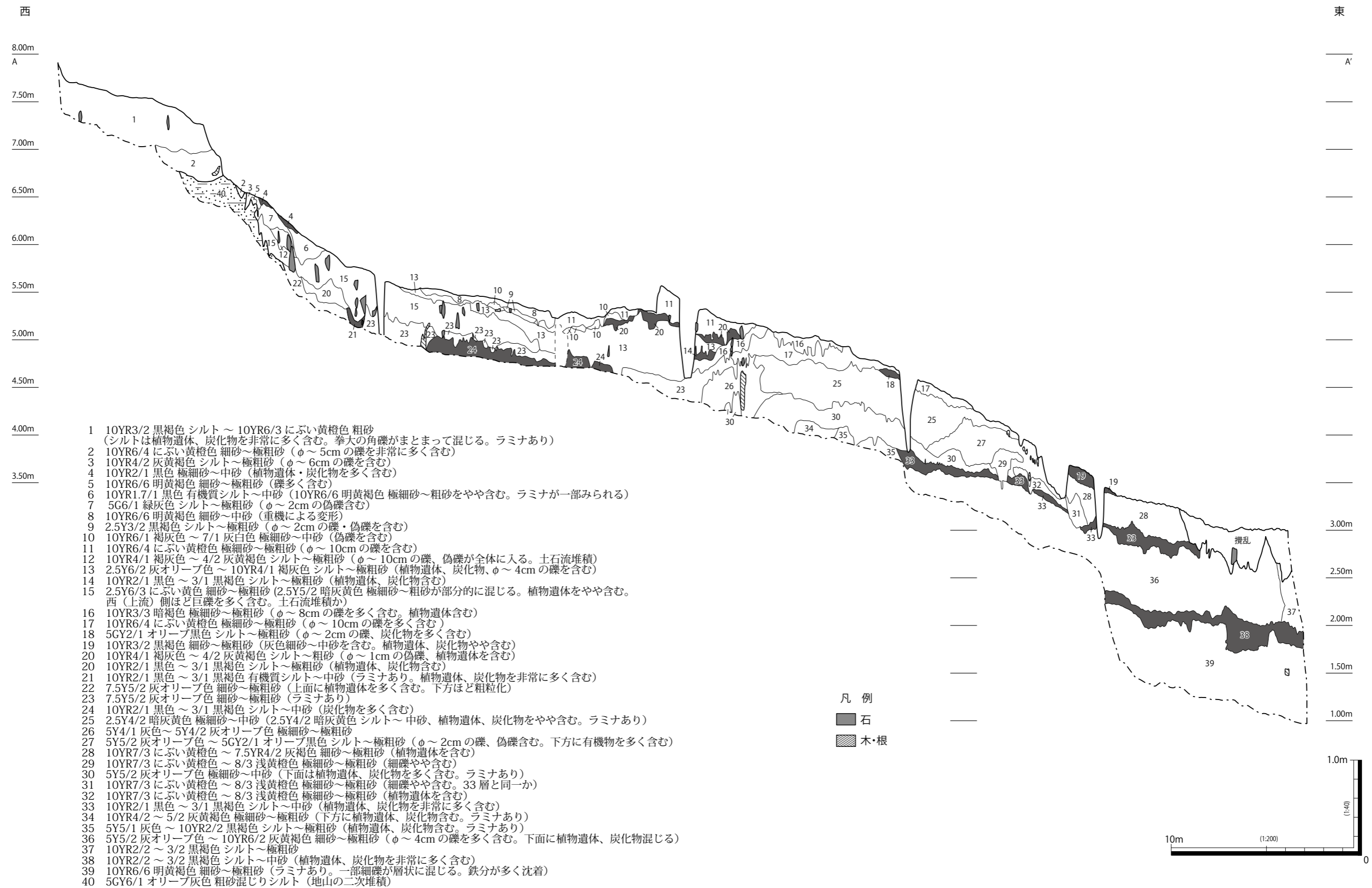
調査は谷部の延伸方向にトレンチ1を、谷部を直交する向きでトレンチ2から5を設定し、堆積状況を確認しながら、遺構面の検出を行った。

2 基本層序（第78～83図）

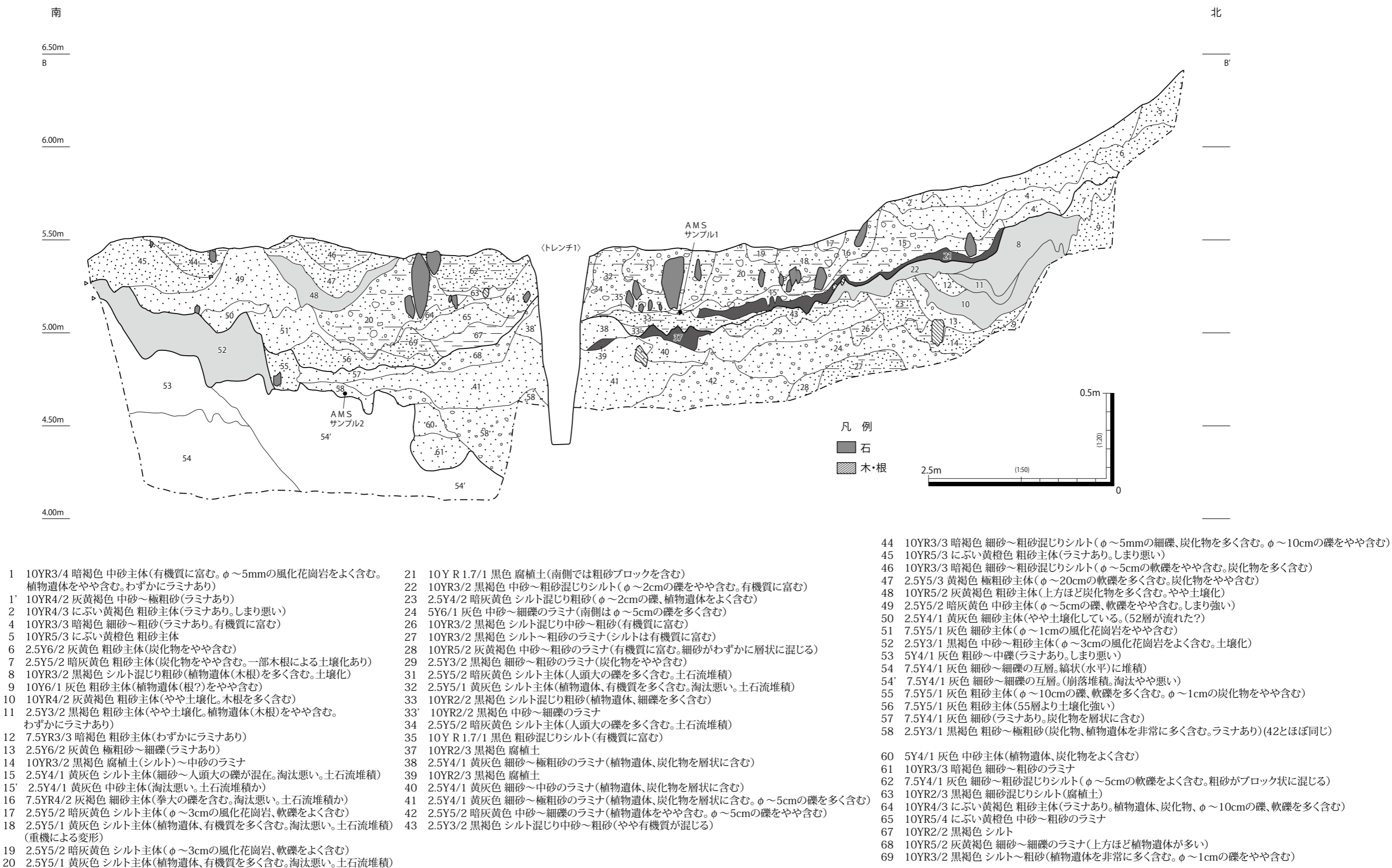
平成27年度調査は平成26年度調査の下層調査であるため、整理段階においてⅦ層以下で土壌化層上面までの無遺物層を「Ⅷ層」、土壌化層を「Ⅸ層」とまとめることとした。以下、層ごとに説明を行う。



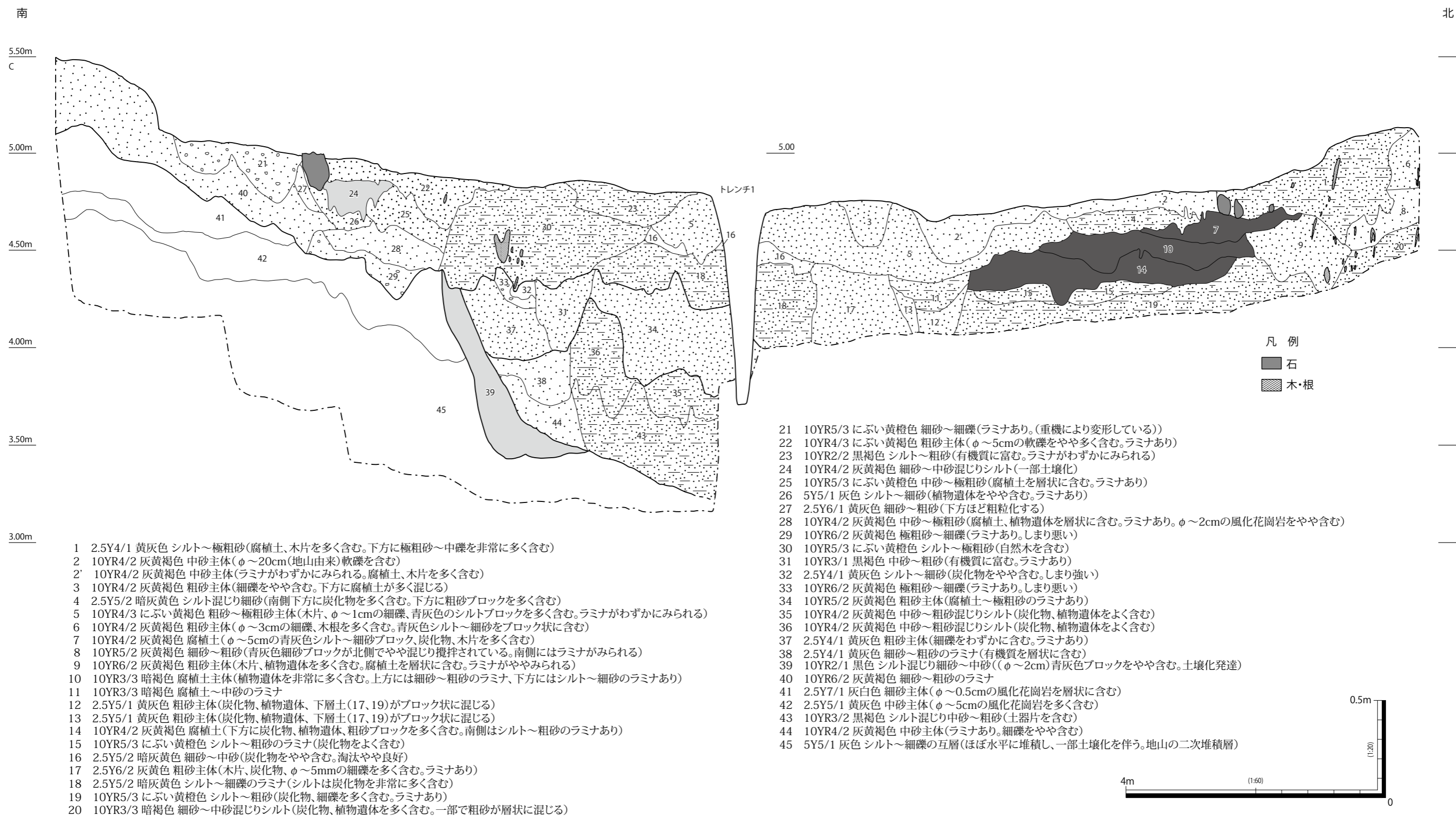
第77図 3区（27年度） トレンチ配置図



第78図 3区(27年度) トレンチ1土層断面図



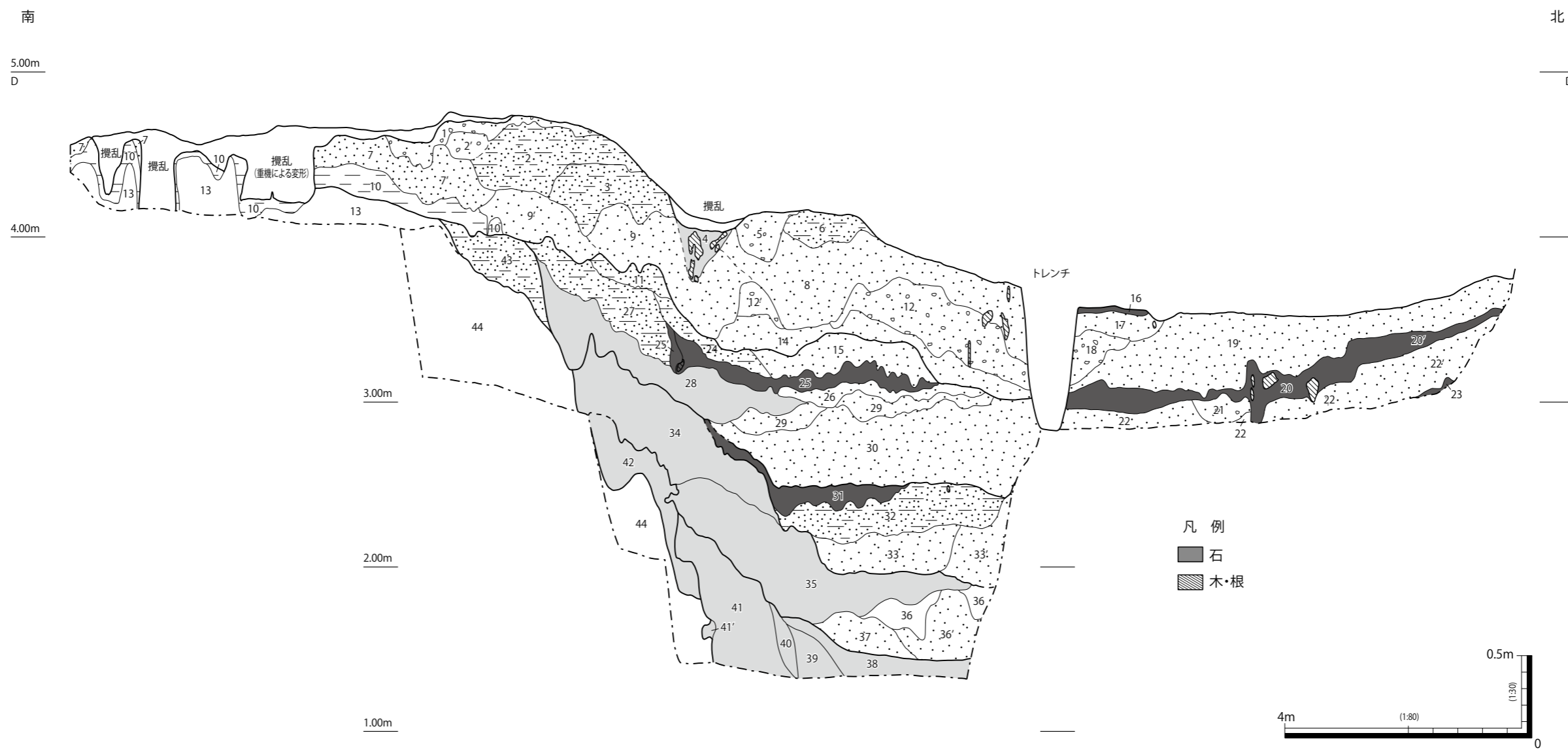
第79図 3区(27年度) トレンチ2土層断面図



- 1 2.5Y4/1 黄灰色 シルト～極粗砂(腐植土、木片を多く含む。下方に極粗砂～中礫を非常に多く含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 中砂主体(φ～20cm(地山由来)軟礫を含む)
- 2' 10YR4/2 灰黄褐色 中砂主体(ラミナがわずかにみられる。腐植土、木片を多く含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂主体(細礫をやや含む。下方に腐植土が多く混じる)
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂(南側下方に炭化物を多く含む。下方に粗砂ブロックを多く含む)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂～極粗砂主体(木片、φ～1cmの細礫、青灰色のシルトブロックを多く含む。ラミナがわずかにみられる)
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂主体(φ～3cmの細礫、木根を多く含む。青灰色シルト～細砂をブロック状に含む)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色 腐植土(φ～5cmの青灰色シルト～細砂ブロック、炭化物、木片を多く含む)
- 8 10YR5/2 灰黄褐色 細砂～粗砂(青灰色細砂ブロックが北側でやや混じり攪拌されている。南側にはラミナがみられる)
- 9 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂主体(木片、植物遺体を多く含む。腐植土を層状に含む。ラミナがややみられる)
- 10 10YR3/3 暗褐色 腐植土主体(植物遺体を非常に多く含む。上方には細砂～粗砂のラミナ、下方にはシルト～細砂のラミナあり)
- 11 10YR3/3 暗褐色 腐植土～中砂のラミナ
- 12 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂主体(炭化物、植物遺体、下層土(17, 19)がブロック状に混じる)
- 13 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂主体(炭化物、植物遺体、下層土(17, 19)がブロック状に混じる)
- 14 10YR4/2 灰黄褐色 腐植土(下方に炭化物、植物遺体、粗砂ブロックを多く含む。南側はシルト～粗砂のラミナあり)
- 15 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト～粗砂のラミナ(炭化物をよく含む)
- 16 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂(炭化物をやや含む。淘汰やや良好)
- 17 2.5Y6/2 灰黄色 粗砂主体(木片、炭化物、φ～5mmの細礫を多く含む。ラミナあり)
- 18 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト～細礫のラミナ(シルトは炭化物を非常に多く含む)
- 19 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト～粗砂(炭化物、細礫を多く含む。ラミナあり)
- 20 10YR3/3 暗褐色 細砂～中砂混じりシルト(炭化物、植物遺体を多く含む。一部で粗砂が層状に混じる)

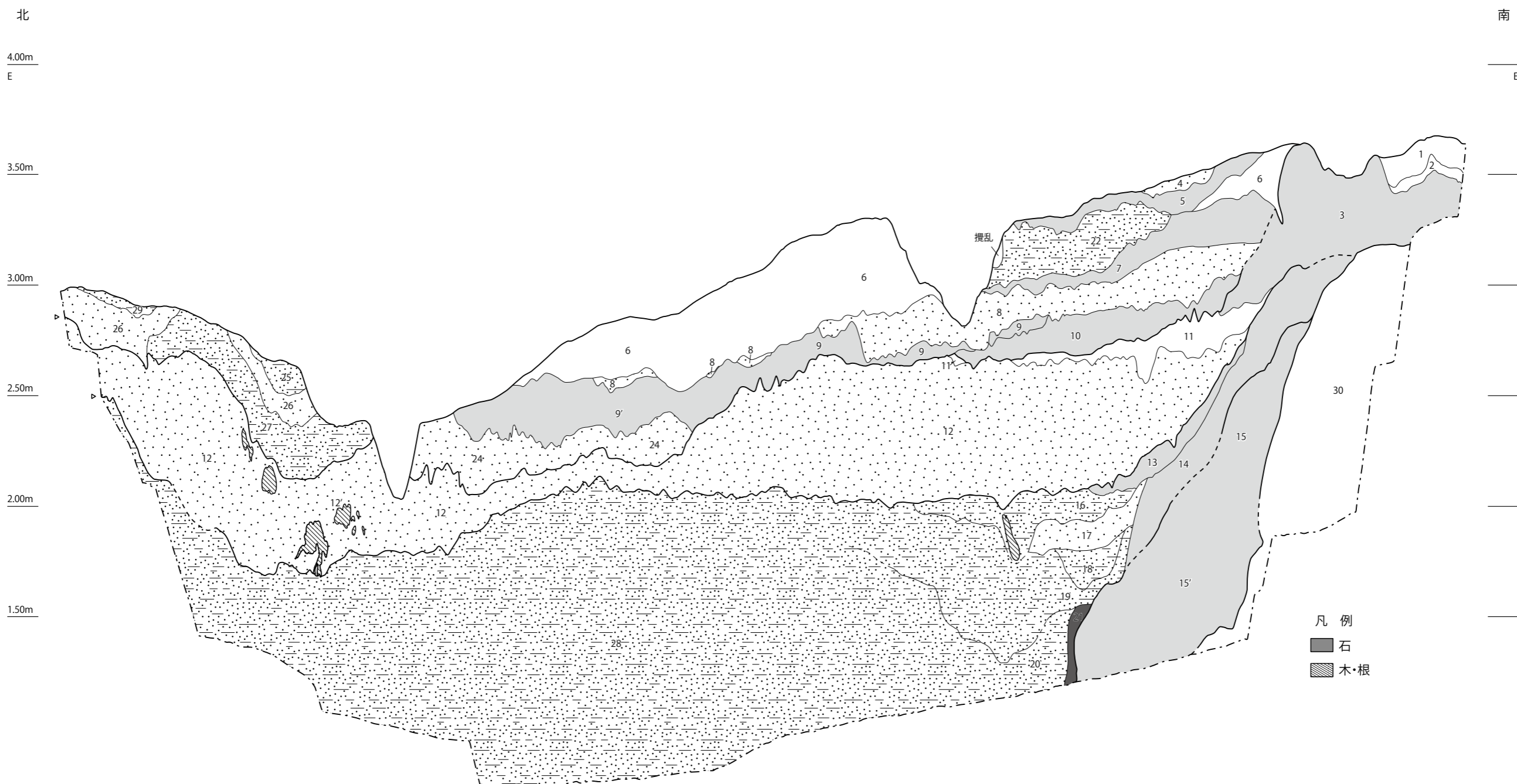
- 21 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～細礫(ラミナあり。(重機により変形している))
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂主体(φ～5cmの軟礫をやや多く含む。ラミナあり)
- 23 10YR2/2 黒褐色 シルト～粗砂(有機質に富む。ラミナがわずかにみられる)
- 24 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(一部土壌化)
- 25 10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂～極粗砂(腐植土を層状に含む。ラミナあり)
- 26 5Y5/1 灰色 シルト～細砂(植物遺体をやや含む。ラミナあり)
- 27 2.5Y6/1 黄灰色 細砂～粗砂(下方ほど粗粒化する)
- 28 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～極粗砂(腐植土、植物遺体を層状に含む。ラミナあり。φ～2cmの風化花崗岩をやや含む)
- 29 10YR6/2 灰黄褐色 極粗砂～細礫(ラミナあり。しまり悪い)
- 30 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト～極粗砂(自然木を含む)
- 31 10YR3/1 黒褐色 中砂～粗砂(有機質に富む。ラミナあり)
- 32 2.5Y4/1 黄灰色 シルト～細砂(炭化物をやや含む。しまり強い)
- 33 10YR6/2 灰黄褐色 極粗砂～細礫(ラミナあり。しまり悪い)
- 34 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂主体(腐植土～極粗砂のラミナあり)
- 35 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～粗砂混じりシルト(炭化物、植物遺体をよく含む)
- 36 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～粗砂混じりシルト(炭化物、植物遺体をよく含む)
- 37 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂主体(細礫をわずかに含む。ラミナあり)
- 38 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂～粗砂のラミナ(有機質を層状に含む)
- 39 10YR2/1 黒色 シルト混じり細砂～中砂((φ～2cm)青灰色ブロックをやや含む。土壌化発達)
- 40 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂のラミナ
- 41 2.5Y7/1 灰白色 細砂主体(φ～0.5cmの風化花崗岩を層状に含む)
- 42 2.5Y5/1 黄灰色 中砂主体(φ～5cmの風化花崗岩を多く含む)
- 43 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり中砂～粗砂(土器片を含む)
- 44 10YR4/2 灰黄褐色 中砂主体(ラミナあり。細礫をやや含む)
- 45 5Y5/1 灰色 シルト～細礫の互層(ほぼ水平に堆積し、一部土壌化を伴う。地山の二次堆積層)

第80図 3区(27年度) トレンチ3土層断面図



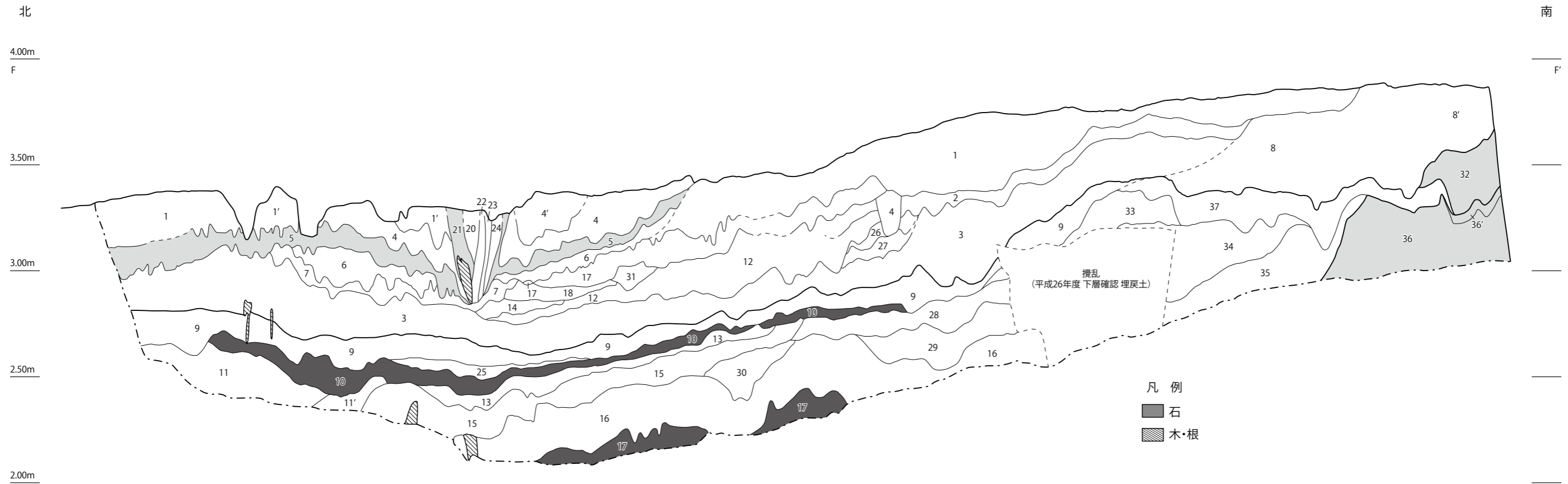
- | | | |
|--|---|--|
| <p>1 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂主体(細砂～極粗砂のラミナあり。下方にφ～5cmの細礫をまとめて含む)</p> <p>2 10YR5/2 灰黄褐色 極粗砂～10YR3/2 黒褐色 シルトのラミナ(極粗砂中にφ～1cmの細礫も多く含む。シルトには炭化した植物遺体を多く含む)</p> <p>2' 2.5Y5/1 黄灰色 極細砂～粗砂 ラミナあり(下方に炭化物を多く含む。黒褐色シルトあり)</p> <p>3 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト～10YR4/1 褐灰色 粗砂(上方は腐植土。植物遺体を多く含む。北寄りに、φ～4cmの細礫を多く含む)</p> <p>4 2.5Y5/1 黄灰色 中砂主体(シルト～粗砂)(土壌化。炭化物をやや含む。淘汰やや悪い)</p> <p>5 10YR 5/2 灰黄褐色 粗砂～細礫(ラミナあり。炭化した植物遺体をやや含む)</p> <p>6 10YR4/2 灰黄褐色 細砂主体(腐植土を含む。シルト～粗砂のラミナあり。植物遺体を多く含む)</p> <p>7 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂主体(やや土壌化。層状に鉄分が沈着する。極粗砂をやや含む)</p> <p>7' (7に比べて極粗砂がややまとまっている。炭化物もやや多い)</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色 腐植土～10YR5/2 灰黄褐色 粗砂の互層</p> <p>9 2.5Y7/2 灰黄色 粗砂主体(ラミナあり。炭化した植物遺体、木片を多く含む)</p> <p>9' 10YR4/1 褐灰色 細砂(上方)～10YR5/2 灰黄褐色 粗砂～極粗砂～10YR4/2 灰黄褐色 粗砂主体(下方)(中～下方ではラミナあり)</p> <p>9'' 10YR4/1 褐灰色 粗砂主体(下方ほど粒径が大きくなる。下方はラミナが見られるが上方は淘汰が悪くなる)</p> <p>10 7.5GY7/1 明緑灰色 粘土～シルト(炭化した植物遺体、粗砂が層状に混じる)</p> <p>11 2.5Y5/1 黄灰色 シルト～粗砂(炭化物をやや含む。やや土壌化。淘汰やや悪い)</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～粗砂(北寄りにラミナが見られる。炭化物を多く含む)</p> <p>12' 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～粗砂(φ～1cmの細礫をやや含む。やや土壌化)</p> | <p>13 10YR3/2 黒褐色 粗砂主体(南側(丘陵寄り)には7.5Y5/1 灰色 粘土質シルトが層状に混じる)</p> <p>14 2.5Y6/1 黄灰色 粗砂主体(わずかにラミナが見られる。炭化物をやや含む)</p> <p>15 10YR3/2 黒褐色 細砂～粗砂(腐植土。炭化した植物遺体を多く含む。φ～1cmの細礫を含む。ラミナあり)</p> <p>16 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト(腐植土を多く含む。炭化した植物遺体を非常に多く含む)</p> <p>17 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂(腐植土の互層。下部に炭化した木片、植物遺体を多く含む。ややラミナあり)</p> <p>18 2.5Y7/2 灰黄色 粗砂～極粗砂(北側(流路肩)には、腐植土～粗砂のラミナあり。φ～10cmの礫をやや含む)</p> <p>19 5Y5/1 灰色 粗砂主体(炭化物、植物遺体を多く含む。腐植土～粗砂のラミナあり。上方は中砂～粗砂のラミナあり)</p> <p>20 2.5Y4/2 暗灰黄色 腐植土層(木根、木片を非常に多く含む。上方ほど植物遺体が多く、粒径も粗くなる)</p> <p>20' 10YR4/2 灰黄褐色 腐植土(シルト)～粗砂のラミナ</p> <p>21 5Y6/1 灰色 中砂～粗砂(比較的淘汰が良い。極粗砂もやや含む。ラミナあり)</p> <p>22 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂主体(炭化物、植物遺体を多く含む。ややラミナあり)</p> <p>22' 2.5Y6/1 黄灰色 粗砂主体(炭化物・腐植土～粗砂のラミナ。上方から木根が侵食している)</p> <p>23 10YR2/3 黒褐色 腐植土層</p> <p>24 2.5Y4/2 暗灰黄色 粗砂主体(細礫を多く含む。粘土ブロックがわずかに混じる。淘汰悪い)</p> <p>25 10YR4/1 褐灰色 粗砂主体(炭化物、木片、シルトブロックを多く含む。有機質が多い)</p> <p>25' 10YR4/1 褐灰色 粗砂主体(4層に比べて有機質が少ない)</p> <p>26 10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂主体(わずかにラミナあり)</p> <p>27 5Y5/1 灰色 シルト主体(中砂～粗砂を多く含む。φ～3cmの風化花崗岩をやや含む)</p> <p>28 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂混じりシルト(炭化物をわずかに含む。やや土壌化している。)</p> <p>29 2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂～極粗砂(ラミナあり。有機質シルトを層状に含む。)</p> <p>30 5Y4/2 灰オリーブ色 腐植土～極粗砂のラミナ。細礫、木片もやや含む)</p> <p>31 7.5YR2/2 黒褐色 腐植土主体(上部は未分解の植物遺体)</p> | <p>32 10YR4/1 褐灰色 シルト～細礫(ラミナあり)</p> <p>33 2.5Y4/1 黄灰色 中砂～粗砂((下部)シルト～細礫(上部)のラミナ。炭化物やや含む)</p> <p>33' 5Y5/1 灰色 細砂～粗砂のラミナ</p> <p>34 10YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混じりシルト(木片(根?)を多く含む。淘汰悪い)</p> <p>35 10YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混じりシルト(φ～5cmの21層などを母材とするブロックを多く含む)</p> <p>36 10YR3/2 黒褐色 シルト主体(植物遺体を多く含む。ラミナあり)</p> <p>36' 5Y5/1 灰色 細砂～細礫のラミナ(調査区北側斜面からの真砂土の流入)</p> <p>37 10YR5/2 灰黄褐色 極粗砂主体(上部に有機質を多く含む)</p> <p>38 10YR3/1 黒褐色 中砂～粗砂混じりシルト(有機質を多く含む)</p> <p>39 2.5Y4/1 黄灰色 中砂～粗砂混じりシルト(17層より有機質少ない)</p> <p>40 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(炭化物を非常に多く含む)</p> <p>41 10YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混じりシルト(14層よりブロック少ない)</p> <p>41' 10YR3/1 黒褐色 細砂～粗砂混じりシルト(ブロックを多く含む)</p> <p>42 10Y5/1 灰色 細砂～中砂混じりシルト(φ～5cmの23層を母材としたブロックを多く含む)</p> <p>43 10Y5/1 灰色 シルト主体(中砂～粗砂を多く含む。φ～3cmの風化花崗岩をやや含む)</p> <p>44 5Y5/1 灰色 シルト～細礫の互層(ほぼ水平に堆積し、一部土壌化を伴う。地山の二次堆積層)</p> |
|--|---|--|

第81図 3区(27年度) トレンチ4土層断面図



- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR6/2 灰黄褐色 シルト混じり粗砂(φ~5cmの風化花崗岩、礫をやや含む)</p> <p>2 2.5Y5/1 黄灰色 細砂~粗砂混じりシルト(1層よりシルト質強い)(ややラミナあり。炭化物やや含む)</p> <p>3 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂主体(土壌化した砂と青灰色のシルト~細砂が互層となる部分あり)</p> <p>4 7.5YR6/3 にぶい褐色 極粗砂主体(わずかにラミナみられる。炭化物を多く含む)</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色 細砂~粗砂混じりシルト(φ~1cmの風化花崗岩、炭化物を多く含む)</p> <p>6 10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり粗砂(φ~5mmの風化花崗岩を多く含む)</p> <p>7 10YR3/2 黒褐色 中砂主体(やや土壌化。φ~5mmの風化花崗岩をやや含む)</p> <p>8 10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂~粗砂のラミナ(炭化物を多く含む)</p> <p>9 10YR3/2 黒褐色 粗砂主体(ややラミナあり。炭化物、植物遺体をやや含む)</p> <p>9' 10YR3/2 黒褐色 細砂~極粗砂のラミナ(植物遺体を多く含む)</p> <p>10 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂主体(ラミナあり。炭化物、植物遺体を多く含む)</p> <p>11 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト(φ~5cmの粗砂ブロックをやや含む。植物遺体を多く含む(主に下方))</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色 細砂~10YR5/3 にぶい黄橙色 粗砂、極粗砂のラミナ(炭化物を多く含む、シルトは有機質に非常に富む)</p> <p>12' 10YR4/2 灰黄褐色 腐植土~細砂(植物遺体が非常に多い。ラミナあり)</p> <p>13 10YR2/2 黒褐色 細砂混じりシルト(φ~5mmの風化花崗岩、植物遺体を多く含む)</p> <p>14 2.5Y4/1 黄灰色 細砂~粗砂混じりシルト(φ~1cmの風化花崗岩、炭化物をよく含む)</p> <p>15 10YR3/1 黒褐色 粗砂混じりシルト(φ~2cmの風化花崗岩を多く含む。φ~5cmの偽礫(砂質シルトブロック)を多く含む。やや土壌化)</p> <p>15' 2.5Y4/1 黄灰色 粗砂主体(φ~2cmの風化花崗岩を多く含む。φ~5cmの偽礫(砂質シルトブロック)を多く含む。やや土壌化)</p> | <p>16 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂混じり腐植土~10YR4/2 灰黄褐色 粗砂のラミナ(下方に腐植土たまる。流木(倒木)あり)</p> <p>17 2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂~粗砂のラミナ(やや有機質が混じる)</p> <p>18 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂混じり腐植土~10YR4/2 灰黄褐色 粗砂のラミナ(植物遺体を多く含む)</p> <p>19 10YR2/3 黒褐色 細砂混じりシルト(植物遺体を非常に多く含む有機質に富む。ラミナあり)</p> <p>20 7.5Y3/2 オリーブ黒色 粗砂混じり腐植土~10YR4/2 灰黄褐色 粗砂のラミナ(上方ほど腐植土が多い。ラミナあり)</p> <p>21 10YR2/3 黒褐色 シルト主体(植物遺体を多く含む、有機質に富む。φ~2cmの細礫をやや含む)</p> <p>22 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト~極粗砂のラミナ。炭化物、植物遺体を多く含む)</p> <p>24 10YR3/2 黒褐色 細砂主体(極粗砂~シルトのラミナあり。下方に植物遺体、腐植土を多く含む)</p> <p>25 10YR4/2 灰黄褐色 シルト~細砂(ラミナややあり。植物遺体を層状に含む)</p> <p>26 10YR5/2 灰黄褐色 細砂~極粗砂のラミナ(炭化物、植物遺体を層状にやや含む)</p> <p>27 10YR2/3 黒褐色 腐植土~2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂のラミナ(植物遺体を多く含む)</p> <p>28 7.5Y2/2 オリーブ黒色 腐植土~2.5Y5/2 暗灰黄色 粗砂の互層(腐植土~シルトでは植物遺体を非常に多く含む)</p> <p>29 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト~細砂(炭化物、植物遺体をやや含む。細砂は下方でラミナを形成)</p> <p>30 2.5Y4/1 黄灰色 シルト~細礫の互層(一部φ~2cmの風化花崗岩も層状に混じる。(地山の二次堆積。一部土壌化))</p> |
|--|--|

第82図 3区(27年度) トレンチ5土層断面図



- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR6/2 灰黄褐色～10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂～中砂主体(炭化物、φ～5mmの細礫をやや含む。しまり強い。ノジュール非常に多い)</p> <p>1' 10YR4/6 褐色(細砂～粗砂)粗砂主体(ノジュール、炭化物をやや含む)</p> <p>2 10YR6/2 灰黄褐色 中砂～粗砂(1層よりしまり悪い。ノジュール多い)</p> <p>3 10YR5/2 灰黄褐色～2.5Y4/1 黄灰色 シルト～極粗砂(下層ほどラミナ顕著。炭化物、φ～1cmの細礫をよく含む)</p> <p>4 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂主体(ラミナあり)</p> <p>4' 10YR5/2 灰黄褐色 中砂主体(φ～1cmの細礫をやや多く含む。淘汰悪い。ノジュール多い)</p> <p>5 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト主体(有機質に非常に富む。炭化物、植物遺体を非常に多く含む)</p> <p>6 10YR3/3 暗褐色 細砂～極粗砂のラミナ。植物遺体をやや含む)</p> <p>7 10YR3/2 黒褐色 シルト～細砂主体(植物遺体、腐植土を多く含む)</p> <p>8 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂主体(2層よりさらにしまり悪い。ノジュール多い)</p> <p>8' 2.5Y5/2 暗灰黄色 粗砂主体(φ～5mmの細礫をやや含む。ノジュール多い。下方にわずかにラミナがみられる)</p> <p>9 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト主体(細砂がやや層状に混じる。下方に土壌化したシルトが火炎状に混じる)</p> <p>10 10YR3/2 黒褐色 腐植土(8層との層界に極細砂の層を挟む)</p> <p>11 10YR2/2 黒褐色 シルト～粗砂のラミナ(植物遺体、腐植土を非常に多く含む)</p> <p>12 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂主体(ラミナあり)</p> <p>13 10YR4/2 灰黄褐色 中砂～極粗砂のラミナ(植物遺体を非常に多く含む)</p> <p>14 10YR5/2 灰黄褐色 シルト～細砂(植物遺体をやや含む。ラミナあり)</p> <p>15 10YR2/3 黒褐色 シルト主体(有機質に非常に富む。腐植土、植物遺体を非常に多く含む)</p> <p>16 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂のラミナ</p> <p>17 10YR3/2 黒褐色 腐植土</p> <p>18 10YR6/3 にぶい黄褐色 中砂～粗砂(ラミナややあり)</p> <p>19 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～10YR5/2 灰黄褐色 細砂～粗砂がブロック状に混じる</p> | <p>20 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり中砂～粗砂(ラミナ乱れる)</p> <p>21 10YR3/2 黒褐色 細砂～極粗砂混じりシルト(淘汰悪い。ラミナ乱れる)</p> <p>22 10YR4/2 灰黄褐色 中砂(植物遺体をやや含む。淘汰悪い。17層と同じ?)</p> <p>23 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～細砂(植物遺体をやや含む。急傾斜なラミナ)</p> <p>24 10YR4/3 にぶい黄褐色 中砂～粗砂(植物遺体をやや含む。急傾斜なラミナ)</p> <p>25 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂(ラミナあり)</p> <p>26 10YR5/2 灰黄褐色 シルト～細砂(ノジュールやや多い)</p> <p>27 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂(ラミナややあり。炭化物をわずかに含む)</p> <p>28 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～中砂(植物遺体をやや含む。ややラミナあり)</p> <p>29 10YR3/2 黒褐色 シルト～細砂のラミナ(植物遺体を非常に多く含む)</p> <p>30 10YR3/2 黒褐色 シルト～中砂のラミナ(植物遺体を非常に多く含む。シルトが厚く堆積)</p> <p>31 10YR5/2 灰黄褐色 シルト～粗砂</p> <p>32 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト(やや土壌化。下方に中砂～粗砂のラミナあり。炭化物をやや含む。ノジュールややあり)</p> <p>33 2.5Y6/2 灰黄色 中砂～極粗砂のラミナ</p> <p>34 10YR3/3 暗褐色 中砂～粗砂(下方は細砂主体。ラミナあり。淘汰よい。上面は有機質に富む。植物遺体をやや含む)</p> <p>35 10YR3/3 暗褐色 粗砂主体(細礫を層状にやや含む。ラミナあり)</p> <p>36 2.5Y5/1 黄灰色 細砂～粗砂混じりシルト(炭化物をやや多く含む。ノジュールややあり)</p> <p>36' 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト(炭化物を非常に多く含む。ラミナあり)</p> <p>37 10YR3/2 黒褐色 細砂主体(土壌化層の二次堆積か。?ラミナややあり)</p> |
|--|--|

第83図 3区(27年度) 調査区東壁土層断面図

VIII層

上方は、調査区東側谷部中央で最大1mの厚さとなる水成堆積層である。おもに灰オリーブ色から灰黄褐色のシルト～細礫のラミナであり、シルトには植物遺体や炭化物が多く含まれる。

下方では第1遺構面である土壌化層上面の上に、水成堆積物とともに丘陵の大規模な崩落（土石流）堆積が谷奥部で顕著に存在した。土石流堆積は、最大で0.6mの厚さがあり、人頭大までの礫を大量に含んだ黄灰色シルトを主体として、淘汰は非常に悪い。土石流堆積直下には、同じく黄灰色の細砂から細礫のラミナや、植物遺体を多く含むシルトまたは腐植土層が存在し、土石流直前の水成堆積と考えられる。

この土石流堆積中の木片を採取し、AMSによる年代測定を行ったところ、 $BP2,865 \pm 25$ 年（ 2σ でBC1,115～973年）の年代を得た。

IX層

谷肩部では旧丘陵の岩盤層である花崗岩が風化・風雨による二次堆積し、表層が土壌化した部分をIX層とした。谷部では、土石流堆積の下層谷肩部のIX層（土壌化層）と同時形成と考えられる水成堆積層をIX層とした。谷部では水成堆積が一時停滞し、わずかに土壌化または植物遺体が多く含むシルト層がVIII層との区分となる。谷肩部の土壌化層の傾斜から、谷部のシルト層以下の水成堆積層は1m以上になるものと考えられる。谷肩部に近い砂層中の木片を採取し、AMSによる年代測定を行ったところ、 $BP4,010 \pm 25$ 年（ 2σ でBC2,575～2,475年）の年代を得た（第5章第3節）。

IX層上面では炭化物とともに縄文土器や石器などの散布がみられた。

X層以下

谷肩部分では、トレンチ2と3の間で土壌化層を除去した下にさらなる土壌化層を検出した。面積は約36㎡、厚さは最大で約0.2mである。黒褐色のシルト混じり砂を主体とし、直径2～3cmの風化花崗岩や青灰色シルトブロックを含む。層中で縄文土器の散布がわずかながら確認できた。

谷肩部分は高住地区の基盤層である、風化した花崗岩の二次堆積が続く。この風化花崗岩を母材としたシルト～粗砂・細礫が互層状に連なり、谷肩部分はそれらが崩落して堆積する様相が看取できる。

なお、谷肩部分の基盤層から遺物は出土していない。

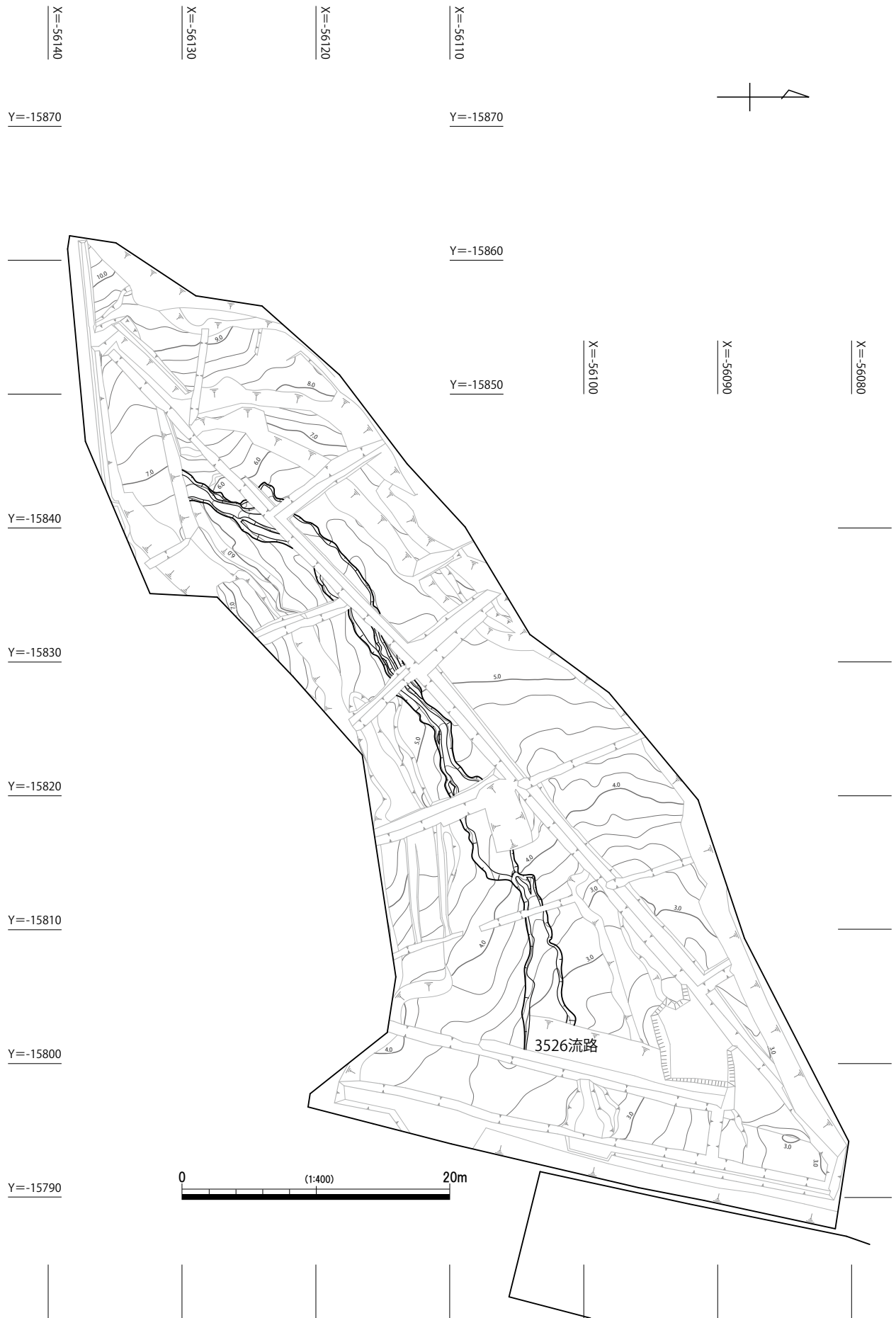
3 検出した遺構

(1) 第0面（黒色砂質土下面）（第84図）

調査区西側で、谷の両肩部分において、VII層より下かつVIII層より上においてピット群を検出した。谷の北側で5基、南側で45基あり、直径0.2m、深さ0.2m程度の不定円形のものが多い。いずれも土層断面において柱痕跡はなく、規則的な配置はみられないこと、また斜面地であることから建物が存在する可能性は低いと考えられる。遺物は3457ピットで土器の小片が1点、検出面上で石庖丁（第160図S47）が出土しており、平成26年度の最終面の年代とも合わせて、弥生時代を上限とした古墳時代前期までの時期と推測される。

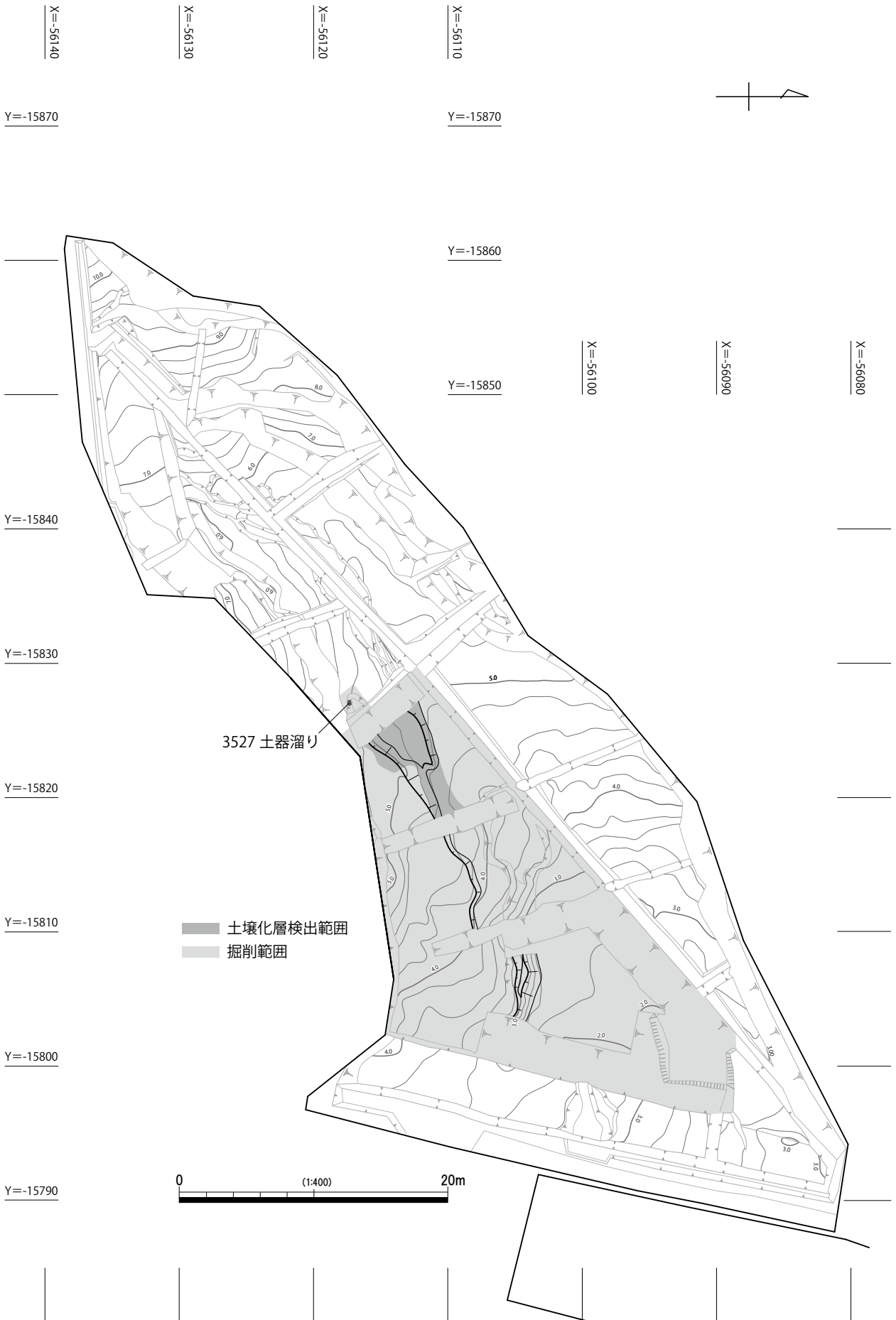


第84図 3区(27年度)第0面平面図



第85図 3区(27年度) 第1面平面図

第IV章 調査の成果



第 86 図 3 区 (27 年度) 第 2 面平面図



第87図 3区(27年度) 下層調査平面図

(2) 第1面 (Ⅸ層 (土壌化層) 上面、第85図、PL.32)

平成26年度の下層確認で石匙が出土した土壌化層 (今回調査のⅨ層) 上面を第1面とした。調査区の大半は周辺丘陵から流れ込んだ土砂で埋積した谷であり、土壌化層は谷の肩部のみで検出できた。この面では自然流路1条を検出した。

3526 流路

3526 流路は、調査区の南西端 (谷の最上流部) から東端に向かってやや蛇行しながら延伸する。検出した規模は、長さ約50m、最大幅4m、深さ平均約0.2mを測る。堆積土からは縄文土器4点、石器2点が出土した。丘陵上にあったものが流れ込んだと考えられる。

(3) 第2面 (Ⅸ層 (土壌化層) 除去面、第86図、PL.32・33)

南側の谷の肩に広がる土壌化層を除去した面を第2面とした。人為的な遺構は検出しなかったが、遺構面直上では、炭や土器片、石器の散布がみられ、一部はやや集中して検出 (3527 土器溜) された。遺物の出土は第1面よりも増え、特に3527 土器溜からトレンチ2を挟んで2I-2cグリッドにかけてやや集中して出土した。

3527 土器溜 (第88図、PL.32)

谷肩部で、トレンチ2の西側のやや摺鉢状にくぼむ地形において、直径約0.5mの範囲で土器の集



第88図 3区 (27年度) 下層調査遺物出土状況図

中が見られた。出土した土器は表面の風化が激しく、時期の特定は難しいが、周辺で出土した遺物の様相から縄文時代中期～後期に相当する深鉢と推測される。

（4）下層確認（第87図、PL.33）

トレンチ2とトレンチ3の間の谷の肩部分では、さらに下層に土壌化層の堆積を確認したため、部分的に深掘りを行い、堆積状況等の調査を行った。層中および除去面において、縄文土器の小片がわずかに出土したのみである。表面の風化が著しく、時期の特定が難しいが、縄文時代早期～前期に相当するものと考えられる。

4 小結

平成27年度調査の3区では、第1、2面で明確な遺構は確認できず、谷部を流下する自然流路や土器溜まりを検出したのみである。しかしながら、各面で縄文時代の土器や石器を確認したほか、下層の土壌化層上でも遺物の出土を確認した。出土地点は南側丘陵裾部分であり、丘陵自体は完全に削平されているが、この部分に何らかの人々の活動の場が存在したことが想定される。縄文土器は早期～後期のものが含まれ、湖山池形成の歴史と人間活動を考えるうえで興味深い成果といえる。

第5節 4区（平成27年度）の調査

1 立地

高住宮ノ谷遺跡4区は、26年度に調査を行った2区および3区東側に接する調査区で、北野神社南側の小さな谷に面した丘陵裾部から平野部にかけて立地する。東側には高住平田遺跡が隣接する。市道として調査直前まで使用されていた箇所であり、調査地は長さ45m、幅9～11mの細長い長方形を呈する。前年度および隣接する高住平田遺跡の調査成果から、掘削が深くなること、地下水が湧くことが予想されたため、周囲に鋼矢板を打設して調査を行った。調査区全面が道路敷きにあたるため、調査前で標高4.0mの平坦面であり、東端の幅2m程が道路脇の法面となっていた。

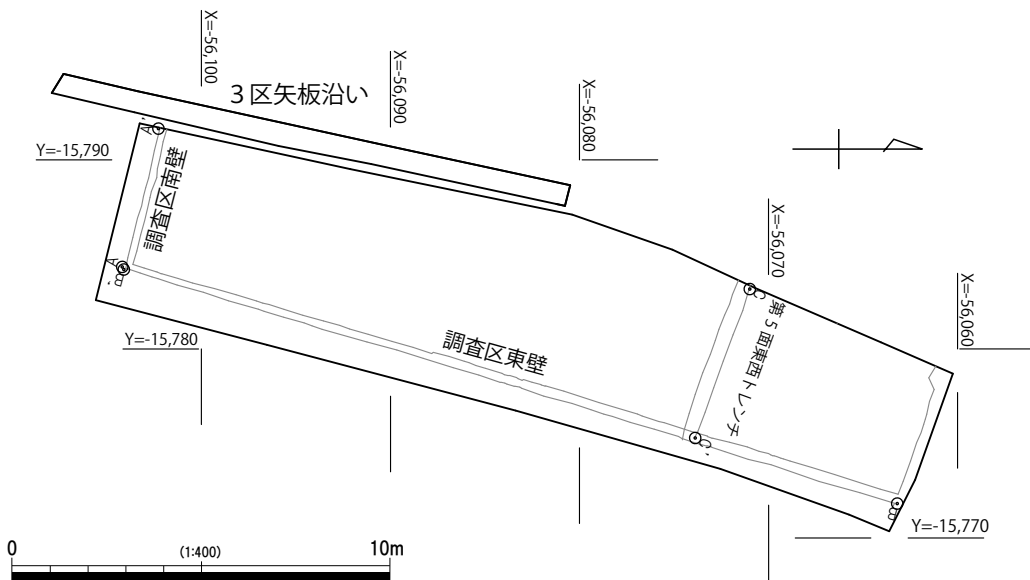
また、3区東端は、東壁から離して掘削した側溝と矢板との間に、幅1mほどの土層観察用畔が残存していた。この部分のうち、4区に隣接する部分は遺構の存在が確認できたため、同様に調査を行った。以下で合わせて報告する。

調査面積は4区445㎡、3区矢板沿い31㎡である。

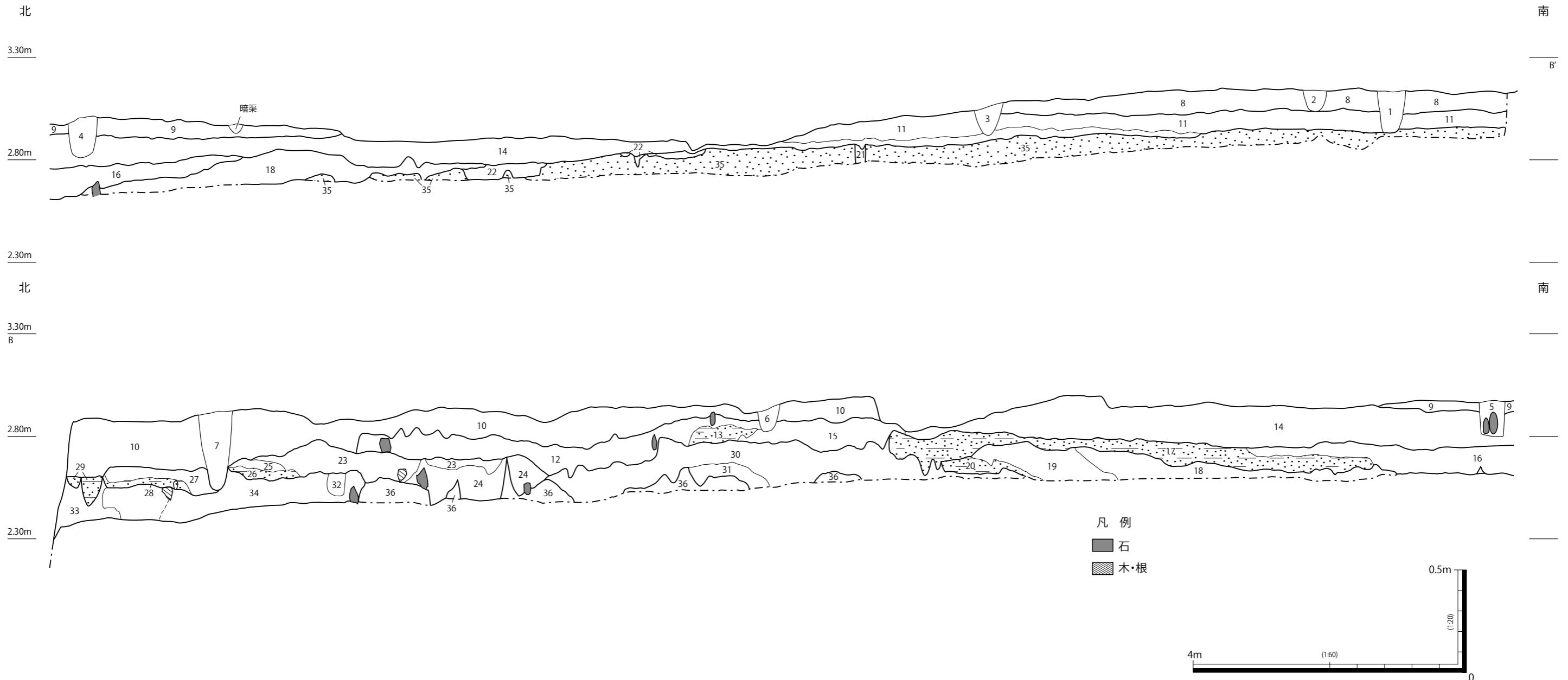
2 基本層序（第90、91図）

上述のとおり、直前まで市道として利用されていたため、その基礎構造である砂利などをまず重機で除去した。前述のように、調査前は東辺が法面となっている以外は平坦であったが、調査区の東側の大半は盛土が厚く盛られ、場所によっては1m以上となっていた。その西側は高さ0.3～0.6mで一段高くなっていた。重機で盛土を除去した後、南側と東側に側溝を掘削し、土層の確認に努めた。また、西側の一段高い部分（以下、西側高位部）は遺構面の残存状況が良いことが想定されたため、確認のためトレンチを入れて土層を確認しながら調査を進めた。

西側高位部と東側の低い部分（以下、東側低位部）の間には近世以降の溝が存在しており、調査区西辺にはほぼ並行する。この高位部は、丈量図や古い航空写真から、昭和50年代の圃場整備に伴い拡幅された市道の、前身となる道路跡と考えられる。

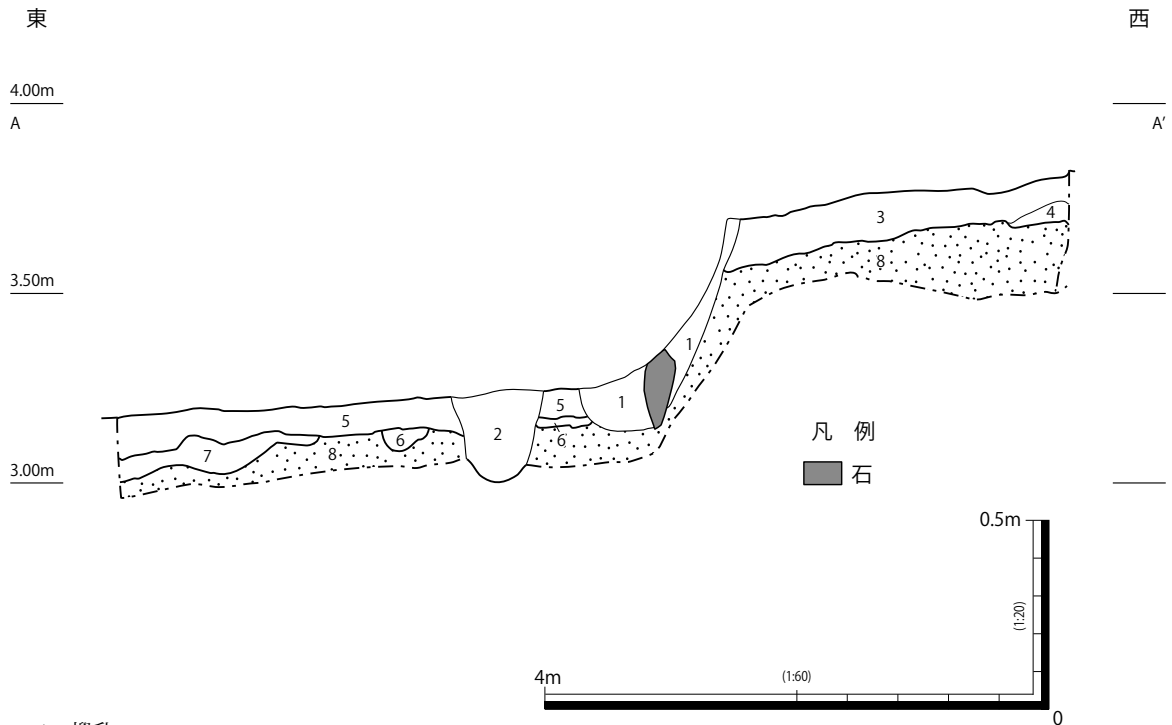


第 89 図 4区 トレンチ配置図



- 1~7 暗渠
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり細砂~中砂(粗砂をわずかに含む、10YR5/4 にぶい黄褐色 中・粗砂をφ1cmまでのブロック状に10%含む。10YR3/3 暗褐色 を呈する塊をやや多く含む)
- 9 5Y4/1 灰色(やや暗) 極細砂~砂質シルト (10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂~粗砂をφ5mmの粒状に20%含む)
- 10 10YR3/1 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂~細砂 (細礫を若干含む。未分解有機物を若干含む。φ5cmまでの角礫を若干含む)
- 11 2.5Y3/1 黒褐色と2.5Y4/1 黄灰色の中間 シルト混じり細砂-粗砂 (10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂~粗砂をφ1cmの小ブロック状に5%含む)
- 12 2.5Y2/1 黒色 細砂~中砂混じり極細砂~砂質シルト (砂少なめ。炭化物を若干含む。中礫~巨礫をわずかに含む)
- 13 2.5Y3/1 黒褐色(やや明、褐色) 細砂~中砂 (ラミナあり。10YR3/1 黒褐色(暗め) 細砂~中砂わずかに混じりシルトを1cmまでの層状に20%含む)
- 14 2.5Y3/1 黒褐色 細砂~中砂混じりシルト (粗砂~細礫を若干含む。炭化物をわずかに含む。細礫~中礫(角礫をわずかに含む))
- 15 10YR3/1 黒褐色(やや暗) 細砂~中砂混じりシルト (砂少なめ。極細砂~砂質シルト。同色で砂が多い部分と混在)
- 16 10YR3/1 黒褐色(やや褐色) シルト混じり細砂~粗砂 (2.5Y4/1 黄灰色(やや黄色) 細砂~中砂をレンズ状に(厚~1cm)30%含む(下面に密))
- 17 10YR4/1 褐灰色(やや褐色) 細砂~中砂 (粗砂をわずかに含む。ラミナあり。10YR3/1 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂(中砂~粗砂をわずかに含む)を1cmまでの層状に30%含む)
- 18 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混じりシルト (2.5Y5/1 黄灰色 シルト混じり細砂~中砂(35層由来)を小ブロック状に10%含む)
- 19 10YR3/1 黒褐色(やや暗め) 細砂~中砂混じりシルト(砂多め。10YR4/1褐灰色(やや黄) 細砂~中砂を大小のブロック状に10%含む)
- 20 10YR3/1 黒褐色(やや褐色) 細砂~中砂(わずかにシルト分を含む。10YR4/1褐灰色 細砂~細礫を2cmまでの層状~レンズ状に40%含む)
- 21 10YR2/1 黒色(やや明るめ) 極細砂~中砂混じりシルト (砂多め。細礫を若干含む)
- 22 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり中砂~粗砂 (35層(極細砂~粗砂)を小ブロック状に30%含む(下面に多い))
- 23 10YR3/1 黒褐色(やや暗) 細砂~中砂混じりシルト (24層より砂多め。10YR3/1 黒褐色(やや褐色) シルト混じり細砂~中砂(シルト多め)を大きなブロック状に50%含む)
- 24 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混じりシルト (36層をブロック~火炎状に70%含む。北は砂がやや多くなる)
- 25 10YR3/1 黒褐色(やや暗) シルトわずかに混じり細砂~粗砂 (未分解有機物を若干含む)
- 26 2.5Y3/2 黒褐色(やや灰色) 細砂~中砂 (未分解有機物をやや多く含む)
- 27 10YR3/1 黒褐色(やや褐色) シルトわずかに混じり細砂~中砂 (炭化物、未分解有機物を若干含む。ラミナあり)
- 28 10YR3/2 黒褐色 細砂 (中砂~粗砂をわずかに含む。未分解有機物を多く含む)
- 29 10YR3/1 黒褐色(やや褐色) 細砂~中砂 (細礫を若干含む。未分解有機物をやや多く含む)
- 30 10YR3/1 黒褐色 細砂わずかに混じり極細砂~砂質シルト (炭化物をわずかに含む)
- 31 10YR3/1 黒褐色 砂質シルト (しまり弱い。中砂~粗砂、細礫を若干含む)
- 32 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂~中砂 (シルト少なめ。細礫を若干含む。10YR4/1 褐灰色(やや褐色) 細砂をφ3cmのブロック状に20%含む)
- 33 10YR3/1 黒褐色 細砂混じり砂質シルト (上方は砂が多くなる)
- 34 10YR3/1 黒褐色(やや褐色) 細砂~中砂混じりシルト (北はシルトと砂が逆転し、砂が多い。未分解有機物をやや多く含む)
- 35 2.5Y5/2 暗灰黄色~7.5Y6/1 灰色 細砂~中砂 (部分的に2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂~砂質シルト)
- 36 10YR4/2 灰黄褐色(やや明) シルト

第90図 4区 調査区東壁土層断面図



- 1 攪乱
- 2 暗渠
- 3 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト (砂少なめ。10YR4/4～10YR4/6 褐色 細砂～中砂混じりシルト (砂少なめ)を小ブロック状に20%含む)
- 4 2.5Y3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト (3層より砂多い。10YR4/4～10YR4/6 褐色 細砂～中砂混じりシルトをブロック状に30%含む)
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり細砂～中砂 (粗砂をわずかに含む)、10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂～粗砂とがφ1cmまでのブロック状に10%含む。10YR3/3 暗褐色 を呈する塊をやや多く含む)
- 6 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～粗砂 (砂多め)に、10YR5/1 褐灰色 細砂～粗砂ブロックを50%含む)
- 7 2.5Y3/1 黒褐色 と2.5Y4/1 黄灰色 の中間 シルト混じり細砂～粗砂 (10YR5/4 にぶい黄褐色 中砂～粗砂を～φ1cmの小ブロック状に5%含む。炭化物をわずかに含む。10YR3/3 暗褐色の塊を若干含む)
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄色 ～ 7.5Y6/1 灰色 細砂～中砂 (部分的に 2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂～砂質シルト)

第91図 4区 調査区南壁土層断面図

西側高位部と東側低位部を隔てる溝の東側にほぼ並行して暗渠を確認し、さらにその東には直交する方向で暗渠が築かれていた。これらの構造には様々なものがあったが、内部から近現代の陶磁器などが出土しており、基本的に近世以降のものと考えられたため、暗渠を最初に掘削し、その後、断面での土層検討に従い、遺構面までの掘り下げを行った。

以下、基本層序を述べるが、南北に細長い調査区中で2区に接する北半と、3区に接する南半では堆積状況が若干異なっているため、分けて記述する。

<北半>

X = - 56,075 以北の部分で、平成26年度調査の2区の下段部分に接する区域である。

基盤となるのは灰黄褐色シルト層（第90図36層）である。比較的均質であるが、部分的に白色極細砂～シルトの小ブロックを含有する。これは地山の再堆積層と考えた。このシルト層は北側へやや下がっていくようであり、現状では削平が進んでいるが、もともとこの部分に尾根筋が張り出していたと考えられる。実際に第5面では、西側から張り出す地山の高まりを確認している。

西側高位部では、盛土除去後ピットや溝を確認し、この面を第1面として調査を行った。これ以下は黒褐色の砂混じりシルト層が複数存在し、各層上面で遺構検出を行い、溝やピット等を検出した（第2・3面）。これらを除くと、灰黄褐色シルト層に直線的な掘り込みが確認され、竪穴建物2棟を検出した（第4面）。この竪穴建物は、東側が後世の削平で失われていたほか、西側や北側が調査

区外に延びている。また、確認用トレンチがちょうど堅穴建物にかかるなど、調査区内で確認できた部分は多くない。

東側低位部は後世の耕作に伴い削平が進んでおり、高位部の第1面に該当する面が存在しない。前述のシルト層上には黒褐色～灰褐色砂混じりシルト層が複数存在し、耕作によるものと考えられた。それぞれの上面で検出を行い、ピットや土坑を確認している。

<南半>

X = - 56,075 以南の部分で、3区に隣接する部分にあたる。また、3区矢板沿いの部分も同様の層位となっている。基盤となるのは暗灰黄色～灰色砂層（東壁35層、南壁8層）である。この砂層は、北に向けてゆるやかに下がっていき、北半のシルト層に移行する手前のX = - 56,080 ライン付近が最も低くなっている。

西側高位部では、調査区南半で表土除去後すぐに砂層上面が露出するほどであった。この上面は細かな凹凸が存在するものの、標高が高い方ほど凹凸が無く、上層の黒褐色砂混じりシルト層（南壁3・4層）との境界がはっきりしている。また、基盤層上面（2・3面）で検出したピットや土坑の埋土には、上層に存在しない黒色砂混じりシルトが混入する。上面が水田耕作やそれに伴う開発により大規模に削平された可能性が考えられる。

X = - 56,090 ライン以北はこの砂層上に黒色シルト層、黒褐色砂混じりシルト層が複数存在した。黒色シルト層は北側では灰黄褐色シルト層上まで分布しており、本来はこの上面の土壤化層にあたるものと考えられる。黒褐色砂混じりシルト層上面で水田とそれを区切る畦畔（第2面）、黒色シルト層上面および砂層正面でピットを検出したほか、掘立柱建物2棟を確認した（第3面）。

東側低位部でも、砂層の上層に複数の堆積層を確認したが、高位部で見られた黒色シルト層や黒褐色砂混じりシルト層は確認できず、わずかにピットの埋土にブロックで混じる程度であった。この部分では、これらの層が削平されていると考えられる。暗渠掘り込み面を構成する層を除去した面を第1面としたが、遺構は確認できなかった。この下の黒褐色砂混じりシルト層（東壁14層）下面で4058道路跡を検出し、第2面として調査を行った。道路跡の埋土を除去後、下面で確認した遺構を第3面とした。西側高位部同様、南端では道路跡が基盤の砂層上での検出となったため、埋土の違いと遺構の切り合いにより第2面と第3面の遺構を区別して調査した。砂層は3区の平成26年度最終調査面である自然堆積層（Ⅶ層）であり、第4面以下は北半のみの調査となっている。

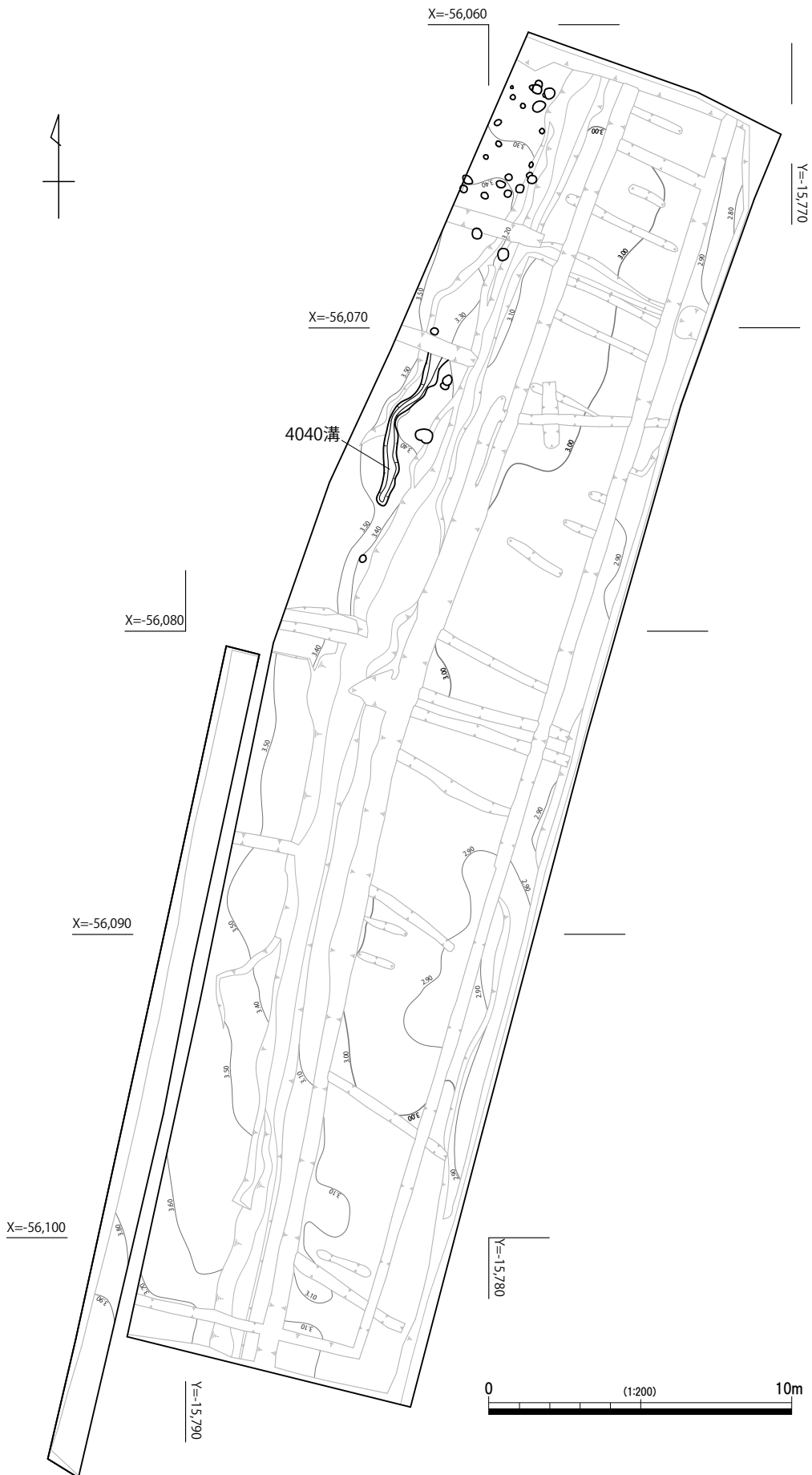
第5面は東壁35層（砂層）とその下層に互層状に自然堆積した有機物層を除去した面である。前年度調査区や高住平田遺跡での下層確認の結果から、自然堆積層は1m以上の厚さを持つことが分かっていたため、重機を用いてこの自然堆積層を除去した。調査区内の大半はさらに堆積が深く、地山やその上の土壤化層まで到達しなかった。一部を除き、限界掘削深度（GL - 3.0 m）に到達した時点で掘削を中止した。

3 検出した遺構

以下、各面で検出した遺構について述べるが、柱穴・ピットについては煩雑さを避けるため、一覧を第9表にまとめた。

(1) 第1面（第92図、PL.34）

北半西側高位部で溝1条、ピット25基を確認した。



第92図 4区 第1面平面図

検出面は黒褐色砂混じりシルト層上面で、東側低位部や南半では確認できなかった。この高位部は近年まで継続して道路として利用されたため、辛うじてこの部分のみ遺構面が残存したものと考えられる。

4040 溝は全長 5.25 m、幅 0.2 ～ 0.7 m、深さ 0.1 m 程度の浅い溝である。南端を検出したが、北端は確認トレンチで切られており、全長は不明である。蛇行しつつ北へ向かう。

ピットは、4005、4007 ピットのように直径 0.3 m を超えやや大きく深いものも存在するが、直径 0.2 m、深さ 0.1 m 程度のものが多い。また、埋土も単層のものが大半である。何らかの構造物に関係するようなものは認められなかった。

(2) 第 2 面 (第 93 図、PL. 2、34、36)

第 2 面では、全面で遺構が見つかった。道路 1 本、水田 3 面、畦畔 1 条、溝 2 条、土坑 3 基、ピット 21 基を確認した。

4058 道路は、調査区東側の低位部で検出した (第 95 図)。東壁断面で砂層もしくはシルト混じり砂層を確認し (第 90 図 16・17 層)、これらの層中にはラミナが認められたことから、検出当初は流路と考えた。しかし、サブトレンチを入れたところ、中央が高まっており側溝状に溝が並行していることが判明した。この溝内の埋土が非常に硬く締まっていること、溝内にいわゆる波板状凹凸に類似する凹凸が見られることなどから、最終的に道路跡と判断した。

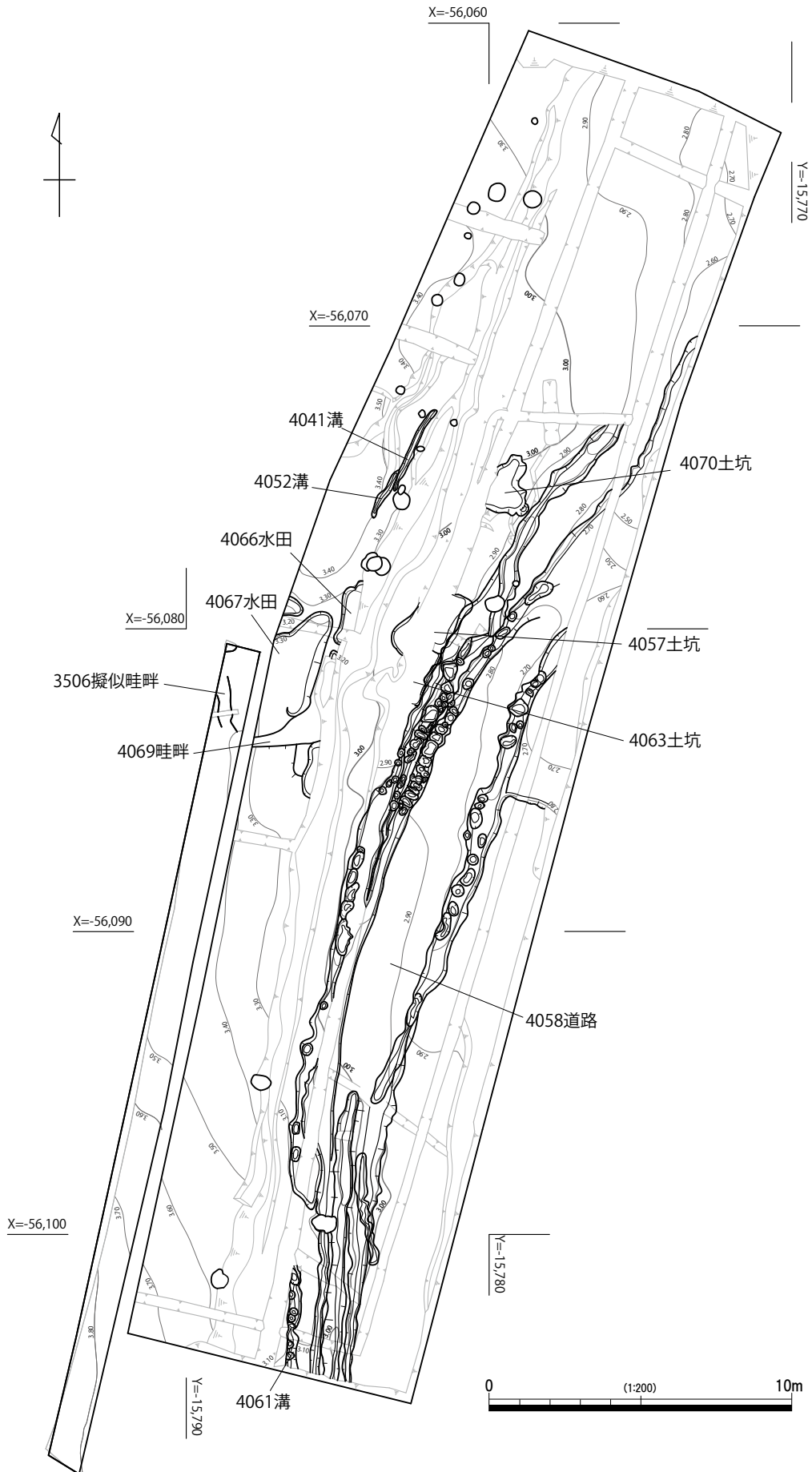
道路跡は、全体として南端から約 10 m の間はほぼ真北へ向かい、やや東に振れて概ね直線的に約 10 m 進んだ後、さらに東に向かい調査区東辺で調査区外に続いている。基本的に、緩やかにカーブを描きながら北に向かうが、直線を指向しつつ、丘陵部から平坦部へ移行する部分をトレースするように地形に沿って造られているように見受けられる。暗渠により西側が一部破壊されているほか、側溝で確認できなかった部分もあるが、比較的残存状況は良好である。長さ 36.3 m にわたって検出し、幅は落ち込み部分の肩 - 肩間で 2.3 ～ 4.3 m となっている。

溝の重複関係と断面における土層の観察から、溝については同時存在ではなく、4 段階程度の段階があることが想定される (第 94 図)。

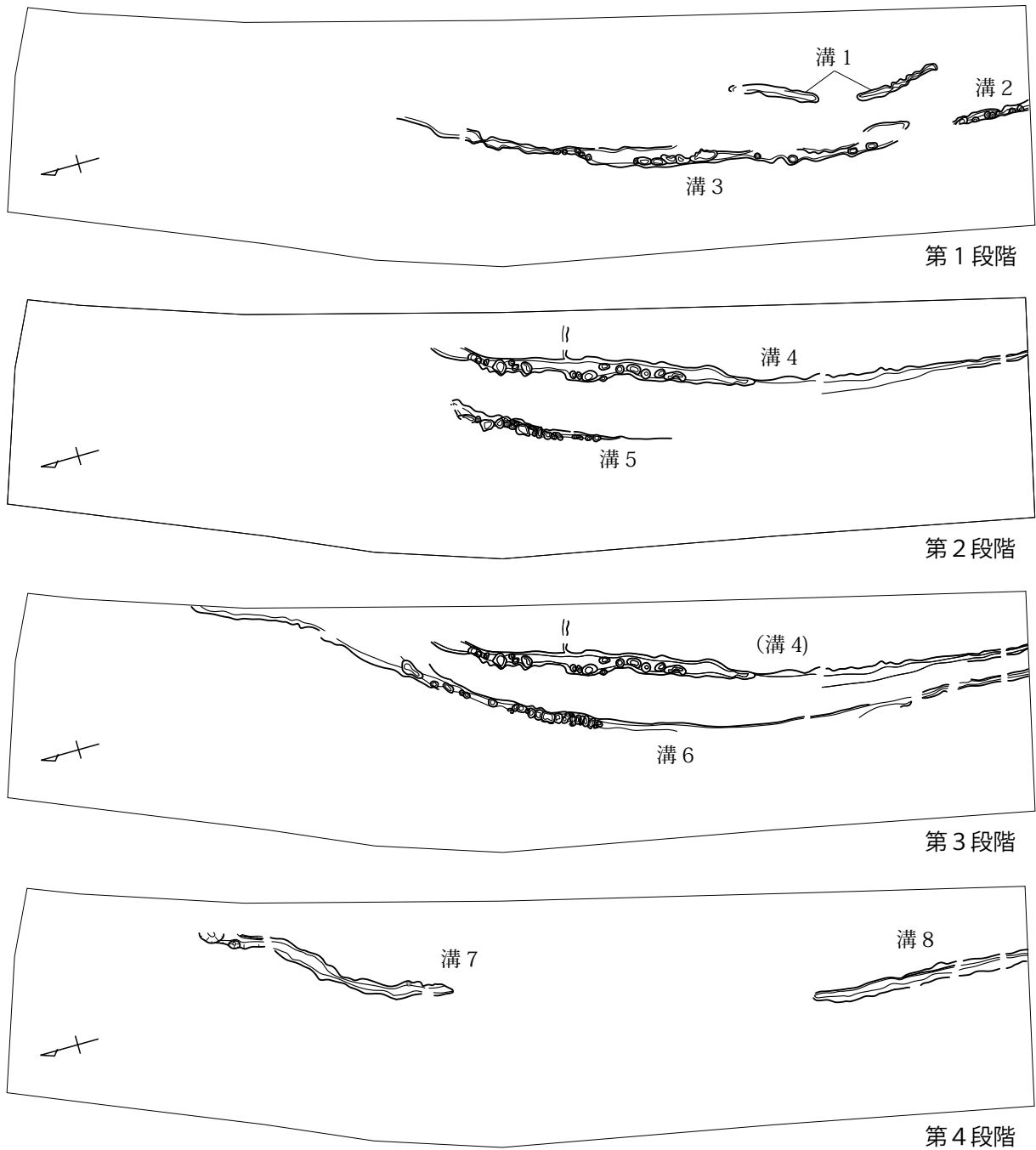
第 1 段階 道路跡東側に断続的に続く溝 1、南端の溝 2、最も西側の溝 3 が該当する。溝 2 と 3 は同一の可能性もあるが、埋土や幅が異なるため別にしていく。溝 1 は長さ 3.7 ～ 3.9 m 程の比較的直線的な浅い溝が連続するもので、幅は一定しないが底の凹凸は顕著ではない。溝 2 は検出長 3.4 m で南端は調査区外へ続く。溝底には円形の凹凸が認められる。溝 3 はゆるやかにカーブする溝で、最大幅 1.1 m、延長 22.2 m にわたり確認した。暗渠に切られ判然としない部分も多いが、埋土は砂を中心とするもので、しまりが強い。底部には溝の西側に偏って楕円形の凹凸が認められた。

第 2 段階 道路跡東側の溝 4、溝 3 と溝 6 の間にわずかに残る溝 5 が該当する。溝 4 は南端から 9 m ほどほぼ真北に向かった後、北北東へ折れて 5 m ほど続く。それより北は上層の溝と一緒にあっており、判然としない。溝 5 は溝 6 に先行するもので、溝 6 が東側へカーブする部分があり、直線的な形態であった名残であろう。埋土には基盤の砂層がやや大型のブロック状に混じっており、比較的しまりが強い。底面には凹凸が顕著に認められ、一つ一つは概ね円形を呈する。溝 4 と 5 は、芯々間で幅 2.7 m である。

第 3 段階 溝 6 が該当する。なお、溝 4 はこの段階にも機能していたと考えられる。両者の芯々間



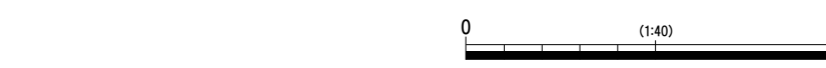
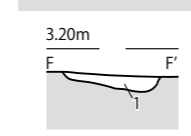
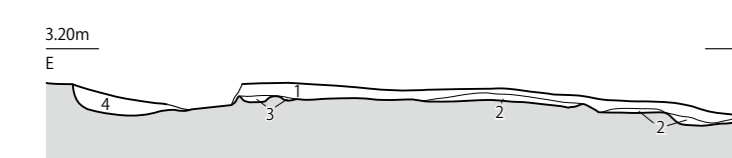
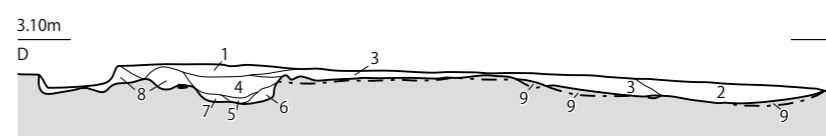
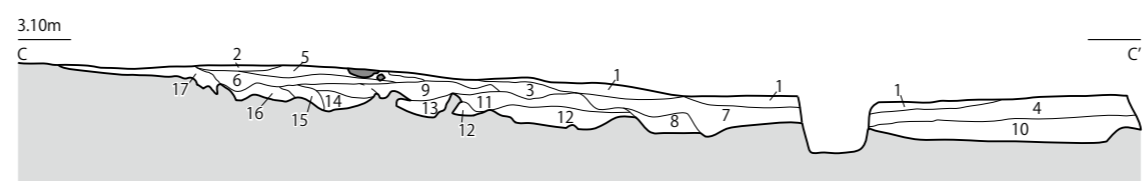
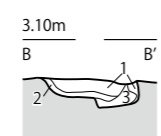
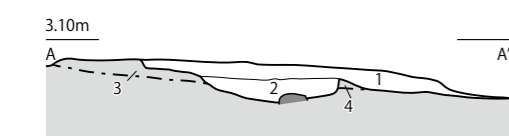
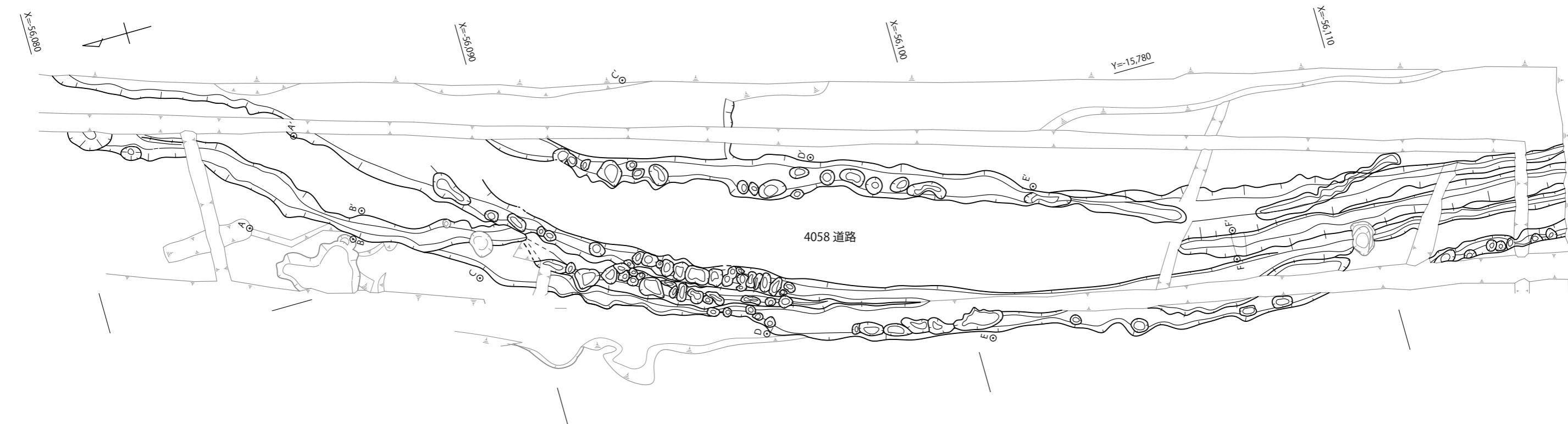
第93図 4区 第2面平面図



第94図 4区 4058 道路変遷想定図

距離は1.1～2.7 mと一定しない。溝6は緩やかにカーブしており、北端で屈曲して北北西へ直線的に伸びる。北半の延長9 mは溝底に凹凸が顕著に認められた。その北側では埋土の砂を取り除いたところ、溝底に砂が楕円形に入っている箇所が多数認められた (PL.36 - 2)。長軸0.2 m、短軸0.1 m程度であり、当初は人間の足跡の可能性を考えた。しかし、半裁して観察したところ、深さ0.1 mで底部は2段になっていた。人間の足跡ではなく、動物、おそらく牛の前後の足跡が重なり、楕円形になったものと考えられる。この足跡は黒褐色シルト (30層) 上面のみで確認でき、35層上面部分では確認できなかった。

第4段階 溝7・8が該当する。溝7は最も北東側に位置し、溝3・5・6を切っているが、始点は確認していない。ゆるやかに東へカーブした後、溝5に平行するように直線的に北北東へ延びる。



- A-A'
- 10YR3/1 黒褐色(やや暗)細砂～中砂混じりシルト(砂やや少なめ。細礫～中礫を若干含む)
 - 10YR3/2 黒褐色(やや灰色)シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫～中礫をやや多く含む。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR3/2 黒褐色 細砂混じり砂質シルト(砂少なめ。中砂～粗砂をわずかに含む。細礫をわずかに含む。10YR4/3 にぶい黄褐色～10YR4/4 褐色シルトを粒状に20%含む)
 - 10YR3/2 黒褐色(やや明、褐色) 細砂～中砂混じりシルト(砂少なめ。未分解有機物(木片?)を多量に含む)

- B-B'
- 10YR3/2 黒褐色シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫～中礫を若干含む。ラミナあり)
 - 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂～中砂(粗砂～細礫を若干含む。未分解有機物を多量に含む)
 - 2.5Y3/2 黒褐色シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂を1cmの層状に30%含む)

- C-C'
- 10YR3/1 黒褐色(やや褐色)シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。粗砂～細礫をやや多く含む。角礫～亜角礫(φ～5cm)含む。炭化物を若干含む)
 - 10YR4/2 灰黄褐色シルトわずかに混じり細砂～中砂(鉄沈着あり)
 - 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂(10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂をレンズ状(φ0.5～2cm)に40%含む(ラミナ状)。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR4/2 灰黄褐色(やや灰色)細砂～中砂混じりシルト(砂多め。細礫～中礫をわずかに含む。砂のブロックをわずかに含む。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR3/1 黒褐色(やや褐色)シルトわずかに混じり細砂～中砂(粗砂を若干含む。10YR5/2 灰黄褐色 細砂をブロック状に10%含む)

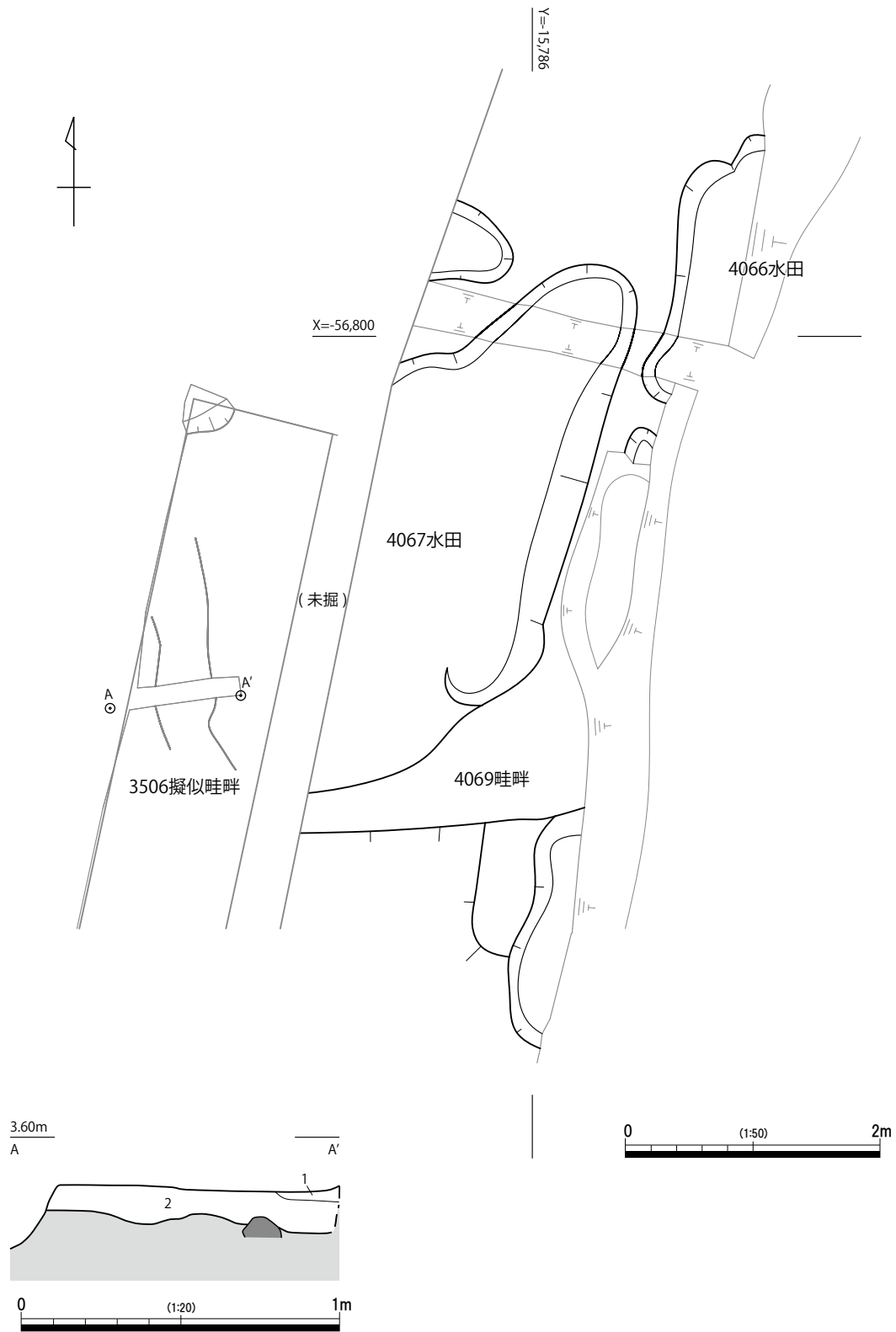
- 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂(わずかにシルト含む。10YR5/2 灰黄褐色 細砂～中砂を0.5～2cmの層状に50%含む(ラミナ状))
- 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂、小礫～中礫(φ～1cm)を3cmまでの層状に50%含む。ラミナあり。しまり弱い)
- 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR3/1 黒褐色シルト混じり細砂～中砂を40%、10YR4/1 褐色シルトわずかに混じり細砂～中砂を10%ブロック状に含む。炭化物をわずかに含む)
- 10YR3/2 黒褐色(やや灰色、暗) 細砂～中砂(10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂を0.5～1cmの層状に30%含む(ラミナ状)。西側はしまり強い)
- 2.5Y3/2 黒褐色(やや赤色) 細砂～中砂混じりシルト(粗砂～細礫を若干含む。炭化物をわずかに含む。下層の10YR3/1 黒褐色(やや暗)細砂～中砂混じりシルトが火炎状にわずかに入り込む)
- 10YR3/2 黒褐色(やや暗)シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。10YR4/2 灰黄褐色 細砂～粗砂をφ0.5～1cmの粒状に30%(一部レンズ状)含む)
- 10YR2/2 黒褐色(やや明) 細砂～中砂混じりシルト(砂多め。10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂をレンズ状(φ0.5～2cm)に30%、下面に顕著に含む。炭化物をわずかに含む)
- 10YR2/1 黒色(やや明) 細砂～粗砂混じりシルト(10YR3/2 黒褐色シルトわずかに混じり細砂～中砂をブロック状に30%、2.5Y5/3 黄褐色 細砂～中砂を0.5～1cmの層状～レンズ状に20%含む)
- 10YR2/1 黒色シルトわずかに混じり細砂～中砂(10YR5/2～10YR6/2 灰黄褐色 細砂～中砂を粒状に30%含む。1cm程度の角礫を若干含む)
- 10YR4/1 褐色 細砂～中砂(中砂主。わずかにシルトを含む。細礫～中礫を若干含む。10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂～細礫～中礫を2cmの層状に40%含む)
- 10YR3/2 黒褐色シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫～中礫を若干含む(ややブロック状))
- 10YR3/2 黒褐色(やや暗)シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫を若干含む。炭化物を若干含む)

- D-D'
- 10YR3/2 黒褐色(やや灰色)シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫を若干含む)
 - 10YR3/2 黒褐色シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂をレンズ状～ブロック状に30%含む)
 - 10YR4/2 灰黄褐色(やや暗)シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫を若干含む。10YR6/2 灰黄褐色 細砂～中砂をうすい層状に10%含む)
 - 10YR5/2 灰黄褐色(やや褐色) 細砂～中砂(10YR6/1 褐色～10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂を層状に50%含む。炭化物を若干含む。しまり強い)
 - 10YR3/2 黒褐色 細砂～中砂(10YR6/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂を層状に20%含む。細礫を若干含む)
 - 10YR4/2 灰黄褐色(やや暗)細砂～中砂(細礫を若干含む。10YR6/2 灰黄褐色 粗砂を粒状～レンズ状に10%含む)
 - 5Y5/2 灰オリーブ色(やや褐色)細砂～中砂(しまり強い。細礫を若干含む)
 - 10YR3/2 黒褐色 細砂～中砂(10YR5/2 灰黄褐色 中砂～粗砂をブロック～粒～レンズ状に30%含む。ラミナあり。亜角礫を含む。下面は細礫主体)
 - 10YR3/2 黒褐色(やや灰色)シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫を若干含む)

- E-E'
- 10YR3/2 黒褐色(やや赤色)シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫を若干含む。10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂をブロック状～レンズ状に20%含む。φ2cmまでの亜角礫、炭化物をわずかに含む)
 - 10YR3/2 黒褐色(1層よりやや暗)シルトわずかに混じり細砂～中砂(粗砂～細礫を若干含む(1層よりシルト多い)。10YR6/2 灰黄褐色 細砂～粗砂をレンズ状に40%含む)
 - 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂(粗砂～細礫を若干含む。しまり強い)
 - 7.5YR4/2 灰褐色 細砂～中砂(粗砂～細礫をやや多く含む。下から5Y5/2 灰オリーブ色～5Y5/1 灰色 細砂～粗砂が火炎状に入り込む。しまり強い)

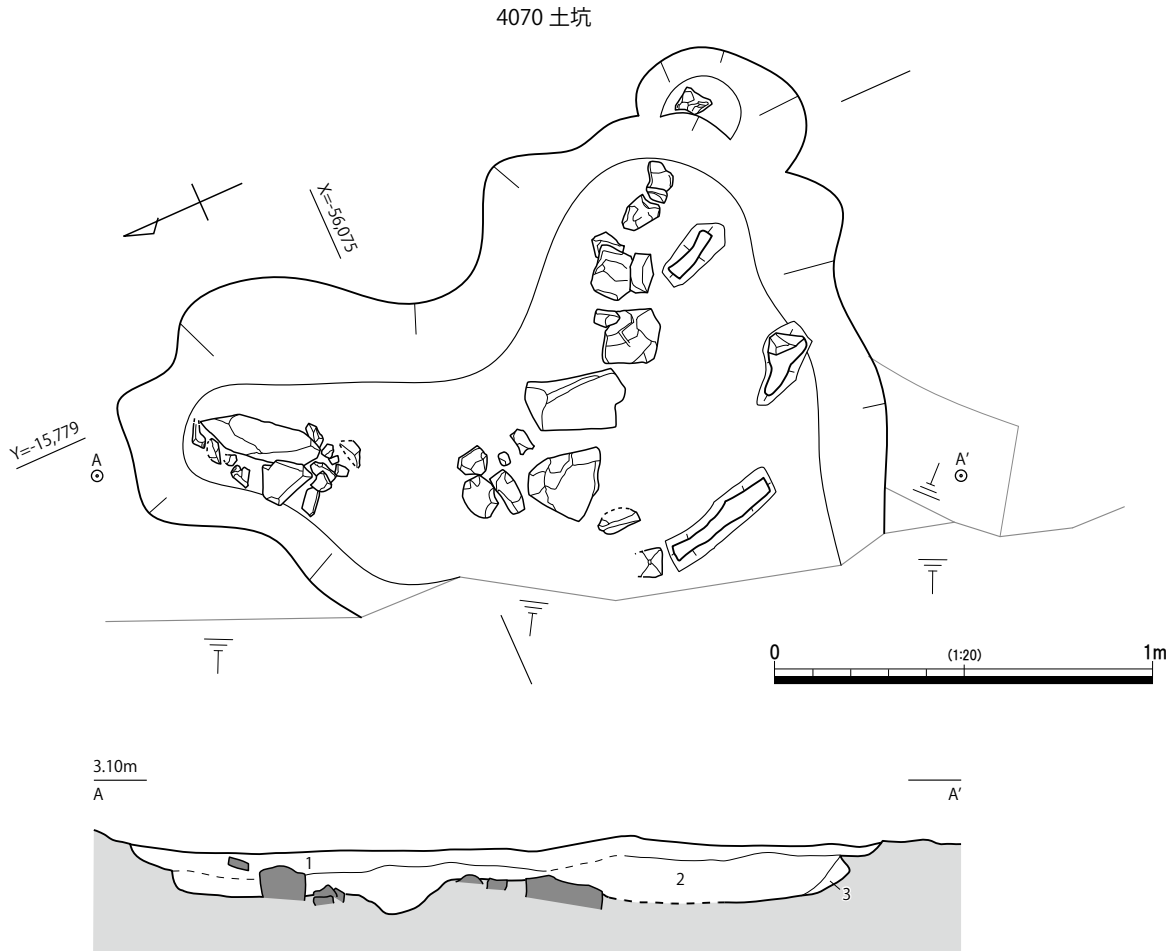
- F-F'
- 10YR4/1 褐色(やや褐色)シルト混じり極細砂～中砂(シルト少なめ。細礫、炭化物をわずかに含む)

第95図 4区 第2面 4058道路平面図、断面図



- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(炭、植物遺体、風化花崗岩をよく含む)
- 2 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混じりシルト(上面にφ～10cm程度の角礫(花崗岩)をよく含む。炭、植物遺体を多く含む)

第96図 4区 第2面検出遺構平面図、断面図(1)



- 1 10YR4/1 褐灰色(やや暗) 細砂～中砂混じりシルト(砂多め、細礫をやや多く含む。炭化物若干含む)
- 2 10YR4/1 褐灰色(やや暗・褐色) シルト混じり細砂～粗砂(シルト多め、10YR4/1 褐灰色(やや明) 極細砂～砂質シルトをφ1～2cmの粒状に5%含む)
- 3 10YR4/1 褐灰色(やや暗・褐色) シルト混じり細砂～中砂(2層よりシルト少、10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルトを1cmの層状に20%含む)

第97図 4区 第2面検出遺構平面図、断面図(2)

最大幅0.7m、延長12mにわたって検出した。埋土は砂である。溝8は南半で検出しており、溝4・6の間を平行する。埋土から最も新しい段階になることは分かるが、溝7との先後関係は不明である。

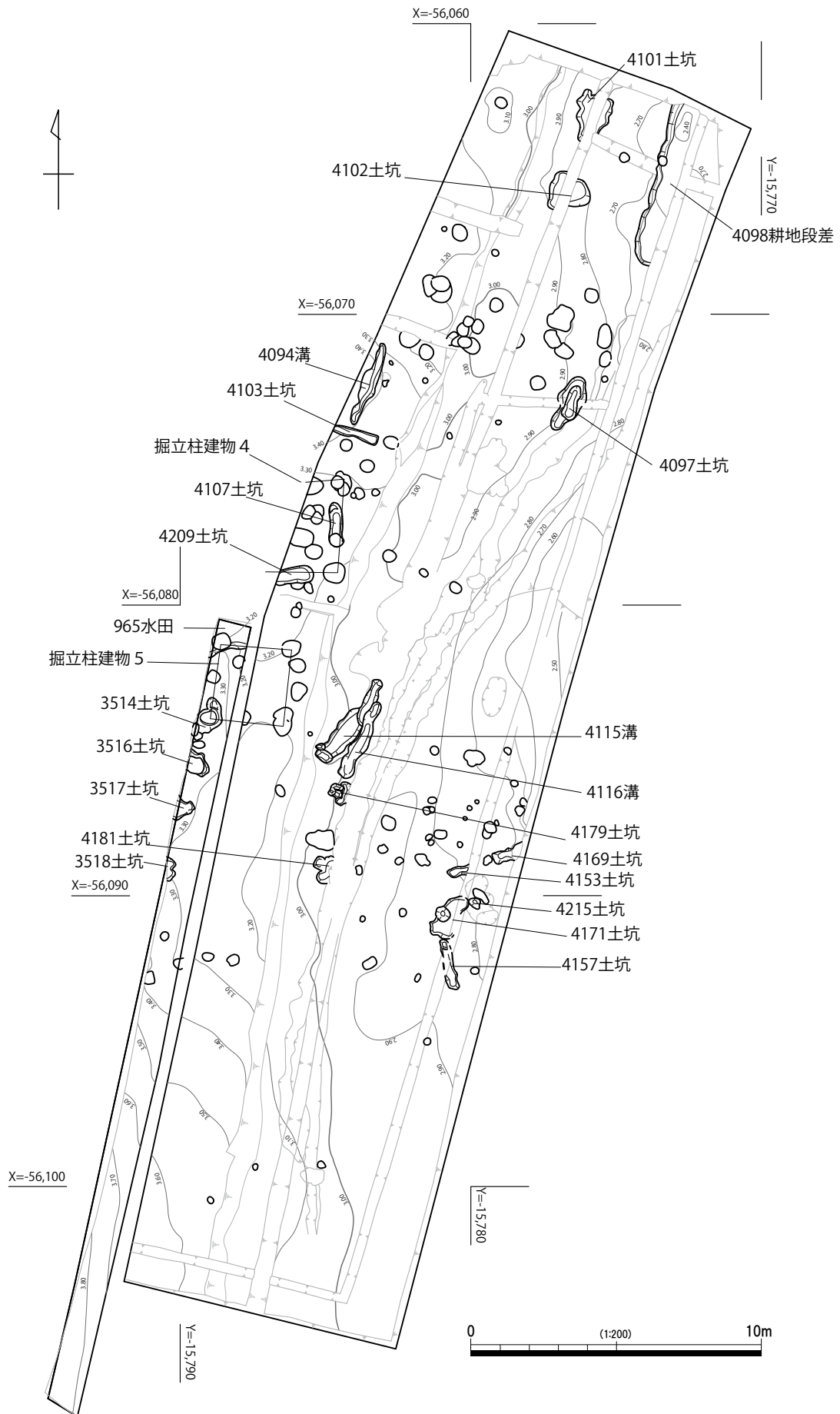
道路埋土から、古墳時代～中世の土師器や須恵器、瓦質土器、移動式かまど、土製支脚、青磁、白磁、木製品、種実、金属製品など、非常に多くの遺物が出土した。これらの遺物から、中世まで使用されたことが分かる。さらに、古墳時代の耳環2点も出土している。直接道路と関わるものではないが、交通の実態を考えるうえで興味深い。

なお、埋土から出土した種実の放射性炭素年代測定を行ったところ、13世紀後半という年代を得ており(第5章第3節)、遺物から見た年代観と矛盾しない。

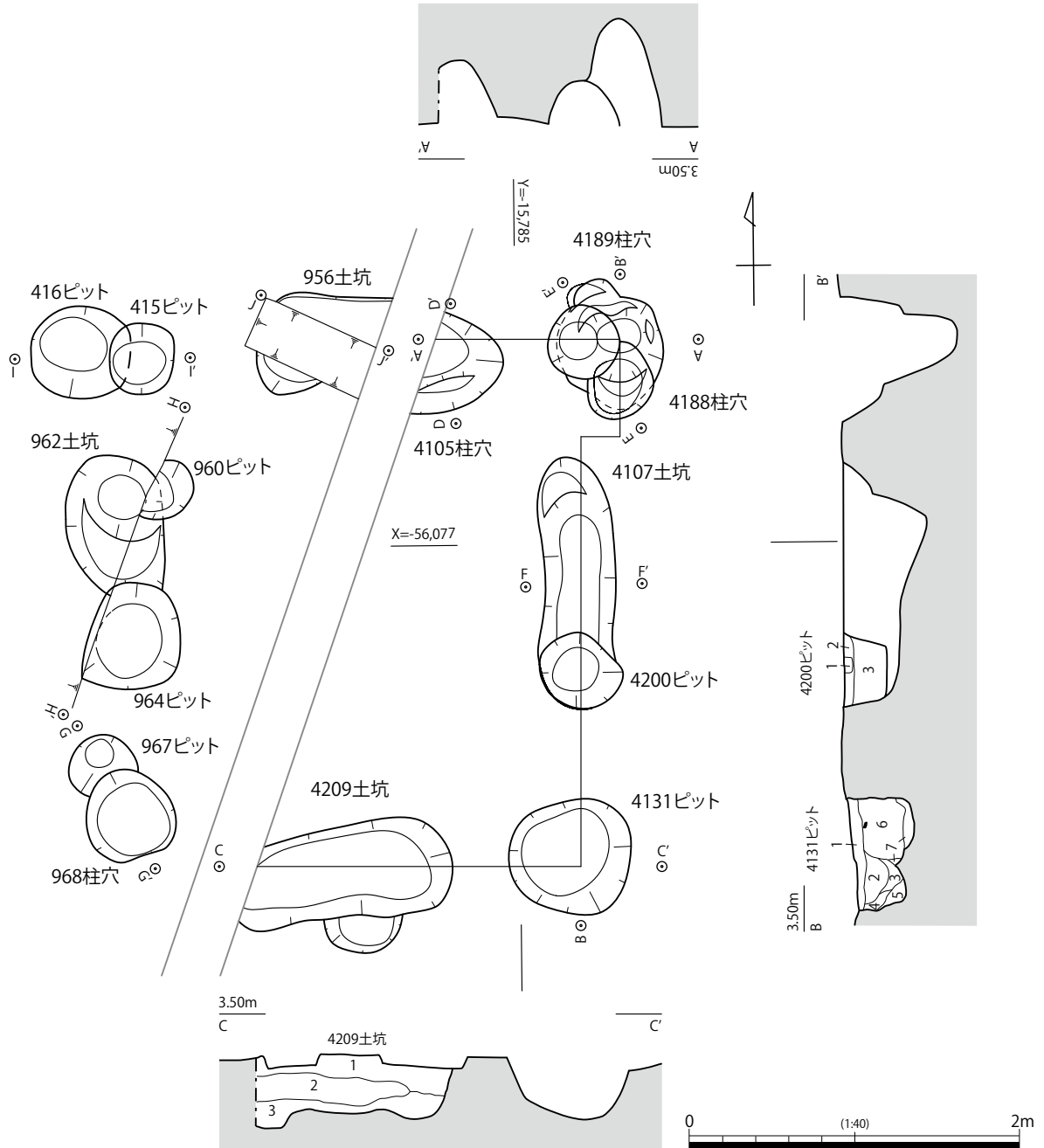
4041溝、4052溝は東側の高位部分で検出した。4052溝を4041溝が切っている。4041溝は全長3.0m、最大幅0.25m、4052溝は全長1.5m、最大幅0.25mを測る。いずれも北東方向に主軸をとるが、埋土は異なっている。類似した性格を持つものと考えられる。

水田は西側高位部の中央付近で検出した。この部分は黒褐色砂混じりシルト層が存在し、その中に砂が帯状に混じる部分が検出され、断面等から畦畔とそれに区画された水田跡と判断した。

4067水田は不整形な平行四辺形に近い形状である(第96図)。南北4.6m、東西1.7mを測る。南



第98図 4区 第3面平面図



4200ピット

- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト(木片を含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(細礫をやや多く含む。炭化物を若干含む)
- 3 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混じりシルト(細礫をやや多く含む、5Y6/3 オリーブ黄色 細砂、2.5Y5/2 暗灰黄色 シルトを粒状に10%含む。炭化物をやや多く含む)

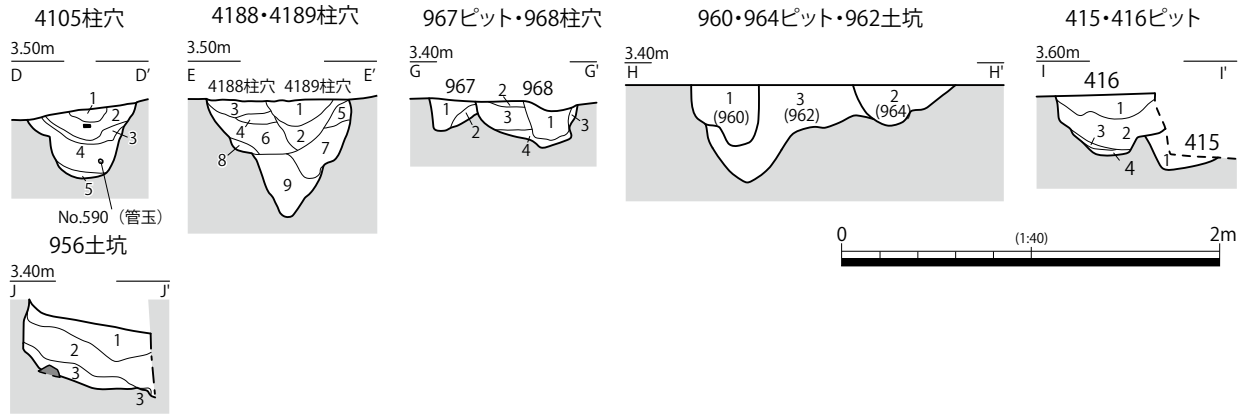
4131ピット

- 1 10YR3/1 (やや褐色) 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(シルト多め。粗砂～細礫をやや多く含む。炭化物をやや多く含む。2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂を粒状に5%含む)
- 2 10YR2/1 (やや明) 黒色 細砂～中砂混じりシルト(粗砂～細礫を若干含む。2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂を粒状(φ～2cm)に10%含む。炭化物を若干含む)
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂(10YR3/1 黒褐色 極細砂～中砂混じり砂質シルトを粒状に40%含む)
- 4 10YR2/1 (やや明) 黒色 細砂～中砂混じりシルト(砂少なめ。粗砂～細礫を若干含む。微細有機物を多く含む。10YR5/2 灰黄褐色 シルトを粒状にわずかに含む。炭化物を若干含む)
- 5 5Y5/1 灰色 極細砂～中砂(10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルトを粒状～小ブロック状に40%含む)
- 6 10YR3/1 (やや暗) 黒褐色 細砂～中砂混じり砂質シルト(微細有機物を含む。細礫～中礫を若干含む。2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂をレンズ状～粒状に5%、10YR5/2 灰黄褐色 シルトを粒状に5%含む。炭化物をわずかに含む)
- 7 10YR3/1 (やや褐色) 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(未分解有機物を若干含む。2.5Y5/1 黄灰色 ～2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂をブロック状に10%、2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂～中砂を大小ブロック状に30%含む)

4209土坑

- 1 10YR3/1 (やや褐色、暗) 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(細礫を若干含む、2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂をブロック状～レンズ状に20%(上面)、2.5Y3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルトを粒状に10%含む、炭化物をやや多く含む)
- 2 2.5Y2/1 黒色 細砂混じり極細砂～砂質シルト(2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂～中砂を中央に大ブロック状に10%含む、炭化物を若干含む)
- 3 10YR4/2 (やや灰色) 灰黄褐色 粗砂(細礫をやや多く含む、10YR3/1 (やや暗) 黒褐色 細砂混じり極細砂～砂質シルトを粒状(φ～2cm)に20%含む。炭化物をわずかに含む)

第99図 4区 第3面 掘立柱建物4平面図、断面図



4105柱穴

- 1 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 シルト混細り砂砂~中砂(細礫を若干含む)
- 2 10YR3/1(やや暗) 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(砂少なめ、粗砂~細礫を若干含む、5Y6/2 灰オリーブ色 極細砂を粒状に5%、炭化物細片をやや多く含む)
- 3 10YR3/1(やや暗、褐色) 黒褐色 シルトわずかに混り細砂~粗砂
- 4 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(砂少なめ、5Y5/2 灰オリーブ色 砂質シルトを粒状に10%、10YR3/1 黒褐色で砂の多い部分をブロック状に20%含む。炭化物を若干含む)
- 5 2.5Y2/1 黒色 極細砂~砂質シルト(10YR3/1 黒褐色 シルトわずかに混り細砂~中砂をブロック状に20%含む。未分解有機質を多く含む)

4188・4189柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混り細砂~中砂(シルト多め、粗砂を若干含む。炭化物を若干含む)
- 2 10YR2/1 黒色 極細砂~砂質シルト(5Y5/2 灰オリーブ色 細砂混りシルトを20%、同細砂~粗砂を10%、10YR3/1 黒褐色(やや暗) 砂質シルトを20%、小粒状~ブロック状に含む。炭化物を若干含む)
- 3 10YR3/1 黒褐色 シルト混り細砂~中砂(粗砂~細礫を若干含む、10YR4/2 灰黄褐色 細砂~中砂をブロック状~小粒状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR3/1(やや暗) 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(砂多め、2のシルトを粒状(φ0.5~1.5cm)に計30%含む。炭化物を若干含む)
- 5 10YR3/1(やや明、褐色) 黒褐色 シルト混り細砂~中砂(粗砂~細礫をやや多く含む、5Y5/2 灰オリーブ色 シルトを小粒状に10%含む。炭化物を若干含む)
- 6 10YR3/1 黒褐色 細砂混り砂質シルト(砂少なめ、粗砂~細礫を若干含む、5Y5/2 灰オリーブ色 シルトを小粒状に5%含む。炭化物を若干含む)
- 7 10YR3/1 黒褐色 細砂混り砂質シルト(砂やや少なめ、粗砂~細礫をわずかに含む、2.5Y2/1 黒色 砂質シルトを粒状に10%、10YR3/1 黒褐色 シルト混り細砂~中砂をブロック状~粒状に20%含む。炭化物を若干含む)
- 8 10YR3/1(やや黄色) 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂~粗砂をレンズ状に20%含む。炭化物をわずかに含む)
- 9 10YR3/1(やや暗) 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(粗砂~細礫を若干含む、7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質シルトを粒状に10%、5Y5/2 灰オリーブ色 細砂~中砂をブロック状に10%、10YR5/2 灰黄褐色 細砂~中砂をブロック状に10%含む。炭化物をわずかに含む)

967ピット

- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(粗砂~細礫若干含む、2.5Y4/1 黄灰色 シルト混り細砂~中砂(シルト少なめ)の小粒10%、10YR2/1 黒色(やや明るい)シルト(砂質、未分解有機質多く含む)の小粒5%含む、炭化物若干含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色(やや暗い) シルト混り細砂~中砂(シルト多め、2.5Y5/1(やや暗い) 黄灰色 シルトわずかに混り細砂~中砂をブロック状~粒状に60%含む)

968柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色(やや暗い) 細砂混りシルト(未分解有機質若干含む、細礫若干含む、炭化物やや多く含む、2.5Y5/1 黄灰色シルト混り細砂~細砂を大小の粒状に10%含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(粗砂~細礫若干、炭化物若干含む、2.5Y4/1 黄灰色(やや明るい)シルト混り細砂~中砂を粒状に5%含む)
- 3 10YR3/1 黒褐色 シルト混り細砂~中砂(粗砂若干含む、5Y5/1 灰色 細砂~中砂、10YR4/1 褐灰色シルトわずかに混り細砂~中砂、2.5Y5/1 黄灰色細砂混りシルトを大小のブロックで40%含む、炭化物わずかに含む)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色(やや暗い) 細砂~中砂混りシルト(粗砂若干含む、2.5Y5/2 暗灰黄色(やや灰色)シルトわずかに混り細砂~中砂をブロック状に50%含む)

960ピット

- 1 10YR2/1 黒色(やや明るい) 細砂~中砂混りシルト(砂少なめ、5Y6/2 灰オリーブ色 シルトを小さな粒状に5%含む、粗砂を薄い層状に10%含む)

964ピット

- 2 10YR2/1 黒色 細砂わずかに混りシルト(粗砂若干含む、10YR4/1 褐灰色(やや褐色)シルト混り極細砂~中砂をブロック状に5%含む、10YR3/1 黒褐色 細砂混り細砂~砂質シルトを薄い層状に10%含む)

962土坑

- 3 10YR2/1 黒色(やや暗い) 砂質シルト(有機質多く含む、10YR5/2 灰黄褐色 細砂~粗砂を層状~レンズ状に30%含む、10YR1.7/1 黒色 砂質シルトブロックを10%含む、10YR3/3 暗褐色 砂質シルト(未分解有機物多量に含む)を大小のブロック状に20%含む、炭化物若干含む)

415ピット

- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混りシルト(砂多め、粗砂~細礫若干含む、10YR4/2 灰黄褐色 細砂~中砂、2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂~中砂を大小ブロックと粒状~レンズ状に40%含む、炭化物やや多く含む)

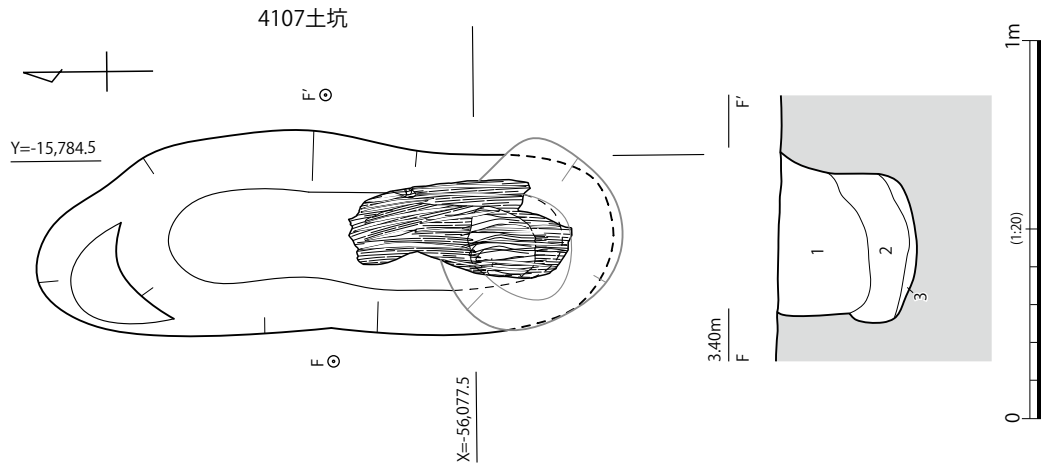
416ピット

- 1 10YR3/1 黒褐色(やや暗め) 細砂~中砂混りシルト(砂少なめ、細砂~細礫若干含む、10YR4/1 褐灰色 細砂~中砂混りシルトを大小ブロック状に30%含む、10YR3/1 黒褐色 極細砂~シルトを粒状に20%含む、炭化物やや多く含む、未分解有機物を薄い層状にやや多く含む)
- 2 2.5Y2/1 黒色 細砂~中砂わずかに混りシルト(粗砂~細礫若干含む、10YR6/3 に近い黄橙色 シルトをφ0.5cm~1cmの粒状に20%含む、下部は未分解有機物をかなり多く含む)
- 3 7.5YR2/1 黒色 極細砂~シルト(未分解有機物多く含む)
- 4 2.5Y2/1 黒色 細砂~中砂混りシルト(砂少なめ、有機物多量に含む、10YR4/1 褐灰色 シルトわずかに混り細砂~粗砂をブロック~粒状に30%含む、炭化物若干含む)

956土坑

- 1 2.5Y2/1 黒色(やや明るい) 細砂~中砂混りシルト(砂少なめ、粗砂若干含む、2.5Y4/1 黄灰色 シルト混り細砂~中砂(シルト多め)、10YR6/1 褐灰色 細砂を小ブロックで10%含む、炭化物若干含む)
- 2 2.5Y2/1 黒色(1よりかなり暗い) シルト混り極細砂(未分解有機物多量に含む、10YR4/1 褐灰色(やや褐色)シルト混り細砂~中砂(地山)、2.5Y5/1 黄灰色 極細砂~細砂(地山)、2.5Y3/1 黒褐色 シルトわずかに細砂~中砂(地山、炭化物若干含む)を厚ささまざまのレンズ状に30%含む、炭化物やや多く含む)
- 3 2.5Y3/1 黒褐色 シルトわずかに混り細砂~中砂(粗砂~細礫若干含む、炭化物若干含む、10YR3/1 黒褐色(やや暗い) 砂質シルト(未分解有機物を多量に含む)を粒状に若干含む、2.5Y5/1 黄灰色 極細砂~細砂をブロック状にわずかに含む)

第100図 4区 第3面 掘立柱建物4柱掘方断面図



4107土坑

- 1 10YR3/1(やや暗) 黒褐色 細砂混じりシルト(やや砂質、2.5Y5/1 黄灰色(やや褐色)細砂～中砂をブロック状～厚いレンズ状に30%、2.5Y2/1 黒色 砂質シルトをブロック状に20%、10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂をブロック状に10%含む。炭化物をやや多く含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 (1より暗) 細砂混じりシルト(2.5Y5/1 黄灰色 細砂～中砂をブロック状に20%(南側に顕著)、2.5Y4/1 黄灰色 細砂～中砂混じりシルトをブロック状に10%含む、炭化物を若干含む。下面に有機物層)
- 3 10YR3/1 黒褐色 細砂混じりシルト(2.5Y5/1 黄灰色 細砂～中砂をブロック状に30%、10YR4/1(やや褐色) 褐灰色 シルトを粒状に10%含む)

第 101 図 4 区 第 3 面 掘立柱建物 4 4107 土坑平面図、断面図

側を 4069 畦畔、西側を 3506 擬似畦畔、東側と北側も畦畔で区画する。水田耕土中から土師器、須恵器のほか木製杓子 W60 が出土している。

4066 水田は 4067 水田の北東に位置し、東側の大半は削平によって失われる。南北 2.1 m、東西は 0.6 m で残存部分では方形に近い形状である。

4069 畦畔は東西 2.2 m にわたって検出した。検出面での幅は 0.3m から 1.2m であるが、削平により周囲の水田との高低差はほとんど存在せず、水田に伴う取・排水口等の設備も確認できなかった。

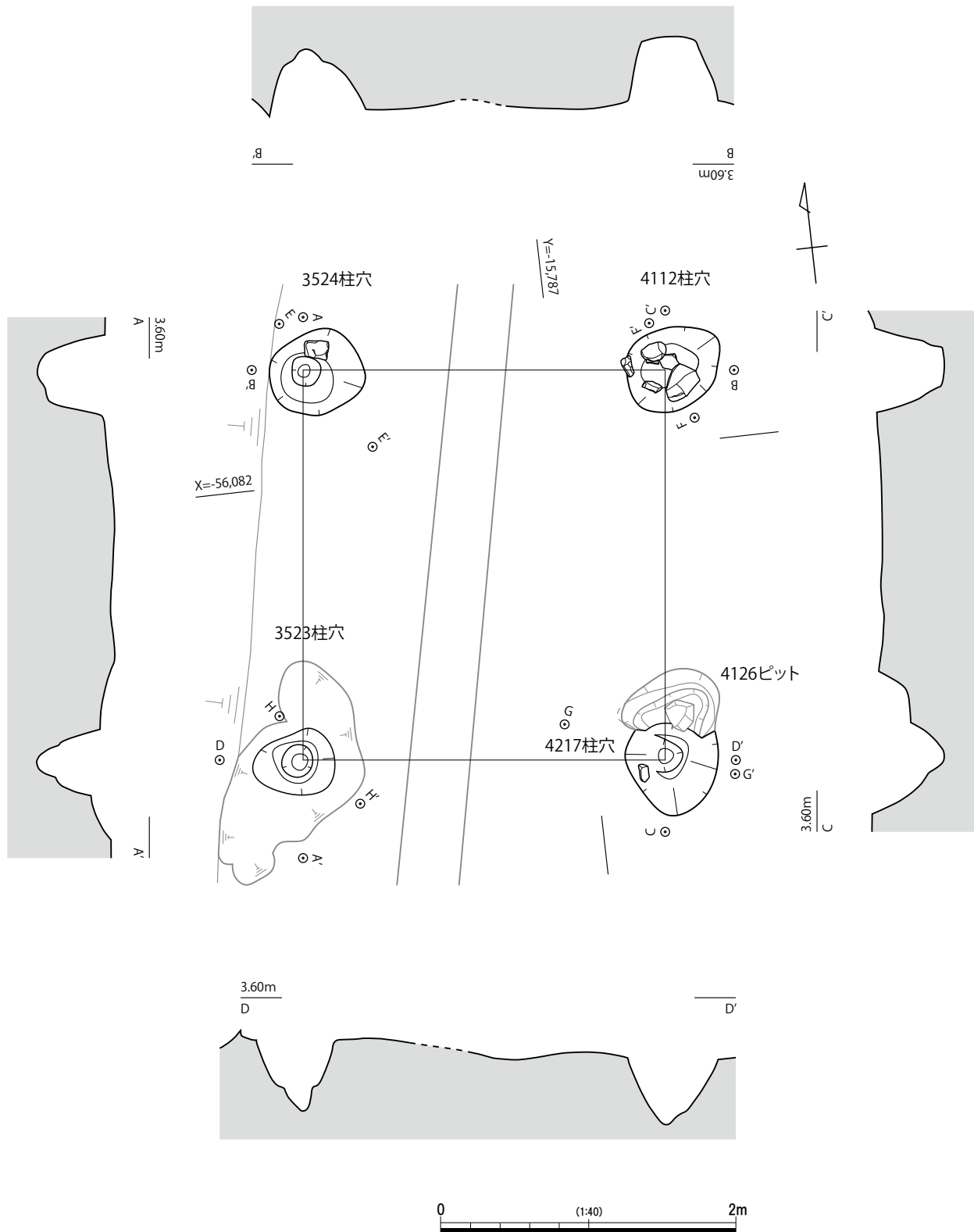
4070 土坑は 4058 道路に接して検出した不整形の土坑である。西側が暗渠により失われる。最大長 2.0 m、残存幅 1.5 m を測る (第 97 図)。埋土は大きく 2 層に分かれる。内部には最大 40cm のものを含む角礫が多数存在した。

4057 土坑、4063 土坑も 4058 道路の西側に接する。中央部分は暗渠によって破壊されている。4057 土坑は全長 2.96 m、最大幅 1.62 m で、やや角張った長楕円形を呈するようである。4063 土坑は長さ 1.9 m にわたり東側の一部が検出されたのみである。

これらの土坑の性格は不明であるが、道路跡に接していることから、何らかの関係があったことも想定できる。

ピットは西側高位部分で検出したものが大半であるが、一部東側低位部で道路跡を掘り込んでいるものが存在する。なお、高位部から低位部へと移行する部分で確認したピットは、後世の溝で切られた断面で確認したものであり、第 3 面以下に伴う可能性がある。

4059 ピットは 4058 道路跡を切って掘り込まれている。壁面はオーバーハングしており、埋土最下層は流水によるラミナを有する砂層となっている。同様の構造が認められるピットは 4151 ピット、4060 ピットなど南半にまとまっており、類似した性格が考えられる。

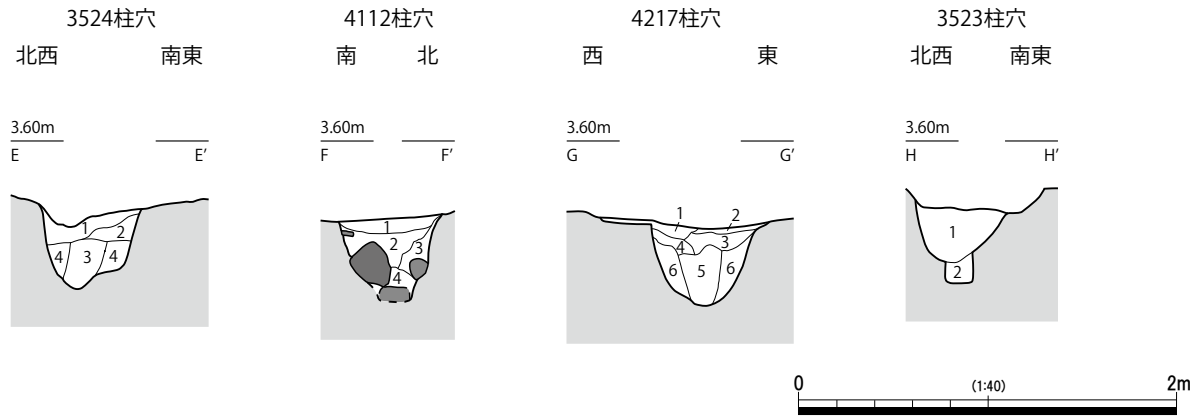


第102図 4区 第3面 掘立柱建物5平面図、断面図

(3) 第3面（第98図、PL.35・36）

第3面は、ベースとなる南壁8層および東壁35・36層の上面であるが、南半は第2面の調査時に既に上面まで掘削しており、道路跡に切られた遺構および道路跡下面で検出した遺構を第3面としている。

第3面では、4区と3区矢板沿いを合わせ、掘立柱建物2棟、耕地段差1段、溝5条、土坑13基、



3524柱穴

- 1 10YR2/1 黒色 シルト～粗砂(7.5Y4/1 灰色 粗砂(地山由来)を大小ブロック状に40%含む)
- 2 10YR1.7/1 黒色 シルト
- 3 7.5Y4/1 灰色 粗砂(10YR2/1 黒色 シルトを含む)
- 4 7.5Y4/1 灰色 シルト(10YR2/1 黒色 シルトを小ブロック状に10%含む)

4112柱穴

- 1 10YR3/2(やや暗) 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。粗砂～細礫をやや多く含む。炭化物を若干含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 極細砂～砂質シルト(細礫を若干含む。10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルトをブロック状に30%含む。炭化物を若干含む)
- 3 10YR2/1(やや明) 黒色 細砂～中砂混じり砂質シルト(2.5Y4/2 暗灰黄色 細砂を粒状にわずかに含む)
- 4 10YR3/2(やや明) 黒褐色 極細砂～中砂(わずかにシルト分が混じる。10YR3/1 黒褐色 極細砂～中砂混じりシルトを粒状～小ブロック状に40%含む)

4217柱穴

- 1 10YR3/2(やや灰色) 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂から中砂をブロック状～層状に20%含む。炭化物を若干含む)
- 2 10YR3/2(やや暗) 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(φ5cmの垂角礫を含む。炭化物をわずかに含む)
- 3 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混じりシルト(5Y5/1 灰色 極細砂～細砂を粒状に10%含む)
- 4 10YR2/1 黒色 細砂～中砂混じりシルト(5Y5/1 灰色 極細砂～細砂を大ブロック状に60%含む)
- 5 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂多め、5Y5/1 灰色 極細砂～細砂をブロック状に40%含む)
- 6 10YR2/1(やや明) 黒色 細砂～中砂混じりシルト(5Y5/1 灰色 極細砂～細砂と厚2～3cmの互層状)

3523柱穴

- 1 10YR2/1 黒色 シルト～細砂
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト(7.5Y4/1 灰色 粗砂を含む)

第 103 図 4 区 第 3 面 掘立柱建物 5、柱掘方断面図

ピット 91 基を確認した。なお、土坑のうち 2 基は掘立柱建物 4 に伴うものである。

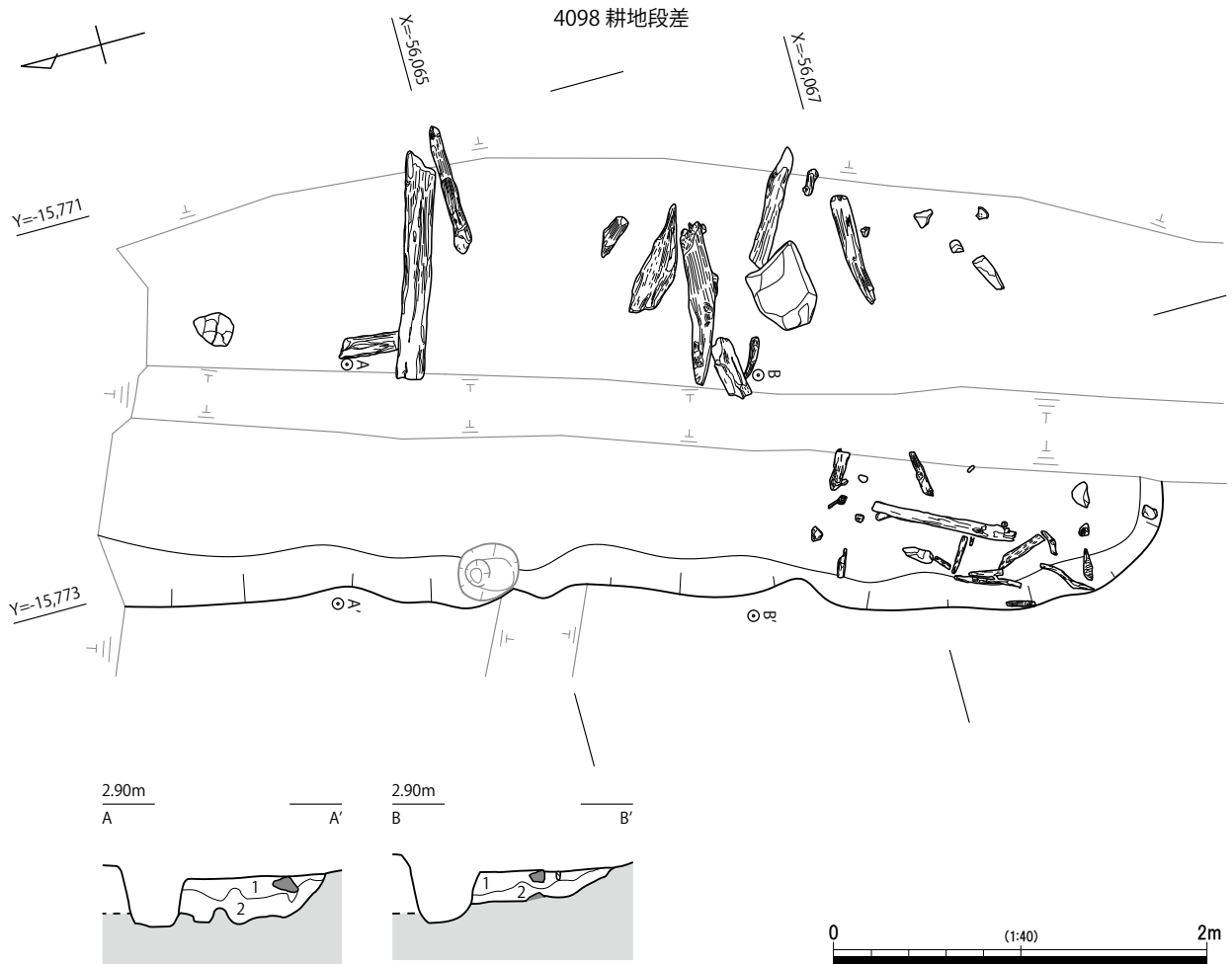
掘立柱建物

掘立柱建物 4 は西側高位部の中央付近に位置する (第 99 ～ 101 図)。隅に円形の柱穴、各辺中央に細長い土坑がある。この細長い土坑を付属するものと考え、掘立柱建物として報告する。

概ね正方位に建てられた建物で、軸は N - 1° - W をとる。東辺で両隅の柱穴と細長い土坑、北辺と南辺で隅柱と土坑をそれぞれ確認したほか、前年度調査区である 2 区でもこれに伴う柱穴等を確認している。

四隅の柱穴は比較的大型で、概ね円形を呈す。直径 0.65 ～ 0.71 m を測る。検出面からの深さは 4131 柱穴で 0.44 m、4189 柱穴で 0.7 m とやや深くなっている。ともに埋土の状況から、柱が抜き取られた可能性が考えられる。

各辺中央の土坑は、4107 土坑が全長 1.52 m、最大幅 0.53 m、4209 土坑が全長 1.3 m 以上、最大幅 0.57 m を測る。埋土は 3 層程度に分層でき、断面では柱根の痕跡は確認できない。なお、4107 土坑では底から藁のような植物が面的に検出されている。4105 土坑は 2 区 956 土坑と一体のもので、全長 1.5 m、



A-A'

- 1 2.5Y3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト（砂多め。炭化物を若干含む）
- 2 2.5Y3/1（やや明）黒褐色 細砂～中砂わずかに混じりシルト（細礫を若干含む、10YR5/3 にぶい黄褐色～10YR5/6 黄褐色砂質シルトを粒状～ブロック状に30%含む、未分解有機質を多く含む。炭化物をわずかに含む）

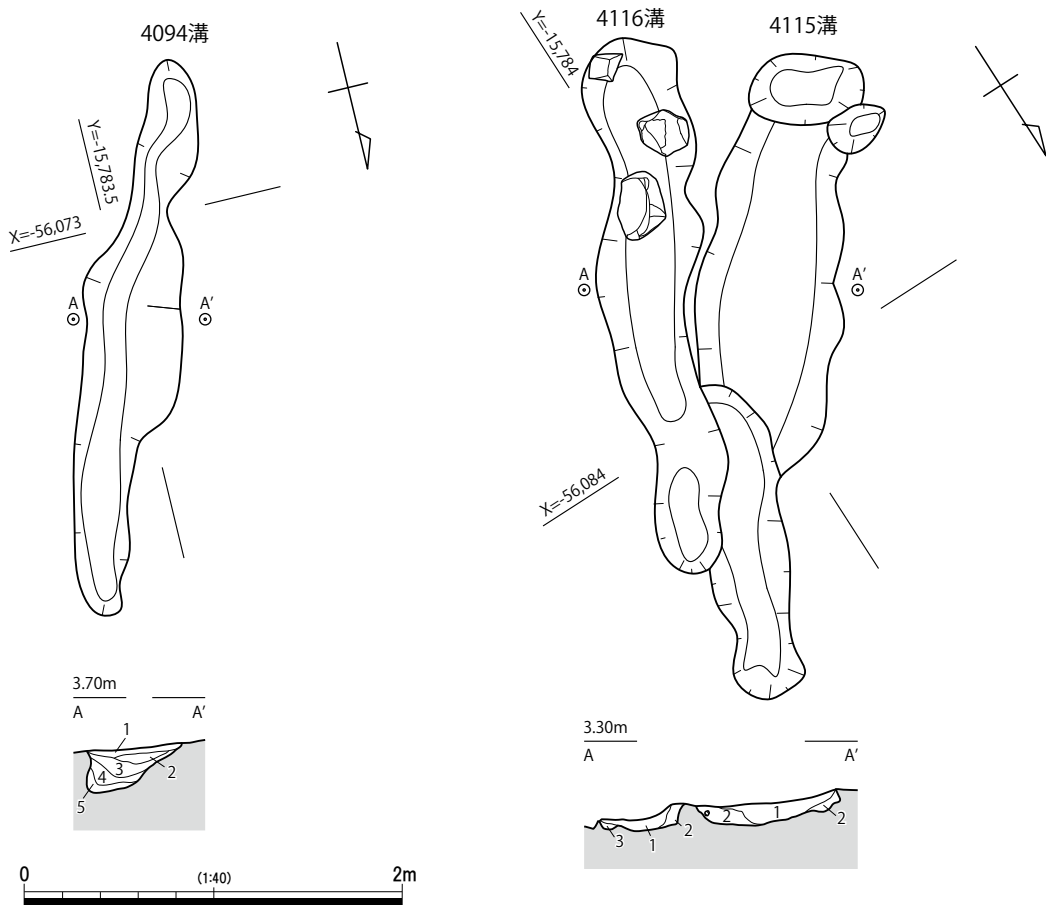
B-B'

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂（シルト多め、10YR6/6 明黄褐色 シルトを粒状（ ϕ 0.5cm）に10%、未分解有機質を多く含む。炭化物をわずかに含む。）
- 2 2.5Y3/1 黒褐色 砂質シルト（地山をブロック状に20%、未分解有機質を多く含む。炭化物をわずかに含む）

第104図 4区 第3面検出遺構平面図、断面図（1）

最大幅0.5mである。埋土下位から管玉1点が出土している。これらの土坑は、平面・断面ともに柱痕が確認できないことから、柱穴ではない可能性が高い。しかしながら、四隅の柱穴間のほぼ中央に位置していることから、建物に伴うものであったと考えている。これらの土坑が柱穴ではないとすると、四隅の柱穴間が約3.0mの1間四方の掘立柱建物となる。なお、同様に各辺の中央に細長い土坑をもつ構造の掘立柱建物は、前年度調査区の3区北東部でも存在した可能性がある。

掘立柱建物5は西側高位部で確認しており、掘立柱建物4の南西に位置する（第102、103図）。1間×1間の建物で、調査区をまたいでおり、西半の柱穴2個は3区矢板沿いで検出している。主軸はN-6°-Wをとる。柱間は南北2.6m、東西2.4mで比較的広い。柱穴は平面が不整な円形、断面はU字形を呈する。深さは0.4～0.5mでほぼ同規模である。底部は一段深くなっており、また断面では柱痕跡が認められたことから、柱の跡と考えられる。柱穴のうち、4112柱穴では掘方内から拳大～径0.2m程度の礫が多数出土した。3524および4217柱穴でも、1～数個の礫が掘方内から出土



4094溝

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(粗砂～細礫をやや多く含む。炭化物をやや多く含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 極細砂～砂質シルト (10YR3/1(やや明) 黒褐色 細砂～中砂混じりシルトを薄い層状に20%、10YR4/4 褐色シルト混じり極細砂を粒状に10%含む。炭化物を若干含む)
- 3 10YR3/1(やや暗) 黒褐色 極細砂～砂質シルト (10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルトを大小ブロック状に30%、10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト混じり極細砂を粒状にわずかに含む。炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 細砂～中砂わずかに混じりシルト (5Y5/2 灰オリーブ色 細砂～シルトを大小ブロック状に50%含む。炭化物をわずかに含む)
- 5 10YR3/1 黒褐色 極細砂～砂質シルト (5Y5/2 灰オリーブ色 細砂～砂質シルトを大ブロック状に5%、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを粒状に10%含む)

4115溝

- 1 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(細礫を若干含む。10YR3/2 黒褐色 (やや明)極細砂～中砂(粗砂～細礫を若干、炭化物を若干含む)を大小ブロック状に40%含む。未分解有機質細片を若干含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 (1より暗)シルトわずかに混じり極細砂～中砂(細礫を若干含む。木片あり。10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～中砂を粒状に5%含む)

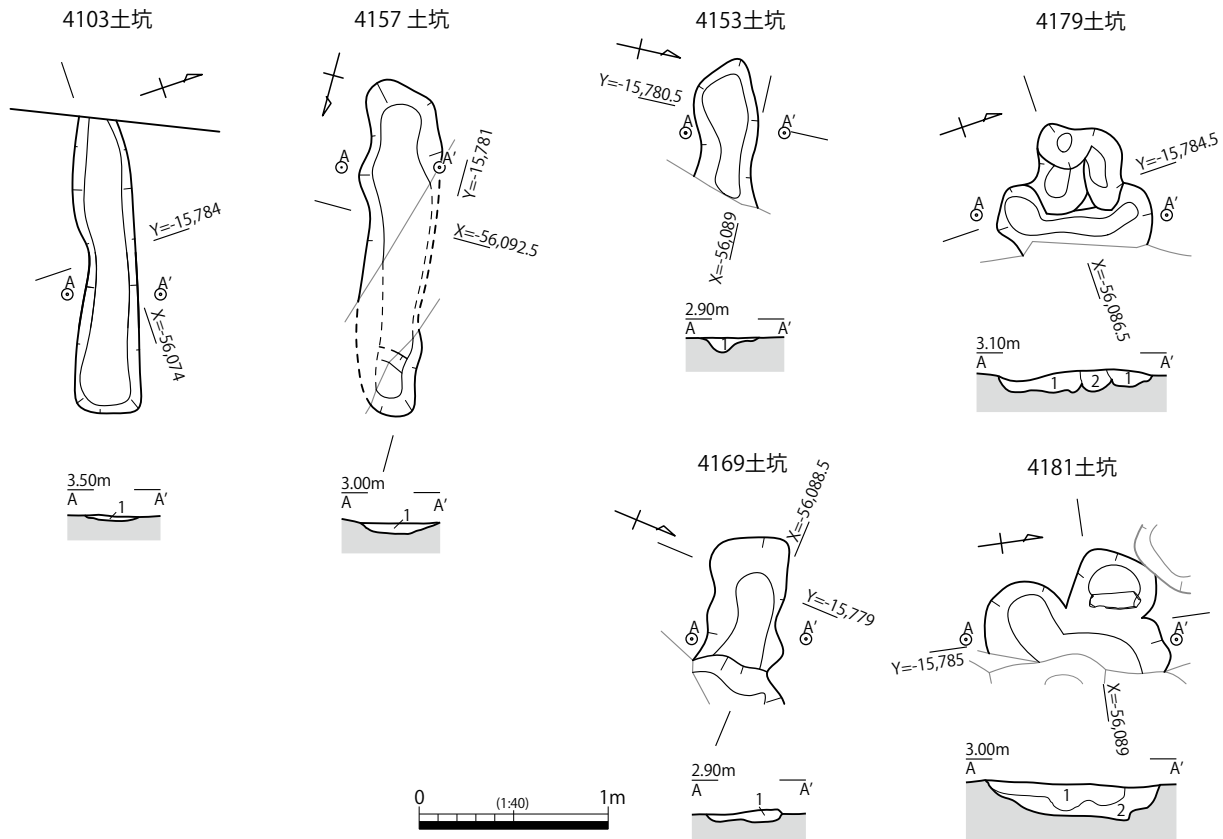
4116溝

- 1 10YR3/1(やや褐色、暗) 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(粗砂～細礫を若干含む。10YR6/3 にぶい黄橙色 細砂～中砂を層状(火災状)に10%含む。木片あり)
- 2 10YR3/2(やや灰色、暗) 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂
- 3 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂(礫を含む)

第105図 4区 第3面検出遺構平面図、断面図(2)

しており、柱を安定させるために入れたものと考えられる。

4098 耕地段差は、東側低位部の北東隅部分で検出した。検出部分で南北 5.7 m、東西 2.3 m の大きさで、最大深 0.3 m である (第 104 図)。北側および東側は調査区外へ続くほか、南辺のうち側溝より東側では肩がはっきりしない。西側の肩は比較的直線的であり、概ね方形に近い形状であったことが想定される。南側では杭が数本打ち込まれ、横にした木材を押さえているような状況が観察できた。また、側溝より東側では比較的太い木材が東西方向で横たわった状態で検出できた。内部から土器、木製品、鉄滓、白磁、石製品が出土している。



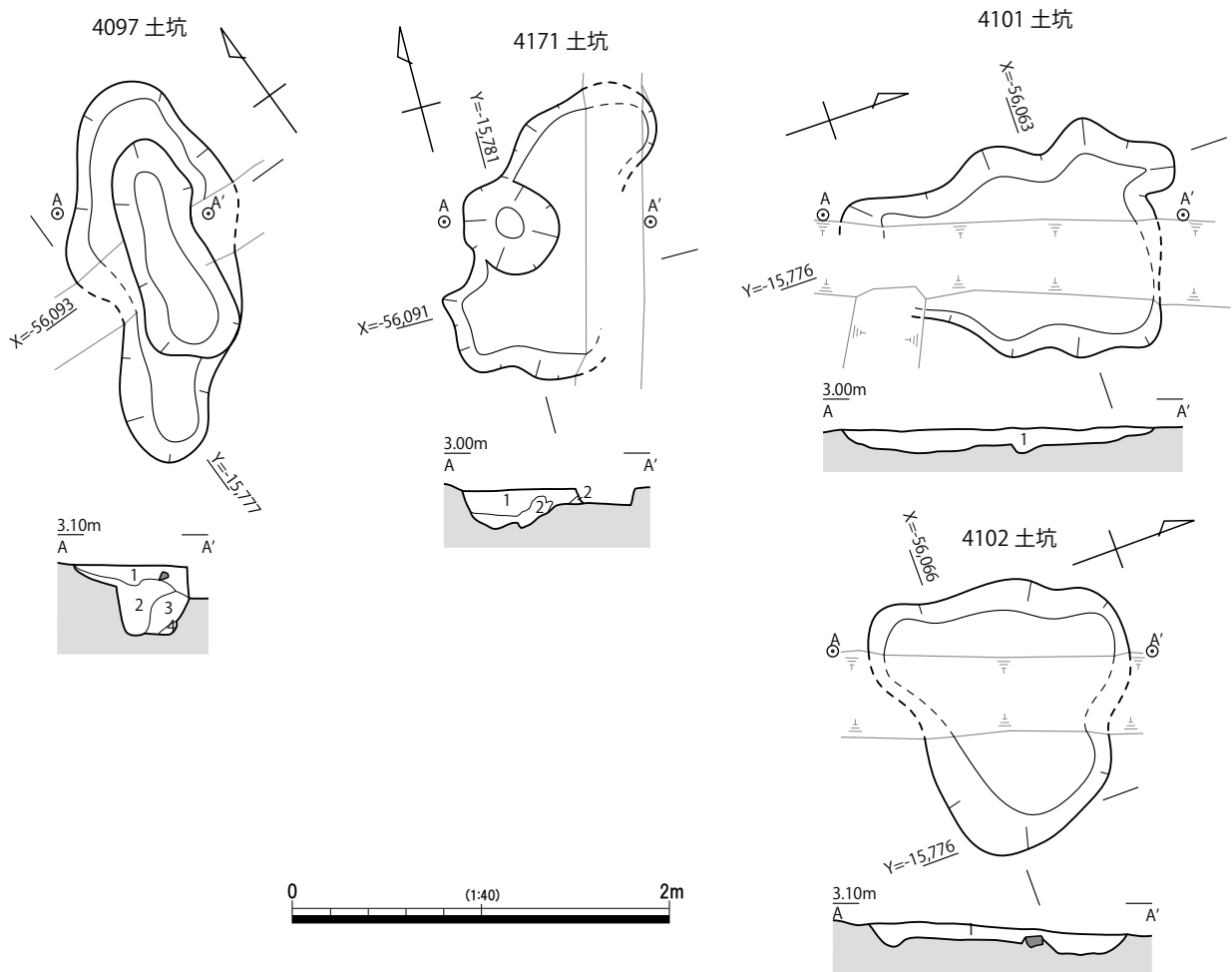
- 4103土坑
 1 10YR3/1 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(粗砂～細礫をやや多く含む)
- 4157土坑
 1 10YR3/2(やや明) 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～粗砂(砂不均質、7.5Y5/2 灰オリーブ色 極細砂を大ブロック状に30%含む)
- 4153土坑
 1 10YR3/2(やや黒灰色) 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(2.5Y6/2 灰黄色 極細砂～細砂を薄いレンズ状に10%含む)
- 4169土坑
 1 10YR2/1(やや褐色) 黒色 シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂をブロック状に50%含む)
- 4179土坑
 1 10YR3/2 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(下から10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～細砂をブロック状～火炎状に30%含む、未分解有機質を若干含む。炭化物をわずかに含む)
 2 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂(10YR3/2 黒褐色 シルトわずかに混じり細砂～中砂(未分解有機質をわずかに含む)をブロック状に30%含む)
- 4181土坑
 1 10YR3/2(やや明) 黒褐色 シルトわずかに混じり極細砂～中砂(粗砂～細礫をやや多く含む。10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～中砂を粒状～ブロック状(つぶれて層状にも)に30%含む。垂角礫(φ～5cm)若干、炭化物をわずかに含む)
 2 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(粗砂～細礫若干含む。10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～中砂をブロック状～層状に40%含む。炭化物をわずかに含む)

第106図 4区 第3面検出遺構平面図、断面図(3)

4094 溝は西側高位部で検出したもので、全長 2.96 m、最大幅 0.52 m を測る (第 105 図)。断面は台形を呈するが、東側がオーバーハングしており西側の斜面がゆるやかとなっている。溝の方向は高位部の肩にほぼ並行するほか、4041 溝・4054 溝と概ね並行しており、道路跡に関わる遺構の可能性も考えられる。

4115 溝、4116 溝は東側低位部の中央付近で検出した (第 105 図)。4115 溝はほぼ北東-南西方向に走向をとる。北側は暗渠で削平されている。全長 3.42 m、最大幅 0.8 m、断面は皿状の浅い溝である。溝底は比較的凹凸が多い。4116 溝は 4115 溝を切っているが、埋土はほぼ同稜であり、近接した時期であることがうかがえる。4115 溝同様、北端は暗渠で削平される。全長 2.86 m、最大幅 0.52 m、断面は浅い台形である。内部には拳大～人頭大の礫が入っていた。これらの溝は 4058 道路に接し、道路から高位部の谷筋へ向かう方向をとっており、何らかの関連がうかがえる。

4097 土坑はやや長い不整形な土坑である。暗渠に一部切られるが、全長 2.04 m、最大幅 0.9 m で、



4097土坑

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(粗砂～細礫を若干含む。炭化物を若干含む)
- 2 10YR3/2と10YR3/1の中間 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(細礫を若干含む。10YR5/6 黄褐色～10YR6/6 明黄褐色 極細砂～砂質シルトを大小ブロック状に20%含む)
- 3 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂少なめ。細礫を若干含む。10YR5/6 黄褐色 砂質シルトを小粒状に5%含む。炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR5/1 褐灰色、10YR6/4 にぶい黄橙色 シルトをブロック状に50%含む)

4171土坑

- 1 10YR3/2(やや暗) 黒褐色 シルト混じり細砂～粗砂(細礫若干含む。10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～中砂をブロック状に5%含む)
- 2 10YR3/2(やや暗) 黒褐色 シルト混じり細砂～粗砂(細礫若干含む。5Y5/1 灰色 極細砂～中砂(地山、不均質)を大ブロック状に50%含む)

4101土坑

- 1 10YR4/1(やや暗) 褐灰色 シルト混じり細砂～中砂(シルト少なめ。細礫を若干含む。10YR4/3にぶい黄褐色 中砂～粗砂をブロック状～層状に30%含む。炭化物を若干含む)

4102土坑

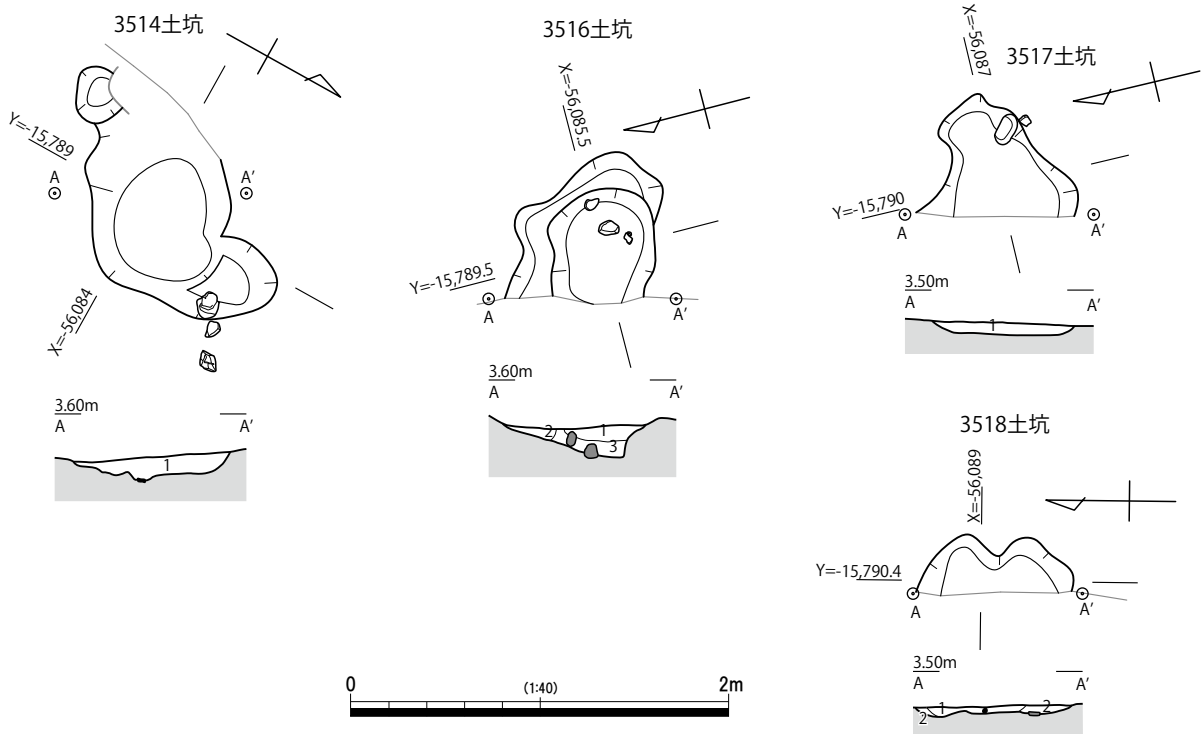
- 1 10YR3/2(やや明) 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(粗砂～細礫をやや多く含む。2.5Y8/3 淡黄色 粘土を粒状に10%、10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂～砂質シルト(地山)を粒状に10%含む。炭化物を若干含む)

第 107 図 4区 第3面検出遺構平面図、断面図(4)

底は長さ 1.24 m、最大幅 0.5 m の範囲が一段深くなっている(第 107 図)。この深い部分は断面台形を呈する。

4103 土坑は西側高位部で検出したもので、全長 1.53 m、幅 0.34 m で細長い(第 106 図)。浅い溝状の土坑で、西側高位部を横断するような向きである。

4171 土坑は東側低位部の中央南よりで検出した。低位部での遺構密集部分で検出した不整形な土坑で、東側側溝に切られている。長軸 1.7 m、幅 1.0 m 以上で、北東部分に一段深い部分が存在する(第 107 図)。



3514土坑

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト～粗砂(上面ほど粗い)

3516土坑

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト～粗砂(未分解有機物少量、炭化物少量含む。5Y5/2 灰オリーブ色シルト～中砂をブロック状に含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト～粗砂(5Y5/2 灰オリーブ色 極細砂～中砂をブロック状に含む)
- 3 10YR3/1 黒褐色 シルト～粗砂(上面ほど粒粗い)

3518土坑

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト～粗砂(2.5Y6/2 灰黄色 シルト～粗砂の極小ブロックをわずかに含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 シルト～粗砂(2.5Y6/2 灰黄色 シルト～粗砂の極小ブロックを含む)

3517土坑

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト～粗砂(2.5Y6/2 灰黄色 シルト～粗砂が下方から火炎状に入り込む)

第108図 4区 第3面検出遺構平面図、断面図(5)

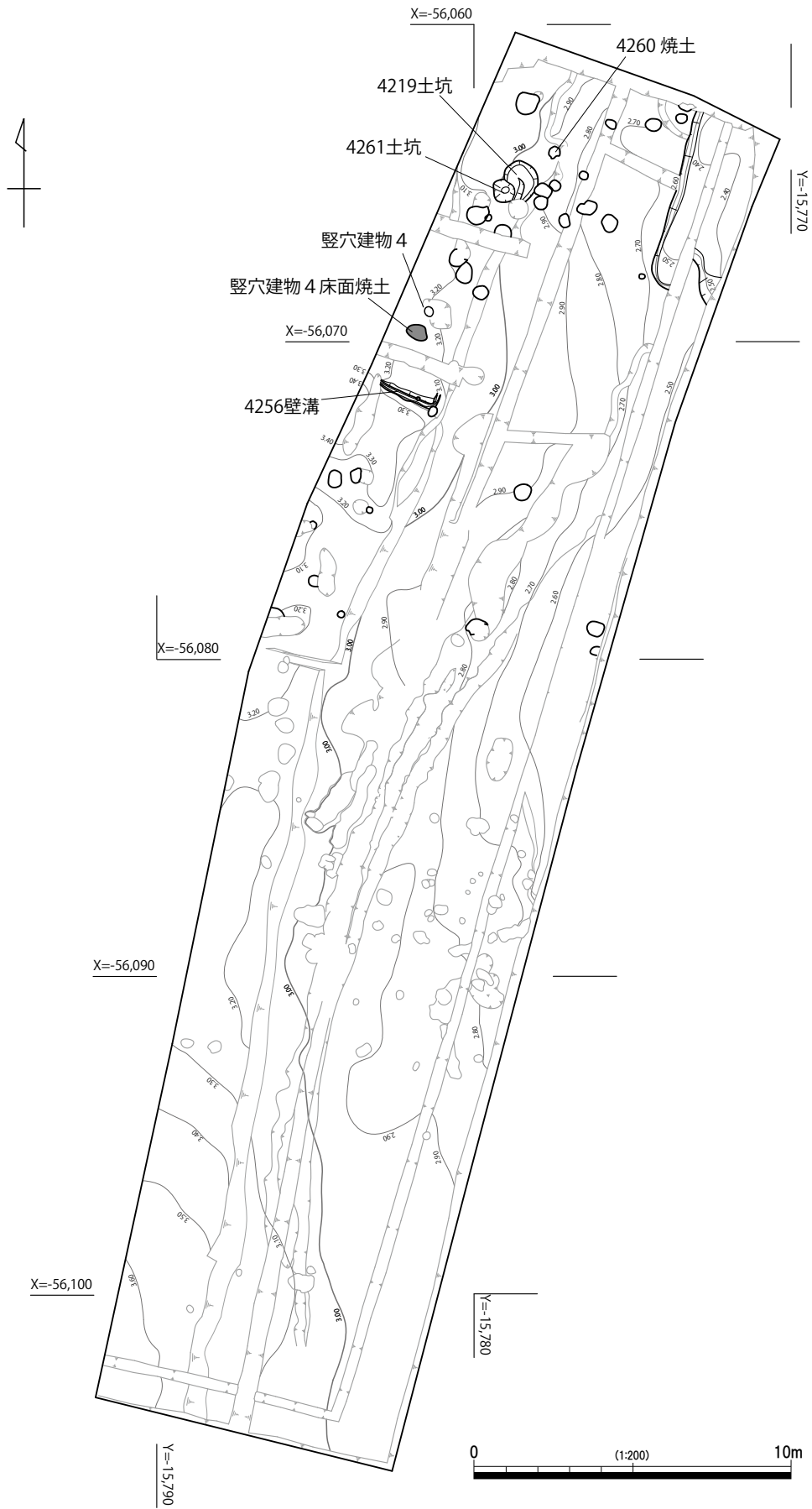
4153・4157・4169土坑は細長い土坑で、幅や深さが概ね共通する(第106図)。4153土坑と4169土坑は直線的に位置し、4157土坑がそれに直交する方向になる。埋土の状況も類似しており、これらは一体のもの可能性がある。

3514土坑～3518土坑は3区矢板沿い部分で検出したもので、昨年度調査において東壁断面で確認しており、一部プランを確認したものもある。いずれも不整形の浅い土坑である(第108図)。3514土坑は底面に3523柱穴が存在する。性格は不明だが、砂層上面が最も低くなっている部分に位置しており、水田耕作などに伴うものの可能性も考えられる。

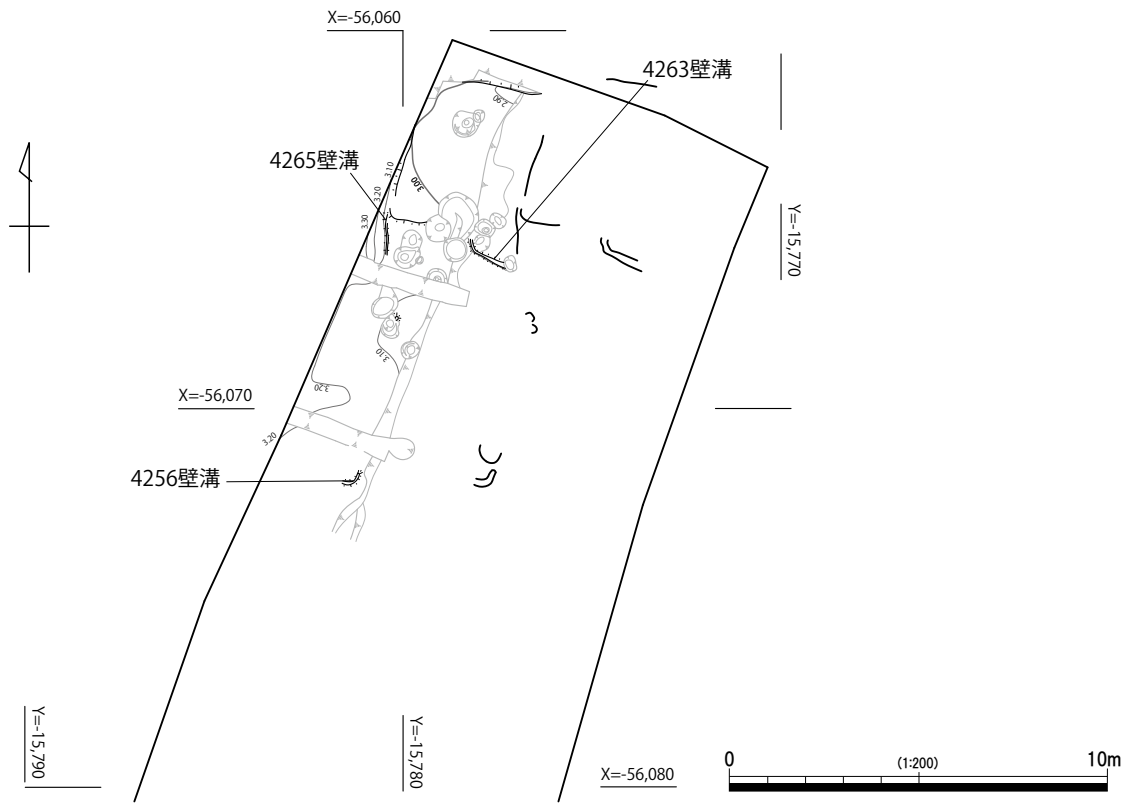
ピットについては数が多いため、法量・形態等は第9表にまとめた。ピットの中にも、断面に柱痕跡が見られるものや柱根がわずかに残るものなどが存在しており、柱穴も存在したものと考えられる。しかし、柱の並びから建物が復元できたのは前述の掘立柱建物1・2のみである。

(4) 第4面(第109～111図、PL.37～40)

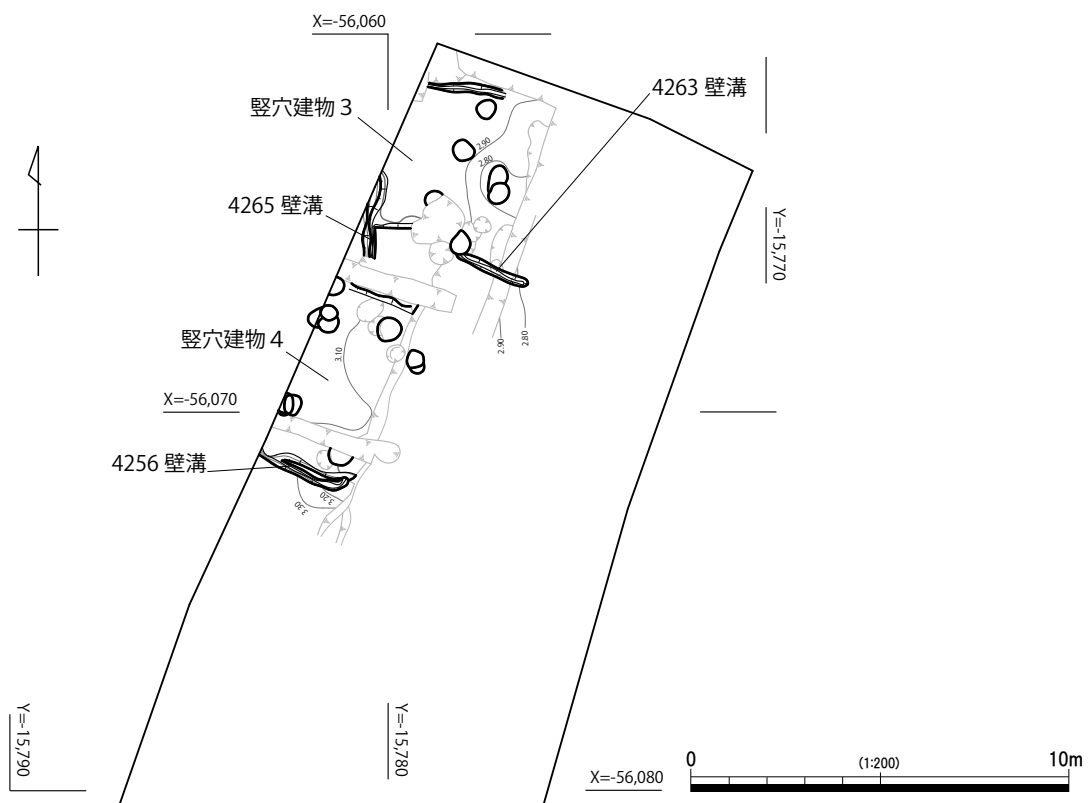
第4面では、北半部で竪穴建物2棟、土坑3基、ピット37基を確認した。なお、竪穴建物床面構築土(貼床)除去後、下面からも遺構が見つかっており、調査時には確認段階ごとに4b面、4c面



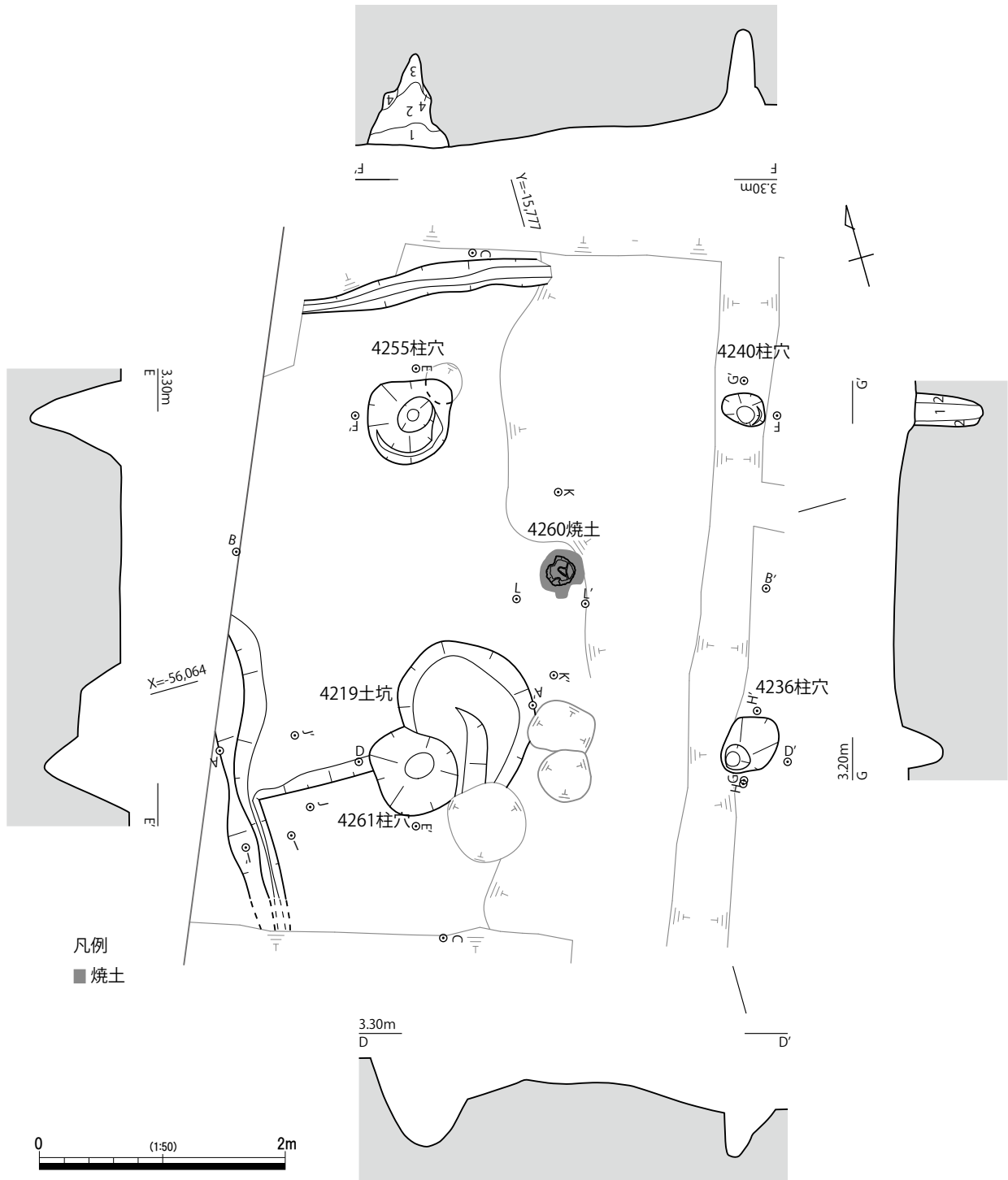
第109図 4区 第4面平面図



第110図 4区 第4b面平面図



第111図 4区 第4c面平面図



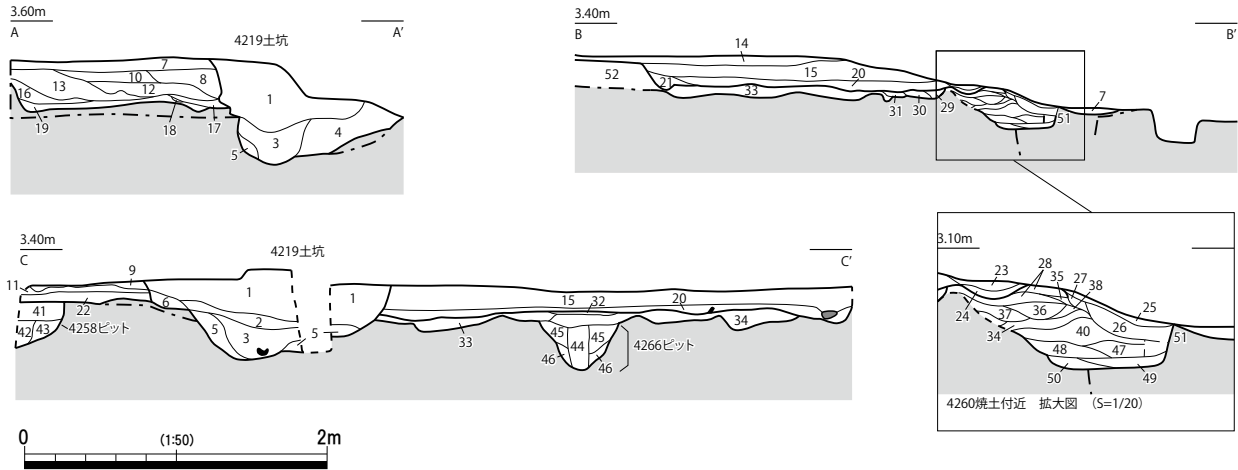
4240柱穴

- 1 10YR4/2(やや黄色) 灰黄褐色 細砂わずかに混じりシルト(軟質、炭化物をわずかに含む)
- 2 10YR4/1(やや褐色) 褐灰色 極細砂～砂質シルト(10YR5/6 黄褐色 極細砂～砂質シルトをブロック状に30%含む)

4255柱穴

- 1 10YR4/2(やや灰色) 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂少なめ、10YR6/4 にぶい黄橙色 極細砂～砂質シルトをブロック状に10%、10YR3/1(やや暗) 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(シルト多め)を粒状に5%含む、炭化物を若干含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 細砂わずかに混じりシルト(10YR5/6 黄褐色～10YR5/8 黄褐色 砂質シルト～極細砂(地山)をブロック状(大きめ)に40%含む。炭化物を若干含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じり砂質シルト(地山をブロック状に20%含む)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂～砂質シルト(地山をブロック状に50%含む)

第 112 図 4区 竪穴建物3平面図、断面図

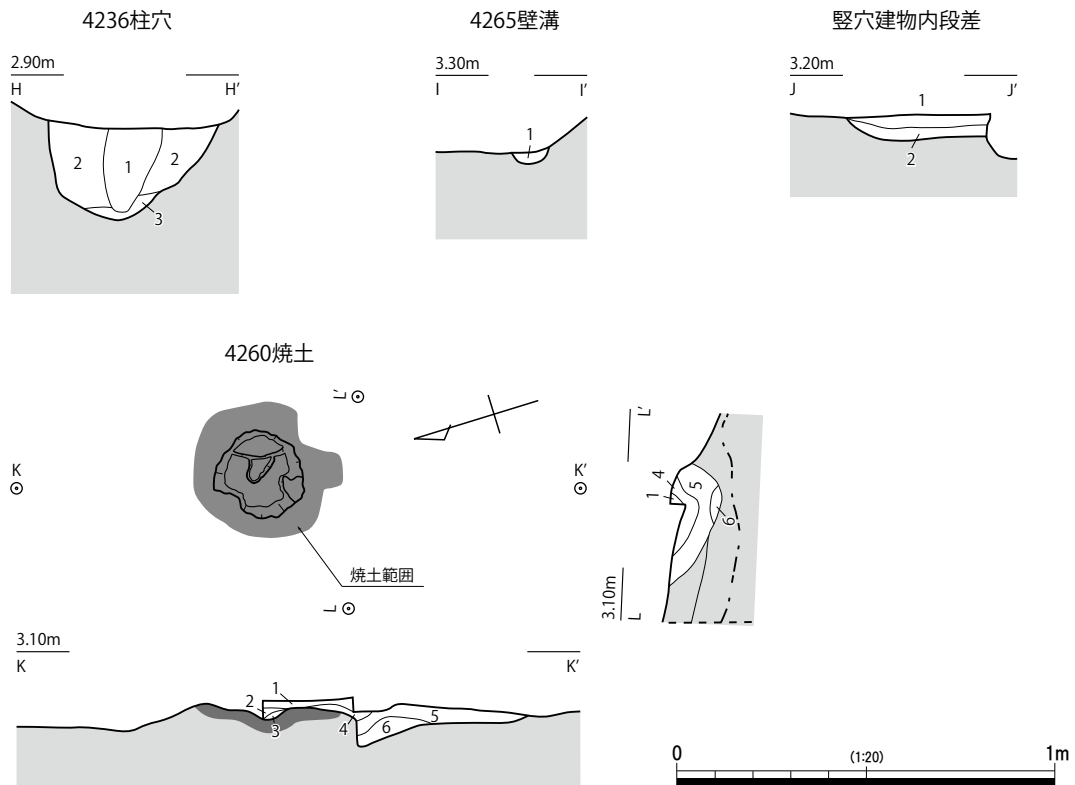


竪穴建物3

- 1 10YR4/1 (やや褐色) 褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂少なめ、10YR5/4 にぶい黄褐色～10YR5/6 黄褐色 極細砂～砂質シルトをブロック状に20%含む。10YR4/4 褐色 極細砂を20%含む。2.5Y 8/2 灰白色 極細砂を粒状に10%、2.5Y3/1 黒褐色 シルトを粒状に5%含む。炭化物を若干含む)
- 2 10YR3/1 (やや明るい) 黒褐色 細砂混じり砂質シルト(10YR5/6 黄褐色 砂質シルトを大小ブロック状に30%含む。炭化物を若干(大きめ)含む)
- 3 10YR4/1 (やや暗い褐色) 褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR4/6 褐色 砂質シルトをφ2～3cmのブロック状～粒状に20%、10YR3/1 黒褐色細砂混じり砂質シルトをブロック状に20%含む。炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR4/1 (やや暗) 褐色 細砂～中砂混じり砂質シルト(砂少、10YR5/6 黄褐色 砂質シルトを40%(大小、2層よりも多め) 10YR3/1 黒褐色 砂質シルトを粒状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
- 5 10YR4/1 (やや褐色) 褐色シルト(10YR5/6 黄褐色 砂質シルトをブロック状に60%含む)
- 6 10YR3/2 (やや明) 黒褐色 細砂混じりシルト(砂少なめ、10YR7/6 明黄褐色～10YR8/4 浅黄褐色 砂質シルトをブロック～粒状に30%、10YR3/1 黒褐色 シルト混じり細砂～中砂(シルト多)を粒状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
- 7 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～中砂(粗砂～細礫を若干、炭をわずかに含む)
- 8 10YR4/2 (やや灰色) 灰黄褐色 細砂混じり砂質シルト(10YR8/3 浅黄褐色 シルトを粒状に20%、10YR3/2 黒褐色 細砂～中砂を粒～レンズ状に10%、10YR4/4 褐色 極細砂を粒状に10%含む。炭化物を若干含む)
- 9 10YR4/2 (やや暗) 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(粗砂～細礫を若干、炭化物をわずかに含む)
- 10 10YR3/1 (やや明) 黒褐色 極細砂～細砂混じりシルト(砂少、10YR8/3 浅黄褐色 シルトを粒状に10%、10YR3/2 黒褐色 シルトを粒状に5%含む。炭を若干含(6層より少))
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR8/3 浅黄褐色 シルトをブロック状に50%、10YR6/4 にぶい黄褐色 極細砂を粒状～レンズ状に20%含む。炭をわずかに含む)
- 12 10YR4/1 (やや褐色) 褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂少、10YR8/3 浅黄褐色シルトを粒状に40%、炭化物わずか)
- 13 10YR4/2 (やや暗) 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR4/4 褐色 極細砂を20%、10YR4/4 褐色 砂質シルトを20%、粒～レンズ状に含む、10YR2/1 黒色 極細砂～砂質シルトをレンズ状に5%含む。炭化物、細礫をわずかに含む)
- 14 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR8/2 灰白色 シルトを粒状に20%、10YR3/4 暗褐色 シルトを10%含む。炭化物を若干含む(小片))
- 15 10YR4/2 (やや灰色) 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR4/4 褐色シルトを粒状に10%、10YR3/1 黒褐色 極細砂～極粗砂を粒～レンズ状に10%、10YR8/2 灰白色シルトを小粒状に5%、10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂を5%含む。炭化物を若干含む)
- 16 10YR4/1 (やや褐色) 褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂少、10YR4/4 褐色 砂質シルト 10YR6/6 明黄褐色 極細砂などをφ～5cmの粒状に30%含む。炭化物小片をわずかに含む)
- 17 10YR4/1 (やや褐色) 褐色 細砂混じり砂質シルト(10YR5/6 黄褐色 極細砂をφ～1cmの粒状に30%、10YR3/2 黒褐色(やや暗) 細砂～中砂混じりシルトを粒状に10%含む)
- 18 10YR4/2 (やや灰色) 灰黄褐色 砂質シルト(10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト～極細砂を粒状に30%含む。炭化物をやや多く含む。(板状))
- 19 10YR3/1 黒褐色 細砂～中砂混じりシルト(砂少、10YR5/6 黄褐色～10YR6/6 明黄褐色 極細砂をブロック状～レンズ上に20%、10YR4/4 (やや黒い) 褐色砂質シルトを10%、10YR3/1 黒褐色 シルト混じり極細砂を5%、10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルトをブロック状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
- 20 10YR4/1 (やや褐色) 褐色 細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト、10YR8/4 浅黄褐色 シルトを大小ブロック状～レンズ状に40%含む。炭化物を若干含む)
- 21 10YR4/1 (やや褐色) 褐色 砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色(やや赤み) 砂質シルトを粒状に40%含む。炭化物をやや多く含む)
- 22 10YR3/1 (やや明、褐色) 黒褐色 砂質シルト(10YR8/3 浅黄褐色 シルトを粒状に(φ0.5～2cm)20%、10YR3/1 黒褐色 シルトを20%含む。炭化物を若干含む)
- 23 10YR4/1 (やや明) 褐色 砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂～砂質シルト を層～ブロック状に40%含む)
- 24 10YR4/1 (やや明) 褐色 砂質シルト(炭化物を若干含む)
- 25 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト (砂多め)
- 26 10YR4/2 (やや灰色) 灰黄褐色 砂質シルト(10YR7/4 にぶい黄褐色～10YR8/1 灰白色 シルトを粒状に20%含む)
- 27 10YR3/2 黒褐色 細砂混じり砂質シルト(砂少。炭化物小片をわずかに含む)
- 28 焼土(7.5YR5/6 明褐色～5YR5/6 明赤褐色)
- 29 13にほぼ同じ(炭化物(微細)を若干含む)
- 30 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じり砂質シルト(10YR6/4 にぶい黄褐色 砂質シルトを粒状に10%含む)
- 31 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト
- 32 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト(わずかに細砂混じり)
- 33 10YR4/2 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR6/4 にぶい黄褐色～2.5Y 8/4 淡黄色 砂質シルトを粒状に30%含む)
- 34 10YR4/2 灰黄褐色 細砂混じり砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト、2.5Y6/6 明黄褐色 シルトを大小ブロック～小粒状に30%含む。炭をわずかに含む)
- 35 7.5YR3/1 (やや明) 黒褐色 シルト(2.5Y8/3 淡黄色 シルトを粒状～ブロック状に30%含む)
- 36 10YR4/2(やや暗、灰色) 灰黄褐色 細砂わずかに混じりシルト(10YR4/4(やや明) 褐色 極細砂～細砂(焼土?)を小粒状に30%、10YR8/3 浅黄褐色 シルトを粒状に20%含む)
- 37 10YR3/1(やや明、褐色) 黒褐色 極細砂～細砂混じりシルト(砂少なめ、2.5Y6/8～2.5Y7/6 明黄褐色 極細砂～砂質シルトを粒状に10%、10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂～細砂(焼土?)を粒状に20～30%含む。炭化物(φ～1cm)を多く含む)
- 38 10YR4/2(やや褐色) 灰黄褐色 細砂混じりシルト(砂少なめ、炭化物をわずかに含む)
- 39 (注記なし)
- 40 10YR3/1(やや明、褐色) 黒褐色 細砂混じり砂質シルト(10YR6/6 明黄褐色 極細砂～細砂、5Y7/6 黄色 砂質シルトを粒状(φ～0.5cm)に30%含む。炭化物を若干含む)
- 41 10YR4/2 (やや暗) 灰黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(粗砂～細礫を若干、炭化物をわずかに含む)
- 42 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂～中砂混じりシルト(10YR8/3 浅黄褐色 シルトをブロック状に50%、10YR6/4 にぶい黄褐色 極細砂を粒状～レンズ状に20%含む。炭をわずかに含む)
- 43 10YR4/1 (やや暗、褐色) 褐色 細砂混じり砂質シルト(2.5Y6/6 明黄褐色～2.5Y6/4 にぶい黄色 砂質シルトを大きなブロック状に40%含む。炭化物をやや多く含む)
- 44 10YR4/1 褐色 砂質シルト(10YR6/4 にぶい黄褐色～10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトを粒状に10%含む。炭をわずかに含む)
- 45 10YR4/1 (やや灰色) 褐色 細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/6 黄褐色 砂質シルトを大小ブロック状に20%含む。炭化物を若干含む)
- 46 10YR4/1 褐色 砂質シルト(5Y6/6 オリーブ色シルトと10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト(混じり合)をブロック状に50%含む)
- 47 10YR4/2(やや灰色) 灰黄褐色 細砂混じりシルト(砂少なめ、10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトをレンズ状～粒状(2cm以上が主)に30%含む。炭化物を若干含む)
- 48 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 砂質シルト(10YR7/6 明黄褐色 砂質シルト、同6/6 明黄褐色 砂質シルト～極細砂を粒状～薄いレンズ状(φ～1cm)に10%含む。炭化物を多く含む)
- 49 10YR3/2(やや赤み) 黒褐色 極細砂混じり砂質シルト(炭化物、焼土極多量に含む)
- 50 10YR4/1(やや褐色) 褐色 砂質シルト(10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂～砂質シルトを粒状に5%、2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルトを大小粒状に30%含む。炭化物をわずかに含む)
- 51 10YR4/2 (やや灰色) 灰黄褐色 砂質シルト(10YR7/4 にぶい黄褐色～10YR8/1 灰白色 シルトを粒状に20%含む。層境に火を受けた痕がある)
- 52 10YR4/1 (やや暗) 褐色 砂質シルト

第113図 4区 竪穴建物3土層断面図

第IV章 調査の成果



4236柱穴

- 1 2.5Y3/1 黒褐色 シルト(上面は4/1でかなり軟質)
- 2 10YR4/1(やや暗) 褐灰色 細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR6/6 明黄褐色 砂質シルト(地山)を粒状~ブロック状に40%含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂~砂質シルト(地山をブロック状に20%含む(2よりしまりあり))

4265壁溝

- 1 10YR4/1(やや黄色) 褐灰色 細砂~中砂わずかに混シルト(10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを10%、5Y6/3 オリーブ黄色 砂質シルト~細砂を5%、7.5GY5/1 緑灰色 シルトを10%、粒状に含む)

竪穴建物内段差

- 1 10YR4/1(やや褐色) 褐灰色 細砂~中砂混シルト(砂少なめ、10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状(φ0.5~1cm主、φ2cmわずかに30%含む、炭化物を若干含む)
- 2 10YR3/1(やや明、褐色) 黒褐色 細砂混砂質シルト(10YR6/6 明黄褐色~5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトを大小ブロック状~粒状に50%含む、炭化物をわずかに含む)

4260焼土

- 1 23層と同じ
- 2 24層と同じ
- 3 10YR4/3(やや暗) にぶい黄褐色 細砂混じり砂質シルト(微細炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト(砂少なめ、10YR4/6 褐色 砂質シルトを粒(大)状に30%含む。上面に炭化物層)
- 5 10YR3/1 黒褐色 砂質シルト(10YR7/2 にぶい黄褐色 シルトを粒状に10%、10YR2/1 黒色 極細砂~砂質シルトをレンズ状に10%含む。炭化物(小片~柱状、層状になる)を若干含む)
- 6 10YR4/1(やや暗、褐色) 褐灰色 シルト(2.5Y 8/4 淡黄色 シルト、10YR4/4 褐色 シルト(地山由来)を粒状(φ0.5~2cm)に30%含む)

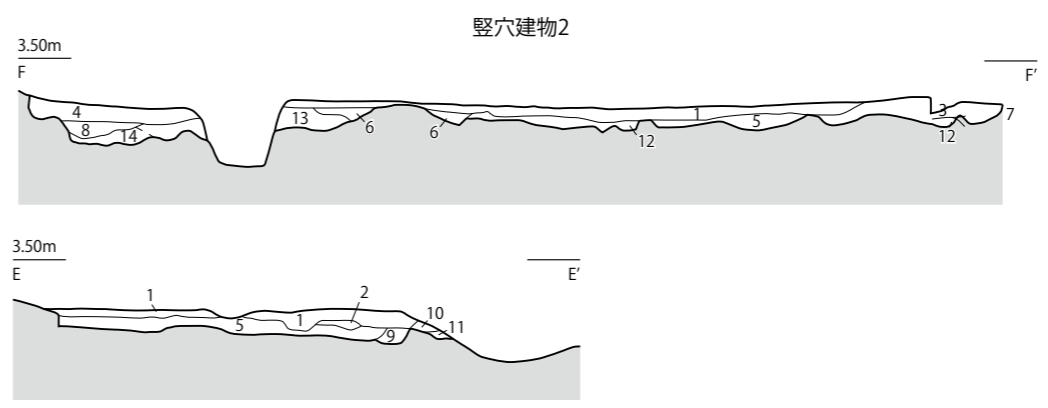
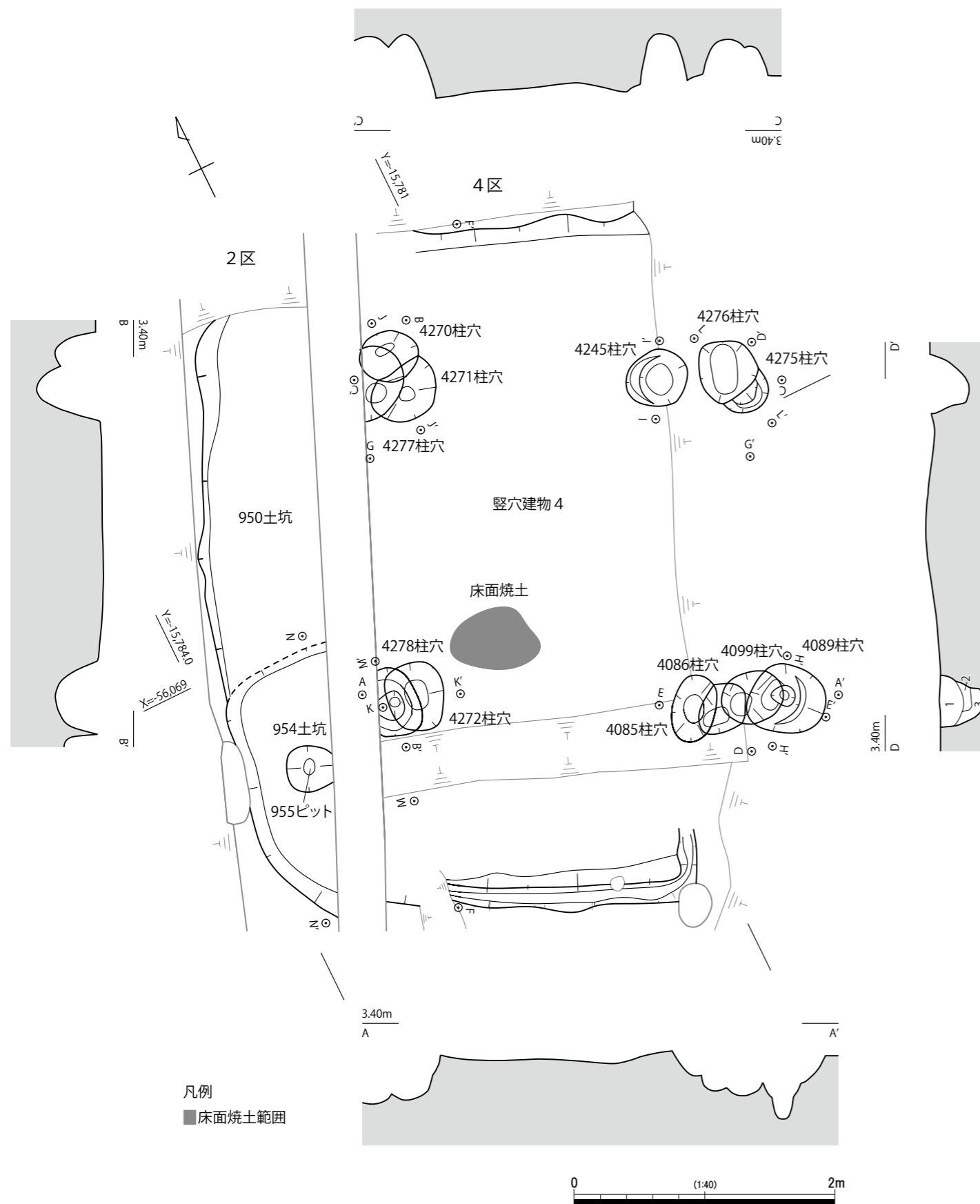
第 114 図 4区 竪穴建物3 平面図、断面図

として調査を行ったが、本報告では第4面下層としてまとめている。

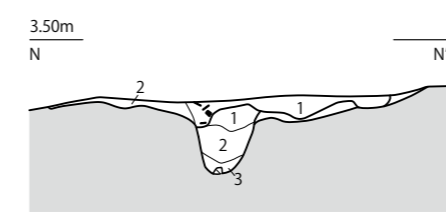
竪穴建物3 (第112~114図)

竪穴建物3は調査区北端の西側高位部で検出したもので、かろうじて竪穴掘方西辺の一部が残る。東側半分強が後世の削平で失われており、この部分では掘方も残存せず、支柱穴2基の検出にとどまる。また、西北部は調査区外に延びている。こうしたことから、平面的に全容を把握するのに難渋し、竪穴建物であることを認識したのは掘り込みの推定中央に炉跡が存在することを確認してからである。

掘方は西辺のみ、延長1m程度のみを確認した。また、北辺では壁溝と考えられる溝を確認しており、



- 縦穴建物4
- 10YR4/1 褐灰色(やや褐色)細砂混じりシルト(10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを ϕ 0.5cm~2cmの粒状に30% 10YR3/1 黒褐色(やや暗色)シルト混じり細砂~中砂(シルト多め)を ϕ 1cmの粒状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR3/1 黒褐色シルト混じり細砂~中砂(シルト多め、10YR5/4 にぶい黄褐色~10YR8/4 浅黄褐色 砂質シルトをブロック状に40%含む)
 - 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂~極細砂混じりシルト(10YR6/1 褐灰色~10YR7/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状に10%、10YR3/1 黒褐色 細・中砂混じりシルトを粒状に5%含む。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR3/1 黒褐色(やや明) 細砂~中砂混じりシルト(砂少なめ。細礫を若干含む。炭化物を若干含む)
 - 10YR4/1 褐灰色(やや黄)砂質シルト(10YR5/6 黄褐色~10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状(ϕ 0.5~2cm)に30%含む。炭化物を若干含む)
 - 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混じりシルト(10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルトをブロック状に40%含む)
 - 10YR3/1 黒褐色(やや明)砂質シルト(10YR6/6 明黄褐色~10YR7/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状に40%、10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混じりシルトを粒状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR3/1 黒褐色 粗砂わずかに混じりシルト(7.5GY7/1 明緑灰色 極細砂~シルトをレンズ状に50%、10YR6/4 にぶい黄褐色~2.5Y5/4 黄褐色 砂質シルトを小粒状に10%含む。炭化物を若干含む(8より多い))
 - 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色~10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状に30%、10YR3/1 黒褐色シルトを粒状に30%含む。炭化物をわずかに含む)
 - 10YR4/1 褐灰色 細砂混じりシルト(10YR8/2 灰白色シルトを粒状~ブロック状に70%含む)
 - 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト(10YR8/2 灰白色シルトを粒状に5%、10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂~シルトを粒状に10%含む)
 - 10YR4/1 褐灰色(やや暗、褐色)細砂混じりシルト(10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルトを大小粒状に10%、10YR5/4 にぶい黄褐色を ϕ 0.5~1cmの粒状に10%含む。炭化物を若干含む)
 - 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混じりシルト(地山(10YR6/4 にぶい黄褐色 砂質シルト。2.5Y6/3 にぶい黄色 極細砂。10YR4/2 灰黄褐色シルト)を ϕ 0.5~1cmの粒状に50%含む。炭化物を若干含む)
 - 10YR4/1 褐灰色(やや暗)細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/6 黄褐色 砂質シルト、5GY6/1 オリーブ灰色 極細砂~砂質シルト、10YR8/2 灰白色シルトを大小ブロック状に50%含む。炭化物をわずかに含む)



- 954土坑
- 10YR3/1黒褐色(やや明るい) 細砂わずかに混シルト、5Y4/1灰色(やや明るい) 細砂混シルト(地山由来)、10Y6/1灰色シルト混じり 極細砂~細砂(同)を小粒状に10%含む、土器片含む、炭化物若干含む
 - 2.5Y3/1黒褐色 極細砂混シルト(やや砂質、地山大小ブロック(2.5GY6/1オリーブ灰色シルト混極細砂~細砂、10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂混シルト(砂少なめ)、2.5Y5/2暗灰黄色 極細砂~砂質シルトなど)を40%含む、炭化物多く含む)
- 955ピット
- 10YR3/1黒褐色(やや明るい) 細砂~中砂混シルト(砂少なめ、2.5Y5/3黄褐色 細砂混シルト(砂少なめ、地山由来)を小ブロック~小粒状に30%含む、炭化物若干含む)
 - 10YR5/2灰黄褐色(やや暗い) 細砂混シルト(砂少なめ、地山ブロック(5Y4/1灰色、10Y6/1灰色など)を40%、10YR4/2灰黄褐色(やや暗い) 極細砂~細砂を下部に20%含む)
 - 10YR3/3暗褐色(やや暗い) 極細砂混砂質シルト(10YR4/2灰黄褐色(やや黄色)シルト混極細砂~細砂をブロック状に20%含む)



第115図 4区 縦穴建物4平面図、断面図

4085柱穴

- 1 10YR4/1 褐灰色(やや暗)細砂わずかに混じりシルト(10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを粒状に20%、2.5Y~10YR7/6 明黄褐色粘土~シルトを粒状に20%、炭化物をわずかに含む)
- 2 10YR4/1 褐灰色(やや暗、1より暗)シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色シルトをブロック状に50%、5Y5/1(やや青み)灰色 極細砂~砂質シルトをブロック状に5%含む。炭化物を若干含む)

4086柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色 細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトを粒状(φ0.5~2cm)に30%、10YR7/6 明黄褐色シルトを小粒状に5%含む。炭化物をわずかに含む)
- 2 10YR4/1 褐灰色(やや暗)極細砂~砂質シルト(細砂~中砂をわずかに含む。2.5Y5/2 暗灰黄色 極細砂~砂質シルト、10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂~砂質シルトを粒状(φ0.5~3cm)に30%、炭化物を若干含む。下面は有機物層)
- 3 10YR4/1 褐灰色(やや暗)細砂~中砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂~砂質シルトを粒状に40%含む、下面に未分解有機物が層をなす)

4089柱穴

- 1 10YR3/2 黒褐色 細砂~中砂混じりシルト(10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを粒状(φ~1cm)に20%、10YR8/3 浅黄褐色粘土~シルトを粒状に10%含む。炭化物をわずかに含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色 細砂~中砂わずかに混じりシルト(10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを大小ブロック~粒状(φ0.5~4cm)に30%含む。炭化物を若干含む)
- 3 10YR4/1 褐灰色(やや褐色)シルト(10YR5/6 黄褐色~10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂~砂質シルトをブロック状に30%、2.5GY6/1 オリーブ灰色 極細砂~中砂をブロック状に10%含む。炭化物を若干含む)
- 4 10YR4/1 褐灰色(やや褐色)シルト(10YR5/6 黄褐色~10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂~砂質シルトをブロック状に30%、2.5GY6/1 オリーブ灰色 極細砂~中砂をブロック状に5%、10YR4/1 褐灰色 砂質シルトをブロック状に10%含む。炭化物をわずかに含む)

4099柱穴

- 1 10YR4/1 褐灰色 砂質シルト(細礫を若干含む、10YR5/6 黄褐色 極細砂~砂質シルトを粒状~ブロック状に30%、5Y5/1 灰色シルトを粒状(φ2~3cm)に20%、7.5Y6/1 灰色 細砂~中砂を粒状~レンズ状に10%含む。炭化物を若干含む)
- 2 10YR4/1(やや暗) 褐灰色 砂質シルト(2.5Y5/2 暗灰黄色シルトをブロック状~粒状に30%、2.5Y6/4 にぶい黄色~2.5Y6/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状に20%含む。炭化物をわずかに含む)
- 3 2.5Y5/1(やや暗) 黄灰色 細砂わずかに混じりシルト(2.5Y6/4 にぶい黄色~2.5Y6/6 明黄褐色 砂質シルトを粒状(φ~2cm)に10%、7.5Y6/2 灰オリーブ色シルトをブロック状に5%、10YR4/2 灰黄褐色シルトをブロック状に10%、10YR3/1 黒褐色シルトを粒状に5%含む。炭化物を若干含む)

4245柱穴

- 1 10YR3/1 黒褐色~10YR4/1 褐灰色シルト(上半は地山粒をやや多く含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 細砂~中砂混じりシルト(やや砂質、砂少なめ、10YR~2.5Y6/6 明黄褐色 極細砂(地山)を粒状~ブロック状に10%、2.5Y4/2 暗灰黄色(細砂~中砂を粒状に5%含む。炭化物を若干含む)
- 3 2.5Y3/2 黒褐色 細砂~中砂わずかに混じりシルト(2.5Y6/6 明黄褐色 極細砂~砂質シルト(地山)を粒状(φ0.5~2cm)に30%含む。炭化物を若干含む(2より多い)
- 4 10YR4/1 褐灰色 極細砂~中砂(2.5Y6/6 明黄褐色 極細砂~砂質シルト(地山)を粒状に10%、10YR5/1 褐灰色 細砂~中砂を粒状に20%含む)

4270柱穴

- 1 10YR4/1(やや暗) 褐灰色シルト(10YR4/4 褐色 砂質シルトを小粒状40%含む、炭化物を若干含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト(5Y5/1 灰色 極細砂~中砂を粒状に5%、10YR5/3 にぶい黄褐色(やや暗)シルトを10%、10YR3/1 黒褐色シルト混じり極細砂~中砂を10%ブロック状に含む、炭化物をわずかに含む)
- 3 10YR4/1(やや暗) 褐灰色 砂質シルト(10YR4/4 褐色 砂質シルトをブロック状~粒状に10%、5Y5/1 灰色 細砂~中砂をブロック状に5%含む、炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR4/1(やや暗) 褐灰色 細砂混じり砂質シルト(10YR4/4 褐色シルトを粒状に40%含む)

4271柱穴

- 1 10YR4/1 褐灰色 細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/6 黄褐色~10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを大小ブロック~粒状に40%、5Y5/1 灰色 極細砂~中砂をブロック状~レンズ状に20%、10YR2/1 黒色 細砂~中砂混じりシルト(砂多め)を粒状~ブロック状(やや長い)に10%含む、炭化物をわずかに含む)
- 2 10YR4/2(やや暗) 灰黄褐色 砂質シルト(10YR5/6 黄褐色~10YR6/6 明黄褐色 砂質シルトを大小ブロック状から粒状に20%含む、炭化物をわずかに含む)
- 3 2と同じ(炭化物の量がやや多い)
- 4 2.5Y5/1 黄灰色 極細砂~中砂(10YR3/2 黒褐色 極細砂を粒状(φ0.5~1cm)に20%含む)

4272柱穴

- 1 10YR3/1(やや褐色) 黒褐色 細砂~中砂混じり砂質シルト(2.5Y5/3 黄褐色 細砂混じりシルトを20%、10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトを10%、粒状に含む、炭化物をわずかに含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂~中砂混じり砂質シルト(1より砂多、5Y5/2~3 灰オリーブ色 細砂~中砂混じりシルト(砂少なめ)を大きめのブロック状に30%、7.5Y4/1 灰色シルト混じり極細砂~細砂をレンズ状に10%、10YR6/3 にぶい黄褐色~5/2 灰黄褐色 砂質シルトを粒状に10%含む、炭化物を若干含む)
- 3 10YR3/1 黒褐色 細砂わずかに混じり砂質シルト(2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルト(10G6/1 緑灰色 極細砂を粒状に含む)を粒状に30%含む、炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR3/1(やや明) 黒褐色 細砂混じりシルト(2.5GY6/1 オリーブ灰色シルトを粒状に20%含む、炭化物を若干含む)

4275柱穴

- 1 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂混じりシルト(砂少なめ、10YR6/6 明黄褐色シルトをブロック状に30%含む)
- 2 10YR4/2(やや暗) 灰黄褐色 細砂混じりシルト(砂少なめ、10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトを小粒状に20%含む、炭化物をわずかに含む)
- 3 10YR4/2(やや暗) 灰黄褐色 細砂わずかに混じり砂質シルト(10YR5/6 黄褐色 砂質シルトをブロック状に40%、10YR5/1(やや明、褐色) 褐灰色 細砂~極細砂を粒状に5%、10YR3/1 黒褐色 砂質シルトを粒状に10%含む、炭化物を若干含む)
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト(10YR5/2 灰黄褐色~6/3 にぶい黄褐色 砂質シルトをブロック状に40%、5Y6/2 灰オリーブ色 極細砂混じり砂質シルトを粒状に10%含む)

4278柱穴

- 1 10YR3/1(やや明) 黒褐色(細砂~中砂混じりシルト(10YR5/6 黄褐色 砂質シルトを大小粒状に10%、10Y6/1(やや褐色)灰色 細砂~極細砂混じり砂質シルトを粒状~レンズ状に10%含む、炭化物をやや多く含む)
- 2 10YR4/1(やや暗) 褐灰色 細砂混じり砂質シルト(10YR4/1 褐灰色(やや褐色)シルト混じり細砂~中砂(粗砂を若干含む)をブロック状に20%、未分解有機物を非常に多く含む(φ1cmの層あり))
- 3 10YR3/1 黒褐色 細砂~極細砂混じりシルト(10YR4/1 褐灰色(やや暗)シルト混じり細砂~中砂をブロック状に30%、5Y7/2 灰白色 極細砂~砂質シルトを粒状(φ0.5cm)に10%含む、未分解有機物を多量に含む、炭化物をわずかに含む)
- 4 10YR3/1(やや明) 黒褐色(細砂~中砂混じりシルト(7.5Y6/2 灰オリーブ色 極細砂~砂質シルトを粒状に10%、炭化物を若干含む、未分解有機物を多量に含む(※別のピットの可能性あり))

柱穴との関係から方形の竪穴建物であったと考えられる。規模は床面で5 m程度に復元できる。柱穴を基準とすると、建物の軸はN - 16° - Eをとると考えられる。

竪穴掘方外形に直交する方向でサブトレンチを掘削して堆積状況を把握し、その後改めて十字に土層観察用畔を残して掘り下げた。検出面から床面まで、唯一残存する西辺で最大高さ0.3 m程度が残存している。埋土は基盤層のブロックを含む砂混じりシルト層が中心で、比較的水平に堆積していた。

床面構築土は、最大厚0.1 mで、北半は比較的厚く、南半ではほとんど存在しなかった。層中に、基盤層の黄褐色シルトブロックを多く含む。このブロックはとくに上面に多く認められ、床面として構築する際に意図的にブロックを多くした可能性が考えられる。

柱穴 柱穴のうち、西側2基は床面まで残っていたが、東側2基は上面が削平されている。また、西側2基は断面で下方だけに柱痕跡が認められたが、東側2基では上方まで柱痕跡が残っていた。西側2基については、抜き取りなどが行われた可能性が考えられる。

柱並びはほぼ方形で、わずかに南北に長い。柱穴間は、北辺から時計回りに2.7、2.8、2.6、2.8 mを測る。深さは上面まで残る西側2基で0.75 m、東側の2基では4240柱穴がやや深く0.55 m、4236柱穴で0.4 mである。掘方の平面形はやや不整形で、やや角張った形状である。

炉 柱穴で囲まれた部分のほぼ中央で、焼土を面的に確認した(4260焼土)。竪穴建物1に伴う炉跡と考えられる。平面形は概ね円形を呈し、直径約0.4 mである。南東側は上面付近まで削平が及んでいるためか、焼土の外形が若干いびつになっている。焼土の中心部は直径0.25 mほどの範囲で浅く窪んでおり、中央の深さ0.1 m程度である。

東西断面では焼土が上下2層確認でき、最低1度は造り替えが行われている可能性が考えられる。

壁溝 壁溝は建物の北辺と西辺に残存する。北辺の壁溝は、最大幅0.25 m、深さ0.1 m、西辺は幅0.1 m、深さ0.06 m程の比較的浅いものである。壁溝内には板や柱などの痕跡は確認できない。西辺では南から1.1 mを検出したが、それ以北は床面が0.07 ~ 0.1 mほど一段低くなっており、壁溝は確認できなくなっている。この段差は西辺から4261柱穴へ向かうように直角に延びる。このことから、床面のうち南側の柱穴以南が一段高くなっていった可能性が高い。

出土遺物 埋土中からの出土遺物は少ないが、床面直上から土師器片が若干出土している。また、北辺の壁溝付近では、焼土塊がまとまって見つかった。このほか、埋土中から土師器・須恵器、移動式かまどの破片が出土している。

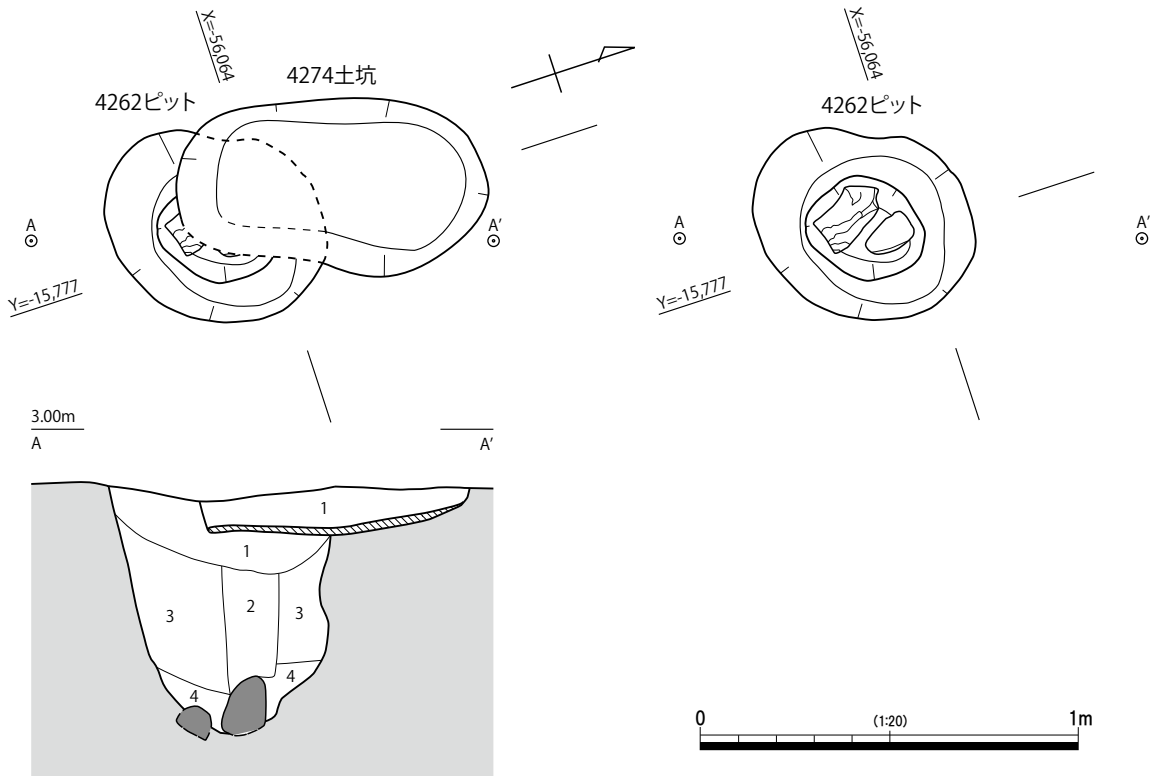
竪穴建物4 (第115・116図)

竪穴建物4は、調査区西側高位部の北部、竪穴建物3の南に隣接して検出したものである。両者が接する部分に確認トレンチを入れており、先後関係は不明である。

東側3分の1が後世の溝等で削平されていたほか、攪乱やピットなどで床面や柱穴などの認識が難しい状況であった。南側の壁溝および掘方、北側の掘方のラインなどを確認し、その内側で確認したピットを柱穴として竪穴建物と考えた。また、前年度調査区の2区東端で確認した950・954土坑はこの竪穴建物の東側の掘方にあたる事が判明した。ここでは両者を合わせて報告する。

掘方は南北5.3 m、東西5.3 m以上で、ほぼ正方形であったと考えられる。残存状況は悪く、検出面から掘方底まで、最も残りの良い南辺で最大0.3 mである。

床面は後世に上面まで攪乱を受けており、面としては明確に検出できなかった。しかし、南側壁溝の検出面(1~4層下面)が床面に近いと考え、掘方を掘った後、床面の高さまで土を入れて床



4262ピット

- 1 10YR4/2(やや灰色) 灰黄褐色 細砂わずかに混じりシルト (10YR6/4 にぶい黄橙色 ~8/6 黄橙色 砂質シルトを大小ブロック状~小粒状に50%含む、炭化物を若干含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト (10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質シルトを粒状に40%、10YR3/1 黒褐色 砂質シルトを粒状~ブロック状に10%含む、炭化物をわずかに含む)
- 3 2.5Y3/2(やや赤) 黒褐色 砂質シルト~シルト (10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質シルトを粒状~大小ブロック状に30%、10YR3/1 黒褐色 細砂わずかに混じり砂質シルトを粒状(φ0.5~2cm)に20%含む、炭化物を若干含む)
- 4 10YR4/2(やや灰色) 灰黄褐色 シルト (10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質シルトを粒状に10%含む、炭化物を若干含む)

4274土坑

- 1 10YR4/1(やや暗、褐色) 褐灰色 細砂混じり砂質シルト (10YR2/3 黒褐色 シルト混じり細砂(焼土?)を粒状に10%、10YR6/4 にぶい黄橙色 砂質シルトを粒状に30%含む、炭化物多く、下面に層状に分布)

第117図 4区 第4面検出遺構平面図、断面図

面を構築した後、改めて壁溝を掘ったと考えられる。あわせて、柱穴もこの段階で掘っていると考えられる。

柱穴 掘方構築土を掘削する過程で柱穴を確認した。また、東側は低位部でピットを検出したが、上面が削平されているため第3面で確認したものも多い。柱は4本で、柱穴掘方は直径0.4~0.5mの円形を呈し、大半のもので断面に柱痕跡が認められたほか、わずかに柱根が残るものも存在した。深さは0.32~0.52mであるが、0.4~0.5m程度のもが多い。それぞれ、柱穴2~3個が切り合った状態で確認されており、同じ場所で複数回の建て替えが行われたと考えられる。柱穴を基準とすると、建物の主軸はN-26°-Eとなる。

壁溝 南辺で溝状の掘り込みを検出し、位置関係から竪穴建物2の壁溝と考えた。確認できたのは全長1.9m程で、検出面での最大幅は0.2m、深さ0.05m程度である。現状で東側低位部へと移行する部分より西側で北方へ直角に屈曲する。これは、想定される柱穴付近へ曲がることになり、仕切りなどになる可能性、あるいは壁溝が全周しない可能性も考えられる。竪穴建物の掘方は壁溝より北側、すなわち内側で確認しており、前述のとおり掘方掘削後、土を入れて床面を構築した後、改めて壁溝を掘削した可能性が考えられる。なお、建て替えにともなう壁溝の掘り直し、床面の改変等は、残存

状況が良くない事もあり、確認できていない。

床面焼土 中央南西よりで上面が茶褐色を呈する、不整な楕円形の部分が確認できた。竪穴建物3で確認した炉のような明らかな焼土ではないが、何らかの作用により鉄分の多い粘土が酸化しているものと考えられる。この上面は前述の床面相当部分に当たることから、竪穴建物4に伴う何らかの施設の可能性が考えられる。

出土遺物 床面構築土および柱穴から土師器、須恵器等が出土した。小片であり、時期は不明である。

第4面で検出したピットについては、数量が多いこともあり法量、形態等を一覧（第9表）にまとめている。

4219 土坑は竪穴建物3の埋土を掘り込んでいる楕円形の土坑である。南北1.62 m、東西0.8 m以上で、東側は攪乱で削平される。深さは検出面から0.7 mを測る。埋土は比較的均質で、土器片のほか、下層からミニチュア土器などが出土している。

第4面下層（第111図）

第4面下層は、竪穴建物3、4の床面構築土を除去した後の、基盤となるシルト層（36層）上面である。調査区西側高位部の北端で土坑1基と柱穴7基、ピット7基を確認した。

4274 土坑は竪穴建物3の東西断面で断面を確認したもので、炉跡（4260 焼土）周辺の床面構築土除去後に平面を検出した（第117図）。やや角張った楕円形の土坑で、検出面からの深さ0.1 mを測る。底面には比較的粒の大きい炭が多量に存在しており、最大0.05 mの厚さで炭層を構成していた。土坑の壁面は若干ではあるが焼けた痕跡が認められ、火が焚かれた可能性が考えられる。

4262 ピットはほぼ円形で、深さは検出面から0.65 mを測る。4274 土坑に切られている（第117図）。ピットの底には0.1～0.2 mほどの礫が置かれており、礎板や根固めのような役割をもっていたであろう。

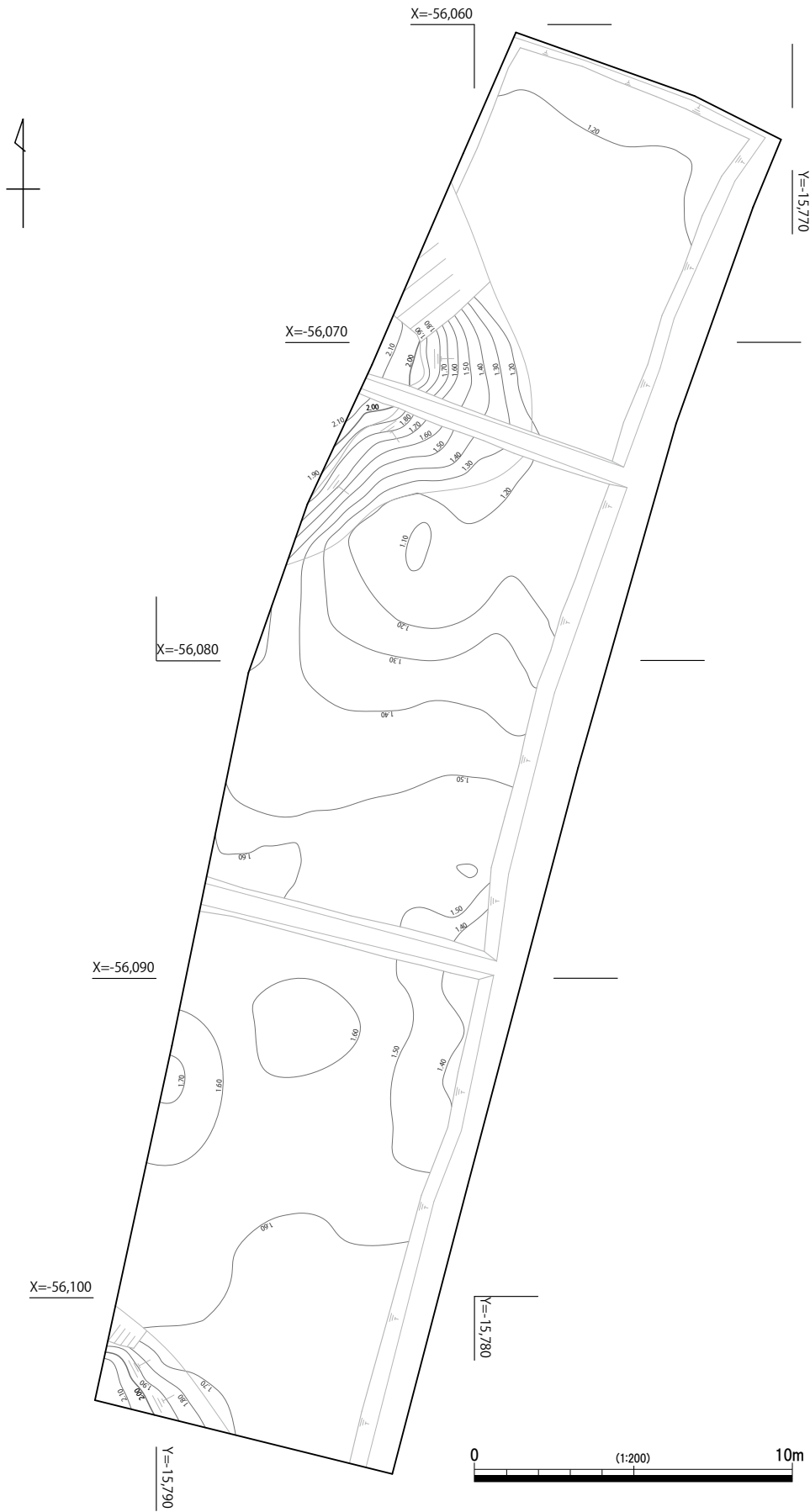
4266、4268、4269 ピットは竪穴建物3の床面構築土を除去した面で検出した。規模や形状、埋土の状況が似かよっている。3基は直線的に並んでおり、何らかの建築物を構成していた可能性がある。中心間の距離は北から1.3 m、1.5 mを測る。

（5）第5面（第118図、PL.40）

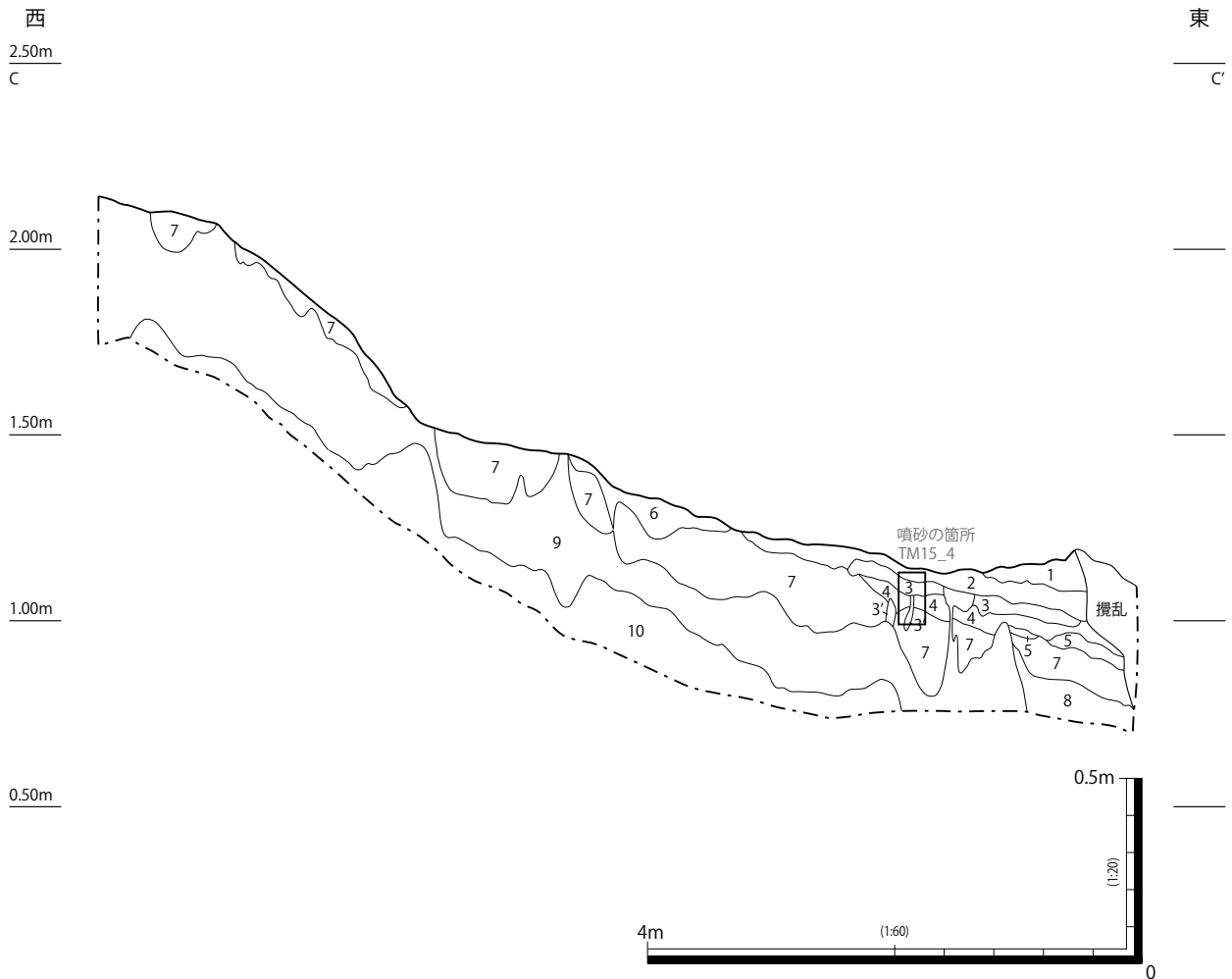
3区から続く自然堆積層である砂層と、その下層に互層状に堆積した有機物層を除去した面である。一部を除き、限界掘削深度（GL - 3.0 m）まで掘削したが、大半で地山およびその上面の土壌化層まで到達せず掘削を終了した。

北半部では南西へ半円形に張り出す地山層の高まりを確認したほか、南西部で3区から続く地山上の土壌化層を確認した。土壌化層や地山層上面および層中において、遺構・遺物は確認できなかった。なお、調査区中央やや南で全長7 m、根元の直径で1 m近い広葉樹の大木を検出した。加工などは認められなかったため、自然の倒木と考えられる。なお、樹種は同定によりネムノキ属であることが判明しているほか、放射性炭素年代測定により、紀元前4300年頃の年代が測定されている（第5章第3節参照）。

4 小結



第118図 4区 第5面平面図



- 1 10YR3/2 黒褐色 極細砂～砂質シルト(上半は未分解有機物を多量に含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色 極細砂～細砂混じりシルト(上半ほど未分解有機物を多量に含む)
- 3 10YR5/8 黄褐色～10YR5/3 にぶい黄褐色 極細砂～中砂(部分的に砂質シルトを含む)
- 3' 2.5Y5/2 暗灰黄色(やや灰) 細砂・中砂～砂質シルト
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト(未分解有機物を多量に含む)
- 5 5Y6/1 灰色 極細砂～中砂(部分的に10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～中砂となり、未分解有機物を含む)
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト～細砂(中砂をわずかに含む、7.5YR3/1 黒褐色 砂質シルト(未分解有機物を多量に含む)を層状～ブロック状に30%含む)
- 7 2.5Y5/2 暗灰黄色 細砂・中砂～砂質シルト(シルト少なめ、炭化物を若干含む。未分解有機物を上層ほど含む。10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト～極細砂をブロック状～層状に20%含む。(西では主となる))
- 8 5Y5/1 灰色(やや黄色) 細砂・中砂～砂質シルト(7.5Y6/1 灰色(やや明)シルト～細砂・中砂を粒状に20%含む)
- 9 2.5Y7/4 浅黄色 細砂・中砂～砂質シルト(シルトやや少なめ。上面ほど10YR5/8 黄褐色に近くなる)
- 10 2.5Y7/2 灰黄色～7.5YR6/8 橙色 砂質シルト～細砂・中砂(砂少なめ)

第119図 4区 第5面東西トレンチ土層断面図

4区では計5面の遺構面の調査を行い、第1面～第4面で遺構を検出した。

第2面は中世に比定できる。2区東南端で検出した水田と関連する水田を谷の出口に当たる部位で検出したほか、丘陵裾を地形に沿うように延びる道路跡を確認した。道路跡の両側で確認した溝は、少なくとも4本が重複しており、比較的長期間にわたり使用されたと考えられる。廃絶時期は13世紀後半であるが、より古くから道路として使用されたとみてよい。なお、この溝底には波板状凹凸に類する楕円形の凹みが連続する部位があり、部分的にこの溝内に足跡(おそらく偶蹄目)も確認できたことから、道路の側溝であるとともに、この部位が通路として機能していたことも考えられる。

第3面は古代と考えられ、ピット・柱穴、土坑、溝、耕地段差などを検出した。ピット・柱穴から、掘立柱建物2棟が復元できた。掘立柱建物4は四辺の中央にそれぞれ細長い土坑があり、土坑内は水

平に埋められていた。埋土下面にはワラ状のものを敷いた状況が確認できた。柱痕跡は認められないため、柱掘方ではない可能性が高いものの、位置から建物に伴うものと推定できる。1間四方の掘立柱建物とすればやや柱間が3.0 mとやや広いこともあり、建立された場所が谷の出口の低位部であるため、基礎などに関わるものの可能性を想定できる。掘立柱建物5もまた柱間が広いが、1間四方の規模になる。なお、これらの掘立柱建物は、平成26年度調査3区北東部で検出した遺構群と一連のものと考えられる。

第4面では北半で竪穴建物2棟を検出した。後世の削平や遺構の重複、トレンチなどで明確な掘方は捉えられない部分もあったが、竪穴建物3が5 m四方以上、竪穴建物4が5.3 m四方以上であり、3区の竪穴建物と概ね同規模である。2棟の前後関係は不明だが、建物主軸の方位が3区のものそれぞれ似かよっている点が注目される。建物の時期は明確に時期を示す遺物が少ないが、古墳時代後期～古代にかけてのものと考えられる。なお、3区の竪穴建物も床面からの出土遺物が少ないことから、この時期の特徴を示すものかもしれない。また、2区で確認した、丘陵上位に位置する断面長方形の柱をもつ掘立柱建物との関係も明らかではないが、同時期に存在した可能性もあり得る。

第IV章 調査の成果

第8表 3区(27年度) 検出遺構一覧

第0面

単位: cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考(「<」は切り合い関係を示す)
3453	ピット	楕円	28	20	U(凹凸)	14	
3454	ピット	円	33	30	U(斜)	10	
3456	ピット	隅丸三角	26	26	V(浅)	11	3456ピット<3457ピット
3457	ピット	楕円	50	28	V(浅)	12	3456ピット<3457ピット
3458	ピット	楕円	31	28	逆台	9	3458ピット>3459ピット
3459	ピット	隅丸三角	26<	23	皿状	14	3459ピット<3458ピット
3460	ピット	隅丸方	16	14	V	6	
3461	ピット	隅丸方	25	21	V	21	
3462	ピット	円	16	14	逆台	5	
3464	ピット	隅丸三角	23	20	V(浅)	7	
3465	ピット	楕円	17	13	コ	12	
3466	ピット	楕円	22	15	U	18	
3467	ピット	隅丸方	32	31	五角形	18	
3468-1	ピット	隅丸三角	39	34	五角形	19	
3468-2	ピット	隅丸方	28	22		19	
3469	ピット	隅丸方(不整)	30	28	U	15	
3470	ピット	円	20	20	U(尖)	16	
3471	ピット	隅丸五角	30	26	逆台(不整)	23	
3472	ピット	楕円	28	23	V(斜)	25	
3473	ピット	円	19	19	V(斜)	9	
3474	ピット	隅丸方	42	29	逆台(斜)	13	
3475	ピット	隅丸三角	32	28	皿状	7	
3476	ピット	円	24	24	V(不整)	21	
3477	ピット	隅丸方	47	34	逆台	11	
3478	ピット	ひょうたん形	29<	14	U(凹凸)	15	
3479	ピット	隅丸方	26	17	V(不整)	21	3478ピット<3479ピット
3480	ピット	円	25	25	逆台	17	
3481	ピット	隅丸三角	23	22	U(浅)	9	
3482	ピット	隅丸三角	30	23<	逆台	15	
3483	ピット	隅丸方	41	33	U(不整)	10	
3484	ピット	隅丸方	25	23	逆台	31	3483ピット<3484ピット
3485	ピット	円	29	23	逆台	12	
3486	ピット	隅丸方(不整)	26	21	逆台(不整)	16	
3487	ピット	円	14	13	U	14	
3488	ピット	隅丸方	15	12	V	9	
3489	ピット	円	11	11	U	4	
3490	ピット	隅丸三角	38	27	逆台(不整)	16	
3491	ピット	楕円	34	23	逆台	25	
3492	ピット	楕円	77	62	逆台(不整)	22	
3493	ピット	隅丸三角	33	30	U(不整)	11	
3494	ピット	円	17	15	V(不整)	11	
3495	ピット	隅丸三角	18	18	逆台	12	
3496	ピット	隅丸方	27	22	U(尖)	26	
3497	ピット	楕円	24	15	逆台	6	
3498	ピット	隅丸方	17	13	U(尖)	7	
3499	ピット	円	23	21	U(凹凸)	11	
3500	ピット	楕円	19	12	V	5	
3501	ピット	隅丸方	28	24	逆台	21	
3502	ピット	隅丸三角	22	21	逆台	8	
3504	ピット	楕円	22	17	逆台(不整)	8	
3505	ピット	隅丸三角	20	17	逆台(不整)	10	

矢板沿

単位: cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考(「<」は切り合い関係を示す)
3508	ピット	円?	32<	30<	U(不整?)	27	側溝に切られる、2面
3510	ピット	円	43	35<	V(浅・斜)	13	3面
3512	柱穴	隅丸方	43	41			3面
3515	ピット	楕円	43	27	逆台	8	3面
3519	ピット	円	31	29	逆台	6	3面
3520	ピット	隅丸三角?	38	28<	逆台	6	3面、矢板外へ
3521	ピット	楕円	47	22<	U(不整)	14	3面、<3514土坑
3522	ピット	隅丸三角?	42	36<	皿状	5	3面、側溝に切られる
3523	柱穴	隅丸三角	56	45	不整(V+コ)	46	3面・掘立柱建物5、3514土坑下面
3524	柱穴	隅丸方	63	55	U(不整)	45	3面・掘立柱建物5、3509ピット下面
3525	ピット	隅丸方(不整)	56	56<	U(不整)	19	3面、3516土坑下面

第9表 4区 検出遺構一覧

第1面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
4001	ピット	円	11	10	U	8	
4002	ピット	隅丸方	32	30	U	20	4003・4004ピット<4002ピット
4003	ピット	円	25	20<	コ	13	4003ピット<4002ピット
4004	ピット	楕円	18	12<	U	11	4004ピット<4002ピット
4005	ピット	隅丸方	36	33<	V(不整)	24	4005ピット<4006ピット
4006	ピット	円	14	14	コ	12	4005ピット<4006ピット
4007	ピット	楕円	45	32	コ(不整)	24	
4008	ピット	円	18	16	U	10	
4009	ピット	円	17	17	V(不整)	12	
4010	ピット	円	18	16	U	17	
4011	ピット	楕円	25	18	皿状	8	
4012	ピット	楕円	20	17	皿状	6	
4013	ピット	円	16	14	U(不整)	8	
4015	ピット	楕円	18	12<	皿状	7	
4016	ピット	円	30	28	U	29	4017ピット<4016ピット
4017	ピット	楕円	21	14<	U	20	4017ピット<4016ピット
4018	ピット	隅丸方	27	26	コ(不整)	15	
4019	ピット	円	23	22	U	12	
4020	ピット	楕円	30	23	皿状	7	
4021	ピット	楕円	38	25	U	34	
4022	ピット	円	23	23	皿状	6	
4023	ピット	円	24	23	皿状(不整)	6	
4025	ピット	楕円	25	21	コ	10	
4026	ピット	隅丸方	40	35	皿状(不整)	11	
4027	ピット	円	25	22	皿状	5	
4028	ピット	隅丸三角	36	29	皿状	4	4029ピット<4028ピット
4029	ピット	楕円	29	19<	皿状	4	4029ピット<4028ピット
4030	ピット	円	25	21	U	20	
4032	ピット	円	43	30<	コ(不整)	40	柱材有り
4037	ピット	隅丸方	27<	32	コ(不整)	38	溝に切られる

第2面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
4031	ピット	円	23	22	U	12	柱材有り
4033	ピット	隅丸方(不整)	19	15	逆台	13	
4036	ピット	隅丸方	58	40<	コ(不整)	36	4036ピット<4062ピット
4042	ピット	円	21	20	皿状	7	
4043	ピット	円	60	56	コ	33	
4044	ピット	隅丸方	60	53	逆台	45	
4045	ピット	円	40	31<	U	41	溝に切られる
4046	ピット	楕円	20	12	U	19	
4047	ピット	隅丸方	41	32	皿状	13	
4048	ピット	円	38	35	コ	15	
4049	ピット	円	29	27	U(不整)	44	
4050	ピット	隅丸方(不整)	22	18	U(不整)	18	
4051	ピット	楕円(不整)	65	50	V(不整)	16	
4054	ピット	円(不整)	62	54	U	40	4055ピット<4054ピット
4055	ピット	楕円	24<	20	U(浅)	6	4055ピット<4054ピット
4056	ピット	楕円	65	42	U(不整)	10	4062ピット<4056ピット
4059	ピット	楕円(不整)	82	60	台(袋状)	23	
4060	ピット	楕円(不整)	64	57	五角(突出あり)	42	
4062	ピット	楕円	58	47	U(不整)	39	4036ピット<4062ピット<4056ピット
4064	ピット	隅丸方(不整)	62	52	逆台	26	
4065	ピット	円	21	20	逆台	9	

第3面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
4072	ピット	隅丸方	48	47	コ	33	
4073	ピット	隅丸五角(不整)	87	87	逆台	32	
4074	ピット	隅丸方	60<	47	コ	26	4074ピット<4084ピット
4075	ピット	円	50	47	コ	31	柱材有り
4076	ピット	円	17	17	V(不整)	14	
4077	ピット	円?	68	48<	逆台(不整)	36	4077ピット<4213・4257ピット
4078	ピット	円?	70	51<	逆台(凹凸)	43	
4079	ピット	隅丸三角	20	17	V(浅、斜)	6	
4080	ピット	円	19	18	U(浅)	4	
4081	ピット	楕円	58	50	逆台	40	
4082	ピット	楕円	18	11	U	6	
4083	ピット	隅丸三角(不整)	21	20	V(浅、斜)	10	

第Ⅳ章 調査の成果

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考 (「<」は切り合い関係を示す)
4084	ピット	隅丸方	67	49	逆台	22	4074 ピット <4084 ピット
4085	柱穴	楕円	52<	33	V (不整)	39	竪穴建物 4、4086 柱穴 <4085 柱穴
4086	柱穴	隅丸方	38	30<	U	30	竪穴建物 4、4099 柱穴 <4086 柱穴
4087	ピット	隅丸三角	47	47	V (斜)	17	
4088	ピット	楕円	23	17	U (浅)	3	
4089	ピット	隅丸方	56	53	U (凹凸)	50	4099 柱穴 <4089 ピット
4090	ピット	円	26	22	U	15	
4091	ピット	楕円	56	48	逆台 (凹凸)	23	柱材有り
4093	ピット	楕円	41	36	逆台 (不整)	25	
4096	ピット	楕円	53	40	コ	20	
4099	柱穴	楕円	47<	40	U	35	竪穴建物 5、 4099 柱穴 <4086 柱穴・4089 ピット
4100	ピット	楕円	83	46	逆台 (不整)	19	
4104	ピット	円	50	41	コ (不整)	36	
4106	ピット	円	43	40	U (不整)	20	4214 ピット <4106 ピット
4110	ピット	楕円	60	49	逆台	24	4110 ピット <4201 ピット
4111	ピット	楕円	40	29	逆台	9	4214 ピットと重複
4112	柱穴	円	71	53	V (不整)	47	掘立柱建物 5
4113	ピット	隅丸三角	63	53	逆台 (不整)	27	
4122	ピット	楕円	42	28	U (浅)	10	
4126	ピット	楕円	67	48<	台 (袋状)	15<	4126 ピット <4217 柱穴
4127	ピット	楕円 (不整)	73	58	五角	25	
4128	ピット	円	17	15	U (浅)	6	
4129	ピット	楕円	30	22	V	23	
4130	ピット	隅丸方	40	27	V	15	穴が2つある?
4131	柱穴	隅丸方 (不整)	72	70	U (不整)	41	掘立柱建物 4
4132	ピット	円	23	21	U (浅)	8	
4133	ピット	円	46	41	V	34	
4134	ピット	隅丸方	30	23	U	16	
4135	ピット	楕円	44	34	V (不整)	33	
4136	ピット	円	22	18	U	11	4137 ピット <4136 ピット
4137	ピット	楕円 (角張る)	41	32	U (浅)	7	4137 ピット <4136 ピット
4138	ピット	円 (尖る)	60	45	V (浅)	11	
4139	ピット	隅丸方	51	47	V	31	
4140	ピット	楕円 (角張る)	28	23	V	11	
4141	ピット	円	20	17	U	12	
4142	ピット	円	29	23	U	16	
4143	ピット	円 (尖る)	33	31	U	17	
4144	ピット	隅丸方	50	31	逆台	13	
4145	ピット	隅丸方	30	28	V	17	
4146	ピット	隅丸方 (菱)	50	40	V (斜)	17	
4148	ピット	円	14	12	U	13	
4149	ピット	隅丸三角	15	15	U	11	
4150	ピット	円	14	12	U	18	
4151	ピット	楕円	23	20	皿状	6	
4152	ピット	楕円	22	17	皿状	8	
4155	ピット	円	27	23	コ	33	
4156	ピット	円	28	26	V	17	
4158	ピット	円 (尖る)	30	25	逆台	10	
4160	ピット	隅丸方 (台形)	34	25	V (浅)	5	
4161	ピット	隅丸三角	35	33	コ (尖る)	20	
4162	ピット	隅丸三角?	27	26<	V	12	切れている
4165	ピット	楕円	30	21	V	14	
4167	ピット	隅丸方 (菱)	47	37	逆台 (凹凸)	9	
4168	ピット	円 (不整)	33	33<	皿状	3	
4172	ピット	楕円	40	29	V (斜)	14	
4173	ピット	隅丸方	42	35	V (斜)	16	
4175	ピット	楕円	20	13	V	14	
4182	ピット	隅丸三角 (不整)	95	69	逆台 (不整)	34	
4185	ピット	隅丸方	33	23	逆台	10	
4187	ピット	隅丸三角	27	24	U (浅)	7	
4188	ピット	隅丸三角	47	40	逆台?	30	4189-1 柱穴 <4188 ピット <4189-2 ピット
4189-1	柱穴	不整形	72<	61	V (不整)	65	掘立柱建物 4
4189-2	ピット	円	43	43	V?	14	4189-1 柱穴 <4188 ピット <4189-2 ピット
4191	ピット	円	22	17	U	6	
4192	ピット	隅丸方	44	30	逆台	18	
4193	ピット	楕円	27	16	逆台	8	
4194	ピット	楕円	23	15	逆台	9	
4195	ピット	円	30	28	コ	24	
4197	ピット	円	26	21	V	16	

第5節 4区（平成27年度）の調査

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
4198	ピット	円(尖る)	37	33	コ(凹凸)	33	4199ピット<4198ピット
4199	ピット	楕円	25	21	U(浅)	8	4199ピット<4198ピット
4200	ピット	円(角張る)	48	44	逆台	26	4107土坑<4200ピット
4201	ピット	隅丸方?	75<	62	U	35	4110ピット<4201ピット
4202	ピット	楕円	34	30	逆台(+U)	32	
4203	ピット	隅丸方	50	40	皿状	16	
4204	ピット	隅丸方	36	36	U(不整)	23	
4205	ピット	隅丸三角	48	42	V(不整)	43	4205ピット<4204ピット
4206	ピット	円?	54	18<	皿状	7	
4207	ピット	円	36	36	コ(凹凸)	33	
4208	ピット	円	22	22	U(浅)	6	
4210	ピット	隅丸方	30	26	V(浅)	7	
4211	ピット	隅丸方?	46	23<	逆台(凹凸)	8	4211ピット<4209土坑
4212	ピット	隅丸方?	47	23<	U(浅)	11	切れている
4213	ピット	楕円	67	53	V(浅)	18	4077ピット<4213ピット
4214	ピット	隅丸方(台形)	51	40<	逆台?	27	4214ピット<4106ピット
4216	ピット	楕円(不整)	70	32	U	12	
4217	柱穴	楕円(不整)	63	61<	V	47	掘立柱建物5、4126ピット<4217柱穴

第4面

単位：cm

番号	遺構名	平面形	長径	短径	断面形	深さ	備考（「<」は切り合い関係を示す）
4218	ピット	楕円(不整)	75	62	五角	27	4218ピット<4241ピット
4221	ピット	円?	48<	32<	コ	26	
4222	ピット	円	24	20	U(浅)	5	
4223	ピット	円	30<	36	U(不整)	9	
4224	ピット	円?	26	16<	逆台	15	
4225	ピット	円	20	18	コ	8	
4226	ピット	楕円	58	40	U(不整)	19	
4227	ピット	楕円(不整)	50	32	逆台	17	
4228	ピット	楕円	70<	56<	U	34	
4229	ピット	楕円?	22<	28	皿状	7	側溝に切られる
4230	ピット	隅丸方	54	46	皿状	9	
4231	ピット	楕円	58	50	五角	25	
4232	ピット	楕円	38	30	U(尖る)	27	
4233	ピット	楕円?	40<	20<	U	15	
4235	ピット	隅丸方(不整)	56	52	逆台	37	
4236	柱穴	隅丸方(不整)	52	42	逆台(不整)	26	竪穴建物3
4237	ピット	隅丸方(不整)	28	24<	U	26	4237ピット<4236柱穴
4238	ピット	楕円	42	34	逆台	24	
4239	ピット	円	30	26	U	38	
4240	柱穴	楕円	36	28	U	57	竪穴建物3
4241	ピット	楕円	24	20	皿状	6	
4242	ピット	円(角張る)	44	44	U(不整)	22	4243ピット<4242ピット
4243	ピット	隅丸方	52	42	皿状(凹凸)	17	4243ピット<4242ピット
4244	ピット	楕円	36	30	逆台	25	
4245	柱穴	円(角張る)	48	44	U	44	竪穴建物4
4246	ピット	隅丸三角	68	50	V(不整)	32	4b面
4248	ピット	楕円	34	26	皿状	10	
4249	ピット	円	12	12	U	7	
4250	ピット	楕円	20	16	U	9	
4254	ピット	楕円	50	40	V	56	
4255	柱穴	楕円(不整)	76	70	V	75	竪穴建物3
4257	ピット	楕円	32	26	V(不整)	25	
4258	ピット	円	34<	54	V(不整)	36	
4259	ピット	楕円	54<	48<	U	36	4259ピット<4246ピット
4261	柱穴	楕円(不整)	76	66	V	74	竪穴建物3、4261柱穴<4219土坑
4262	ピット	楕円	60	48<	U(不整)	37	4c面
4264	ピット	楕円?	58	48	コ(不整)	27	4b面・4c面
4266	ピット	楕円(不整)	58	56	V	31	4c面
4267	ピット	円	62	50<	V(不整)	24	4b面・4c面
4268	ピット	隅丸三角	52	50	V(不整)	35	4c面
4269	ピット	円?	50	26<	V(不整)	31	4c面
4270	柱穴	楕円	46	40	V(不整)	48	4c面・竪穴建物4
4271	柱穴	楕円(角張る)	56	40	V(不整)	50	4c面・竪穴建物4、4271柱穴<4270柱穴
4272	柱穴	隅丸方	54	46	V	31	4c面・竪穴建物4、4278柱穴<4272柱穴
4273	ピット	円?	50	32<	V(不整)	34	4c面
4275	柱穴	隅丸方	46	46	コ	36	4c面・竪穴建物4、4276柱穴<4275柱穴
4276	柱穴	円?	38	18<	U?	24	4c面・竪穴建物4、4276柱穴<4275柱穴
4277	柱穴	楕円	52<	32<	U(尖る)	60	4c面・竪穴建物4、4277<4271<4270柱穴
4278	柱穴	楕円	54<	40<	コ	33	4c面・竪穴建物4、4278柱穴<4272柱穴

第6節 出土遺物

高住宮ノ谷遺跡の調査で出土した遺物について以下で述べる。基本的に調査区で分けているが、隣接する調査区で接合した資料もある。土器・土製品、石器・石製品、木製品については調査区ごと、金属製品は一括している。

1 土器・土製品

(1) 1区出土土器 (第120図、PL.41)

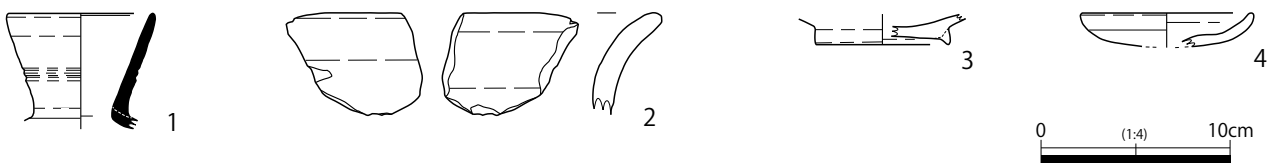
1区は丘陵斜面ということもあり、遺物の出土量は少ない。

1は須恵器提瓶の口縁部である。頸部から直線的に開き、外面中程に2条の凹線が巡る。2は土師器甕の口縁部である。頸部からゆるやかに外反し、端部は丸く収める。厚手であるため、移動式かまどの口縁部の可能性も考えられる。3は土師器高台付杯の底部で、平坦な底部の外縁から体部にかけての部位に断面三角形の高台がつけられる。底面には回転糸切りの痕跡を残す。4は土師皿である。底部は丸みを帯び、内湾して口縁部へ至る。手捏ねにより製作される。

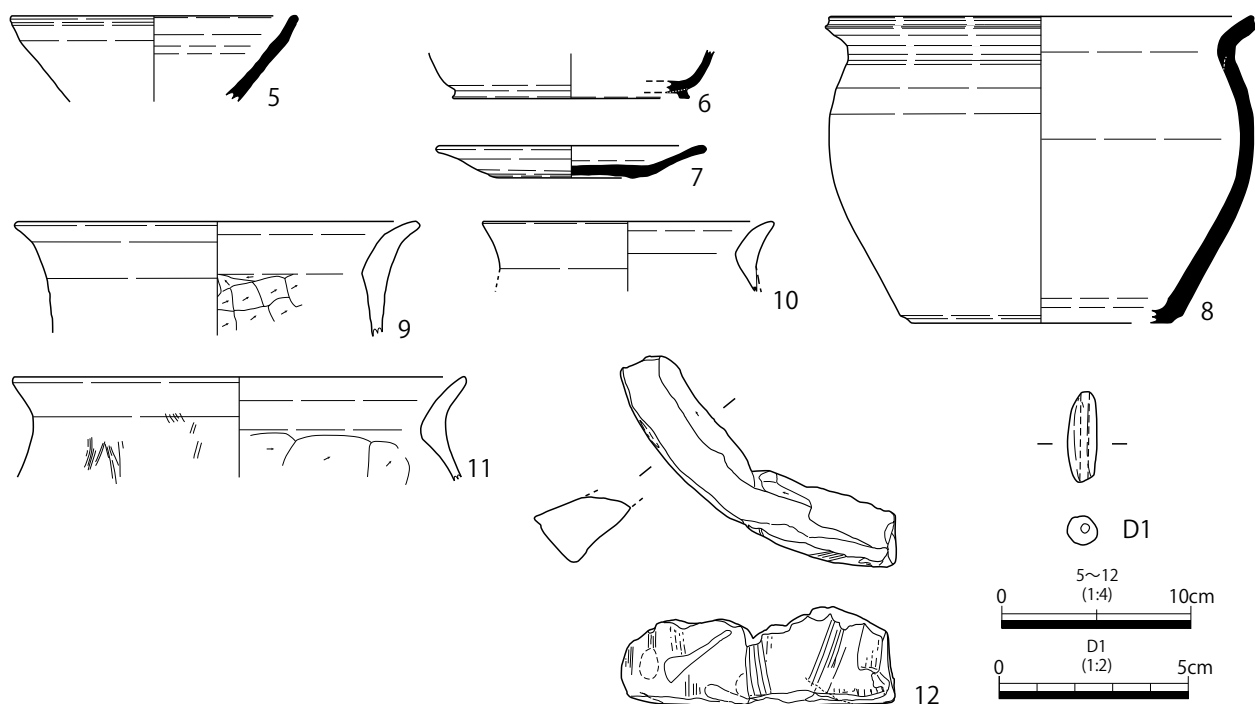
(2) 2区出土土器・土製品 (第121図～第131図、PL.41～51、66～69)

2区では西部と東部で遺物の出土が多い。以下、遺構面ごとに遺構出土、包含層出土の順に説明する。
第1面遺構出土

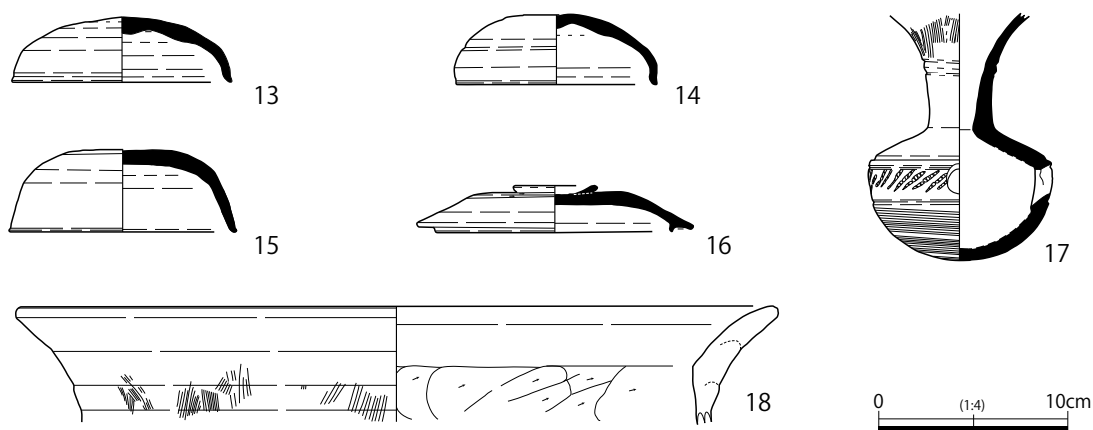
5は須恵器椀で、体部は直線的に開き、口縁部直下でわずかに屈曲する。端部は面取りされる。121ピット出土。6は須恵器高台付杯である。平坦な底部から内湾して体部へ移行する。断面台形の低い高台を付す。341溝出土。7は須恵器皿で、浅い器形である。底部はやや上げ底となっており、外面に回転糸切りの痕跡を残す。体部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く仕上げられる。8は須恵器鉢である。底部は欠損するがおそらく平底で、体部への移行部では内面を強くなでている。また、外面も段をもつ。体部は底部から斜め外方へ直線的に立ち上がったのち緩やかに内湾する。中位よりやや上部に最大径を持つ。口縁部は短く屈曲し、端部をなでて凹ませている。7、8は303ピット出土。9、10、11は土師器甕の口縁部である。9と10は頸部から口縁部にかけての屈曲が弱い、11は比較的屈曲が強い。いずれも体部内面はヘラケズリ、口縁部はナデである。3点とも274柱穴出土。12は移動式かまどの基部と考えられる。図の右端はカットされた面となっているが、わずかに暗色で粘土の付着が見られることから、剥離面と考えられる。おそらく、かまど焚口の両側につける底の接合痕であろう。底面には粘土の接合痕が見られ、長い粘土紐ではなく10cm程度の粘土棒を用いて基部を製作している可能性が考えられる。19ピットおよびトレンチ6出土。D1は38ピット出土の土錘である。



第120図 1区 出土土器



第121図 2区 第1面遺構出土土器



第122図 2区 第1面包含層出土土器

第1面包含層出土

13～16は須恵器蓋である。13は丸みのある天井部からやや内湾して体部が延びる。口縁端部はわずかに外につまみ出され外反する。14も丸い天井部から斜めに体部が延び、やや強く屈曲する部分に1条の沈線が巡る。15は平坦な天井部から直線的な体部へ移行する。口縁端部はわずかに外につまみ出され、内面には面が形作られる。16は内面にカエリを有する。平坦な天井部から斜めに体部が延び、口縁部へ至る。カエリは口縁端部より下方へ突出する。天井部には、輪状を呈するつまみがつけられる。薄く比較的長く斜めに突出する。17は甗で、口縁部を欠く。底部～胴部は球形に近く、2条の沈線が巡る肩部付近で最大径となる。胴部に巡る沈線との間に板状工具による列点文が巡る。直径1.4cmの孔がある。肩部で屈曲し、頸部にかけては直線的となる。口縁部は中程に2条の沈線が巡り、それより上位はハケ調整が行われる。18は器壁が厚く、復元直径が40cmと大型である。

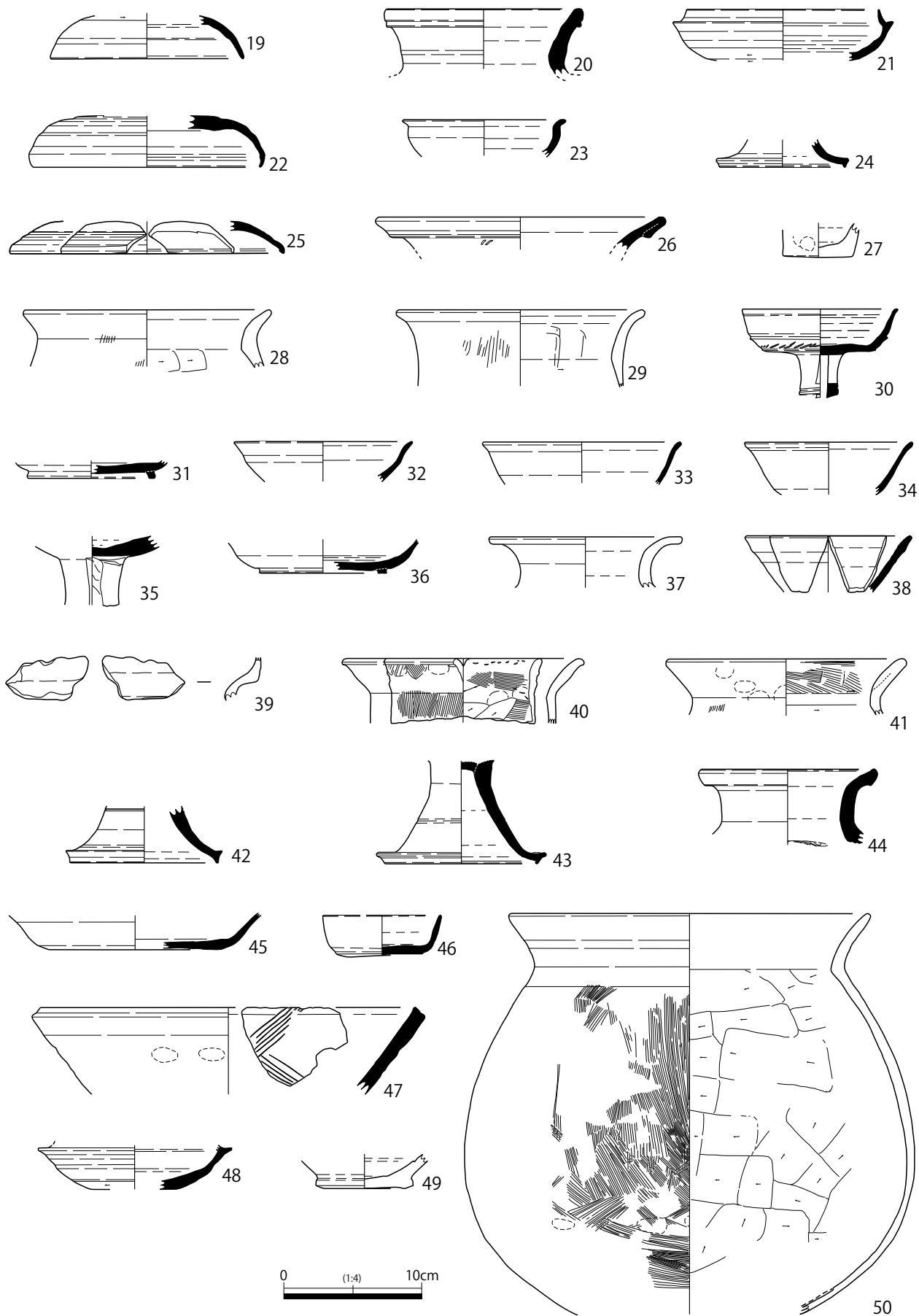
体部内面のヘラケズリを行う調整やその他の特徴などから甕と判断した。外面は頸部からゆるやかに外反する。内面は下半がケズリ、上半がナデで調整される。また、外面は頸部付近にハケ目が認められる。外面には粘土紐の接合に伴う段が存在する。

第2面遺構出土

19は須恵器蓋である。天井部からゆるやかに口縁部に至る。西部720ピット出土。

20～39は東部上段の遺構出土である。20は須恵器壺口縁部である。頸部から外傾して短く延び、端部は肥厚し下方に段を持つ。21は須恵器杯身で底部を欠く。体部は緩やかに立ち上がり、受け部へ至る。受け部上面はわずかに内傾する。口縁部は受け部から内方に、やや外反しつつ立ち上がる。22は須恵器杯蓋である。平坦な天井部からやや内湾するように体部へ移行し、口縁部は内面にかすかな段を持つ。天井部内面に同心円当て具痕をナデ消した痕跡が確認できる。23は須恵器杯身で底部を欠く。緩やかに内湾する体部から口縁部が外方へ短く折れる。端部は丸く収める。24は須恵器高杯脚部で端部付近のみの破片である。端部は下方へつまみ出される。25は須恵器蓋である。平坦な天井部から斜め下方へ直線的に体部が延び、口縁部端部は下方に短く折れる。復元径は20cm程度だが、若干ゆがんでいる可能性もある。26は須恵器甕口縁部端部である。大きく外反する口縁部端部を外面へ折り返して肥厚させる。27は平底の底部である。弥生土器の可能性が考えられる。28、29は土師器甕である。28は頸部から口縁部へかけて外反する。29は直線な頸部から口縁部付近で外反する。内面ヘラケズリは比較的下方で終わっており、口縁部が長い形状となっている。30は須恵器無蓋高杯の脚部上半～杯部である。杯部は平坦な底部から斜めに短く体部へ移行し、段を作った後、直線的に延びて端部はわずかに外反する。体部下位の斜面部に板状工具による列点文が施される。脚部はやや細身で、2方向に2段透かしが穿たれる。中位に巡らした2条の沈線下に透かしの上縁が残る。31は須恵器高台付杯の底部である。高台は断面平行四辺形で、端部外方が丸く収められる。底部外面は回転糸切りの痕跡が認められる。32～34は須恵器杯で、ほぼ同様の器形である。いずれも器壁が薄く、底部から斜めに体部が延び、わずかに内湾した後外反させる。35は須恵器高杯の杯部～脚部へかけての破片である。2方向の透かしが穿たれる。36は須恵器高台付杯で、口縁部は欠損する。底部から緩やかに体部へ移行する。高台は方形で低い。底部外面に回転糸切りの痕跡が認められる。37は土師器甕の口縁で頸部から大きく外反し、端部付近でほぼ水平になる。端部はそのまま丸く収められる。38は須恵器碗で、直線的に開く器形である。端部は若干厚くなり、丸く収められる。39は弥生土器甕の口縁部である。風化が進んで表面が剥離し、調整は残っていない。

40～50は東部下段の遺構出土である。40、41は土師器甕口縁部である。ともに頸部から斜めに折れ直線的に口縁が延びる。40の端部は外方につまみ出され、端部には指頭圧痕が認められる。41の外面は直線的だが、内面は中程が肥厚しており、この部分に粘土紐の接合痕が確認できる。42、43は須恵器高杯脚部である。42は2条の沈線が巡る中位以下の部分で、八字状に開く。端部は上下に拡張し、端面を凹ませる。43は杯部との接合部で剥離している。八字状にゆるやかに開き、端部付近で折れて外反する。端部は外方と下方につまみ出され、それぞれ丸く収める。44は須恵器横瓶の口縁部である。頸部から直線的に立ち上がった後、外反して口縁へ至る。端部は外方へやや肥厚させる。45は須恵器皿で口縁部を欠く。体部は平坦な底部からやや外反するように斜めに延びる。回転糸切り。46は須恵器杯である。底部から体部が急角度で直線的に立ち上がる。体部は中ほどでわずかに厚く



第123図 2区 第2面遺構(個別)出土土器

なり、端部は丸く収められる。底部外面に板状の圧痕が存在する。47は須恵器鉢である。直線的な体部で口縁部端部をやや凹ませて上方へ突出させる。内面に櫛描きの平行線が存在する。48は須恵器杯身で、口縁部の立ち上がりを欠く。底部からやや低く体部が延び、やや低平な受け部へと至る。49は白磁椀である。削り出し高台内側が突出し、高台と同じ高さとなる。内面に沈線が巡る。50は土師器甕である。体部はやや寸詰まりで最大径を下位にもつ。底部から体部への移行部分では緩やかな稜をもち、このすぐ下方に横長の凹みが列状に確認できる。体部上半は比較的直線的で、頸部の屈曲も弱い。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。外面調整は上半でタテ～ナナメハケであるが、底部のヨコハケに切られる。外面はススが比較的厚く付着するが、稜以下の底部ではほとんど認められない。さらに、底部は被熱によるものか、2層に剥離している。

[524 溝出土土器]

524溝からは土師器甕を中心に多くの土器が出土した。51～53は須恵器蓋である。51、52はやや器高が高く、内面で平坦な天井部から体部への変換部が認められる。天井部に比べ、体部は薄く作られ、口縁部は若干外反する。53は器高がやや低く、天井部から口縁部へカーブする。口縁部は端部でわずかに外反し、丸く収める。54は須恵器短頸壺である。やや肩が張った胴部に短く直立する口縁部を持つ。口縁端部は外面をやや肥厚させ、端部外面に面を持つ。55は須恵器杯身である。底部を欠く。やや直線的な体部から続く蓋受け部を持つもので、口縁部は斜め内方に直線的に延びる。端部は丸く収める。56は土師器椀である。丸みを帯びた底部から内湾して体部へと移行し、口縁部下位で直立し、端部は若干外反させる。軟質で風化が進行し、調整はほとんど残らないが、底部外面に横長の面が認められ、ケズリ調整が行われた可能性が高い。57は直径5cmほどの底部であり、平底から体部がほぼ垂直に立ち上がる。風化が進むもので、弥生土器が混入したものだろう。

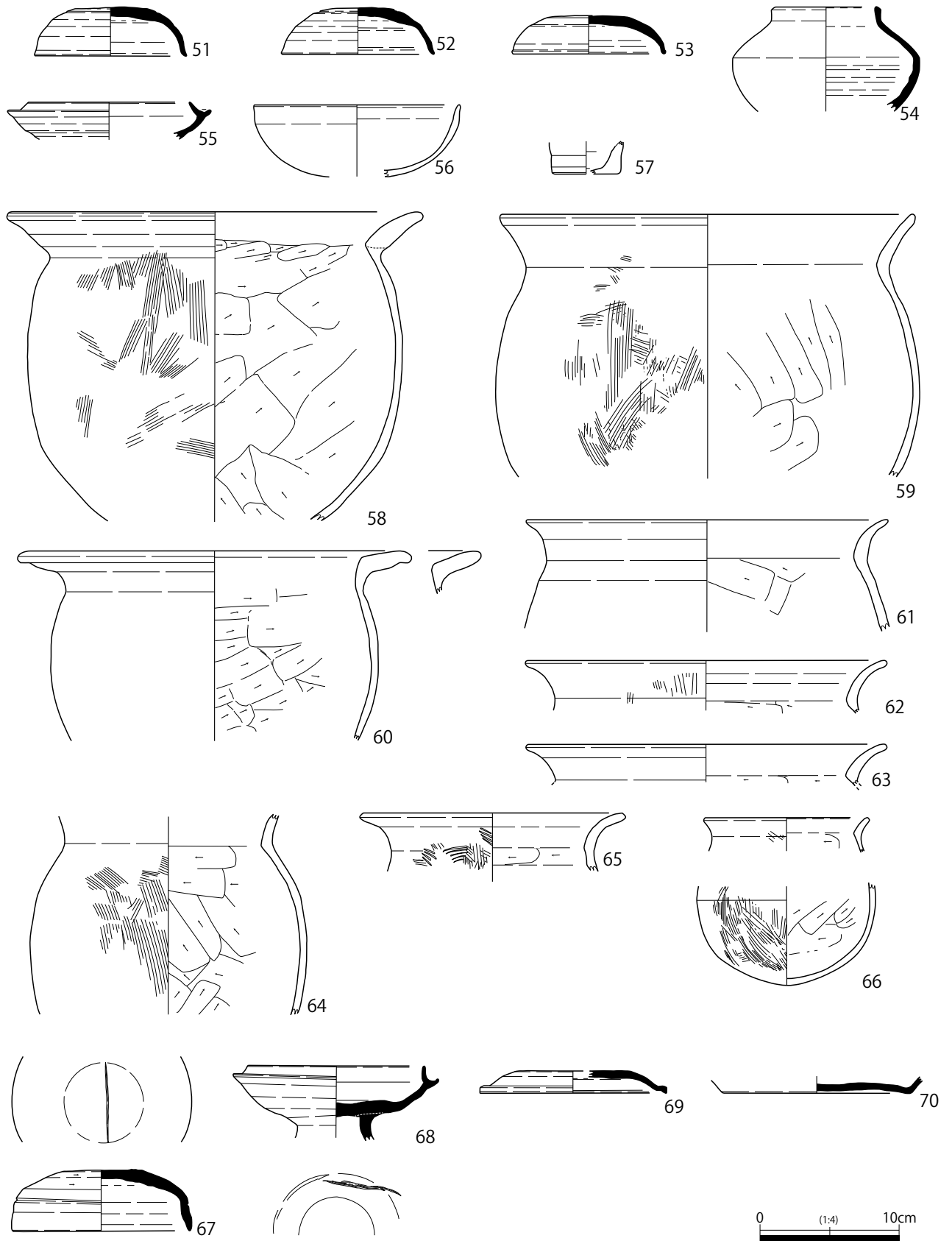
58～66は土師器甕で、このほかに凶化できなかつたものもあり、10個体以上が存在したと考えられる。直径が25～30cmの大型品、20cm程度の中型品、15cm以下の小型品の3種類が存在する。口径が胴部径を超えるもの(58、60)と、胴部径が口径より大きいもの(59、61、64)が存在する。また口縁部も頸部から急角度で直線的に延びるものと、直線的だが頸部であまり急角度とならず、く字状を呈するもの、頸部の屈曲がゆるやかで口縁部が外反するものなどがある。いずれも体部外面はハケ、体部内面はケズリ、口縁部は横ナデで調整される。外面へのススの付着、被熱による赤変や表面の剥離も顕著で、繰り返し火を受けたことが想定できる。

[560 溝出土土器]

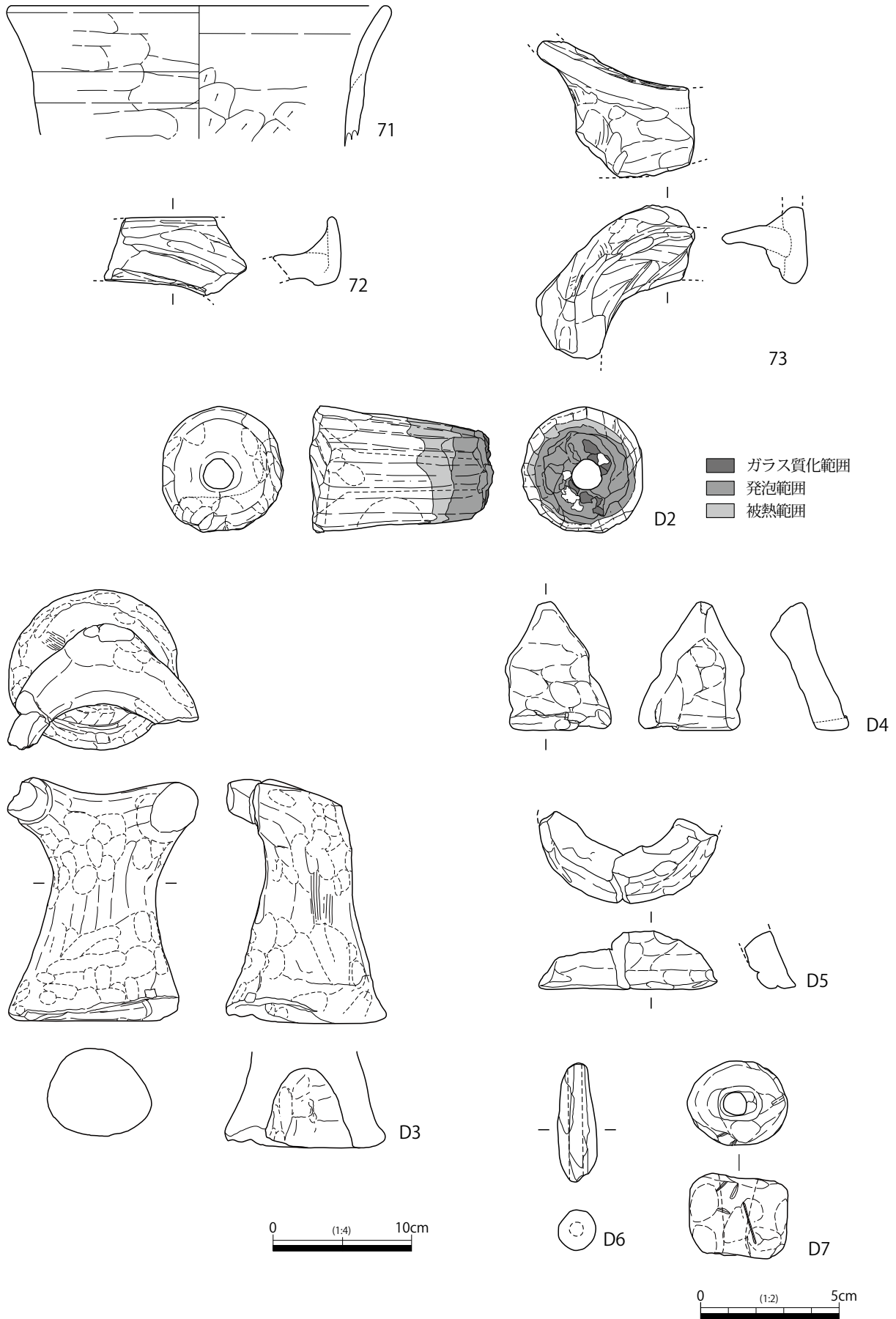
67は須恵器蓋である。平坦な天井部から斜めに体部が延び、屈曲して口縁部へ至る。この部分に1条の沈線が引かれる。上面に1本のヘラ記号が刻まれる。68は須恵器高杯である。脚部は杯部との接合部付近のみが残る。杯部は平坦な底部から斜め上方に体部が延び、丸みを帯びた蓋受け部が形成される。口縁部は斜めに直線的に立ち上がる。脚部は杯部との接合部で直径7cm程度とやや太く、透かし孔は残存部には認められない。杯部底部外面に、脚部の接合後に刻まれたヘラ記号が存在する。なお、破片を接合したところ、接合面に解消できない隙間が残ったことから、もともとヒビが入っていた可能性が高い。

[500 溝出土土器]

69はカエリのないタイプの須恵器蓋で、平坦な天井部から体部が斜めに直線的に延び、口縁部付近で再度平坦となり、口縁部は下方に直線的に短く突出する。天井部には回転糸切り痕を残す。70



第124図 2区 第2面遺構(524・560・500溝)出土土器



第125図 2区 第2面遺構出土遺物（甑、移動式かまど、土製品）

は須恵器皿で口縁部を欠く。やや上げ底の底部から屈曲して直線的に体部へ移行する。底部外面に回転糸切り痕を残す。

〔遺構出土甑・移動式かまど・土製品〕

71は甑と考えられる。口縁部にかけてゆるやかに開く形態で、表面は風化が進行しているが、外面～内面上半ナデ、内面下半はヘラケズリで調整する。72、73は移動式かまどの破片である。72は焚口部上端から掛口にかけての破片で、底先端は欠損する。掛口高が低いのが特徴である。73は底状を呈する部位で、本体のカーブから、付属かまどの掛口からつながる底部分と考えられる。底を貼り付ける前に、接合を強化するため本体に溝を彫り込んでいる。

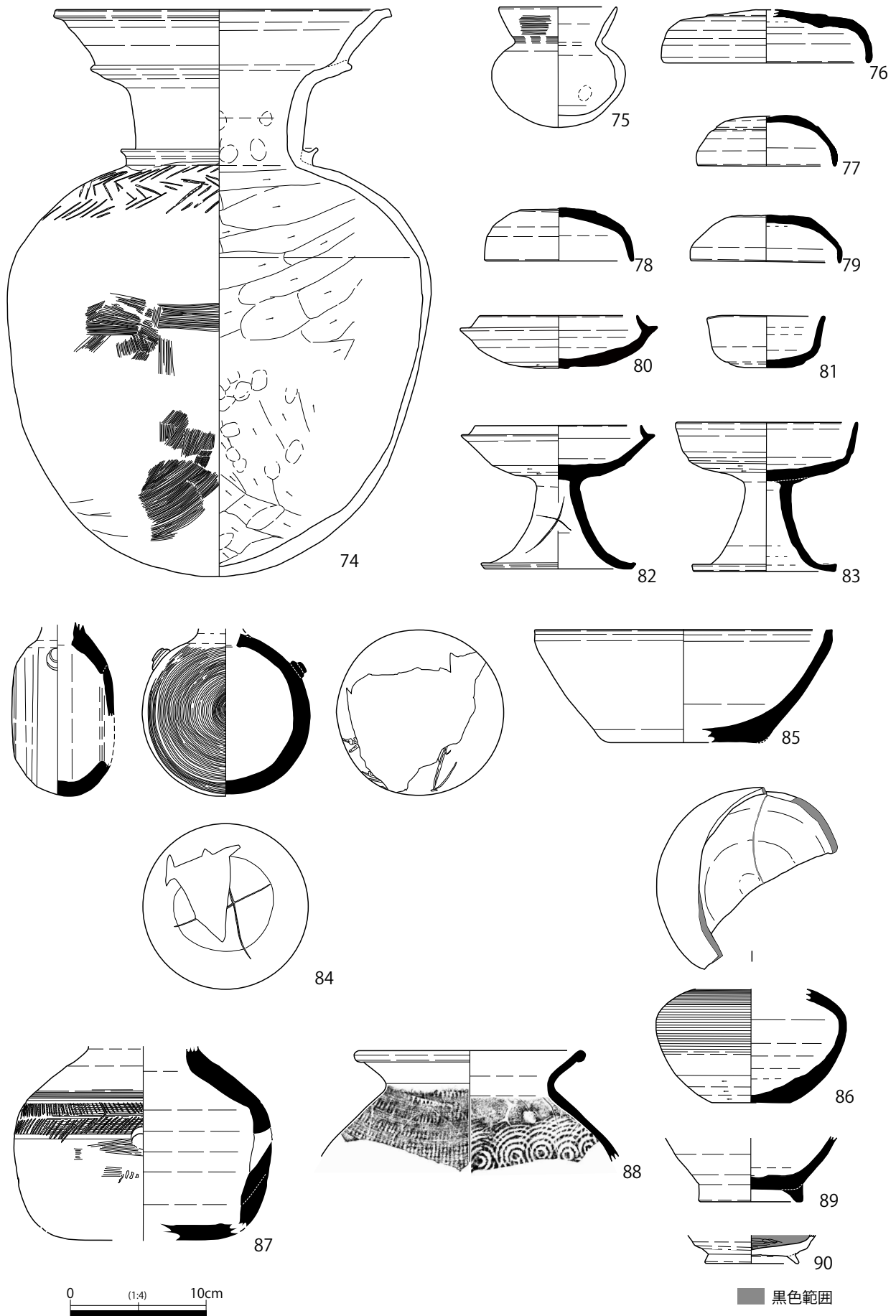
D 2は鞆羽口である。わずかに削れている部分はあるが、ほぼ完形品である。炉側を先端、その反対側を基部とする。截頭円錐形で、直径2.2cmの通風孔が貫通し、基部側はラッパ状に広がっている。孔内には棒状工具の抜き取り時についたと考えられる線状の痕跡が認められる。側面には、おおむね平行する槌状の圧痕が多数存在する。圧痕の断面は弧を描くことから、棒状のものの圧痕と考えられる。同様の圧痕は基部にも若干認められる。この圧痕は重複せず切り合いもないことから、芯棒に粘土を巻き付け、すだれ状の道具で巻いて形作ったものと想定できる。基部には芯棒に粘土板を巻き付ける際の粘土接合痕と考えられる筋が存在する。表面は先端から最大6.0cmまでが変色し2.5cm程度が高熱により発泡している。先端面では黄緑色のガラス状を呈する部位が存在する。

D 3～D 5は土製支脚である。中実に作った截頭円錐形の体部上にY字形に2個の突起部と1個のつまみが存在する頭部が作られる。D 3は突起の先端とつまみ部を欠き、基部の一部も欠損するが、ほぼ全体が残っており、全形をうかがい知れる資料である。基部はわずかに裾開きで、内面は高さ5.8cmの上げ底となっている。底面には部分的に粘土を貼り足しているようで、その部分で剥離している箇所がある。また、外面にそれに伴う粘土の段がわずかに認められる。胴部は截頭円錐形で、断面はやや横長になる。頭部には2個の突起が上から見てU字形に湾曲するように付けられる。突起部は体部から続けて製作しているが、つまみ部は粘土を別に貼り足しているようである。つまみ部の形状は不明だが、剥離面からは断面円形のものが想定できる。調整は基本的に縦方向のナデ調整であるが、一部縦ハケが残る。基部と頭部には指頭圧痕が顕著に見られる。突起部と基部前面側を中心に被熱により赤変、あるいは表面が剥離している。D 4は基部の破片で、内面の上げ底がわずかに高いほかはD 3とほぼ同様の形態である。また、基部に粘土を貼り足す点も同じである。D 5も基部の破片で、同様に上げ底の形態である。端部外面は横ナデ調整である。なお、この破片はピット出土のものと4区包含層出土のものが接合した。D 6は土錘である。紡錘形で一方の端部を欠損する。D 7は土玉で短い楕円筒形を呈し、片方の端面から棒状工具を刺して穿孔する。

第2面包含層出土土器

〔西部〕

74は谷奥部分で662土器群として取り上げたもので、接合の結果1個体分の土師器二重口縁壺が復元できた。体部は肩が張り、その直下に最大径を持つ。また、やや角張った寸詰まりの形態をとる。肩部～頸部には板状工具による羽状文が3段にわたり互い違いにつけられる。調整は外面ハケ、内面ケズリ調整であるが、底部と胴部下半では指頭圧痕が比較的明瞭に観察できる。一次口縁は頸部からわずかに外傾し直線的につくり、外方に折れて端部を方形に収める。頸部には上下両面をつまみ出し



第126図 2区 第2面(西部)包含層出土土器

て突出長が長い突帯が巡らされる。一次口縁の端部上面に刻みを入れ、端部下稜を段として残すように二次口縁を作る。接合面は内方へ薄くのぼされる。二次口縁はほぼ直線的で、端部で外方へ折り曲げて上面に平坦面をなす。端部は四角く収める。75は土師器小型丸底壺である。扁球形の胴部と直線的に開く口縁部からなる。口径よりも胴部径の方が大きく、最大径は中ほどより上位である。胴部外面は荒れて調整不明、内面は下半ケズリ、上半ナデである。口縁部外面の頸部近くにわずかに段を有する。口縁部はナデ、外面にわずかに横ハケが残る。

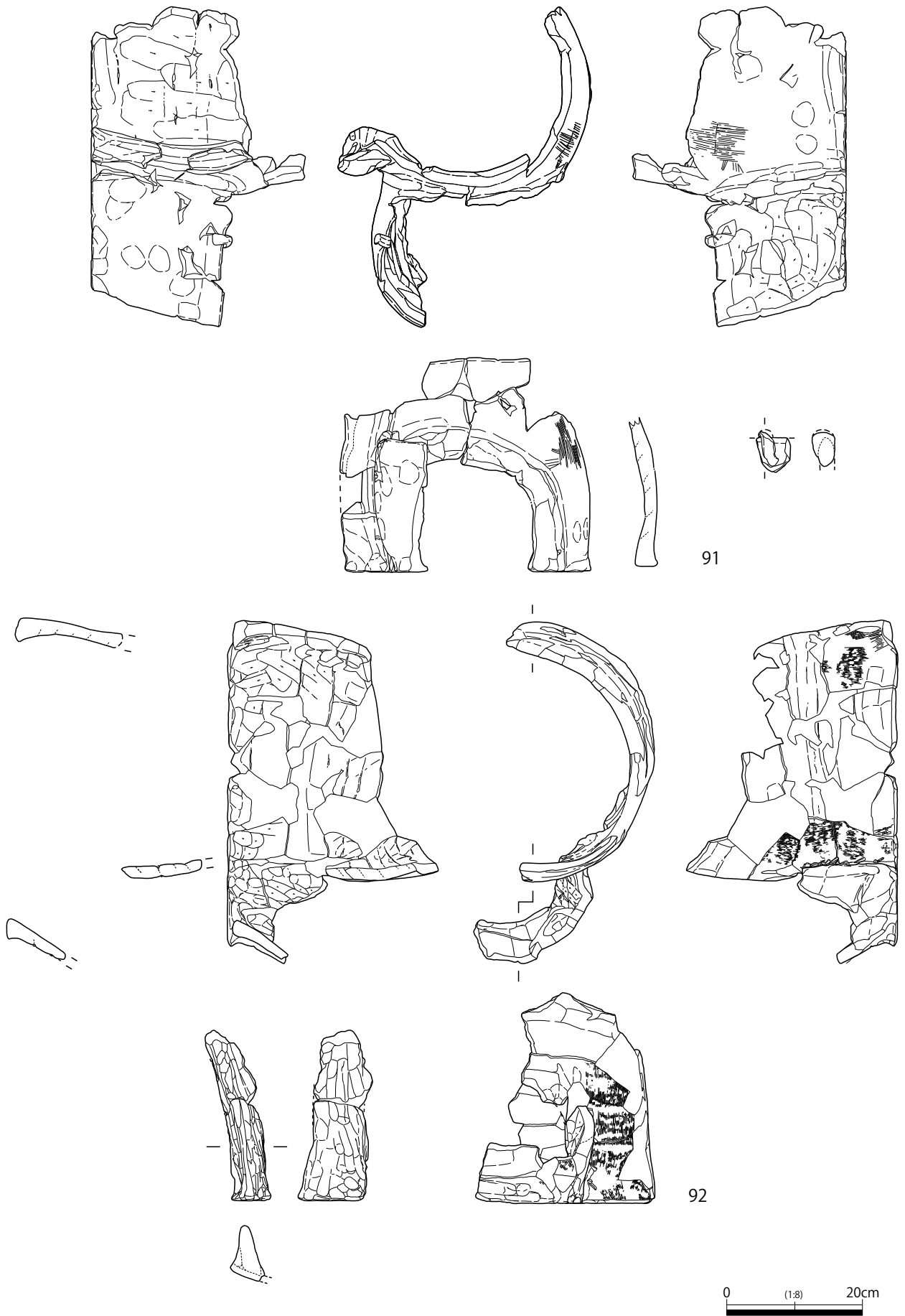
76～79は須恵器杯蓋である。76はやや径が大きく、平坦に近い天井部から屈曲して口縁部に至る。天井部ヘラ切り後ナデ調整。77は径に比して器高が高い。天井部から体部への変換点付近に1条の沈線が巡る。78は平坦に近い天井部から下方に折れまがり口縁部へ至る。天井部にヘラ切り痕を残す。79は平坦な天井部から斜めの体部が延び、口縁部は下方に折れて作られる。80は蓋受け部を持つ須恵器杯である。やや厚手の体部から平坦な受け部へと移行する。口縁部は斜め内方へ立ち上がり、薄く収める。底部外面回転ヘラケズリ。81は小型の杯で、平坦な底部から急角度に体部が立ち上がり、口縁端部へかけてわずかに外反して丸く収める。82、83は須恵器高杯である。82は有蓋高杯である。杯部は平坦な底部から体部が斜め上方へ延び、受け部へつながる。口縁部立ち上がりは内方へ斜めに比較的短く作られる。底部外面に回転ヘラケズリが残る。脚部は八字状に開く形状で、透かしを持たない。端部は上方へ若干突出する形態である。中ほどに「×」状のヘラ記号がある。83は無蓋高杯で、杯部は平坦な底部から屈曲して上方に体部が延びる。屈曲部外面に段を有する。脚部は82ほど開かずに端部近くで大きく屈曲する形態で、端部はやや厚くなる。

84は胴部最大径が12.2cmの小型埴瓶である。肩部に二重に粘土粒を貼り付け把手を表現する。製作時の底部側に「×」状ヘラ記号がある。また、製作時の上面側は大半が破損しているが、ヘラ書き線の端部がわずかに認められる。方向や重複関係から、単なる記号ではなく絵や文字などの可能性も考えられる。85は須恵器鉢。底部から直線的な体部がわずかに内湾して延び、口縁端部付近で上方に立ち上げる。86は須恵器長頸壺の体部で、平坦な底部を有する。破断面に漆が付着しており、破片同士が接合した面にも漆が認められる。漆を接着剤として補修した痕跡であろう。87は大型の甕である。底部は接合しないが平底を呈し、強く屈曲して体部へ立ち上がる。体部は直線的で、板状区具による羽状文が巡る肩部で屈曲して頸部へ直線的に延びる。体部中ほどにタタキの痕跡らしき平行する線状窪みがカキ目の下に残る。88は須恵器甕である。器壁が比較的薄く、焼成も堅緻である。口縁部は頸部から直線的に延び、端部は外方に折り返して丸く玉縁状に作る。89は須恵器杯で、口縁部を欠く。三角形のやや大型の高台を持つ。高台内に回転糸切りの痕跡が認められる。体部はやや内湾しつつ直線的に開く。90は内黒土器の杯である。内面に細かな単位でミガキが施され、炭素を吸着させる。底部外縁に外方へ開く薄い高台がつけられる。

[移動式かまど]

91は谷奥部分で664・665土器群として取り上げたものである。接合の結果、「付属かまど付移動式かまど」であることが判明した。本体半分弱と付属部の3分の1程度が残存する。本体部分には焚口右側面につけられる庇部分が残存する。

本体は全高31.5cm、外径で40cm程度に復元でき、基部からほぼ垂直に立ち上がった後若干すぼまる形態となり、そのまま直線的に掛口へ至る。比較的厚い造りで、基部で厚3.0cm、体部で2～2.5cmであるが、掛口端部では1.0cmと薄くなる。焚口側面の庇は基部で突出長7cm、本体接合面での幅



第127図 2区 第2面(西部) 包含層出土移動式かまど

4 cm で、焚口側へ若干湾曲し、先端は丸く収める。本体との接合部に幅 1.5cm、深さ 1 cm 程度の断面半円形の溝を彫り、そこに底となる粘土板を接合した後、焚口側に粘土を補充している状況が観察できる。調整は器壁が荒れて観察できない部分も多いが、外面下半ナデ、上半縦ハケ、内面基部付近横ナデ、それ以上はストロークの長いケズリである。内面に粘土紐の積み上げ痕が残り、一単位は 2～2.5cm 程度である。

付属部は、残存部分の形態から、基部では半円形、上部では前方へ広がって円形に近い形態となると考えられる。最大径 30cm 程度である。本体に接続する部分の開口部は幅 17cm 程度、高さ 16cm でややゆがんだ隅丸台形を呈す。開口部周辺は全体に剥離面となっており、付属部および開口部上部の底の剥離痕と考えられる。付属部と本体との接合部分には、焚口のような溝を彫る造作は認められない。付属部は上端までの最大高 19.6cm で、本体との接合部から 8.5cm の所に幅 1.5cm、突出長 1.3cm の突起がつけられる。突起がつけられた付近から本体との接合部にかけて徐々に内湾しており、上端がそのまま開口部上部の底に接続する。内面では、本体との接合部から 7 cm、基部から 8.5cm の箇所に、幅 5.0cm、高さ 3 cm 程の長方形を呈する剥離面が存在する。内面に突起がつけられていたと考えられる。付属部外面はナデ、内面は横～斜め方向のケズリで調整される。

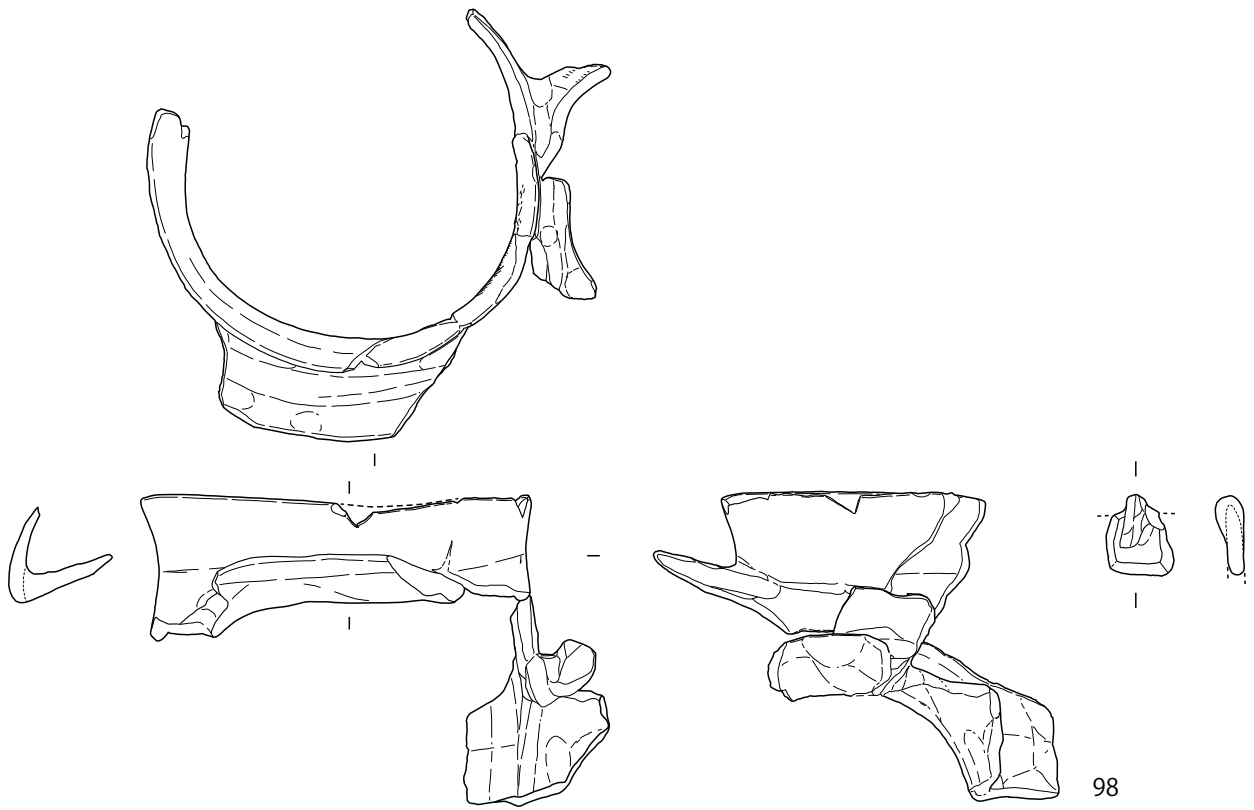
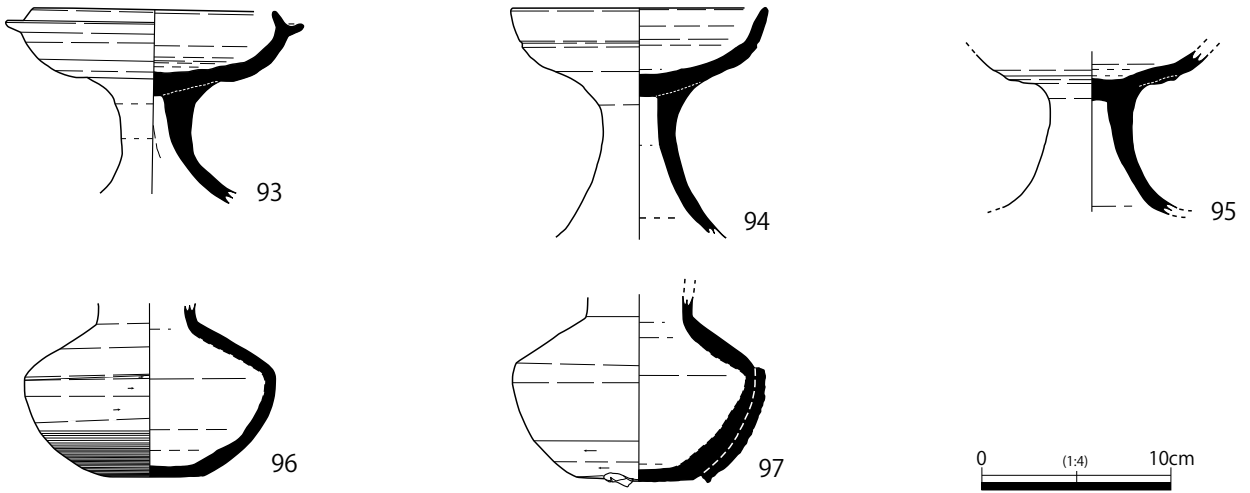
92 も谷奥部分で 663 土器群として取り上げたもので、91 同様「付属かまど付移動式かまど」である。本体半分弱と付属部下半の半分程度が接合できたほか、焚口右側面の底部分などが残る。本体は基部外径で 40cm 程度に復元でき、掛口端部を欠くが、残存高は 31cm あり 91 より若干高くなることが想定できる。基部と上部では径に大きな差はなく、円筒形に近い形状であったと考えられる。また、付属部右側、すなわち焚口の反対側へわずかに傾く。調整は風化で観察しづらいが、外面縦ハケ、内面下半はケズリである。粘土紐の積み上げ痕が比較的明瞭に観察でき、とくに付属部がつく開口部の上では間隔 2 cm 程度で右上がりの平行線状に残っている。底は高さ 25cm ほどが残っており、このカーブからすると開口部は隅丸台形を呈する可能性が高い。横断面三角形を呈し、基部で 9 cm と比較的突出が大きい。内面には本体部分がわずかに残るが、器壁が非常に薄く部分的にケズリが底部分まで及ぶなど、本体への底接合後に削って整形し、器壁も薄くしていることが分かる。

付属部は本体との接続部で高さ 14cm まで残る。付属部は前方へ大きく開く形状で、基部内面での本体からの突出長は 6 cm 程度である。付属部は本体に斜め方向の刻みを多数入れ、そこに接合しており、刻みの端部が残る。開口部は上縁がわずかに残り、高さ 15cm 程度の隅丸方形に近い形態に復元できる。この上部は剥離面であり、やはり底が存在したことが分かる。調整は風化により観察できない部分も多いが、外面基部付近はナデ、それより上部は縦ハケの可能性はある。内面は縦方向のケズリやナデが確認できる。

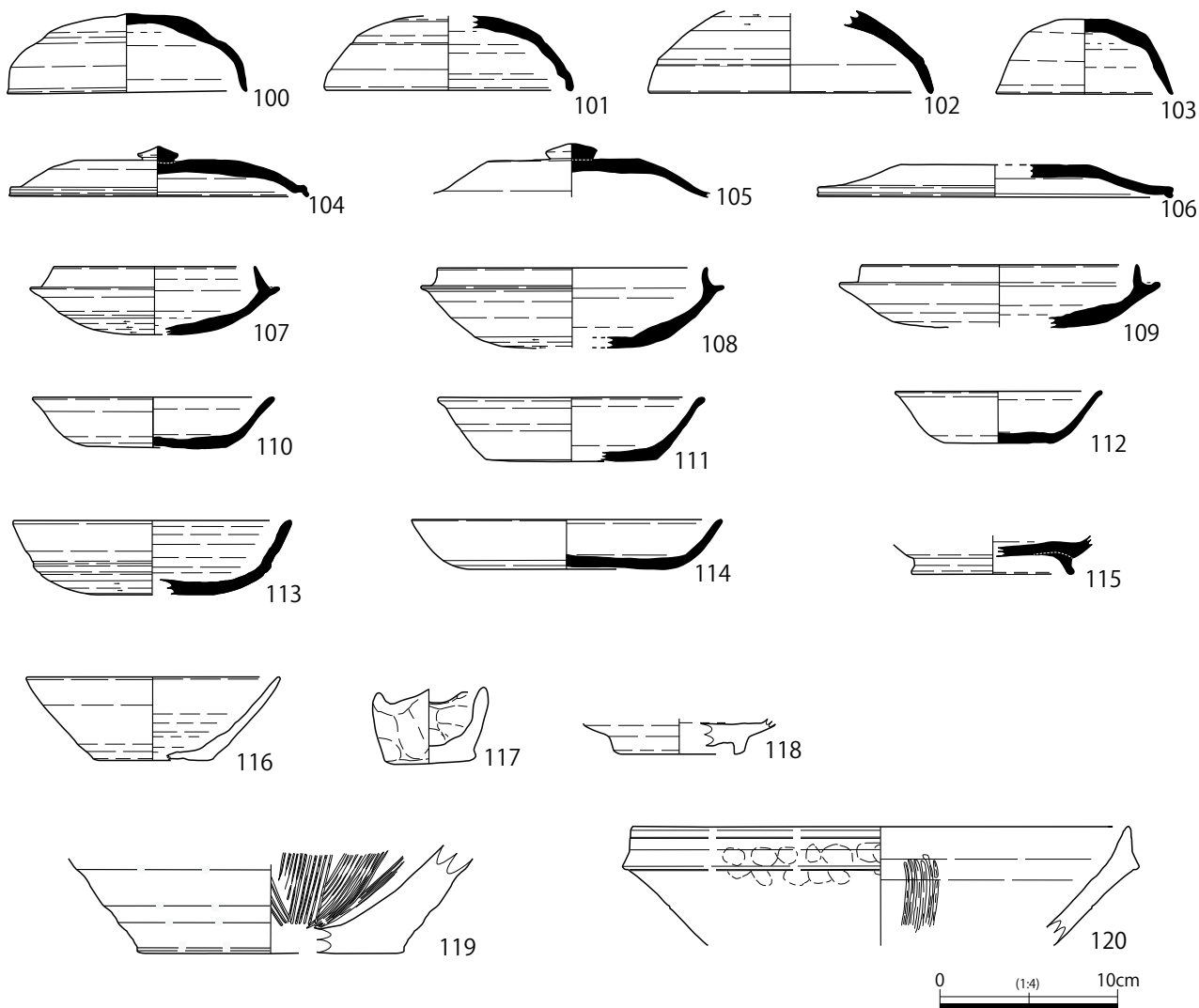
〔東部〕

93～99 は 914 土器群として取り上げた遺物である。93～95 は須恵器高杯で、いずれも脚部に透かしを有しない。93 は有蓋高杯で、杯部は底部から湾曲して受け部へ至り、受け部は外方へ突出する。口縁部は短く内方へ立ち上がって終わる。脚部は下半を欠くが、細く延びた後に大きく開く形状となる。94 は無蓋高杯で、底部から体部への屈曲部分に 1 条の沈線を巡らす。端部は厚く、丸く収める。脚部は八字状に開く形状をとる。95 は口縁部、脚端部を欠く。脚部の上端が杯底部外面に長く延びて接合する。96、97 は須恵器長頸壺の胴部で、どちらも頸部以上を欠くが、胴部は完形である。ほぼ同様の器形で、肩部で屈曲し、頸部へ直線的に延びる。96 は底部から胴部下半をカキ目、上半

第IV章 調査の成果



第128図 2区 第2面(東部) 包含層(914土器群) 出土土器



第129図 2区 第2面(東部) 包含層出土土器

をケズリ調整し、肩部に1条の沈線を巡らす。97は底部から胴部下半をヘラケズリで調整する。同心円当て具痕を有する別個体の破片が胴部に融着する。98、99は付属かまど付移動式かまどである。98は掛口から付属かまどの開口部にかけての部位と付属部上縁の突起の破片が確認できる。掛口は復元径30cm、頸部で若干くびれ、そこからゆるやかに外反する形状である。端部から8cm下に焚口が設けられ、上縁には庇が付けられる。庇は突出長最大7cmで、焚口上縁に合わせて付けられる。焚口の上縁は直線的で、おそらく隅丸台形を呈すると考えられる。付属部は開口部とその上縁に付けられた庇、およびそこからつながる側面の一部が残る。開口部の残存部は弧を描く。上縁に付けられた庇は短く、端部を上方に向ける。非常に砂の多い胎土で、風化が進行して全体に調整は不明瞭であるが、掛口内部にわずかにハケ目が残るほか、内面はケズリの単位が認められる。99は掛口から付属部開口部にかけての破片で、色調などが98とよく似ているが、部位が重複することから別個体である。掛口はあまり外反せず直線的な形態である。付属部開口部は直線部分が多く、全体としては隅丸台形を呈すると考えられる。開口部上縁の庇は98同様上方へ向く。庇からつながる付属部は厚さ1cmに満たず、薄い造りである。調整は外面ナデ、掛口内面は横ハケである。

100～120は東部包含層出土である。100～106は須恵器杯蓋で、100～102は蓋受がある杯と組み合う。104～106は平坦な天井部から斜めに体部へ至り、口縁部付近で水平になった後、口縁端部

は垂下させる。104、105は宝珠つまみをもつ。

107～112は須恵器杯身である。107～109は蓋受を有し、口縁部立ち上がりは斜め上方へ延びるものと、上方へ延びるものが存在する。110～112は蓋受を持たないタイプで、平坦な底部と斜めに延びる体部～口縁部を持つ。111は平坦な底部と体部の間に稜を有する。113は底部の剥離痕から高杯と考えたが、宝珠つまみをもつ蓋の可能性もある。114は須恵器皿である。平坦な底部から湾曲し、直線的に口縁部に至る。115は須恵器高台付杯である。高台は斜め下方に比較的長く延びる。116は土師器杯で底部から斜め外方に直線的な体部を有する。底部に回転糸切り痕を残す。117はミニチュア土器と考えられる。底部は平坦に作られる。118は青磁皿である。比較的厚い底部を持ち、断面台形の高台を削り出す。119、120は備前焼すり鉢である。119は底部で、比較的厚く、内面のスリ目は重複して櫛書きされるが、使い込まれてかなりすり減っている。120は口縁部で、端部は上下に引き延ばされ、中央が凹む。

121～125は西部で出土した移動式かまどおよび甑把手である。121は、付属かまど付移動式かまどの付属部分と考えられる。基部の大型の破片と、付属部が接合する開口部上縁部分、付属部上端の突起部の破片が存在する。側面は比較的直立するが、図の手前側で斜め外方に開く形態となる。なお、底面には長さ10cm程度で粘土塊の継ぎ目が認められる箇所がある。開口部上部の庇は、本体からやや斜め上方へ湾曲するような形態である。122、123は移動式かまどの焚口上部の庇である。122は掛口上端部が残り、やや外反する形態となる。124、125は甑の把手と考えられる。124は断面やや扁平で、上方へ湾曲している。本体に孔をあけて差し込み、周辺に粘土を補充している。125は湾曲せず直線的な形態で、基部側は剥離面となっている。本体に穿孔せず、周囲に粘土を補充することで接合しているのであろう。接合に伴い、指で押さえた痕跡が明瞭に残る。

〔土製品〕

2区からは多くの土製品（有孔土錘など）が出土しているが、ほとんどが表土中出土であり、包含層からの出土品はわずかである。

D8は土製支脚である。胴部上端の突起部へと移行する部分と考えられる。後方のつまみが剥離したとおぼしき痕跡が認められる。側面を中心に縦ハケ調整される。D9～D13は土錘である。直径1cm程度、全長4cm程度の小型品（D9～D11）と、中型品（D12、13）がある。D10、D11は須恵質の焼成。また、D13は円柱状を呈する。

（3） 3区出土土器・土製品（第132図～第143図、PL.49、50、52～57、66～69）

3区は谷部で非常に多くの遺物が出土している。谷部は耕作などによりかなり攪拌されており、上層と下層で破片が接合したものもある。以下、遺構出土と包含層出土に分けて説明する。

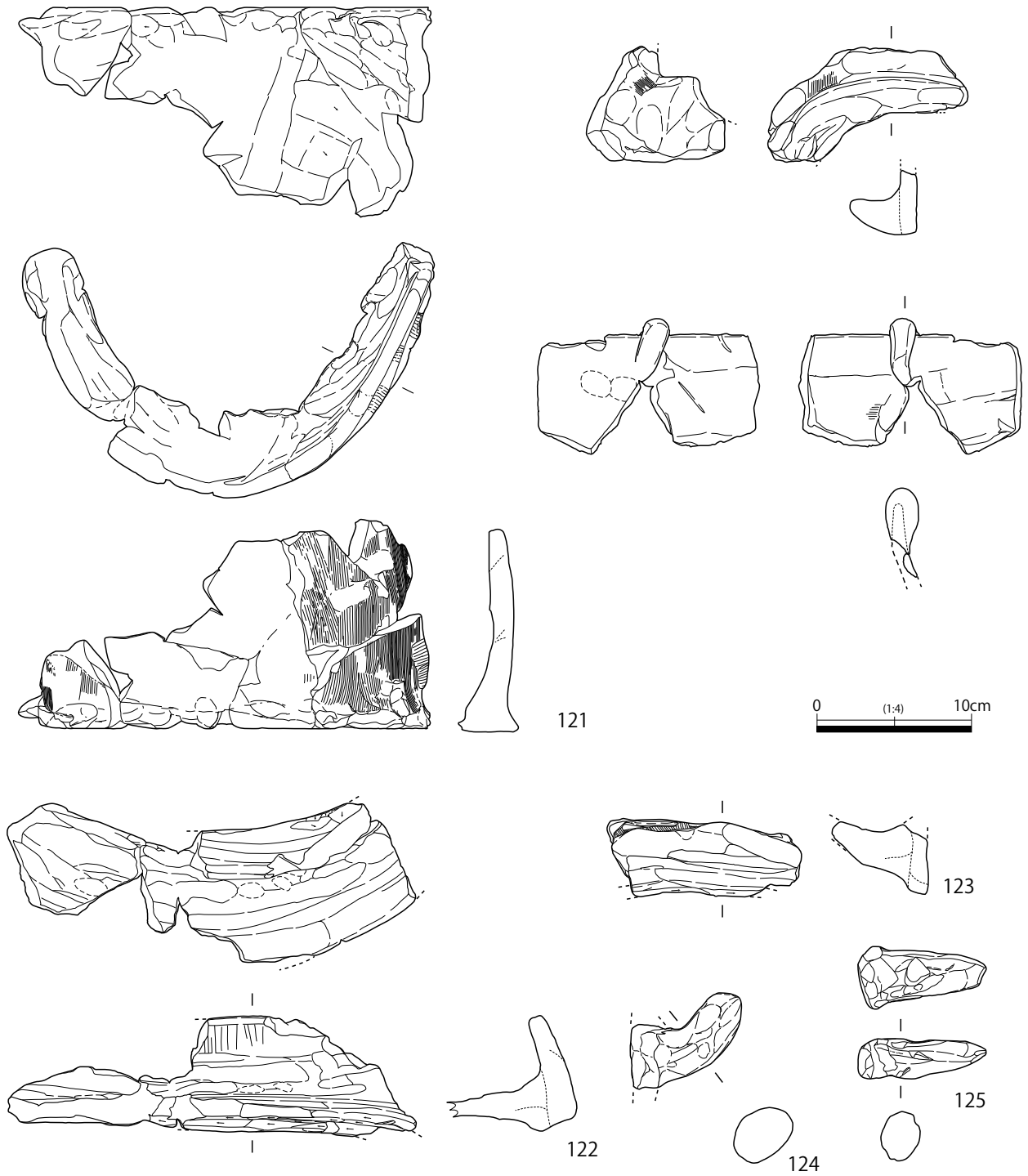
遺構出土土器

〔3023 流路〕

126は備前焼のすり鉢である。口縁部は上方へ引き延ばされて外側に端面を作り、その下端は丸く突出させる。内面には櫛描のスリ目が認められ、部分的に口縁端部まで延びる。

〔3252 土坑状変形〕

127は土師皿で、手捏ねで作られる。円盤状に作った粘土板の一部に切り込みを入れて体部を斜め

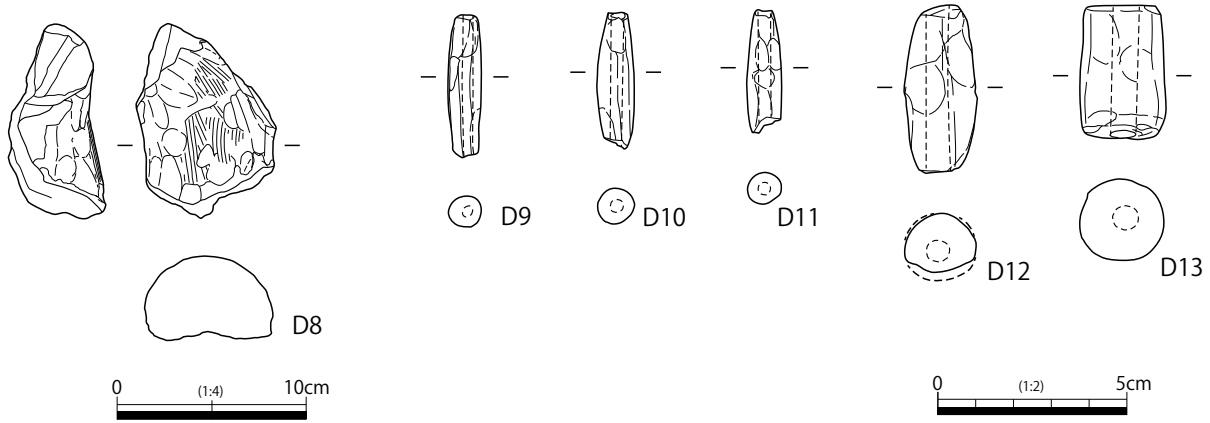


第130図 2区 第2面包含層出土移動式かまど、甑

に立ち上げる。底部はやや凹凸が多い。口縁部端部は面を作り、一段の横ナデでやや内湾するように仕上げる。128～130は小型の土師皿である。128は底部をやや丸く作り、体部～口縁部にかけてはナデにより段を作る。底面には指頭圧痕が残る。129、130は回転台成形の皿で、底部は回転糸切りで切り離される。体部は直線的で短く、端部は面をもつ。

〔第5面遺構〕

131は瓦質土器羽釜である。鏝は断面二等辺三角形で、上下をナデで整える。体部は鏝がつく部位で内湾する。口縁部は端面を若干凹ませる。調整は鏝以下が内外面ともナデ、鏝以上は内面ハケ目状の条痕を残す板ナデ、外面ナデで仕上げる。鏝の下面まで厚く煤が付着する。132は須恵器杯身で、



第131図 2区 第2面包含層出土土製品

丸みを帯びた底部から少し内湾して体部へ至り、蓋受け部はやや長く水平に突出する。口縁部立ち上がりは端部にかけて厚さを減じる。

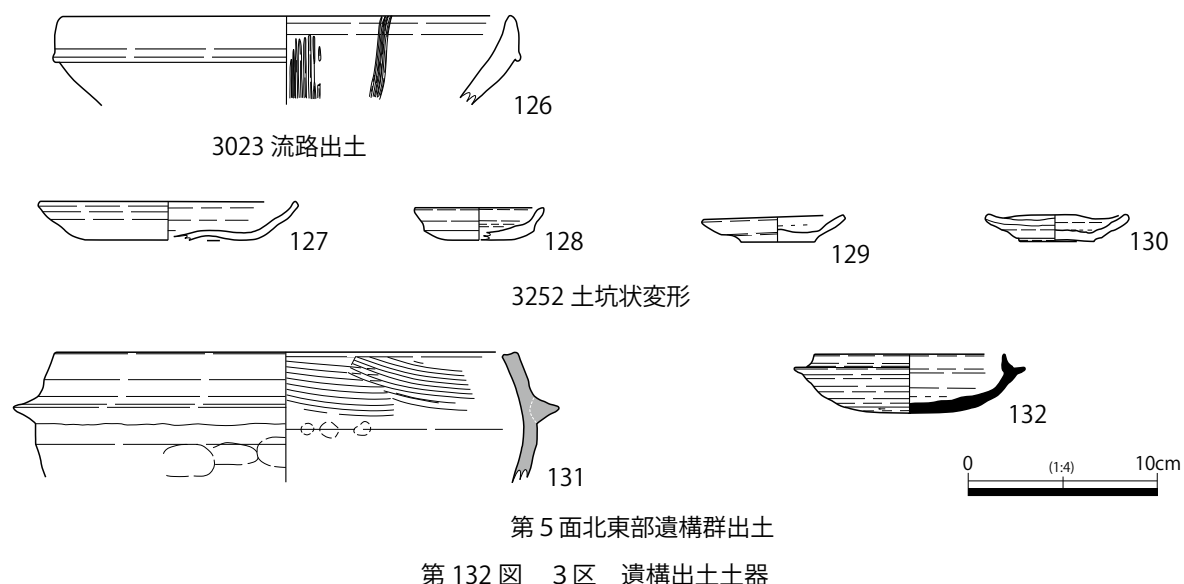
〔竪穴建物1〕

133は土師器甕である。床面中央の炉上で検出した3231土器群を構成する。底部全てを欠く以外はほぼ完形である。丸みを帯びた底部からゆるやかな稜を作って体部に移行し、稜から2cm程度の所で最大径となった後、頸部へむかって内湾しながらすぼまり、頸部でわずかに径を小さくする。口縁部は頸部からさほど開かず直線的に短く立ち上がり、端部は丸く収める。内外面とも器表の風化が激しいが、体部は外面タテハケ、内面ケズリ、口縁部はナデ調整される。底部から最大径部分にかけての部位では赤変している状況が認められ、被熱によるものと考えられる。なお、底部の破片は周辺では確認できなかったため、底部を欠損した土器を用いたか、並べる際に余分なものとして廃棄したか、が考えられる。134も同じく3231土器群を構成する。土師器甕の頸部～口縁部にかけての4分の1程度のみの破片である。いわゆる「く」字状の口縁部で、薄く作られる。頸部で直角に屈曲した後、口縁部は直線的に延び、端部でわずかに外反する。胴部内面はヘラケズリ。135以下は埋土中出土である。135は須恵器杯蓋である。丸みを帯びた天井部から体部へ移行し、一度屈曲させて口縁部を外反させる。136は須恵器鉢である。底部～体部下半を欠く。最大径は上部に偏位し、その部位に浅い凹線を巡らせる。口縁部は、短く外方へ折り、端部を四角く収める。屈曲部にわずかに段が巡る。137、138は移動式かまどで、胎土から同一個体の可能性が考えられる。137は焚口部上部の底で、本体から剥離している。貼り付け前に浅い溝を彫っていることが、剥離面の様子から確認できる。138は付属部上縁の突起部分である。

D14は土製支脚の突起部の破片で、向かって右側に位置する突起である。ナデで整形され、断面は杏仁形を呈する。表面は被熱により剥離が進む。D15は土錘、D16～D18はややゆがんだ円形もしくは楕円形の平面形の土玉で、側面はつぶれたように粘土のしわが顕著である。棒状工具を一方向から突き刺して穿孔しており、図の上面には粘土が引き込まれた状況が、下面には突出が認められる。胎土や焼成も類似しており、同時に製作されたものと考えられる。

〔竪穴建物2〕

139は須恵器無蓋高杯である。床面および柱穴の直上で検出した。杯部に若干欠損が見られるほかはほぼ完形である。杯部は丸みを帯びた底部から体部へ移行し、体部中ほどで内方に屈曲させ段をつ



くり、口縁はやや外反し端部を丸く収める。脚部はあまり開かず、端部付近で大きく外反させて上面が平坦になるような形状である。端部は丸みを帯びた方形を呈し、面を持つ。2方向に2段の透かしを穿ち、透かし間に2条の沈線を巡らす。透かしと直交する方向には、両側にヘラ書き記号が刻まれる。右側は単線、左側は1点から広がる直線と、それに直交する平行線からなるもので、絵画的なものか。140は須恵器蓋で、平坦な天井部からゆるやかに口縁部へつながる。天井部外面回転ヘラケズリ。D19は球形の土玉である。全体に欠損が多く、表面の風化が激しい。

谷部包含層出土土器

谷部包含層出土土器は、耕作等に伴い小片化しており、図化できるほど破片が接合したものは多くない。以下、遺構面ごとに述べる。

〔第3面〕

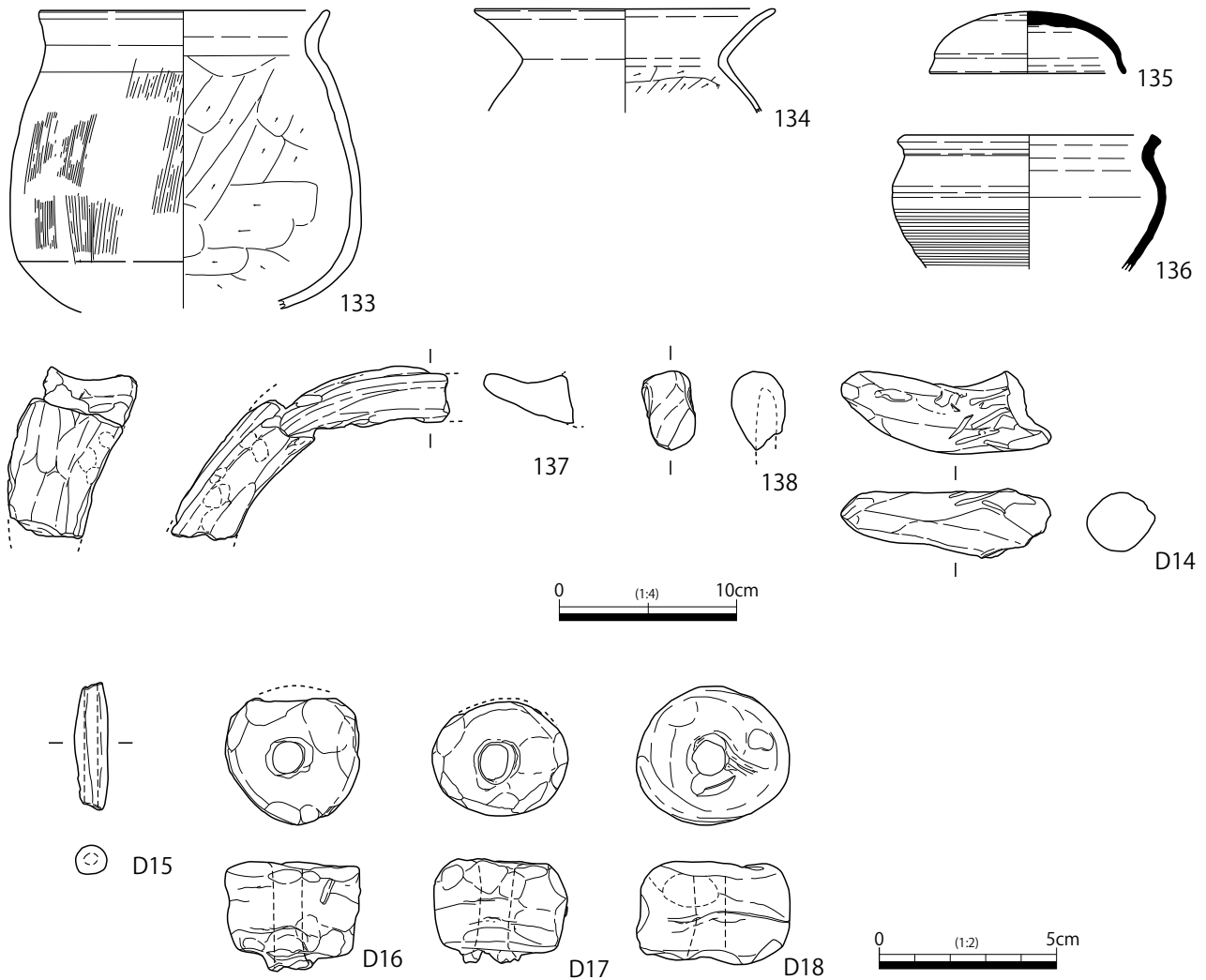
141は土師器甕口縁部で、頸部から屈曲した後斜めに立ち上がる、いわゆる山陰型の口縁である。器壁はやや厚く、外面の段も鈍い。古墳時代のものであり、下層由来であろう。

〔第4面〕

142は土師器甕口縁部。頸部からゆるやかに外反し、端部は丸く納める。143は緑釉陶器皿。内面底部と体部の境に沈線が巡るもので、その一部がごくわずかに残る。口縁端部はわずかに外反させる。焼成は堅緻で胎土は灰色を呈す。144は瓦質土器羽釜。鏝部は断面台形を呈する。口縁部は端面をわずかに凹ませる。

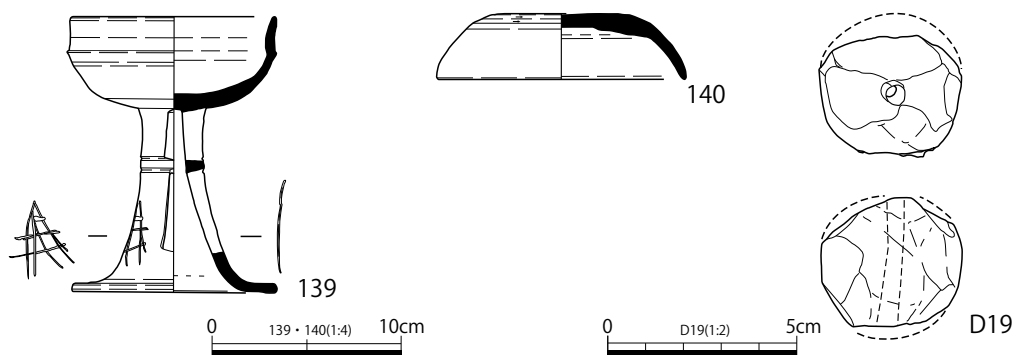
〔第5面〕

145は表面に低平な突帯を貼り付け、その上に3段の爪形文を施す破片で、弥生土器壺の頸部と考えられる。146は土師器杯。回転糸切り痕を残す底部からゆるやかに内湾して体部が伸び、口縁端部は丸く収める。147は黒色土器椀である。底部には断面三角形の高台が付けられ、その内側には回転糸切り痕を残す。体部はゆるやかに内湾し、口縁端部は丸く収める。内面はヘラミガキを行い、炭素を吸着させ黒色を呈す。148は湾曲する棒状の土製品で、器種は不明であるが把手などであろう。149は須恵器杯蓋。天井部はやや平坦で、体部との間に明瞭な段を有する。口縁部内面には浅い沈線を巡らす。150は土師器高台付杯の底部である。底部に断面方形の高台を付すが、角が削れて丸くなっ



第133図 3区 第5面竪穴建物1出土土器、土製品

ている。高台内側には回転糸切りの痕跡を残す。151は須恵器高台付杯の体部を打ち欠いたもので、高台内部に墨が残り転用硯とみられる。すり減った様子は見られないため、墨溜めとして用いたものか。152は緑釉陶器底部で、小片であるが皿と考えられる。全体に風化が進み、釉薬も大半が剥がれている。底部外面には三角形の高台を付す。内面には一条の圈線が巡らされる。胎土はにぶい黄橙色を呈し、軟質の焼成である。153は最大径6.6cm、器高6.4cmの円柱状の粘土塊の中央に、深さ、径とも3.4cmの穴を指で穿ったものである。底面は平坦で、板圧痕が認められる。外面には指頭圧痕が残る。ミニチュア土器と考えたが、やや厚手で大型である。別の用途、例えば上下を逆にした支脚などの可能性も考えられる。154は厚手の土器で、底部と考えられる面は平坦で、そこからやや内湾するように体部が延び、口縁部は丸く収める。内外面ともナデ調整で、内面には指頭圧痕も残る。厚さが不均一で口縁もゆがむなど全体の形状は不詳。155は備前焼すり鉢で平坦な底部外面に段をもち、直線的に体部が延びる。内面には5条一組のスリ目が櫛書きされるが、底部付近を中心に使用に伴い激しく摩耗している。156は緑釉陶器皿の底部で、端部は破損するが低い台形の高台を付す。胎土は浅黄橙を呈し、焼成は軟質。157は高台付皿の底部。精良な胎土を用い、堅緻に焼成される。器壁は薄く、底部に外面側がゆるやかなS字状を呈する高台が付される。

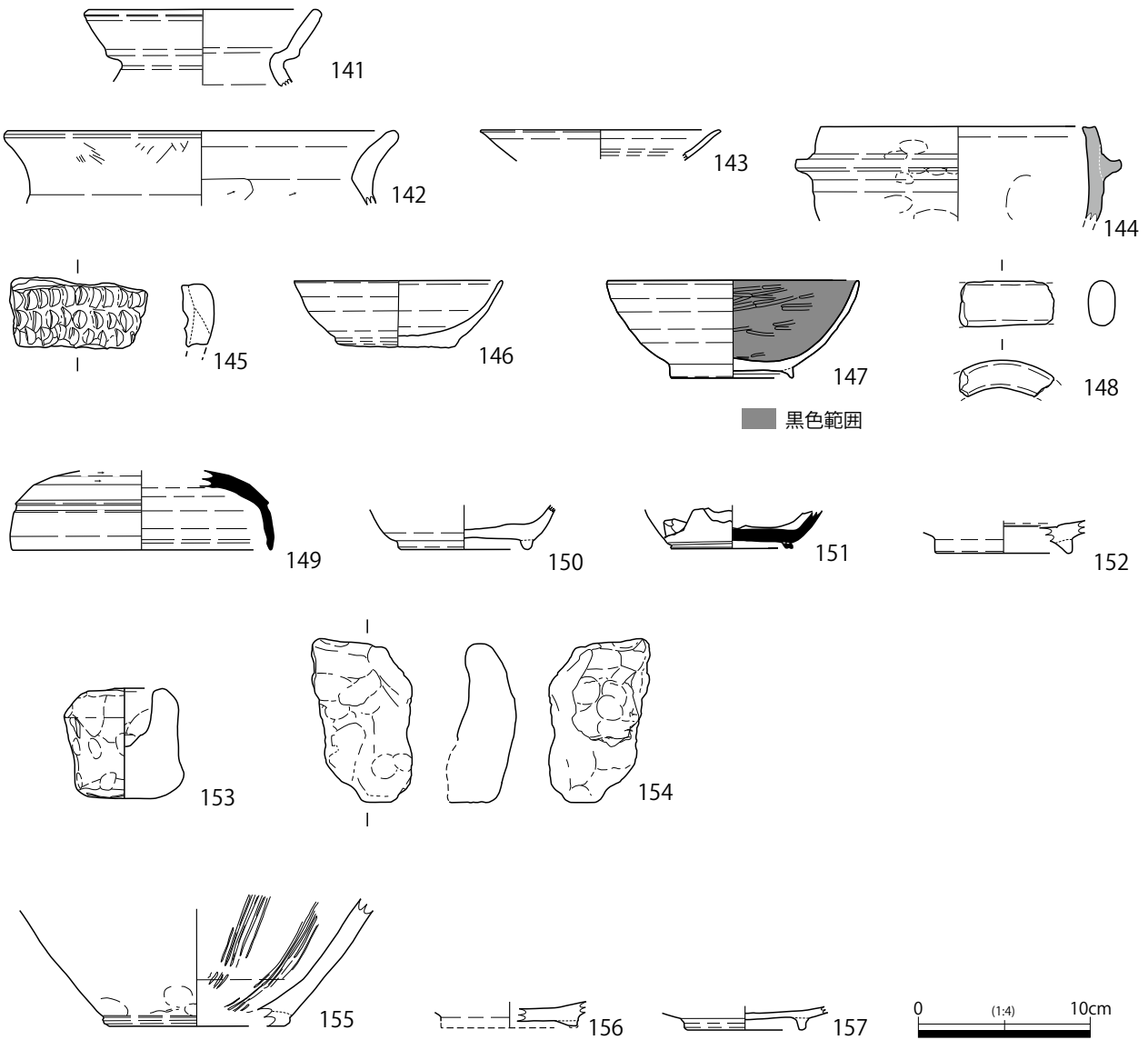


第134図 3区 第5面竪穴建物2出土土器、土製品

〔第6面〕

158、159は底部で、158は調整から弥生土器の甕底部と考えられる。159は大型で器壁も厚い。内面全体に黒色の物質が付着しており、漆などの可能性も考えられる。160、161はミニチュア土器である。160は平底で口縁部を欠く。外面に指頭圧痕が残る。161は完形で全体に丸みを帯びた形。162は土師器皿で、体部は口縁部にかけて急激に厚みを減じるため、上面はかなり平坦に近い。底面に回転糸切り痕を残す。163は弥生土器甕で、口縁端部を上へ拡張し端面に2条の凹線を施す。

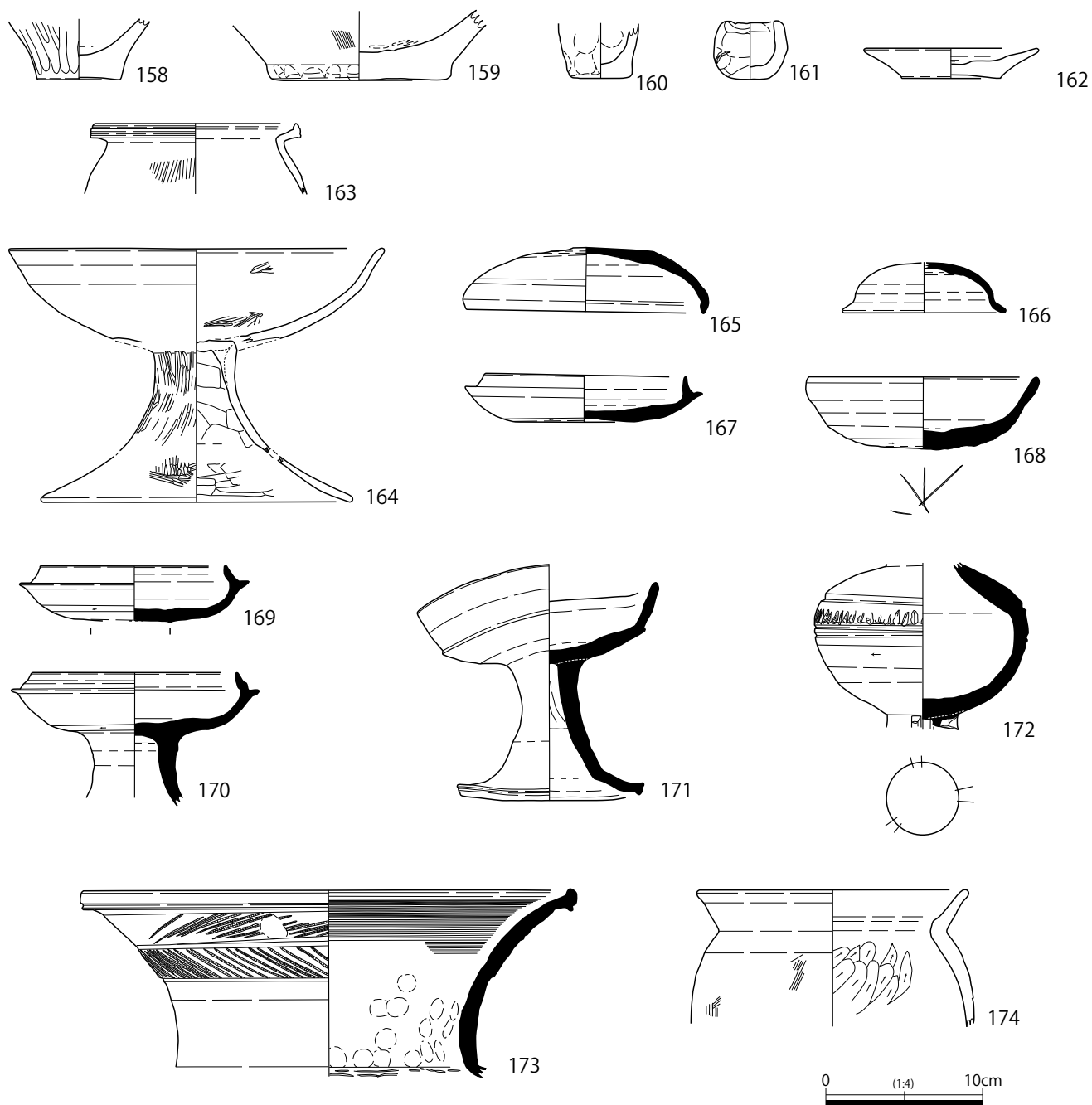
164は土師器高杯で、杯部、脚柱部、脚端部の破片が存在するが、それぞれは接合せず、図上で復元した。脚部は八字状にゆるやかに開く。杯部は段を持たずゆるやかに内湾し、端部付近でわずかに外反させる。脚部外面、杯部内面にミガキ調整が残る。杯部はいわゆる円盤閉塞で製作される。165は須恵器杯蓋。やや平坦な天井部から体部へ緩やかに移行し、口縁端部付近で内側へ屈曲させる。166は須恵器蓋で、丸い天井部～体部をもち、口縁部を外方へ折り曲げて端部を丸く納める。167は須恵器杯身で、やや低平な器形である。口縁部はやや斜め上方に内傾する。168は須恵器杯と考えられる。やや分厚い丸みを持つ底部から斜め上方へ体部が伸び、口縁部はやや肥厚させ端部に面を作る。底部に3条の線を1点で交えるヘラ記号が存在する。169、170は須恵器有蓋高杯である。169は脚部を欠く。杯部は平坦な底部から屈曲して蓋受け部へ至り、口縁部立ち上がりは内傾する。脚部は完全に欠損するが、2方向透かしの上端が残る。また、欠損部に脚部接合前の螺旋状の線刻が認められる。170は脚部下半を欠損する。杯部底部は平坦で、ゆるやかに屈曲して蓋受け部に至る。口縁部立ち上がりは内外面とも稜を作った後、端部へ急激に厚さを減じて端部は尖らせる。171は須恵器無蓋高杯で杯部は大きくゆがむ。杯部底部はやや丸みをもち、体部は斜め上方へ直線的に伸び端部は丸く納める。底部から体部への移行部外面に段を持つ。脚部は端部付近で大きく開き、端部は上下にやや拡張し、端面上半に1条の沈線を巡らす。比較的軟質の焼成である。172は須恵器脚付長頸壺で、頸部以上と脚部を欠く。体部はやや扁平で、肩部でゆるやかに屈曲して頸部へ至る。肩部に板状工具による刺突を施し、その上位に1条、下位に2条の沈線を巡らす。内面底部には同心円当て具痕が確認できる。脚部は欠損するが、三方向透かしの痕跡が確認できる。自然釉が厚く付着する。173は須恵器大甕の頸部～口縁部で、体部以下は不明である。頸部からゆるやかに外反し、口縁端部を肥厚させ、端面を上方につまみ出す。端部下端に1条の沈線を巡らす。外面上半は1段厚くなり、板状工具により2段の刺突文を施す。刺突文間には2条の沈線を巡らす。途中で合一して1条になる。内面上半にはカキ目が施される。174は土師器甕である。やや厚手で、口縁部はく字状を呈する。口縁部は内面頸部より少し上でわずかな段をもつ。端部は丸く収める。体部内面に細かい単位のヘラケズリが認められる。



第135図 3区 谷部包含層（第3面～第5面）出土土器

〔第7面、第8面〕

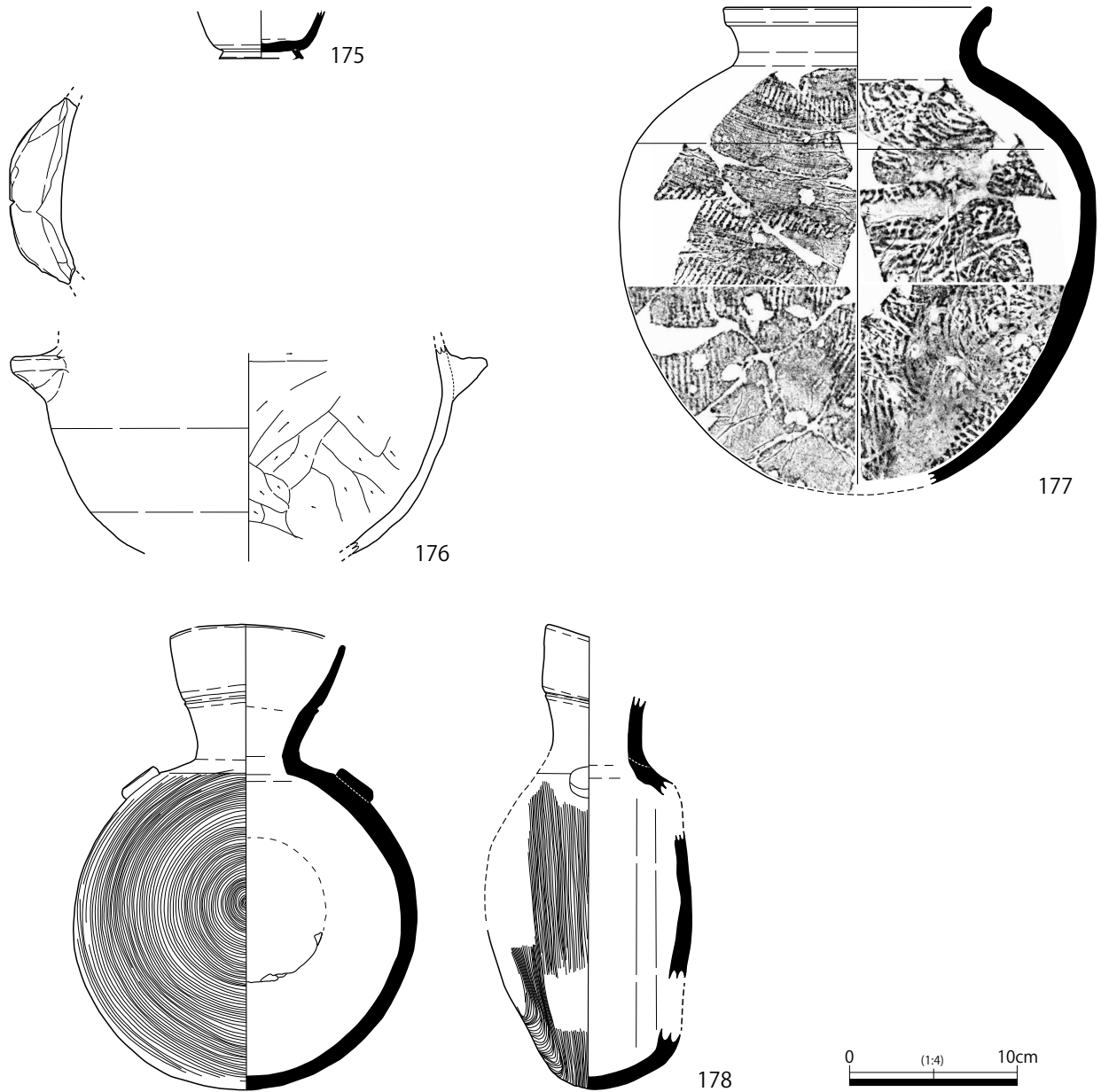
175は高台が付く須恵器の底部で、口縁部を欠くが小型の杯と考えられる。高台は薄く斜め外方へ延び、断面は平行四辺形を呈する。176は、球形の胴部に横長で断面三角形の把手をもつ土器で、口縁部や底部の形態は不明であるが、把手付甕の可能性が考えられる。内面ケズリ、外面の調整は剥離により不明。胎土は砂粒を非常に多く含む。177は須恵器甕で、部分的にはあるが口縁部～底部付近までが残存する。体部はやや肩の張った球形で、頸部で緩やかに屈曲し、口縁部へかけて外反する。口縁端部はわずかに肥厚させ、外面に垂直な面を作る。外面は燻し焼のように銀黒色を呈するが、焼台あるいは重ね焼きなどのため円形に色が付かない部位が存在する。また、底部付近に被熱痕跡が認められる。178はやや大型の埴瓶である。体部、口縁部ともゆがみが大きい。体部は片面が平坦、もう片面がやや膨らむ形状となる。外面はカキ目で調整され、内面には円盤閉塞の痕跡が認められる。肩部にボタン状の退化した把手が貼り付けられる。口縁部は直線的に開く形態で、中程から端部にかけてやや薄くつくり、端部は丸く納める。中位に1条の沈線を巡らす。



第136図 3区 谷部包含層(第6面) 出土土器

丘陵部包含層出土土器

179は須恵器杯身である。やや上げ底の底部からゆるやかに屈曲して蓋受け部に至る。蓋受け部は湾曲する形態である。口縁部立ち上がりは中ほどが内へ膨らみ端部は丸く収める。内面に2条の沈線が巡る。180は須恵器有蓋高杯。杯部はゆるやかに内湾し、短い蓋受け部を作る。口縁部立ち上がりは短く内傾する。脚部はやや強く外反し、端部は一段厚く作る。軟質の焼成で風化が激しい。胎土は白色系と橙色系が縞状を呈する。181は縄文土器片である。キャリパー形を呈する深鉢の頸胴部である。頸胴部の境で鋭く稜をもって屈曲する。外面にはRL縄文が施文される。船元I式に相当か。

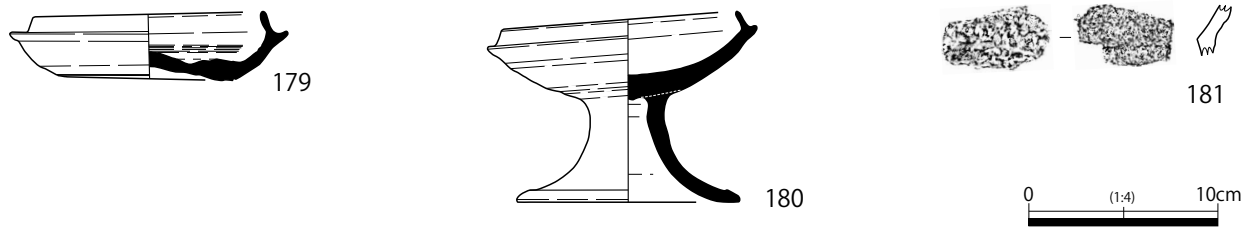


第137図 3区 谷部包含層（第7・8面）出土土器

表土出土土器

表土出土であるが、遺跡の評価の上で重要と思われる資料を図示した。

182は弥生土器甕口縁部で、短く折れた口縁の端部を上方へわずかにつまみ上げる。183は須恵器蓋で、内面に小さなカエリを有する。外面に漆とみられる付着物が確認できる。184は須恵器鉢。円盤状の底部から直線的に開く体部を持つ。底部外面は不定方向ケズリで調整される。185～188は瓦質土器鍋で、内面は明確に段を持つが、外面に明瞭な段を作らないものと外面へ折り曲げて段を作るものがある。いずれも外面に煤が顕著に付着する。189は瓦質土器羽釜で、断面三角形に近い鏝を持ち、全体が内傾する。端部は若干拡張し、端面を凹ませる。190～192は白磁である。190は玉縁状口縁の直下までをヘラケズリする。191は外面に段を持ち、口縁部は薄く外反させる。内面見込みに花文が線刻される。193～196は青磁。193は厚く施釉され、高台内面まで及ぶ。194は底部から体部への移行部分に段を有する。内面見込みに線刻花文をもつ。195、196は底部の破片で、周囲を打ち欠き、



第138図 3区 丘陵部包含層出土土器

ケズリもしくは敲打で角を取っている。197は褐色釉陶器で、口縁部は段をもつ。内面見込みに蛇の目の釉剥ぎが認められる。

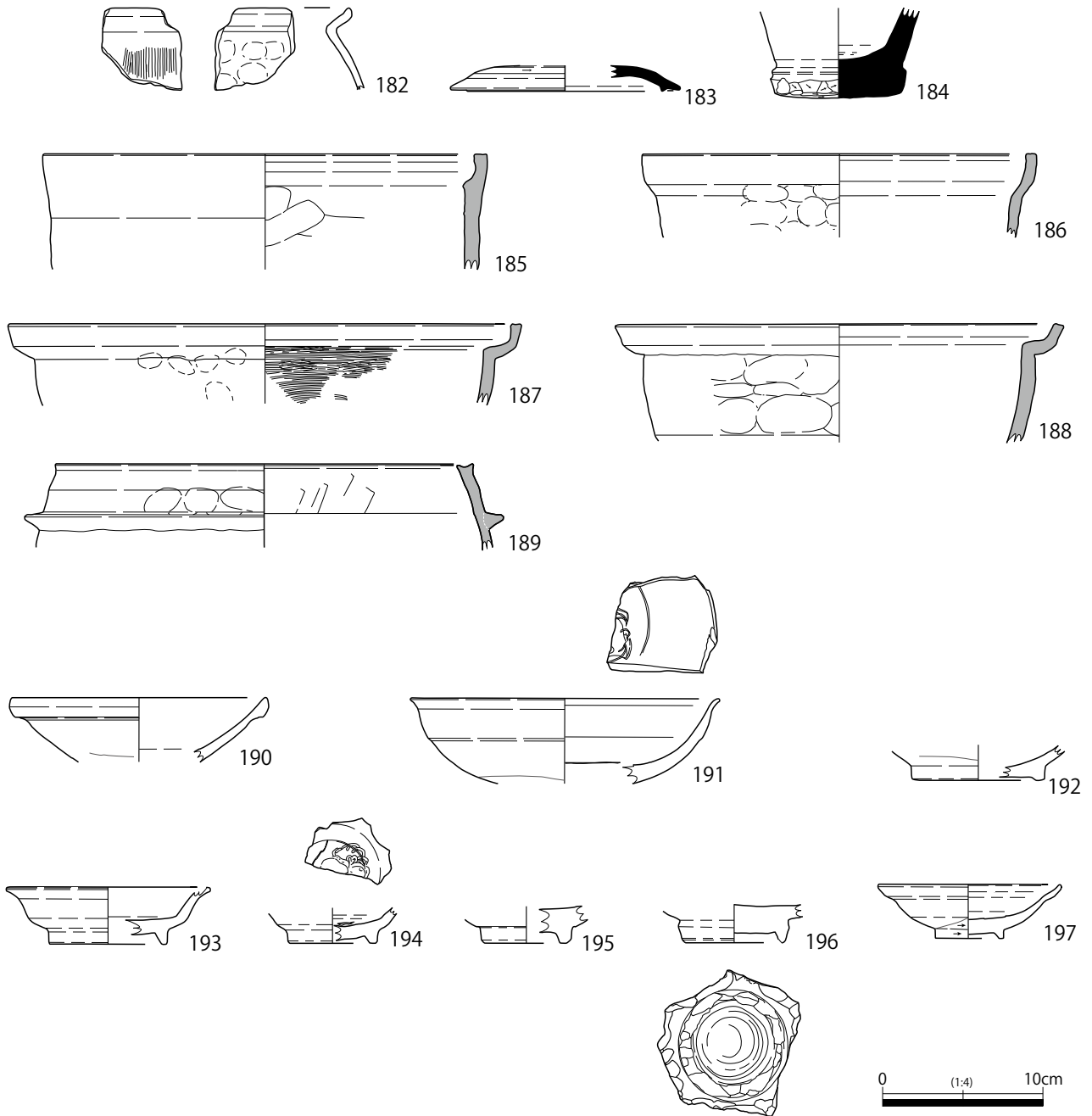
谷部包含層出土かまど・土製品

198は移動式かまどの焚口から掛口にかけての破片で、先端を欠く庇の一部が残る。掛口は若干外反し、庇上面から3cm程度と低い。庇は上方に向かってのびており、先端は掛口を越える可能性も考えられる。199も焚口から庇を挟んで掛口までの破片で、掛口は短く直立する。200は焚口周囲の庇の破片で、本体から剥離してしまっている。本体接合部には短い沈線が刻まれ、庇の剥離面に痕跡が残る。201は焚口右側面の庇で、全長30cm近くが残る。焚口横の本体に棒状の部材を貼り付け、外面側に粘土を補充している様子が確認できる。202は焚口左側面の庇部である。203は付属部上端に付けられた突起部分である。外面ハケ調整の後貼り付けられる。204は基部の破片で、図の右側には板状部材が残存し、左側には剥離面が存在する。本体焚口右下の庇部から付属かまどにかけての破片である。庇の剥離部、付属かまどの接合部とも断面半円の溝を彫り接合を強化していることが観察できる。205、206は甑の把手であろう。やや扁平な断面で、上方へ湾曲する。また、本体へは孔を穿ち基部を差し込み、周辺に粘土を補充する。

D20～D22は鞆羽口である。いずれも先端部分の破片である。D20は先端を欠くが、外面で熱を受けた痕跡が観察できる。D22は先端部分で一部を欠く。先端部の表面は高熱により溶けてガラス状になっている。孔内面には芯棒の痕跡が残る。同様の痕跡はD21でも確認でき、両者は非常によく似ているが、D21は孔径がやや小さく、先端面も若干小さいので別個体である。

D23～D28は土製支脚である。D23は基部～体部にかけての破片で、残存部分は截頭円錐形を呈する。基部は高さ3.3cmの高さで上げ底となる。外面はナデ調整され、指頭圧痕も顕著である。D24も基部の破片である。D25は体部上端から頭部にかけての破片で、突起部へとつながっている。D27も同様の部位で、つまみの痕跡も認められる。D26は突起部の破片で、体部も一部残存する。ナデ調整されるが部分的にハケ目が残る。D28は体部から頭部にかけての破片で、片側の突起部とつまみが遺存する。つまみは先端を欠くが、残存部はすぼまりが小さな円錐形である。残存部分からは、胴部は円柱状を呈することが推定される。なお、突起部は本体から続けて作られるが、つまみは本体に穿孔し、円錐形にしたつまみの基部を差し込んで接合していることが観察できた。突起部はナデで調整し、部分的にハケで整えている。

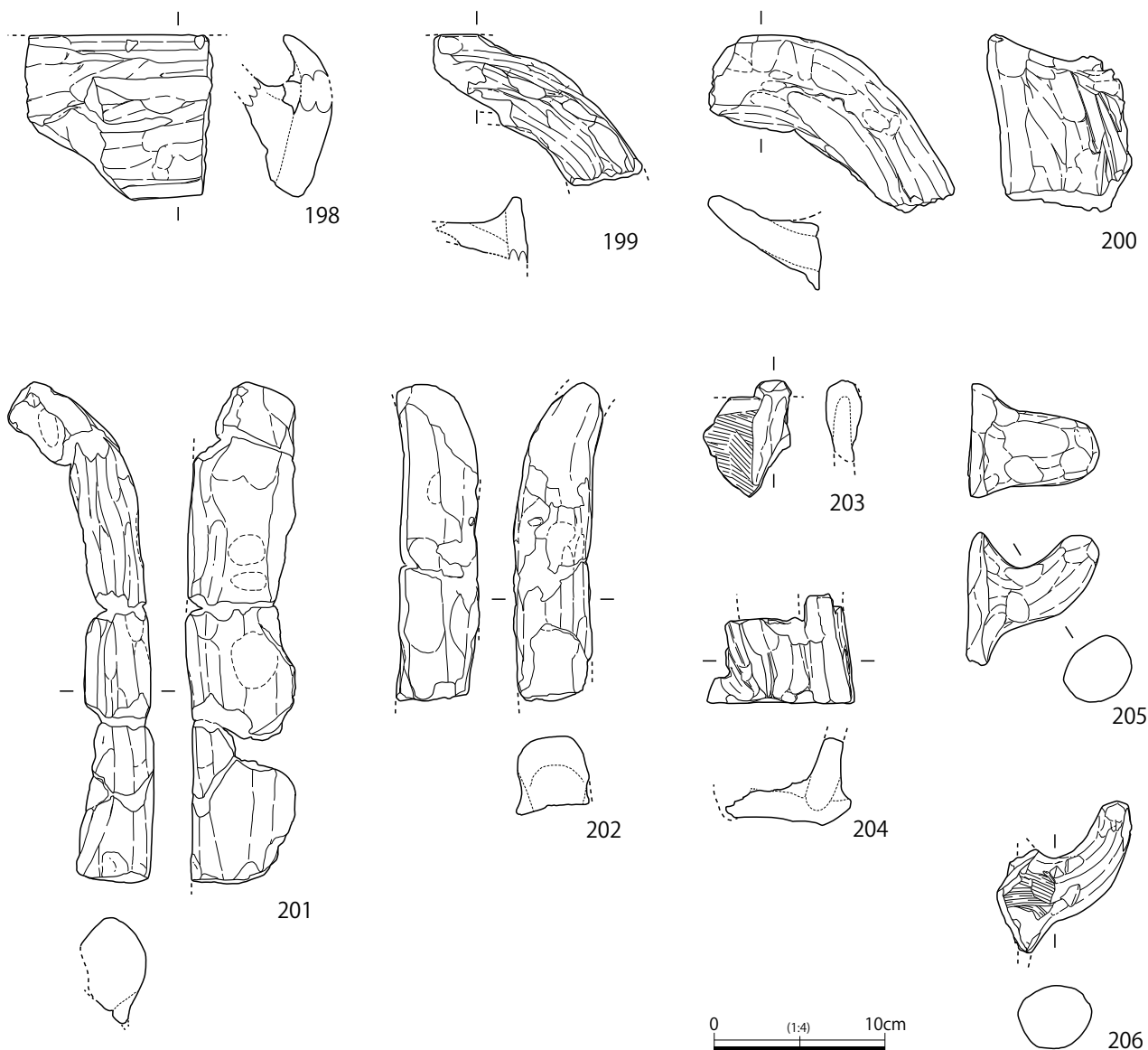
土錘は、直径1cm内外、長さ3.5～4.5cmの小型品と、直径2cm程度の中型品、直径3.5cmを越える大型品の3種類に分類できる。小型品(D29～D37)は孔径0.2～0.4cm、芯棒に粘土を巻き付け、指で押さえて成形しており、芯棒を引き抜く際に押さえたためか一端が若干ゆがんだものが



第139図 3区 谷部表土出土土器

多い。中型品 (D38)、大型品 (D39～D41) も芯棒に粘土を巻き付けて成形している。D42は無孔の土玉で、わずかに長球形である。D43～D46は球形の土玉である。直径3.5cm程度の球体を作り、芯棒を突き刺して穿孔する。これはD48～D50の円柱形土玉も同様で、低い円柱状の本体を製作した後、片面から棒状工具を突き刺して穿孔するため、中位付近にしわが形成される。D47は土製紡錘車である。上面はゆるやかに膨らみ、下部は逆円錐形となる。上面から側面にかけて、溝状の痕跡が多数認められる。後世の傷とともに製作時に付いたものもあるようだが、風化により判然としない。

D51は土馬である。右前脚の半分程度が接合したほかは、他の脚部、頭部、尾部などを欠く。鞍や手綱といった馬具は表現されない「裸馬」である。須恵質に焼成され、右側面には自然釉が分厚く付着する。胴体部分はやや縦長で腹部が平坦で背部がやや尖る断面形を呈し、背部はそのまま頸部のたてがみに移行する。頸部は三角形に近い断面となっている。脚部は別作りで、棒状に作った脚を接合



第140図 3区 谷部包含層出土移動式かまど・甑

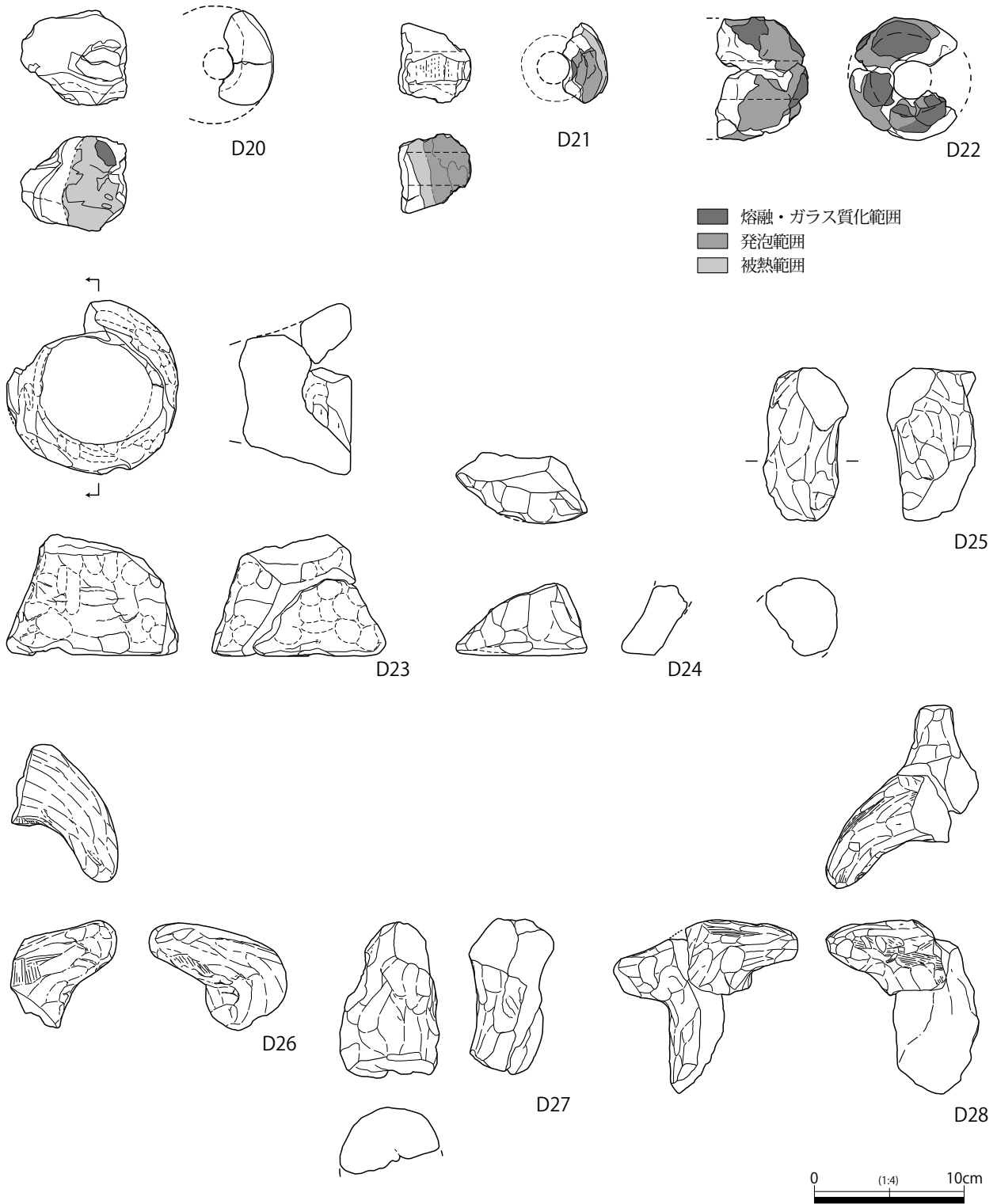
する。前脚の間の隙間はほとんどなく、部分的には接していたようである。尾部では、空洞に下方から粘土を補充している状況が確認できた。これが後脚の製作に伴うものか、それ以外の理由によるものかは不明である。表面は丁寧なナデ調整で仕上げられる。D52、D53は棒状の土製品である。D52は須恵質で、多数の稜があり多角柱状を呈する。土馬の脚の可能性はあるが、その場合別個体となる。D53は棒状品の一端が剥離面となり、周囲に粘土が補充されたもので、部位や種類は不明。

(4) 26年度調査 墨書土器、文字関連資料、漆書記号・漆付着土器 (第144図、PL.57・58)

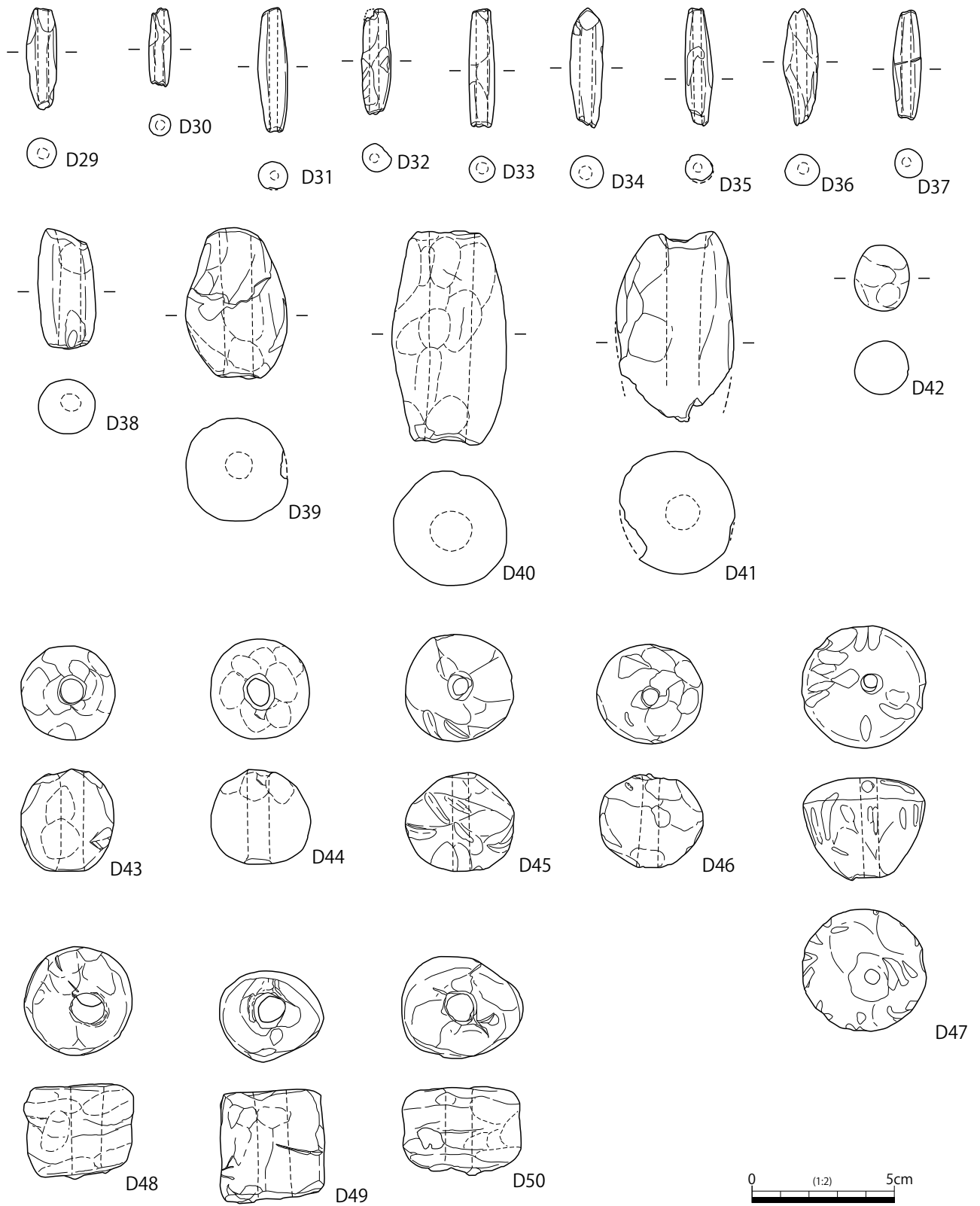
3区を中心に、墨書土器や転用硯、漆書記号のある土器、漆付着土器が出土している。

207は半分程度が残存する須恵器高台付杯である。平坦な底部から比較的急角度に屈曲し、直線的に口縁へ至る。底部には断面三角形に近い高台が貼り付けられ、高台内に回転糸切りの痕跡が残る。高台内面に墨書が認められる。文字と考えられるが判読できず、上下も詳らかではないが、2文字以上の可能性が考えられる。208は須恵器高台付杯で体部を欠く。打ち欠いた可能性が考えられる。平坦な底部に側面が内湾する方形の低い高台が付けられ、高台内部に「深縁」が墨書される。209は須

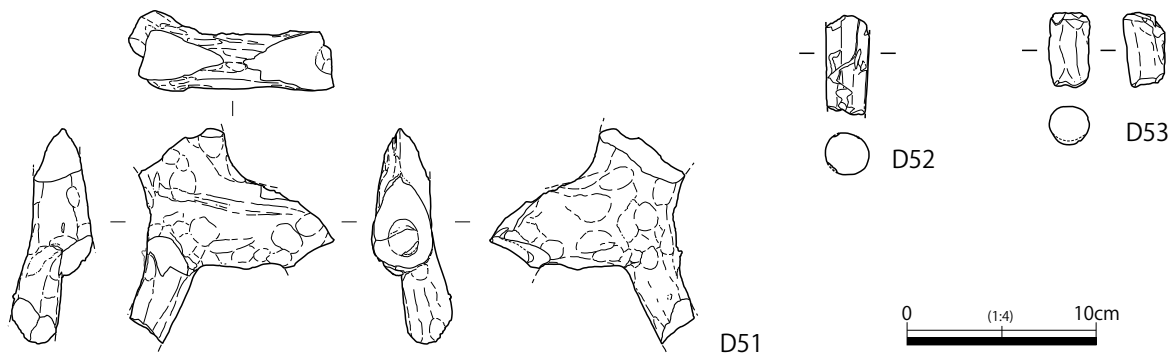
第IV章 調査の成果



第 141 図 3 区 谷部包含層出土土製品 (1)



第142図 3区 谷部包含層出土土製品(2)



第 143 図 3 区 谷部包含層出土土製品 (3)

患器高台付杯の底部のみが半分程度残存する。底部外面に台形の低い高台が付けられる。墨書は欠損部分が多いが、一字目は「高」の可能性もある。210 は杯もしくは皿の底部である。外面に墨書が認められる。上部を欠くため判読は困難だが、「深」や「縁」の可能性も考えられる。211 も底部の小破片で、墨書が認められる。欠損部分が多いが、二字分の可能性が考えられる。

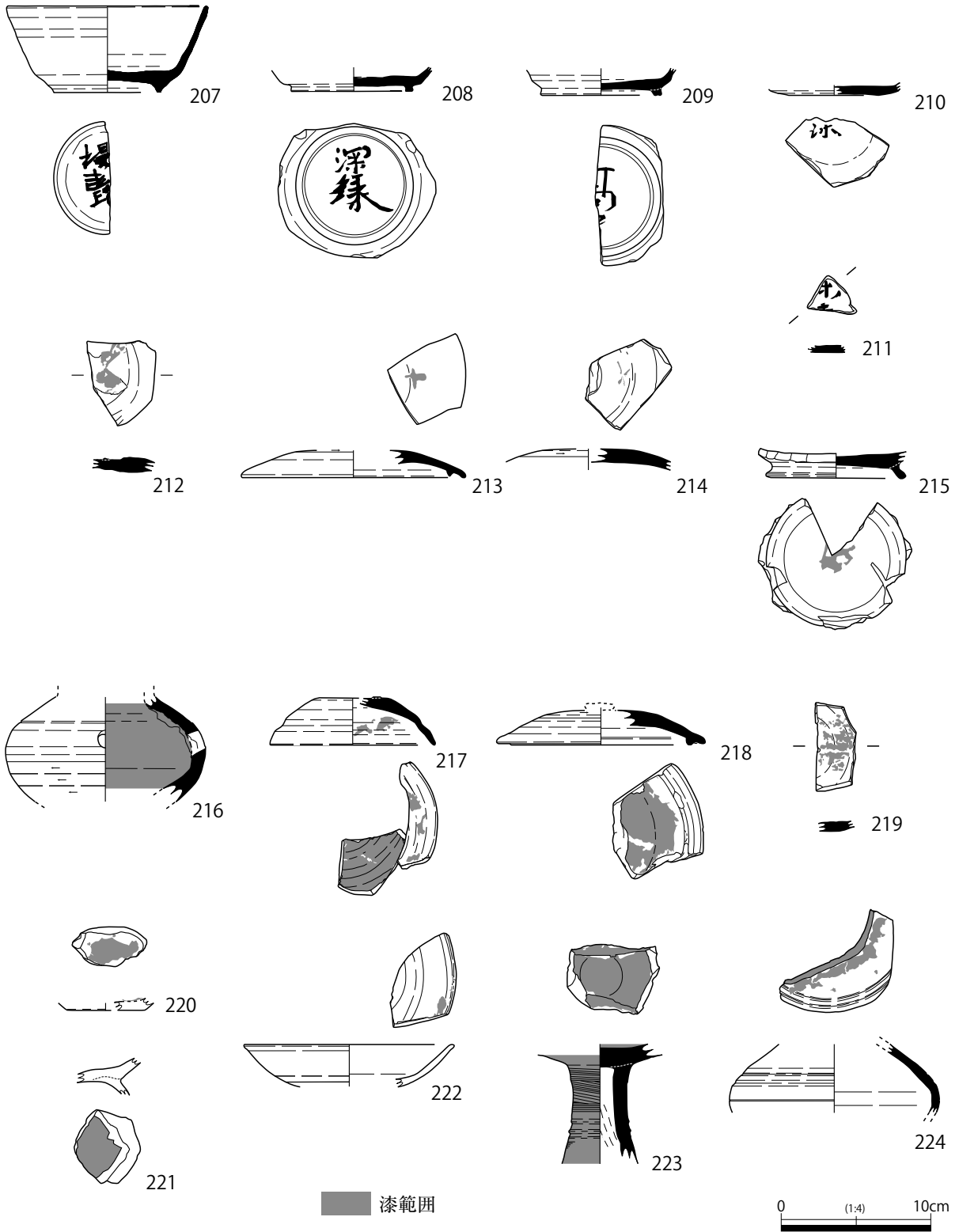
212～214 は外面に「×」の漆書記号を付する須恵器であるが、記号の大きさや形態、付される位置には異同がある。212 は須恵器蓋の天井部と考えられ、平坦面一杯に記号があるが部分的に剥離している。内面は若干磨り減っており、転用碗の可能性もある。213 は内面に口縁より低いカエリを有する須恵器蓋で、天井部から体部への移行部分に記号がある。214 は天井部中央に直径 3 cm 程のつまみが剥離した痕跡がある。記号が付された位置は 213 と同じだが、記号自体は細い。215 は須恵器高台付杯の転用碗である。体部を打ち欠いており、内面は摩耗する。底部には比較的長い高台が付けられ、中央に 2 cm 四方ほどの範囲で漆が付着する。216 は須恵器甕の胴部で、内面に漆が厚く付着する。孔内部にも漆が付着し、表面に木目状の痕跡が認められることから、栓をしていた可能性があり、漆容器として用いていたものであろう。なお、漆は外面にもわずかに付着するほか、破面にも内面からつづいて漆が付着する部位がある。217、218 は須恵器蓋で、いずれも内面に厚く漆が付着しており、漆パレットとして使用したと考えられる。219～221 も漆が面的に付着する破片である。219 は須恵器蓋もしくは杯内面、220 は土師器杯内面、221 は土師器高台付杯の高台内面に、それぞれ厚く漆が付着する。222 は緑釉陶器で、口縁部にわずかに漆が付着する。223 は須恵器高杯の杯部～脚部の破片で、全面に漆が塗られる。杯部の破断面には表面に塗られたものより厚い漆が塗られ、わずかに剥離面が認められる。破片の接合のために塗られた可能性があるが、剥離面はわずかなため、接合にはほとんど役立たなかったとみられる。224 は壺の胴部で、上端の破面とその外面幅 1 cm 程の範囲に漆が付着する。破片の接合のために漆が塗られたのであろう。

(5) 3 区 (27 年度調査) 出土土器・土製品 (第 145 図～第 148 図、PL.59～63、66)

包含層中からの出土遺物は多くないが、南側丘陵裾部で縄文土器片がまとまって出土している。ここでは縄文土器とその他の土器を分けて述べる。

包含層出土土器

225～227 は底部で、弥生土器とみられる。226 は外面縦方向のミガキ、内面ハケ調整が認められる。228 は、最大径 7 cm ほどで、やや丸みのある底部と、直立する体部をもち、口縁部は欠損する。



第144図 2区・3区 文字関連資料・漆関連資料

底部は厚さ3cmと厚い。底面中央には平坦面があり、板の圧痕が認められる。おそらく、粘土塊の内側を手捏ねで凹ませて製作し、乾燥時に板上に置いたのであろう。153と形態、製作に伴う痕跡が酷似しており、同様の用途に用いたものであろう。229は須恵器高杯の脚部である。ハ字状の脚端面はやや凹ませる。

230は、付属かまど付移動式かまどである。26年度調査のⅣ層に該当する黒褐色砂混じりシルト層から検出したもので、26年度取り上げの破片と接合した。本体の焚口上部～掛口、付属かまど上縁、付属かまど～本体底部の大きく3破片がある。本体は基部径40cm程度、掛口径32cm程度に復元できる。体部は比較的直線的にすぼまり、掛口は焚口底貼付け部分付近からわずかに外反する。焚口は隅丸台形を呈すると考えられ、上縁は幅18cmほど、側縁も直線的である。上縁では縁から3～4cm離して庇が付けられる。庇の突出長は6cmほどで、屈曲部を挟んで側縁部にかけて12cmほどが残るが、接合面が狭いせいか大半が剥離している。付属かまど部は本体接合部での幅18cm程度、突出長19cm、後方へ若干ひずむものの、側面はほとんど開かず直線的である。平面形はおおむね正円形を呈する。上縁には3箇所の突起が付けられる。突起は幅2～3cmで、突起間は等間隔である。本体との接合部付近では上縁が内湾しており、そのまま開口部上部の庇へつなるとみられる。付属部は粘土紐積み上げによって製作され、本体との接合部でも粘土紐の積み上げ痕がそのまま残っている。下半は内面ケズリ、外面ナデで、上半は内外面ともナデ後横ハケであるが、外面のハケ調整は弱く、粘土紐の積み上げ痕が残る。本体、付属部とも内面にススの付着や被熱痕跡は認められるが顕著ではない。

縄文土器

〔崩落土上面流路〕

231～250は調査区ほぼ中央に位置する流路内の同一グリッドで出土した。胴部破片が多いが、文様など特徴がわかるもの20点を図化した。文様から数種類の土器が混じっているものと考えられ、縄文時代中期から後期頃の土器が含まれる。周囲の丘陵から流れ込んだものと考えられ、丘陵上にそれらの時期の遺構が存在した可能性がある。

231は深鉢の口縁部である。口縁内面に貼付凸帯を有し、その上面に縄文が施される。外面は貝殻条痕が施される。口縁端に沈線がわずかながら確認できる。波子式に相当すると考えられる。近隣の高住平田遺跡（鳥取県教育委員会2013）、高住井手添遺跡（鳥取県教育委員会2015）でも散見される。232は深鉢の胴部（下半）と考えられる。外面には5条の沈線と磨消縄文が施される。内面には炭化物が付着する。233～238は縄文地の胴部片で、同一個体の可能性がある。238は内面に炭化物が付着する。

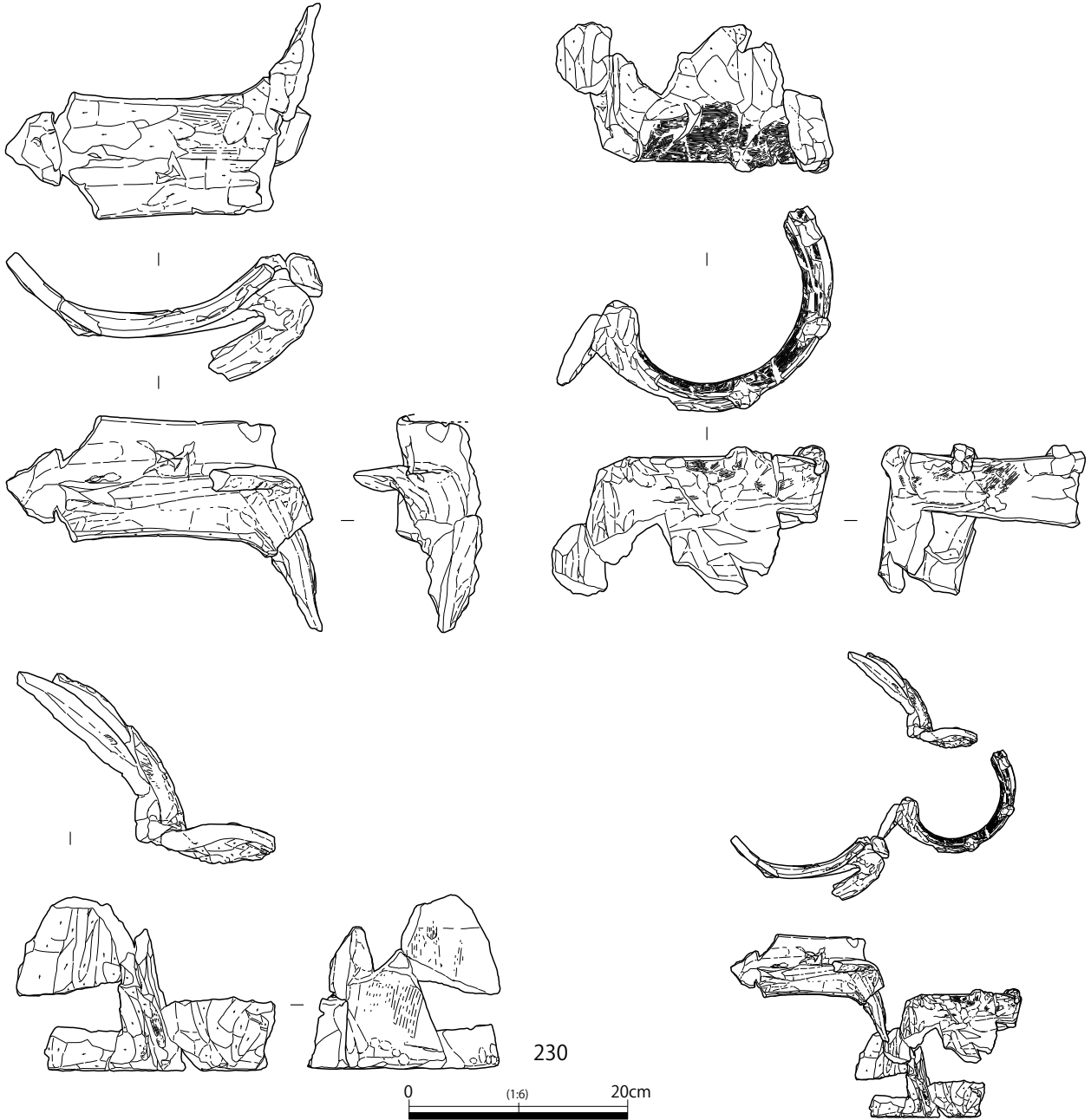
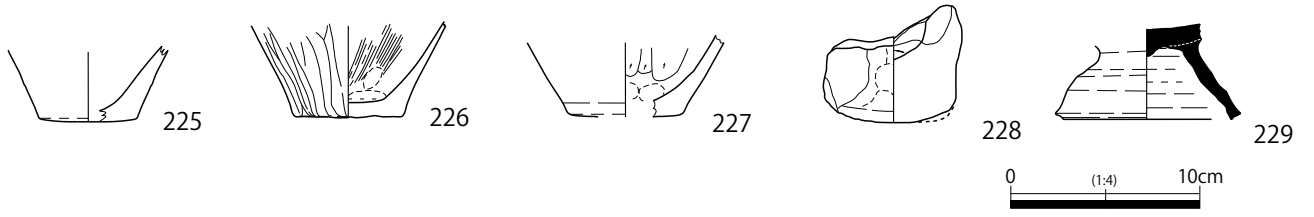
239～248は胴部片である。外面には貝殻条痕が施され、ススが付着している。

249、250は円形の凹底の底部である。外面にわずかに縄文が認められる。

〔第1面遺構および包含層〕

251～279は第1面および第1面包含層からの出土である。縄文時代早期の押型文土器から後期と思われる土器片までを含む。文様など特徴がわかるもの29点を図化した。

251は深鉢の口縁部である。口縁内面に貼付凸帯を有し、その上面に縄文が施される。外面は単節斜縄文を施文した後、口縁端に2条の平行沈線が施される。波子式に相当する。252～259は胴部片



復元図 (1 / 10)

第145図 3区 (27年度) 出土土器・移動式かまど

である。外面は単節斜縄文が施される。内面はナデである。251 とまとまって出土しており、同一個体と考えられる。

260～263 は胴部片である。外面は縄文が施される。

264 は深鉢の口縁部である。口縁はやや屈曲しながらわずかに外反する。沈線が垂下する。

265～271 は胴部片である。外面は無節縄文が施される。同一個体と考えられる。

272～274 は胴部片である。外面は貝殻条痕が施される。272 は外面に円形の刺突文が確認できる。

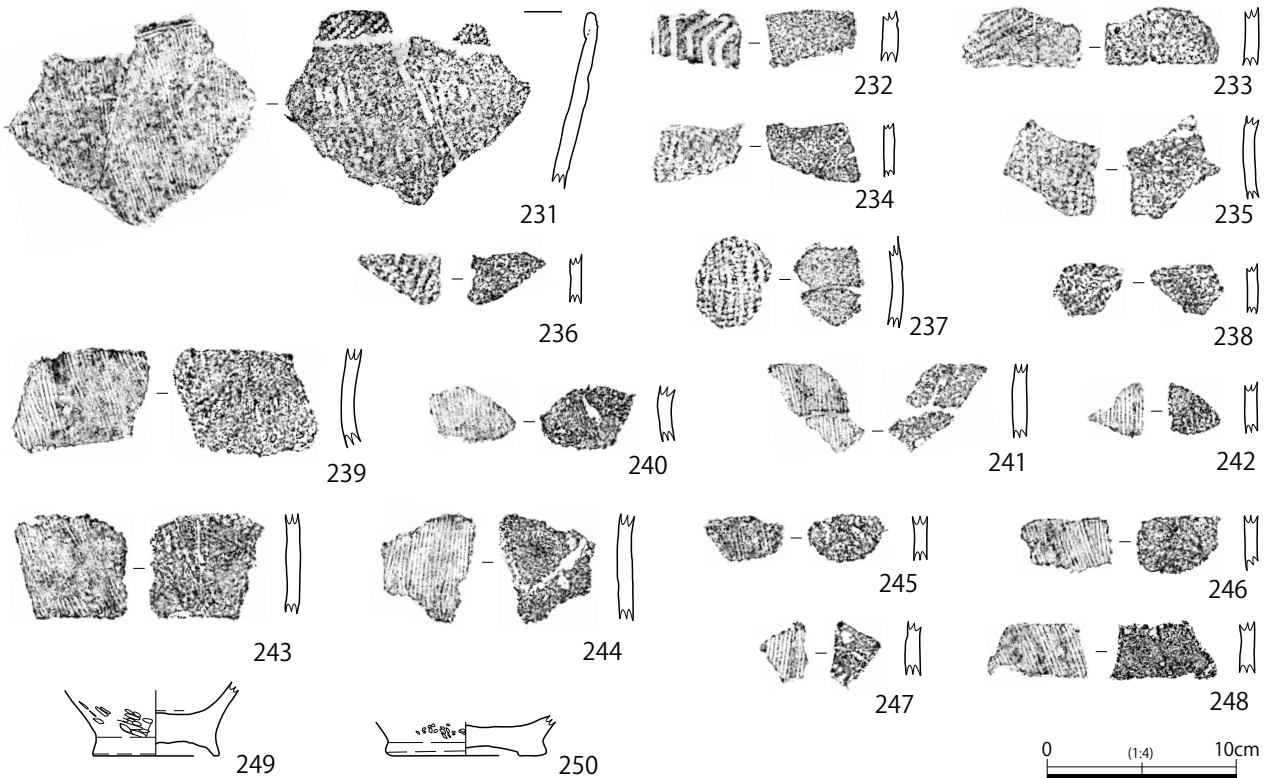
276 は胴部片である。外面に楕円押型文が縦位に密接施文される。後述する土壌化層に含まれていた押型文土器が流れ込んだものであろうか。

277～279 は 3526 流路から出土した胴部片である。277 は貝殻条痕、278 は無節縄文、279 は磨消縄文が外面に施文される。

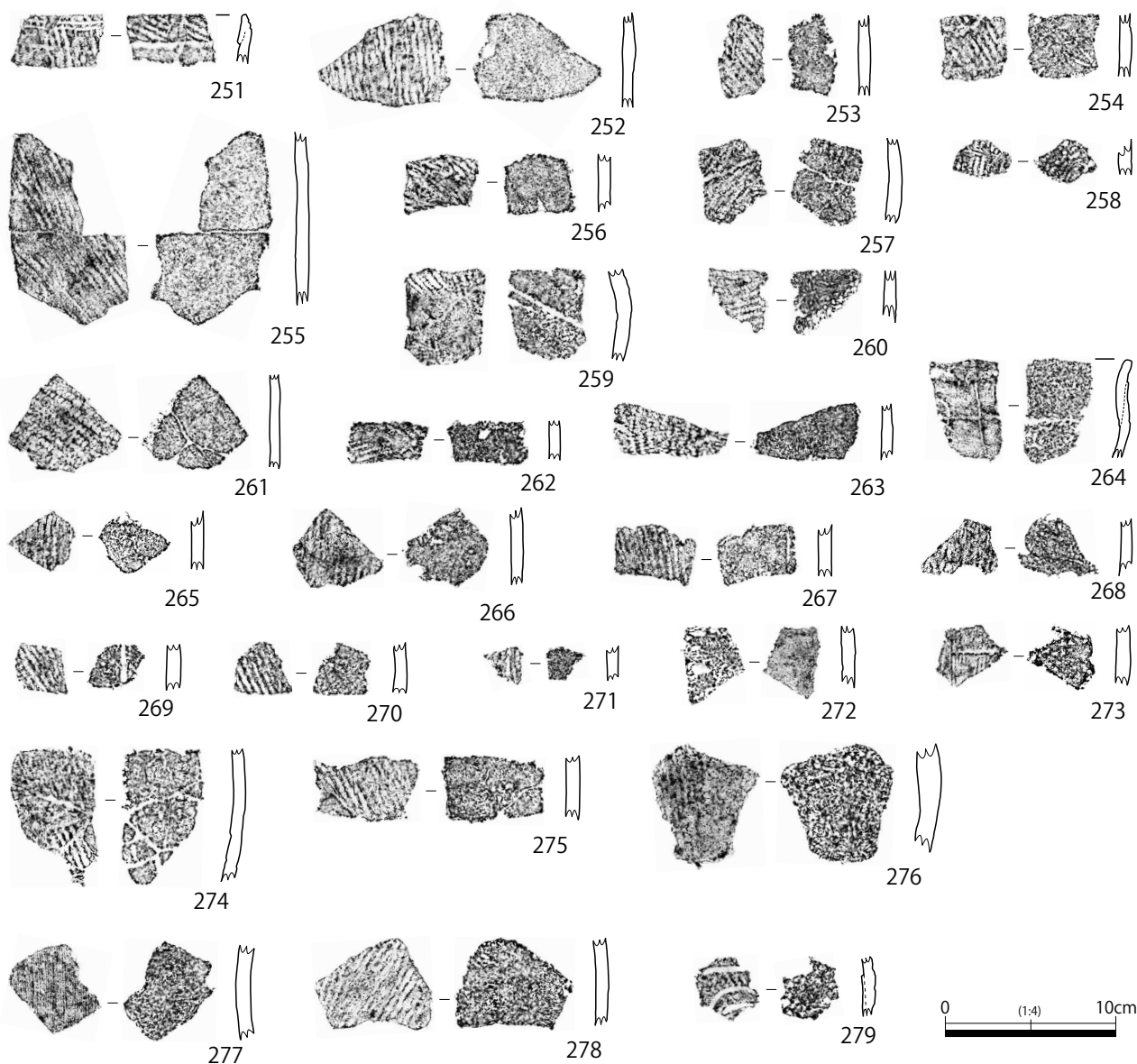
〔土壌化層上面・下面〕

調査区南側丘陵斜面に形成された土壌化層上面から下面にかけて、3527 土器溜をはじめとして、土器がやや集中して出土した。土器溜出土の土器は遺存状態が非常に悪く、図化しえなかった。一方、この付近では縄文時代早期の押型文土器片が出土している。文様など特徴のわかるもの 15 点を図化した。

280～288 は押型文土器である。多くは楕円押型文が縦位に密接施文されるが、280 については縦位と斜位に楕円押型文が密接施文される。楕円は長径 6～7 mm、短径 2.5～3 mm 程度であり、鳥取県内では長山馬籠遺跡、井後草里遺跡などで出土している。楕円文の原体のサイズが比較的小さいこと、内面に柵状痕が見られないことなどから、久保氏の分類でいう D④タイプ（長山馬籠遺跡）、II 期の後半に相当するものと考えられる（久保 1980）。これらは出土位置から考えても同一個体の可能性が高い。



第 146 図 3 区 (27 年度) 崩落土上面流路出土 縄文土器



第147図 3区(27年度)第1面および包含層出土縄文土器

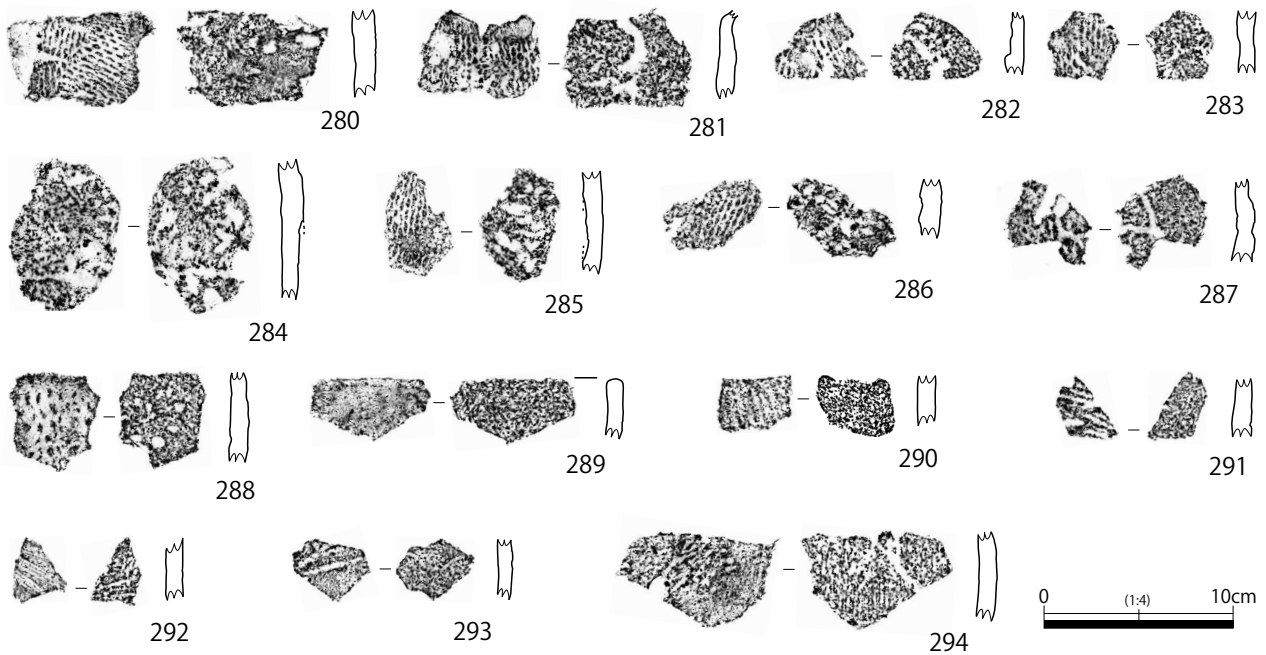
289は深鉢の口縁部である。内外面ともナデが施される。290、291は深鉢の胴部である。外面は単節縄文が施される。292は深鉢の胴部である。外面は細密条痕が施される。293は深鉢の胴部である。外面の地文は不明であるが、1条の沈線が施される。294は深鉢の胴部である。外面は条痕であろうか。

(4) 4区出土土器・土製品(第149図～第152図、PL.64～67、70)

4区は400㎡ほどの小さな調査区であるが、包含層中を中心に比較的多くの遺物が出土している。以下、遺構出土と包含層出土に分けて記述する。

遺構出土土器・土製品

295は須恵器鉢である。円盤状の底部から斜めに直線的な体部が延びる。底面には棒状工具によるランダムな刺突が存在する。296は緑釉陶器皿である。底部に台形の削り出し高台が存在する。内面底部には一重の圈線が巡らされる。軟質の焼成で胎土は浅黄橙色を呈する。297は土師器甕。頸部か



第 148 図 3 区 (27 年度) 土壌化層上面・下面出土縄文土器

ら短く屈曲し、外面には台形の低い段を作る。口縁端部は内側に肥厚させる。298 は白磁碗。高台は内面側が低く削り出される。内面は体部下よりに圈線が巡らされる。299 は須恵器高台付壺である。頸部以上を欠くが、その他は完形である。底部は平坦で、回転糸切り痕を残す。縁辺部に低い方形の高台が付けられる。体部は外方へ立ち上がり、内湾して細い頸部へ至る。頸部は体部に比べ薄く作られる。300 はミニチュア土器である。手捏ねで作られ、丸底で低い体部を有する。

301 は移動式かまどの基部である。図の右端の内面に剥離面があり、その左側に補充された粘土が残る。302,303 も移動式かまどと考えられる基部である。いずれも内面の破損が激しいほか、二次的な被熱痕が顕著である。外面調整が 302 はナデ、303 は縦ハケである点が異なるが、胎土や焼成などから同一個体と考えられる。304 ~ 306 は把手である。304 のように短いもの、305 のように長く湾曲するもの、306 のように中ほどを太く作るものなど、バラエティーに富む。

D54 ~ 61 は土錘および土玉である。細身の小型品(D54 ~ D57, D59, D60)とやや太い中型品(D58)が存在する。D61 は球形土玉である。D62 は紡錘車である。半分程度を欠損し、全体に風化が激しい。高さと最大径がほぼ同じで、広端面側から 1 cm 程度の所に稜を有する。

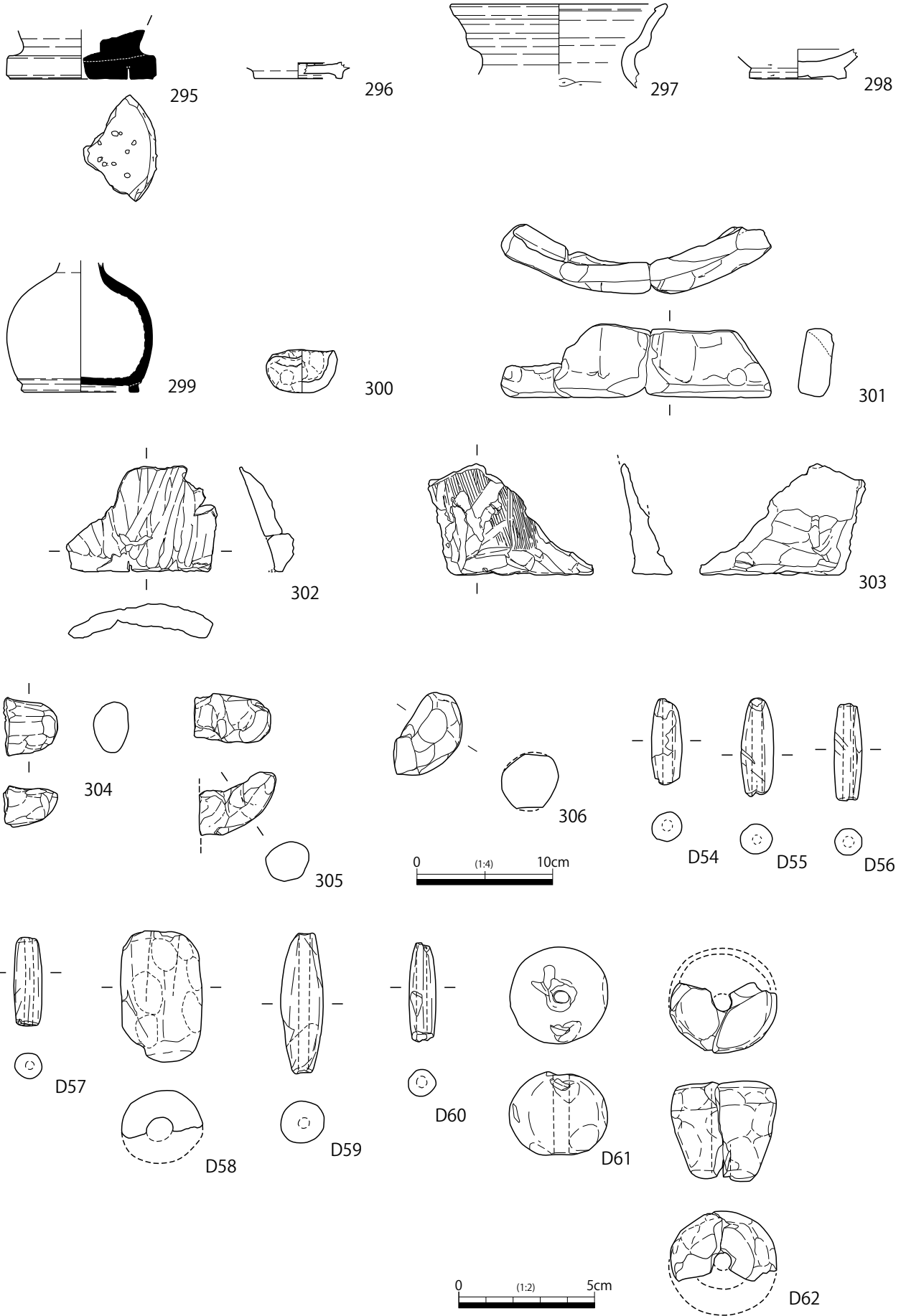
包含層出土土器

〔第 2 面〕

307 は内外面ともナデ調整された土器で、口縁端部は丸く収める。鉢状の器形か。308 は須恵器杯底部で、内面は摩耗しており、硯として使用した可能性がある。309、310 は備前焼すり鉢で、口縁部は上方へ直立させ、外面に 2 条の凹線を施す。311 は瓦質土器鍋で、体部から外面へ折り曲げた後上方へやや丸みをもって屈曲させる。

〔第 3 面〕

312 は土師器甕口縁で、端部を欠損するがいわゆる山陰型の有段口縁である。外面の突出は弱い。313 は須恵器蓋。やや平坦な天井部からゆるやかに体部へ移行し、口縁部は内面に弱い段を持つ。



第 149 图 4 区 遺構出土土器・土製品

314 は須恵器杯身で、平坦な底部から直線的な体部が長く伸び、突出する蓋受け部と短い立ち上がりを有するが端部は欠損する。315 は小型の底部で口縁端部を欠くが、ミニチュアと考えられる。底部と体部の間に稜を持つ。316 は須恵器把手付碗である。口縁部は内面に段を作り、端部はわずかに外反させる。体部は口縁部下で最大径となった後、底部へかけてすぼまる。把手は突出長 2.9cm で上方へ湾曲する形態である。先端は丸く収める。指ナデにより断面は多角形を呈する。317 は須恵器系陶器壺である。肩が張った体部から頸部で緩やかに屈曲し口縁部へ外湾する。端部はわずかに外方へ突出し、端面は丸く収める。外面に格子タタキ、内面はハケ様の条線が認められるが、その部分では器壁が削り取られており、強いハケもしくはケズリの痕跡と考えられる。赤褐色の焼成である。

〔第4面〕

318 は八字状に開く脚部で、端部は外面を玉縁状に丸く作り、内面は内側へ突出させる。上縁は端面となっており、鍵手状を呈する。おそらく、逆L字形を呈する透かしの下縁であろう。透かしと端部の間には波状の線刻が施される。

〔表土〕

319 は須恵器無蓋高杯で、杯部は皿状で平坦な底部からゆるやかに立ち上がり口縁部へ至る。脚部は八字状に開く。320 は白磁碗で、内面側に面を持つ削り出し高台のある底部からやや内湾する体部が伸びる。釉は比較的薄い。321～323 は備前焼のすり鉢である。321 は底部から口縁部が残るが、器高 6.5cm とやや小型品である。口縁部は上方へ引き延ばされ、端部中央を凹ませる。内面にすり目が残るが、使用により激しく摩耗している。323 は端部をやや角張るように丸く収める。324 は羽釜で、瓦質というよりも土師質に近い焼成である。口縁部外面に台形の鏝が巡らされる。鏝以下は内方へ伸びる。外面にススが付着する。

包含層出土土製品、移動式かまど

325 は移動式かまど焚口上縁～側縁にかけての庇部分で、先端を欠く。焚口似合わせて庇本体を接合し、上面に粘土を補充している。326 は付属部開口部上縁の庇で、断面三角形を呈する。貼り付け前に浅い溝を彫り、そこに庇を貼りつけている。327 は底部～体部の破片で、内方へ傾く断面となる。両側辺は剥離面となっていることから、焚口部と付属部の開口部の間の部分であることがわかる。いずれも剥離しているが、左側の剥離部分に伴うナデが右側のナデを切っていること、左側の剥離面の造作がより粗雑で、開口部も斜めになることから、左側が付属部の剥離面の可能性が高い。これまで確認されているものはすべて付属部が焚口部右側に位置しており、左側にも付属部があったとすると初めての例となる。

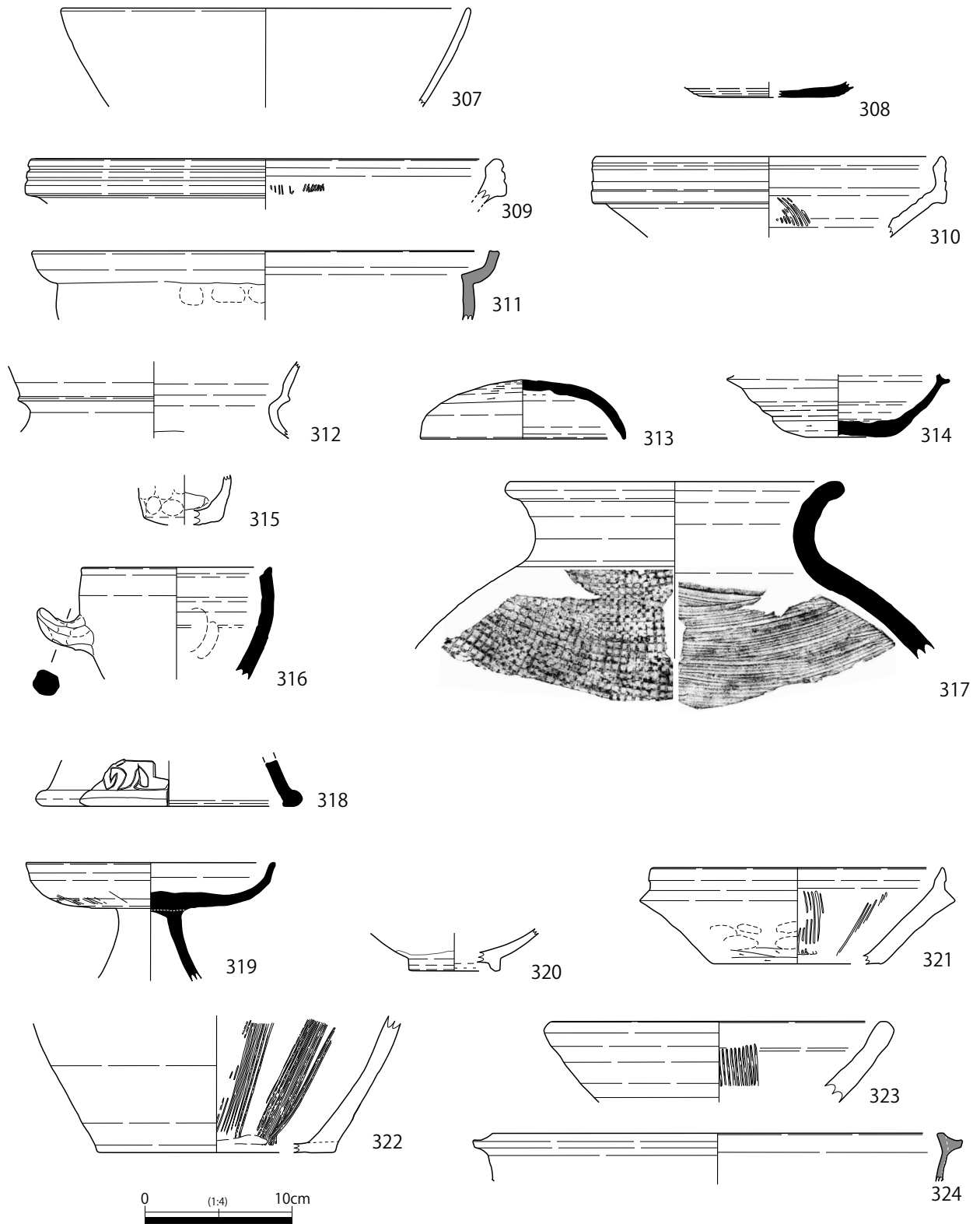
D63～D66 は土製支脚である。いずれも 2 本の突起と後方に突出するつまみを持つ形態である。突起部は体部から続けて作られるが、つまみは後から貼り付けて作られる。全体にナデで調整される。

第 152 図は 4 区出土の土錘、土玉類である。4 区でも多くの土錘・土玉類が出土している。包含層ごとに見ると、上層では小型品が多いのに対し、下層では小型品の比率が減少し、土玉や大型品が増える傾向にある。

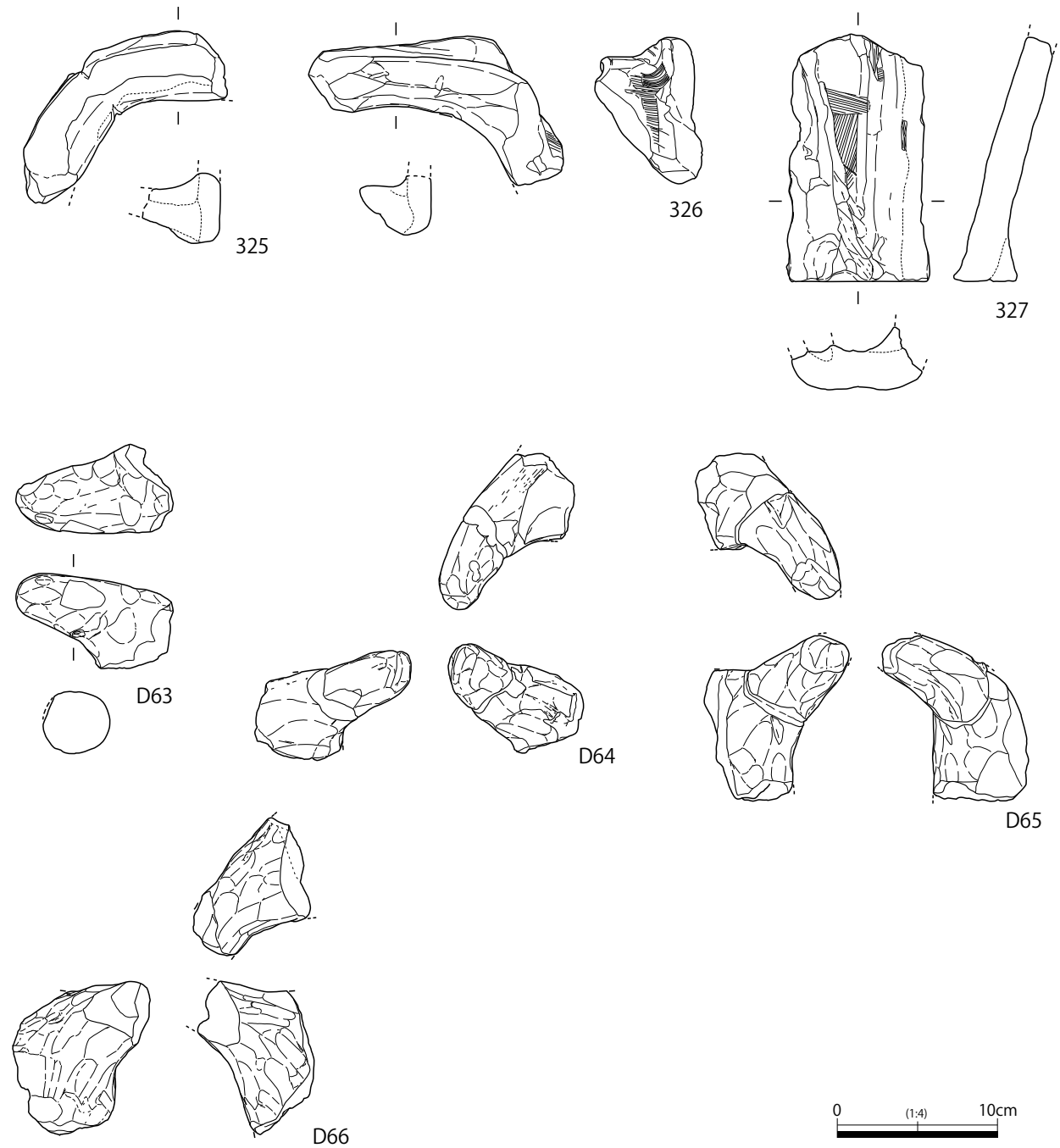
〔第2面〕

D67～D74 はいずれも紡錘形の小型品で、焼成が土師質のものと須恵質のものがある。

〔第3面〕



第150图 4区 包含層出土土器



第151図 4区 包含層出土移動式かまど・土製品(1)

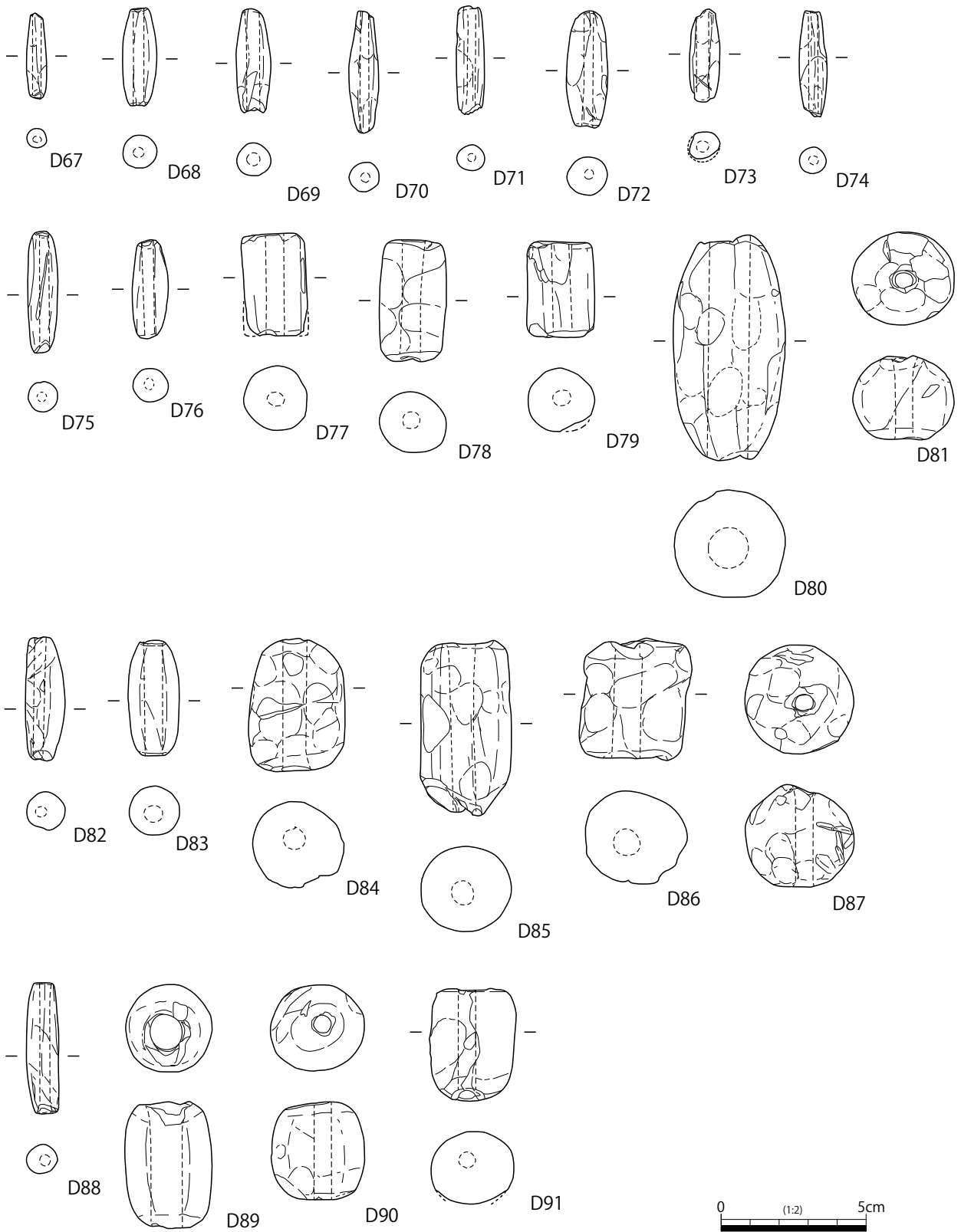
D75、D76は紡錘形の小型品、D77～D79は円柱状の中型品、D80は紡錘形の大型品である。いずれも芯棒に粘土を巻き付け成形する。D81は球形の土玉である。片面から棒状工具を突き刺して穿孔している状況が観察できる。

〔第4面〕

D82、D83は紡錘形の小型品、D84～D86は円柱状に近い大型品である。大型品は棒状工具を突き刺して穿孔しており、外面に指頭痕を残す。D87は球形土玉である。

〔表土ほか〕

D88は紡錘形の小型品、D89、D91は円柱の両端面を丸くしたナツメ形で、D90も寸詰まりであるが同様の形態ともいえる。D89は孔径が大きく、棒状工具を突き刺して穿孔している可能性がある。



第152图 4区 包含層出土土製品 (2)

2 石器

70点を図化した。包含層からの出土が主であるが、3区竪穴建物1からは黒曜石の剥片が、ピットや溝からは砥石や紡錘車などが出土している。以下、調査年度および調査区ごとに述べる。

(1) 1区出土石器 (第153図、PL.71)

S1は石庖丁である。背部および刃部が外湾し、紡錘形を呈す。穿孔が2箇所設けられ中間に径2mmの穿孔を途中でやめた痕跡が2つ確認できる。結晶片岩製。

(2) 2区出土石器・石製品 (第154図～第156図、PL.71～74)

S2、S3は磨製石斧の刃部である。刃部以外は欠損しているが、太型蛤刃石斧と考えられる。

S4は凝灰石製の紡錘車である。側面の形状は逆台形を呈す。

S5～S7は敲石である。S5は断面が楕円形を呈すやや棒状のもので、下面に敲打痕が認められる。

S6、S7はやや扁平な円礫で側面に多く敲打痕が見受けられる。

S8は打製石鏃である。安山岩製で、凹基無茎式に相当する。

S9は滑石製の白玉である。径5mm、孔径2mmを測る。

S10～S16、S18、S19は砥石である。形状や砥面から、角柱状(S10、S12、S13、S15、S16)と板状(S11、S14、S18)のものが出土している。S15は穿孔が1箇所設けられている。S10は706ピット、S12は922ピット、S18、S19は577ピットから出土した。S19は穿孔のある軽石製の砥石である。S15と同様に端部に1箇所穿孔が設けられている。

S17は板状の礫である。周縁に剥離による成形の痕跡が認められる。

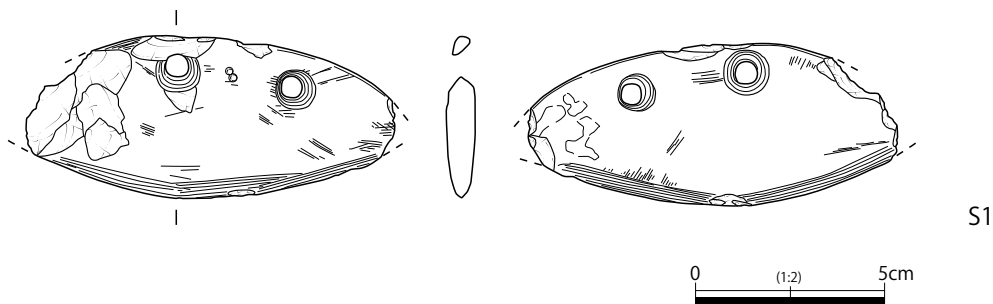
(3) 3区 (26年度調査) 出土石器・石製品 (第157図～第159図、PL.71～74)

S20、S21は磨製石斧である。いずれも小型の扁平両刃石斧で、刃部はやや片減りしており、基部も欠損している。

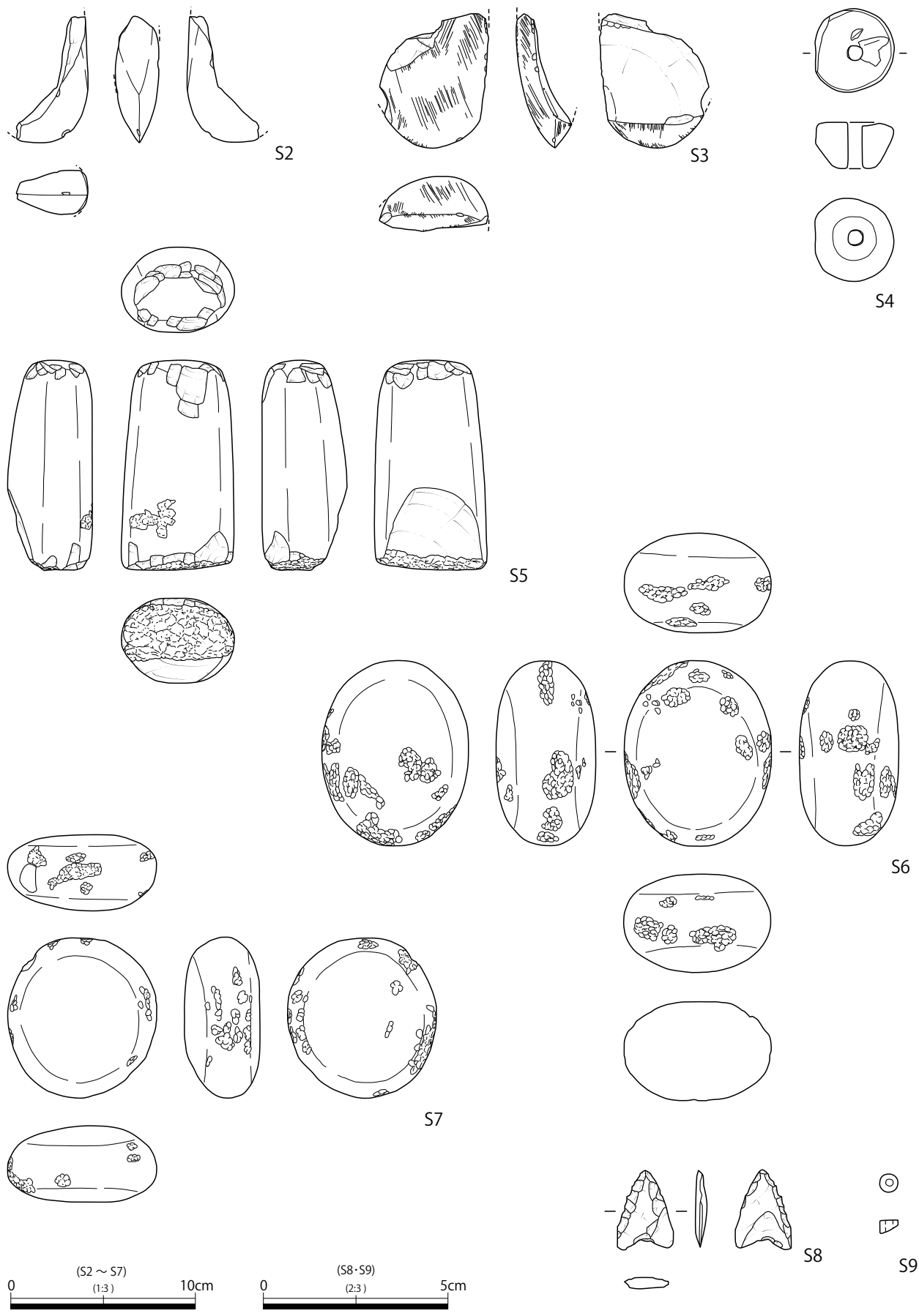
S22は樽形の形状をした石器である。断面はほぼ円形で、上面と下面は平坦となっている。磨石であろうか。

S23、S24は敲石である。S23は上面のみ敲打痕が認められるが、下面は欠損・剥離する。S24は途中で欠損している。磨製石斧を再利用したものであろうか。

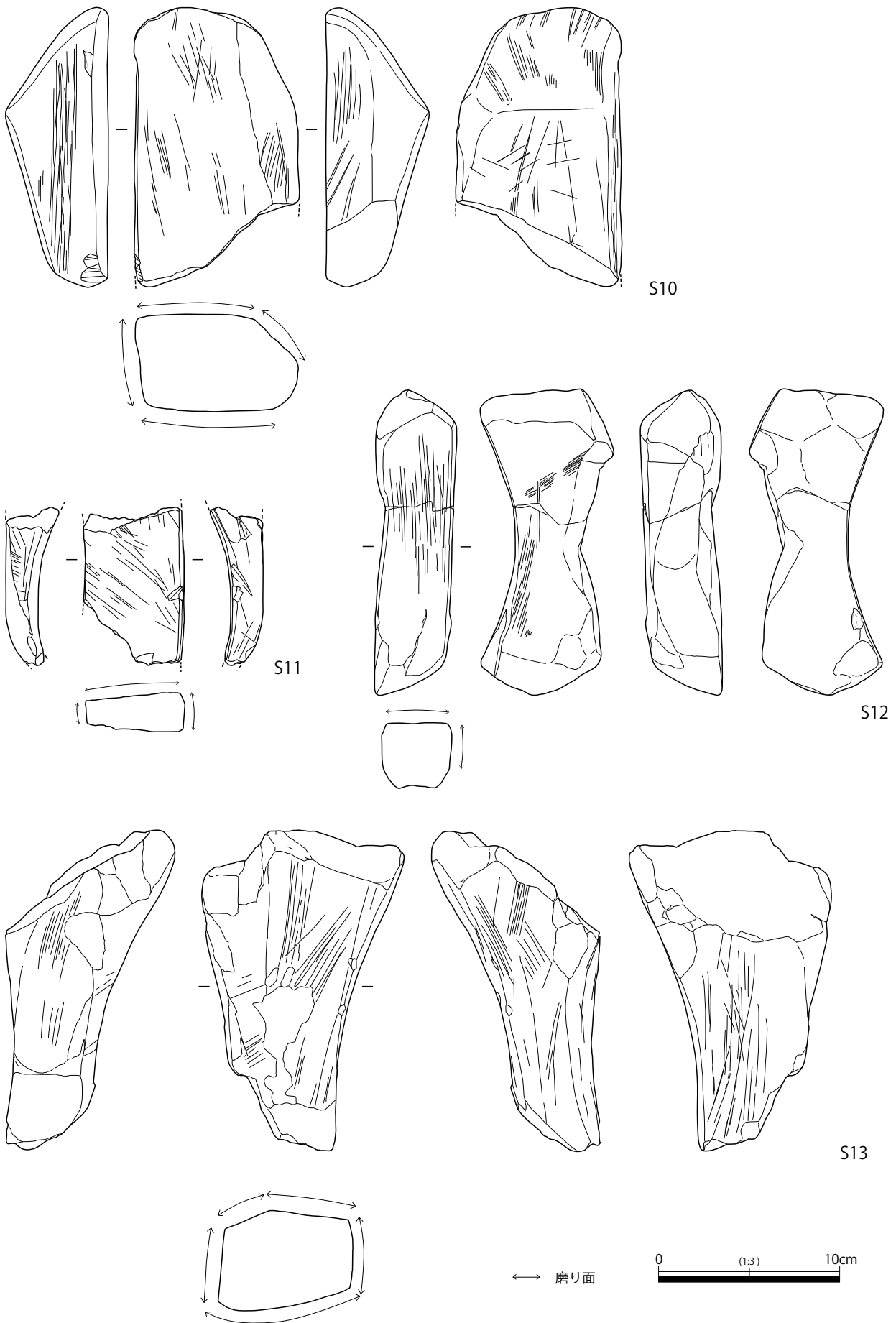
S25、S26は打ち欠き石錘である。S28は打ち欠きが2箇所であるが、対称的な位置にはない。表面には擦痕がみられる。S27は扁平な円礫で、2箇所の打ち欠きが存在するが、2箇所が近接位置に



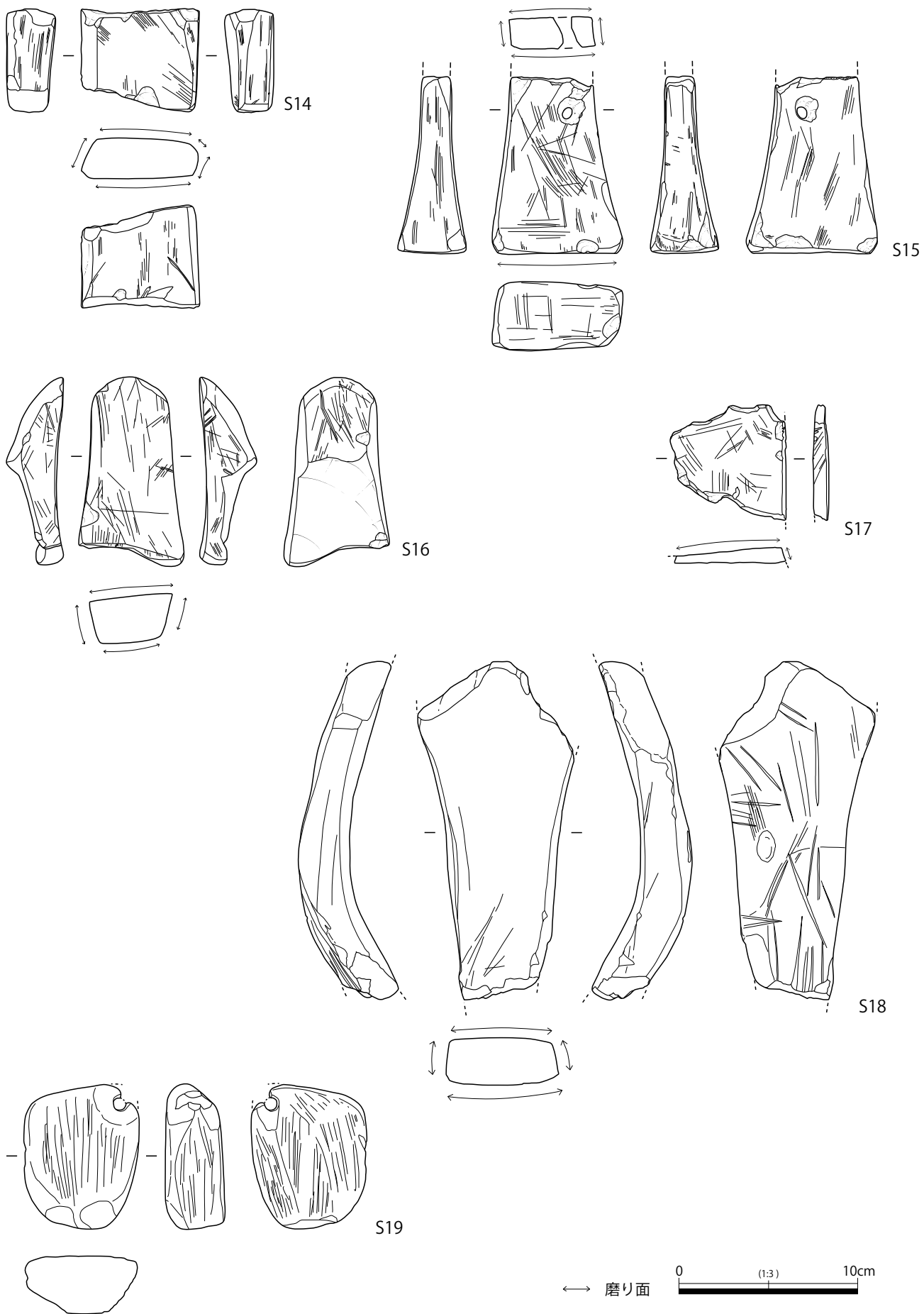
第153図 1区 包含層出土石器



第154図 2区 出土石器(1)



第155図 2区 出土石器(2)



第156図 2区 出土石器(3)

設けられている。S27 と S28 は石錘とは言いがたく、別の器種であろう。

S29 は「舌状石製品」である。研削によって円柱状に成形し、一端を穿孔する。穿孔部は凸状に面を形成している。反対側は面取りを行う。中央部には敲打痕が見受けられる。

S30 は碧玉製の勾玉で、片面穿孔である。

S31 ～ S38 は砥石である。形状や砥面から、角柱状 (S32、S33、S36、S38)、板状 (S31、S34、S35、S37) が出土している。S32 は 3392 ピット、S36 は 3122 ピットから出土した。

S39 は茶臼の下石であろうか。デイサイト製である。径は 34cm 程度に復元される。

S40 は横型石匙である。打撃調整によってつまみ状の突起を形作り、下縁に刃部を成形する。

S41 は安山岩製のスクレイパーである。下端部に刃部が形成される。

S42 は安山岩製の板状礫である。加工途中の未成品と考えられる。

S43、S44 は黒曜石の剥片である。ともに竪穴建物 1 から出土した。

S45 は石核である。S46 は二次加工剥片である。側縁と下端部に剥離成形が施される。

(4) 3区 (27年度) 出土石器・石製品 (第 160 図、PL.74・75)

S47 は大型石庖丁である。刃部および体部には研磨が認められる。穿孔は行われていない。結晶片岩製である。

S48 ～ 50 は打ち欠き石錘である。S50 は半分欠損している。

S51 はスタンプ形石器である。砲弾形を呈し、下面は平坦に成形されている。下端の縁は打撃により一部剥離している。

S52 は凹基無茎式の打製石鏃である。安山岩製である。

S53 は黒曜石の二次加工剥片である。上下端部に剥離成形が施される。

(5) 4区出土石器・石製品 (第 161・162 図、PL.71・74・75)

S54、S55 は碧玉製の管玉である。S54 は片面穿孔。S55 は未成品で、上下両面から穿孔しているが、貫通していない。側面も研磨が行われておらず、多角形を呈する。4105 柱穴から出土した。

S56 は紡錘車である。側面は隅丸長形状を呈す。S57 は打ち欠き石錘である。S58 は鑿状片刃石斧である。断面は方形を呈し、基部が一部欠損している。

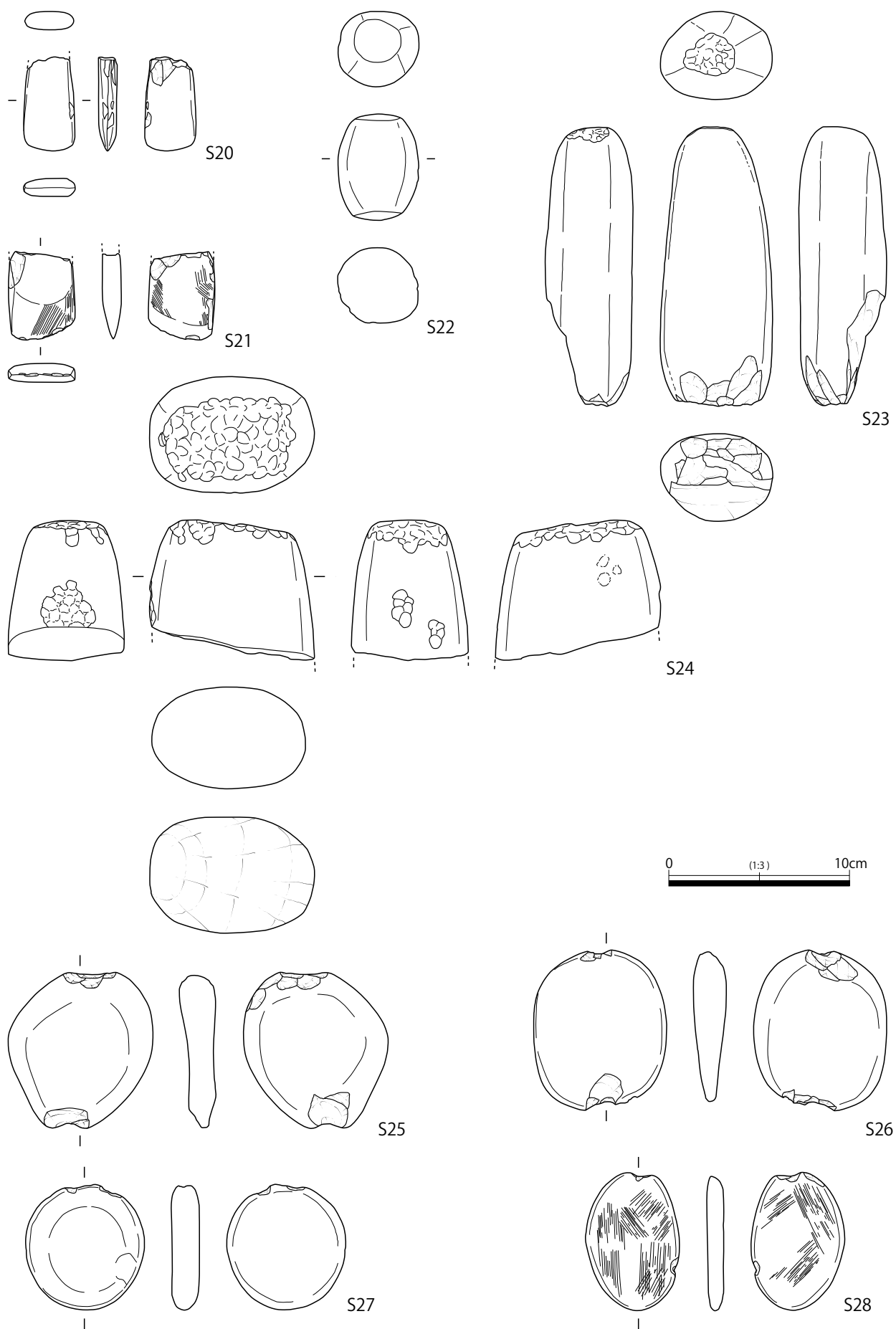
S59 ～ S62 は敲石である。S59 は長楕円形で各面に敲打痕が認められる。S60 は表面に磨り面の痕跡が見受けられ、砥石の転用品と考えられる。S61 は側面にわずかであるが敲打痕が認められるために敲石とした。表面はなめらかで、元々は磨石の可能性もある。

S63 ～ S67 は砥石である。角柱状 (S64 ～ S67)、有溝砥石 (S63) が出土している。S67 は 4087 ピットから出土した。

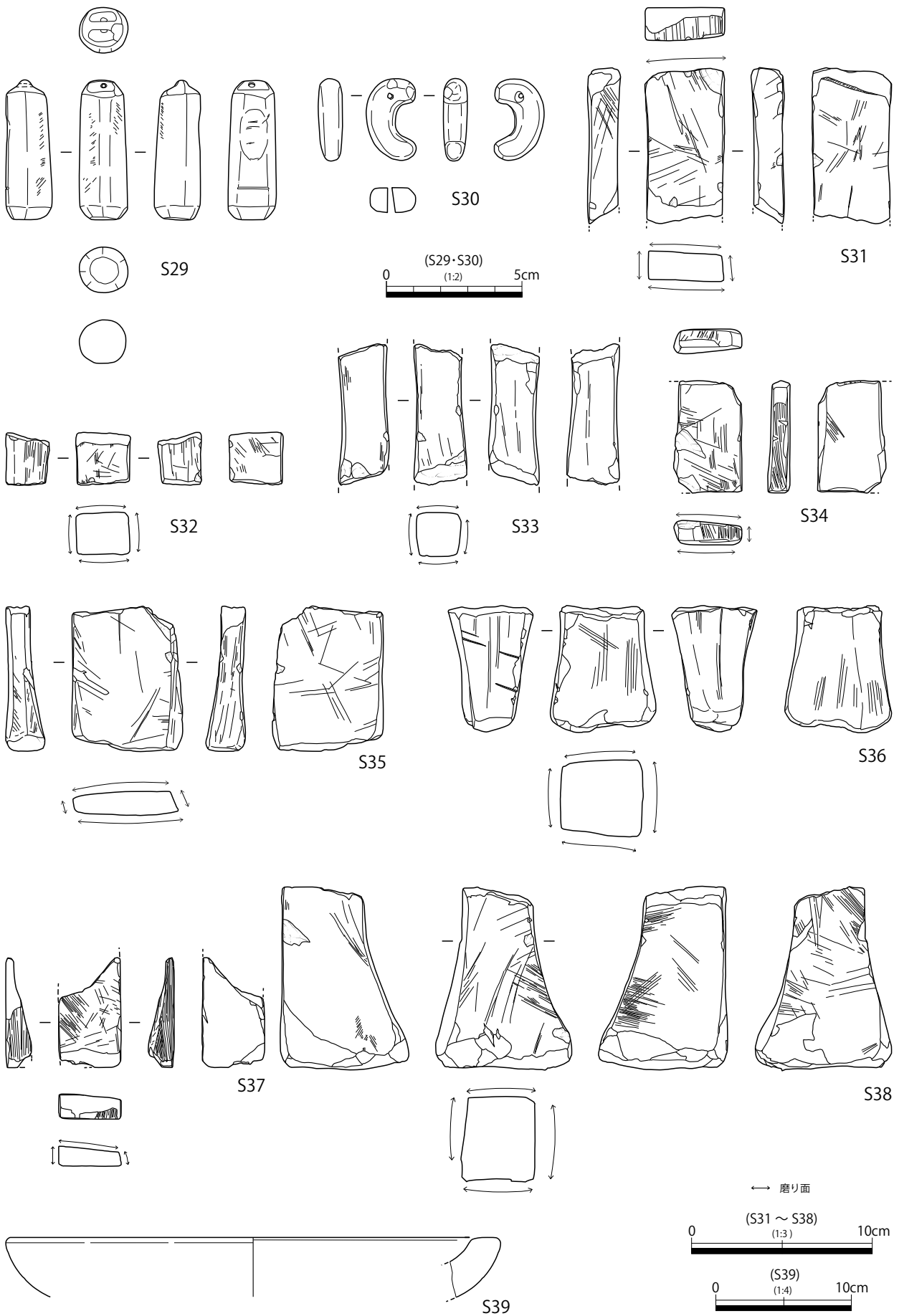
S68 は滑石製の石鍋である。把手の一部が残存する。内外面に工具痕が残る。

S69 は楕円礫である。敲石の一群と石材や形状、重量が類似しているが、明瞭な使用痕等は確認できない。『高住平田遺跡Ⅱ』(鳥取県教育委員会 2013) において報告された「丸石」と同様のものと考えられる。

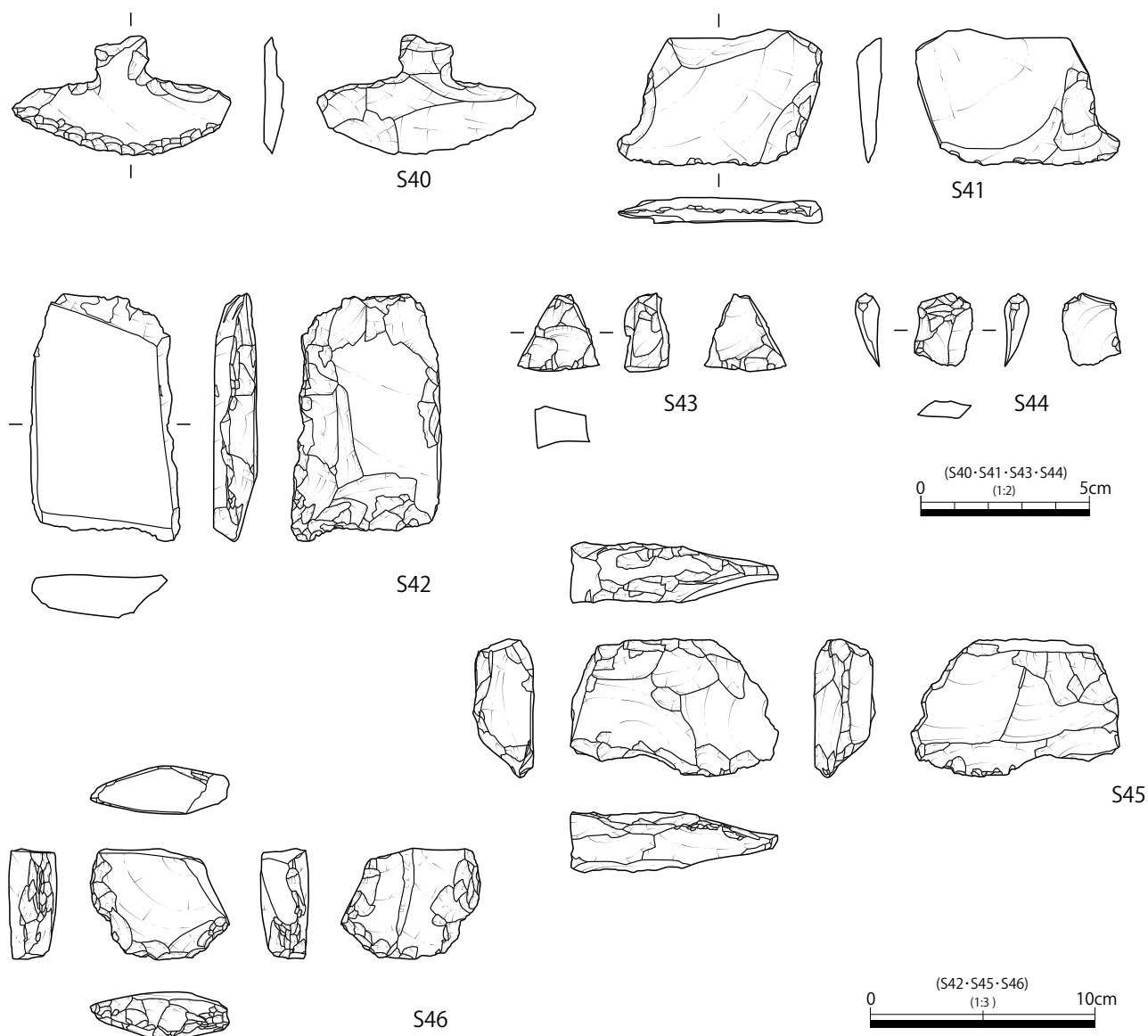
S70 は石皿状の製品である。欠損しているが、元は円形の板状を呈す。中央はやや凹み、擦痕が表裏両面に確認できる。表面および破面の一部に黒色のスス状物質が付着している。石皿も隣接する高



第157圖 3区 出土石器(1)



第158図 3区 出土石器(2)



第159図 3区 出土石器(3)

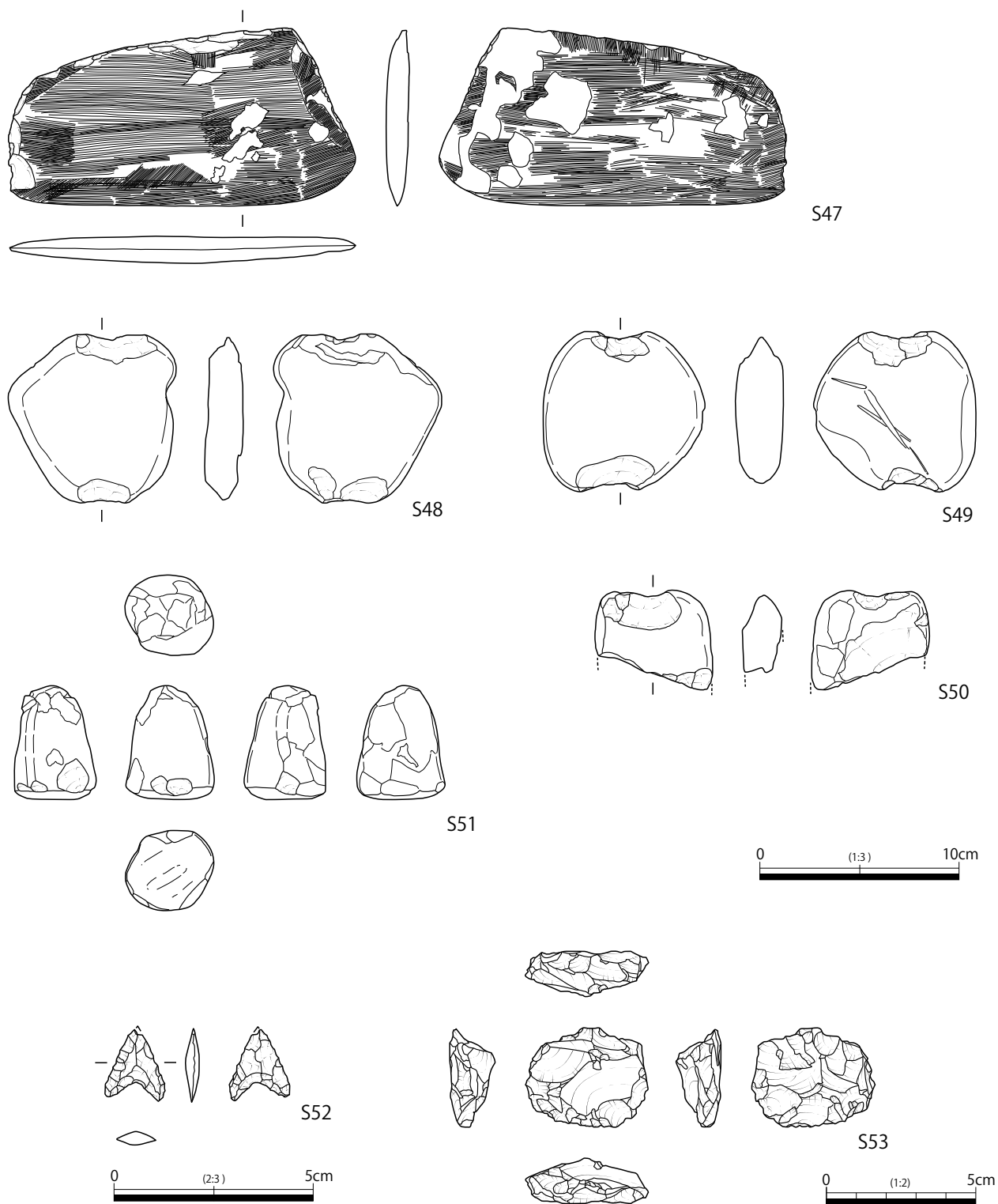
住平田遺跡で複数出土しており、それらとの関連が窺える。

3 木製品

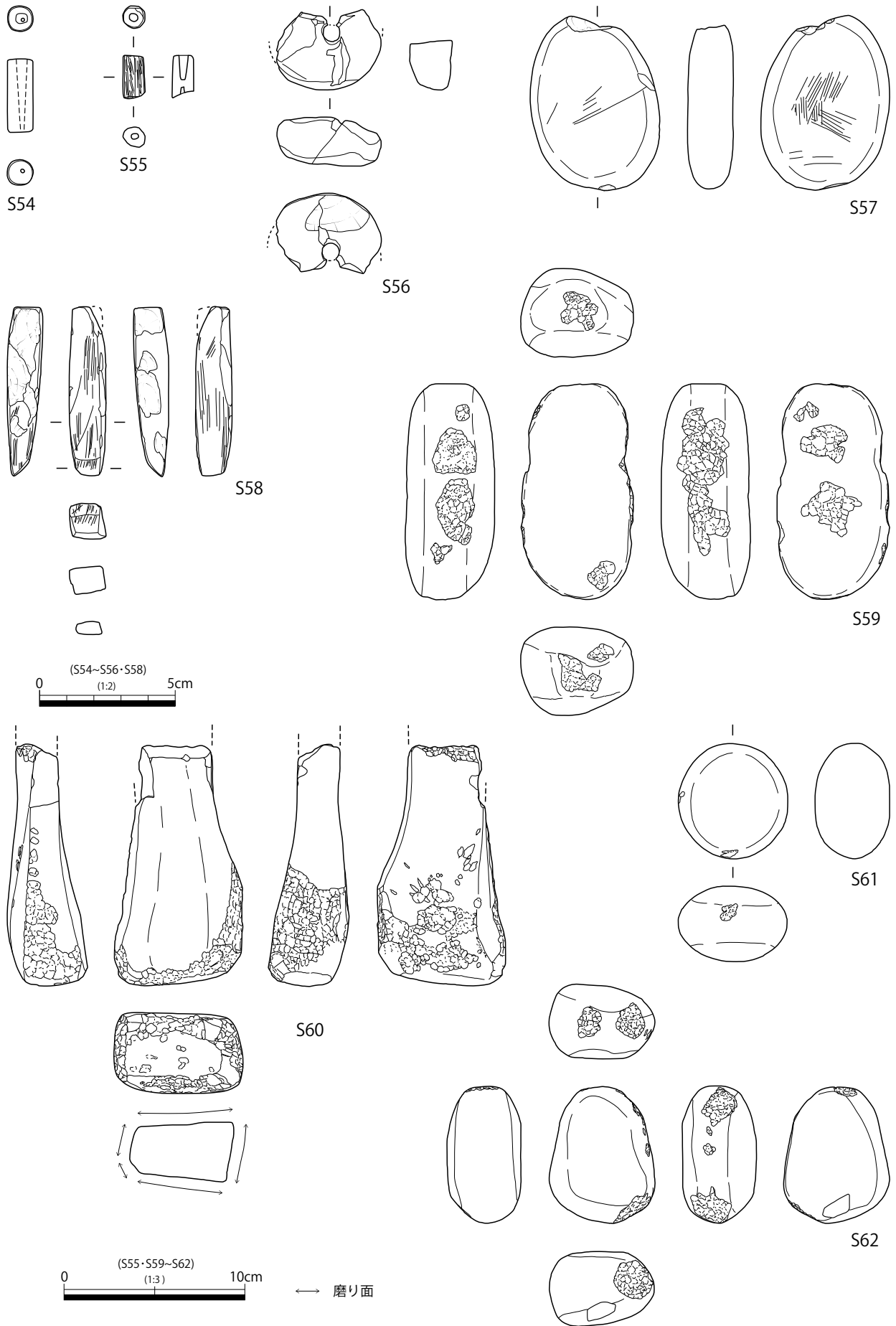
包含層を中心に多くの木製品が出土した。残りのよいもの、種類・部位がわかるものを中心に72点を図化した。以下、調査年度および調査区ごとに述べる。

(1) 2区出土木製品(第163図～第165図、PL.76～78)

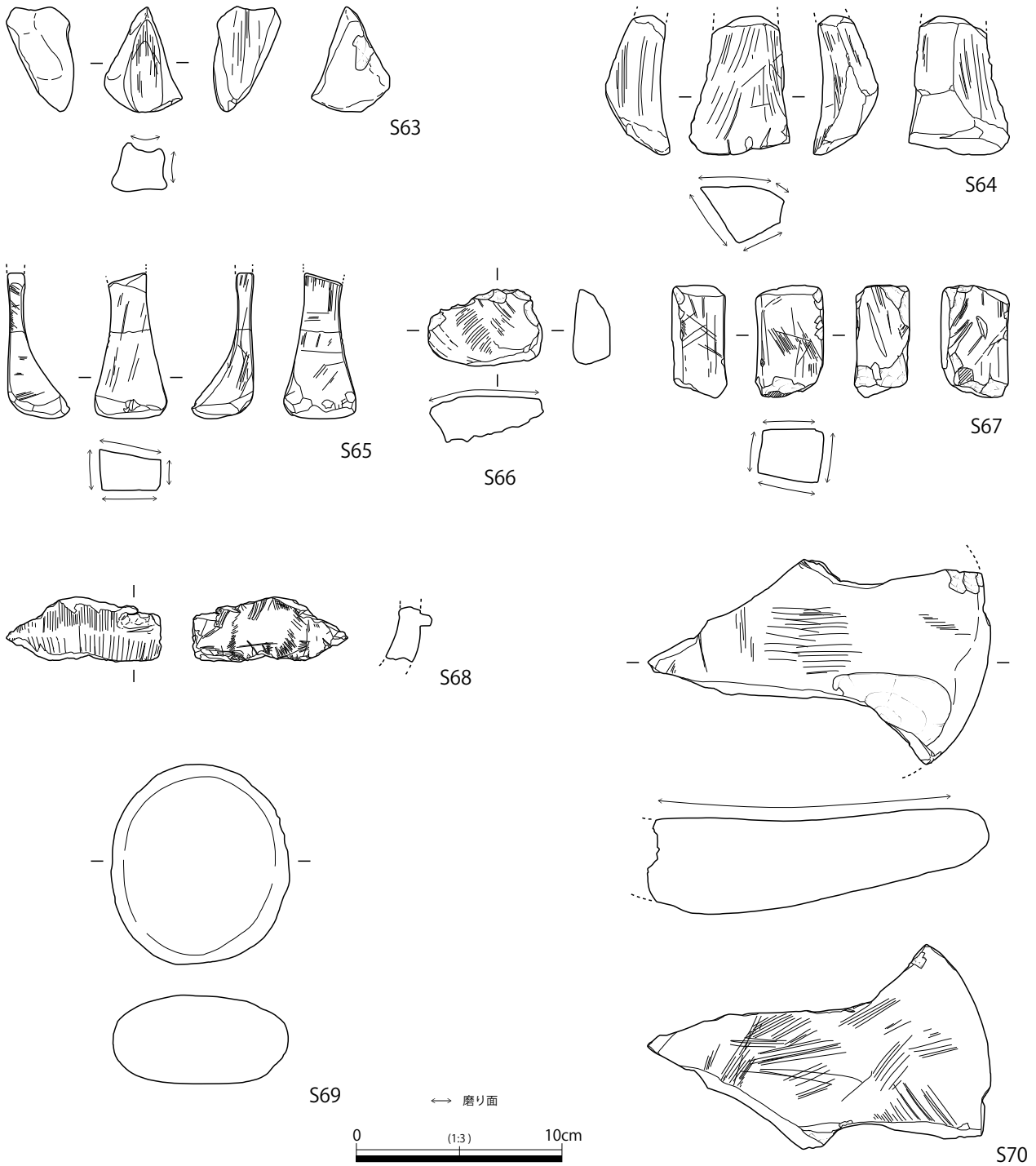
W 1、W 2は曲物の側板である。W 1は残存長30.3cm、残存幅7.8cm、厚さ0.3cmを測る。一方の端部には、斜交する浅い刻線がある。W 2は残存長9.1cm、残存幅4.4cm、厚さ0.4cmを測る。内面側には、繊維方向に直交および斜交する浅い刻線が見られる。また、1cm×0.1cm程度の細長い孔を列状に配し、樹皮を通した痕跡がうかがえる。W 1と同一個体か。いずれも板目材で、樹種はスギである。W 3は曲物底板である。端部はわずかにカーブを描いており、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。柎目材で、樹種はスギである。W 4は曲物(蓋)の把手と考えられる。細



第160図 3区(27年度)出土石器



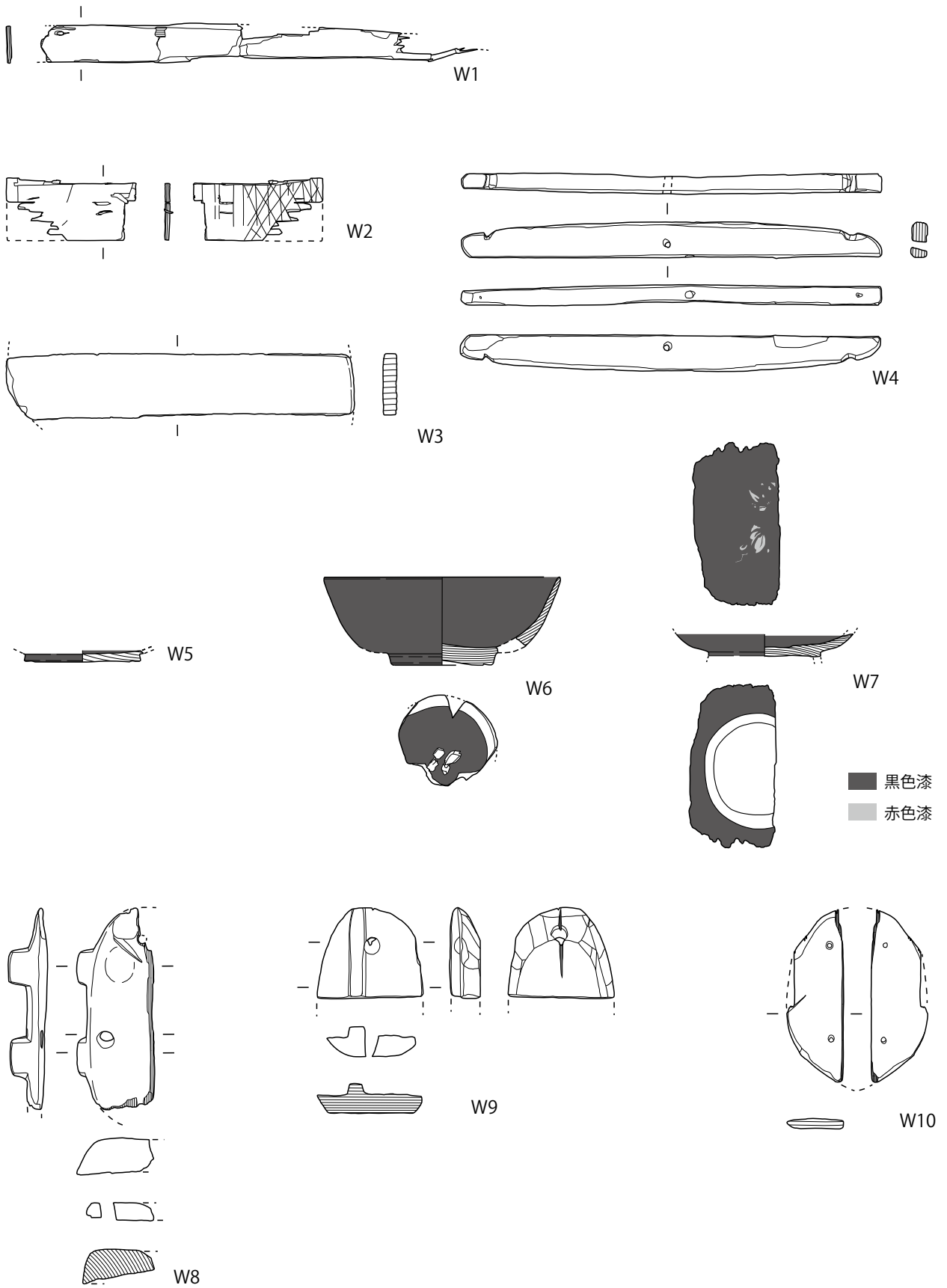
第161図 4区 出土石器(1)



第162図 4区 出土石器(2)

長い棒状の製品で、端部はやや細くなり、両端部には抉りが設けられている。中央には穿孔が1箇所設けられ、下面には中央部と両端部にそれぞれ穴がみられる。下面は平坦に仕上げられており、蓋材と目釘・樹皮等で固定していたものと考えられる。芯去材で、樹種はスギである。

W 5～W 7は漆器椀である。W 5は底部のみ残存し、高台復元径は8.1cmを測る。高台下面には幅4mm程度の溝が1条削られており、輪高台の形態を模している。内面と高台外面には黒色漆が塗られている。高台外面にはロクロ目が確認できる。挽物で、木取りは横木取り(板目)、樹種は広葉樹である。W 6は復元径16.7cm、器高6.2cm、底径6.9cmを測る。底部外縁はわずかに削られて段状を呈し、中央はややくぼむ。底部外面中央には4つの穴があり、木工ロクロの爪痕と考えられる。



第163図 2区 出土木製品(1)

体部は緩やかに立ち上がる。内外面ともに黒色漆が塗られている。全体にロクロ目がよく残る。横木取り（板目）で、樹種は広葉樹である。W 7の底部は輪高台状を呈すが、端部は欠損している。内外面は黒色漆が塗られ、体部内面には赤色漆で植物文様が描かれている。横木取り（板目）で、樹種は広葉樹である。

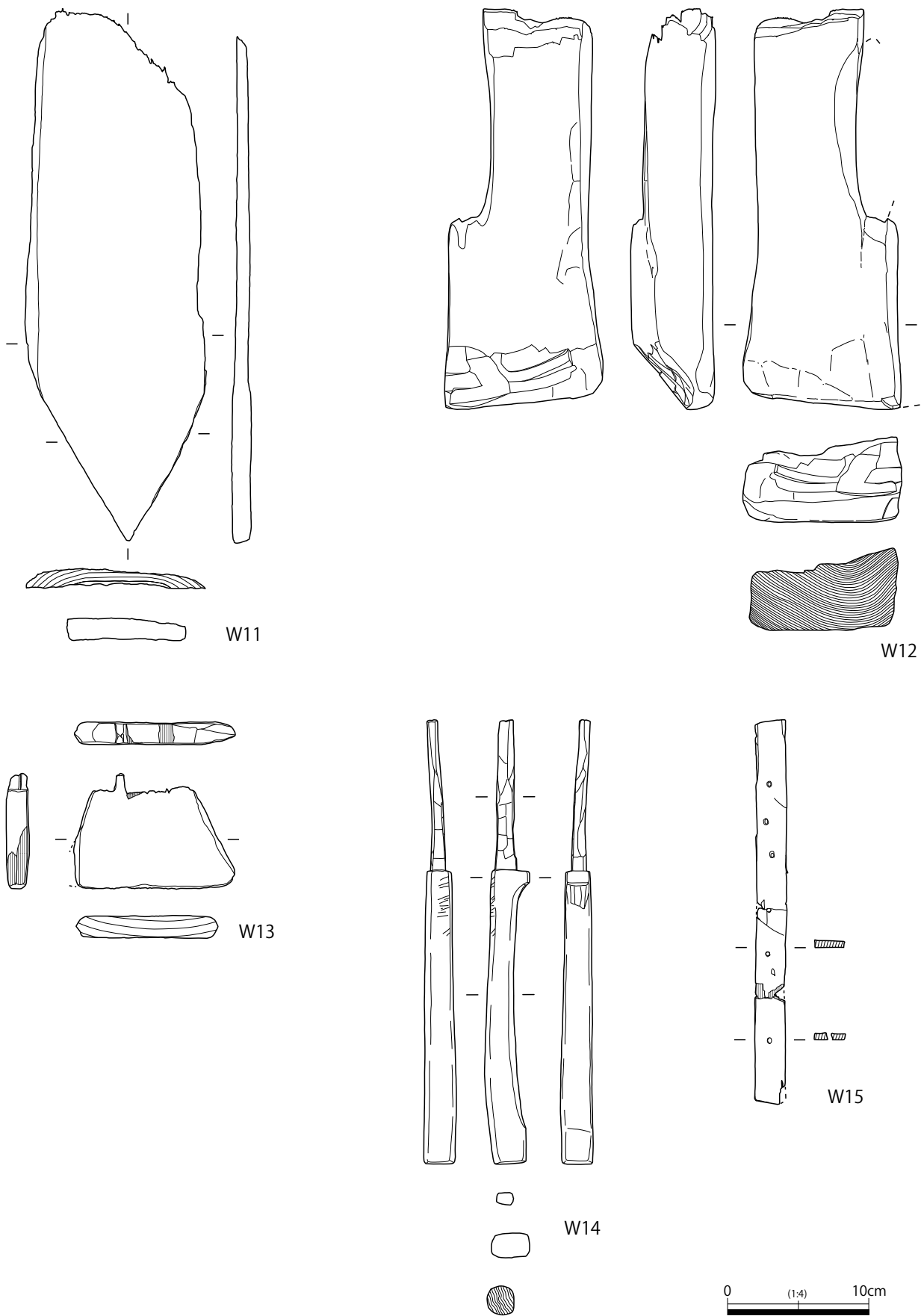
W 8は連歯下駄である。右側部分が欠損している。後緒孔は後歯より前に穿たれる。台と歯の間に段はない。上面の足の圧痕から、右足用と考えられる。追衿目取りの芯去材で、樹種はスギである。W 9は不明板材である。平面は半円形を呈し、中央には斜め方向の穿孔が1箇所設けられている。側面はいずれも丁寧に加工され、断面は逆台形状を呈す。穿孔や全体の形状から、下駄を二次加工したものと考えられる。板目材で、樹種はヒノキ属である。W10は不明板材である。平面形は半円形で、直径3mm程度の穿孔が2箇所設けられている。板目材で、樹種はスギである。

W11は矢板である。残存長37.8cm、幅12.5cm、厚さ1.2cmを測る。下端は両側面から削り込み、先端を尖らせている。元は壁板等の建築部材であった可能性がある。板目材で、樹種はスギである。W12は一木式の腰掛けであろうか。残存長28.3cm、幅11.2cm、器高5.8cmを測る。側面から見て、一方の端部は逆台形状に加工され、背面には脚が削り出されたような痕跡が残る。中央部には穿孔があった可能性もある。板目材（木表が正面側となる）で、樹種はスギである。W13は部材（脚）である。台形状の板材の上辺に断面方形のホゾを2個削り出している。縁辺は丸く面取りされている。板目材で、樹種はヒノキ属である。3区で出土したW39と同一の部材か。W14は把手状の部材である。残存長31.4cm、幅3.2cm、厚さ2cmを測る。上部3分の1程度は段を作って細く削り出しており、別材の穴に差し込むホゾと思われる。下方は中央部がやや細くなるように加工され、段付近で1側面を大きく削り残して、刀剣の把部分の形状に類似する。芯去材で、樹種はスギである。W15は不明板材である。残存長27.2cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。直径3mm程度の穿孔が6箇所設けられている。板目材で、樹種はヒノキ属である。

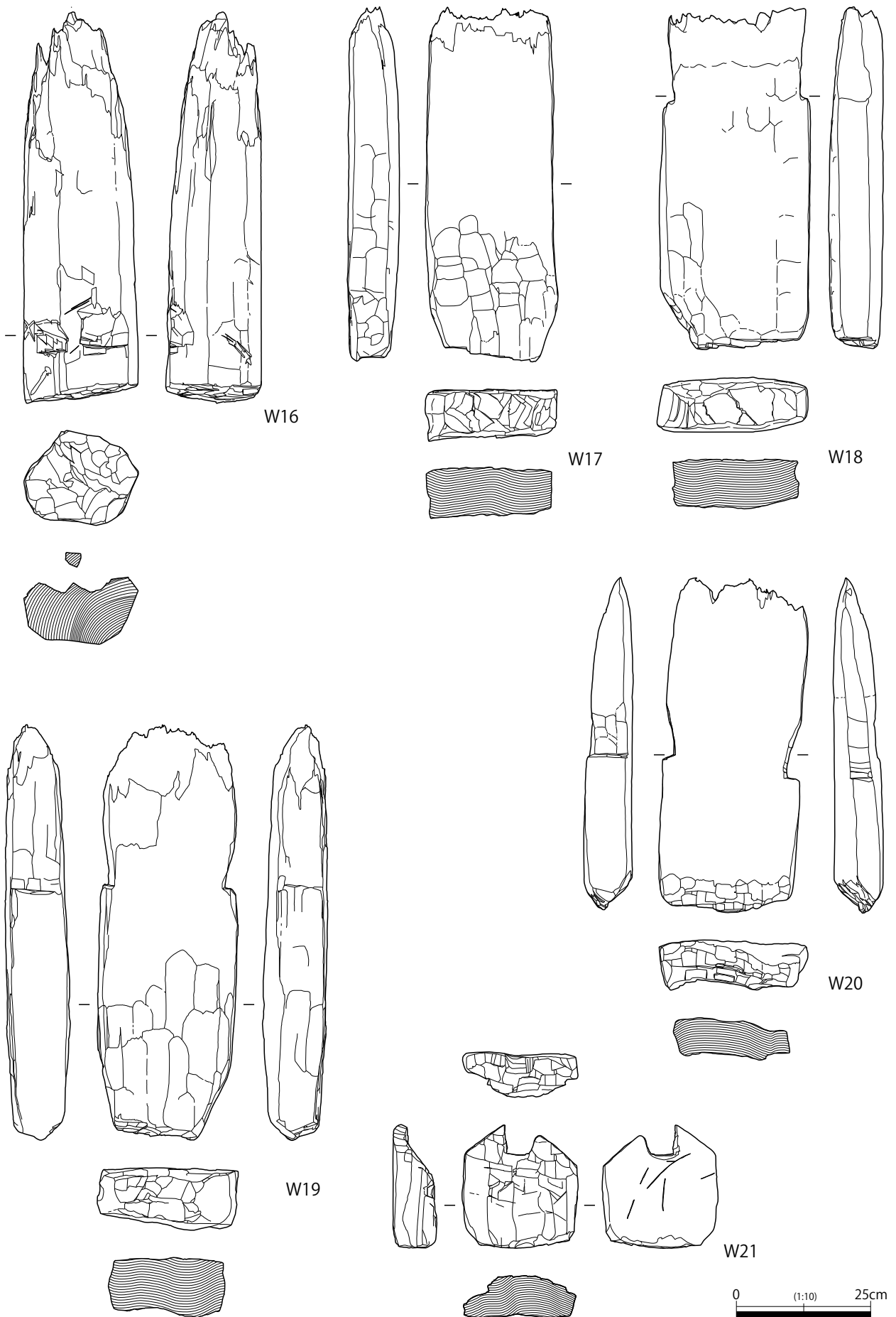
W16は柱材である。残存長73cm、幅21.3cm、厚さ17.8cmを測る。下面は平坦に加工されている。下端から9cm付近に幅4cm程度の刃部を持つ工具を使った穿孔が設けられている。芯去材で、樹種はヒノキ属である。

W17～20は断面長方形の柱材（五平柱）である。掘立柱建物1を構成する。W17は残存長66.1cm、幅23.9cm、厚さ9.7cmを測る。平面形はほぼ長方形であるが、下端は左右がやや細く加工される。他の柱にみられる左右の挟りはみられない。562柱穴の柱材。W18は残存長63.8cm、幅28.1cm、厚さ10.2cmを測る。平面形はほぼ長方形であるが、左右の側面に挟りが設けられ、下端では左右を削ってやや先細りに加工される。下端から挟りまでの長さは46cm程度である。585柱穴の柱材。W19は残存長77.6cm、幅25.8cm、厚さ10.8cmを測る。平面形はほぼ長方形であるが、左右の側面に挟りが設けられ、下端では左右を削ってやや先細りに加工される。下端から挟りまでの長さは47cm程度である。621柱穴の柱材。W20は残存長62.5cm、幅25.5cm、厚さ9.1cmを測る。平面形はほぼ長方形であるが、左右の側面に挟りが設けられる。下端は両刃状に加工されている。下端から挟りまでの長さは25～28cm程度である。654柱穴の柱材。これらの柱はいずれも板目材で、樹種はすべてスギである。

W21は441柱穴で礎板として検出した。残存長23cm、幅21.5cm、最大厚7.7cmを測る。平面は五角形状を呈するが、上方には輪薙込状の加工もしくは方形の穿孔が施されている。下方から見た形



第164図 2区 出土木製品(2)



第 165 図 2 区 第 2 面遺構（掘立柱建物 1 ほか）出土柱根・礎板

状は半円形を呈しており、元は柱材だったものを転用した可能性がある。板目材で、樹種はスギである。

(2) 3区 (26年度調査) 出土木製品 (第166図～第168図、PL.76～79)

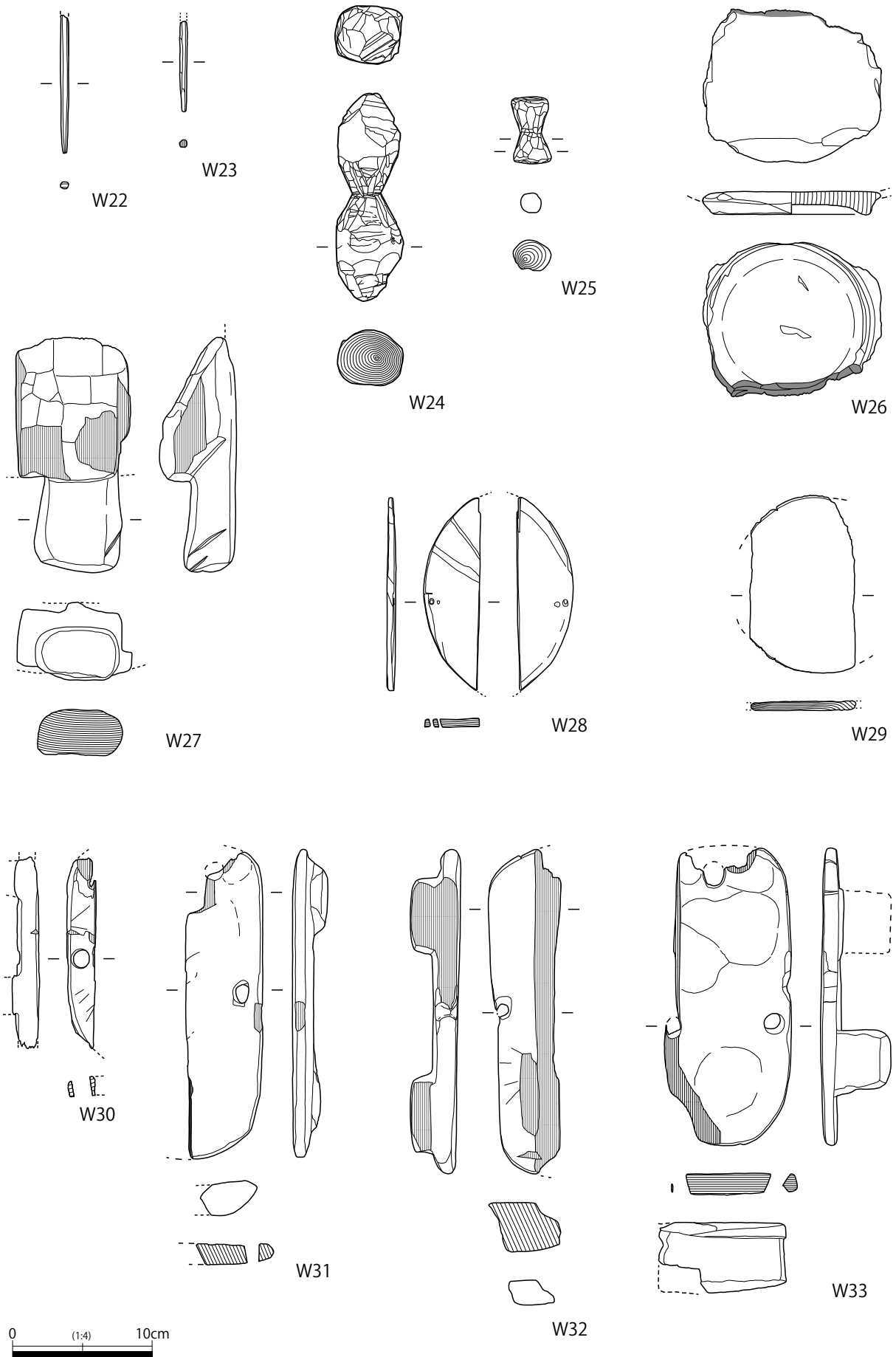
W22、W23は箸である。W22は残存長9.9cm、径0.6cmを測る。W23は残存長6.5cm、径0.5cmである。いずれも芯去材で、表面には加工痕がよく残る。先端はやや細く削り出しており、端部はわずかに摩耗している。樹種はスギである。W24は木錘である。残存長14.9cm、直径4.8cmを測る。芯持材で、両端部および中央部に向かって斜めに削りこんでいる。樹種はカヤである。W25は木錘形の木製品である。長さ4.8cm、直径2.7cmの芯持材に、中央に向かって斜めに削りこんで、側面から見て鼓状を呈す。両端部も丁寧に削られている。樹種はニヨウマツ類である。W26は挽物皿である。残存する直径11.6cm、器高1.6cmを測る。高台を削り出している。横木取り(柁目)で、樹種はケヤキである。一部炭化している。

W27はアカトリであろうか。把手部分は、長さ7.5cm、幅6cm、厚さ3.8cmを測る。残存する上端には二次的に加工された痕跡がうかがえる。芯去材で、樹種はスギである。W28、W29は曲物底板である。いずれも平面が円形を呈すものと考えられる。W28は縁辺部に2孔1対の穿孔が設けられており、側板を固定するものと考えられる。W29は欠損しているが、およそ直径12.8cmの円形となる。いずれも板目材で、樹種はスギである。

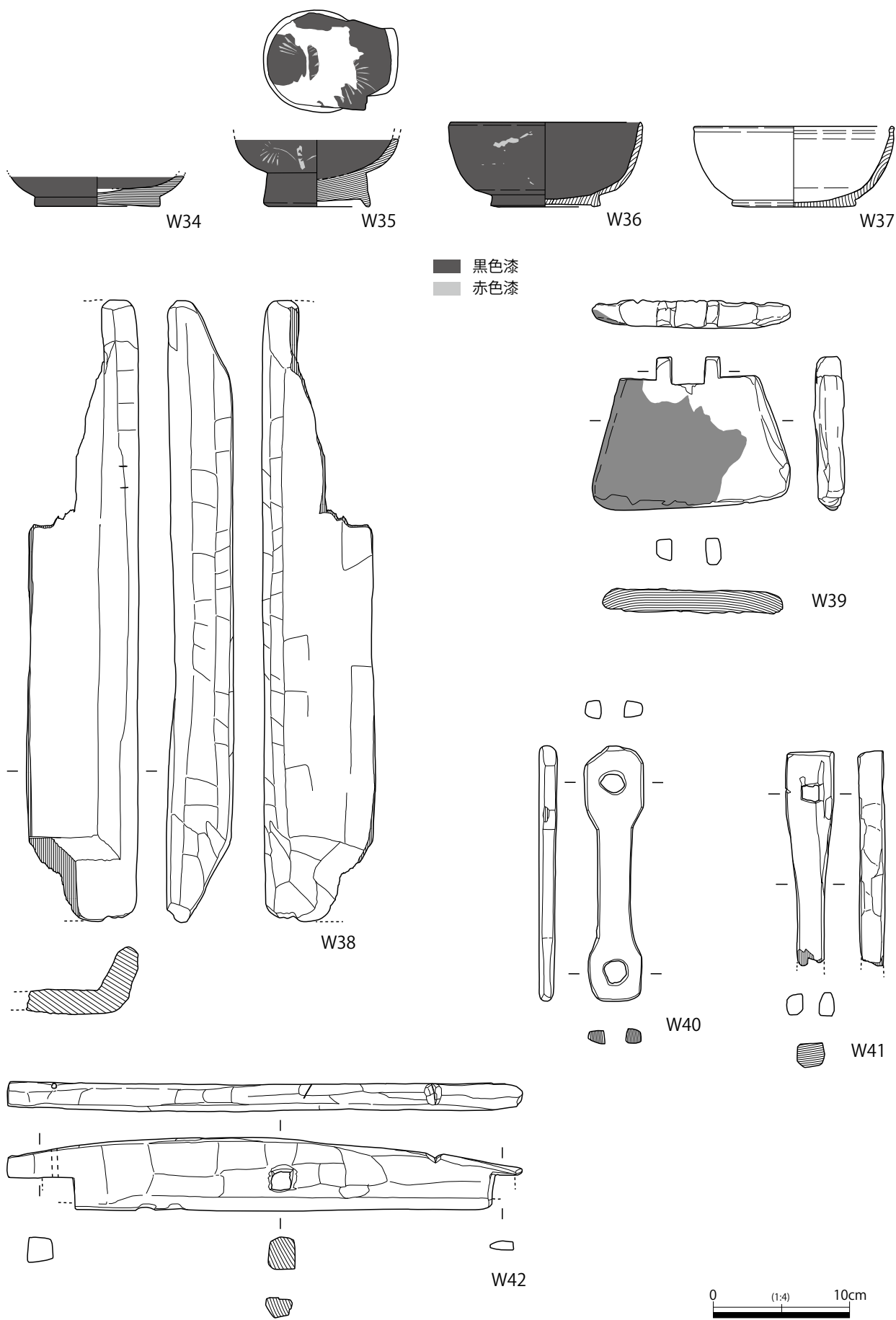
W30～W33は連歯下駄である。W30は径1.3cmの後緒孔が1箇所残存し、2本の歯はともに欠損している。台と歯の間に段はない。板目取りの芯去り材で、樹種はスギである。W31は径1.5cmの後緒孔が1箇所、前緒孔の一部が残存する。2本の歯は摩耗しており、残存する高さは0.5cm程度である。前緒孔は右に寄り、前緒と後緒の間に足の圧痕が確認できるため、左足用と考えられる。柁目取りの芯去り材で、樹種はスギである。W32は径1.6cmの後緒孔が1箇所残存し、2本の歯はそれぞれ高さ1.5cmを測る。前緒の位置がやや右寄りと推測されることから、左足用であろうか。柁目取りの芯去り材で、樹種はスギである。W33は径1.5cmの緒孔が3箇所確認できる。前歯は欠損しているが、後歯は高さ4cmを測る。前緒孔はやや左に寄っており、右足用と考えられるが、足の圧痕からは左足で使用した可能性もある。板目取りの芯去り材で、樹種はヒノキ属である。W30～W33のいずれも台と歯の間に明確な段は見られない。

W34～W36は漆器椀である。W34は底部のみ残存しており、高台復元径は9.2cmを測る。内外面ともに黒色漆が塗られているが、内面中央は欠損、高台内側が塗られていない。底部外面中央はややくぼむ。横木取り(板目)で、樹種は広葉樹である。W35の高台径は7.3cmで、高台の高さは2.5cmを測る。高台内面は5mmほど削られ、輪高台状となる。底部内面以外は地に黒色漆が塗られ、赤色漆で植物の文様が描かれている。横木取り(板目)で、樹種は広葉樹である。W36は(復元)口径14cm、器高6.2cm、高台径8.2cmを測る。底部外面は内側を2mmほど削って高台を作り出している。体部は緩やかに立ち上がる。体部の内外面ともに黒色漆が塗られ、外面には赤色漆の文様がわずかに残る。横木取り(柁目)で、樹種は環孔材である。W37は椀である。復元口径は14.4cm、器高5.9cm、高台径9cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は段状にやや薄くなるが、端部はやや厚くなって丸く仕上げられる。底部は5mmほどの高台が削り出される。全体にロクロ目が残る。内外面ともに漆塗りの痕跡は認められない。横木取り(柁目)で、樹種は環孔材である。

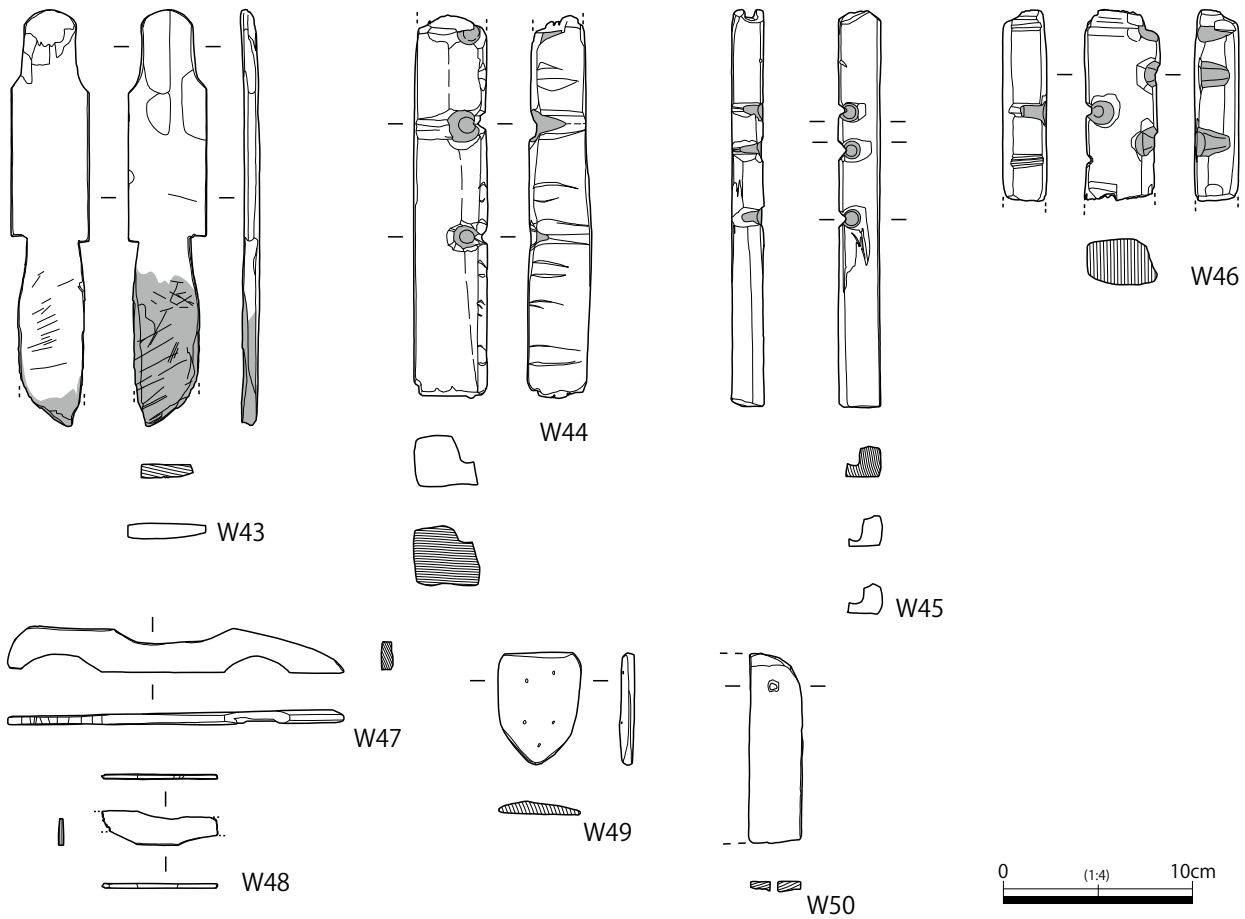
W38は槽である。残存長45.5cm、幅8.2cm、器高4.8cmを測る。元の平面形は長方形を呈し、側面は逆台形状を呈す。側面および底面には加工痕が確認できる。横木取り(追柁目)で、樹種はスギ



第166図 3区 出土木製品(1)



第167図 3区 出土木製品(2)



第168図 3区 出土木製品(3)

である。W39は部材(脚)である。W13と同一の部材と推測される。台形状の板材の上辺に断面方形のホゾを2個削り出している。縁辺は丸く面取りされている。正面側は広く炭化している。板目材で、樹種はヒノキ属である。W40、W41は不明部材である。W40は板材の両端部に直径1.5cm程度の穿孔を施し、端部はやや面取りされる。中央部は側辺を削ってやや細くなっている。柁目材で、樹種はスギである。W41は、端部でやや幅を広げ、方形の孔が設けられている。もう一方の端部は欠損している。断面は方形～長方形であるが、角は面取りされている。棒状の材であり、一見W40と形状が類似しているが、欠損部が長く延びる可能性がある。芯去材で、樹種はスギである。W42は不明部材である。残存長37.9cm、幅5.4cm、厚さ2.0cmを測る。細長い半円状を呈し、中央に1辺1.5cm程度の方孔が1箇所、両端部に1辺1.8cm程度の方孔がそれぞれ1箇所ずつ施されている。端部は方孔の周囲で破損する。一方の端部には方孔に向かって目釘が1箇所確認、もう一方の端部付近にはV字形の刻目が1箇所確認できる。また、中央の方孔には紐ずれの痕跡がわずかに認められる。板目材で、樹種はスギである。

W43は人形であろうか。上端は丸く加工し、ややなで肩状に側辺を削る。中央やや下で両側辺を挟んでいる。下端は炭化しており、刃物痕のような痕跡がうかがえる。鳥取市岩吉遺跡出土例に近い。板目材で、樹種はスギである。W44～W46は火鑽臼である。W44は残存長20.2cm、幅3.9cm、厚さ3.3cmを測る。火鑽穴は3箇所残存し、側面には割り付けと考えられる刻目が5箇所残存している。W45は長21cm、幅2.3cm、厚さ1.6cmを測る。火鑽穴は3箇所設けられている。W46は残存長10.1cm、幅4cm、厚さ2.4cmを測る。火鑽穴は4箇所残存し、左側面には火鑽前の刻目が2箇所残存している。

いずれも芯去材で、樹種はスギである。W47は馬形である。長さ17.8cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmを測る。胴部下側に穴はみられない。追柂目材で、樹種はヒノキ属である。W48も馬形と考えられる。胴部中央と尾部で欠損している。胴部下側に穴はみられない。板目材で、樹種はスギである。W49は平面が五角形を呈する不明板材である。正面に5箇所の小孔があり、中には繊維状のものが残存している。断面形状は扁平なかまほこ形となっており、端部ほど薄くなる。柂目材で、樹種はヒノキ属である。W50は不明板材である。残存長10cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmである。上端の一角は丸く削っている。直径3mm程度の穿孔が1箇所設けられている。板目材で、樹種はヒノキ属である。

(3) 26年度調査文字関連資料

(第169図、PL.81)

W51はこけら経である。残存長25.2cm、最大幅2cm、厚さ0.5mmを測る。スギの柂目材である。上端は欠損している。妙法蓮華経譬喩品第三(大正藏九卷14頁中26・27行)「坐師子座。而自慶言。我今快樂。」の部分が記載されている。

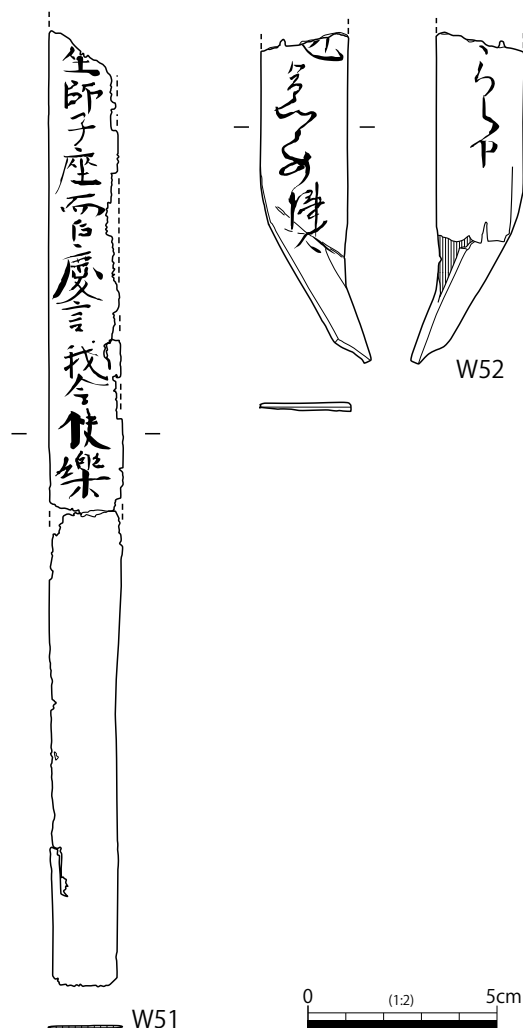
2区661土坑出土。W52は呪符木簡である。上端は欠損しており、残存長8.7cm、幅2.3cm、厚さ0.2cmを測る。下端は切り欠いてあり、折れ曲がっている。表面には「□急々如律令」、裏面には「□□□」と墨書されている。板目材で、樹種は針葉樹である。

(4) 3区(平成27年度)出土木製品(第170図、PL.79)

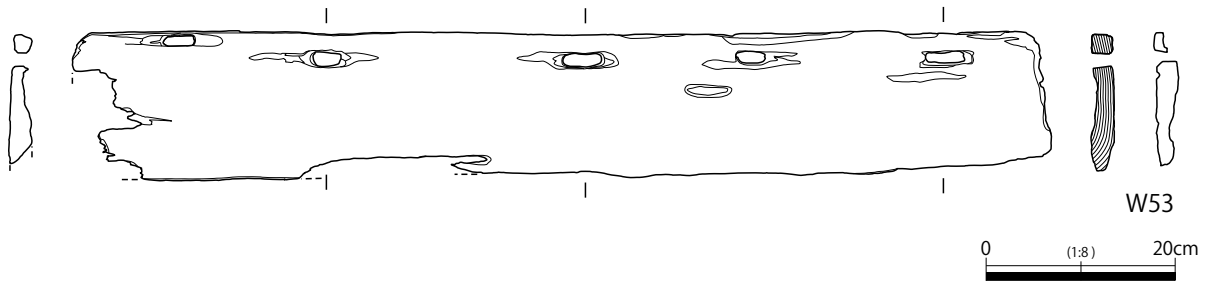
W53は長方形の大型板材である。残存長103.8cm、幅15.8cm、厚さ2.5cmを測る。片側の長辺に長さ3～4cm×幅1～1.4cm程度の穿孔が5箇所設けられている。遺存状態が悪く、穿孔に緊縛等の痕跡は確認できないが、壁板などの建築部材の可能性はある。板目材で、樹種はヒノキ属である。

(5) 4区出土木製品(第171・172図、PL.79、80)

W54は柄である。両端を丸く加工した、断面楕円形の棒材である。一方の端部から鉄製刃物(刀子か?)の茎を差し込み、柄の中央部で木釘を打ち込んで固定している。芯去材で、樹種はヒノキ属である。W55は連齒下駄である。齒の部分と台の右部分は欠損している。前緒孔が右に寄っており、上面の足の圧痕から左足用と考えられる。板目取りの芯去材で、樹種はヒノキ属である。W56は木錘である。長さ16.2cm、直径4.7cm、切り欠いた部分の径2.1cmを測る。芯持材で、樹種はサカキ



第169図 2・3区文字関連資料



第170図 3区(27年度) 出土木製品

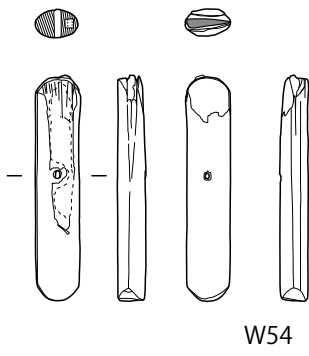
である。W57～W59は曲物底板である。W57は平面円形を呈し、内面に刃物痕が不定方向に見られる。一部炭化している。柁目材で、樹種はスギである。W58は平面が楕円形を呈すると考えられる。縁辺部には側板を固定する2孔1対の穿孔が設けられている。追柁目材で、樹種はスギである。W59は平面円形を呈し、縁辺部はやや段状に削られている。板目材で、樹種はスギである。W60は杓文字(しゃもじ)である。板材の一方を楕円形のへら状に加工し、把手部分は細い長方形を呈す。把手部分には刃物痕が観察できる。表面はややくすんだ黒色を呈している。柁目材で、樹種はヒノキ属である。W61は不明棒材である。断面長方形の角材の中央で厚さを半分程度に削って段を作り、端部を鋭角な三角形状に加工している。先端はやや丸みを帯びる。芯去材で、樹種はスギである。W62はW64とともに出土した。細い竹材の根に近い部分と考えられる。長さ4.6cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。表面には赤、内面に黒の漆状の塗彩が見受けられる。W63～W65は漆器椀である。W63は内外面ともに黒色漆が塗られている。横木取り(板目)で、樹種はトチノキである。W64の復元口径は12cmである。内外面ともに黒色漆が塗られ、外面には赤色漆で菊の花が描かれている。横木取りで、樹種はクリである。W65は土圧により内側に変形している。底部には幅4mm、高さ3mmの高台が削り出されている。内外面は黒色漆が塗られ、内面見込みには植物文様が描かれている。横木取り(板目)で、樹種はトチノキである。W66は円盤形の漆器である。表面は黒色漆で塗られており、赤色漆で亀甲文の中に菊の花が描かれている。縁辺は白木の状態で、原形は不明である。板目材で、樹種はクリである。

W67、W68は形代であろうか。W67は薄い板材で、上端はわずかに斜めに加工され、下端は両端から斜めに切り欠いている。柁目材で、樹種はスギである。W68は一方の端部を斜めに加工している。板目材で、樹種はスギである。W69は棒状の部材である。ほぼ方形の断面を呈した角材で、端部は面取りされている。一辺の中央には段が削り出され、別材と組み合わせる仕口と考えられる。芯去材で、樹種はスギである。W70は上端に輪雑込状の仕口を持つ小型の部材である。芯去材で、樹種はスギである。W71は不明棒材である。直方体を呈し、一方の側面には棒状のものを打ち込んだような痕跡が認められる。芯去材で、樹種はスギである。W72は角材の短辺を斜めに切り欠いた、平行四辺形の平面形を呈す棒材である。芯去材で、樹種はスギである。

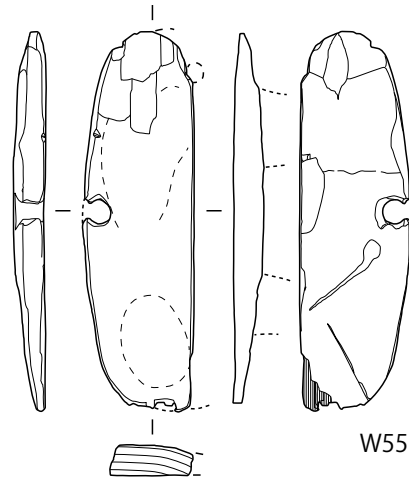
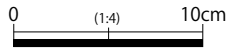
4 金属製品・銭貨

出土金属製品は、種類・部位がわかるものを中心に7点を図化した。M1、M2は26年度調査、M3～M7は27年度調査出土である。この他、図化していないが、鉄滓の小片が各所で出土している。

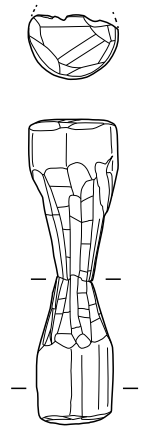
(1) 金属製品(第173図、PL.82)



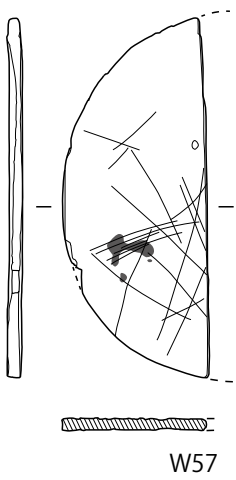
W54



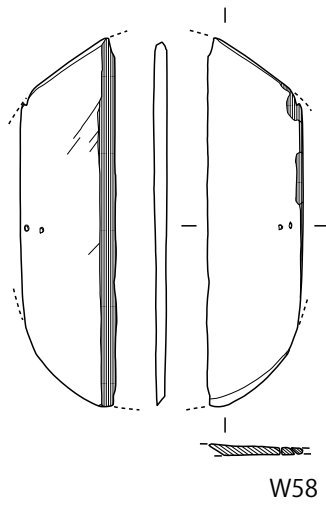
W55



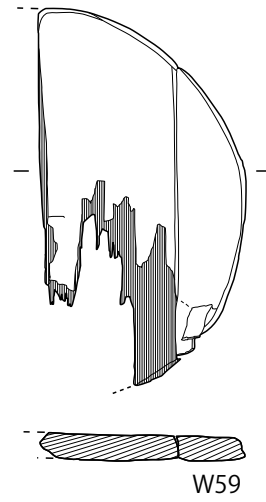
W56



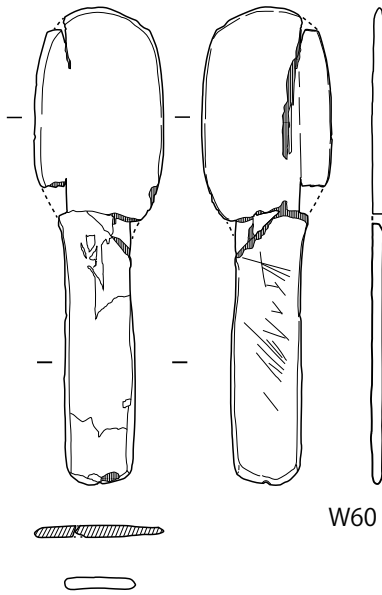
W57



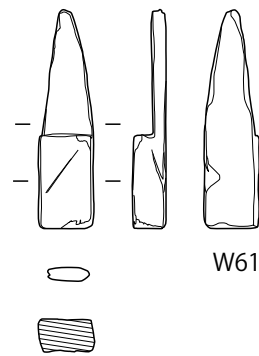
W58



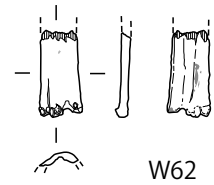
W59



W60



W61



W62



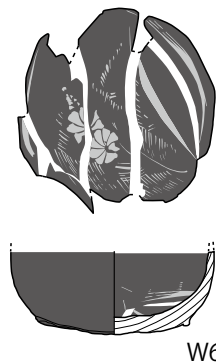
黒色漆
赤色漆



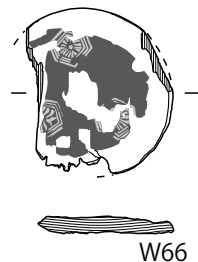
W63



W64

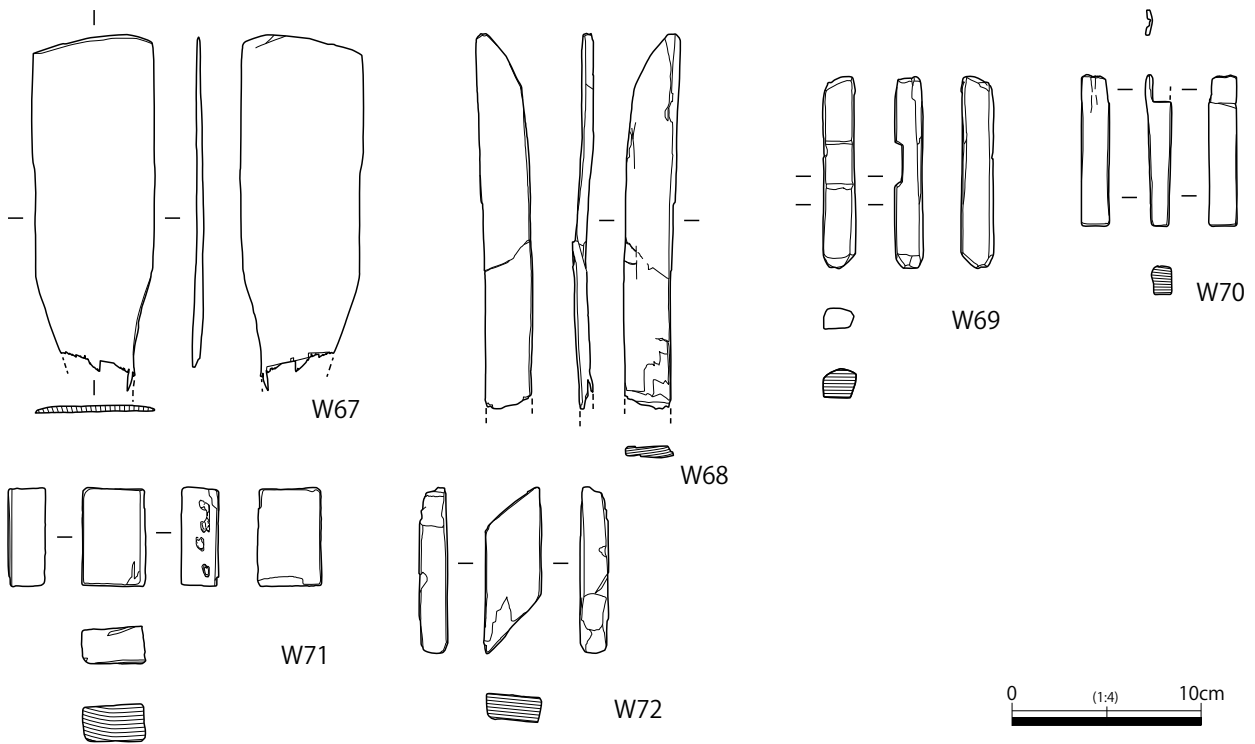


W65



W66

第171図 4区出土木製品(1)

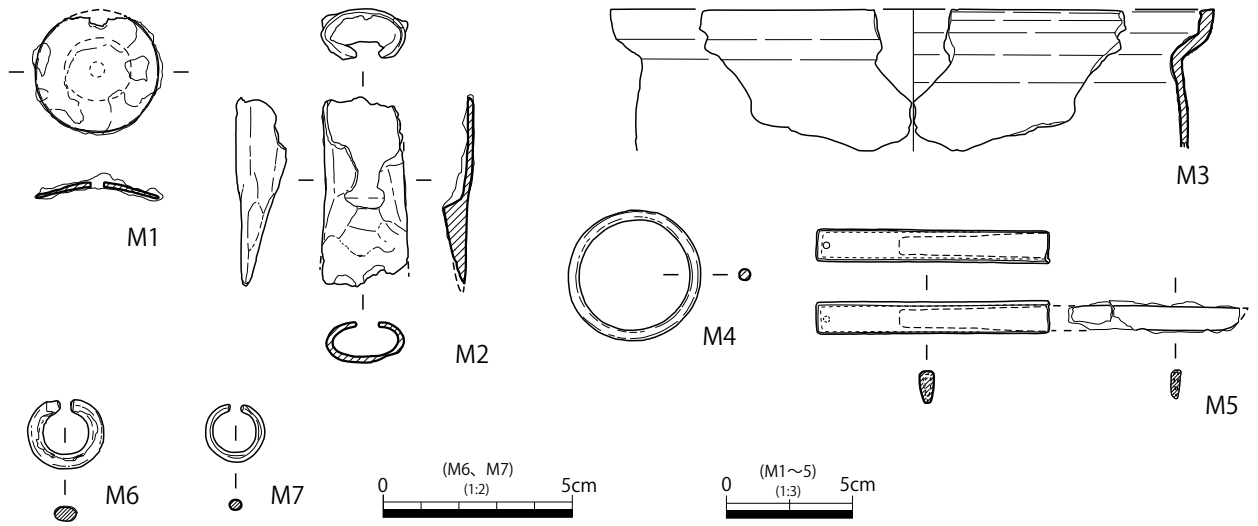


第 172 図 4 区 出土木製品 (2)

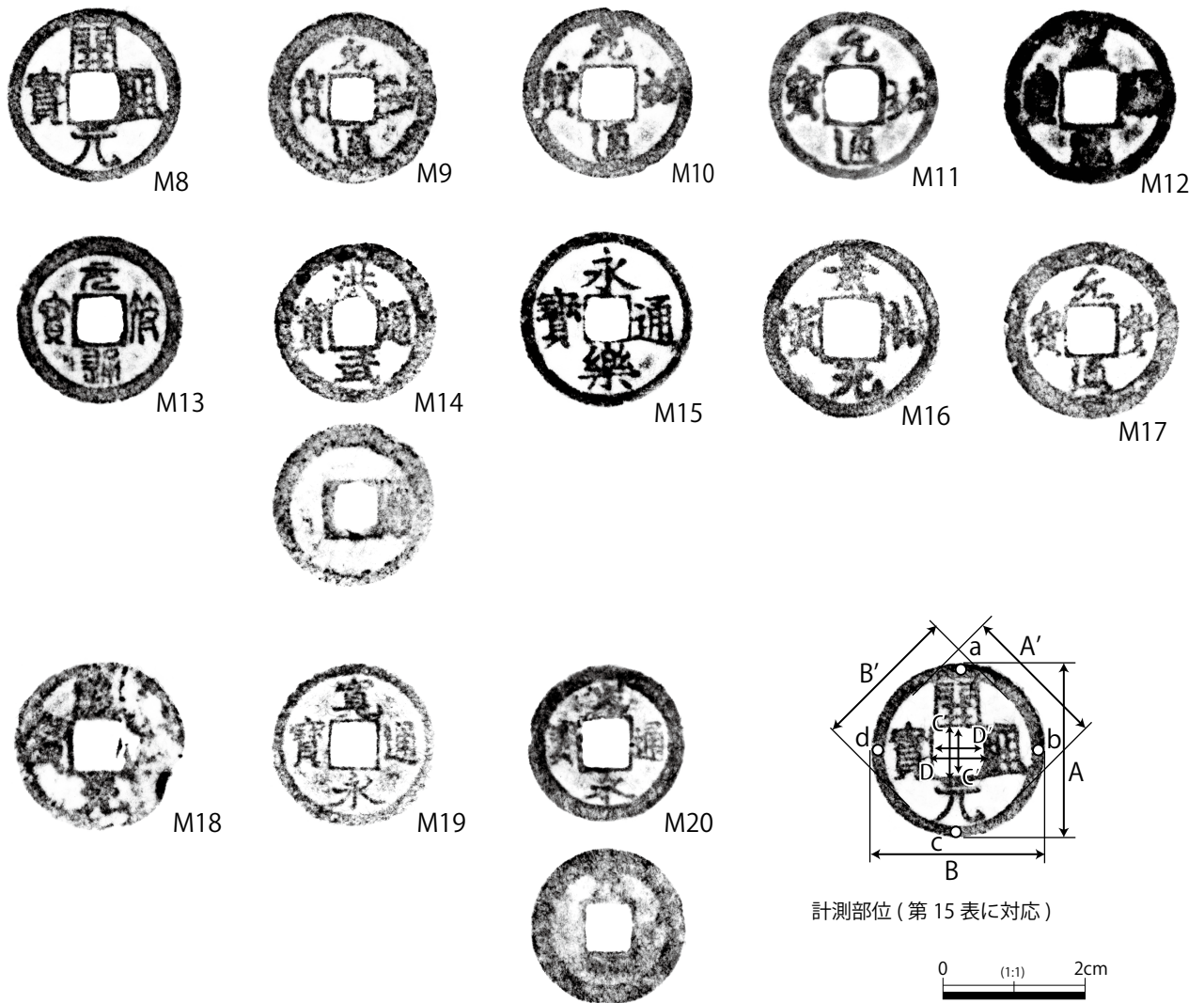
M 1 は鉄製紡錘車である。錆に覆われ、一部欠損するが残存は概ね良好である。ほぼ正円形で中央が笠状に盛り上がる。最大径 4.9cm、高さ 0.6cm を測る。本体の厚さは 0.1cm 程度である。錆により肉眼では確認できないが、X線写真からは中央にやや角張った円孔が認められる。孔径は最大で 0.55cm。M 2 は長方形の袋状鉄斧である。袋部の合わせ目側や端部、刃部などを欠損し、表面は腐食が進む。復元すれば全長 8cm 程度になるろうか。袋部断面は楕円形で、現状では合わせ目が閉じず 1cm 程度開いているが、破損しているため元々は上部では閉じていた可能性がある。刃部は最大 0.9cm 程度と比較的厚く、合わせ目下端付近に稜を持っているようである。刃部へ向けて直線的に厚さを減じている。

M 3 は鉄鍋である。表面は腐食が進む。体部～口縁部の一部が残存する。体部はやや内湾して頸部で外方へ折れた後、直線的に立ち上がる。口縁内面には一条の突出部が存在する。M 4 は環状青銅製品。表面はわずかに錆が存在するものの、残存状況はよい。わずかにゆがんでいるが、ほぼ正円形である。環体断面はほぼ円形を呈し、直径 0.4cm を測る。わずかに細くなっている部位が存在し表面に凹凸が見られることから、青銅棒を曲げて環を作り、この部分で接合していると考えられる。

M 5 は青銅製柄付鉄製刀子で、出土時には刃部と柄部が原位置を保っており、実測はその位置に戻して行っている。また、刃部は土ごと取り上げて保存処理を行っている。出土時の上面を A 面、下面を B 面として記述する。残存長 16.9cm、刃部は腐食により切先と関付近を欠損しており、残存長 6.7cm、刃部はさほど幅を変えず、最大幅 1.0cm を測る。切先を復元すると 8cm 程度の全長になるろう。平造りで断面三角形を呈する。茎部は柄部内部に残存しており、長さ 5.9cm 程度とみられ、X線によれば茎尻、側面ともに直線に作られていることが分かる。目釘孔は確認できず、柄内に茎を挿入するのみで固定している。柄部は完存している。厚さ 0.15cm 程の青銅板を曲げて内部に茎を挿し込む空間を作り、刃側で合わせて製作している。横断面は A 面がやや丸みをもち、B 面が直線的である。合わせ目は面をつくり隙間なく接合されるが、柄縁付近では合わせ面の幅が狭くなり、接合



第173図 2～4区出土金属製品



計測部位 (第15表に対応)

第174図 3・4区 出土銭貨

面は線状になっている。柄尻から0.3cmの所にはB面から直径0.2cmの別材が差し込まれる。この別材の存在はA面側では確認できないため、孔自体貫通するものではない。また、端部であり茎とは無関係であるため、目釘でもない。何らかの装飾を取りつけた痕跡の可能性もあるが、分析により本体、柄尻の別材ともに同成分の青銅製であることが判明していることから、折り曲げた際の合わせ目を固定するものと考えられる。

M6は耳環である。端部を0.3cm開ける。環体は青銅製で断面楕円形を呈し、短軸を環の中心に向けて使用する。環の内側に銀板が残るが、外側は腐食により失われている。なお、蛍光X線分析の結果、銀のほか金と水銀も検出されており、金アマルガムによる銀板貼鍍金の耳環だったことが判明している。M7も環状の青銅製品で、耳環と考えられるが、別の部品の可能性も考えられる。外側はほとんど腐食しており、内側がおおむね元々の表面を残す。ほぼ円形で、端部は0.3cm開けている。環体断面はわずかに楕円形で、最も残りのよい所で最大径0.3cmを測る。銅地が完全に露出しており、表面の装飾は明らかではない。

(2) 銭貨 (第174図、PL.82)

銭貨は13点出土しており、全ての拓本を掲載している。

M8～M15は3区で出土した。M8は開元通寶(初鑄621年)で、背面上に月文がある。M9～11は行書体の元祐通寶(初鑄1086年)である。M10は被熱痕跡が確認できる。M12は印面の摩耗が著しいが、下字が篆書体の「宋」と読め、皇宋通寶(初鑄1038年)と考えられる。M13は篆書体の元符通寶(初鑄1098年)である。M14は洪武通寶(初鑄1368年)で、背面右に「一錢」の文字が認められる。M15は永樂通寶(初鑄1408年)である。

M16～M20は4区で出土した。M16は真書体の景祐元寶(初鑄1034年)である。M17は行書体の元豊通寶(初鑄1078年)である。M18は被熱痕跡が認められ字が潰れているが、熙寧元寶(初鑄1068年)であろうか。M19、M20は寛永通寶である。M19は新寛永の亀戸銭(1668年頃)、M20は背面上に「元」の字が確認でき、新寛永の高津銭(1740年頃)と考えられる。

第10表 遺物観察表(土器)

遺物No.	挿図PL	調査区	遺構層位	大別器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
1	120 41	1区	第1面精査中	須恵器 提瓶	(7.4)	(6.1)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや粗 0.5~1mmの砂粒やや多	外:青灰 青灰	良	
2	120 41	1区	トレンチ1 25層(古土壌)	土師器 甕	(14.0)	(5.4)	-	外:回転ナデ? 内:回転ナデ?	粗 1~3mmの砂粒非常に多	外:明黄褐色~暗灰黄 内:黄褐色~暗オリーブ褐	不良	内外面スス付着
3	120 41	1区	トレンチ1 25層(古土壌)	土師器 高台付杯	-	(1.6)	7.0	外:回転ナデ 内:ナデ	やや密 1~2mmの砂粒少	外:明黄褐色 内:明黄褐色	やや不良	糸切り痕わずかに残る
4	120 41	1区	精査中	土師器 皿	(8.7)	(1.8)	-	外:ナデ 内:回転ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒ごくわずか	外:橙 内:橙	不良	
5	121 41	2区	121ピット	須恵器 椀	(15.0)	(4.6)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒多	外:灰オリーブ 内:灰オリーブ	良	
6	121 41	2区	341溝	須恵器 高台付杯	-	(2.4)	(12.4)	外:回転ナデ、高台貼付に 伴うナデ 内:回転ナデ	密 0.5~2.5mmの砂粒少	外:灰白 内:灰白	良	
7	121 42	2区	303ピット	須恵器 皿	(13.8)	1.7	(7.0)	外:回転ナデ、回転糸切り 内:回転ナデ	やや粗 1~2mmの砂粒多	外:にぶい黄褐色~黒 内:浅黄褐色~褐灰 断面:黒褐色	不良	
8	121 42	2区	303ピット	須恵器 鉢	(22.4)	16.2	(13.7)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:淡黄 内:淡黄	やや不良	
9	121 41	2区	274ピット	土師器 甕	(21.1)	(5.9)	-	外:剥離(ナデ) ナデ、ケズリ	やや密 1mmの砂粒多	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	不良	外面、部分的にスス付着
10	121 41	2区	274ピット	土師器 甕	(15.2)	(3.7)	-	外:回転ナデ、ケズリ 内:回転ナデ、ケズリ	粗 0.5~2mmの砂粒やや多	外:淡赤褐色・浅黄褐色 内:浅黄褐色	不良	
11	121 41	2区	274ピット	土師器 甕	(23.8)	(5.5)	-	外:回転ナデ、ケズリ、タ テハケ 内:回転ナデ、ケズリ	やや粗 0.5~1mmの砂粒やや多	外:にぶい黄褐色~灰黄褐色 内:にぶい黄褐色~灰黄褐色	不良	
12	121 42	2区	19ピット	土師器 移動式かまど	最大長 5.2	最大幅 14.5	最大厚 11.0	ナデ、ケズリ	やや粗 ~5mmの砂粒やや多	外:にぶい黄褐色~灰黄褐色 内:淡褐色~にぶい黄褐色 断面:内から浅黄褐色~褐 灰、灰黄褐色の三層	良	黒斑あり
13	122 41	2区	トレンチ2 10層	須恵器 蓋	(11.6)	3.5	-	外:回転ナデ、ナデ 内:回転ナデ	密 0.5~2.5mmの砂粒少	外:褐灰 内:赤灰 断面:にぶい橙	良	
14	122 41	2区	トレンチ2 13層	須恵器 蓋	10.5	3.7	-	外:回転ナデ、回転ヘラ切 り後ナデ 内:回転ナデ、一方向ナデ	密 1mmの砂粒少	外:明青灰 内:明青灰	良	
15	122 41	2区	表土	須恵器 蓋	(11.8)	4.4	-	外:回転ナデ、ヘラ切り後 ナデ 内:回転ナデ	密 0.5~1mmの砂粒を含む	外:灰 内:灰	良	
16	122 41	2区	攪乱	須恵器 蓋	12.5	2.5	4.2	外:回転ナデ、ケズリ 内:回転ナデ	密 0.5~2mm砂粒少	外:灰 内:灰	良	※外面、灰被りによりハケリ
17	122 42	2区	表土(表採)	須恵器 壺	-	12.9	-	外:回転ナデ後ハケメ、回 転ナデ後カキ目 内:回転ナデ	密 1mmの砂粒やや多	外:灰~黒、灰白 内:灰	良	
18	122 42	2区	攪乱	土師器 甕	(39.8)	(5.1)	-	外:ナデ、ハケメ 内:ケズリ				外面スス付着
19	123 43	2区	740ピット	須恵器 蓋	(13.8)	3.1	-	外:回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内:回転ナデ	密 1mmの砂粒やや多	外:灰~灰白 断面:にぶい黄褐色	良	
20	123 44	2区	313ピット	須恵器 壺	(13.9)	(4.2)	-	外:風化(回転ナデ)、回 転ナデ 内:風化(回転ナデ)、回 転ナデ、当て具痕	やや粗 0.5~1mmの砂粒多	外:灰オリーブ 内:青灰	やや良	
21	123 43	2区	501ピット	須恵器 杯身	(13.9)	(3.7)	-	外:回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内:回転ナデ	密 0.5mmの砂粒やや少	外:青灰 内:明青灰	良	
22	123 43	2区	509ピット	須恵器 蓋	(16.4)	(3.7)	-	外:回転ナデ、ヘラ切り後 ナデ 内:回転ナデ、当て具痕を ナデ消す	密 1mmの砂粒少	外:青灰~明青灰 内:青灰	良	
23	123 43	2区	509ピット	須恵器 杯身	(11.0)	(2.7)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 1~5mmの砂粒少	外:青灰 内:灰	良	
24	123 44	2区	522ピット	須恵器 脚	-	(2.0)	(9.0)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外:青灰 内:青灰 断面:にぶい赤褐	良	
25	123 43	2区	544ピット	須恵器 蓋	(20.0)	(1.3)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外:灰 内:灰	良	
26	123 44	2区	554ピット	須恵器 甕	(10.0)	(2.3)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	やや密 1mmの砂粒やや多	外:青灰 内:明青灰	良	
27	123 43	2区	554ピット	弥生土器? 底部	-	(2.0)	(5.0)	外:ナデ、指おさえ、ナデ 内:ナデ	やや粗 1mmの砂粒やや少	外:にぶい黄褐色 内:にぶい黄褐色	良	
28	123 43	2区	544ピット	土師器 甕	(17.7)	(4.2)	-	外:回転ナデ、ハケ→ナデ 内:回転ナデ、ヘラケズリ	粗 0.5~1mmの砂粒やや多	外:にぶい浅黄褐色 内:にぶい浅黄褐色	不良	
29	123 43	2区	554ピット	土師器 甕	(17.6)	(5.6)	-	外:ケズレ、ナデ?、ナデ(ハ ケが下に) 内:ナデ?、ヘラケズリ	やや粗 0.5~1mmの砂粒やや多	外:にぶい橙~赤褐色 内:にぶい黄褐色~赤褐色	不良	全体に風化
30	123 44	2区	551ピット	須恵器 高杯	11.1	(6.4)	-	外:回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内:回転ナデ、櫛状工具に よる列点文	密 0.5~2mmの砂粒少	外:灰 内:灰	良	
31	123 43	2区	577ピット	須恵器 高台付杯	-	(1.3)	(8.8)	外:回転ナデ(高台貼付に 伴う)、回転糸切り 内:回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外:灰 内:灰 断面:灰白	良	
32	123 43	2区	577ピット	須恵器 杯身	(12.8)	(2.9)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外:青灰 内:灰黄褐色	良	
33	123 43	2区	587ピット	須恵器 杯身	(14.2)	(3.1)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 1mmの砂粒やや少	外:青灰 内:青灰	良	表面、灰被りによりハケリ
34	123 43	2区	587ピット	須恵器 杯身	(12.0)	(3.8)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 1~3mmの砂粒やや多	外:灰 内:灰	良	
35	123 44	2区	883ピット	須恵器 高杯	-	(4.2)	-	外:回転ナデ、ヘラ切り 内:回転ナデ	やや密 1mm以下の砂粒少し	外:灰 内:灰	良	

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	大別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
36	123 43	2区	883ピット	須恵器 高台付杯	—	(2.4)	(9.2)	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り？ 内：回転ナデ、ナデ	密 1mmの砂粒やや少	外：青灰 内：明青灰	良	外面、灰被り でハクリ←自然釉
37	123 43	2区	883ピット	土師器 甕	(13.7)	(3.2)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ケズリ？	やや密 0.5mmの砂粒やや多	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～灰黄褐	良	
38	123 43	2区	893ピット	須恵器 椀	11.8	(4.1)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰 内：灰白	良	
39	123 43	2区	917ピット	弥生土器 甕	(35.8)	(3.7)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	粗 1～2mmの砂粒やや 多	外：浅黄橙 内：浅黄橙	不良	
40	123 43	2区	421土坑	土師器 甕	(17.0)	(4.7)	—	外：ナデ 内：ハケメ後ナデ、指おさ え、ケズリ、ハケメ	密 1mmの砂粒多	外：浅黄 内：浅黄	良	外面スス附着 内面コゲ
41	123 43	2区	423土坑	土師器 甕	(17.0)	(4.1)	—	外：ナデ、指おさえ、ハケ メ 内：ハケメ、ナデ、ケズリ	密 1mm以下の砂粒やや 多	外：灰黄褐 内：褐灰	やや 良	
42	123 44	2区	423土坑	須恵器 高杯	—	(4.1)	(10.6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 0.5～1mmの砂粒少	外：灰 内：灰	良	
43	123 44	2区	430ピット	須恵器 高杯	—	(7.4)	(10.9)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外：明黄褐 内：明黄褐 断面：灰	良	
44	123 44	2区	434土坑	須恵器 横瓶	(12.5)	(5.5)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ、当て具痕	やや密 0.5mmの砂粒少	外：青灰 内：青灰	良	
45	123 43	2区	456ピット	須恵器 皿	—	(2.7)	(12.2)	外：回転ナデ、ナデ、回転 糸切り 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰白 内：灰白	良	スス附着
46	123 42	2区	457ピット	須恵器 杯	8.5	3.0	(5.4)	外：回転ナデ、ヘラ切り未 調整 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：青灰 内：明青灰	良	底面板状痕
47	123 43	2区	860石列	須恵器？ 鉢	(27.0)	(6.3)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	やや粗 1mmの砂粒少 角閃石目立つ	外：灰黄 内：灰黄	良	外面スス附着
48	123 43	2区	860石列	須恵器 杯身	(12.0)	(3.2)	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り 内：回転ナデ	密 2mmの砂粒少	外：灰褐～にぶい橙 内：にぶい橙	良	
49	123 50	2区	965水田	白磁 内：施釉	—	(2.3)	(5.8)	外：回転ヘラケズリ 内：施釉	密 1mmの砂粒少	施釉部：灰白 露胎部：灰白	良	
50	123 42	2区	950土坑	土師器 甕	(25.8)	(16.3)	—	外：ナデ、ハケ 内：ヘラケズリ	やや密 1mmの砂粒やや多	外：灰黄 内：灰白	良	外面スス附着
51	124 45	2区	524溝	須恵器 蓋	(10.8)	3.5	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り後ナデ 内：回転ナデ	密 0.5～2mmの砂粒少	外：灰 内：灰	良	上面、灰被りに よるハクリ
52	124 45	2区	524溝	須恵器 蓋	10.8	3.4	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 0.5～2mmの砂粒やや 多	外：灰 内：灰	良	
53	124 45	2区	524溝	須恵器 蓋	(11.0)	2.8	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り後ナデ？ 内：回転ナデ、ナデ	やや粗 1～2mmの砂粒やや 多	外：黒褐 内：黒褐 断面：灰白	不良	二次焼成？
54	124 45	2区	524溝	須恵器 短頸壺	(7.3)	(7.5)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：明青灰～青灰 内：明青灰	良	
55	124 45	2区	524溝	須恵器 杯身	(11.5)	(2.7)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外：青灰 内：青灰	良	
56	124 46	2区	524溝	土師器 椀	(14.7)	(5.2)	—	外：風化 内：風化	やや密 1mmの砂粒やや多 赤褐色粒(シャモッ ト?)含む	外：黄橙 内：黄橙	不良	
57	124 49	2区	524溝	弥生土器？ 甕？	(5.0)	(2.3)	(4.6)	外：ナデ？ 内：ナデ	粗 0.5～2mmの砂粒少	外：橙 内：橙 断面：淡橙	やや 不良	
58	124 45 46	2区	524溝	土師器 甕	(30.0)	(22.6)	—	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	密 1mmの砂粒やや多	外：浅黄～にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	良	外面スス附着
59	124 44	2区	524溝	土師器 甕	(29.6)	(18.9)	—	外：回転ナデ、ハケ 内：回転ナデ、ケズリ	やや粗 1mmの砂粒やや多	外：にぶい黄橙～橙 内：灰白、橙、灰黄褐	良	
60	124 46	2区	524溝	土師器 甕	(26.6)	(13.6)	—	外：ナデ、タテハケ？ 内：ナデ、ケズリ	やや粗 1mm以下の砂粒多	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	不良	
61	124 44	2区	524溝	土師器 甕	(26.0)	(8.0)	—	外：ナデ 内：ナデ、ケズリ後ナデ	やや粗 1～2mmの砂粒多	外：橙 内：にぶい橙	やや 不良	
62	124 44	2区	524溝	土師器 甕	(25.6)	(3.8)	—	外：回転ナデ、タテハケ 内：回転ナデ、ケズリ	やや粗 0.5mmの砂粒やや多	外：にぶい橙 内：にぶい橙	やや 不良	
63	124 44	2区	524溝	土師器 甕	(25.3)	(2.8)	—	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ヘラケズリ	密 1mmの砂粒やや少	外：橙～にぶい橙 内：にぶい橙	良	
64	124 44	2区	524溝	土師器 甕	(14.2)	(13.9)	—	外：回転ナデ、タテハケ 内：回転ナデ、ヘラケズリ	やや粗 0.5～2mmの砂粒多	外：にぶい橙 内：にぶい橙	やや 不良	外面スス附着
65	124 44	2区	524溝	土師器 甕	(18.6)	(4.2)	—	外：ナデ、ハケ 内：ナデ、ヘラケズリ	密 1mmの砂粒やや少 赤色粒(シャモッ ト?)含む	外：橙 内：にぶい橙	良	
66	124 44	2区	524溝	土師器 甕	—	(11.8)	—	外：回転ナデ、ナデ後ハケ 内：ケズリ、ヘラケズリ	粗 1～2mmの砂粒やや 多	外：灰黄褐～橙 内：にぶい黄橙	不良	表面被熱
67	124 46	2区	560溝	須恵器 蓋	12.6	4.4	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ	密 0.5～3mmの砂粒やや 多	外：灰 内：灰	良	2色の胎土が縞 状になっている
68	124 46	2区	560溝	須恵器 高杯	12.6	(5.2)	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ、回転ナデ	密 砂粒(0.5～1.5mm) 少	外：灰 内：灰白	良	
69	124 45	2区	500溝	須恵器 蓋	(13.3)	(1.6)	—	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ、一方向ナデ	やや密 1mmの砂粒多	外：暗青灰 内：灰	良	
70	124 45	2区	500溝	須恵器 皿	—	(1.2)	(13.4)	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1～2mmの砂粒やや 少	外：暗青灰～明緑灰 内：暗青灰～明青灰	良	
71	125 50	2区	883ピット	土師器 甕	最大長 (10.1)	最大幅 (27.6)	最大厚 —	外：ナデ 内：ケズリ	やや粗 ～8mmの砂粒、石多	外：浅黄橙～にぶい橙 内：浅黄橙～にぶい黄橙 断面：浅黄橙、中心：黒 褐	やや 不良	内面コゲあり
72	125 51	2区	883ピット	土師器 移動式かまど	最大長 5.7	最大幅 10.2	最大厚 (5.4)	ナデ、欠け	やや密 1mmの砂粒やや少	外：浅黄橙～橙 内：にぶい橙～褐灰	やや 不良	内面被熱

第6節 出土遺物

遺物No.	挿図PL	調査区	遺構層位	大別器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
73	125 51	2区	551ピット	土師器 移動式かまど	最大長 11.0	最大幅 11.5	最大厚 9.8	指オサエ、ハケメ	やや密 ～3mmの砂粒やや多	底上：灰白 底下：灰黄～灰黄褐 内：淡黄～灰黄褐 ハクリ：5Y6/1灰	やや 良	底内側～本体 内側、被熱
74	126 48	2区	662土器群	土師器 壺	(24.4)	(41.8)	—	外：ナデ、ハケ 内：ケズリ(指頭痕)、ナデ (指頭痕)、ケズリ(ヨコ)	やや密 1～5mmの砂粒、石 を含む	外：にぶい黄橙～灰白(黒 粒あり) 内：褐灰～浅黄橙	良	
75	126 48	2区	トレンチ1 65層	土師器 小型丸底壺	8.6	8.7	—	外：ナデ後ハケメ、ナデ? 内：ナデ、ケズリ、指おさ え	やや粗 1mm以下の砂粒多	外：浅黄橙 内：浅黄橙	不良	
76	126 48	2区	第2面精査中	須恵器 蓋	(15.0)	3.9	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mmの砂粒少	外：オリーブ灰 内：灰	不良	
77	126 48	2区	第2面盛土	須恵器 蓋	10.0	3.7	—	外：回転ナデ、ヘラ切り後 ナデ、ヘラ切り未調整 内：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外：灰 内：灰	良	
78	126 46	2区	第2面精査中	須恵器 蓋	(10.7)	3.9	—	外：回転ナデ、ヘラ切り、 板状圧痕 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外：浅黄 内：浅黄	良	
79	126 48	2区	第2面盛土	須恵器 蓋	10.9	—	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り後ナデ(オサエ?) 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mmの砂粒やや多	外：灰オリーブ～灰	良	板状圧痕あり
80	126 48	2区	第2面盛土	須恵器 杯	11.5	3.9	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ(ヘラ切り痕残す) 内：回転ナデ、一方向ナデ	やや密 1mmの砂粒やや多	外：灰白 内：灰白	良	
81	126 48	2区	第2面盛土	須恵器 杯	9.1	(8.5)	3.8	外：回転ナデ、ヘラ切り未 調整 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒やや多	外：青灰 内：青灰	良	
82	126 48	2区	トレンチ1 65層	須恵器 高杯	12.2	10.6	10.7	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mm以下の砂粒やや 多	外：灰 内：灰 断面：にぶい黄橙	良	ヘラ記号
83	126 48	2区	第2面精査中	須恵器 高杯	13.2	11.0	(10.2)	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ、工具痕	密 1mmの砂粒やや少	外：灰～暗灰 内：灰	良	
84	126 46	2区	トレンチ1	須恵器 提瓶	—	(12.4)	胴部径 12.3	外：回転ナデ、ケズリ、カ キ目 内：回転ナデ	やや密 1mmの砂粒やや少	外：褐灰 内：暗青灰	良	ヘラ記号?
85	126 46	2区	第2面精査中	須恵器 鉢	(21.8)	8.4	(10.7)	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外：灰白 内：灰白	やや 良	
86	126 48	2区	トレンチ1 39層	須恵器 長頸壺	—	(8.3)	(5.8)	外：カキ目、回転ナデ、回 転ヘラケズリ 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰 内：褐灰	良	断面に漆
87	126 48	2区	トレンチ1 36層	須恵器 壺	—	(14.3)	(7.8)	外：回転ナデ、カキ目、ハ ケメ(後ナデ?)、ナデ 内：回転ナデ	やや密 1mm以下の砂粒少	外：灰黄 内：灰白	やや 不良	
88	126 48	2区	トレンチ1 36層	須恵器 壺	(16.4)	(8.2)	—	外：回転ナデ、タタキのち カキ目 内：回転ナデ、指おさえ タタキ(当て具)のちナデ	密 1mm以下の砂粒多	外：褐灰 内：にぶい黄橙	良	
89	126 48	2区	トレンチ1 70層	須恵器 杯	—	(4.8)	(6.6)	外：回転ナデ、回転糸切り 内：—	やや粗 1～2mmの砂粒やや 多	外：灰白 内：灰白	良	内面スス付着
90	126 48	2区	トレンチ1 36層	土師器(内黒) 高台付杯	—	(7.1)	(6.8)	外：回転ナデ、回転糸切り 後ナデ 内：ミガキ	密 0.5mmの砂粒少	外：にぶい黄橙 内：黒	良	
91	127 50,66	2区	664土器群	土師器 移動式かまど	最大長 31.6	最大幅 37.7	最大厚 48.4	ケズリ、ナデ、ハケメ	やや粗 ～5mmの砂粒やや多	外：浅黄橙～にぶい橙 内：にぶい橙～橙、浅黄 底等ハクリ面：灰白～灰	やや 不良	黒斑あり
92	127 50,66	2区	663土器群	土師器 移動式かまど	器高 (31.2)	—	底径 39.0		やや粗	外：黄灰 内：にぶい黄橙	—	被熱大
93	128 49	2区	914土器群	須恵器 高杯	(12.7)	(10.3)	—		密 1mm以下の砂粒多		良	外面灰被りにより 剥離
94	128 49	2区	914土器群	須恵器 高杯	(13.3)	11.1	—	外：剥離(回転ナデ) 内：回転ナデ?、回転ナデ	粗 1mmの砂粒やや多	外：灰白 内：にぶい黄橙	不良 表面 風化 大	
95	128 49	2区	914土器群	須恵器 高杯	—	8.3	—	外：回転ナデ、(回転ヘラ ケズリの痕のこる) 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mmの砂粒少	外：青灰 内：灰白	良	
96	128 49	2区	914土器群	須恵器 長頸壺	—	(9.1)	5.0	外：回転ナデ、ヘラケズリ、 カキ目 内：ナデ	密 1mm以下の砂粒やや 多	外：灰白 内：暗灰	良	
97	128 49	2区	神社横壁 10層	須恵器 長頸壺	—	9.7	6.2	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ	やや密 1～2mmの砂粒やや 多	外：灰白～黒 内：暗灰 破片：灰	良 上面 自然 釉	上面灰被りにより 剥離 外面に別個体の 破片が附着
98	128 50,51 60	2区	914土器群	土師器 移動式かまど	最大長 11.6	最大幅 31.0	頸部 内径 (26.0)		やや粗 ～2mmの砂粒多	外：にぶい黄橙～橙 内面被熱：灰褐	やや 不良	表面ハクリと風 化
99	128 51	2区	914土器群	土師器 移動式かまど	最大長 22.2	最大幅 24.3	最大厚 11.3		やや密 ～1mmの砂粒多	外：浅黄橙 被熱部：5YR7/6橙	やや 不良	黒斑あり 開口部周辺は二 次被熱
100	129 49	2区	トレンチ4 33層	須恵器 蓋	13.4	4.5	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り後ナデ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 0.5～1mmの砂粒やや 少	外：灰 内：灰	良	
101	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 蓋	(13.8)	(4.2)	—	外：回転ナデ、(底部)へ ラ切り後ナデ 内：回転ナデ	やや密 1mmの砂粒少	外：青灰 内：明青灰	良	
102	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 蓋	(15.8)	(4.6)	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰白 内：灰白	不良	
103	129 49	2区	トレンチ4 33層	須恵器 蓋	9.8	4.2	—	外：回転ナデ、ヘラ切り未 調整 内：—	密 ～0.5mmの砂粒やや 少	外：青灰 内：青灰	良	
104	129 49	2区	南側側溝	須恵器 蓋	(16.6)	2.8	—	外：回転ナデ、回転糸切り、 ナデ(つまみ) 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰～暗青灰 内：青灰～暗青灰 断面：灰白	良	
105	129 49	2区	第2面精査中	須恵器 蓋	—	(3.0)	—	外：ナデ? 内：調整不明瞭	やや密 1mmの砂粒少	外：灰白 内：灰白	不良	風化により表面 剥離

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	大別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
106	129 49	2区	トレンチ 4 33層	須恵器 蓋	(19.4)	(1.8)	—	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	密 0.5～1mmの砂粒やや少	外：灰白 内：灰白 断面：灰白 口縁：黄灰	良	
107	129 47	2区	トレンチ 4 33層	須恵器 杯身	(11.3)	3.8	—	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ(不明瞭) 内：回転ナデ、一方向ナデ	やや密 1mmの砂粒多	外：灰黄 内：明青灰	良	外面自然釉、砂融着
108	129 47	2区	東側断面 17層	須恵器 杯身	(15.1)	(4.5)	—	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り後ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	密 0.5～2mmの砂粒少	外：灰 内：灰	やや良	
109	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 杯身	(15.5)	3.5	—	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ 内：回転ナデ	密 0.5mmまでの砂粒若干含む	外：灰白 内：灰白	良	
110	129 49	2区	トレンチ 4 33層	須恵器 杯	13.4	2.9	7.8	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1～2mmの砂粒やや多	外：灰白 内：灰白	不良	高台を削り取った跡?
111	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 杯	(14.9)	3.6	(9.6)	外：回転ナデ、ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ	密 1～4mmの砂粒やや多	外：灰 内：灰	良	
112	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 杯身	(11.5)	2.5	6.0	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	密 0.5～1mmの砂粒少	外：灰白 内：灰白	良	口縁部のみ黒い
113	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 高杯?	—	(4.2)	—	外：ヘラケズリ後ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mm以下の砂粒やや少	外：灰 内：灰	良	2色の粘土縞状になる
114	129 49	2区	トレンチ 4 33層	須恵器 皿	(17.4)	(2.8)	(11.0)	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ部分的に指圧痕残る)、回転糸切り 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 2mmの砂粒少	外：灰白 内：灰白	良	
115	129 47	2区	第2面精査中	須恵器 高台付杯	—	(1.7)	(8.8)	外：回転ナデ、静止糸切り 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰 内：灰 断面：灰褐	良	
116	129 49	2区	南側側溝	土師器 杯	4.7	(14.1)	(6.2)	外：回転ナデ、ケズレ、回転糸切り 内：回転ナデ	やや密 1～3mm砂粒やや多	外：にぶい黄～黄褐色 内：浅黄～にぶい黄	良	
117	129 49	2区	トレンチ	ミニチュア土器	6.2	(4.3)	5.1	外：ナデ 内：ナデ	やや密 1mm以下の砂粒多	外：橙 内：橙	不良	
118	129 47	2区	第2面精査中	青磁 皿	—	(2.0)	(6.4)	外：施釉、ケズリ 内：施釉	密 0.5～1mmの砂粒少	施釉部：灰白 露胎部：灰白 断面：灰白	良	
119	129 47	2区	トレンチ 3 18層	陶器 すり鉢	—	(6.1)	(14.2)	外：回転ナデ、ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内：—	密 1～2mmの砂粒多	外：にぶい褐 内：褐灰	良	
120	129 47	2区	トレンチ 4 33層	陶器 すり鉢	(28.0)	(6.7)	—	外：回転ナデ、指頭痕 内：回転ナデ、ケジ目	密 2～5mmの砂粒・石多	外：にぶい赤褐～暗青灰 内：灰～紫黒	良	
121	130 50,51	2区	第2面盛土	土師器 移動式かまど	最大長 (8.7)	最大幅 (14.4)	最大厚 —	ナデ、ハケメ、指オサエ、ケズリ	やや密 0.5～3.0mmの砂粒やや多	外：橙 内：にぶい橙	不良	風化(内面被熱)
122	130 51	2区	第2面包含層	土師器 移動式かまど	最大長 10.2	最大幅 26.4	最大厚 7.5	ナデ、ハケメ、指オサエ、ケズリ	やや粗 ～3mmの砂粒やや多	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙 底裏：褐灰～黒褐	良	被熱あり
123	130 51	2区	トレンチ 1 36層	土師器 移動式かまど	最大長 5.1	最大幅 12.5	最大厚 7.1	ハケメ、ナデ、指オサエ	やや粗 ～2mmの砂粒やや多	底上：浅黄～黄灰 底下：にぶい黄橙～灰黄 内：にぶい黄橙～灰黄褐	良	焚き口部二次被熱
124	130 66	2区	第2面精査中	土師器 甗	最大長 6.2	最大幅 7.2	最大厚 —	外：ナデ、指オサエ 内：ケズリ	やや粗 ～3mmの砂粒	把手部：にぶい黄橙 内：灰	やや良	
125	130 66	2区	第2面精査中	土師器 甗	最大長 8.3	最大幅 4.1	最大厚 2.6	ナデ、ケズレ	密 1mmの砂粒やや少	把手部?：浅黄橙～にぶい黄橙 本体：灰白	良	
126	132 50	3区	3023 流路	陶器 すり鉢	(23.8)	(4.7)	—	外：ナデ 内：ナデ	密 1～2mmの砂粒多	外：灰褐 内：灰褐	良	
127	132 52	3区	3252 土坑状変形	土師器 皿	(13.6)	(2.1)	(9.0)	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ、ナデ	やや密	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	良	
128	132 52	3区	3252 土坑状変形	土師器 皿	(6.8)	1.7	(3.4)	外：回転ナデ、ナデ、指頭痕 内：回転ナデ、ナデ	密 1mmの砂粒少	外：にぶい褐 内：橙	良	
129	132 52	3区	3252 土坑状変形	土師器 皿	7.4	1.4	3.9	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	やや密 0.5mmの砂粒やや少	外：にぶい褐～褐灰 内：橙～褐灰	良	
130	132 52	3区	3252 土坑状変形	土師器 皿	(7.2)	1.4	3.9	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒やや少	外：橙 内：橙	良	
131	132 52	3区	3397 ビット 精査中	瓦質土器 羽釜	(24.3)	(7.9)	—	外：回転ナデ、ナデ、指おさえ 内：板ナデ、指おさえ、ナデ	やや密 0.5～1mmの砂粒少	外：暗灰 内：暗灰 断面：灰白	良	外面スス付着
132	132 52	3区	3421 ビット	須恵器 杯身	(10.0)	3.1	—	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰～灰白 内：青灰	良	
133	133 52	3区	3231 土器群	土師器 甗	(17.6)	(16.6)	—	外：ナデ、指おさえ、ハケ 内：ナデ、指おさえ、ケズリ	粗 1～2mmの砂粒多	外：明黄褐 内：明黄褐	不良	
134	133 52	3区	3231 土器群	土師器 甗	(16.9)	(5.8)	—	外：ナデ? 内：ナデ、ケズリ	密 1mm以下の砂粒多	外：橙 内：橙	良	
135	133 52	3区	竪穴建物 1 南西	須恵器 蓋	(10.9)	3.5	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒やや少	外：明青灰 内：明青灰	良	
136	133 52	3区	竪穴建物 1 南西	須恵器 鉢	(14.0)	(7.5)	—	外：回転ナデ?、カキ目 内：回転ナデ?	密 1mmの砂粒やや多	外：灰白～黒褐 内：灰白～黒褐	不良	2次焼成の可能性あり
137	133 53	3区	竪穴建物 1 南西	土師器 移動式かまど	最大長 7.3	最大幅 15.8	最大厚 9.7	ナデ、指オサエ	やや粗 ～3mmの砂粒、石やや多	底上：橙～浅黄橙 底下：橙～赤褐、褐	不良	被熱大
138	133 53	3区	竪穴建物 1 南西	土師器 移動式かまど	最大長 4.5	最大幅 3.0	最大厚 3.0	ナデ、指オサエ	やや粗 ～5mmの砂粒、石多	外：褐 内：明褐	やや不良	被熱により表面荒れ
139	134 52	3区	3203 柱穴上面	須恵器 高杯	10.6	14.6	10.7	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ(後ナデ) 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外：オリブ灰～暗灰 内：灰白～暗灰	良	

第6節 出土遺物

遺物No.	挿図PL	調査区	遺構層位	大別器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
140	134 52	3区	竪穴建物2 南北ベルト9 層	須恵器 蓋	(13.0)	(3.5)	—	外：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密1mmの砂粒やや多	外：暗青灰 内：灰	良	
141	135 53	3区	I層	土師器 甕	(13.2)	(4.5)	—	外：ナデ 内：ケズリ後ナデ	やや密1mm以下の砂粒多	外：にぶい黄 内：にぶい黄	やや良	外面スス付着
142	135 53	3区	II-1層	土師器 甕	(22.5)	4.2	—	外：ナデ後ハケメ 内：ナデ、ケズリ	やや密1mm以下の砂粒やや多	外：暗灰黄 内：暗灰黄 断面：灰黄～黄灰	良	スス付着
143	135 54	3区	II-1層	緑釉陶器 皿	(13.8)	(1.7)	—	外：施釉 内：施釉	密2mmの砂粒少	外：暗オリーブ灰 内：暗オリーブ灰 施釉部：暗オリーブ灰 断面：灰白	良	
144	135 53	3区	II-1層	瓦質土器 羽釜	(16.0)	5.5	—	外：ナデ、指頭痕 内：—	密1mm以下の砂粒少	外：暗灰黄 内：灰白 断面：灰白	良	外面スス付着
145	135 53	3区	III-2b層	弥生土器 壺	—	—	—	外：刺突文 内：ナデ	やや粗0.5～1.5mmの砂粒多	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	やや良	
146	135 52	3区	III-2b層	土師器 杯	12.1	3.9	6.9	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	粗0.5～4mmの砂粒多	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	やや良	
147	135 52	3区	III-2層	黒色土器 椀	(14.6)	5.7	7.1	外：回転ナデ、回転糸切り 後ナデ 内：ミガキ、暗文状	密1mm以下の砂粒少	外：褐色 内：黒褐	良	
148	135 53	3区	III-5層	弥生土器？ 把手	最大長5.5	最大幅2.2	最大厚1.7	外：ナデ 内：ナデ	やや粗1mmの砂粒多	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	良	
149	135 55	3区	III-5層	須恵器 蓋	(15.0)	(4.6)	—	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	やや密～1mmの砂粒やや多	外：青灰～暗青灰 内：青灰	良	高坏の可能性あり
150	135 52	3区	III-5層	土師器 杯	—	(2.6)	7.4	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	密1～2mmの砂粒やや多	外：内：断面：淡黄	やや不良	外面スス付着
151	135 55	3区	III-5層	須恵器 杯(視転用)	—	(2.3)	7.1	外：回転ナデ、回転糸切り 内：回転ナデ	密1mm以下の砂粒少	外：暗オリーブ灰 内：暗灰 断面：灰白	良	いぶし焼き状
152	135 54	3区	III-5層	緑釉陶器 皿	—	1.9	(7.8)	外：施釉、磨耗 内：施釉、一条の沈線	密1mmの砂粒ほとんど含まない	施釉部：暗緑灰 露胎部：にぶい黄橙	軟質	
153	135 49	3区	III-5層	ミニチュア土器？	4.2	6.4	3.9	外：指ナデ、指頭痕、板圧 内：—	密1mmの砂粒少	外：灰黄 内：灰黄	良	底部内面に黒斑あり
154	135 53	3区	III-5層	不明	最大長9.2	最大幅5.8	厚3.4	外：ナデ、(指おさえ) 内：ナデ、(指おさえ)	やや密0.5～3mmの砂粒やや多	外：灰黄褐 内：灰黄褐	やや良	
155	135 54	3区	III-6層	陶器 すり鉢	—	(6.7)	(9.6)	外：ナデ、指頭痕 内：ナデ	密1～5mmの砂粒やや多	外：にぶい赤褐 内：にぶい橙	良	外面布圧痕あり
156	135 54	3区	III-6層	緑釉陶器 皿	—	1.4	(7.8)	外：施釉欠き、(ナデ)、(糸 きり) 内：施釉	密1mmの砂粒少	施釉部：暗オリーブ 露胎部：浅黄橙	軟質	
157	135 54	3区	III-6層	灰釉陶器？ 皿	—	1.3	(6.5)	外：回転ナデ、高台取付に 伴うナデ、ツメの痕跡 内：回転ナデ	密砂粒ほとんど含まない	外：灰白 内：灰白	良	
158	136 54	3区	IV-2層	弥生土器 甕	—	(3.9)	(5.2)	外：ミガキ、ナデ 内：ナデ	やや密0.5mmの砂粒少 角閃石目立つ	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄褐	やや良	
159	136 55	3区	IV-2層	弥生土器？ 底部	—	(4.4)	11.5	外：タテハケ、ナデ、指お さえ 内：指おさえ、ナデ	やや密1～2mmの砂粒多	外：明黄褐 内：灰黄褐 断面：黒褐	やや良	
160	136 49	3区	IV-2層	ミニチュア土器	(2.8)	(3.5)	3.9	外：指おさえ 内：ナデ(おさえ)	やや粗0.5～2mmの砂粒やや多	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙 断面：褐灰	良	
161	136 49	3区	IV-2層	ミニチュア土器	3.0	3.7	2.4	外：指おさえ 内：ナデ	やや密0.5～2mmの砂粒少	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	やや良	
162	136 54	3区	IV-2層	土師器 皿	(10.8)	1.9	6.3	外：回転ナデ、底部糸切り 内：回転ナデ	やや密0.5mm砂粒少	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	良	
163	136 54	3区	IV-3層	弥生土器 甕	(12.9)	(4.6)	—	外：ナデ、ハケ目 内：ナデ、ハケ目後ナデ、 二条の沈線	やや粗1mmの砂粒やや多	外：灰黄褐 内：灰黄褐	良	
164	136 54	3区	IV層	土師器 高杯	(23.8)	(16.2)	(19.5)	外：ナデ、ミガキ(後ナデ) 内：ナデ、ミガキ	やや密1mmの砂粒少	環部：外・内：浅黄 脚部：外：にぶい黄～暗 灰黄 内：黄褐	良	
165	136 55	3区	IV層	須恵器 蓋	15.1	4.1	—	外：回転ナデ、回転ヘラ切 り後ナデ 内：回転ナデ	やや粗1mmの砂粒やや少	外：灰白～赤灰 内：褐灰	良	
166	136 54	3区	IV層	須恵器 蓋	(10.2)	3.2	—	外：回転ナデ、ケズリ後ナ デ？ 内：回転ナデ、一方向ナデ	密1mm以下の砂粒	外：明灰黄 内：明灰黄 断面：灰黄	良	
167	136 55	3区	III層	須恵器 杯身	12.7	3.1	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ、ナデ	やや密0.5mmの砂粒やや少	外：青灰、明青灰 内：灰白	良	外面自然釉、内面織着
168	136 54	3区	IV層	須恵器 杯	14.5	4.6	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内：回転ナデ	やや密1mm以下の砂粒少 (2色が縞状に)	外：灰 内：灰白	良	
169	136 55	3区	IV層	須恵器 高杯	11.8	(3.6)	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ、回転ヘラケズリ後ナ デ 内：回転ナデ	密1mmの砂粒少	外：灰 内：灰	良	
170	136 55	3区	IV層	須恵器 高杯	13.0	(8.0)	—	外：回転ナデ、ケズリ 内：回転ナデ、一方向ナデ	やや密1mmの砂粒やや多	外：灰白～灰 内：灰白～灰	良	
171	136 55	3区	IV層	須恵器 高杯	15.3	15.1	11.4	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	やや密1mmの砂粒少	外：灰 内：灰白	やや不良	
172	136 55	3区	IV層	須恵器 脚付長頸壺	—	(10.6)	—	外：回転ナデ、回転ヘラケ ズリ後ナデ 内：回転ナデ、当て具痕	密1mmの砂粒やや多	外：灰～明黄褐 内：灰	良	上面に自然釉
173	136 55	3区	IV層	須恵器 甕	31.2	(11.9)	—	外：沈線、ナデ、刺突文、 刺突文 内：ナデ、カキメ、指おさえ、 タキ(当て具痕)	密1mm以下の砂粒やや多 白色の粘土が縞状に入	外：暗青灰 内：青灰	良	

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構層位	大別器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
174	136 55	3区	IV層	土師器 甕	(17.1)	(8.7)	—	外：回転ナデ、ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	やや密 0.5～1.5mmの砂粒や やや少	外：灰黄褐 内：灰黄褐	良	
175	137 54	3区	V層	須恵器 高台付杯?	—	(2.8)	5.0	外：回転ナデ、高台貼付に 伴うナデ 内：ナデ	密 0.5～3mmの砂粒やや 少	外：青灰 内：青灰	良	灰被りにより表面剥離
176	137 50	3区	VI層	土師器 把手付甕	—	(12.5)	胴部径 (24.4)	外：ナデ、わずかにケズレ 内：ケズリ	やや粗 ～2mmの砂粒多	外：灰黄～黒 内：にぶい黄橙～にぶい 黄褐 断面：黒	やや 不良	
177	137 56	3区	Ⅲ-2b層	須恵器 甕	(15.6)	(28.6)	—	外：回転ナデ 内：当て具痕、ヨコナデ、 タタキ	やや粗 1～2mmの砂粒やや 少	外：暗灰 内：灰白	やや 不良	
178	137 56	3区	IV-5層	須恵器 提瓶	長径 (10.2)	27.0	胴部径 10.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	密 1mmの砂粒少	外：灰 内：灰 断面2層：外：灰、内： にぶい黄橙	良	
179	138 55	3区	東西ベルト	須恵器 杯身	12.0	3.6	—	外：回転ナデ、ヘラ切り未 調整 内：回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外：灰 内：灰	良	
180	138 55	3区	東西ベルト A20層相当	須恵器 高杯	12.3	9.9	11.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 1mmの砂粒少 2色の胎土で縞状と なる	外：にぶい橙～灰黄 内：にぶい橙	不良	
181	138 56	3区	東西ベルト A-59層	縄文土器 深鉢?	—	(2.7)	—	外：RL縄文 内：ナデ	やや粗 1mmの砂粒やや多	外：にぶい黄褐 内：にぶい黄褐	やや 不良	
182	139 56	3区	表土	弥生土器 甕	—	(5.1)	—	外：ナデ、タテハケ 内：ナデ、指おさえ	密 1mm以下の砂粒少	外：にぶい黄褐 内：にぶい黄褐	良	外面スス付着
183	139 57	3区	表土	須恵器 蓋	(12.2)	(1.6)	—	外：回転ヘラケズリ、回転 ナデ 内：回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外：青灰 内：灰黄	良	外面一部漆有り
184	139 56	3区	表土	須恵器 鉢	(8.2)	(5.7)	7.9	外：回転ナデ、ケズリ、ヘ ラケズリ(一方向) 内：回転ナデ	やや密 0.5～2mmの砂粒少 2色の粘土で縞状と なる	外：灰 内：灰白	良	
185	139 56	3区	攪乱	瓦質土器 鍋	(26.2)	(7.2)	—	外：指おさえ 内：ナデ、部分的に板ナデ	粗 0.5～2mmの砂粒含む	外：黒褐 内：褐灰	やや 良	外面スス付着
186	139 56	3区	表土	瓦質土器 鍋	(23.4)	(5.2)	—	外：回転ナデ、指おさえ 内：回転ナデ、ナデ	やや密 0.5～2mmの砂粒	外：灰 内：灰 断面：灰白	良	外面スス付着
187	139 56	3区	表土	瓦質土器 鍋	(30.8)	(5.1)	—	外：回転ナデ、ナデ、指頭 痕 内：回転ナデ、ハケメ	密 1mmの砂粒少	外：黒 内：黒 断面：灰白	良	外面スス付着
188	139 56	3区	表土	瓦質土器 鍋	(27.4)	(7.4)	—	外：回転ナデ、ナデ、指お さえ 内：回転ナデ、ナデ	やや密 0.5～3mmの砂粒やや 多	外：暗オリーブ灰 内：灰白 口縁内側：暗オリーブ灰	良	外面スス付着
189	139 56	3区	精査中	瓦質土器 羽釜	(24.2)	(5.4)	—	外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ、板ナデ	密 0.5～1mmの砂粒少	外：黒 内：黒 断面：灰白	良	外面スス付着
190	139 57	3区	トレンチ1	白磁 碗	(15.8)	(4.0)	—	外：回転ヘラケズリ 内：施釉	密 0.5mmの砂粒少	施釉部：灰白 露胎部：黄灰 断面：灰白	良	
191	139 57	3区	表土	白磁 碗	(19.0)	(5.3)	—	外：施釉、回転ナデ 内：施釉	密 0.5～2mmの砂粒少	施釉部：灰白 露胎部：灰白 断面：灰白	良	
192	139 57	3区	表土	白磁 碗	—	(2.2)	(7.4)	外：施釉、ケズリ 内：施釉	密 0.5～2mmの砂粒少	施釉部：灰白 露胎部：灰白 断面：灰白	良	
193	139 57	3区	精査中	青磁 皿	(12.2)	3.6	(6.8)	外：施釉、回転ケズリ 内：施釉	密	施釉部：オリーブ灰 露胎部：にぶい橙	良	
194	139 57	3区	表土	青磁 小碗	—	(2.3)	(5.4)	外：施釉、回転ヘラケズリ 内：施釉	密 0.5mmの砂粒少	施釉部：オリーブ灰～灰 白 露胎部：青灰 断面：灰白	良	内面に一部花文あり
195	139 57	3区	表土	青磁 碗	—	2.3	(6.2)	外：打ち欠き、施釉、回転 ケズリ 内：施釉(剥離)、打ち欠き、 回転ケズリ	密 1mmの砂粒少	施釉部：灰白 露胎部：灰 断面：灰白	良	
196	139 57	3区	東壁 8層	青磁 碗	—	(2.4)	(6.0)	外：打ち欠き、施釉、回転 ナデ、欠き(打ち欠き)、回 転ヘラケズリ 内：施釉	密 1mmの砂粒少	施釉部：オリーブ灰 露胎部：灰黄褐～褐色 断面：灰白	良	
197	139 57	3区	表土	陶器 皿	11.3	3.4	4.1		密 1mmの砂粒少	施釉部：オリーブ褐 露胎部：灰白	良	
198	140 53	3区	精査中	土師器 移動式かまど	最大長 9.7	最大幅 11.1	最大厚 9.0	ナデ、指オサエ、被熱	やや粗 ～3mmの砂粒やや多 (～2mmの赤色粒 30%)	外：橙～にぶい褐～ 底下：にぶい褐	やや 不良	
199	140 53	3区	IV-2層	土師器 移動式かまど	最大長 8.8	最大幅 12.3	最大厚 7.6	ナデ	やや粗 ～3mmの砂粒やや少	外：灰白～黒 内：浅黄橙～褐灰	やや 不良	焚き口スス付着
200	140 53	3区	トレンチ7	土師器 移動式かまど	最大長 8.5	最大幅 14.4	最大厚 10.4	指オサエ、ナデ、被熱	やや密 ～5mmの砂粒、石や や多	底上：にぶい黄 底下：にぶい黄～黒褐 ハクリ：灰黄	良	被熱あり
201	140 53	3区	Ⅲ-5層	土師器 移動式かまど	最大長 (29.4)	最大幅 (8.5)	最大厚 6.4		やや粗 ～5mmの砂粒、石多	外：にぶい黄橙～にぶい 黄褐 内：黄褐～黒褐(被熱)	良	
202	140 53	3区	IV層	土師器 移動式かまど	最大長 18.5	最大幅 5.2	最大厚 4.8	ナデ	やや粗 ～2mmの砂粒やや多	外：にぶい橙～橙 内：灰黄褐～褐灰被熱 ハクリ：にぶい黄橙	やや 良	
203	140 53	3区	Ⅲ-5層	土師器 移動式かまど	最大長 6.9	最大幅 5.1	最大厚 2.1	ナデ、本体ハケメ、欠け	やや粗 1mmの砂粒少	外：にぶい黄橙 内：黒褐	やや 良	
204	140 53	3区	Ⅲ-6層	土師器 移動式かまど	最大長 6.4	最大幅 8.6	最大厚 5.5	ケズリ、指ナデ、ハクリ	やや粗 ～3mmの砂粒やや多	外：にぶい黄橙～灰黄褐 内：にぶい黄橙 断面：にぶい橙～灰	良	
205	140 66	3区	東西ベルト A-59層	土師器 甕	最大長 7.7	最大幅 7.7	最大厚 6.7	ケズリ、ナデ、指オサエ	やや粗 ～2mmの砂粒やや多	把手：浅黄橙～橙 本体：橙	やや 良	

第6節 出土遺物

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	大別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
206	140 66	3区	IV-2層	土師器 壺	最大長 8.7	最大幅 7.9	最大厚 9.0	本体内側(ケズリ)、指ナデ	やや密 1mmの砂粒やや多	把手部: 浅黄~暗灰黄 土器側: 灰黄	良	
207	144 58	3区	トレンチ4	須恵器 高台付杯 (墨書土器)	(13.9)	5.8	(7.8)	外: 回転ナデ、回転糸切り 内: 回転ナデ	密 1mm以下の砂粒やや少	外: 灰 内: 灰	良	
208	144 58	3区	表土	須恵器 高台付杯 (墨書土器)	-	(1.6)	7.4	外: 回転ナデ、高台貼付に伴うナデ、回転糸切り 内: 回転ナデ、ナデ、一方 向ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外: 灰 内: 灰 断面: 灰白	良	
209	144 58	3区	IV層	須恵器 高台付杯 (墨書土器)	-	(1.8)	7.2	外: 回転ナデ、高台貼付に伴うナデ、回転糸切り 内: 回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外: 灰黄 内: 灰黄	良	
210	144 58	2区	424ピット	須恵器 杯 (墨書土器)	-	-	(6.0)	外: 回転糸切り、ナデ 内: 一方向ナデ、ナデ	密 1~2mmの砂粒少	外: 灰白 内: 灰白	良	
211	144 58	3区	III-6層	須恵器 杯 (墨書土器)	-	-	-		密 1mm以下の砂粒多	外: 灰黄 内: 灰黄	やや良	
212	144 57	3区	IV-2層	須恵器 杯? (転用硯、漆記号)	-	(1.0)	-	外: 回転ナデ、 内: 回転ナデ、回転ヘラ切 り	密 1mmの砂粒やや多	外: 灰白 内: 灰白	良	板状圧痕あり、 わずかに墨の あとあり、磨滅、 転用硯
213	144 57	2区	表土	須恵器 蓋 (漆記号)	(14.8)	(1.8)	-	外: 水(一部漆記号あり)、 回転ナデ 内: 回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	良	
214	144 57	2区	860石列	須恵器 蓋 (漆記号)	-	(1.4)	-	外: 回転ヘラケズリ、回転 ナデ 内: 一方向ナデ、回転ナデ	密 1mmの砂粒やや少	外: 灰 内: 灰白	良	
215	144 57	3区	IV-3層	須恵器 高台付杯 (転用硯)	-	(2.9)	(8.6)		密 0.5mmの砂粒少	外: 青灰、明青灰 内: 明青灰	良	底部中央に漆
216	144 57	3区	VI層	須恵器 甕 (漆容器)	胴径 (13.4)	(6.7)	-	外: 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ 内: 回転ナデ	密 1~3mmの砂粒やや少	外: にぶい褐灰 内: にぶい褐灰	良	外面漆付着 内面孔内段あり、 漆付着
217	144 57	3区	トレンチ1	須恵器 蓋 (漆付着)	(10.9)	(3.2)	-	外: 回転ナデ、回転ヘラケ ズリ(未調整) 内: 回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外: にぶい黄 内: にぶい黄	良	内面漆付着
218	144 57	3区	表土	須恵器 蓋 (漆付着)	(14.0)	(2.3)	-	外: 回転ヘラケズリ、回転 ナデ 内: 回転ナデ	やや密 1mmの砂粒やや少	外: 灰白 内: 灰黄 断面: 灰白	やや不良	内面漆付着
219	144 57	3区	トレンチ3	須恵器 杯 (漆付着)	-	(1.65)	-	外: 回転ヘラケズリ、回転 ケズリ 内: 回転ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外: 灰白~灰黄 内: 灰黄	やや不良	内面漆付着
220	144 57	3区	東側溝	土師器 杯 (漆付着)	-	(0.8)	(5.2)	外: 回転ナデ、回転糸切り 内: 回転ナデ	密 1mmの砂粒少	外: 黒 内: 黄灰 断面: にぶい黄	やや良	内面漆
221	144 57	3区	表土	土師器 杯 (漆付着)	-	(2.5)	-	外: 回転ナデ、回転糸切り 内: 回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外: にぶい黄橙 内: 灰黄褐	良	
222	144 57	3区	III-6層	緑釉陶器 椀 (漆付着)	(13.6)	(2.8)	-	外: 施釉、回転ナデ、回転 ケズリ 内: 施釉	密 1mm以下の砂粒少	施釉部: オリーブ 露胎部・断面: 灰白	良	
223	144 57	3区	表土	須恵器 高杯 (漆塗)	-	(7.3)	-	外: 一方向ナデ、回転ヘラ ケズリ、回転ナデ、カキ目 内: 回転ナデ、しぼり	密 1~2mmの砂粒やや多	外: 灰 内: 灰	良	外面漆付着 内面漆閉
224	144 57	3区	IV層	須恵器 壺 (漆付着)	-	(4.6)	-	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密 1mmの砂粒やや少	外: 灰 内: 灰灰	良	
225	145 59 (27年度)	3区	3457ピット	弥生土器 甕	-	(3.9)	(5.2)	外: ナデか 内: ナデか	やや粗 1~2mmの砂粒やや多	外: にぶい黄橙、褐灰、 内: 灰白	不良	
226	145 59 (27年度)	3区	第3面表採	弥生土器 甕	-	(5.1)	(5.6)	外: ヘラミガキ、ナデ 内: ハケス、指頭痕	密 1mmの砂粒やや少	外: 黄灰 内: 灰黄	良	
227	145 59 (27年度)	3区	第1面包含層	弥生土器 甕	-	(4.4)	(5.8)	外: ナデ、指おさえか 内: ナデ、ケズリ、ナデ	やや密 1mmの砂粒やや少	外: 灰黄褐 内: 灰黄褐	やや良	
228	145 49 (27年度)	3区	第3面表採	ミニチュア土器 (支脚?)	-	(6.0)	7.0	外: ナデ、ケズレ、板圧痕 内: 両面ナデ	やや粗 0.5~1mmの砂粒やや多	外: 暗灰黄 内: 黄灰	やや不良	
229	145 59 (27年度)	3区	第3面表採	須恵器 高杯	-	(5.1)	8.8	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少	外: 明青灰 内: 灰白	良	
230	145 59 66 (27年度)	3区	第3面表採	土師器 移動式かまど	最大長 (38)	最大幅 (43)	全高 (27)	外: ナデ、ハケ 内: ケズリ、ハケ	やや密 ~2mmの砂粒やや少	外: にぶい黄橙~灰白 内: にぶい黄橙~灰白	良好	部分的に二次被 熱、黒炭あり
231	146 60 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(9.3)	-	外: 沈線?、条痕 内: 縄文LR、ナデ、指お さえ	粗 1mm以下の砂粒やや少	外: にぶい黄橙 内: 明黄褐	不良	外面スス付着
232	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.8)	-	外: 磨消縄文 内: ナデ?	やや粗 1~2mmの砂粒やや多	外: 暗灰黄 内: 黒褐	やや不良	内面炭化物付着
233	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(3.0)	-	外: 縄文 内: ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外: にぶい黄褐 内: にぶい黄褐	やや不良	内面炭化物付着
234	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.7)	-	外: 縄文 内: ナデ	やや密 1mm以下の砂粒少	外: にぶい黄 内: にぶい黄	やや良	内面炭化物付着
235	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(4.5)	-	外: 縄文 内: ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外: 黒褐 内: 褐灰	やや良	外面スス付着
236	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.6)	-	外: 縄文? 内: ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外: 黒褐 内: 灰黄褐	やや不良	
237	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(4.9)	-	外: 縄文 内: ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外: 黒 内: 黄褐	良	外面全体にスス 付着
238	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.6)	-	外: 縄文? 内: ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外: にぶい黄 内: にぶい黄褐	やや不良	内面炭化物付着
239	146 61 (27年度)	3区	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(5.2)	-	外: 条痕 中: ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外: 黒褐 内: 暗灰黄	やや不良	外面スス付着

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	大別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
240	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(3.0)	-	外:細密条痕 内:ナデ	粗 1mm以下の砂粒少	外:黒褐 内:灰黄褐	不良	外面スス付着
241	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(3.8)	-	外:細密条痕 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:黄灰 内:暗灰黄	不良	外面スス付着
242	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.7)	-	外:細密条痕 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:暗灰黄 内:黄褐	やや 不良	
243	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(5.3)	-	外:細密条痕 内:ナデ、指おさえ	粗 1mm以下の砂粒少	外:黒褐 内:暗灰黄	不良	外面スス付着
244	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(5.7)	-	外:細密条痕 内:ナデ、指おさえ	粗 1mm以下の砂粒少	外:黒褐 内:にぶい黄	不良	外面スス付着
245	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.3)	-	外:細密条痕 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:暗灰黄 内:暗灰黄	やや 不良	
246	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.9)	-	外:細密条痕 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:灰黄褐 内:灰黄褐	やや 良	
247	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.8)	-	外:細密条痕 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:黄灰 内:黄褐	やや 不良	
248	146 61	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 深鉢	-	(2.7)	-	外:細密条痕 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:黄灰 内:暗灰黄	やや 不良	外面スス付着
249	146 59	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 鉢(底部)	-	(3.9)	(6.6)	外:縄文?、ナデ、ハケメ(板ナデ)、ナ	やや粗 0.5mmの砂粒やや多	外:にぶい黄褐~褐灰 内:にぶい黄橙	不良	
250	146 59	3区 (27年度)	崩落土上面 流路	縄文土器 鉢(底部)	-	(2.1)	(7.8)	外:縄文、ナデ 内:ナデ	やや粗 1~3mmの砂粒やや多	外:浅黄~灰黄褐 内:灰白	不良	
251	147 63	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(2.8)	-	外:縄文、平行沈線 内:縄文、ナデ	やや密 1mm以下の砂粒少	外:灰黄褐 内:にぶい黄褐	やや 良	
252	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(5.6)	-	外:縄文 内:ナデ、指おさえ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:黒褐 内:にぶい黄褐	やや 良	
253	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(4.7)	-	外:縄文 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:黒褐 内:にぶい黄褐	やや 良	
254	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.7)	-	外:縄文 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:灰黄褐 内:灰黄褐	やや 良	
255	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(10.2)	-	外:縄文 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒多	外:暗灰黄 内:暗灰黄	やや 良	
256	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.4)	-	外:縄文 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや 良	
257	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(4.9)	-	外:縄文 内:ナデ	やや粗 1mm大の砂粒少	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄	やや 不良	
258	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(2.2)	-	外:縄文 R L 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:褐灰 内:にぶい黄褐	やや 不良	
259	147 63	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(5.4)	-	外:縄文 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm大の砂粒やや多	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙	やや 不良	
260	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.1)	-	外:縄文 L R 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:黒褐 内:暗灰黄	やや 不良	
261	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(5.6)	-	外:縄文 内:ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外:黒スス 内:にぶい黒	良	外面全体にスス付着
262	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(2.3)	-	外:ナデ、縄文 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:暗黄褐 内:暗灰黄	やや 不良	
263	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.3)	-	外:縄文 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒少	外:灰黄褐 内:黄褐	やや 良	
264	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(5.8)	-	外:沈線 内:ナデ、指おさえ	粗 1mm以下の砂粒多	外:暗灰黄 内:にぶい黄	不良	
265	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.4)	-	外:縄文? 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや 不良	
266	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(4.5)	-	外:縄文? 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒多	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや 不良	
267	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.1)	-	外:縄文? 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:黄褐 内:黄褐	やや 不良	
268	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.3)	-	外:縄文? 内:ナデ?	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:黄褐 内:黄褐	やや 良	
269	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(2.7)	-	外:縄文? 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:にぶい黄褐 内:暗灰黄	やや 不良	
270	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.0)	-	外:縄文? 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄橙 内:暗灰黄	やや 良	
271	147 62	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(2.1)	-	外:縄文? 内:ナデ?	やや密 1mm以下の砂粒少	外:黒褐 内:黒褐	やや 良	
272	147 63	3区 (27年度)	第1面包含層	縄文土器 深鉢	-	(3.6)	-	外:貝殻条痕、刺突文? 内:ナデ	粗 1~2mmの砂粒やや多	外:暗灰黄 内:黒褐	不良	

第6節 出土遺物

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	大別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
273	147 62	3区 (27年度)	第1面直上	縄文土器 深鉢	-	(3.5)	-	外:細密条痕 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒やや少	外:黄灰 内:暗灰黄	やや不良	
274	147 62	3区 (27年度)	第1面直上	縄文土器 深鉢	-	(7.8)	-	外:条痕 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:黄灰 内:暗灰黄	やや不良	
275	147 62	3区 (27年度)	第1面直上	縄文土器 深鉢	-	(3.8)	-	外:無節縄文? 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒多	外:灰黄褐 内:暗灰黄	やや不良	
276	147 62	3区 (27年度)	第1面直上	縄文土器 深鉢	-	(6.4)	-	外:楕円押型文(縦位) 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1~4mm大の砂粒やや多	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄	やや不良	
277	147 60	3区 (27年度)	3526 流路	縄文土器 深鉢	-	(5.5)	-	外:貝殻条痕 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒多	外:灰 内:暗灰黄	やや良	外面ややス付着
278	147 60	3区 (27年度)	3526 流路	縄文土器 深鉢	-	(5.1)	-	外:無節縄文 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:灰黄褐 内:褐灰	やや不良	
279	147 60	3区 (27年度)	3526 流路	縄文土器 深鉢	-	(3.5)	-	外:磨消縄文 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:灰黄褐 内:黒	やや不良	内面炭化物付着
280	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(4.3)	-	外:押型文 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:灰黄褐 内:にぶい黄	やや不良	外面ススわずかに付着
281	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(4.6)	-	外:押型文、ナデ 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや不良	
282	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(3.3)	-	外:押型文 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒少	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや不良	
283	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(3.2)	-	外:押型文 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒やや少	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	やや不良	
284	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(7.5)	-	外:押型文 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒多	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや不良	
285	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(5.5)	-	外:押型文 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:黄灰 内:にぶい黄	やや不良	
286	148 63	3区 (27年度)	土壌化層上面	縄文土器 深鉢	-	(3.1)	-	外:押型文 内:ナデ?	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐	やや不良	
287	148 60	3区 (27年度)	土壌化層下面	縄文土器 深鉢	-	(4.4)	-	外:押型文(楕円) 内:ナデ	やや粗 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	やや不良	
288	148 60	3区 (27年度)	第2面 土壌化層	縄文土器 深鉢	-	(4.7)	-	外:押型文 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	やや良	
289	148 60	3区 (27年度)	第2面 土壌化層	縄文土器 深鉢	-	(3.2)	-	外:ナデ 内:ナデ	やや密 1~2mmの砂粒多	外:暗灰黄 内:暗灰黄	やや良	
290	148 60	3区 (27年度)	第2面 土壌化層	縄文土器 深鉢	-	(2.6)	-	外:縄文LR 内:ナデ	やや粗 1~2mmの砂粒多	外:にぶい褐 内:にぶい褐	やや不良	
291	148 60	3区 (27年度)	第2面 土壌化層	縄文土器 深鉢	-	(3.3)	-	外:縄文LR 内:ナデ	やや密 1mm以下の砂粒少	外:暗灰黄 内:にぶい黄	やや良	
292	148 63	3区 (27年度)	第2面直上	縄文土器 深鉢	-	(3.3)	-	外:細密条痕 内:ナデ	やや粗 1mm大の砂粒やや多	外:にぶい黄橙 内:褐灰	やや不良	
293	148 63	3区 (27年度)	第2面直上	縄文土器 深鉢	-	(3.2)	-	外:沈線 内:ナデ	やや密 1~2mmの砂粒多	外:オリブ褐 内:黄灰	やや良	
294	148 63	3区 (27年度)	第2面直上	縄文土器 深鉢	-	(4.8)	-	外:条痕? 内:ナデ	粗 1~2mmの砂粒多	外:にぶい黄橙 内:灰黄褐	不良	
295	149 64	4区	4011 ビット	須恵器 鉢	-	(3.6)	(10.5)	外:回転ナデ、ケズリ、回 転ヘラケズリ後ナデ? 内:	やや密 0.5mmの砂粒やや少	外:青灰	良	
296	149 64	4区	4058 道路	緑釉陶器 皿	-	(1.2)	(6.4)	外:施釉、ケズリ後ナデ? 回転ケズリ 内:施釉	密 1mm以下の砂粒少	施釉部:オリブ黄 露胎部:浅黄橙 断面:灰白	良	
297	149 64	4区	4058 道路	土師器 甕	(15.6)	(6.2)	-	外:回転ナデ 内:回転ナデ、ケズリ	密 0.1mmの砂粒	外:灰黄~黒 内:黄灰	良	
298	149 64	4区	4098 耕地段差	白磁 椀	-	(2.2)	(6.6)	外:回転ヘラケズリ 内:施釉	密 0.5mmの砂粒少	施釉部:灰白 露胎部:灰白	良	
299	149 64	4区	第3面 4077 ビット	須恵器 高台付壺	-	9.5	8.5	外:回転ナデ、高台取付に 伴うナデ、回転系切り 内:	密 1~2mmの砂粒やや多	外:灰白 内:灰白	良	
300	149 49	4区	4219 土坑	ミニチュア土器	5.0	3.3	-	外:ナデ、指おさえ 内:ナデ、指おさえ	やや粗 1mm以下の砂粒多	外:にぶい橙~黒 内:橙~黄灰	不良	
301	149 65	4区	第2面 4058 道路	土師器 移動式かまど	最大長 (5.5)	最大幅 -	最大厚 (14.7)	ナデ、ケズリ	やや粗 ~1mmの砂粒やや多	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	やや不良	
302	149 67	4区	竪穴建物3	土師器 移動式かまど?	最大長 7.7	最大幅 11.1	最大厚 3.9	ナデ	やや密 ~2mmの砂粒やや多	外:にぶい橙~黒 内:橙~褐灰	やや良	コゲ(被熱)
303	149 67	4区	竪穴建物3	土師器 移動式かまど?	最大長 8.2	最大幅 12.2	最大厚 3.7	ナデ、ハケメ、工具痕、指 ナデ	密 1mmの砂粒やや多 赤色粒少	外:灰白~橙 内:橙~4/1 褐灰	良	二次被熱?
304	149 66	4区	竪穴建物3	土師器 甕	最大長 3.05	最大幅 4.0	最大厚 4.3	ナデ	やや粗 ~1mmの砂粒多	外:灰白 断面:暗灰	不良	
305	149 66	4区	第3面 4098 耕地段差	土師器 甕	最大長 4.7	最大幅 5.6	最大厚 3.6	指ナデ	密 1mmの砂粒やや少	把手部:にぶい黄橙~ にぶい黄褐 内:1明黄褐	やや不良	被熱により表面ハクリ
306	149 66	4区	第3面 4198 ビット	土師器 甕	最大長 6.1	最大幅 5.1	最大厚 4.5	ナデ	やや密	にぶい黄橙	やや良	
307	150 64	4区	第2面直上	縄文土器? 鉢	(27.7)	(6.7)	-	外:ミガキ 内:ミガキか	密 1mmの砂粒やや少	外:灰黄褐 内:灰黄褐	良	
308	150 64	4区	第2面包含層	須恵器 杯(観転用)	-	(1.1)	(9.5)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密 1mm以下の砂粒多	外:灰 内:灰	良	

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	大別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
					口径	器高	底径					
309	150 65	4区	第2面包含層	陶器 すり鉢	(31.2)	(3.1)	—	外:ナデ 内:ナデ、クシ目	密 1~2mmの砂粒少	外:暗赤褐 内:暗赤褐 断面:青灰	良	
310	150 65	4区	第3面表採	陶器 すり鉢	(23.6)	(5.5)	—	外:回転ナデ 内:回転ナデ、一部クシ目	密 1mmの砂粒少	外:明青灰、暗青灰 内:青灰	良	重ね焼きで色調異なる
311	150 65	4区	第2面包含層	瓦質土器 鍋	(31.8)	(4.7)	—	外:ナデ 内:(口縁部)ナデ、板ナデ	やや密 2mmの砂粒少	外:暗灰 内:暗灰 断面:灰白	やや良	外面スス付着
312	150 64	4区	第3面検出時	土師器 甕	(19.4)	(4.9)	—	外:ナデ 内:ナデ、ケズリ	密 1mmの砂粒少	外:灰黄 内:灰黄	やや不良	
313	150 65	4区	第3面直上	須恵器 盥	(13.8)	(4.0)	—	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	密 1mmの砂粒やや少	外:灰 内:褐灰 断面:灰	良	
314	150 65	4区	第3面直上	須恵器 杯身	13.8	(4.3)	—	外:回転ナデ、ケズリか、 回転ヘラ切り後ナデ 内:回転ナデ	密 0.5mmの砂粒少 0.5~2mmの赤色粒若干含む	外:にぶい橙~明青灰 内:にぶい褐	良	
315	150 49	4区	第3面検出時	ミニチュア土器?	(5.4)	(3.4)	(5.4)	外:ナデ、指おさえ 内:ナデ	やや密 0.5mmの砂粒やや多	外:にぶい赤褐 内:にぶい褐	不良	
316	150 64	4区	第2面包含層	須恵器 把手付椀	(12.8)	(7.6)	—	外:回転ナデ 内:回転ナデ、指おさえ?	密 1mmの砂粒やや少	外:明青灰 内:青灰~紫灰	良	
317	150 65	4区	第3面包含層	陶器 甕	(21.2)	11.4	—	外:回転ナデ、タタキ 内:回転ナデ、ヨコナデ(オサエ)、ハケメ(ケズリ?)	密 1~5mmの砂粒、石 やや少	外:灰褐~にぶい橙 内:灰褐~にぶい橙 断面:にぶい橙	良	
318	150 64	4区	第4面包含層	須恵器 脚台部	—	(3.1)	(9.0)	文様あり、回転ナデ、スカシ	密 0.5~1mmの砂粒少	外:灰白 内:灰白 断面:浅黄橙	良	
319	150 64	4区	攪乱 (北東矢板扱い)	須恵器 高杯	(16.9)	7.8	—	外:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内:回転ナデ、一方方向ナデ	密 1mmの砂粒少	外:灰白 内:灰 断面:灰白	良	
320	150 64	4区	表土	白磁 椀	—	(2.9)	(5.5)	外:施釉、回転ヘラケズリ 内:施釉	密 0.5mmの砂粒少	施釉部:灰白 露胎部:灰白	不良	
321	150 65	4区	表土	陶器 すり鉢	(21.9)	6.5	(11.2)	外:回転ナデ、ナデ、指頭 痕?、ケズリ 内:回転ナデ、クシ目	密 1mmの砂粒少	外:灰赤、青灰 内:赤褐~赤灰	良	
322	150 65	4区	確認トレンチ	陶器 すり鉢	—	(9.3)	(16.2)	外:回転ナデ、強いヨコナ デ、ナデ 内:ナデ	やや密 0.5~5mmの砂粒やや多	外:赤灰 内:赤灰 断面:明赤灰、淡赤橙	良	
323	150 65	4区	表土	陶器 すり鉢	(22.5)	(5.5)	—	外:ナデ 内:ナデ、クシ目	密 1~2mmの砂多	外:褐灰 内:褐灰	良	
324	150 65	4区	表土	土師質土器 羽釜	(30.8)	3.3	—	外:ナデ 内:ナデ	密 1mm以下の砂粒少	外:黒 内:灰 断面:にぶい黄橙	良	外面スス付着
325	151 67	4区	第3面検出時	土師器 移動式かまど	最大長 7.3	最大幅 12.7	最大厚 7.27	ナデ	やや粗 ~5mmの砂粒、石多	外:にぶい黄橙~灰黄褐 内:にぶい橙~褐灰 断面:浅黄橙	良	
326	151 67	4区	第3面検出時	土師器 移動式かまど	最大長 6.7	最大幅 16.0	最大厚 9.2	ハケメ、ケズレ、ナデ	密 ~2mmの砂粒やや多	底上:浅黄 底下:橙 剥離部分:灰	良	
327	151 67	4区	第4面包含層	土師器 移動式かまど	残存高 15.2	最大幅 9.0	最大厚 2.2	ナデ、ハケ、ヨコハケ	やや密 ~2mmの砂粒多	外:浅黄橙~橙、赤褐 内:橙 断面:灰白~褐灰	やや良	

第11表 遺物観察表 (土製品)

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			調整等	胎土	色調	焼成	備考
					最大長	最大幅	最大厚					
D1	120 69	2区	38ピット	土鉢	2.4	0.8	0.8	ナデ	密 1mm以下の砂粒少	にぶい黄橙	良	
D2	125 68	2区	472ピット	輪羽口	13.2	8.7	9.2	圧痕	やや粗 1~7mmの砂礫非常に多	体部:灰白~灰黄 被熱~発泡範囲:黄灰	やや不良	
D3	125 67	2区	524溝	土製支脚	17.7	13.7	12.3	ナデ	やや粗 ~2mmまでの砂粒多 5mmの細礫若干	断面:橙 外面:にぶい橙~明赤褐	やや良	二次被熱あり
D4	125 67	2区	524溝	土製支脚	残存高 9.3	7.6	2.3	ナデ	やや密	にぶい橙~橙 底部:橙	やや不良	二次被熱か?
D5	125 67	2区	524溝	土製支脚	残存高 4.2	12.9	2.3	ナデ	やや密 ~1mmの砂粒やや少 (2色あり、マーブル状)	にぶい橙	やや不良	
D6	125 69	2区	873ピット	土鉢	4.3	1.4	1.4	ケズレ	やや密 1mmの砂粒多	黄灰~にぶい赤褐	やや良	被熱?
D7	125 69	2区	860石列	土玉	3.0	3.6	3.1	ナデ、指オサエ	やや粗 1mmの砂粒やや多	灰黄~黄灰	やや不良	
D8	131 67	2区	トレンチ4 33層	土製支脚	残存高 10.2	残存幅 7.4	残存厚 5.2	ナデ、タテハケ、ナ デ(オサエ)	やや密 ~0.5mmの砂粒少 2mmの砂粒わずか	橙~浅黄橙 中心部分:灰白	やや不良	二次被熱?
D9	131 69	2区	トレンチ1 70層	土鉢	3.8	0.9	0.9	ケズレ、指オサエ(細 くなる)、ユビ	密 0~0.5mmの砂粒やや少	灰黄	やや良	
D10	131 69	2区	トレンチ4 33層	土鉢	3.65	0.95	0.9	指オサエ	密 1mm以下の砂粒少	灰白	やや良	
D11	131 69	2区	南側側溝	土鉢	3.4	0.9	0.8	指オサエ	やや密 0~1mm以下の砂粒やや少	褐灰	良	
D12	131 69	2区	トレンチ4 32層	土鉢	4.4	1.9	1.8	全体に風化	やや粗 ~1mmの砂粒やや多	黄灰~黒褐	やや不良	
D13	131 69	2区	トレンチ2 32層	土鉢	3.6	2.3	2.2	ナデ	やや粗 ~0.5mmの砂粒やや多	灰黄褐	やや良	
D14	133 67	3区	竪穴建物1 南東	土製支脚	残存長 11.9	4.7	3.9	ナデ?、ハケ、ナデ?	やや密 ~1mmの砂粒やや少	淡黄本末 被熱部:橙~にぶい黄橙	やや不良	全体に二次被熱
D15	133 68	3区	竪穴建物1 北トレンチ	土鉢	3.7	0.9	0.8	ナデ	密 1mm以下の砂粒少	にぶい黄~黄灰	やや良	
D16	133 68	3区	竪穴建物1 北側トレンチ (西)	土玉	3.6	3.3	3.1	ナデ、指オサエ、粘 土のしわ	密 1mmの砂粒やや少	にぶい黄橙~灰褐	良	黒斑あり

第6節 出土遺物

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構層位	種別	寸法 (cm)			調整等	胎土	色調	焼成	備考
					最大長	最大幅	最大厚					
D17	133 68	3区	竪穴建物1 東西ベルト B49 層	土玉	3.2	3.8	2.9	ナデ、指オサエ、粘土のしわ	やや密 1mmの砂粒多	明黄褐～褐灰	やや 不良	
D18	133 68	3区	竪穴建物1 南東	土玉	3.9	4.3	(2.9)	指オサエ、粘土のしわ、欠け	やや密 砂粒 (0.5～1mm) やや多	にぶい 橙 ・赤黒	良好	黒斑あり
D19	134 68	3区	竪穴建物2 南西トレンチ	土玉	3.2	3.8	3.4	風化、指オサエ?	やや粗 1～2mmの砂粒やや少	橙～灰黄	やや 良	二次的に被熱?
D20	141 68	3区	Ⅲ-6層	輪羽口	(7.1)	(6.3)	(2.9)		粗 砂粒 (0.5～2mm) 多	外:1 灰白 発泡溶融: にぶい黄橙 内: にぶい黄橙	やや 良好	
D21	141 68	3区	Ⅲ-6層	輪羽口	(4.9)	(5.4)	(3.0)		やや粗 1～2mmの砂粒多 5mm程度の石含む	にぶい黄褐 被熱: 褐灰 発泡: 灰白、 断面: 灰白、明赤褐	やや 不良	
D22	141 68	3区	Ⅳ-2層	輪羽口	(6.2)	(8.3)	(7.2)		やや粗 1～5mmの砂粒・石多	外: 被熱部分灰 変質部分黄褐 内: 淡橙～暗赤褐	良	
D23	141 67	3区	Ⅲ-1層	土製支脚	8.1	11.6	-	ナデ、指オサエ	やや密 1～2mmの砂粒多	にぶい 橙	やや 良	
D24	141 67	3区	Ⅲ-5層	土製支脚	4.8	9.2	2.4	ナデ (ヨコ)	やや粗 ～1mmの砂粒多	褐灰～灰黄褐	やや 良	
D25	141 67	3区	Ⅲ-5層	土製支脚	残存高 10.2	残存幅 5.9	残存厚 5.2	ナデ、指オサエ	やや密 ～1mmの砂粒やや多 5mm角レキ含	灰黄褐～黄灰 断面: 灰黄～灰	やや 良	二次被熱
D26	141 67	3区	トレンチ3	土製支脚	残存高 7.2	残存幅 9.2	残存厚 7.2	ナデ、ハケ	やや密 0.5～2mmの砂粒多	にぶい 褐 被熱部: 明赤褐	やや 良	先端部二次被熱 によりややマメ
D27	141 67	3区	トレンチ3	土製支脚	残存高 10.4	残存幅 5.7	残存厚 6.7	ナデ、指オサエ	やや粗 ～2mmの砂粒多	にぶい 黄橙～明黄褐	やや 良	黒斑あり
D28	141 67	3区	Ⅳ層	土製支脚	残存高 11.7	10.2	12.3	ナデ、ハケ	やや密 ～1mmの砂粒やや多	灰黄褐 断面: にぶい黄橙	良	先端二次被熱 部分的に黒斑あり
D29	142 69	3区	Ⅰ-2層	土錘	3.6	1.1	1.0	ナデ	密 1mm以下の砂粒やや少	暗灰黄～暗オリーブ褐	良	
D30	142 69	3区	Ⅰ-2層	土錘	2.8	0.8	0.8	ナデ	密 1mm以下の砂粒少	暗灰黄	良	
D31	142 69	3区	Ⅱ-1層	土錘	4.4	1.0	1.0	ナデ、ケズレ	密 1mmの砂粒少	浅黄橙～にぶい褐	良	
D32	142 69	3区	Ⅱ-1層	土錘	3.7	1.0	1.0	指オサエ	やや密 1mm以下の砂粒やや少	灰黄褐～黒褐	やや 良	
D33	142 69	3区	Ⅱ-1層	土錘	4.2	0.9	0.9	ナデ	密 1mm以下の砂粒少	浅黄～黄灰	やや 良	
D34	142 69	3区	Ⅲ-2b層	土錘	(4.2)	1.15	1.1	ナデ	密 砂粒 (0.5～1mm) わずか	外: 暗赤灰 断面: 赤灰	やや 良	
D35	142 69	3区	Ⅲ-6層	土錘	4.1	1.0	0.9	ナデ (やや風化進む) ケズレ、欠損	密 1mm以下の砂粒少	灰黄	やや 良	
D36	142 69	3区	Ⅳ-2層	土錘	(4.1)	1.2	1.1	ナデ、指オサエ	密 砂粒 (0.5～3mm) やや多	にぶい 灰黄褐	良好	
D37	142 69	3区	仮1層	土錘	3.9	1.0	1.0	ナデ、ケズレ (キズ)	やや密 1～3mmの砂粒やや多	灰白～暗灰	良	
D38	142 69	3区	Ⅳ-3層	土錘	4.2	2.4	1.9	欠け、全体に表面荒れ	やや密 砂粒 (0.5mm) 少し	外: 灰白 内: 灰白	やや 不良	
D39	142 69	3区	Ⅱ-1層	土錘	5.3	3.6	3.6	ナデ、ハクリ	密 1mm以下の砂粒やや多	灰白	やや 良	
D40	142 69	3区	Ⅲ-5層	土錘	7.5	4.0	4.0	ナデ、指オサエ	密	外: 明褐色 内: 明褐色	良好	黒斑あり
D41	142 69	3区	表土	土錘	6.8	4.1	4.3	ハクリ、ナデ	やや粗 ～3mmの砂粒多	にぶい 黄橙～褐	やや 不良	
D42	142 69	3区	トレンチ5	土玉	2.4	1.95	1.9	ナデ、指オサエ、ケズレ	やや密 1mm以下の砂粒少	灰黄褐～にぶい黄橙	良	
D43	142 69	3区	Ⅲ-5層	土玉	3.3	3.4	3.5	指オサエ、ナデ	密 ～1mmの砂粒やや少	にぶい 黄	良	
D44	142 69	3区	Ⅱ-1層	土玉	3.3	3.3	3.6	ナデ、指オサエ	密 1mm以下の砂粒少	にぶい 黄橙～灰黄褐	やや 良 黒斑あり	
D45	142 69	3区	表土	土玉	3.8	3.8	3.5	工具痕、欠損	やや密 1～2mm以下の砂粒多	にぶい 黄橙	やや 良	
D46	142 69	3区	精査中	土玉	3.5	3.7	3.3	粘土、指オサエ、ナデ	密 ～2mmの砂粒やや多	にぶい 黄橙～灰黄褐、黒	良	黒斑あり
D47	142 69	3区	Ⅳ層	紡錘車	4.3	4.3	3.6	圧痕	やや密 砂粒 (0.5～3mm) やや多	明褐灰	良好	黒斑あり
D48	142 69	3区	Ⅲ-5層	土玉	3.8	3.8	3.3	ナデ、指オサエ	密 1mm以下の砂粒やや多	灰赤～黒	良	黒斑あり
D49	142 69	3区	Ⅲ-5層	土玉	4.0	3.7	3.2	ナデ、指オサエ、板状痕	密 1mm以下の砂粒少	灰黄～黒褐	良	
D50	142 69	3区	Ⅳ-2層	土玉	3.6	4.3	3.1	ナデ、指オサエ	密 1mm以下の砂粒多	黄褐～黒	良	黒斑あり
D51	143 68	3区	表土	土馬	(10.8)	(4.2)	残存高 11.3	ナデ、指オサエ	密 ～1mmの砂粒含む	灰色	良好	
D52	143 68	3区	表土	土馬脚	(5.25)	2.3	2.2	ナデ	密 砂粒 (0.5～1mm) 若干	灰白	良好	
D53	143 68	3区	トレンチ1	土馬脚?	(4.0)	2.1	2.0	ナデ	やや密 砂粒 (0.1～2mm) 多	灰黄褐	やや 良	
D54	149 70	4区	第2面 4058道路	土錘	3.2	1.1	1.1	風化 (ナデ)	やや粗 1mmの砂粒やや少	灰白 剥離面: にぶい黄 断面: 黒	やや 不良	
D55	149 70	4区	第2面 4058道路	土錘	3.6	1.2	1.1	ナデ、粘土しわ	やや粗 1～2mmの砂粒やや多	灰黄	やや 不良	
D56	149 70	4区	第2面 4058道路	土錘	3.6	1.0	1.0	ナデ、指オサエ、キズ?	やや密 1mmの砂粒やや少	灰黄～明褐	やや 良	
D57	149 70	4区	第3面 4098耕地段差	土錘	3.3	1.05	1.0	ナデ、粘土しわ	密 1mm以下の砂粒少	灰黄～暗灰黄	やや 良	
D58	149 70	4区	第4面 竪穴建物3	土錘	5.8	3.0	1.8	ナデ、指オサエ、粘土しわ	やや粗 1～2mmの砂粒多	外: 灰白～褐灰 内: 黒	やや 良	

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			調整等	胎土	色調	焼成	備考
					最大長	最大幅	最大厚					
D59	149/70	4区	第4面 4247ピット	土錘	5.2	1.6	1.6	ナデ、粘土しわ	密 1mm以下の砂粒やや少	灰	良	
D60	149/70	4区	第3面 4098耕地段差	土錘	3.6	1.0	1.0	ナデ	密 1mm以下の砂粒やや少	灰黄~黒褐	良	
D61	149/70	4区	第3面 4114ピット	土玉	3.1	3.6	3.6	ナデ、指オサエ	やや密 1mmの砂粒多	灰白~暗灰黄	良	
D62	149/70	4区	第2面 4058道路	紡錘車	3.7	3.9	2.6	風化、ナデ、指オサエ	やや密 1mmの砂粒少(赤褐色粒を若干含む)	灰白~にぶい橙、褐灰	不良	
D63	151/67	4区	第2面包含層	土製支脚	残存高 5.9	残存幅 5.6	—	ナデ、指オサエ	やや密 ~2mmの砂粒多	にぶい黄橙~灰黄褐 中心:灰白	良	先端若干被熱
D64	151/67	4区	第3面包含層	土製支脚	残存高 6.9	残存幅 8.4	残存厚 9.8	ナデ、ハケ?	やや密 ~1mmの砂粒やや多、2~3mmも砂粒少	灰黄褐 被熱:にぶい黄橙~灰白	やや良	突起先端被熱
D65	151/67	4区	第3面検出時	土製支脚	残存高 10.4	残存幅 9.1	残存厚 9.2	ナデ、指オサエ	やや密 0~2mmの砂粒やや少	本体:明褐灰 被熱:にぶい橙~橙 断面:褐灰	やや良	先端部被熱により剥離
D66	151/67	4区	トレンチ2	土製支脚	残存高 9.6	残存幅 7.3	残存厚 8.7	ナデ	やや粗 ~1mmの砂粒やや多、~3mmの砂粒少	にぶい褐~橙 被熱:灰黄褐 中心:褐灰	やや良	突起部被熱
D67	152/70	3区	矢板沿第2面包含層(下層)	土錘	3.0	0.7	0.7	ナデ、指オサエ	密 1mm以下の砂粒やや多	橙~褐灰	良	
D68	152/70	4区	第1面	土錘	3.4	1.3	1.1	ナデ(全体的に風化)	密 0.1~1mmの砂粒やや多	灰白	やや良好	
D69	152/70	4区	第2面包含層	土錘	3.6	1.2	1.2	ナデ、粘土しわ、凹み(ユビ)	密 1mm以下の砂粒少	暗灰黄	やや良	
D70	152/70	4区	第2面包含層	土錘	4.2	1.1	1.0	ナデ、ケズレ	密 1mm以下の砂粒少	灰黄~浅黄	良	
D71	152/70	4区	第2面包含層	土錘	1.0	0.9	0.3	ナデ、指オサエ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	灰白	良	
D72	152/70	4区	第2面包含層	土錘	4.1	1.4	1.3	ナデ、指オサエ	密 1mmの砂粒少	にぶい黄橙	良	
D73	152/70	4区	第2面包含層	土錘	3.2	1.1	1.0	ナデ、表面剥離	やや密 1mm以下の砂粒少	灰白~灰黄~暗灰黄	やや不良	
D74	152/70	4区	第2面包含層	土錘	3.7	0.95	0.9	ナデ、指オサエ	やや密 1mm以下の砂粒少	淡橙~灰褐	良	
D75	152/70	4区	第3面検出時	土錘	4.2	1.0	0.3	風化により薄く剥離、ナデ、キズ	密 1mm以下の砂粒やや多	灰白	良	
D76	152/70	4区	第3面検出時	土錘	3.4	1.2	1.1	風化(全体)ナデ、ケズレ、若干欠け	やや粗 1mmの砂粒やや多	灰黄褐	やや良	
D77	152/70	4区	第3面検出時	土錘	3.5	2.3	2.2	ナデ、ケズレ、欠け(表面)	やや密 1mm以下の砂粒やや多	表面:褐灰~黒 断面:浅黄橙~褐灰	良	
D78	152/70	4区	第3面検出時	土錘	4.2	2.3	2.1	ナデ	やや密 0.5~1mmの砂粒やや多	灰白	やや良好	
D79	152/70	4区	第3面検出時	土錘	3.3	2.3	2.2	ナデ	やや密 ~1mmの砂粒やや多	灰黄~にぶい黄橙 断面:浅黄橙~にぶい黄橙	やや良	
D80	152/70	4区	第3面包含層	土錘	7.8	3.9	3.6	ナデ、指オサエ	密 0.1mm程度の砂粒やや多	にぶい黄橙	良好	
D81	152/70	4区	第3面検出時	土玉	2.9	3.5	3.2	ナデ、指オサエ	やや密 1~2mmの砂粒やや多	灰白~灰黄、黄灰	良 黒斑あり	
D82	152/70	4区	第4面検出時	土錘	4.3	1.25	1.3	ナデ	やや密 0.1~1mmの砂粒少し	灰白	やや良好	
D83	152/70	4区	第4面包含層	土錘	4.0	1.75	0.6	ナデ	密 0.5~1mmの砂粒やや少	灰黄褐	良好	
D84	152/70	4区	第4面包含層	土錘	4.6	3.3	3.0	ナデ、指オサエ、粘土しわ	やや粗 ~1mmの砂粒多	灰白~灰黄	やや良	
D85	152/70	4区	第4面包含層	土錘	6.1	3.1	2.95	ナデ、指オサエ	やや密 1~3mmの砂粒やや少	灰白~にぶい橙、褐灰	良	
D86	152/70	4区	第4面包含層	土錘	4.2	3.9	3.3	ナデ、指オサエ、粘土しわ	やや密 0.5mm程度の砂粒やや多、雲母目立つ	にぶい黄橙	やや良	
D87	152/70	4区	第4面包含層	土玉	4.5	3.8	3.8	ナデ、指オサエ、風化により表面剥離、工具痕?	やや粗 1mmの砂粒やや少	灰白 剥離面:灰白~黄灰	やや不良	
D88	152/70	4区	トレンチ2	土錘	4.5	1.1	1.0	ナデ、指オサエ	密 1mm以下の砂粒少	灰白~灰	やや良	
D89	152/70	4区	攪乱	土錘	4.4	3.0	3.0	ナデ	やや密 1mm以下の砂粒やや多	にぶい黄橙~にぶい褐	やや良	
D90	152/70	4区	表土	土玉	3.0	3.2	3.4	表面風化進む	やや密 0.1~1mmの砂粒多	灰白 一部分明褐灰	やや良	
D91	152/70	2区	表探	土錘	3.9	3.0	2.5	ナデ	やや密 0.5~1mmの砂粒やや少	灰白 剥離面:褐灰	やや不良	

第12表 遺物観察表(石器)

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			重量 (g)	石材	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
S1	153/71	1区	第1面精査中	石庖丁	9.8	4.3	0.8	50.8	結晶片岩	
S2	154/71	2区	トレンチ1 99層	大型蛤刃石斧	6.6	4.5	2.4	37.2	蛇紋岩?	
S3	154/71	2区	トレンチ1 20層	大型蛤刃石斧	7.3	6.0	1.9	77.9	安山岩	
S4	154/71	2区	第2面 923ピット	紡錘車	4.3	4.5	2.5	26.6	凝灰岩	
S5	154/74	2区	トレンチ1 36層	敲石	11.3	6.1	4.6	551	デイサイト?	
S6	154/74	2区	トレンチ4 33層	敲石	10.0	8.0	5.3	625	花崗岩	
S7	154/74	2区	第2面精査中	敲石	8.7	8.1	4.2	375	デイサイト?	

第6節 出土遺物

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺 構 層 位	種 別	寸法 (cm)			重量 (g)	石材	備 考
					最大長	最大幅	最大厚			
S8	154 72	2区	トレンチ1 36層	打製石鏃	2.2	1.5	0.3	0.9	安山岩	凹基無茎式
S9	154 71	2区	第2面精査中	白玉	0.5	0.5	0.4	0.1	滑石	
S10	155 73	2区	第2面 706ビット	砥石	15.4	9.2	5.2	787	砂岩	
S11	155 73	2区	第2面盛土	砥石	8.7	5.6	2.2	120	凝灰岩	
S12	155 73	2区	第2面 922ビット	砥石	16.9	7.5	3.6	595	凝灰岩	
S13	155 73	2区	第2面精査中	砥石	17.8	10.2	5.5	1244	砂岩	
S14	156 73	2区	表土	砥石	6.6	5.8	2.3	159	砂岩	
S15	156 73	2区	表土	砥石	9.9	7.4	1.8	291	凝灰岩	
S16	156 73	2区	南側側溝	砥石	10.6	5.9	2.9	148	凝灰岩	
S17	156 72	2区	トレンチ1 36層	板状礫	6.4	6.5	0.9	34.9	凝灰岩	
S18	156 73	2区	第2面 577ビット	砥石	19.0	8.7	2.7	534	凝灰岩	
S19	156 72	2区	トレンチ4 33層	砥石	8.0	6.4	3.3	53	軽石	
S20	157 71	3区	表土	磨製石斧 (両刃石斧)	5.2	2.9	1.0	24.8	流紋岩	
S21	157 71	3区	Ⅳ-3層	磨製石斧 (両刃石斧)	4.9	3.7	1.1	30.1	安山岩	
S22	157 71	3区	トレンチ8	磨石?	5.9	4.5	4.2	156	デイサイト?	
S23	157 74	3区	表土	敲石	15.4	6.3	4.9	623	デイサイト?	
S24	157 74	3区	表土	敲石	5.2	6.1	3.8	204	せん緑岩	磨製石斧転用?
S25	157 72	3区	表土	石錘	8.7	8.0	2.0	188	デイサイト?	
S26	157 72	3区	東側溝	石錘	8.9	7.3	1.8	173	デイサイト	
S27	157 72	3区	Ⅱ-1層	石錘?	7.0	6.6	1.5	106	デイサイト?	
S28	157 72	3区	トレンチ8	石錘?	7.7	5.2	0.9	54	凝灰岩	
S29	158 71	3区	Ⅳ層	舌状石製品	5.2	1.9	1.7	24.4	安山岩?	
S30	158 71	3区	Ⅱ-1層	勾玉	3.0	1.9	0.9	5.6	碧玉	
S31	158 73	3区	表土	砥石	8.6	4.4	1.5	104	砂岩	
S32	158 73	3区	第5面 3392柱穴	砥石	2.9	3.0	2.4	35.6	砂岩	
S33	158 73	3区	Ⅱ-1層	砥石	7.8	2.9	2.4	92.2	デイサイト?	
S34	158 73	3区	表土	砥石	6.2	3.8	1.3	46.4	凝灰岩	
S35	158 73	3区	表土	砥石	8.0	6.2	1.3	134	デイサイト	
S36	158 73	3区	第1面 3122溝	砥石	7.0	5.9	4.2	246	半花崗岩	
S37	158 73	3区	精査中	砥石	6.1	3.5	1.4	28.1	凝灰岩	
S38	158 73	3区	Ⅳ-3層	砥石	10.1	7.5	4.7	545	凝灰岩	
S39	158 72	3区	Ⅰ層	茶臼	器高 (4.4)	口径 (34.0)	-	273	デイサイト	
S40	159 72	3区	下層確認トレンチ	石匙	3.5	6.5	0.5	10.8	安山岩	
S41	159 72	3区	Ⅵ層	スクレイパー? (削器)	4.1	6.0	0.7	20.1	安山岩	
S42	159 72	3区	トレンチ2	剥片	11.0	6.7	2.0	187	安山岩	
S43	159 72	3区	竪穴建物1北東	剥片	2.3	2.4	1.3	6.1	黒曜石	
S44	159 72	3区	竪穴建物1北東	剥片	2.1	1.8	0.7	2.2	黒曜石	
S45	159 72	3区	Ⅳ-2層	石核	6.1	9.3	2.7	157	玉髓	
S46	159 72	3区	Ⅳ-2層	スクレイパー?	4.9	6.2	2.1	76.4	玉髓	未成品
S47	160 75	3区(27 年度)	第0面	大型石庖丁	17.5	8.9	1.9	350	結晶片岩	
S48	160 74	3区(27 年度)	第3面直上	石錘	8.4	8.5	1.9	210	凝灰岩	
S49	160 74	3区(27 年度)	第2面直上	石錘	8.0	8.2	2.4	217	凝灰岩	
S50	160 74	3区(27 年度)	第1面直上	石錘	5.0	5.9	2.0	75.7	凝灰岩	
S51	160 75	3区(27 年度)	矢板沿第2面 包含層(上層)	スタンプ形石器	5.8	4.4	4.1	100	凝灰岩	

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺 構 層 位	種 別	寸法 (cm)			重量 (g)	石材	備 考
					最大長	最大幅	最大厚			
S52	160 75	3区 (27年度)	第1面直上	打製石鏃	1.8	1.5	0.3	0.6	安山岩	凹基無茎式
S53	160 75	3区 (27年度)	東壁トレンチ	剥片	3.3	4.1	1.5	16.5	黒曜石	
S54	161 71	4区	第2面包含層	管玉	2.7	1.9	0.9	3.8	碧玉	
S55	161 71	4区	第3面 4105柱穴	管玉未成品	1.6	0.8	0.75	1.64	碧玉	
S56	161 75	4区	第3面検出時	紡錘車	3.9	3.0	1.8	16.7	凝灰岩	
S57	161 74	4区	第3面包含層	石錘	9.8	7.0	2.5	221	デイサイト?	
S58	161 75	4区	表土	鑿状片刃石斧	6.3	1.3	1.3	19.2	凝灰岩	
S59	161 74	4区	第3面	敲石	10.7	6.15	4.8	458	デイサイト?	
S60	161 74	4区	第3面直上	敲石	13.3	7.1	4.2	400	砂岩	砥石転用
S61	161 74	4区	第3面検出時	敲石	6.4	6.0	4.2	221	デイサイト?	
S62	161 74	4区	第3面検出時	敲石	7.5	5.9	4.1	228	デイサイト	
S63	162 74	4区	第4面包含層	砥石	3.7	2.5	1.9	11.5	安山岩?	
S64	162 74	4区	第3面	砥石	6.8	4.9	2.8	73.9	凝灰岩	
S65	162 74	4区	第2面包含層	砥石	4.4	3.5	2.0	53.2	凝灰岩	
S66	162 74	4区	第4面包含層	砥石	5.5	3.7	2.2	41.3	凝灰岩	
S67	162 74	4区	第3面 4087ピット	砥石	5.4	3.3	2.6	61.1	凝灰岩	
S68	162 75	4区	第3面包含層	石鍋	器高: △3.5			131	滑石	
S69	162 74	4区	第3面検出時	楕円礫	9.7	8.7	4.3	509	デイサイト	
S70	162 75	4区	第3面表採	石皿?	16.7	10.0	4.7	730	凝灰岩	

第13表 遺物観察表 (木製品)

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			木取り	樹種	年輪幅・本数 (mm/本)	備 考
					最大長	最大幅	最大厚				
W1	163 78	2区	トレンチ2 28層	曲物側板	30.3	7.8	0.3	板目材	スギ	1/5	
W2	163 78	2区	トレンチ2 28層	曲物側板	9.1	4.4	0.4	板目材	スギ	1/4	
W3	163 78	2区	第1面精査中	曲物底板?	24.6	4.5	1.0	柾目材	スギ	1.5/31	
W4	163 78	2区	トレンチ1 36層	曲物蓋の把手	29.7	2.6	1.2	芯去材	スギ	(2/5)	
W5	163 77	2区	トレンチ1 35層	漆器椀	器高 (0.8)	口径 —	底径 8.1	横木取り	広葉樹		
W6	163 77	2区	トレンチ1 36層	漆器椀	器高 (6.2)	口径 (16.7)	底径 (6.9)	横木取り	広葉樹	1.5/20	
W7	163 77	2区	トレンチ1 35層	漆器椀	器高 (1.6)	口径 —	底径 (8.0)	横木取り	広葉樹	1.5/10	
W8	163 76	2区	第2面精査中	下駄	14.2	5.5	2.3	芯去材	スギ	1.5/28	右足用
W9	163 76	2区	400土坑	不明板材 (下駄転用)	6.4	7.5	2.1	板目材	ヒノキ属	1/24	右足用か
W10	163 78	2区	第2面精査中	不明板材 (曲物底板?)	12.2	4.0	0.7	板目材	スギ	1.5~2/9	
W11	164 77	2区	866直上	矢板	37.8	12.5	1.2	板目材	スギ	3/6	
W12	164 77	2区	775-1	不明 (腰掛け?)	28.3	11.2	5.8	板目材	スギ	1~1.5/44	
W13	164 78	2区	トレンチ1 35層	部材 (脚)	8.1	11.4	1.6	板目材	ヒノキ属	6/3	
W14	164 77	2区	トレンチ2	把手?	31.4	3.2	2.0	芯去材	スギ	1.5/14	
W15	164 78	2区	トレンチ1 36層	不明板材	27.2	2.3	0.55	柾目材	ヒノキ属	1/20	
W16	165 76	2区	第2面 875柱穴	柱根	73.0	21.3	17.8	芯去材	ヒノキ属	0.5~2.5	
W17	165 76	2区	第2面 562柱穴	柱根	66.1	23.9	9.7	板目材	スギ	3/26	掘立柱建物1、 板柱
W18	165 76	2区	第2面 585柱穴	柱根	63.8	28.1	10.2	板目材	スギ	2~5.5/17	掘立柱建物1、 板柱
W19	165 76	2区	第2面 621柱穴	柱根	11.6	25.8	10.8	板目材	スギ	4~5/33	掘立柱建物1、 板柱
W20	165 76	2区	第2面 654柱穴	柱根	62.5	9.1	9.1	板目材	スギ	4/23	掘立柱建物1、 板柱
W21	165 77	2区	第2面 444柱穴	礎板?	23.0	21.5	7.7	板目材	スギ	1~5/44	
W22	166 79	3区	I-1層	箸	9.9	0.6	0.5	芯去材	スギ	1.5/3	

第6節 出土遺物

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			木取り	樹種	年輪幅・本数 (mm/本)	備 考
					最大長	最大幅	最大厚				
W23	166 79	3区	I-2層	箸	6.5	0.5	0.5	芯去材	スギ	1.5 / 5	
W24	166 79	3区	III-5層	木錘	14.9	4.8	4.2	芯持材	カヤ	0.5 / 28	
W25	166 79	3区	表土	木錘	4.8	2.7	2.2	芯持材	ニヨウマツ 類	0.5 ~ 2 / 6	
W26	166 77	3区	III-5層	剝物皿	11.7	10.9	1.65	横木取り	ケヤキ		
W27	166 77	3区	III-6層	アカトリ?	16.8	8.3	5.6	芯去材	スギ	1 / 21	
W28	166 78	3区	トレンチ6	曲物底板	13.8	4.1	0.8	板目材	スギ	1 / 6	復元径 16.6
W29	166 78	3区	IV-2層	曲物底板	12.6	7.5	0.7	板目材	スギ	2 / 6	復元径 12.8
W30	166 76	3区	III-6層	下駄	13.6	1.9	2.0	芯去材	スギ	3 / 4	
W31	166 76	3区	IV層	下駄	22.0	5.5	2.3	芯去材	スギ	0.5 ~ 1 / 70	
W32	166 76	3区	IV層	下駄	23.2	5.2	3.3	芯去材	スギ	1 / 30	
W33	166 76	3区	表土	下駄	21.4	5.1	4.5	芯去材	ヒノキ属	0.5 / 44	
W34	167 77	3区	トレンチ3	漆器椀	器高 (2.2)	口径 —	底径 (9.2)	横木取り	広葉樹	3 / 21	
W35	167 77	3区	表土	漆器椀	器高 (4.9)	口径 (12.0)	底径 7.3	横木取り	広葉樹	1.5 / 34	
W36	167 77	3区	IV-2層	漆器椀	器高 6.2	口径 (14.0)	底径 (8.2)	横木取り	環孔材	2 ~ 3 / 42	
W37	167 77	3区	IV-2層	漆器椀	器高 5.9	口径 (14.4)	底径 (9.0)	横木取り	環孔材	1 ~ 2 / 80	
W38	167 77	3区	III-5層	槽	45.5	8.2	1.8	横木取り	スギ	2.5 / 28	
W39	167 78	3区	表土	部材 (脚)	11.3	14.5	1.7	板目材	ヒノキ属	1 ~ 2 / 13	
W40	167 77	3区	IV層	不明部材	18.7	4.4	1.3	柱目材	スギ	1 / 56	
W41	167 77	3区	IV層	不明部材	15.7	3.5	1.9	芯去材	スギ	0.5 ~ 1 / 14	
W42	167 78	3区	表土	不明部材	37.9	5.4	2.0	板目材	スギ	1 ~ 2.5 / 20	
W43	168 78	3区	III-1層	人形?	22.0	4.1	0.9	板目材	スギ	1.5 / 7	
W44	168 77	3区	IV層	火鑽白	20.2	3.9	3.3	芯去材	スギ	0.5 ~ 1.5 / 29	
W45	168 77	3区	IV-3層	火鑽白	21.0	2.3	1.6	芯去材	スギ	1 / 16	
W46	168 77	3区	IV-2層	火鑽白	10.1	4.0	2.4	芯去材	スギ	1 / 22	
W47	168 78	3区	第5面 3370ビット	馬形	17.8	2.5	0.6	追柱目材	ヒノキ属	0.5 ~ 1 / 18	
W48	168 78	3区	トレンチ3	馬形	6.1	1.7	0.25	板目材	スギ	2.5 / 3	
W49	168 79	3区	II-1層	不明	5.95	4.4	0.8	柱目材	ヒノキ属	0.75 / 30	
W50	168 78	3区	III層	不明板材	10.0	2.8	0.55	板目材	ヒノキ属	0.5 / 9	
W51	169 81	2区	第1面 661土坑	こけら経	25.2	2.0	0.05	柱目材	スギ	1 ~ 2.5 / 10	
W52	169 81	3区	III-6層	木筒	8.7	2.3	0.2	板目材	針葉樹	1.5 / 1	
W53	170 79	3区	第1面包含層	板材	103.8	15.8	2.5	板目材	ヒノキ属	2.5 / 13	
W54	171 80	4区	第3面包含層	刀子柄	11.9	2.4	1.5	芯去材	ヒノキ属	0.5 ~ 1 / 31	
W55	171 80	4区	第2面包含層	下駄	20.1	6.0	1.6	芯去材	ヒノキ属	4 / 5	左足用か
W56	171 80	4区	第3面 4171溝	木錘	16.2	4.7	3.4	芯持材	サカキ	2 / 7	
W57	171 80	4区	第3面表採	曲物底板	19.1	7.25	0.7	柱目材	スギ	1 ~ 1.5 / 38	
W58	171 80	4区	第3面検出時	曲物底板	19.6	5.1	0.7	追柱目材	スギ	1 ~ 2 / 18	
W59	171 80	4区	表土掘削	曲物底板	19.9	10.9	1.4	板目材	スギ	1.5 ~ 2 / 30	
W60	171 80	4区	トレンチ3	杓文字	25.4	6.8	0.6	柱目材	ヒノキ属	0.5 / 94	
W61	171 80	4区	第3面検出時	不明棒材 (脚?)	11.5	2.9	1.8	芯去材	スギ	1 ~ 2 / 8	
W62	171 79	3区	矢板沿 第3面包含層	竹製品	(4.6)	(2.3)	(5.0)	—	タケ?		
W63	171 79	4区	第3面包含層	漆器椀	器高 (2.45)	口径 (11.6)	底径 —	横木取り	トチノキ	1.2 / 19	
W64	171 79	3区	矢板沿 第3面包含層	漆器椀	器高 (5.1)	口径 (12.0)	底径 —	横木取り	クリ	3 / 14	
W65	171 79	4区	トレンチ3	漆器椀	器高 (4.4)	口径 (9.8)	底径 8.0	横木取り	トチノキ		
W66	171 79	4区	攪乱	漆器	器高 (0.9)	径 (9.0)		板目材	クリ	1 / 8	

第IV章 調査の成果

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			木取り	樹種	年輪幅・本数 (mm/本)	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
W67	172 80	4区	第3面包含層中	形代?	18.7	6.5	0.5	柁目材	スギ	1~2/37	
W68	172 80	4区	第2面包含層	形代?	19.9	3.0	0.6	板目材	スギ	1/6	
W69	172 80	4区	第3面包含層	不明部材	10.1	1.7	1.5	芯去材	スギ	0.5~1/31	
W70	172 80	4区	第1面	不明部材	8.0	1.5	1.4	芯去材	スギ	3/36	
W71	172 80	4区	トレンチ3	不明	5.1	3.3	2.0	芯去材	スギ	2/10	
W72	172 80	4区	トレンチ3	不明	8.85	3.05	1.35	芯去材	スギ	1~1.5/13	

第14表 遺物観察表 (金属製品)

遺物 No.	挿図 PL	調査区	遺構 層位	種別	寸法 (cm)			備考
					最大長	最大幅	最大厚	
M1	173 82	2区	表土	鉄製紡錘車	4.8(4.9)	5.3	0.9(1.0~)	
M2	173 82	3区	攪乱	袋状鉄斧	7.5	3.4	2.0	
M3	173 82	4区	第3面 4098耕地段差	鉄鍋	5.6 (口径※24.0)	8.5	0.5	
M4	173 82	4区	表土	環状青銅製品(銅釧)	5.2	5.3	0.4	
M5	173 82	4区	第3面直上	青銅製柄付鉄製刀子	刃部/6.7 柄/9.3	刃部/0.95 柄/0.25	刃部/0.2 柄/0.55	刃部土ごと取り上げ
M6	173 82	4区	第2面 4058道路	耳環	1.8	2.0	0.4	
M7	173 82	4区	第3面掘削中	耳環?	1.5	1.6	0.3	

第15表 遺物観察表 (銭貨)

遺物 番号	挿図 PL	銭貨名	調査区	出土層位・遺構	国名	初铸年	書体	銭径 (mm)		内郭 (mm)		銭厚 (mm)		量目 (g)	備考
								A B	A' B'	C D	C' D'	a b	c d		
M8	174 82	開元通寶	3区	表土	唐	621	真書	24.6 24.7 21.1 20.2	8.1 8.1 6.7 7.1	1.2 1.2 1.2 1.2		2.91	背上に月文 (D)内郭外径が不明確		
M9	174 82	元祐通寶	3区	表土	北宋	1086	行書	24.0 24.4 17.4 17.7	7.5 (6.7) 5.4 5.4	1.3 1.1 1.1 1.2		2.64			
M10	174 82	元祐通寶	3区	表土	北宋	1086	行書	24.2 24.2 19.7 19.5	8.5 8.4 6.8 7.1	1.3 1.2 1.3 1.2		3.50	本体に反り		
M11	174 82	元祐通寶	3区	表土	北宋	1086	行書	24.0 23.9 19.5 20.2	8.8 8.9 7.4 7.5	1.0 1.0 1.1 1.0		2.77			
M12	174 82	皇宋通寶	3区	表土	北宋	1038	篆書	24.5 24.5 20.2 19.7	8.7 8.6 7.3 7.4	1.1 1.0 1.0 1.0		3.06	穴(欠け)あり		
M13	174 82	元符通寶	3区	II-1層	北宋	1098	篆書	23.8 23.8 18.6 18.8	7.7 7.8 6.3 6.4	1.4 1.2 1.4 1.6		3.05			
M14	174 82	洪武通寶	3区	精査中	明	1368		23.0 23.1 17.2 17.1	8.2 7.6 6.2 5.8	1.6 1.7 2.0 1.7		4.25	背右に一銭? 印面、摩耗著しい		
M15	174 82	永樂通寶	3区	表土	明	1408		24.9 24.9 21.6 21.3	(6.9) 6.9 6.0 6.0	1.3 1.0 1.4 1.3		2.67			
M16	174 82	景祐元寶	4区	第2面 4058道路	北宋	1034	真書	25.4 25.4 20.5 20.2	9.6 9.6 8.1 8.1	1.2 1.2 1.1 1.2		3.30	傷み著しい		
M17	174 82	元豊通寶	4区	第2面 4058道路	北宋	1078	行書	25.2 25.1 18.4 18.3	7.9 8.3 6.9 7.1	1.3 1.2 1.2 1.2		3.06			
M18	174 82	熙寧元寶?	4区	確認トレンチ	—	—		23.8 24.1 (19.3) 19.8	(9.8) 9.8 6.4 6.6	1.3 1.2 1.3 1.3		2.65	背面に元か(3期?)		
M19	174 82	寛永通寶(新)	4区	表土	日本	1668頃		23.3 23.3 19.6 19.6	7.3 7.2 6.2 6.4	1.1 0.9 1.1 1.0		1.82	亀戸銭		
M20	174 82	寛永通寶(新)	4区	表土	日本	1740頃		22.3 22.1 17.1 16.5	7.7 8.0 6.8 6.7	0.9 1.0 0.9 0.9		1.51	背面に元 高津銭		

第V章 自然科学分析の成果

第1節 高住宮ノ谷遺跡の自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、生物が光合成や食物摂取などによって体内に取り込んだ放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、高住宮ノ谷遺跡で検出した遺構の年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、高住宮ノ谷遺跡の727土坑から検出された種実（ヒョウタン）、竪穴建物1南西（埋土最下層）から出土した炭化材、865土坑から出土した炭化材、640から土坑から検出された種実（ナデシコ科ほか）、816土坑から出土した炭化材の5点である。測定試料の情報、調整データは第16表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH）で測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第16表 測定試料及び処理

試料番号	遺構	取上番号等	種類	前処理・調整	測定法
8	727土坑	947	種実（ヒョウタン）	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
9	竪穴建物1南西 （埋土下層）	1088	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
10	865土坑	1116	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
11	640土坑	1040	種実（ナデシコ科ほか）	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
12	816土坑	1043	炭化材	超音波洗浄，酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

3. 測定結果

第17表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値および誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、第175図には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(年BP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第17表 測定結果

試料番号	測定No. (PED-)	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
8	29547	-27.49 ± 0.20	1457 ± 19	1455 ± 20	cal AD 594-636 (68.2%)	cal AD 569-644 (95.4%)
9	29548	-27.28 ± 0.15	1400 ± 19	1400 ± 20	cal AD 633-659 (68.2%)	cal AD 613-661 (95.4%)
10	29549	-25.64 ± 0.11	1503 ± 19	1505 ± 20	cal AD 548-589 (68.2%)	cal AD 475-484 (1.0%) cal AD 536-615 (94.4%)
11	29550	-27.83 ± 0.16	425 ± 20	425 ± 20	cal AD 1440-1462 (68.2%)	cal AD 1433-1483 (95.4%)
12	29551	-25.68 ± 0.12	1265 ± 18	1265 ± 20	cal AD 690-728 (45.0%) cal AD 737-750 (15.2%) cal AD 761-768 (8.0%)	cal AD 684-771 (95.4%)

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元

4. 所見

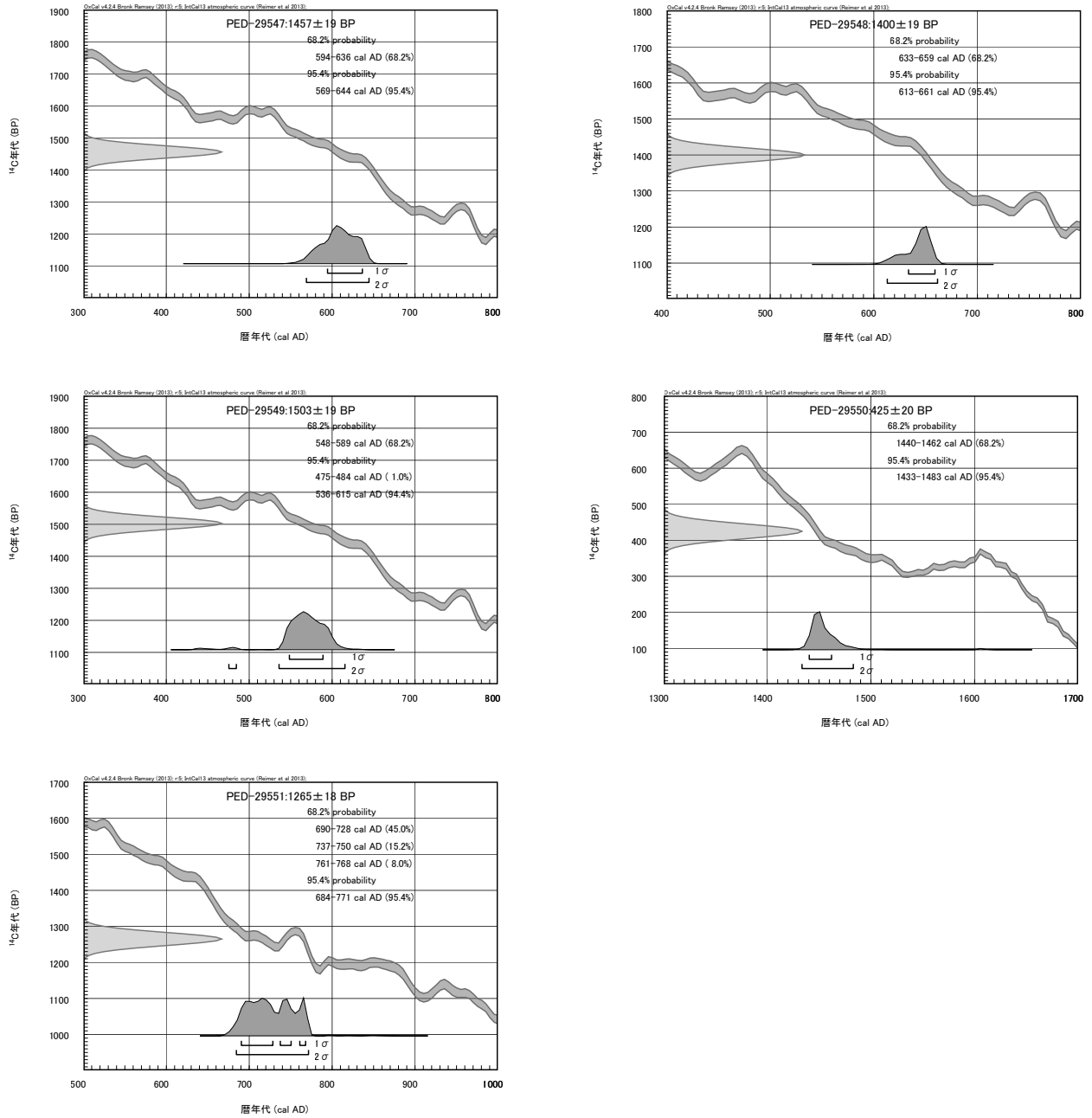
高住宮ノ谷遺跡で出土した遺構の年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法(AMS法)により放射性炭素年代測定を行った。その結果、727土坑から検出された種実は、1455 ± 20年BP(2σの暦年代でAD 569 ~ AD 644年)、竪穴建物1南西(埋土最下層)から出土した炭化材は、1400 ± 20年BP(2σの暦年代でAD 613 ~ AD 661年)、865土坑から出土した炭化材は、1505 ± 20年BP(2σの暦年代でAD 475 ~ AD 484年、AD 536 ~ AD 615年)、640土坑から検出された種実は、425 ± 20年BP(2σの暦年代でAD 1433 ~ AD 1483年)、816土坑から出土した炭化材は、1265 ± 20年BP(2σの暦年代でAD 684 ~ AD 771年)の年代値であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」, p.3-20.

日本第四紀学会.



第 175 図 暦年較正結果

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

II. 花粉分析・寄生虫卵分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されている。遺跡の調査においては、遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。また、同時に寄生虫卵分析を行うことにより、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいは便所遺構を確認することも可能である。なお、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

ここでは、高住宮ノ谷遺跡の周辺植生と堆積環境を検討する目的で花粉分析を、また、検出された土坑の機能や性格、さらに周辺環境を検討する目的で寄生虫卵分析を実施した。

2. 試料

分析試料は、花粉分析用として土壌サンプル（do 2、試料No.1）より採取された試料1点、寄生虫卵分析用として727土坑（試料No.7）から採取された試料1点である。寄生虫卵分析用の試料は、下部の粗砂の部分を除いても比較的層が厚かったため、上・中・下の3部分について分析を行った。

3. 方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を実施
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）
- 5) 水洗後サンプルを2分
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を実施
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本作製
- 8) プレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で検鏡

アセトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行う。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974,1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

4. 分析結果

(1) 花粉分析

土壌サンプル（do 2、試料No.1）は花粉が検出されず、シダ植物単条溝胞子がわずかに出現するに留まる。参考に行った寄生虫卵分析用の727土坑（試料No.7）の試料について結果を記載する。

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 21、樹木花粉と草本花粉を含むもの 4、草本花粉 17、シダ植物孢子 2 形態の計 44 である。これらの学名と和名および粒数を第 18 表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 106 図に示した。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、カエデ属、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、カラマツソウ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴 727 土坑（試料No.7）上・中・下

下部においては、樹木花粉が 47%、草本花粉が 41% を占める。樹木花粉では、クリが優占し、次にスギが多く、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属が低率に出現する。草本花粉では、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、イネ科（イネ属型を含む）、ミズアオイ属が多い。

中部になると、樹木花粉の占める割合は変わらないが、草本花粉が減少しシダ植物孢子的占める割合が増加する。樹木花粉のクリ、スギが増加し、草本花粉のアカザ科－ヒユ科、ミズアオイ属が減少する。

上部では、樹木花粉が 87% を占めるようになり、下位でも優占していたクリが卓越する。他にコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が増加する。草本花粉は 5% 以下になりカヤツリグサ科が低率に出現する。

(2) 寄生虫卵分析

727 土坑（試料No.7）の上・中・下、および参考に分析した土壌サンプル（do 2、試料No.1）のいずれにおいても、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

5. 花粉分析・寄生虫分析から推定される環境

727 土坑（試料No.7）の上・中・下では、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、糞便ないし生活汚染を受けるような土坑ではなかったと考えられる。また、中・下部の試料からは虫媒花で散布性の低いクリが多く検出され、土坑に近接してクリが分布していたとみなされる。イネ属型、水

第18表 寄生虫卵・花粉分析結果

分類群 学名	和名	No.1	No.7 (727 土坑)		
		do2	上	中	下
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	< (+)	(+)	(++)	(++)
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Abies</i>	モミ属		1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属		4	5	3
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		49	57	53
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		3	2	1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			4	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			1	
Betulaceae	カバノキ科		3	2	
<i>Betula</i>	カバノキ属		2		3
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1	1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			1	4
<i>Castanea crenata</i>	クリ		241	123	105
<i>Castanopsis</i>	シイ属		5	4	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		26	3	8
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		22	6	16
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		3	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		1	1	
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ			1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属			1	
<i>Rhus</i>	ウルシ属		1		
<i>Acer</i>	カエデ属		2		
<i>Vitis</i>	ブドウ属			1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		1	1	1
Rosaceae	バラ科			1	1
Leguminosae	マメ科			4	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				2
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科		3	24	23
<i>Oryza type</i>	イネ属型			8	14
Cyperaceae	カヤツリグサ科		8	12	6
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属			1	25
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節				1
<i>Rumex</i>	ギシギシ属				1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			12	44
Caryophyllaceae	ナデシコ科				4
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属				1
Cruciferae	アブラナ科			6	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1	3
Apioidae	セリ亜科		3	5	1
Solanaceae	ナス科			2	1
<i>Plantago</i>	オオバコ属			1	2
Lactuoidae	タンポポ亜科			2	4
Asteroidae	キク亜科			4	4
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		2	41	38
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ			1	1
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	1	29	54	17
Trilate type spore	三条溝胞子		8	47	30
Arboreal pollen	樹木花粉	0	363	214	201
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	6	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	16	120	174
Total pollen	花粉総数	0	380	340	379
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度		0.8	2.5	4.0
			× 10 ⁴	× 10 ⁴	× 10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉		7	8	9
Fern spore	シダ植物胞子	1	37	101	47

田雑草のミズアオイ属、および乾燥した環境を好む耕地雑草のアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などが出現し、周辺に水田やや乾燥した草地が分布していたと考えられる。周辺地域にはスギ林を中心に、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が生育し、上位では、クリが極めて優占し、遺跡が衰退し二次林化した可能性が推定される。

なお、土壌サンプル（do 2、試料No.1）においては、花粉、寄生虫卵ともに検出されず、これらの有機質遺体が分解される乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと推定される。

6. 考察およびまとめ

寄生虫卵は検出されないが、花粉密度が十分あることから、寄生虫卵は分解されたのではなく当初より混入していなかったと考えられる。花粉群集も特に食性を反映して優占するものも認められず、糞便堆積物である可能性は低いと考えられる。

周囲の堆積環境は、727 土坑（試料No.7）では、近隣にクリが分布し、周囲は水田およびアカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などが生育する乾燥地も分布していた。周辺地域はスギ林を主にコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の広葉樹が分布していた。

土壌サンプル（do 2、試料No.1）においては、乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。

参考文献

中村純（1967）花粉分析. 古今書院. p.82-110.

高倉巳三郎（1973）日本植物の花形形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils, *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金原正明（1999）寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

金原正明・福富恵津子・金原正子（2005）糞石の基礎的研究, 日本文化財科学会, 第22回, p.118-119.

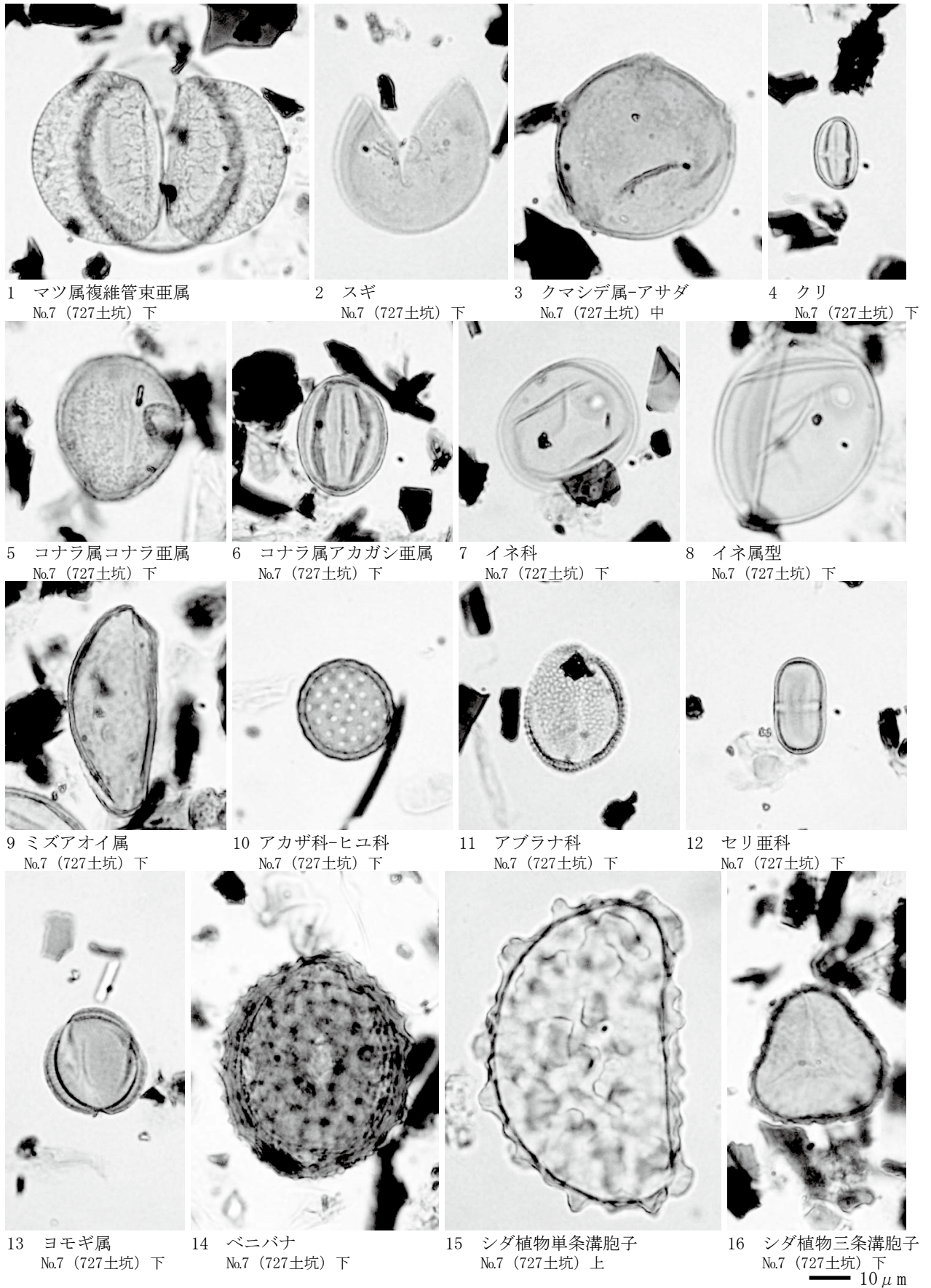


写真1 検出された花粉

Ⅲ. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

ここでは、高住宮ノ谷遺跡で検出された土坑等から種実を抽出し、当時の植物利用状況を検討する目的で種実同定を実施した。

2. 試料

試料は、294 ピット (試料No.2)、772 ピット (試料No.3)、3232 炉 (試料No.4)、640 土坑 (試料No.5)、727 土坑 (試料No.6) 等より出土した堆積物5点である。

3. 方法

試料 (堆積物) に以下の物理処理を施して、種実の抽出および同定を行う。

- 1) 試料 100cm³ に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

4. 結果

(1) 分類群

樹木4、草本15の計19分類群が同定される。学名、和名および粒数を第19表に示し、主要な分類群を写真に示す。100cm³中の種実数をダイアグラムに示す (第177図)。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

[樹木]

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科 (2.30mm × 1.68mm)

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

ブドウ科 Vitaceae 種子 (破片) ブドウ科

この分類群は破片でカラザの部分が欠損しているものである。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. 種子 ツバキ科 (1.31mm × 1.42mm)

種子は心臓形を呈する。背面は長楕円状・狭3角形状など種々な形がある。どの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. 核 エゴノキ科 (10.23mm × 6.70mm)

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 穎 (破片) イネ科

類は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科 (2.34mm × 1.89mm)

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起がある。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科 (1.48mm × 0.74mm)

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科

黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

タデ属 *Polygonum* 果実(破片) タデ科 (1.58mm × 1.13mm)

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

黒褐色で先端がとがる広卵形を呈す。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子 (1.03mm × 1.27mm、1.01mm × 0.99mm)

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

キジムシロ属 *Potentilla* 種子 バラ科 (1.00mm × 0.66mm)

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科 (1.69mm × 1.06mm)

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科 (1.07mm × 0.84mm)

淡褐色で半円形を呈す。断面は楕円形である。両面に明瞭な一本の円弧状の隆起が走る。

アブラナ科 Cruciferae 種子 (1.69mm × 1.18mm)

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

キラソウ属 *Ajuga* 果実 シソ科 (1.73mm × 1.19mm)

卵形や狭卵形で側面は横狭卵形。着点は広卵形や広楕円形、腹面の一端(卵の細い方)から中央までを占め、幅広い隆条状の縁で囲まれる。大型の網目模様がある。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科 (1.52mm × 1.34mm)

茶褐色で円形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。

ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子(破片) ウリ科 (12.45mm × 6.48mm、10.92mm × 6.95mm、10.76mm × 5.97mm、)

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

藤下がヒョウタン仲間とするものには、ヒョウタン・フクベ・カンピョウが含まれ、このうちフクベ・カンピョウは食用になる。

(2) 種実群集の特徴

1) 294 ピット (試料No.2)

全て草本種実でイネ穎片9、カタバミ属1、チドメグサ属1が検出された。

2) 772 ピット (試料No.3)

草本植物のホタルイ属11、スゲ属2、キジムシロ属2、イボクサ1と続き、樹木種実のブドウ科片3、ヒサカキ1、エゴノキ1が検出された。

3) 3232 炉 (試料No.4)

種実を検出されなかったが炭化物が観察された。

4) 640 土坑 (試料No.5)

草本種実のナデシコ科8、イネ穎片4、タデ属1、アブラナ科1、キランソウ属1と続き、樹木種実のキイチゴ属3、ヒサカキ3が検出された。

5) 727 土坑 (試料No.6)

全て草本種実でヒョウタン類10、破片29が多く、次にホタルイ属3、カヤツリグサ科1、タデ属片1、シソ属1、イヌホウズキ1が検出された。

5. 種実同定から推定される環境と農耕

1) 294 ピット (試料No.2)

イネ穎片がやや多く検出され、カタバミ属、チドメグサ属の人里植物ないし畑作雑草が伴われる。日当たりのよい人為環境が示唆される。イネ穎片は投棄されたものとみられる。

2) 772 ピット (試料No.3)

水田雑草でもあり湿地から浅い(1mまで)水域を好む水生植物のホタルイ属、スゲ属、イボクサ、集落の畑やや乾燥した人為地に生育するキジムシロ属、樹木の食用にもなる種類を含むブドウ科片、中低木の照葉樹のヒサカキ、河川や谷沿いの湿地に多いエゴノキが検出された。水がたまり水生植物が生え、周囲は草本の分布するやや乾燥した環境であり、林縁に比較的近いと推定される。

3) 3232 炉 (試料No.4)

種実が分解する乾燥した環境か堆積速度の速い環境が考えられる。

4) 640 土坑 (試料No.5)

イネ穎片、人里植物ないし畑作雑草であるナデシコ科、タデ属、アブラナ科、キランソウ属が検出され、周囲には日当たりの良い乾燥地が分布していたとみなされる。また、照葉樹のヒサカキや食用にもなるキイチゴ属の検出から林縁の環境が推定される。

5) 727 土坑 (試料No.6)

全て草本種実でヒョウタン類は栽培植物であり畑作物である。ホタルイ属、カヤツリグサ科は湿地から浅い(1mまで)水域を好み、タデ属片、シソ属、イヌホウズキは人里植物ないし畑作雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育する。

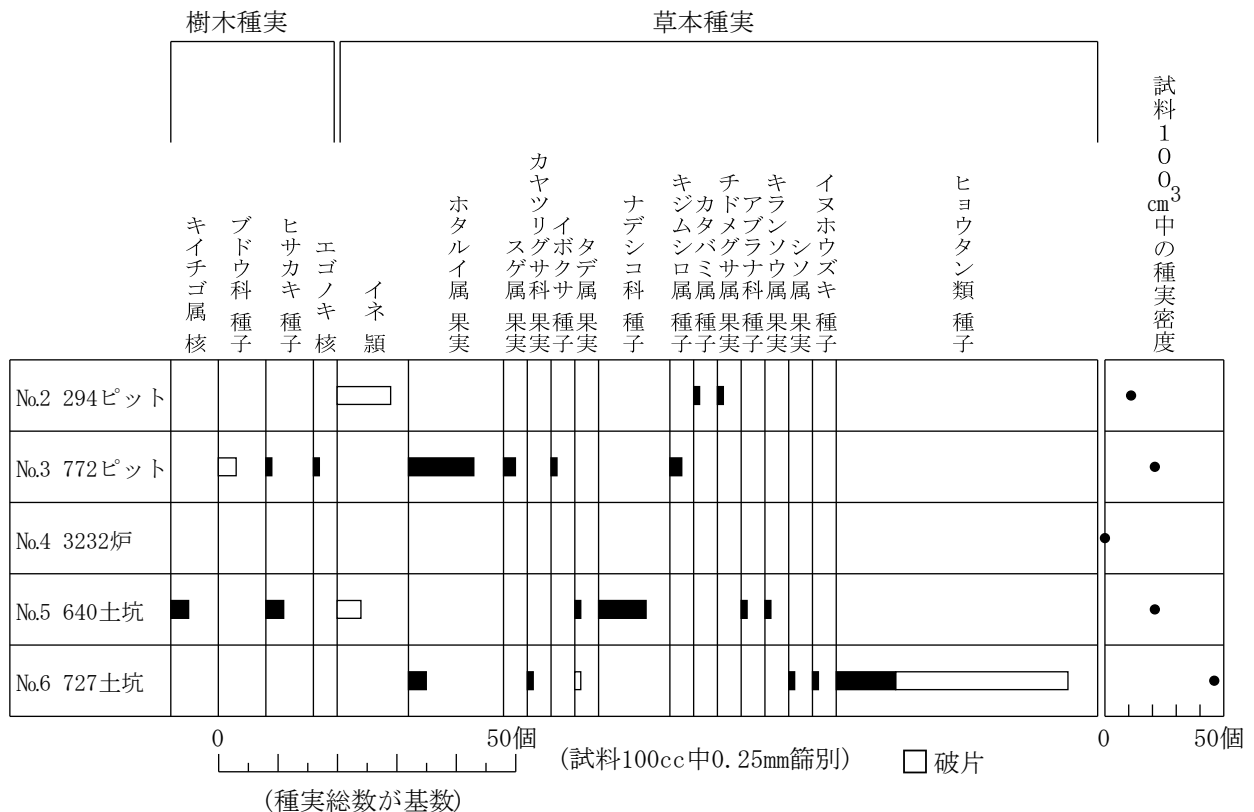
6. まとめ

高住宮ノ谷遺跡における種実同定の結果、樹木種実のキイチゴ属、ブドウ科、ヒサカキ、エゴノキ、草本種実のイネ、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、イボクサ、タデ属、ナデシコ科、キジムシ

第19表 種実同定結果

分類群			No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
学名	和名		294 ピット	772 ピット	3232 炉	640 土坑	727 土坑
Arbor	樹木						
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核				3	
Vitaceae	ブドウ科	種子(破片)		3			
<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ヒサカキ	種子		1		3	
<i>Styrax japonica</i> S. et Z.	エゴノキ	核		1			
Herb	草本						
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎(破片)	9			4	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実		11			3
<i>Carex</i>	スゲ属	果実		2			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実					1
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子		1			
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実 (破片)				1	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子				8	
<i>Potentilla</i>	キジムシロ属	種子		2			
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1				
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	1				
Cruciferae	アブラナ科	種子				1	
<i>Ajuga</i>	キランソウ属	果実				1	
<i>Perilla</i>	シソ属	果実					1
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子					1
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子 (破片)					10 29
Total	合計		11	21	0	21	46

(100cm³中0.25mm篩)



第177図 種実ダイアグラム

第V章 自然科学分析の成果

口属、カタバミ属、チドメグサ属、アブラナ科、キランソウ属、シソ属、イヌホウズキ、ヒョウタン類が検出された。これらの中で、栽培植物はイネ、ヒョウタン類であり、キイチゴ属、ブドウ科（ブドウ属は食用）は食用になる。他は水田雑草ないし畑作雑草の性格をもつ草本ばかりであり、土坑の周辺はこれらの草本が生育し、林縁に近い環境であったと考えられる。

参考文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131 - 139.
- 南木陸彦（1991）栽培植物，古墳時代の研究第4巻生産と流通I，雄山閣出版株式会社，p.165 - 174.
- 南木陸彦（1992）低湿地遺跡の種実，月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.18 - 22.
- 南木陸彦（1993）葉・果実・種子，日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276 - 283.

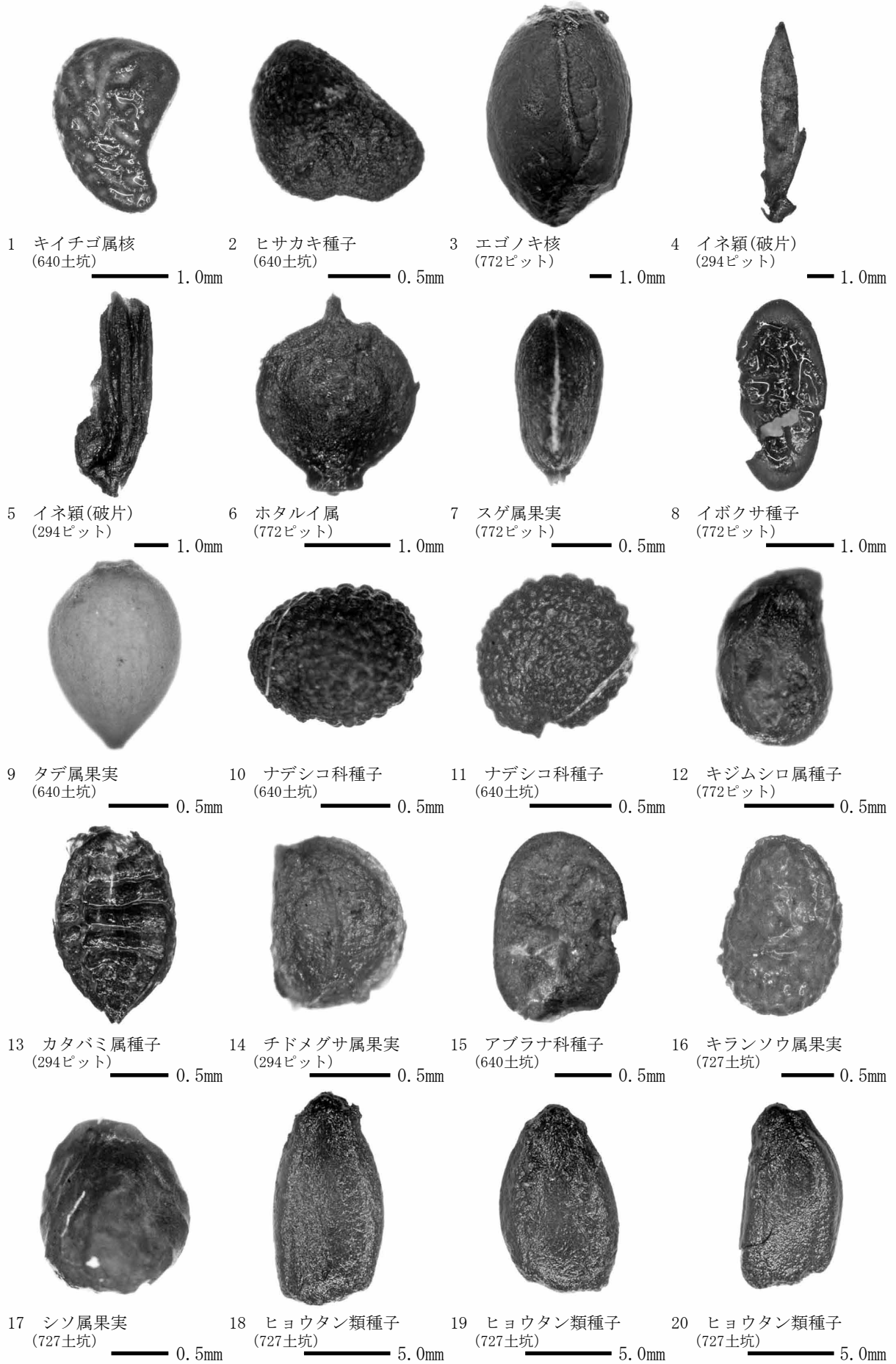


写真2 検出された種実

第2節 高住宮ノ谷遺跡における樹種同定結果

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1 はじめに

高住宮ノ谷遺跡は、鳥取県東部の鳥取市高住に所在し、海跡湖である湖山池にそそぐ三山口川下流西岸の沖積地に位置する。

本報告は、出土木質遺物の用材を明らかにする目的で、公益財団法人鳥取県教育文化財団が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、樹種同定の報告である。

2 分析試料について

分析試料はすべて、公益財団法人鳥取県教育文化財団により採取・保管されていた。保管中の試料のうち、第20～22表に示した各試料について、文化財調査コンサルタント（株）が切片を採取し、プレパラートを作成、顕微鏡下での観察、同定を行った。

3 分析方法

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2010）に従い作成した。作成した永久プレパラートには

第20表 分析試料一覧表（2区）

取上番号	調査区	樹種	器種	遺構面	層位名	遺構	備考
607-1	2区	スギ	曲物底板？	第2面			
691-1	2区	スギ	下駄	第2面			
712	2区	スギ	把手		トレンチ1－36層		
717-1	2区	ヒノキ属	不明板材		トレンチ1－36層		
719-1	2区	ヒノキ属	部材（脚）		トレンチ1－35層		
805	2区	スギ	曲物側板		トレンチ2－100層		
961	2区	スギ	不明（腰掛？）	第2面		775 柱穴	
1023	2区	スギ	把手？		トレンチ2		
1110-1	2区	ヒノキ属	下駄	第2面		400 土坑	
1246	2区	スギ	矢板	第2面		866 ピット	
1305	2区	スギ	礎板？	第2面		444 柱穴	
1386	2区	ヒノキ属	板柱			—	
1846	2区	スギ	板柱	第2面		585 柱穴	
1850	2区	スギ	板柱	第2面		574 柱穴	
1851	2区	スギ	板柱	第2面		568 柱穴	
1891	2区	スギ	板柱	第2面		621 柱穴	
2025	2区	スギ	不明板材	第1面			
738	2区	ヒノキ属	柱根	第2面		409 ピット	
1245	2区	ニヨウマツ類	柱根	第2面		599 ピット	
1387	2区	クリ	柱根	第2面		876 ピット	
1388	2区	シイノキ属 （スダジイ型）	柱根	第2面		454 ピット	
1389	2区	クリ	柱根	第2面		431 ピット	
1390	2区	クリ	柱根	第1面		317 ピット	
1415	2区	スギ	柱根	第2面		421 土坑	
1676-1	2区	アスナロ類似	柱根	第2面		551 ピット	
2087	2区	ヒノキ属	柱根	第2面			
2114	2区	カバノキ属	柱根	第2面		949 ピット	

整理番号を付けて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

4 樹種同定結果

分類ごとに特徴的な試料の記載・顕微鏡写真撮影を行った。また、第20～22表に同定結果を示すとともに、記載・写真撮影を行った試料をグレーのセルで示した。

(1) カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc.

試料名：3区1677（合計1試料）

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。仮道管にはらせん肥厚があり、2本のらせんが対になる傾向がある。分野壁孔はヒノキ型で2～

第21表 分析試料一覧表（3区）

取上番号	調査区	樹種	器種	遺構面	層位名	遺構	備考
410	3区	ニヨウマツ類	木錘		表土		
644	3区	ヒノキ属	部材（脚）		表土		
866-1	3区	スギ	馬形		トレンチ3		
1443-1	3区	スギ	箸		I-2層		
1447-1	3区	ヒノキ属	不明		II-1層		
1644-1	3区	スギ	箸		I-1層		
1677	3区	カヤ	木錘		III-5層		
1678-1	3区	スギ	槽		III-5層		
1703	3区	スギ	人形？		III-1層		
1804	3区	スギ	曲物底板		トレンチ6		
1818-1	3区	ケヤキ	皿		III-5層		
1941-1	3区	スギ	下駄		III-6層		
1954	3区	スギ	アカトリ？		III-6層		
2023-1	3区	スギ	下駄		IV層		
2023-2	3区	スギ	部材		IV層		
2064-1	3区	スギ	火鑽臼		IV-2層		
2074-1	3区	スギ	火鑽臼		IV層		
2078-1	3区	スギ	下駄		IV層		
2181	3区	スギ	曲物底板		IV-2層		
2186	3区	スギ	部材		IV層		
2215	3区	スギ	火鑽臼		IV-3層		
2241-1	3区	スギ	部材		表土		
2241-2	3区	ヒノキ属	下駄		表土		
2320-1	3区	ヒノキ属	不明板材		III層		
2351	3区	ヒノキ属	馬形	第5面		3385ピット	
2383	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3385ピット	
2385	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3386ピット	
2386	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3384ピット	
2387	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3383ピット	
2388	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3383ピット	
2389	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3383ピット	
2420	3区	ヒノキ属	柱根	第5面		3441ピット	

4個存在することなどから、カヤと同定した。

カヤは、東北地方南部～九州（屋久島）に分布する。

(2) マツ属（複維管束亜属）：ニヨウマツ類 *Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp.

試料名：2区 1245（合計2試料）

記載：仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道及び水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は広い。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エピセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は移行部に分布する。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の膜には鋸歯状の突起があることなどから、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

マツ属（複維管束亜属）には、アカマツ、クロマツ、アイグロマツがあり、本州～九州に分布する。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

試料名：2区 1851（合計41試料）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は主に移行部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で2～3個存在することなどから、スギと同定した。

第22表 分析試料一覧表（3区（27年度）・4区）

取上番号	調査区	樹種	器種	遺構面	層位名	遺構	備考
3	4区	スギ	曲物底板		表土		
60-1	4区	ヒノキ属	不明板材		トレンチ3		
87	4区	スギ	部材	第1面			
178	4区	スギ	齋串?	第2面			
179	4区	ヒノキ属	下駄	第2面			
339-1	4区	スギ	不明		トレンチ3 3層		
339-2	4区	スギ	不明		トレンチ3 3層		
387	4区	ヒノキ属	刀子柄	第3面			
389	4区	スギ	不明部材	第3面			
427-1	4区	スギ	不明(脚?)	第3面			
437-1	4区	スギ	曲物底板	第3面			
452	4区	スギ	形代?	第3面			
568-1	4区	サカキ	木錘	第3面		4171 溝	
656	4区	スギ	曲物底板	第3面			
889	4区	イスノキ類似	柱根	第4面		4245 ピット	
39	3区	ヒノキ属	板材	第1面			
654	4区	ヒノキ属	柱根	第3面		4091 ピット	
670	4区	クリ	構造材?	第3面		4098 耕地段差	
844	4区	クリ	構造材?	第3面			
845	4区	クリ	構造材?	第3面			
847	4区	トチノキ	構造材?	第3面			
850	4区	クリ	構造材?	第3面			
851	4区	クリ	構造材?	第3面			
854	4区	クリ	構造材?	第3面			
888	4区	シイノキ属 (スダジイ型)	柱根	第4面		4219 土坑	

スギは、本州～九州（屋久島）に分布する。

(4) アスナロ類似 cf. *Thujspsis dolabrata* Sieb. et Zucc.

試料名：2区 1676- 1（合計1試料）

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭く、年輪幅も狭い。樹脂細胞は移行部から晩材に分布し、接線方向に配列する。また、分野壁孔はヒノキ型でスギ型に近いものも認められ、2～4個存在する。ヒノキ属に対し分野壁孔の数がやや多いことなどからアスナロの可能性が指摘されるが、アスナロ類似とするに止める。

アスナロは、北海道南部から九州に分布する。

(5) ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.

試料名：2区 1386（合計24試料）

記載：仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材幅は狭い。樹脂細胞は移行部～晩材に認められる。分野壁孔は明瞭なヒノキ型で1～3個存在することなどから、ヒノキ属と同定した。

ヒノキ属にはヒノキ、サワラが含まれ、東北南部（サワラは東北中部）から九州に分布し、ヒノキの変種であるタイワンヒノキは台湾本島に分布する。

(6) カバノキ属 *Betula* sp.

試料名：2区 2114（合計1試料）

記載：中庸な大きさの道管が、単独ないし2～3個放射方向に複合し、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔で、バーの数は20以下である。道管内腔に、着色物質を含むものが認められる。軸方向柔組織はターミナル状が顕著であり、散在状も存在しているが少ない。放射組織は同性で、1～3細胞幅である。以上の組織上の特徴から、カバノキ属と同定した。

カバノキ属にはアポイカンバ、チチブミネハリ、ネコシデ、チョウセンミネバリ、ヤエガワカンバ、ダケカンバ、ジゾウカンバ、ミズメ、ウダイカンバ、ヤチカンバ、シラカンバなどがあり、主に千島列島から北海道、本州中部に分布し、四国や九州の高山帯に分布するものもある。

(7) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料名：2区 1390（合計9試料）

記載：年輪幅は広い。非常に大きい楕円形の道管がほとんど単独で1～2列に配列する環孔材である。孔圏外の小道管は薄壁で角張っており、放射状ないし火炎状に配列している。道管せん孔は単せん孔で、道管放射組織間壁孔は明瞭な柵状を示す。道管内腔にチロースがよく発達する。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。軸方向柔組織は周囲状の他に短接線状が見られる。放射組織は単列同性で、高さは20細胞高以下である。以上の組織上の特徴から、クリと同定した。

クリは北海道南西部から九州に分布する。

(8) シイノキ属（スダジイ型）*Castanopsis* sp. (cf. *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai)

試料名：2区 1388（合計2試料）

記載：孔圏には中庸で楕円形の道管が単独で並ぶ環孔材であるが、道管の分布は非常に疎で放射方向に並ぶ。孔圏外の道管は小さく、火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、道管中にはチロースが認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するも

のも認められる。放射組織はすべて単列同性である。更に道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴からシイ属と同定した。また広放射組織が認められないことから、スタジイの可能性が指摘できる。

スタジイは、東北地方南部から八重山諸島に分布する。

(9) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

試料名：3区 1818- 1 (合計1 試料)

記載：試料の劣化が激しい。年輪幅がやや狭い。大きい円形ないし楕円形の道管が単独でほぼ1列に配列する環孔材である。孔圏外では小道管が集合して集団管孔を形成し、顕著な塊状となっているが、孔圏外が狭いため分布は不明である。道管せん孔は単せん孔である。孔圏外的小道管にらせん壁厚が明らかに存在している。道管内腔にはチロースが非常に発達している。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は多列異性であり、10細胞程度幅までの紡錘形放射組織が目立つ。縁辺の方形細胞に結晶が認められる。以上の組織上の特徴から、ケヤキと同定した。

ケヤキは、本州から九州に分布する。

(10) イスノキ類似 cf. *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.

試料名：4区 889 (合計1 試料)

記載：小さい道管がほぼ単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔であるが、劣化のため不明瞭である。木部繊維は極めて厚壁である。軸方向柔組織は多く分布し、散在状から接線方向に帯状に配列するものが見られる。放射組織は異性で、1～3細胞幅であり、直立細胞がだるま状に膨らんだ異形細胞が多く見られ、結晶を含むものもある。以上の組織上の特徴から、イスノキと推定できるが、劣化により観察ポイントが限られていたことから、類似に止める。

イスノキは本州関東地方以西から九州、沖縄を経て台湾、中国（浙江省）に分布する。

(11) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume

試料名：4区 847 (合計1 試料)

記載：やや小さい道管が単独ないし放射方向に2～3個複合して散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管壁孔は交互壁孔を示し、内腔に内容物（着色物質）を含むものが多い。放射組織は単列同性型で、極めて低いものが階層状に配列している。軸方向柔細胞は1～2層のターミナル状である。以上の組織上の特徴からトチノキと同定した。

トチノキは、北海道西南部から九州に分布する。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb.

試料名：568- 1 (合計1 試料)

記載：試料の劣化が非常に激しい。非常に小さい道管がほぼ単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔であるが、劣化のため不明瞭である。木部繊維は非常に厚壁である。軸方向柔組織は散在状である。放射組織は異性で、単列のものが主で、2細胞幅のものもある。放射柔細胞には平伏細胞、直立細胞、方形細胞の3種類がすべて存在する。放射柔細胞壁は厚壁である。以上の組織上の特徴から、サカキと同定した。

サカキは、本州関東地方以西から九州、沖縄を経て台湾、中国に分布する。

5 樹種別の検出傾向と、周辺遺跡との比較

「出土木製品の用材データベース」と呼ばれるものは、「木器集成図録近畿古代編」（奈良国立文化財研究所,1985）以降、幾つか刊行されている。多くは紙媒体であり、利用に際しユーザーの工夫が必要であった。また、刊行から時間がたち、新たなデータの追加が必要となっていた。

近年刊行された、伊東・山田（2012）による「木の考古学 出土木製品用材データベース」は、パソコン上で検索が可能であり、従来のデータベースに比べ利用しやすいものであった。一方、伊東・山田（2012）は県単位でまとめられており、文化、気候、地理を加味した「地域」として捉える場合、不都合が見受けられた。渡辺・中川（2013）は、鳥根・鳥取を対象に、伊東・山田（2012）に幾つかの新たなデータを加えて独自のデータベースを構築し、それを基に幾つかの視点からまとめている。今回は、渡辺・中川（2013）を基に、今回の同定結果について考察を加える。

（1）スギ

今回は同定した試料の48%をスギが占めた。スギの検出量が多い傾向は、鳥取県下、特に東部で顕著で、47%を占めている（西部では11%）。今回の高住宮ノ谷遺跡近辺の桂見遺跡、布勢第1遺跡では、同定した数量の57%をスギが占めている。鳥取県東部でスギが多く検出されることは、花粉分析結果とも調和的で、スギ林が広く分布していたことを裏付けるものと言える。

用材で捉えると、スギが建築部材として用いられることは比較的少ないようで、17%に止まる。今回の結果では、「柱（根）」などの明らかな建築部材としては掘立柱建物1に伴う断面表方形柱がスギ材であったことが特筆される。用途の多いものでは「曲物」、「火鑽臼」、「下駄」が挙げられた。

（2）ヒノキ科

ヒノキ属にアスナロ類似を含めたヒノキ科が29%を占めた。従来の鳥取県下での検出量（東部：5%、西部：6%）と比較すると、多い値であった。

用材で捉えると、3区の「柱（根）」が全てヒノキ属であった。ヒノキ属の柱は、官衙等の古代の重要な建物に用いられる例が多く、注目に値する。

（3）クリ

10%を占めた。従来の鳥取県下での検出量10%と同じ値であったが、東部（4%）に比べると高い値であった。

クリは建築部材（18%）、土木部材（18%）として用いられることが多いものの、用途が突出しているわけではない。他地域で多いとされる「柱」の使用例（西部：21%、鳥根県東部：48%）も、従来は皆無であった。今回に限れば、前述の3区出土ヒノキ柱の影響があるものの、14%と従来と大きく異なるものであった。

（4）その他

他地域でシイノキ属は、クリ材とともに柱材に用いられることが多いが、鳥取県東部では1例（3%）に止まっていた。今回シイノキ属が「柱（根）」の9%（2例）を占めることは、従来と異なる結果であった。

視点を「器種」に変えると、「柱（根）」は7種類の樹種からなる。前述のように、建物の種類で用材が異なることが知られており、柱の位置、あるいは建物の用途などからの用材を、考える必要があらう。

例が少ないものの、「木錘」には以前から様々な樹種が用いられてきた。今回も例外ではなく、同

第V章 自然科学分析の成果

定を行った3試料ともに異なる樹種であった。サカキは従来記載例があったが、カヤ、ニヨウマツ類は鳥取県下では初めての記載になる可能性がある。

引用文献

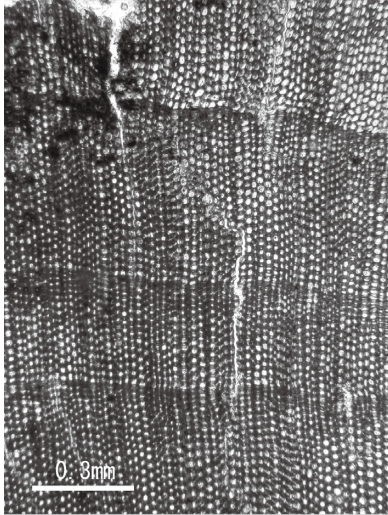
伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学 - 出土木製品用材データベース -, 449p. 海青社, 滋賀.

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.

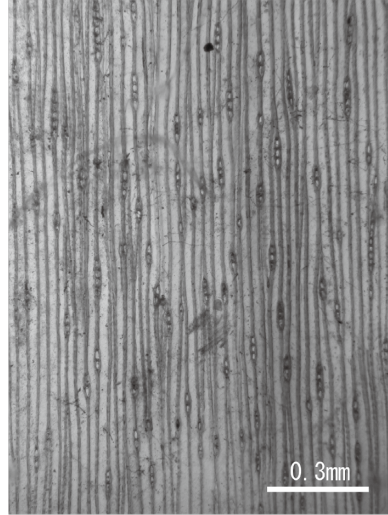
渡辺正巳（2010）木質遺物（埋没樹木）樹種同定. 必携 考古資料の自然科学調査法, 194 - 198. ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳・中川 寧（2013）山陰の木製品の樹種と植生について. 木製品から見た古代の暮らし, 37-48, 鳥根県古代文化センター.

カヤ *Torreia nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. : 試料名 3区1677



横断面

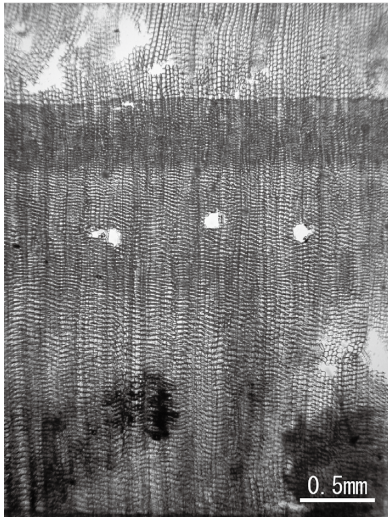


接線断面

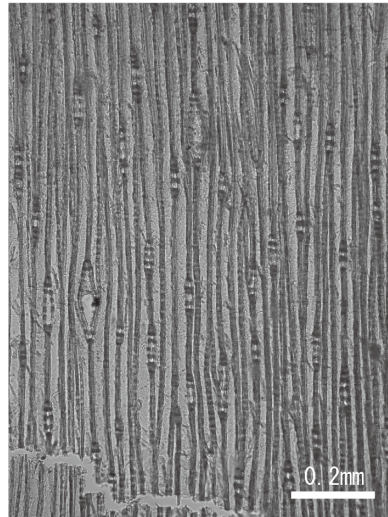


放射断面

マツ属 (複維管束亜属) *Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp. : 試料名 2区1245



横断面

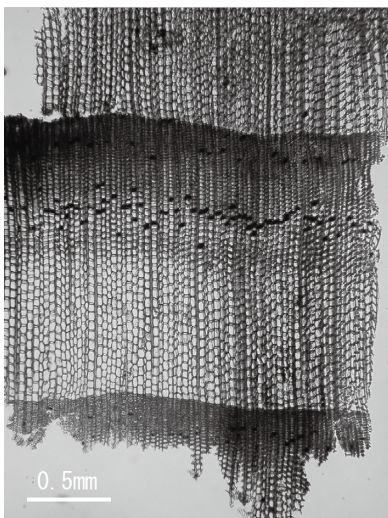


接線断面

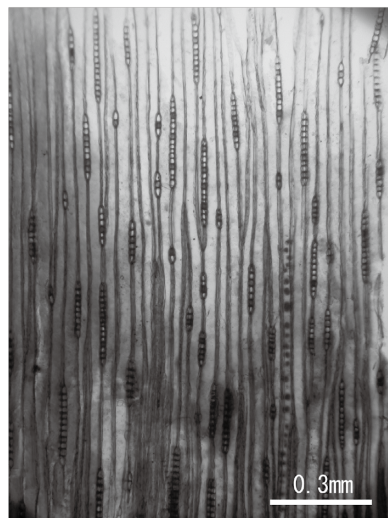


放射断面

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don : 試料名 2区1851



横断面



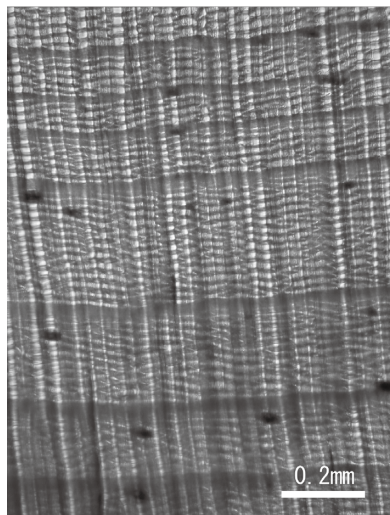
接線断面



放射断面

写真3 出土木材の光学顕微鏡写真(1)

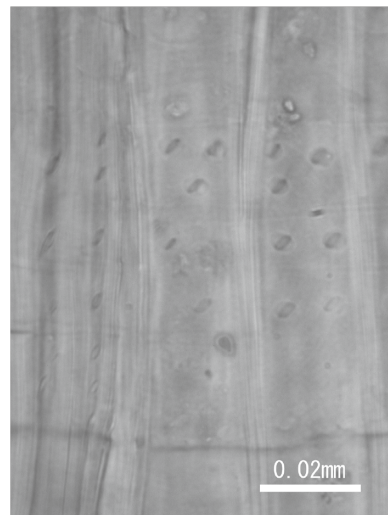
アスナロ類似 cf. *Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. : 試料名 2区1676-1



横断面

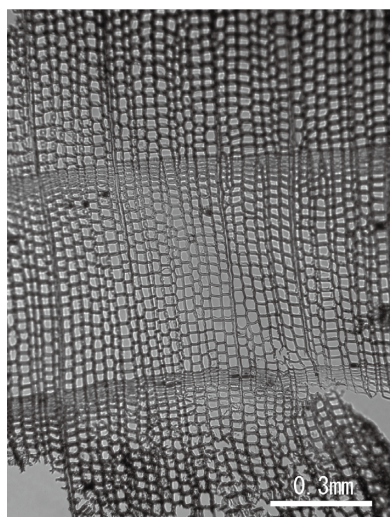


接線断面



放射断面

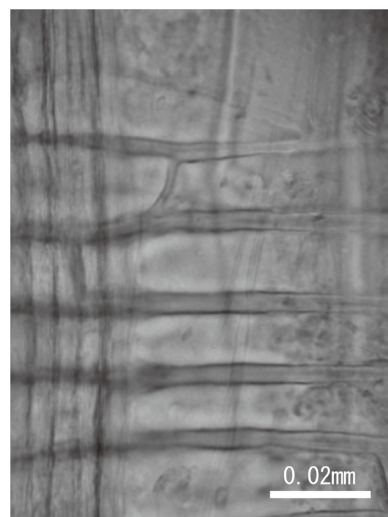
ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp. : 試料名 2区1386



横断面

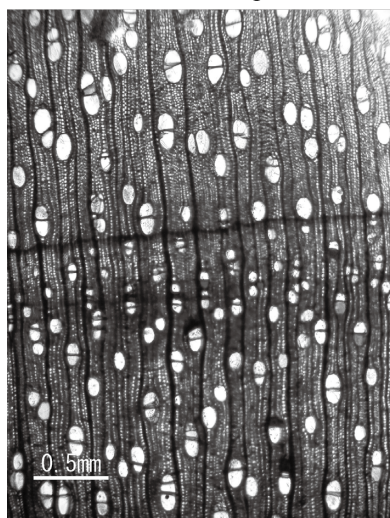


接線断面

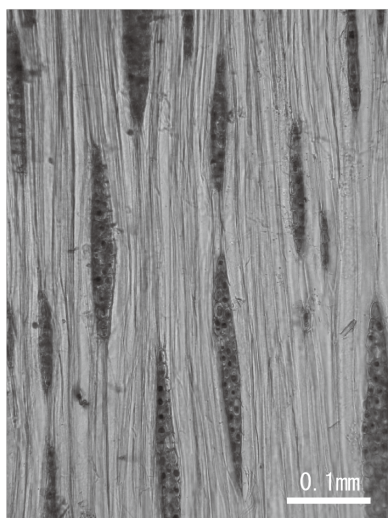


放射断面

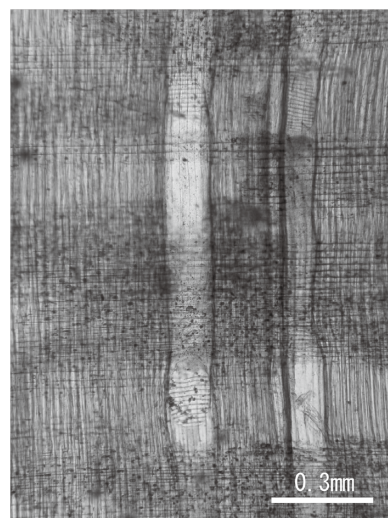
カバノキ属 *Betula* sp. : 試料名 2区2114



横断面



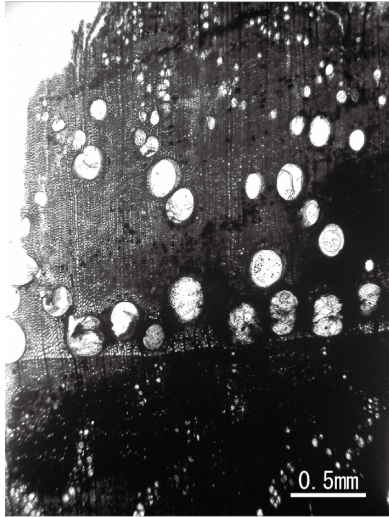
接線断面



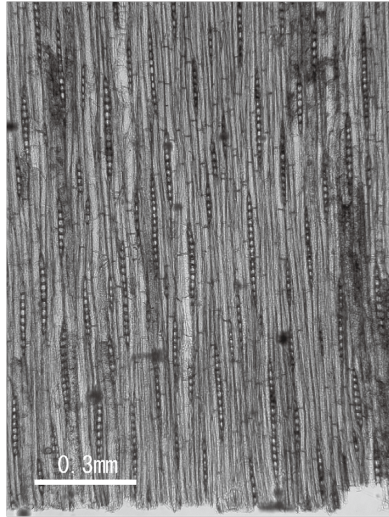
放射断面

写真4 出土木材の光学顕微鏡写真(2)

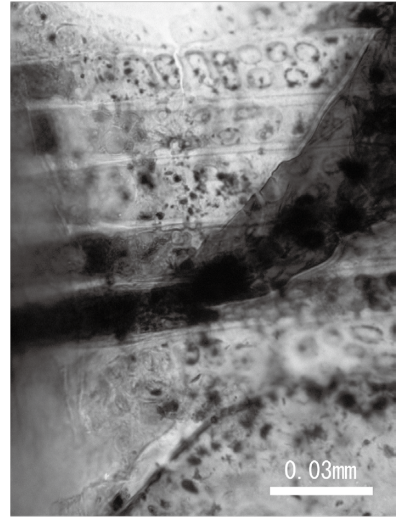
クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. : 試料名 2区1360



横断面



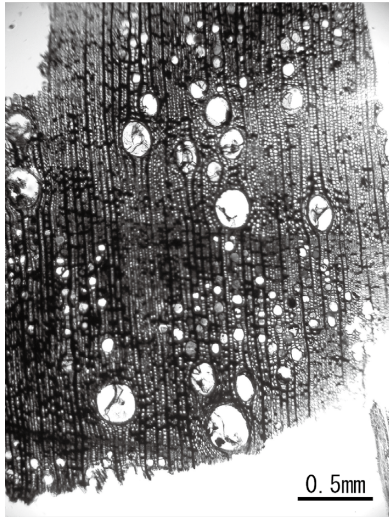
接線断面



放射断面

シイノキ属 (スダジイ型) *Castanopsis* sp.

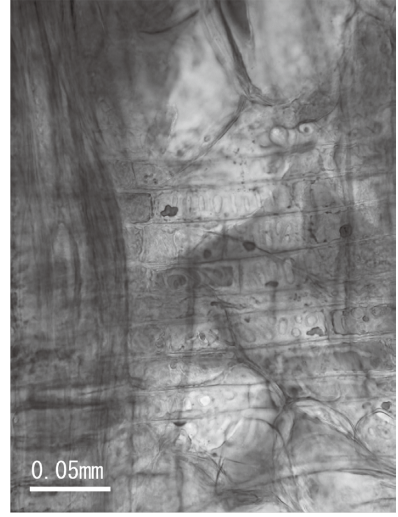
(cf. *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) : 試料名 2区1388



横断面



接線断面

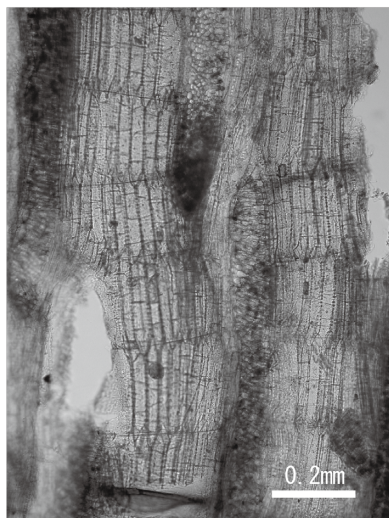


放射断面

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino : 試料名 2区1851



横断面



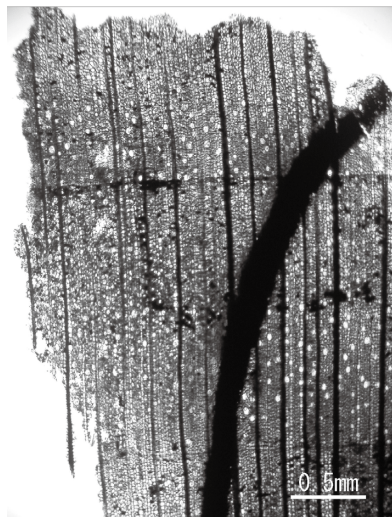
接線断面



放射断面

写真5 出土木材の光学顕微鏡写真(3)

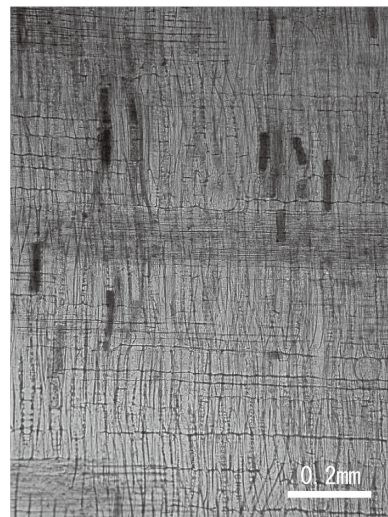
イスノキ類似 cf. *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. : 試料名 4区889



横断面



接線断面

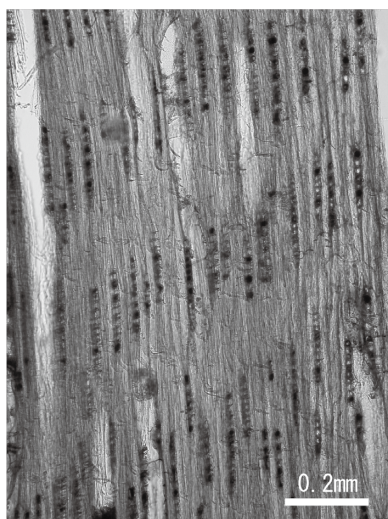


放射断面

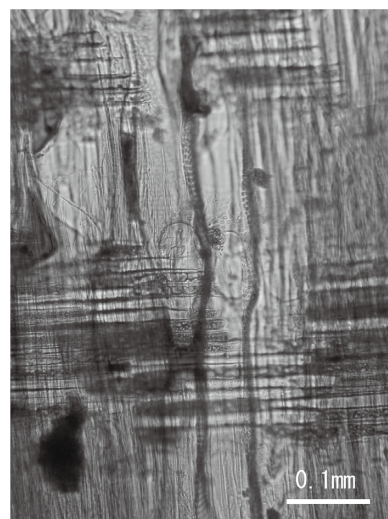
トチノキ *Aesculus turbinata* Blume : 試料名 4区847



横断面



接線断面

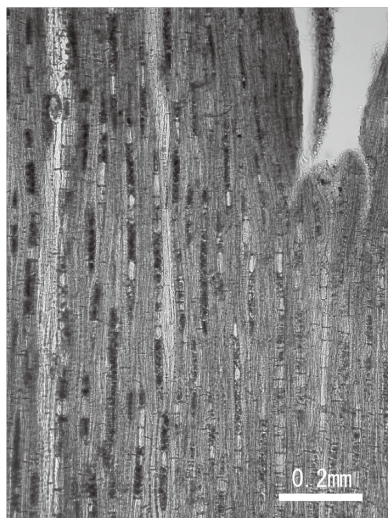


放射断面

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. : 試料名 2区1851



横断面



接線断面



放射断面

写真6 出土木材の光学顕微鏡写真(4)

第3節 高住宮ノ谷遺跡における放射性炭素年代測定および樹種同定結果

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

1 はじめに

高住宮ノ谷遺跡は、鳥取県東部の鳥取市高住に所在し、海跡湖である湖山池にそそぐ三山口川下流西岸の沖積地に位置する。

本報告は、遺構と地層形成の年代を明らかにするとともに、年代測定試料とした倒木（流木）の樹種を明らかにする目的で、公益財団法人鳥取県教育文化財団が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、放射性炭素年代測定および樹種同定の報告である。

2 分析試料について

公益財団法人鳥取県教育文化財団により採取・保管されていた試料の提供を受けた。分析試料の一覧を第23表に示す。

第23表 分析試料一覧表（3区（27年度）・4区）

試料 No.	調査区	出土遺構ほか	取上番号等	重量 (g)	分析項目	推定時期	備考
1	3区	トレンチ2 土石流内	サンプル1	0.8946	放射性炭素年代測定	縄文時代～弥生時代	生材
2	3区	トレンチ2 土石流下流路	サンプル2	1.0465	放射性炭素年代測定	縄文時代	生材
3	4区	第2面 4058 道路	316	5.2583	放射性炭素年代測定	中世	種実
4	4区	第4面 4221 ピット	744	2.1443	放射性炭素年代測定	古墳時代後期～古代	種実
5	4区	第5面 木サンプル	896	0.4902	放射性炭素年代測定	縄文時代？	生材
6	4区	第5面 木サンプル	896		樹種同定	縄文時代？	ネムノキ属

3 分析方法

(1) AMS 年代測定

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した（第24表）。¹⁴C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期:5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.2 (Bronk Ramsey, 2009)を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013)を利用した。

(2) 樹種同定結果

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2010）に従い作成した。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行い、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

4 分析結果

(1) AMS 年代測定結果

測定結果を第24表、第178、179図に示す。第25表には、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と3種類の年代を示している。

第 179 図では一覧形式で、資料ごとに確率分布と σ 、 2σ の較正範囲を示した。
得られた年代値は、全ての試料で推定時期と一致した。

第 24 表 分析試料の処理

試料 No.	種別	調査区	層位・遺構	種別	前処理	測定法
1	生材	3区	トレンチ2 土石流内	生材	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	AMS
2	生材	3区	トレンチ2 土石流下流路	生材	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	AMS
3	種実	4区	第2面 4058道路	種実	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	AMS
4	種実	4区	第4面 4221ピット	種実	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	AMS
5	生材	4区	第5面 木サンプル	生材	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	AMS

第 25 表 年代測定結果

試料 No.	測定No. (PLD)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代* ¹ (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	補正年代* ² (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正年代	
						1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	30708	-29.09 \pm 0.28	2932 \pm 23	2864 \pm 23	2865 \pm 25	BC1084 – 1064(9.9%) BC1059 – 997(58.3%)	BC1115 – 973(91.3%) BC957 – 940(4.1%)
2	30709	-27.49 \pm 0.17	4054 \pm 23	4012 \pm 23	4010 \pm 25	BC2569 – 2516(55.8%) BC2501 – 2489(12.4%)	BC2575 – 2475(95.4%)
3	30710	-27.51 \pm 0.21	743 \pm 20	701 \pm 20	700 \pm 20	AD1276 – 1292(68.2%)	AD1267 – 1300(90.3%) AD1370 – 1380(5.1%)
4	30711	-27.23 \pm 0.14	1458 \pm 20	1420 \pm 20	1420 \pm 20	AD617 – 649(68.2%)	AD601 – 656(95.4%)
5	30712	-26.99 \pm 0.14	5441 \pm 26	5407 \pm 26	5405 \pm 25	BC4327 – 4283(50.2%) BC4273 – 4256(18.0%)	BC4336 – 4234(95.4%)

*¹ $\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 *² $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代

(2) 樹種同定結果

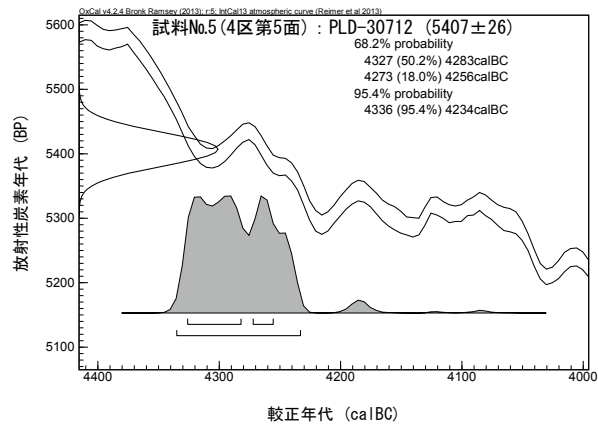
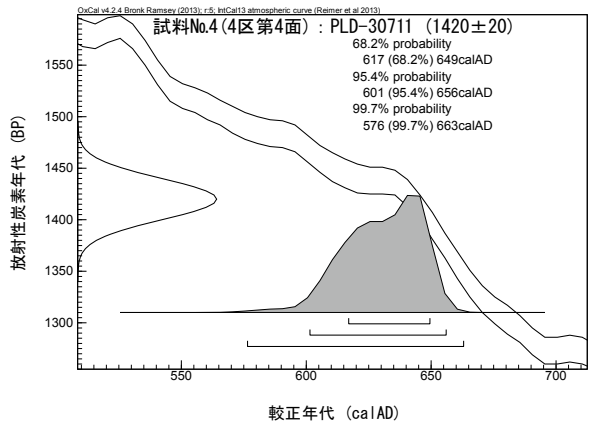
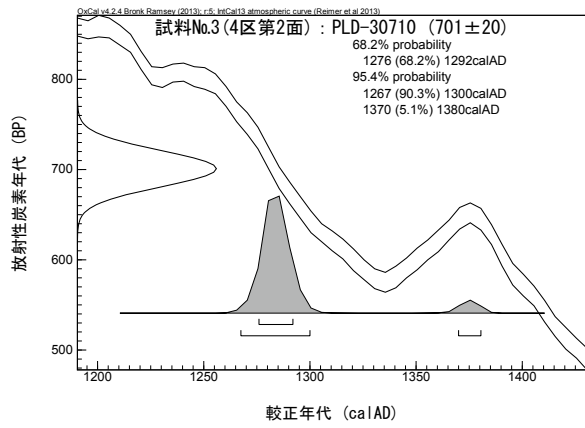
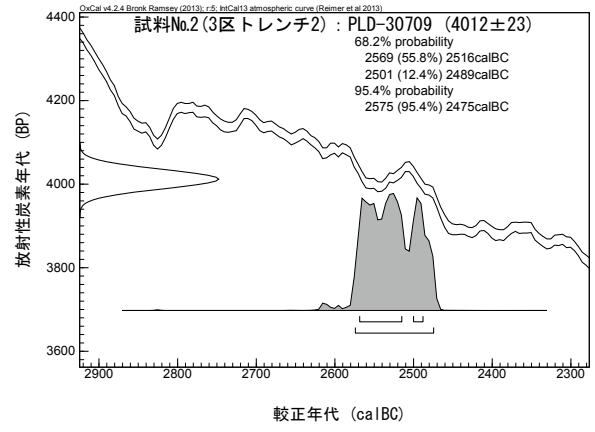
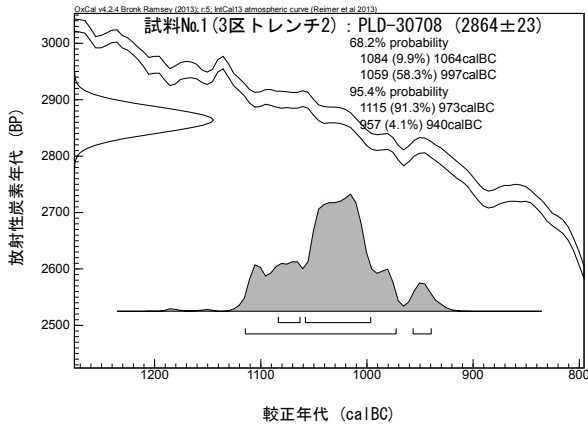
試料の記載と共に、顕微鏡写真を示す。

ネムノキ属 *Albizzia* sp.

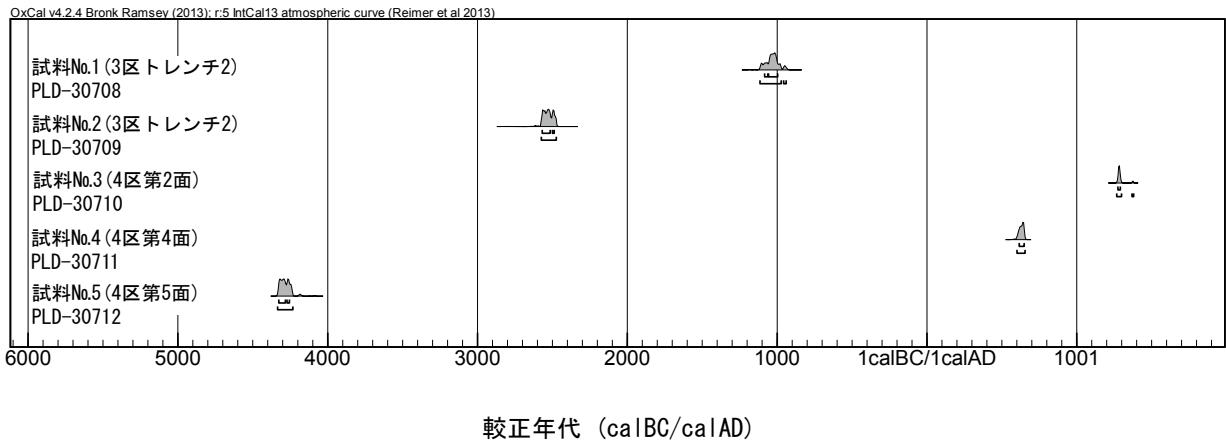
試料No.6 : 4区 (取上No.896) (W15121601)

記載: 年輪幅は狭く、大きい道管が単独ないし放射方向に2個複合して1~3列に配列する環孔材である。年輪の大部分を孔圏部が占めるため、孔圏外の幅は非常に狭く、小道管は少なく散在している。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースがよく発達しており、また一部の道管内腔に濃色の着色物質が存在している。軸方向柔組織は道管の周囲を厚く包む周囲状である。放射組織は同性で、1~3胞幅であり、高さの低い小型の紡錘形のものが目立つ。以上の組織上の特徴から、ネムノキ属と同定した。

第3節 高住宮ノ谷遺跡における放射性炭素年代測定および樹種同定結果



第178図 暦年較正結果



第179図 暦年較正年代値の分布

試料No. 6 (W15121601) : 4区第5面ネムノキ属 *Albizzia* sp.

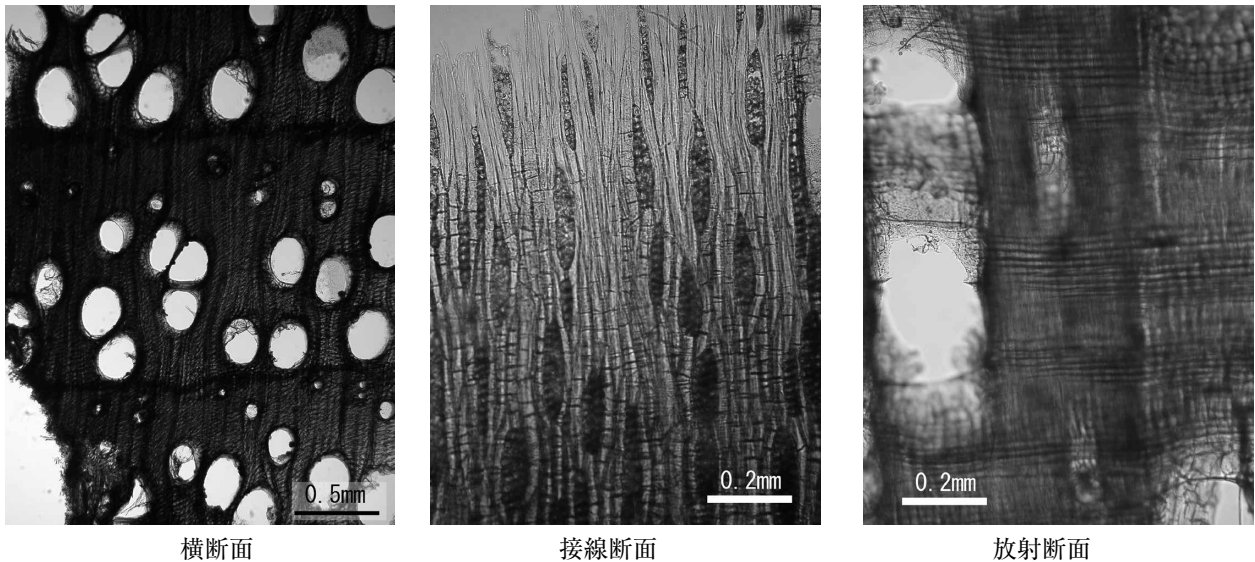


写真7 出土木材の光学顕微鏡写真(5)

引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.
- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学 - 出土木製品用材データベース -. 449p. 海青社, 滋賀.
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.
- 渡辺正巳 (2010) 木質遺物(埋没樹木) 樹種同定. 必携 考古資料の自然科学調査法, 194-198. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳・中川 寧 (2013) 山陰の木製品の樹種と植生について. 木製品から見た古代の暮らし, 37-48. 島根県古代文化センター.

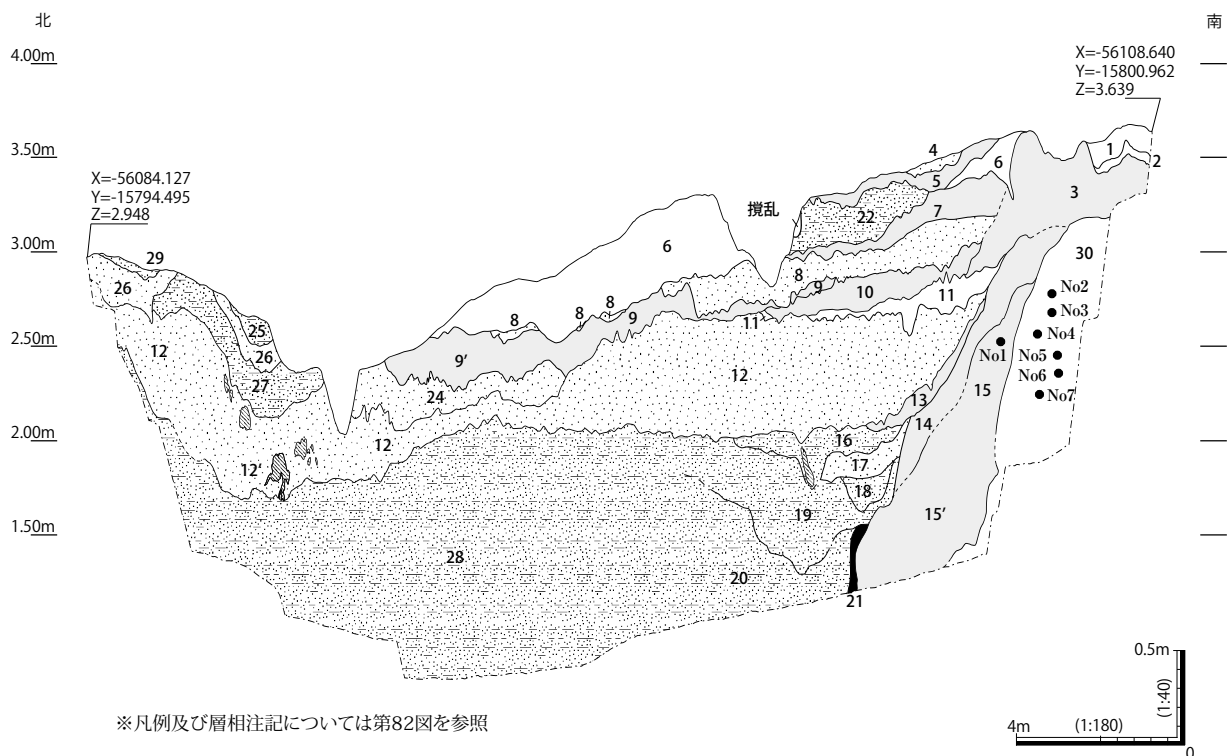
第4節 高住宮ノ谷遺跡にみられる堆積構造

村田 泰輔 (奈良文化財研究所)

1. はじめに

発掘調査地は、湖山池に流れ込む三山口川が形成した開析谷に連なる支谷の1つと、その背後の台地にあたる。遺跡としては縄文時代以降の遺物が出土しており、特に古墳時代後期（約1,500年前）～中世（約600年前）の遺物、遺構の出土が主体となっている。これは人間社会においてかなり長い時間経過を示しており、この場所が人間活動において何らかの要因で重要であり続けたことが推察される。一方で、地質時代としてはドラスティックな時期であり、ヴェルム氷期（最終氷期）の相対的 sea level 低位期に形成された旧三山口川の開析による急峻な谷地形の形成が、後氷期（完新世：約1万～1万3千年前）に入り海水準上昇に伴って急速に埋積され、さらに谷の内部まで進入していた日本海が、海退と現在の海岸線付近の砂堆の急激な拡大によって湖山池として取り残されていくという変遷を辿っている。この景観の大きな変貌に伴い、本地域を利用する目的や生業活動が変遷することは当然であるが、遺跡を取り巻く地形が、1) 比較的安定した地盤と乾燥地を得られる一方で、水資源の確保する工夫が必要となる台地、2) 地下水位が高く水涵養は容易だが、地盤としては軟弱で居住地としての活用は手間の掛かる氾濫原低地、3) 乾燥地が得られ容易に集水域となるが、常に浸食作用が働くために崩落の危険性をはらむ谷地形から成り立っている点に大きな変化はない。このことは、人が地形へどのように関わっていくかを、集落構成や背後の社会性、時代、道具や技術といった面から考える良い機会であり、単に遺跡のあるなしという問題に止まらない。

今回、発掘調査に関わる機会を得ることができ、平成27年度調査の3区トレンチ5における基盤地形形成層と考えられる偽礫混じりの30層とその直上に堆積する15層（第180図、PL.83～85）と、



第180図 3区(27年度)トレンチ5 地質切り出し試料位置

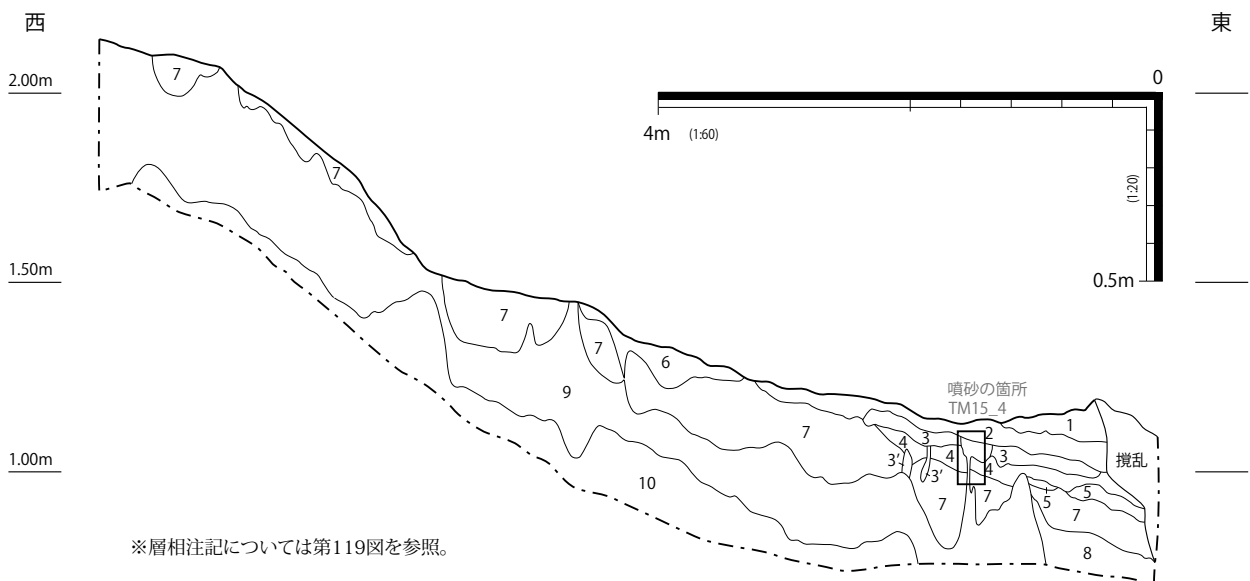
4区第5面東西トレンチにみられた地震痕跡（第181図、PL.86）について、切り取り試料を採取し堆積構造について検討した。

2. 試料と方法

3区トレンチ5西壁の南肩堆積物については、15層と直下の30層から連続的に7試料（第180図）、4区第5面東西トレンチにみられた地震痕跡については、第181図のとおり砂脈と噴砂が入るように1試料を、アクリル製の箱（14×22×4cm）を用いて切り出した。切り出しは、露頭壁面をクリーニングした後、水平軸を検出した上でアクリル製の箱を試料採取する露頭面に押しつけ、箱の周囲を削るようにして埋め込んでいく。埋め込み終わった試料は、土層断面図に採取位置を記録し、採取地点の壁面写真を採取した後、箱の側面から壁面の奥に向かってスコップを入れ、壁面奥の堆積物ごとまとめて箱を切り取る。切り取った試料は、余分な堆積物をナイフで削って成形し、堆積物の構造が壊れないように蓋をした。試料の番号については堆積層の上位から付けている。切り出した試料は奈良文化財研究所に送り、埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室にて層相観察をおこなった。その後、同センター保存修復科学研究所の有する卓上型 X線撮像装置 NX-1000（フジフィルム社製）により、イメージング・プレートを用いて撮像をおこなった。イメージング・プレートのスキャンには、同研究室の有する Fuji BAS Scanner 5000 を利用した。撮像の観察にあたっては、IMG データをフリーソフト Image-J 1.48v に ISAC Manager プラグインを搭載し JPG 形式に変換した後、Photoshop CS 5 にて露出および明るさ・コントラストを調整している。なお、試料の採取は、鳥取県教育文化財団・茶谷がおこない、層相観察、軟 X線撮像および堆積構造観察は奈文研・村田がおこなった。

3. 結果

試料全体として級化構造をもつ礫質泥からなり、火山砕屑物性の偽礫を多く含むことから、殆どが斜面崩落土であることが明らかとなった。PL.83～85は、模式断面図の他に、切り取り試料の層相



第181図 4区第5面東西トレンチ 地質切り出し試料位置

写真 (a)、軟X線撮像画像 (b)、さらに軟X線撮像画像へ構造解釈を加筆記載したもの (c) を掲載している。試料番号は層相写真の左下に記載している。また、構造解釈を加筆した軟X線撮像画像の右に、堆積構造から解釈される層区分を「試料番号+アルファベット」の形で上位より付記した。

観察内容について層上位より記す。1a層から1c層までは、植物根の貫進がみられ、同時に堆積物は土壌化し構造は不明瞭である。明黄灰色の火山碎屑物性の中礫程度までの偽礫が散在する。基質は褐色～暗褐色の砂質泥からなるが、偽礫と同質の火山碎屑物性の粒子が様々なサイズで基質内に散在している。軟X線画像では層下部に中～粗礫サイズの偽礫が集まるようにみられ、偽礫の風化による物と考えられるが、密度が低く形状が判然としない。1d層は暗褐色の砂質泥を基質とし、下部に明黄灰色の火山碎屑物性偽礫を多く含む上方級化の進む礫質泥である。この偽礫と成分を同じくする細礫～中礫が層の上位まで散在する。また1a～c層同様に基質内に様々なサイズで偽礫と同質の火山碎屑物性の粒子が散在している。底部の偽礫は1e層を浸食しており、2つの層の関係は不整合的であることがわかる。2a～d層は、1d層に比べ、全体として粒子組成が細かい。基質は暗灰褐色の僅かに礫の混じる砂質泥からなり、礫は細～粗礫サイズの火山碎屑物性の偽礫が大半を占める。各層の下部に偽礫が集中する傾向がみられ、その上部との分級が比較的良好であることから、トラクションカーペットによる堆積が進んだと考えられる。堆積層はやや南傾斜で不明瞭ながらラミナ構造を持ち、植物根跡や偽礫も流下方向に沿って伸びるように堆積している点特徴的である。3b～7g層は暗灰褐～灰褐色の礫混じり砂質泥を基質とし、細～粗礫サイズの火山碎屑物性の偽礫が大半を占める。各層の下底は下位層の上部を浸食しており、不整合関係であることが認められる。3b～4b層はやや分級が悪いが、各層共に上方級化構造がみられるため、トラクションカーペットによる堆積が進んだと考えられる。

4区第5面東西トレンチからは、地震動による液状化とそれに伴う噴砂の痕跡がみつかった (PL.86-1、2)。残念ながら切り取り試料では噴砂の一部のみが採取されているため、構造が判然としないが、PL.86-2で示した断面では明瞭である。下部の砂層 (9・10層) が液状化し、上部の暗灰褐～褐色泥層 (4・7層) を断ち割って噴き出している様子 (噴砂) が見える。4層堆積後に地震が発生し、噴砂が4層上面を削りながら覆うことで噴出部 (噴砂丘) と色調は異なるが、3層の砂層を形成したと考えられる。さらによく見ると、3層の砂を給源に上位の暗褐色泥層 (2層) および写真最上面の暗褐色泥 (1層?) を断ち割って貫進している様子が見られる。PL.86-1に示す切り取り試料についてみると、層相写真からは噴砂の一部が黄褐灰色砂として目を引くが、写真右手にも同質の砂層が下部の堆積物と混在し泥質化して堆積していることにも注意が必要である (8b層)。

4. 推定される堆積環境

堆積構造の観察から、斜面地の堆積物が浸食され崩落し、泥流が形成され流されて堆積している様相が何度も繰り返されていることがわかってきた。このような堆積は、雨水や雪解けなどの影響を強く受ける斜面地ではごく当たり前のことであるが、堆積場として不安定な場所を人間の活動拠点の1つとしてどのように選択していったのかをさらに検討する必要がある。地震痕跡については、噴砂が発生する基準として震度5弱以上の地震動が起こる必要があると一般的にいわれている。このような大規模地震が少なくとも2度、この地域で発生しているということは、今後の我々の生活においても重要な情報であり、今後も地震発生時期の特定や被災の広がりを検証する必要がある。

第Ⅵ章 総括

第1節 調査成果のまとめ

ここまでの報告文で記したとおり、2箇年にわたる発掘調査により、高住宮ノ谷遺跡は縄文時代早期から中世まで、幅広い期間にわたり人間の活動が行われたことが明らかとなった。中心となるのは古墳時代後期以降で、竪穴建物や掘立柱建物などを確認し、集落が営まれたことが判明した。

本章では調査の総括として、高住宮ノ谷遺跡の消長について時代を追って整理する。また、断面長方形柱の掘立柱建物1といった特異な遺構、あるいは舌状石製品、土製支脚、柿経などの珍しい遺物も確認されており、これらについてもその位置づけを検討する。これまでに行われた高住地区の調査成果のうち、当遺跡に隣接する高住平田遺跡の調査成果も合わせ、現三山口川左岸地域における人間の活動についてまとめる。

1 遺跡の消長（第182図）

（1）縄文時代～弥生時代

高住宮ノ谷遺跡で人間の活動が認められるのは早く、縄文時代早期にさかのぼる。

縄文時代早期の土器は、3区南側丘陵の北斜面裾の土壌化層上で出土した。押型文は楕円形で比較的細かく、確認できる限り内面は無文である。早期前葉の黄鳥式に比定できる。高住井手添遺跡のネガティブ楕円押型文に次ぎ、高住地区では最古級である。斜面裾から比較的まとまった状態で検出しており、斜面上方からの転落などの可能性が考えられる。このほか、縄文時代前期～後期にかけての土器片も南側丘陵部斜面や谷部の流路から出土している。口縁端部内側に粘土紐を貼り付け肥厚させ縄文を施し、口縁外面に沈線を施した土器は、中期に比定できる。また、石器も、石錘や石匙、石鏃といった製品以外に黒曜石の剥片や安山岩などの石核なども出土している。とくに、黒曜石の剥片も南側丘陵部斜面で出土している点が注目される。丘陵自体は完全に削平されているため、遺構は確認できなかったが、縄文時代をとおり、南側の丘陵部分に人々の活動の場があったことが想定できる。

なお、遺跡内からは円礫の両端を打ち欠いた打ち欠き石錘が6点出土している。北方に位置する湖山池で漁撈活動に勤しんだ、人々の活動の一端を示している。

弥生時代の遺物は数が少なく、土器（甕などの底部）、石庖丁や石斧類といった石器が若干見つかった程度である。また、弥生時代と考えられる遺構も確認できなかった。本遺跡は「高住銅鐸」出土推定地に隣接することもあり、関連する遺構の発見も期待されたが、当時遺跡範囲内での人々の活動は非常に低調であったといえよう。逆に言えば、人々が活動しない場所であったがゆえに銅鐸の埋納も行われたのであろう。

なお、包含層中からであるが、「舌状石製品」S29が出土している点が注目される。3区と2区の間張り出した小尾根の南斜面裾からの出土であり、その上方斜面は銅鐸出土推定地と目される場所の一つでもある。石製品自体については後述するが、仮に銅鐸の舌であったとすれば出土推定地の想定もある程度絞り込めることになる。

（2）古墳時代～古代

高住宮ノ谷遺跡で遺構が確認できたのは古墳時代後期～古代であるが、古墳時代前期～中期においても若干の出土品がある。

2区西部では二重口縁壺形土器の破片がまとまって検出された。破片を接合した結果、ほぼ完形品となったことから、一個体がここでつぶれて埋まったものと考えられる。周囲に掘り込みは確認されなかったため、包含層中に何らかの理由で埋まったと考えられるが、詳細な原因は不明である。古墳時代前期後半に位置づけられる。そのほか、2区西部谷部分で見つかった小型丸底壺や包含層中の土師器から、古墳時代前期後半～中期前半にわずかながら人々の活動があったことがわかる。なお、西側丘陵上にある高住宮ノ谷古墳群では古墳時代前期前半と推定される方墳（1号墳）が見つまっている（鳥取市文化財団2016）。これ以外の古墳の築造時期は明らかではないが、こうした古墳群との関連も考えられよう。

古墳時代後期～古代は、当遺跡での人々の活動が最も活発になる時期である。

東に開口する小さな谷を挟んだ南北の丘陵裾部では、掘立柱建物と竪穴建物による集落を確認した。南側丘陵部は竪穴建物2棟が切り合っている。北側では丘陵裾部分の上位に後述する断面長方形柱を持つ大型掘立柱建物が、下位に竪穴建物と掘立柱建物が存在する。南側の竪穴建物群は3区竪穴建物2が6世紀後半に建てられ、その廃絶後間もなく7世紀前半に竪穴建物1が建てられたと考えられる。北側の竪穴建物群は攪乱によってプランがはっきりしない部分も多く、時期を示す遺物も少ないが、概ね6世紀後半から7世紀にかけて建てられたものと考えられる。なお、それぞれ、建物の方位が似かよっており、位置をずらして同様の時期に建て替えている可能性も考えられる。

大型建物の2区掘立柱建物1は丘陵斜面裾近くに建立され、斜面裾には溝が掘られて区画される。重複して多数の柱穴・ピットがあり、プランを復元することはできなかったが、同じような場所に繰り返し建物が建てられたのであろう。おそらく、生産の場ともなる平野に臨む丘陵裾部分は、人々が生活する空間として利用され、その中でも2区東端の丘陵上は重要な場所であったと推定できる。

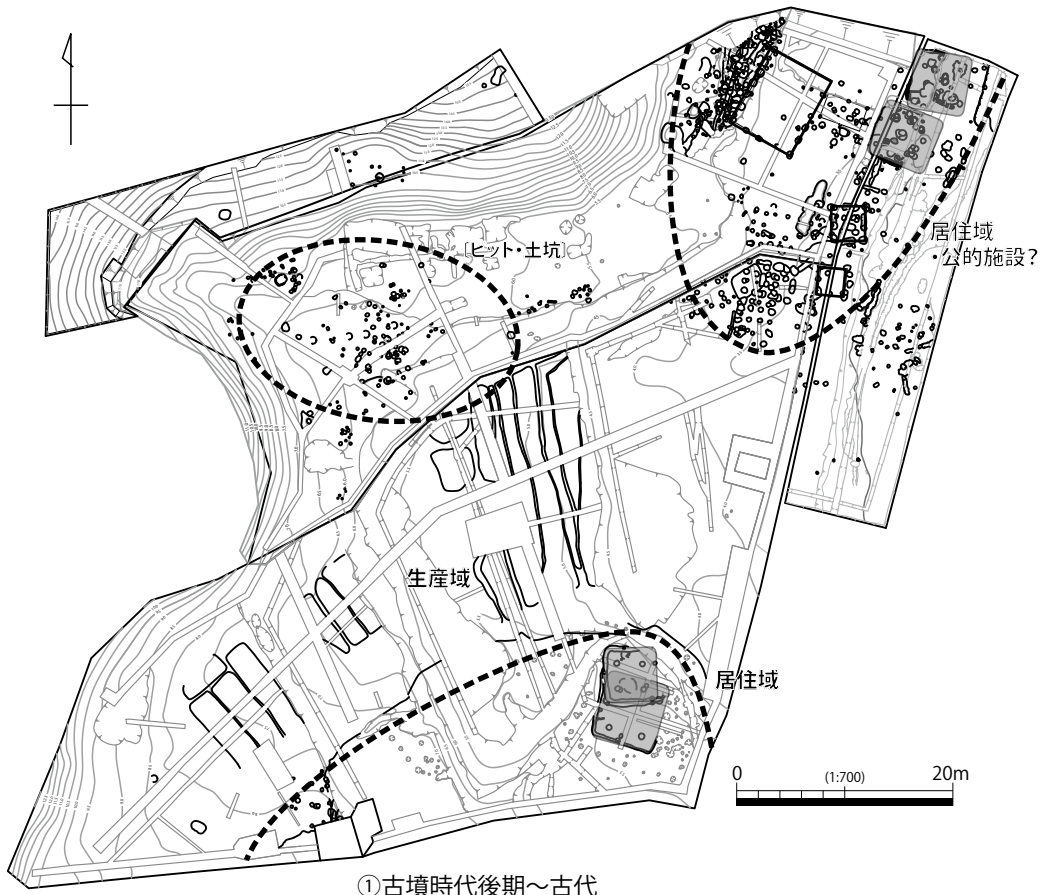
さらに、この部分では炉跡や鞆羽口が出土している。掘立柱建物などより後出するもので、おそらく古代末～中世にかけてのものと考えられる。鉄滓も若干ではあるが見つまっているほか、砥石も遺跡内から比較的多く出土している。おそらく小規模な鍛冶作業が行われていたのであろう。

遺構だけでなく遺物も多く、包含層中からは多くの土師器、須恵器が出土した。古墳時代後期から平安時代まで時期幅は広い。また、木製品は、時期は明らかでないものがほとんどだが、馬形や人形といった木製祭祀具も見つかっている。須恵質の土馬やミニチュア土器なども出土しており、祭祀が行われた時期もあったのだろう。後述するように、移動式かまどや土製支脚が多数確認でき、人々が継続して生活を営んだ状況が確認できる。明確に遺構が確認できなかった奈良～平安時代にも人々の活動が確認でき、後述するような漆を用いた作業、墨書土器の存在に示される識字層の居住など、丘陵を越えた西側の良田平田遺跡とよく似た状況が確認でき、湖山池南岸地域における古代の様相が明らかになった。

なお、直接遺構と関係ないが、遺跡からは古墳時代と推定できる碧玉製勾玉・管玉なども見つまっている。管玉の1点は、孔が貫通せず仕上げ研磨もしていない未成品であり、玉砥石の可能性もあるS63も出土していることから、遺跡の周辺で玉作りが行われていた可能性も考えられる。

(3) 中世以降

中世では、丘陵裾の谷底平野との境部分で道路跡を確認した。これについては後述するが、溝の重



第182図 高住宮ノ谷遺跡の変遷

複状況から、長期間にわたって使用されたと考えられる。出土遺物や埋土出土の種実の年代測定結果から、13世紀後半には廃絶したと考えられる。当遺跡の南方には山陰道の通過想定地でもある東西方向の谷があり、湖山池とこの交通路を結ぶ、重要な路線の一つであったことが推定される。また、661土坑から「こけら経」が出土しており、近隣に寺院関係が存在したことが推定される。

また、中世以降は、現在に至るまで3区谷部を中心に水田として利用されていた。谷部の傾斜を利用し、谷筋に直交する方向に畦畔を設け、棚田状の水田を形成するものであった。時期を示す良好な遺物は存在しないが、その初源は古代にまで遡るかもしれない。

このほか、中世の遺物として、茶臼や滑石製石鍋の存在も注目される。どちらも一般の集落ではあまり出土しないものである。茶臼が出土することが多いのは寺院や城館などであり、こけら経の存在からすると、やはり近隣に寺院などが存在したのであろうか。また、滑石製石鍋は、県内では地域の中心となる遺跡や交通の要衝などの遺跡で出土することが多く、道路との関わりが考えられる。この他に、中世に比定できる明確な遺構は確認できていないが、多数検出したピットが建物に伴うものの可能性がある。

2 遺構について

(1) 長方形柱掘立柱建物

2区掘立柱建物1は、東部丘陵部分で確認した6間×4間の掘立柱建物である。桁行7.8m、梁行6.0mの比較的大型の建物に復元できる。

西辺で柱が残っており、もともと樹立された柱は1本を除き断面長方形の柱（五平柱）であった。柱間は、桁行1.1～1.4mで南北両端がやや広く、中央4間分はほぼ同じ柱間であった。また、梁行は若干広く1.5～1.6mとおおむね等間隔である。柱掘り方は直径0.5～0.9mのほぼ円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは残存良好なもので最大0.9mを測る。上面が削平されていることを考えると、もう少し深かった可能性が考えられる。

柱根は概ね同じ寸法で、最大幅約0.25m、厚さ0.1m、最も残りのよいもので最大0.7mが残存する。柱材は全てスギで、木取りは全て板目であり、木目から推定すると比較的大径の材から割り出している。柱の側縁には三角形の抉りが入れられたものがある。位置はまちまちであるが、縄掛けとして加工した可能性が考えられる。さらに、掘方底から木片を検出したものもあり、樹立の際に若干の加工が行われた可能性がある。

柱は全て掘方東側に偏って検出されている。柱の根元を掘方に合わせ、上部を谷側に引き起こして柱を樹立したことが想定できる。このような立て方を行ったこと、周辺にあるピット類より比較的深い掘り方を持つことからすると、上部もそれに見合う長さがあった可能性が考えられる。注目されるのは、残存した柱根のほとんどで、長辺が建物の主軸に対して北側にねじれていたことである。その角度も大体同じであり、何らかの営為により同様に動いた可能性が考えられる。一方、柱自体に鉛直に対する傾きは認められない。もともとねじれて樹立していた事も想定しうる。

掘立柱建物1同様、断面長方形の柱を用いた掘立柱建物として、静岡県小黒遺跡（静岡県教育委員会1996）、石川県平面梯川遺跡（石川県埋蔵文化財保存協会1995）、福井県府中石田遺跡（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2011）、滋賀県針江川北遺跡（滋賀県教育委員会ほか1993）、奈良県藤原宮跡下層（奈良国立文化財研究所1985）、同西大寺東遺跡（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

2006、桜井市文化財協会 2011)、同西隆寺旧境内(奈良市教育委員会 2001)、同極楽寺ヒビキ遺跡(奈良県立橿原考古学研究所 2007)、島根県出雲国府下層(角田 2008)などが知られる。弥生時代後期～古墳時代中期までのものが多いが、古墳時代後期にも認められる。このうち、極楽寺ヒビキ遺跡例は2間×2間の母屋の四面に庇をもつ建物で、母屋の柱配置は近辺の室宮山古墳後円部頂で出土した特殊な家形埴輪との類似が指摘されている(奈良県立橿原考古学研究所 2007)。その他の場合も、大型建物である場合が多く、祭殿など特殊な用途の可能性が考えられている。

一方、府中石田遺跡では、柱根が残存していたものの多くが単なる丸木柱ではなく、半裁したものや、断面長方形もしくは方形で角を面取りするものがあるなど、かなり加工された柱を持っていたことが確認されている。単一の断面形の柱を用いるものよりも、混在するものの方が多くなっている。この事例は弥生時代後期に位置づけられている。残存しにくい柱を考える上で重要であり、当時から単なる丸木柱ではなく、いろいろな柱材を用いていたことを示唆する。古墳時代の断面長方形の柱を用いた事例は、基本的に同じ断面形の柱を用いており、構造や建て方の点で集約が進んだのであろう。なお、平面梯川遺跡でも断面長方形の柱を用いた掘立柱建物が複数棟見つかっており、日本海沿岸の地域性の可能性も考えられ興味深い。

当遺跡の掘立柱建物1も大型の部類に入るものである。構造としては、梁行が6mにもなるにもかかわらず、建物内部に柱が存在しない点が注目される。柱穴が削平された可能性もあるが、梁行の柱穴が残っていることからすると、もともと存在しなかった可能性が高い。そうすると、柱上に掛けられた6mの梁で建物の上屋を支えることになり、その構造故に柱がねじれた可能性も考えうる。

なお、報告で述べたとおり(56、65頁)、この掘立柱建物の西側にある560溝は建物に伴う雨落溝などの可能性が考えられる。さらに西側1.5m程は柱穴・ピットが密集しているが、西側の524溝以西は遺構がほとんど見られない。削平を受けている可能性も考えられるが、ここから西は斜面となっており、元々遺構がなかった可能性が高い。したがって、この建物は丘陵裾を段状に加工し、その平坦面の最奥に建立されたことになり、前面のみが開けた立地となる点も特殊といえる。

(2) 竪穴建物と廃絶時の儀礼

南側丘陵部先端で検出した竪穴建物1は、中央に地床炉が存在し、古い炉を壊して新たに炉を設けていた。炉は中央が若干凹み、内部には大量の炭化物が混入する、灰色シルト層が存在した。その上を覆うように土師器甕(第133図133、134)を検出したのである。133は大きく10片に割られる。口縁部を含む破片は、口縁が外側となることを意図したように並べられ、隙間や周囲に胴部や底部の破片を並べる。意図的に甕を割り、炉を覆うように基本的に口縁が外方となるように並べたと考えられる。133は底部を欠くが、その他の部位はほぼ完全に揃っている。もともと底部を欠いた甕を割ったのか、割った際に底部のみを並べなかったのかは定かではないが、いずれにしても、炉を甕の破片で完全に覆うことを意図していたことは間違いない。なお、炭化物が多量に混じる灰色シルト層は炉の周囲にも広がっていた。灰色シルト層は灰に由来するものと考えられる。したがって、炉の内部には炭と灰が混じったものが入った状態であったと考えられ、火を焚いた後の灰と炭をかき集めてその上に甕を割って配置したのかもしれない。

この竪穴建物は、埋土中から古墳時代後期～古代の土師器、須恵器の小片が見つかっているものの、床面直上からはほとんど遺物が出土していない。わずかに土師器甕や須恵器杯、短頸壺、移動式かま

どや土製支脚が種類の分かるものである。また、床面や埋土下層から、円柱状土玉が数点見つまっている。いずれにしても、数量は非常に少ない。炉は深さ5cm程度まで熱を受けているほか、炉自体も作り替えが行われており、比較的長期間、住居として使用されたと想定される。そのような建物にしては生活に伴う器物がほとんど残されていないことから、建物廃絶時に床面の片付けが行われた可能性が考えられる。この竪穴建物は柱穴に柱根が残り、貼床面には柱の痕跡のみが残っていたことから、廃絶時には柱が立った状態、もしくは地上で切られた状態であった。さらに、土器群に攪乱がないこと、埋土に人為的な埋め戻しの痕跡がみられないことからすると、建物上屋の取り壊しは行われず、そのままの状態で放棄され、腐朽していったのであろう。

床面に遺物を残さないように片付けながら、炉のみを土器で覆っていることは注目される。建物廃絶時に、炉を意図的に割った甕で覆い、何らかの儀礼が行われた可能性が考えられる。炉で使用した道具を破壊し、それで炉自体を覆う行為にいかなる意味があったのかは推測するほかないが、火床を覆うことから、火（と火に象徴される神的なもの）に対する意識が感じられる。その意味については、類例が管見の限り存在しない現状では明らかにしづらいが、参考となるのは古墳時代～古代に山陰など一部を除き一般的な、「造り付けかまど」に対する儀礼であろう。例えば、造り付けかまどでは、廃絶時にかまどを解体することがある。あるいは、完形の土器を伏せて置く、祭祀具などをばらまく、土器を破碎する、など、様々な行為が行われる（寺沢1992）。かまど（神）を「送る」あるいは「封じる」などの意味で捉えられることの多いこうした行為と、今回確認した土器の状況には共通性も認められ、やはり、火（の神）を送る、あるいは封じるといった意図を読み取ることも可能である。とはいえ、因幡・伯耆では同時期の竪穴建物があまり知られていないが、その中でも同様の事例が確認出来ないことから、少なくとも、建物廃絶時に行われる一般的な行為ではなく、何らかの異例の事態であった可能性を考えてもよい。これ以上は空想の世界になってしまうので避けたいが、いずれにしても非常に興味深い事例である。

山陰においては、この時期の竪穴建物に造り付けかまどが認められる地域は石見の山間部など少なく、因幡・伯耆においてはこれまで確認されていない¹⁾。それまでと同様、地床炉が検出されるのみで、移動式かまどや土製支脚を用いる場合が多い。これらについては第2節で検討するが、地域性として認められる。

(3) 道路遺構

4区で確認した4058道路は、出土遺物やその年代測定結果（第5章第3節）から中世のものと考えられる。

道路は4区中央付近の谷の出口部分で地形に沿うようにカーブしている。東側の高住平田遺跡では道路の延長部分が確認されていないが、同遺跡部分は一段低くなっており、圃場整備などで削平されてしまったのであろう。道路跡の両側で確認した溝は、少なくとも4本が重複しており、比較的長期間にわたり使用されたと考えられる。廃絶時期は13世紀後半ということで、より古くから道路として使用されたとみてよい。なお、この溝底には波板状凹凸に類する楕円形の凹みが連続する部位があり、部分的にこの溝内に足跡（おそらく偶蹄目）も確認できたことから、道路の側溝であるとともに、この部位が通路として機能していたことも考えられる。

伯耆地域（鳥取県中西部）では古代～中世の道路跡が比較的多く見つまっているが、その検討によ

れば道路跡にみられる波板状凹凸面にはいくつかの類型がある（川部 2012）。当遺跡で見つかったものは B-1 類型、すなわち布掘り状に掘削された幅狭の溝幅すべてに、瓢箪形単位を基調とした凹面が等間隔で配置するもの、に該当する。因幡地域（鳥取県東部）においては、近年、山陰道と考えられる道路跡が鳥取市青谷町青谷上寺地遺跡や同青谷横木遺跡で確認されたほかは、鳥取市気高町上原遺跡、同本高弓ノ木遺跡で道路跡が検出されているだけである（坂本 2016）。調査事例の稀少なこの地域における貴重な事例となった。

4058 道路西側には、現市道の前身となる近世以降の道路跡が一段高く残っている。この道路は近世丈量図にも見られるが、4 区中央で若干屈曲するものの直線的である。緩やかにカーブする 4058 道路とは異なるが、屈曲部位が谷の出口部分であるなど地形に概ね沿っている点は共通する。4058 道路はこれに先立つ道路跡と考えて良いだろう。当遺跡の南約 1 km には、広域農道が東西方向に走っており、現市道は湖山池と広域農道をつなぐ重要な交通路となっている。この広域農道が走る谷は古代山陰道の路線が推定されている（金田ほか編 2009）。実際に山陰道が築造されていたかはともかく、仮に湖山池岸を通らずに南方の丘陵地帯で東西を結ぶ道路を構築するとすれば、この谷が最適である。この東西方向の谷に当時の道路を想定すれば、今回確認した道路跡は現市道同様、湖山池と道路を結ぶ交通路として利用されたと考えられる。

第 2 節 遺物について

1 舌状石製品

3 区の谷奥から、「舌状石製品」（第 58 図 S29）が出土した。出土したのは丘陵斜面裾の包含層であり（第 74 図）、遺構からは遊離した状態である。全長 5.2cm、最大径 1.9cm の棒状の石製品で、頭部に直径 0.2cm の小さな穿孔が存在する。穿孔方向の側面の一部のみ若干凹んでいる。重量は 24.4g である。孔に糸を通して使用したものであったと考えられるが、孔の周囲に摩滅等は認められない。本資料の用途を考える上で、当遺跡はかつて出土した「高住銅鐸」の出土推定地の一つでもあり、鳴らすための「舌」との関連が想起される。

「高住銅鐸」が出土した場所ははっきりせず、鳥取市高住字「宮ノ谷」の、北野神社南側の谷の南斜面とされる。今回の調査範囲とその周辺が最も可能性が高い場所である。「舌状石製品」が出土したのは 2 区と 3 区の間で谷に向けて小さく張り出す尾根の南斜面裾部分であるが、この尾根も銅鐸出土推定地の一つである。また、この石製品の側面の凹んだ部分は、削り取られたものではなく、何らかの物体が幾度となくぶつかって形成されたものと推定される。以上のような状況から、高住銅鐸の石製舌であった可能性は考えうる。

一方、銅鐸の舌とするには疑問も残る。1 点目はやや小型であることである。服部信博によれば、2002 年の時点で全国の 27 遺跡で 37 例の銅鐸舌および舌状製品が出土している（服部 2002）。このうち、石製品は 24 点であり、本資料と同じく、頭部両面を薄くなるよう加工して穿孔する 1b 類は 11 例知られる。全長 5.3～11.7cm、最大幅 1.3～2.2cm で、ほとんどが弥生時代後期に位置づけられる。本資料は 5.2cm であり、これまで知られている中で最小である。2 点目は、孔が小さく周囲に摩滅が見られないこと、胴部の凹みが一箇所だけしか存在しない点である。銅鐸内部に紐で吊り下げられたとすれば、様々な場所でぶつかることが想定され、一箇所のみでぶつかることは考えにくい。また、

胴部が凹むほど使用したとすれば当然孔の周囲も摩滅することが想定されるが、そのような痕跡は認められない。したがって、実際に銅鐸の舌として使用したとは考えにくい側面もある。凹みについては別の成因を考える必要もあろう。

なお、鳥取県青谷上寺地遺跡では、同様の形態で全長が7～8cmと若干長い石製品が5点出土している（河合編 2012）。一つの遺跡での出土としては最多であり、使用痕もみられず、すべてが銅鐸の舌とするには多すぎる。同遺跡の報告では有孔石錘に分類されており、漁労具としてのおもりが想定されている。本資料もその可能性を考えておかねばならない。

2 土製支脚・移動式かまど

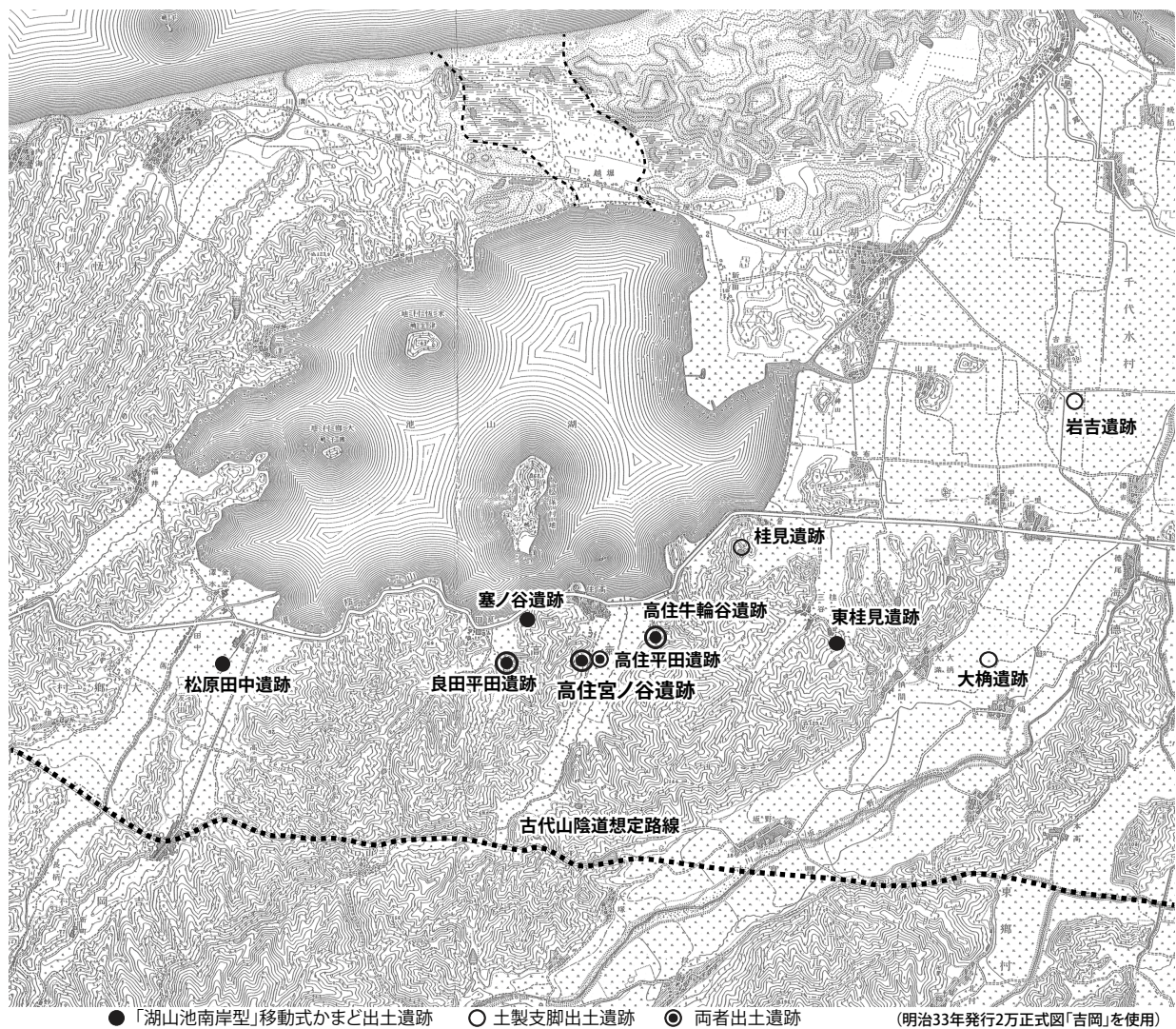
2～4区から土製支脚が多く見つかった。完形に近いものは1点のみで、多くが破片となっていたが、図化していないものを含め20点以上の存在を確認した。近隣の良田平田遺跡でも同程度の個体数が確認されており、比較的まとまった良好な資料となっている。

土製支脚はこれまで、鳥取県東部（因幡地域）ではほとんど見つかっていなかった。さらに、造り付けかまどが全く見られない地域でもある。ゆえに、この地域は、移動式かまどを主に使用して煮炊きを行う地域とされてきた（岩橋 2003、2010 など）。しかしながら、近年の鳥取西道路の建設に伴う発掘調査で、湖山池南岸～旧気高郡にかけての地域で土製支脚が数多く出土し、移動式かまどだけでなく土製支脚も煮炊きに使用されていたことが分かってきた。分布域の拡大は、今回の調査の大きな成果と言える。本遺跡で出土した土製支脚は、中実の体部で頭部の2方向突起の反対側にも突起があるもので、岩橋の分類でⅡA類にあたるものである²⁾。一方、良田平田遺跡の支脚は体部に非貫通孔を有するⅠC類であり、近接地でありながら形態が異なっていることは注目できる。

ⅡA類は出雲東部を中心に、伯耆西部まで分布している形態である。一方、ⅠC類は出雲西部を中心に分布する。また、伯耆東部～因幡西部にかけては中空のⅢC類が分布しており、地域的特色となっている。当遺跡を中心とする湖山池南岸地域で土製支脚が多数出土したことについては、濃密に分布する出雲や伯耆西部との関係を考慮する必要があるかもしれない。そのように考えた場合、伯耆東部の状況を考えると陸路よりも海を介した関係を想定することができよう。ただし、鳥取県東部では古墳時代後期～古代にかけての集落の調査事例が少なく、近年の調査はたまたま当時の集落に当たっているだけの可能性もある。周辺の遺跡の状況から、古墳時代後期～古代の集落は、平野部ではなく丘陵裾の緩斜面や小さな谷部に主に営まれていたと推測できることから、今後こうした場所の調査が進めば支脚の分布状況が変わってくることも予想される。

ところで、2区西部を中心に、移動式かまどの破片がまとまって見つかった。西部で4個体、東部上段で2個体分がまとまって見つかったほか、竪穴建物からも出土しており、破片も合わせれば10個体以上は優に存在したであろう。遺構に伴うものは少ないが、破片がまとまっていることから、使用や保管に関する何らかの状況を反映している可能性も考えられる。

これらの移動式かまどについては、確認できたもの全てが、焚口に寄せて側面にやや小型の付属かまどを作り付ける、「付属かまど付移動式かまど」であったことは注目される。この特異な移動式かまどは、当遺跡と平野を挟んで反対側の丘陵部にある高住牛輪谷遺跡で初めて報告されたものである（鳥取県教育委員会 2014）が、近年の鳥取西道路建設に伴う調査により、良田平田遺跡（鳥取県教育委員会 2014）、東桂見遺跡（鳥取市文化財団 2015）でも出土が報告されたほか、当遺跡に隣接する



第 183 図 土製支脚・湖山池南岸型移動式かまどの出土状況

高住平田遺跡でも出土していたことが確認できた（鳥取県教育委員会 2012）。さらに、近隣の塞ノ谷遺跡³⁾、松原田中遺跡⁴⁾でも出土するなど、湖山池南岸地域のみならず分布する事が判明した。最初に発見された高住牛輪谷遺跡でも、平成 26・27 年度の調査でさらに多数の付属かまど付移動式かまどが見つかっており⁵⁾、分布の中心は高住地域にあるようだ。湖山池南岸地域以外では存在が確認できず、ひとまず「湖山池南岸型」移動式かまどと仮称したい。

湖山池南岸型移動式かまどは、本体の側面に開口部を開け、やや小型の付属部を造り付ける点が最大にして唯一の特徴である。掛口の形態は、土師器甕のように「く」字状に屈曲させるもの、やや外反させるもの、直線的に終わるものなど、この時期の移動式かまどに見られるものと大差はなく、付属部がなければ山陰で一般的な移動式かまどの範疇にある（加藤 2005）。

なお、付属部は焚口に向かって本体右側につくものが大半であるが、左側につくと考えられるもの（第 151 図 327）も確認した。また、これまで確認されたものと同様、付属部上縁に小突起が付けられるもの、同内面に突起が付けられるもののほか、上縁突起と内面突起の両者を備えたものも確認でき、いくつかの型式に分類することも可能である⁶⁾。これらの分類については、この地域の遺跡の調査成果の整理がついてから改めて考えてみたい。

土製支脚と移動式かまどはいずれも煮炊きに使用するものであり、同様の用途に使用されたもので

ある。土製支脚は甕を下支えするか、地床炉においた甕を横から支える使用状況が想定できる。一方、移動式かまどは掛口に甕を載せ、内部で火を焚いて使用する。

当遺跡で見つかった土製支脚と移動式かまどを観察したところ、移動式かまどにおいては内面や焚口周囲の庇にはススがこびりつく、あるいは被熱による赤変もしくは表面の剥離なども認められ、繰り返しでの使用が想定される。なお、付属部は被熱が弱く、煤の付着も本体ほどではない。土製支脚は、完形に近いD25を見ると、前方に2本つきだした突起や基部前面には被熱による赤変が見られるが、煤の付着はほとんどない。破片を見ても、被熱は見られるものの煤は顕著でなく、被熱も先端など限られた部位である。直接的な炎を受けない使用状況、すなわち横から甕を支える使用方法の蓋然性が高い。その場合も、熾火など煤が生じにくい熱源であったことも想定できる。

3区竪穴建物1では、埋土中ではあるが移動式かまどと土製支脚の破片がともに出土している。この建物の中央にはわずかに凹んだ地床炉が存在していた。炉は新旧2個が重複していたが、建物内の火処はこれ1箇所のみである。新旧どちらも比較的長期間火を焚いたと考えられる。炉は不整形だが、直径にすれば40cm程度であり、移動式かまどの大きさとも概ね合致する。

移動式かまどは、通常の煮炊きではなく、祭祀時の煮炊きに用いた可能性が指摘される（稲田1978）が、こと造り付けかまどが存在しない山陰においては当てはまらない可能性が高い。移動式かまどと土製支脚も、その熱源や使用方法に差があるとすれば、調理内容の差などの可能性も考えられる。

3 墨書土器・漆関連資料

当遺跡では、5点の墨書土器が出土した（第144図）。判読できなかったものや小片となっており文字が不明なものもある。

208は須恵器杯底部で、「深縁」と書かれたものである。体部は全て欠損しており、意図的に打ち欠かれた可能性も考えられる。「深縁」は隣接する高住平田遺跡でも2点出土しているほか、良田平田遺跡でも1点出土している。なお、210も「深縁」の一部の可能性が考えられる。209は半分を欠損しておりはっきりしないが、上の字は「高」の右半分の可能性が高い。「高□」とすると、当地の大字である高住、郡名の高草、荘園名の高庭などが思い当たる。やはり高住平田遺跡からも「高」の墨書土器が出土している。墨書土器の時期は、207が8世紀末～9世紀前半、208、209が8世紀～9世紀代に位置づけられる。高住平田遺跡の墨書は9世紀、良田平田遺跡も9世紀後半に位置づけられ、概ね同時期のものである。「深縁」の意味は不明だが、別々の場所から出土していることから、地名などの固有名詞である可能性が考えられる。

文字に関わる資料として、転用硯と考えられるものが6点出土している。うち2点は後述する漆書記号が存在する。これ以外に硯は存在しないこともあり、常時文書事務などは行われていたわけではなかったのだろう。

漆関連の土器は15点を確認した。このうち、破断面に漆が付着した長頸壺（第126図86）については、漆を接着剤として補修に用いたものである。整理作業で接合した破片も破面に漆が付着しており、接着剤としての用途が確認できる。同様に漆を接着剤として用いたものとして224があり、どちらも壺である点が共通する。また、223は高杯杯部～脚部の破片であるが、器表内外面に漆が塗布される。全面に漆が塗られた高杯であったのだろう。さらに、注目されるのは杯部の破断面にも厚く漆

が付着する点である。この破断面に塗布した漆は表面に塗布したものより色が濃く、性質が若干異なっているように見受けられる。補修に際して接着剤として塗られたにしては厚く、表面も剥離はわずかで大半が塗られたままの面となっている。接着剤以外の用途として塗られた可能性も考えられる。

216のように内面に厚く漆が付着するものは漆容器と考えられる。これは甕であるが、孔の内面にもわずかに漆が認められる。おそらく栓などで塞いで使用したのであろう。襞状を呈する漆膜表面の状況から、容器に入れた漆の表面が固まってしまっていた可能性が考えられる。破断面にも漆が連続して付着しており、最後に容器を割って残った漆を使用したのであろう。また、蓋の内面に厚く塗られたように漆膜が認められる 217、218 などについては、漆パレットとしての使用が考えられる。

漆容器、漆パレットの存在からすると、漆を用いた何らかの作業が、遺跡内もしくはその周辺で行われた可能性が高い。これと関連するものとして、「×」の漆書記号の存在も特筆される。当遺跡での出土は3点であるが、隣接する高住平田遺跡では「×」を含む漆書記号の土器が7点見つかり、うち5点は「×」である。これらは一体のものとして捉える必要がある。当遺跡のものは蓋が2点、身か蓋か判別できないものが1点で、蓋のものは天井部中心からやや外れた場所に「×」が書かれている。当遺跡で見つかった漆書記号、漆容器、漆パレットは7世紀前半～後半にかけてのものがほとんどである。また、高住平田遺跡からは漆容器やパレットなど、作業にかかる遺物は発見されておらず、時期も7世紀後半～8世紀前半とほぼ重なることから、当遺跡内で付された可能性が高い。

良田平田遺跡でも7世紀末～8世紀前半にかけての時期の漆容器・パレットなどが見つかり、遺跡内で漆を用いた作業が行われたことが判明している。当遺跡も概ね同様の作業が行われていたと考えられ、この時期に、こうした集落内で自給自足的に漆を用いた作業が比較的普遍的に行われた可能性も考えられる。

4 こけら経

2区 661 土坑から出土したこけら経 W51 は、県内初の出土である。

661 土坑は、2区と3区の間で西から張り出す尾根の突端に掘られた土坑で、東の低位側に341溝が取り付く。溝が流出する部分には差し渡し0.6mの巨礫2個をならべていたほか、2mにわたり最大3段程度角礫を積み重ねていた。調査時にも常時水が湧いており、もともと水溜として使用されたものであろう。なお、2区東部上段で確認した640土坑も尾根の先端直下に穿たれた土坑で、低位側に多数の礫が散在し、溝が取り付いていた。この土坑は出土した有機物の年代測定により、中世(15世紀後半)の年代が得られている。同様の立地の661土坑もおおむね同時期と推定される。

こけら経は、上部を欠損する。書かれているのは法華経卷二譬喩品第三の偈の部分で、本来は「(住於四衢)坐師子座 而自慶言 我今快樂」と書かれていたものだが、行頭4字を欠損する。復元全長28cm、幅1.8cmで、文字はその上半のみに書かれる。

こけら経本体は厚さ1mmにも満たず、非常に薄い。こうした薄いこけら経については、台匏による製作が想定されている(藤原2006、山本2007)。台匏自体は中国から中世に伝わったものであり、一般に使用されるようになるのは室町時代後半になってからである。前述のとおり、出土遺構は中世と想定されるため、こけら経の年代観とも矛盾しない。

こけら経は死者への供養などとして書写されたもので、寺院に奉納したり、儀式の後に水に流したりしたものである。全国の出土例と寺院などからの発見例を含めると110例以上が知られるが、県内

では初めての出土である。中世の信仰を知る貴重な資料といえる。

近隣に中世寺院の存在は知られていないが、当遺跡の北側、北野神社のある丘陵北側の谷は、「字寺谷」であり、中世段階で寺院等が存在した可能性も考えられる。

第3節 高住地区西半（高住宮ノ谷遺跡、高住平田遺跡）における土地利用の変遷

高住地区の三山口川下流域に形成された谷底平野～丘陵裾部において、鳥取西道路の建設に伴う発掘調査は平成22年度から足かけ6年にわたり行われてきた。東から高住牛輪谷遺跡、高住井手添遺跡、高住平田遺跡、高住宮ノ谷遺跡の調査が行われ、谷部のほとんどの地域に調査の手が及んだ。さらに、西側丘陵上の高住宮ノ谷古墳群でも前期古墳の調査が行われている。平野部では橋脚部分だけの調査になった部分もあるが、三山口川西側については、人々の活動状況を面的に捉えることができた。東端の高住牛輪谷遺跡は現在整理作業を行っているため、ひとまず三山口川以西の西半における人々の活動状況をまとめる。

西半では、最古の人間活動の痕跡は、縄文時代早期にさかのぼる。高住宮ノ谷遺跡（以下、大字は省略）では早期前葉に位置づけられる縄文土器が出土した。平田遺跡の状況から、この時期、日本海とつながる内湾であった湖山池が遺跡付近まで広がり、河口であった可能性もあり、人々は宮ノ谷遺跡西側から南側にかけての丘陵斜面を活動の場としていたことが想定される。比較的まとまって見つかった土器からすれば、何らかの遺構が存在した可能性も考えられる。前期～中期においては、平田遺跡を自然河川（8河川）が流れ、海に流入していた。平田遺跡の8河川からは縄文時代前期の土器、石器が出土している。100点にのぼる打ち欠き石錘は、単一の時期ではないことや、河川内において2個1対で見つかったものが多いことから、単なる漁網錘とは考えにくい（鳥取県教育委員会2013）が、湖山池との距離からすればやはり漁撈を行っていたことは想定できよう。平野部に位置する平田遺跡は、縄文時代は総じて湿地林が発達する低湿な環境であり、人々の居住や活動の中心はやはり丘陵部に想定できる。宮ノ谷遺跡、平田遺跡ともに縄文時代の遺構は確認できなかったが、調査範囲外の丘陵斜面や裾に人々の生活の場が存在した可能性がある。

弥生時代は人々の活動の痕跡が少なく、宮ノ谷、平田遺跡ともに少数の土器や石器が出土したのみである。とはいえ、両遺跡ともに数点の石庖丁が出土しており、この時期には平野部において水田耕作が行われたのであろう。また、かつて出土した高住銅鐸は、宮ノ谷遺跡周辺の丘陵斜面での出土と考えられるが、人里離れた場所に埋納されることの多い銅鐸の性格からしても、周辺には人々の居住はなかった可能性がある。

	縄文時代					弥生時代			古墳時代			奈良	平安	鎌倉	室町	
	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期					
高住平田遺跡		←8河川→					(水田?)									
高住宮ノ谷遺跡（谷部）														←道路→		
高住宮ノ谷遺跡（丘陵部）								(高住銅鐸)						←掘立柱建物 ・竪穴建物群 →末端官衙?		
高住宮ノ谷古墳群										←1号墳→	古墳群					

第184図 高住地区西半の遺跡の消長

古墳時代前期～中期においても、様相に大きな変化はないが、西側丘陵上で古墳時代前期前半でも古相とされる宮ノ谷1号墳が確認されている。長軸17.6mの方墳で、二段掘墓壇内に舟底状木棺痕跡があり、頭部付近へのヤリガンナ副葬が確認されている。ともに弥生時代の丹後地方の墓制との関連が指摘される（鳥取市文化財団2016）。弥生時代の要素が色濃く残り、近隣の桂見2号墳などに比べても在地的な要素が強い古墳と位置づけられる。平野部からは同時期の遺構、遺物とも希薄であり、造営主体となった集落は明らかではないが、この時期の高住地区を考える上で重要である。宮ノ谷遺跡では、古墳時代前期～中期の土器が若干見つかっており、何らかの遺構が存在した可能性も考えられる。

古墳時代後期には、宮ノ谷遺跡、平田遺跡ともに生活の痕跡が濃密となる。その状況は古代まで続く。平田遺跡では、溝から当該時期の土器が出土しているのみであるが、宮ノ谷遺跡では古墳時代後期後葉～古代の竪穴建物4棟、断面長方形柱の大型掘立柱建物1棟のほか、時期不明ながらこの時期の可能性のある掘立柱建物数棟などを検出した。宮ノ谷遺跡の大型掘立柱建物は古墳時代後期後葉まで、竪穴建物群は後期後葉～7世紀前葉と若干時期差があるものの、一連のものと捉えられる。この時期は、平野に面した丘陵裾部が居住の場であり、集落が営まれた状況が看取される。丘陵裾に集落、平野部に生産地（水田）を営むことは容易に想定されることであろうが、鳥取県東部においてはこの時期の集落の状況があまりわかっておらず、貴重である。

古代（7世紀～9世紀）のものとして、「深縁」の文字が書かれた墨書土器が平田遺跡で3点、宮ノ谷遺跡で1点出土した点が注目される。また、外面に「×」などの漆記号を付す土器も、平田遺跡で5点、宮ノ谷遺跡で3点出土した。漆関連の容器、パレット、硯などは平田遺跡ではほとんど出土していないことから、付されたのは宮ノ谷遺跡の可能性が高い。この時期、漆を用いた小規模な手工業生産が行われた可能性が考えられる。また、墨書土器や転用硯といった文字関連資料の存在から、ある程度公的な性格の施設が存在したことも考えられよう。さらに、平田遺跡を流れる12河川では、7世紀～9世紀の完形品を含む多くの土器が出土している。杯、椀、蓋といった供膳具を中心とする。また、平田遺跡では、平安時代に比定できる銅印が出土している。豪族の私印と考えられ、周辺に文書を取り扱う施設が存在した可能性がある。

なお、高住地区は因幡国高草郡に位置する。高草郡内の郷のうち、湖山池東岸に布勢郷が、野坂川流域に野坂郷が、湖山川流域に刑部郷が比定される。良田平田遺跡では、「因幡国高草郡刑部郷」と書かれた歴名木簡が出土しており、同遺跡のある良田地区までは刑部郷に所属していたと考えられる。なお、良田平田遺跡は農業経営などにも関与していた末端官衙的性格が強いとされる。出土遺物の種類、形態、文字関連資料などからは、宮ノ谷遺跡は良田平田遺跡との類似性が非常に強いことが指摘でき、共通する墨書などから同様の官衙的な施設であったことが推定される。湖山池周辺では、谷底平野ごとにこうした施設が点在していた可能性も考えられる。

中世には、宮ノ谷遺跡、平田遺跡ともに谷部や平野部において水田耕作が行われている。宮ノ谷遺跡では谷を横断するように畦畔を構築し、等高線に沿った細長い区画であるが、平田遺跡でも地形に合わせ小区画の水田を営んでいた。平田遺跡では2河川で当該期の陶磁器とともに手捏ね成形の土師皿が出土している。おそらく、水田にかかる水路として利用されたのであろう。この2河川は後に、江戸時代以降圃場整備前まで使用されていた小井手にその役割が受け継がれる。

宮ノ谷遺跡では丘陵裾部に中世段階の道路跡を確認した。比較的長期間利用されたと考えられ、13

世紀後半には廃絶したと考えられる。検出した4区は現在まで利用されている市道が存在した範囲であるが、その前身道路跡と考えられる高まりがこの中世の道路跡西側に存在していた。湖山池から南方に想定される東西方向の道路へとつながる道路であったと考えられる。山裾のやや高燥地に交通路、平野部の低湿地に生産域という土地利用の状況が見て取れる。さらに、平田遺跡では烏帽子をかぶった側面人形代が出土している。高位の人物がこの地を往来していたのであろうか。

以上のように、三山口川下流域に広がる谷底平野とその周辺丘陵は、縄文時代早期から数千年にわたり断続的に人々が活動していたことが、さほど広くない調査範囲に限られるが、明らかになった。これまで知られていなかった湖山池南岸地域における遺跡の様相から、鳥取平野の歴史に新たなページが加わることとなった。これらの調査成果が広く活用されることを期待したい。

註

- 1 倉吉市不入岡遺跡で、唯一造り付けかまどが確認されているが、5世紀後半のもので、時空間的に孤立した存在である。
- 2 岩橋は頭部の突起の数から分類を行い、2方向突起をⅠ類、3方向突起をⅡ類とする。また、Ⅰ類とⅡ類の折衷型をⅢ類、1方向突起をⅣ類、支柱状などをⅤ類として大別している。それぞれについて、穿孔の有無、突起の形態などからA～Cに細分している（岩橋2003）。問題点として、類型ごとに細分基準が異なっている点が上げられる。Ⅰ類とⅢ類は、体部の穿孔の有無や形状が基準であるが、Ⅱ類は突起の形状が基準であり、同じ細分記号を与えると誤解を招く。また、Ⅲ類の細分が不適切である。とくにⅢA・ⅢB類とⅢC類は穿孔がある点のみは共通するものの、製作技法からすれば、中実の前2者と中空の后者は全く異なっており、同じ類型とするには疑問がある。
- 3 昭和47年発掘調査、出土遺物は鳥取県立博物館保管。
- 4 平成25～27年度発掘調査。現在整理作業中で発掘調査報告書は平成29年度刊行予定。
- 5 現在整理作業中、発掘調査報告書は平成29年度刊行予定。
- 6 湖山池南岸型移動式かまどは、掛口あるいは内面につけられた突起から、付属部にも器を掛ける意図を持って製作されたことは想定できる。掛口が二箇所の移動式かまどについては、静岡県でまとまった出土例があり（鈴木2000）、群馬県でも出土が確認される（鹿沼1986）が、いずれも本体を断面楕円形もしくは隅丸長方形に作り、上面のみ二つ掛口を作るもので、湖山池南岸型のように本体に付属部を作り付けるものとは根本的に異なっており、関連は考えにくい。なお、本体掛口には付属部のような突起がつけられることはなく、器を掛けたとしても形態や大きさなどが異なっていた可能性が考えられる。

参考文献

- 石川県埋蔵文化財保存協会1995『平面梯川遺跡1』
- 稲田孝司1978「忌の竈と王権」『考古学研究』25巻1号
- 井之口茂2015「府中石田遺跡における「五平柱」使用の掘立柱建物について」『みずほ』第42号
- 岩橋孝典2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」『古代文化研究』第11号 鳥根県古代文化センター
- 岩橋孝典2004「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について（2）」『古代文化研究』第12号 鳥根県古代文化センター
- 岩橋孝典2010「土製支脚の分布状況と古代行政界」『出雲国の形成と国府成立の研究』鳥根県古代文化センター
- 角田徳幸2008「出雲国府下層の古墳時代集落」『鳥根県考古学会誌』第25集
- 加藤裕一2005「2 移動式竈について」『名和中畝遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書103
- 鹿沼敏子1986「荒砥北原遺跡の竈形土器について」『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査

第Ⅵ章 総括

事業団報告第52集

- 神谷佳明 2016「竈形土製品 再考」『研究紀要』34 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 河合章行編 2015『石器(1) 青谷上寺地遺跡出土品調査報告10』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告60
- 川部浩司 2012「波板状凹凸面からみた伯耆地域の道路遺構」『鳥取県埋蔵文化財センター研究紀要』4
- 金田章裕ほか編 2009『地図でみる西日本の古代』平凡社
- 合田幸美 2005「竈形土器とくらし」『財団法人大阪文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2003年度共同研究成果報告書』
- 合田幸美 2013「②火処」『人々の暮らしと社会』古墳時代の考古学6
- 坂本嘉和 2016「因幡国の古代道路－青谷横木遺跡と青谷上寺地遺跡を中心に－」『山陰の古代道』第44回山陰考古学研究集会資料集
- 桜井市文化財協会 2011『ヤマトの王と居館』桜井市立埋蔵文化財センター展示図録第37冊
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1993『針江川北(Ⅱ)遺跡・吉武城遺跡』
- 静岡市教育委員会 1996「小黒遺跡(第2次)」『ふちゅーる』静岡市文化財年俵No.4
- 杉井 健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻1号
- 杉井 健 2004「土製支脚研究序論」『先史・古代東アジア出土の植物遺存体(2)』
- 鈴木一有 2000「第3章 総括」『笠井若林遺跡4次』財団法人浜松市文化財協会
- 寺沢知子 1992「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV
- 鳥取県教育委員会 2012『高住平田遺跡Ⅰ』
- 鳥取県教育委員会 2013『高住平田遺跡Ⅱ』
- 鳥取県教育委員会 2014『高住牛輪谷遺跡Ⅰ』
- 鳥取県教育委員会 2014『良田平田遺跡』
- 鳥取市文化財団 2015『東桂見遺跡(丘陵部)』
- 鳥取市文化財団 2016『高住宮ノ谷古墳群・高住宮ノ谷遺跡』
- 中野 咲 2010「古墳時代の火処について」『立命館大学考古学論集』V
- 奈良県立橿原考古学研究所 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書 第122集
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2006『葛城氏の実像－葛城の首長とその集落－』
- 奈良国立文化財研究所 1985『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』15
- 奈良市教育委員会 2001『西隆寺跡発掘調査報告書』
- 錦織 勤 2010「因幡国布施・溝口の中世－湖山「潟」の発見」『鳥取地域史研究』第12号
- 錦織 勤 2013『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット12
- 服部信博 2002「銅鐸に伴う「舌」について」『研究紀要』第3号愛知県埋蔵文化財センター
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011『府中石田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第121集
- 藤原理恵 2006「こけら経に関する考古学的考察」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』第6号
- 星見清晴 2009「湖山池－その生い立ち－」『鳥取地学会誌』第13号
- 村田文夫 2006「堅穴住居から発掘される五平(状)柱に関する研究序論」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集
- 山本 崇 2007「こけら経の製作技法」『奈良文化財研究所紀要』2007

報告書抄録

ふりがな	たかずみみやのたにいせき							
書名	高住宮ノ谷遺跡							
副書名	一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXIV							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	茶谷 満、東方仁史、柴田芳之、村田泰輔							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7552							
発行年月日	2017(平成29)年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかずみみやのたにいせき 高住宮ノ谷遺跡	とっとりけんとうとりし 鳥取県鳥取市 たかずみみやのたにいせき 高住字宮ノ谷	31201	1-426	35°29'39"	134°9'32"	20140417 ～ 20141219	4,180㎡	国道9号(鳥取西 道路)道路改築工 事
						20150401 ～ 20150709		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物、特記事項				
高住宮ノ谷遺跡	集落 生産	縄文時代 ～ 弥生時代	自然流路	縄文土器、弥生土器、石器				
		古墳時代	竪穴建物 掘立柱建物 溝 土坑 水田	土師器、須恵器、土製品、石器、木製品、 金属製品、土製支脚、移動式かまど				
		古代～中世	掘立柱建物 水田 道路 土坑	瓦質土器、土師器、陶磁器、木簡、 土製品、石器、金属器、銭貨				
要約	<p>高住宮ノ谷遺跡は、湖山池南岸の小開析谷に位置する。遺跡周辺での人々の活動は少なくとも縄文時代早期にまで遡り、早期の押型文土器、中期～後期の土器、石器が丘陵裾部を中心に確認され、平野を見下ろす丘陵上が活動の場であったことが判明した。また、当遺跡は「高住銅鐸」出土推定地隣接地であるが、舌状石製品が包含層から出土しており注目される。</p> <p>古墳時代後期～古代にかけて、竪穴建物と掘立柱建物からなる集落が形成される。掘立柱建物1棟は断面長方形の柱を持つ大型建物であり、特殊な用途が想定される。竪穴建物1棟では、床面の炉を覆うように土器片が並べられており、廃絶時の儀礼と考えられる。古墳時代後期の集落は県内では発見例が少なく、貴重な発見となった。また、遺跡内から多くの土製支脚と付属かまど付移動式かまどが出土し、当時の炊飯形態や他地域との交流を考える上で重要である。</p> <p>中世において谷部は水田に利用され、平野部への移行部は道路として利用されていた。土坑から県内初の「こけら経」が出土し、中世の信仰を考える重要な発見となった。また、多くの輸入陶磁器や道路の存在から、交通の要衝だったことが想定される。</p>							

一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV
鳥取県鳥取市

高住宮ノ谷遺跡
第1分冊(本文編)

発行 2017年2月28日
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570
鳥取県鳥取市東町一丁目271番地
電話(0857)26-7525
印刷 有限会社米子プリント社
